静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第154集

ミョウガ原遺跡他

（静岡空港関連遺跡Ｊ地点・Ｏ地点、Ｋ地点・Ｒ地点・横断道路島田地区）

平成９～13年度　静岡空港県単独整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００４

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第154集

ミョウガ原遺跡他

（静岡空港関連遺跡Ｊ地点・Ｏ地点、Ｋ地点・Ｒ地点・横断道路島田地区）

平成９～13年度　静岡空港県単独整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００４

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

１　ミョウガ原遺跡（0地点）遠景（西から）

２　静岡空港関連遺跡遠景（北から）

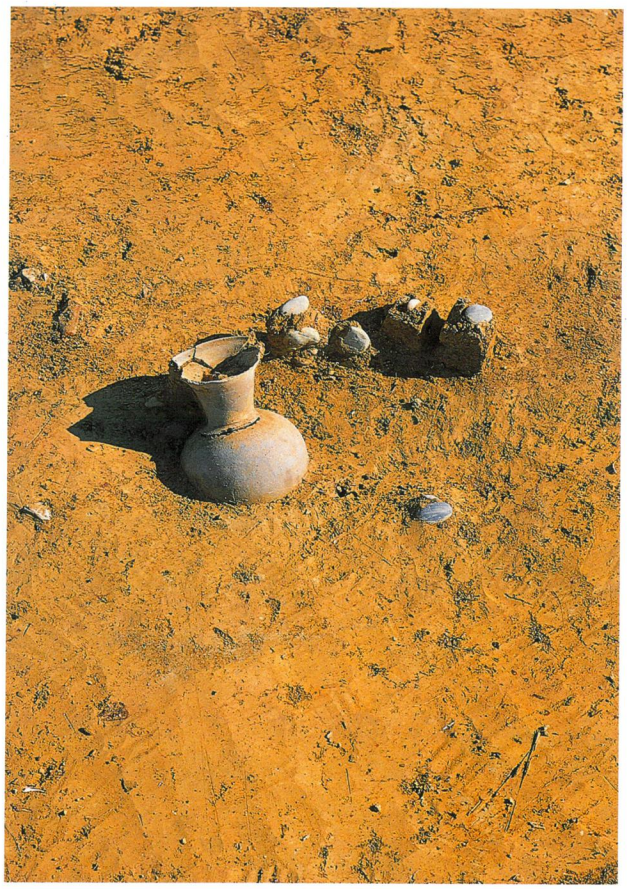
巻頭図版２

1　地鎮祭祀の土坑群全景（東から）

2　SF-16（中央の土坑　東から）

1　SF-17（東側の土坑　西から）

2　SF-16下層（西から）



3　SF-17検出状況（西から）

巻頭図版4

1　SF-18（南側の土坑　北から）

2　SF-19（西側の土坑　東から）

1　SF-18検出状況（東から）

2　SF-19検出状況（東から）

3　SF-20（北側の土坑　東から）

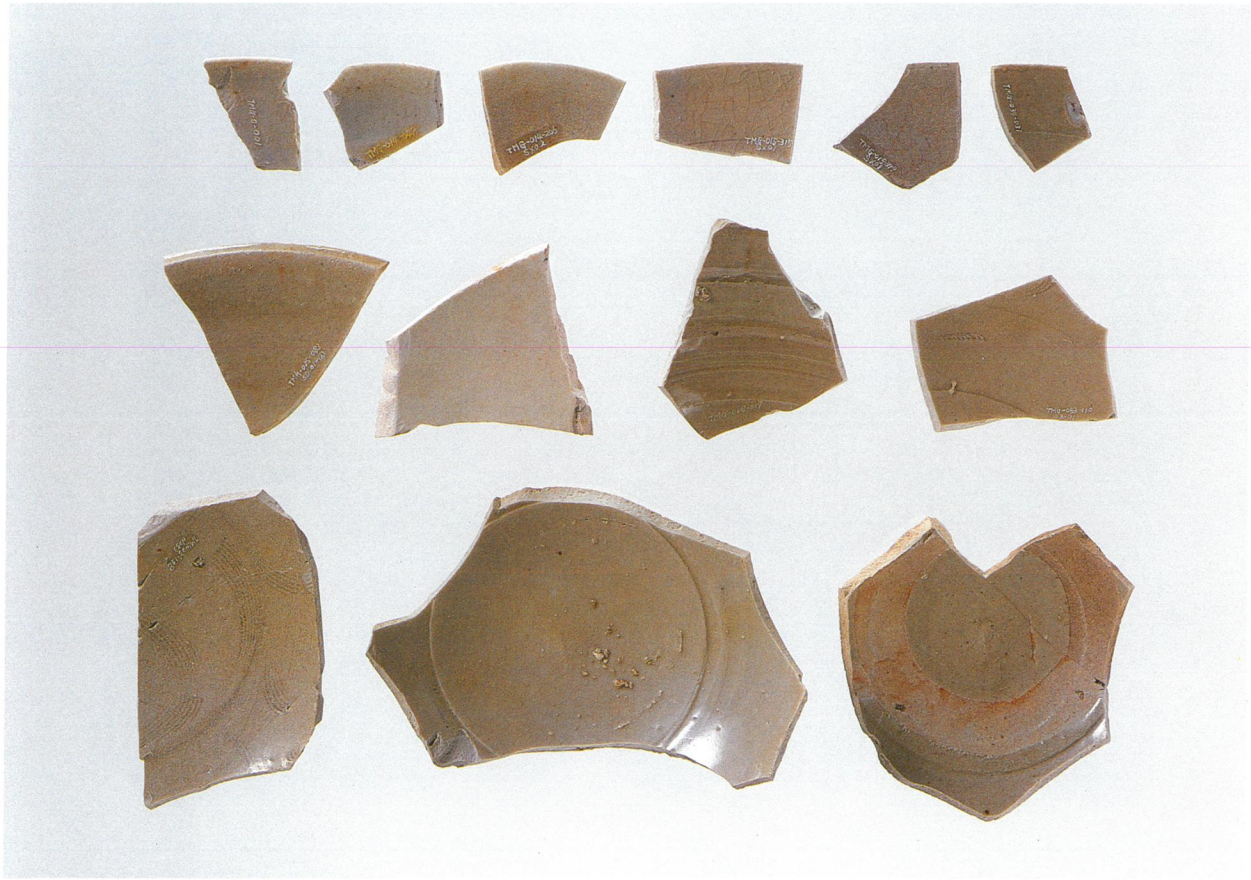
巻頭図版 6

地鎮祭祀の土坑群出土遺物

SR-1（中央部自然流路）の出土遺物

巻頭図版 8

1　ミョウガ原遺跡出土の青磁



2　ミョウガ原遺跡出土の白磁

序

静岡県を代表する河川の一つが大井川である。その右岸に広がるのは、牧ノ原台地である。台地上にはいたるところに茶畑が広がっている。このたび、静岡空港の建設が予定されたのは、この牧ノ原台地北東部の一角である。建設予定地内には幾つかの遺跡の所在が知られており、これらの遺跡は、建設に先立ち調査が実施されることになった。ミョウガ原遺跡も、その一つである。

ミョウガ原遺跡の調査は平成９年度から平成13年度にかけて断続的に実施した。ミョウガ原遺跡は、耕作時に土器が出土したことから、古くからその存在自体は知られていた。しかし、発掘調査が行われたことはなく、その実体は不明であった。当初は縄文時代の集落跡を想定して調査を開始したが、平成10年度の調査において、古代から中世の集落跡であることが明らかとなった。以後、この時期の集落跡を中心として調査、展開することになった。調査区内は開墾に伴う撹乱が深くまで入り込み、残存状況が著しく悪かったにもかかわらず、旧石器時代、縄文時代、平安時代から鎌倉時代初頭の遺構や遺物を検出することができた。

調査成果の中で、最も注目できるものとしては、平安時代中期から鎌倉時代前半の集落跡があげられよう。空港という広大な面積が幸いして、集落のほぼ全域を調査することができた。この集落は50棟ほどの掘立柱建物と区画溝で構成される。数棟単位で住居群を形成していたようであり、中には「コ」字形の溝と柵で囲まれたものもあった。従来、集落の存在さえ考えられていなかった台地上に営造の痕跡を発見したことは、この地域の歴史像解明の一役に立つことであろう。また、地鎮祭祀を執り行ったと考えられる古代末の土坑群も発見した。これは全国的にみても希有な遺構で、古代末における祭祀研究に一石を投じる資料となるであろう。

このような成果をあげることができたのは静岡空港建設事務局を始めとする関係諸機関の現地並びに資料整理における御援助、御協力のおかげでもある。文末ではあるが、ここに記して感謝の意を表すとともに、現地調査と資料整理に従事した作業員の労をねぎらいたい。

平成16年10月29日

㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　斎　藤　　忠

例　　言

1　本書は静岡県島田市湯日字茗荷原464-30他に所在するミョウガ原遺跡、ならびに島田市湯日字茗荷原464-17他に所在する空港関連遺跡Ｋ地点、島田市湯日113に所在する空港横断道路島田地区、榛原郡榛原町坂口字ドウガヤ1066他に所在する空港関連遺跡Ｒ地点の発掘調査報告書である。

2　ミョウガ原遺跡は静岡空港建設予定地内遺跡の一つである。建設予定地内の遺跡にはそれぞれ地点名が付けられておりミョウガ原遺跡はＪ地点、Ｏ地点に当たる。

3　静岡空港関連遺跡に関わる発掘調査報告書は本書が四冊目である。なお、第一冊目は平成10年度刊行の『水掛渡古墳群Ｃ群』、第二冊目は平成14年度刊行の『星久保古墳群』、第三冊目は平成15年度刊行の『吉峠遺跡・水掛渡Ｄ古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳・御陣場古墳・権現様御陣場遺跡』である。

4　調査は静岡空港県単独整備に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県空港建設事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成９年７月から平成13年11月まで現地調査を実施した。資料整理は平成14年４月から平成16年10月まで行った。

5　調査体制については第１章第２節に記した。

6　本書は調査に当たった職員の所見をもとに、調査研究員　菊池吉修が執筆した。

7　現地調査に当たり市原壽文氏、加藤芳朗氏、水野正好氏、宮本長二郎氏に御指導、御助言を賜った。ここに記して御礼を申し上げる。

8　現地測量では日本測地系（旧測地系）を使用した。本書の実測図もこれに基づく。

9　現地調査においては、平成10～13年度の基準点測量、空中写真撮影、遺構実測図作成を株式会社フジヤマに委託した。また、平成11・12年度は調査補助業務も併せて委託した。

10　整理作業における石器実測の一部は株式会社アルカに委託した。

11　遺物写真撮影は当研究所写真室担当職員が行った。金属製品の保存処理は、当研究所保存処理室長西尾太加二が実施した。

12　遺物実測図の縮尺は土器が１/３、金属器が１/２で統一をはかった。石器については１/２または、４/５、１/５である。なお、全体図、遺構図の縮尺はそれぞれの図に明記した。

13　本書で使用した遺構の表記は下記のとおりである。

ＳＡ：柵跡	ＳＢ：竪穴住居跡（竪穴状遺構）	ＳＤ：溝状遺構
ＳＦ：土坑	ＳＨ：掘立柱建物跡	ＳＰ：柱穴

14　図版の遺構写真はそれぞれに撮影方向を明記した。

15　本書で扱う遺物番号に関しては、地点に関わりなく連番とした。また、挿図における番号と図版における番号は同一である。

16　土層および土器の色調は、新版『標準土色帳』農林水産技術会議事務局監修1992を使用した。

17　本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

18　発掘調査資料は静岡県教育委員会文化課が保管している。

目　　次

序
例　　言

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　調査の方法と経過
　第１節　調査の方法 …… 2
　第２節　調査の経過 …… 4

第３章　遺跡の環境
　第１節　地理的環境 …… 11
　第２節　歴史的環境 …… 12
　第３節　基 本 層 序 …… 15

第４章　調査の成果
　第１節　概　要 …… 16
　第２節　平安時代～鎌倉時代の遺構 …… 18
　第３節　平安時代～鎌倉時代の遺物 …… 122
　第４節　縄文時代の遺構 …… 192
　第５節　縄文時代の遺物 …… 199
　第６節　旧石器時代の遺物 …… 211

第５章　空港関連遺跡その他の地点
　第１節　Ｋ地点 …… 212
　第２節　Ｒ地点 …… 213
　第３節　横断道路島田地区 …… 215

第６章　ま と め
　第１節　ミョウガ原遺跡について …… 216
　第２節　空港関連遺跡全体の成果 …… 225

挿図目次

図１　ミョウガ原遺跡の位置 …… 1
図２　空港関連遺跡位置図（1/50,000） …… 3
図３　ミョウガ原遺跡と周辺の地形（1/6,000） …… 4
図４　Ｊ地点の調査区（1/2,000） …… 5
図５　Ｏ地点の調査区（1/4,000） …… 7
図６　ミョウガ原遺跡
確認トレンチ設定状況（1/4,000） …… 10
図７　ミョウガ原遺跡
周辺の遺跡分布図（1/50,000） …… 12
図８　基本層序 …… 15
図９　Ｏ地点年度別本調査範囲(1/5,000) …… 16
図10　ミョウガ原遺跡Ｏ地点
平安～鎌倉時代の遺構概略図(1/3,000) …… 19～20
図11　調査区北西部の遺構群(1/300) …… 21～22
図12　SH-1実測図（1/80） …… 23
図13　SH-2・SH-4実測図（1/80） …… 24
図14　SH-3実測図（1/80） …… 25
図15　SH-5実測図１（1/80） …… 26
図16　SH-5実測図２（1/80） …… 27
図17　SH-5　P-12・P-16実測図(1/25) …… 27
図18　SH-6実測図１（1/80） …… 28
図19　SH-6実測図２（1/80） …… 29
図20　SH-6　P-1・P-2実測図（1/20） …… 29
図21　SA-1・SA-2実測図（1/80） …… 30
図22　SA-3・SA-4実測図（1/80） …… 31
図23　SA-5実測図（1/80） …… 31
図24　SA-6実測図（1/80） …… 32
図25　SD-1・SD-2北辺・西辺・
SD-3全体図（1/500） …… 33
図26　SD-1・SD-3土層断面図（1/50） …… 34
図27　SD-2土層断面図（1/50） …… 34
図28　調査区北西部の掘立柱建物群(1/300) … 35
図29　SF-1～3実測図（1/50） …… 36
図30　SH-7実測図（1/80） …… 37
図31　調査区北側中央部の遺構群(1/400) …… 38
図32　SH-8・SH-12実測図（1/80） …… 39
図33　SH-9・SH-10実測図（1/80） …… 40
図34　SH-11実測図（1/80） …… 41
図35　SH-12　P-1～4実測図（1/20） …… 41
図36　SH-13・SH-14実測図（1/80） …… 42
図37　SH-15・SH-17実測図（1/80） …… 43
図38　SH-16実測図（1/80） …… 44
図39　SA-7・SA-8実測図（1/80） …… 44
図40　SA-9実測図（1/80） …… 45
図41　SF-7実測図（1/50） …… 45
図42　SF-4～6実測図（1/50） …… 45
図43　SH-18・SH-19実測図（1/80） …… 46
図44　調査区北東部の遺構群（1/400） …… 47
図45　SH-20実測図（1/80） …… 48
図46　SH-21実測図（1/80） …… 49
図47　SH-22実測図（1/80） …… 50
図48　SH-23・SH-24実測図（1/80） …… 51
図49　SH-25・SH-26実測図（1/80） …… 52
図50　SH-27実測図（1/80） …… 53
図51　SH-28実測図（1/80） …… 54
図52　SH-29実測図（1/80） …… 55
図53　SA-10実測図（1/80） …… 55
図54　SA-11実測図（1/80） …… 56
図55　SD-16・SD-17土層断面図（1/40） …… 56
図56　SD-18・SF-11・SX-2
実測図（1/50） …… 57
図57　SD-19・SF-14実測図（1/50） …… 59
図58　SD-19・SF-14掘り方実測図（1/50） … 60
図59　SD-20・SD-21土層断面（1/50） …… 60
図60　SF-8～10実測図（1/50） …… 61
図61　SF-12実測図（1/50） …… 62
図62　SF-13・SF-15実測図（1/50） …… 62
図63　SX-1実測図（1/40） …… 63
図64　SA-12実測図（1/50） …… 64
図65　SX-3実測図（1/50） …… 65
図66　SR-1土層断面実測図（1/60） …… 67
図67　SH-30実測図（1/80） …… 68
図68　調査区南西部の遺構群①（1/400） …… 69
図69　SH-31実測図（1/80） …… 70
図70　SH-32実測図（1/80） …… 71

図71 SH-33実測図（1/80） …… 72
図72 SH-34実測図（1/80） …… 73
図73 SH-37・SH-38実測図（1/80） …… 74
図74 SH-35・SH-36実測図（1/80） …… 75
図75 調査区南西部の遺構群②（1/400） …… 76
図76 SH-38　P-4遺物出土状況図（1/20） … 76
図77 SH-39実測図（1/80） …… 77
図78 SH-40実測図（1/80） …… 78
図79 SH-41実測図（1/80） …… 79
図80 SH-42実測図（1/80） …… 80
図81 SH-43実測図（1/80） …… 81
図82 SB-1実測図（1/50） …… 81
図83 SB-2実測図（1/50） …… 82
図84 SA-13実測図（1/80） …… 83
図85 SB-3実測図（1/50） …… 83
図86 SD-22・SD-24・SD-28～30
土層断面図（1/50） …… 84
図87 SD-28遺物出土状況（1/20） …… 85
図88 SD-29集石部（1/50） …… 86
図89 地鎮祭祀の土坑群全体図（1/100） …… 87
図90 SF-16実測図（1/20） …… 88
図91 SF-17実測図（1/20） …… 89
図92 SF-18実測図（1/20） …… 90
図93 SF-19実測図（1/20） …… 91
図94 SF-20実測図（1/20） …… 92
図95 SF-21・SF-22実測図（1/50） …… 93
図96 15区全体図（1/200） …… 95
図97 SH-44実測図（1/80） …… 96
図98 調査区南側中央部の遺構群（1/500） … 97
図99 SH-45実測図（1/80） …… 98
図100 SH-46実測図（1/80） …… 99
図101 SH-47実測図（1/80） …… 100
図102 SH-48・SA-14実測図（1/80） …… 101
図103 SH-49実測図（1/80） …… 102
図104 SD-31断面図（1/50） …… 102
図105 調査区南東部の
遺構群（1/500） …… 103～104
図106 SH-50実測図（1/80） …… 105
図107 SH-51実測図（1/80） …… 106
図108 SH-52実測図（1/80） …… 107
図109 SH-53実測図（1/80） …… 108
図110 調査区東端部の遺構群（1/400） …… 109
図111 SH-54実測図（1/80） …… 110
図112 SA-15・SA-16実測図（1/80） …… 111
図113 SB-4実測図（1/20） …… 112
図114 ５区全体図（1/800）と
SD-33土層断面図（1/50） …… 113
図115 SA-17実測図（1/100） …… 114
図116 29区の全体図（1/200） …… 115
図117 SD-34・SD-35実測図（1/50） …… 116
図118 SF-23・SF-24実測図（1/50） …… 116
図119 SF-25実測図（1/50） …… 117
図120 SF-26実測図（1/40） …… 117
図121 Ｊ地点全体図（1/1,000） …… 118
図122 SF-27～29実測図（1/40） …… 119
図123 SR-1の出土遺物１（46区①） …… 122
図124 SR-1の出土遺物２（46区②） …… 124
図125 SR-1の出土遺物３（46区③） …… 125
図126 SR-1の出土遺物４（15区①） …… 126
図127 SR-1の出土遺物５（15区②） …… 127
図128 SR-1の出土遺物６（３区） …… 129
図129 SR-1の出土遺物７（３′区①） …… 131
図130 SR-1の出土遺物８（３′区②） …… 133
図131 SR-1の出土遺物９（３′区③） …… 134
図132 SR-1の出土遺物10（３′区④） …… 135
図133 SR-1の出土遺物11（３′区⑤） …… 137
図134 SR-1の出土遺物12（47･53区①） …… 139
図135 SR-1の出土遺物13（47･53区②） …… 140
図136 ３区表土の出土遺物１ …… 141
図137 ３区表土の出土遺物２ …… 142
図138 SR-1の出土遺物14 …… 142
図139 SD-1の出土遺物 …… 143
図140 SD-2の出土遺物１（北辺） …… 144
図141 SD-2の出土遺物２（西辺） …… 145
図142 SD-2の出土遺物３（南辺） …… 146
図143 SD-4～16の出土遺物１ …… 148
図144 SD-4～16の出土遺物２ …… 149
図145 SH-3・SH-5の柱穴の出土遺物 …… 150
図146 SF-1とその他の柱穴の出土遺物 …… 151
図147 24区表土の出土遺物 …… 153
図148 13区・13′区・14区、25区
北西表土の出土遺物 …… 154

図149　SH-12・SF-4の出土遺物 …… 155
図150　調査区北側中央部表土の出土遺物 …… 156
図151　SD-18・SF-11・SX-2の
　　出土遺物 …… 157
図152　SD-19・SF-14の出土遺物 …… 158
図153　SF-12の出土遺物 …… 159
図154　SX-1の出土遺物 …… 159
図155　SF-9・SF-26区の柱穴、SD-17
　　の出土遺物 …… 160
図156　SH-20・SH-21と周辺の柱穴
　　の出土遺物 …… 161
図157　26区表土の出土遺物 …… 162
図158　４区表土の出土遺物 …… 163
図159　54区表土と柱穴の出土遺物 …… 164
図160　３′区遺構検出面の出土遺物(上面) … 165
図161　３′区遺構検出面の出土遺物(下面) … 166
図162　53区表土の出土遺物 …… 167
図163　SD-32の出土遺物 …… 168
図164　SD-22～24・30の出土遺物 …… 169
図165　SD-28の出土遺物 …… 170
図166　SD-29の出土遺物 …… 172
図167　SH-31・SH-34・SH-35の柱穴と
　　SH-37周辺の柱穴出土遺物 …… 173
図168　SH-38・SH-39の柱穴と
　　SH-43周辺の柱穴出土遺物 …… 174
図169　SB-1の出土遺物 …… 175
図170　SB-2・SB-3の出土遺物 …… 176
図171　SF-17・SF-18の出土遺物 …… 177
図172　SF-19・SF-20の出土遺物 …… 178
図173　SF-21・SF-22の出土遺物 …… 179
図174　46区表土の出土遺物 …… 180
図175　34区表土の出土遺物 …… 181
図176　15区南西部の出土遺物 …… 182
図177　SD-31の出土遺物１ …… 184
図178　SD-31の出土遺物２ …… 185
図179　SH-45・SH-46の柱穴と
　　周辺の出土遺物 …… 186
図180　SH-49の柱穴と
　　SH-48・SA-14周辺の出土遺物 …… 186
図181　35区表土の出土遺物 …… 187
図182　SH-51～53の柱穴と
　　周辺表土の出土遺物 …… 188
図183　48区表土の出土遺物 …… 189
図184　SB-4・SD-33・SF-24・25、
　　Ｊ地点の出土遺物 …… 190
図185　縄文時代の遺構分布図 …… 192
図186　SB-5（1/50）実測図 …… 193
図187　SF-30実測図（1/40） …… 194
図188　28区全体図（1/200）と
　　SF-31・SF-32実測図（1/20） …… 195
図189　SF-33～SF-35実測図（1/50） …… 197
図190　SF-36・SF-37実測図（1/50） …… 198
図191　SF-38実測図（1/20） …… 198
図192　縄文土器 …… 200
図193　SB-5出土の石器 …… 201
図194　SB-5周辺出土の石器１ …… 202
図195　SB-5周辺出土の石器２ …… 203
図196　SB-5・SF-30出土の石皿 …… 204
図197　SF-32とその周辺出土の石器 …… 205
図198　その他の地区出土の石鏃 …… 207
図199　その他の地区出土の尖頭器 …… 208
図200　その他の地区出土の石器１ …… 209
図201　その他の地区出土の石器２ …… 210
図202　旧石器時代の遺物 …… 211
図203　Ｋ地点全体図（1/2,000） …… 212
図204　Ｋ地点・Ｒ地点・横断道路
　　島田地区位置図（1/50,000） …… 213
図205　Ｒ地点全体図 …… 214
図206　Ｒ地点出土遺物 …… 214
図207　横断道路島田地区全体図（1/1,000）
　　…… 215
図208　遺物分布図 …… 217
図209　覚禅鈔 …… 221
図210　地鎮土坑の復原 …… 222
図211　石器分布図 …… 223

挿表目次

表１　調査体制 …… 2
表２　空港関連遺跡全体の経過 …… 5
表３　ミョウガ原遺跡調査面積 …… 6
表４　ミョウガ原遺跡年度別調査地点 …… 6
表５　その他の空港関連遺跡確認調査面積 …… 8
表６　遺跡別本調査面積 …… 8
表７　周辺遺跡地名表 …… 13
表８　地区別の遺構・遺物 …… 17
表９　掘立柱建物跡計測表 …… 121
表10　貿易陶磁器地区別出土破片数 …… 191
表11　ナイフ形石器観察表 …… 211
表12　出土黒曜石製石器産地推定結果 …… 211
表13　地区別出土土器破片数 …… 227
表14　地区別出土土器個体数 …… 229
表15　出土土器観察表 …… 231
表16　出土石器観察表 …… 245
表17　縄文時代の遺構計測表 …… 246

巻頭図版目次

巻頭図版１　１　ミョウガ原遺跡（Ｏ地点）遠景（西から）
　　２　静岡空港関連遺跡遠景（北から）
巻頭図版２　１　地鎮祭祀の土坑群全景（東から）
　　２　SF-16（中央の土坑　東から）
巻頭図版３　１　SF-17（東側の土坑　西から）
　　２　SF-16下層（西から）
　　３　SF-17検出状況（西から）
巻頭図版４　１　SF-18（南側の土坑　北から）
　　２　SF-19（西側の土坑　東から）
巻頭図版５　１　SF-18検出状況（東から）
　　２　SF-19検出状況（東から）
　　３　SF-20（北側の土坑　東から）
巻頭図版６　地鎮祭祀の土坑群出土遺物
巻頭図版７　SR-1（中央部自然流路）の出土遺物
巻頭図版８　１　ミョウガ原遺跡出土の青磁
　　２　ミョウガ原遺跡出土の白磁

図版目次

図版１
1　ミョウガ原遺跡遠景（北から）
2　ミョウガ原遺跡遠景（南東から）

図版２
1　ミョウガ原遺跡の立地状況（南東から）
2　ミョウガ原遺跡本調査区全景

図版３
1　SD－１・SD－２（北辺）全景
2　SD－２北辺（北から）

図版４
1　北西部の住居跡と区画溝
2　SD－２西辺・南辺（南から）

図版５
1　北西部の住居跡群（南から）
2　北西部の住居跡群（北から）

図版６
1　SA－６（南東から）
2　SD－１北西部（北から）
3　SD－１西辺南端部土層断面（北から）
4　SD－１北辺東部遺物出土状況（西から）
5　SD－１北辺中央土層断面（西から）

図版７
1　SD－２南辺　東端部土層断面（西から）
2　SD－２南辺　東端部遺物出土状況１（西から）
3　SD－２南辺　東端部遺物出土状況２（西から）
4　SD－５遺物出土状況（北から）
5　SF－１遺物出土状況（東から）
6　SH－５　P－12(1)
7　SH－５　P－12(2)
8　SH－５　P－12(3)

図版８
1　北側中央部遺構群（25区　北から）
2　SH－５　P－13
3　SH－５　P－21
4　SH－５　P－14
5　SH－12　P－１

図版９
1　北側中央部の遺構群（25区　東から）
2　SH－12　P－３　上層
3　SH－12　P－３　中層
4　SH－12　P－３　底面
5　SH－12　P－４

図版10
1　北側中央部の遺構群（26区　北から）
2　SF－４　土層断面（東から）
3　SF－６　土層断面（西から）
4　SF－７　土層断面（東から）
5　SF－７（北から）

図版11
1　北東部の遺構群（26区　東から）
2　北東部の遺構群（４区　北東から）

図版12
1　北東部の遺構群（54区　東から）
2　北東部の遺構群（53区）

図版13
1　北東部の遺構群とSR－1（３′区　西から）
2　SR－１中央部（３区　西から）

図版14
1　SR－１（３′区　南東から）
2　SR－１土層断面（３′区　南から）
3　SR－１遺物出土状況
4　SR－１東側（53区　西から）
5　SX－３（南東から）

図版15
1　SR－１東端部（54区　東から）
2　SX－１検出状況（北から）
3　SX－１全景（北から）
4　SX－１東側壁（西から）
5　SX－１西側壁（東から）
6　SX－１断面（北から）
7　SX－１遺物出土状況（北から）

図版16
1　導水遺構１　上層（北から）
2　導水遺構１　下層（北から）

図版17
1　導水遺構の掘り方（北から）
2　護岸遺構SX－２（西から）

図版18
1　導水遺構２（東から）
2　SF－14（北から）

図版19
1　導水遺構２　掘り方（東から）
2　SF－14　完掘状況（北から）

図版20
1　導水遺構２（西から）
2　導水遺構１　下面（北から）
3　SF－11（北から）
4　導水遺構１　完掘状況（北から）
5　SF－11　完掘状況（北から）

図版21
1 SF-12（北から）
2 SF-12 完掘状況（北から）
3 SH-28（東から）
4 SD-21全景（東から）
5 SD-21西半部（東から）
6 SD-22西半部（西から）

図版22 SH-33～SH-37とSD-29（東から）

図版23
1 SR-1西端部1（東から）
2 SR-1西端部2（東から）

図版24
1 SD-28遺物出土状況1（北から）
2 SD-29の集石部（東から）
3 SR-1西端部土層断面（東から）
4 SD-28遺物出土状況2（西から）

図版25
1 SD-29全景（北から）
2 南西部の遺構群全景

図版26
1 SH-30（西から）
2 SH-31（北から）
3 SH-32（北から）

図版27
1 SH-38（北から）
2 SH-39（西から）

図版28
1 SH-42（東から）
2 SH-33（北から）
3 SH-38
P-4転用硯出土状況（北西から）
4 SB-2墨書土器出土状況（南から）

図版29
1 SB-2全景（西から）
2 SB-3遺物出土状況（西から）

図版30 地鎮祭祀の土坑群全景（西から）

図版31 SF-16（地鎮土坑1 東から）

図版32
1 SF-17（地鎮土坑2 西から）
2 SF-19（地鎮土坑4 東から）

図版33
1 SF-17完掘状況（地鎮土坑2 西から）
2 SF-16下層（地鎮土坑1 西から）
3 SF-16完掘状況（地鎮土坑1 東から）

図版34 SF-18（地鎮土坑3 北から）

図版35 SF-20（地鎮土坑5 東から）

図版36
1 SF-18完掘状況（地鎮土坑3 北から）
2 SF-19完掘状況（地鎮土坑4 東から）
3 SF-20完掘状況（地鎮土坑5 東から）
4 地鎮祭祀の土坑群完掘状況全景（西から）

図版37
1 SF-21遺物出土状況（北から）
2 SF-22検出状況（北から）

図版38
1 SF-22遺物出土状況（南から）
2 SF-21・SF-22完掘状況（南から）

図版39
1 南側中央部の遺構群
2 SH-45～SH49（北から）

図版40
1 SH-44全景（東から）
2 SH-45全景（北から）
3 SD-31全景（北から）
4 SD-31遺物出土状況（北から）

図版41
1 SH-46全景（北から）
2 SH-48・SH-49全景

図版42
1 48区全景（北から）
2 SH-51～SH-53全景

図版43
1 SH-51全景（北から）
2 SH-52全景（北から）
3 SH-53全景（北から）
4 SH-54全景（西から）

図版44
1 50区全景（西から）
2 SB-4内の土坑 遺物出土状況（西から）
3 SH-50全景（西から）
4 SB-4竈（西から）
5 SB-4竈（北から）

図版45
1 29区全景（西から）
2 SF-27（南から）

図版46
1 SD-32（西から）
2 SD-33（東から）
3 SA-15（東から）
4 SF-23・SF-24（西から）
5 SF-27（東から）
6 SD-35（南から）

図版47
1 SB-5完掘状況（北から）
2 SF-38検出状況（北から）
3 SF-38完掘状況（北から）
4 SB-5遺物出土状況（北から）
5 SF-30遺物出土状況

図版48
1 SF-30検出状況
2 SF-33完掘状況（西から）
3 SF-34完掘状況（北から）

図版49　1　SF-35完掘状況（北から）
2　SF-36完掘状況（北から）
3　SF-37完掘状況（東から）
4　K地点トレンチ（西から）
5　K地点全景（東から）
図版50　1　R地点調査前の状況（南から）
2　R地点トレンチ掘削状況（南から）
3　横断道路島田地区段丘部（南から）
4　横断道路島田地区TP7（東から）
5　横断道路島田地区平坦部（南から）
図版51　SR-1西端部（46区）の出土遺物
SR-1出土遺物1（46区）
図版52　SR-1の出土遺物2（46区）
図版53　SR-1の出土遺物3（46区・15区）
図版54　SR-1出土遺物（15区）
SR-1の出土遺物4（3区）
図版55　SR-1の出土遺物5（3′区）
図版56　SR-1の出土遺物6（3′区）
図版57　SR-1の出土遺物7（3′区）
図版58　SR-1の出土遺物8（3′区）
図版59　SR-1の出土遺物9（53′区）・
3区の出土遺物1
図版60　3区の出土遺物2
図版61　SD-1の出土遺物・SD-2の出土遺物1
図版62　SD-2西辺の出土遺物
SD-2の出土遺物2
図版63　SD-2の出土遺物3
図版64　SD-2南辺の出土遺物
SD-2の出土遺物4
図版65　北西部の遺構群出土遺物1
図版66　北西部の遺構群出土遺物2・
北側中央部の出土遺物
図版67　導水遺構1・2の出土遺物
図版68　SF-12の出土遺物
SF-12・SX-1の出土遺物
図版69　北東部の遺構群出土遺物1
図版70　北東部の遺構群出土遺物2、
SD-22・SD-23・SD-28出土遺物1
図版71　SD-28出土遺物
SD-28の出土遺物2
図版72　SD-28出土遺物3・SD-29の出土遺物1
図版73　SD-29の出土遺物
SD-29の出土遺物2
図版74　SB-1～3・SF-19出土遺物
図版75　SF-17～SF-20の出土遺物
図版76　SF-17出土の遺物と玉石
SF-18出土の遺物と玉石
図版77　SF-19出土の遺物と玉石
SF-20出土の遺物と玉石
図版78　SF-19・SF-23出土遺物・
南西部の出土遺物1
図版79　SD-31出土遺物
南西部の出土遺物2・SD-31出土遺物1
図版80　SD-31出土遺物2・南側中央部の出土遺物1
図版81　ミョウガ原遺跡出土の金属器
南側中央部の出土遺物2・南東部の出土遺物
図版82　1　ミョウガ原遺跡出土の砥石
2　SB-5・SF-30出土の石皿・
29区出土石斧・15出土石錘と敲石
図版83　ミョウガ原遺跡出土の縄文土器
図版84　1　SB-5とその周辺出土の石器
2　SF-32とその周辺出土の石器
図版85　1　その他の地区出土の尖頭器
2　その他の地区出土の石鏃
図版86　1　その他の石器
2　ナイフ形石器

第１章　調査に至る経緯

ミョウガ原遺跡は静岡県島田市湯日字茗荷原に所在する遺跡である。島田市は市街南部を大井川が流れ、古くは川渡しの宿場町であったことが知られている。大井川右岸には「牧ノ原台地」と呼ばれる台地が広がっている。牧ノ原台地は幾筋かの支脈に分岐している。牧ノ原台地北東部の一支脈には島田市と榛原郡榛原町の境となるものがあり、この度、静岡空港建設が予定されたのはこの地である。建設予定地内には、幾つかの遺跡が存在することが既に知られており、ミョウガ原遺跡もその一つである。また、空港建設予定地内について、静岡県教育委員会、島田市教育委員会、榛原町教育委員会が改めて踏査を実施したところ、新たに遺跡と考えられる箇所が明らかになった。これらの取り扱いについては静岡県企画調整部空港計画課、静岡空港建設準備事務所、静岡県教育委員会文化課の三者の間で協議を行った。その結果、平成９年度から、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所が現地調査を実施する運びとなった。なお、空港建設予定地内の遺跡は静岡空港関連遺跡として扱われ、それぞれ地点名が附されている。ミョウガ原遺跡はＪ地点とＯ地点にあたる。

静岡空港関連遺跡の調査は地点ごとに確認調査を実施し、その成果を踏まえて本調査を実施した。確認調査は平成９年度から実施した。このうち、平成９年度と平成11年度に12,704㎡を対象として実施したＪ地点の確認調査、平成９年度から平成13年度にかけて断続的に106,380㎡を対象として実施したＯ地点の確認調査がミョウガ原遺跡に関わるものである。この二地点の確認調査合計面積は119,084㎡である。確認調査の結果、Ｏ地点では遺構の広がりが明らかになった範囲がある。そこで、37,501㎡を対象とした本調査を平成９年度から平成13年度まで実施した。なお、周辺の確認調査の結果から確認調査を経ずに本調査を実施した部分もある。調査対象面積の合計はＯ地点が114,670㎡、Ｊ地点が12,704㎡、総合計127,374㎡である。整理作業については、現地にて基礎整理作業を行い、平成14年４月から平成16年10月まで資料整理と報告書作成を㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所本部にて実施した。

図１　ミョウガ原遺跡の位置

第２章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

ミョウガ原遺跡は表面積127,374㎡におよぶ遺跡である。現地調査は平成９年度から平成13年度まで実施し、平成14年度から平成16年度まで資料整理作業を実施した。その体制は表１のとおりである。

第１章で記したとおり、静岡空港関連遺跡はそれぞれ地点名が付けられている。ミョウガ原遺跡はＪ地点とＯ地点に相当する。北側の丘陵平坦部がＯ地点であり、谷を隔てた南側の斜面地がＪ地点である（図３）。さて、ミョウガ原遺跡の調査は平成９年度から平成13年度まで実施した。Ｊ地点は平成９年度と11年度に確認調査を実施した。９年度に調査した範囲を１区、11年度に調査した範囲を地形から２区と３区に区分した（図４）。Ｏ地点の調査は平成９年度から13年度まで確認調査と本調査を実施した。調査にあたっては、調査地点を54の調査区に区分して行った。調査区名は原則として年度毎に、北西から番号を附した（図５）。ミョウガ原遺跡の調査では初めに確認調査を実施し、遺構の残存と広がりが認められ範囲は本調査を行った。ただし、周囲の状況から確認調査を経ずに本調査を実施した調査区もある。なお、ミョウガ原遺跡全体に対し100ｍ幅のグリッドを設定し、北西から番号を附した。

調査に先立ち、茶樹の伐採を実施し、土砂流出のおそれがある箇所にはフェンスを設置した。確認調査、本調査ともに表土および耕作土の除去は重機を用いて行い、遺物包含層と遺構検出、遺構掘削は人力で実施した。確認調査ではＪ地点、Ｏ地点共に幅1.0ｍのトレンチを設置して実施した。トレンチは方位を基本に設定したが、一部、地形に則して等高線と平行にトレンチを設定した箇所もある。遺構や遺

表１　調査体制

	平成９年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
所長	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠
副所長	池谷　和三		山下　晃	山下　晃	山下　晃	飯田　英夫	飯田　英夫	飯田　英夫
常務理事兼総務部長	三村田昌明	伊藤　友雄	伊藤　友雄	伊藤　友雄	粂田　徳幸	粂田　徳幸	粂田　徳幸	平松　公夫
総務部次長							鎌田　英巳	鎌田　秀巳
総務課長	初鹿野英治	杉木　敏雄	杉木　敏雄	杉木　敏雄	本杉　昭一	本杉　昭一	鎌田　英巳	鎌田　秀巳
総務担当	稲葉　保幸 (経理専門員)	稲葉　保幸 (経理専門員)	田中　雅代 (総務係長)	田中　雅代 (総務係長)	山本　広子 (総務係長)	鈴木　訓生 (副主任)	野島　尚紀 (会計係長)	野島　尚紀 (会計係長)
調査研究部長	石垣　英夫	石垣　英夫	佐藤　達雄	佐藤　達雄	佐藤　達雄	山本　昇平	山本　昇平	山本　昇平
調査研究部次長	栗野　克巳		佐野五十三	及川　司	栗野　克巳 及川　司	栗野　克巳 佐野五十三	栗野　克巳	栗野　克巳
調査研究部次長心得		佐野五十三						
担当課長	栗野　克巳 (一課長)	羽二　生保 (二課長)	遠藤　喜和 (二課長)	篠原　修二 (二課長)	篠原　修二 (二課長)	篠原　修二 (三課長)	栗野　克巳 (資料課長)	栗野　克巳 (資料課長)
主任調査研究員	羽二　生保							
調査研究員	大庭　宏 稲垣　聖二	稲垣　聖二 菊池　吉修 (９月まで) 佐藤　淳 (10月から)	稲垣　聖二 (12月まで) 菊池　吉修	稲垣　聖二 勝又　直人 (６月まで) 菊池　吉修	山本　剛史 菊池　吉修	菊池　吉修	菊池　吉修	菊池　吉修

物を検出した場合は、一部拡張を行い、更なる遺構の広がりの有無について確認を行った。確認トレンチの調査状況は写真撮影を行い、トレンチ配置図の作成も実施した。なお、平成12年度においてはトレンチ配置状況図の作成を株式会社フジヤマに委託した。

本調査は調査区ごとに調査を実施した。平成11年度から平成13年度の調査では調査区ごとに10ｍのグリッドを設定し調査を実施した。現地における実測はトータルステーションを用いて作成した。実測図は1/20を基本とし、必要に応じて１/５や１/10で作成をした。平成10年度～平成13年度においては、全体図の作成を株式会社フジヤマに委託し、空中写真撮影により図化を行った。また、測量基準杭の設置も併せて委託した。測量基準杭は平面直角座標第Ⅷ系に基づいて、20m間隔を基本として設置した。

写真撮影は現地ではカラーネガ、カラーリバーサル、モノクロフィルムを使用し、35㎜判と６×７判、４×５判で撮影を行った。なお、４×５判ではカラーリバーサルとモノクロフィルムのみの使用である。出土遺物の撮影は35㎜判（カラーリバーサル）、６×７判（モノクロ）、４×５判（カラーリバーサル・モノクロ）による撮影を行った。

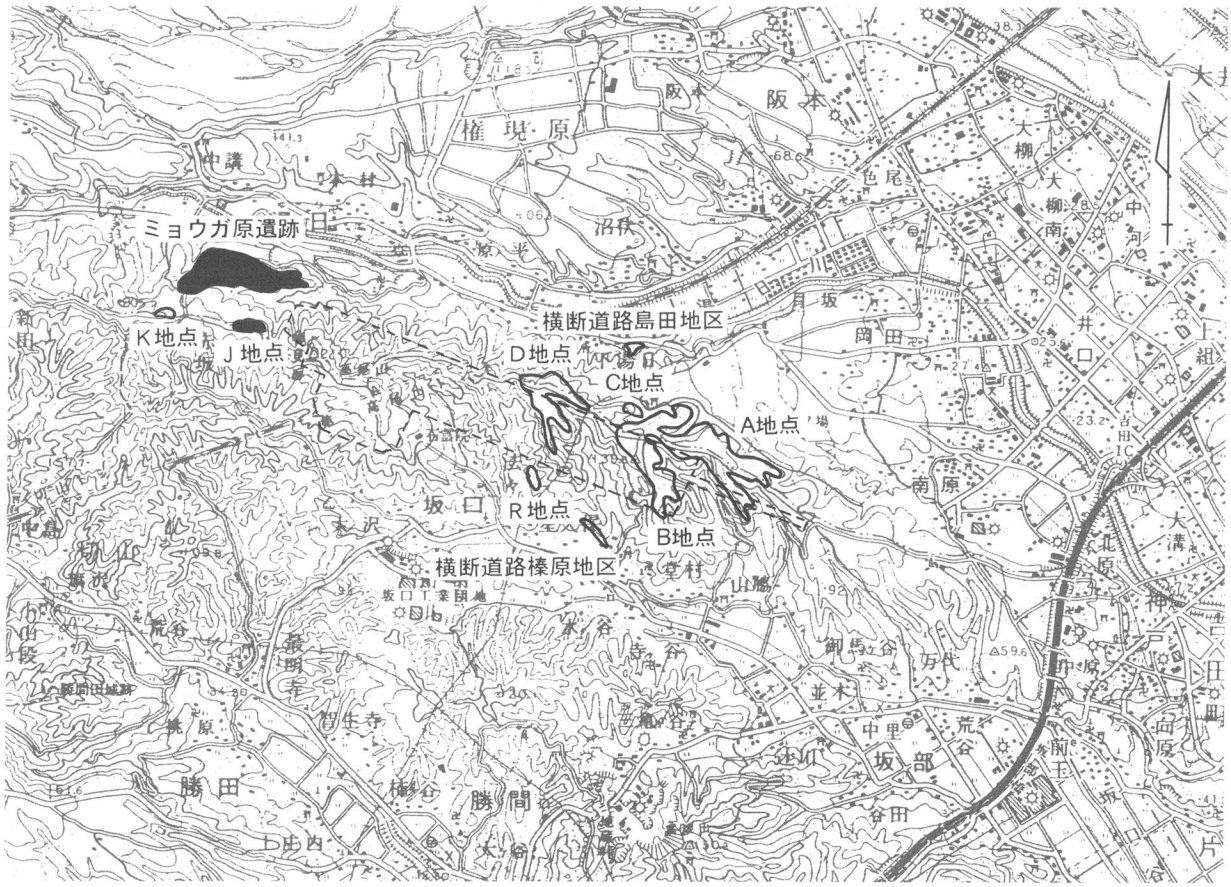


図２　空港関連遺跡位置図（1/50,000）

第２節　調査の経過

ミョウガ原遺跡は静岡空港関連遺跡の一つである。静岡空港関連遺跡は平成９年度から現地調査を開始した。空港関連遺跡はそれぞれ地点名が附されており、ミョウガ原遺跡はＪ地点とＯ地点にあたる。Ｊ地点とＯ地点に関わる現地調査は平成９年度から平成13年度まで実施した。平成９年度から平成13年度まではＪ地点とＯ地点以外にも静岡空港関連遺跡の調査を実施した。調査を行ったのは、Ａ～Ｄ地点、Ｋ地点、Ｒ地点、横断道路榛原地区、横断道路島田地区である。なお、Ａ地点は吉峠遺跡、Ｂ地点は水掛渡Ｄ古墳群と坂口千頭ヶ谷古墳、Ｃ地点は水掛渡古墳群Ｃ群、Ｄ地点は御陣場古墳と権現様御陣場遺跡、Ｒ地点は王屋敷寺院跡、横断道路榛原地区は星久保古墳群、横断道路島田地区は杉木原遺跡に相当する。ここでは、ミョウガ原遺跡の調査の経過を述べるとともに、空港関連遺跡全体の経過も併せて記す。

１．平成９年度

ミョウガ原遺跡　平成９年度の調査は確認調査と本調査を実施した。確認調査はＪ地点（１区）の8,253㎡とＯ地点（１～９区）の14,509㎡を対象として、７月から11月まで実施した。初めに、茶樹の伐採と土砂流失防止を目的とした網柵を７月に設置した。調査はＪ地点から着手した。Ｊ地点の調査は７月から８月まで行い、中世の炭焼窯を検出した。Ｏ地点は７月から８月に重機掘削を行った。人力掘削は８月から開始し、１区から順に10月まで作業を行った。Ｏ地点の確認調査では３～５区で溝や柱穴を検出し、遺構が更に広がることが明らかとなったため、本調査を引き続き実施することになった。

Ｏ地点の本調査は３～５区の8,042㎡について11月から翌年の３月まで実施した。３区では平安時代末～鎌倉時代初頭の流路を検出し、４区では３区と同時期の掘立柱建物跡を検出した。５区では縄文時代中

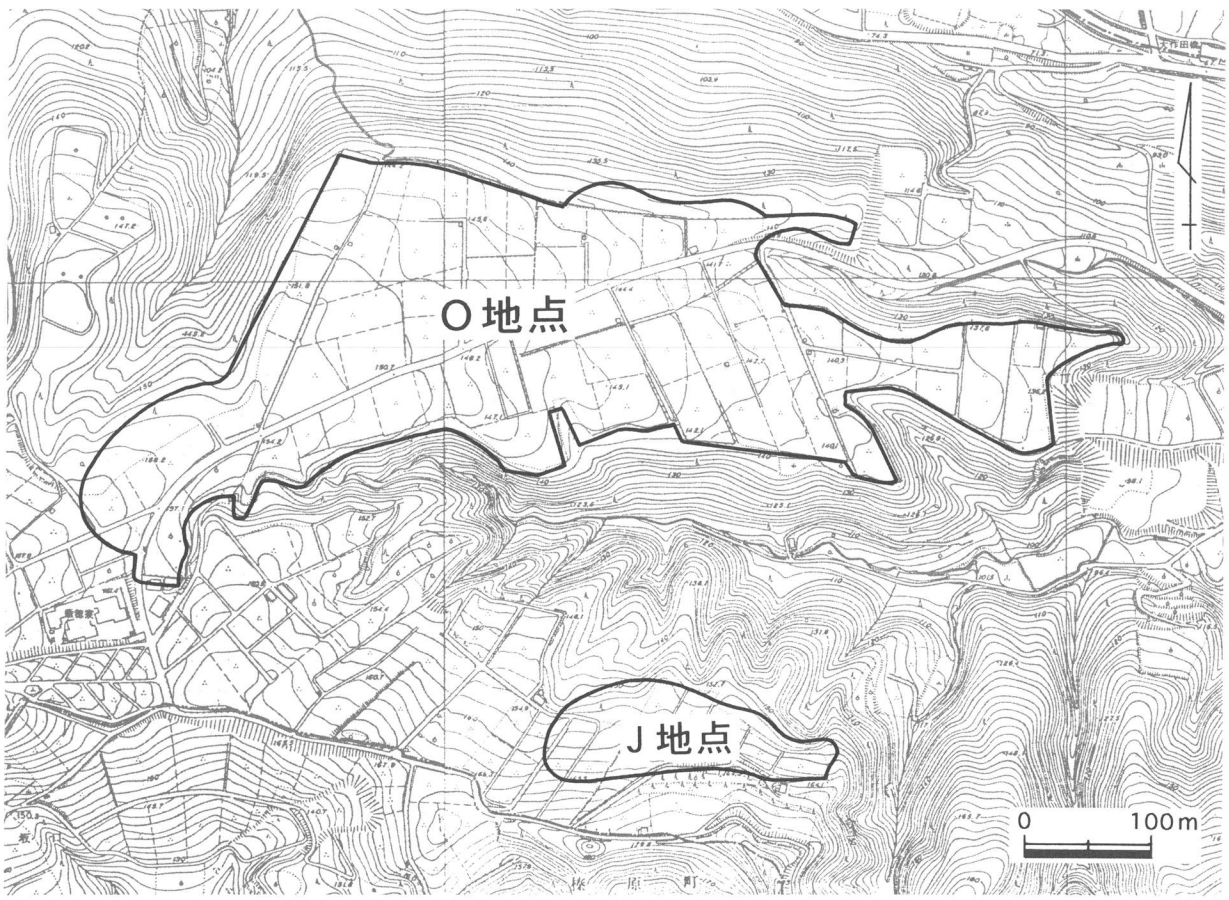


図３　ミョウガ原遺跡と周辺の地形（1/6,000）

期の土坑、中世の溝を検出し、これらに伴い遺物も出土した。３区については３月に埋め戻しを行い、平成９年度の作業を終了した。

その他の空港関連遺跡　平成９年度の空港関連遺跡ではＪ地点とＯ地点の他にＣ地点の確認調査と本調査を実施した。Ｃ地点の確認調査は1,000㎡を対象として９月に、本調査は８月から翌年の２月まで2,200㎡を対象として実施した。本調査では古墳時代後期の古墳を３基調査した。なお、Ｃ地点は２月から３月に整理作業と報告書作成作業も実施した。

２．平成10年度

ミョウガ原遺跡　平成10年度はＯ地点の確認調査と本調査を実施した。確認調査を行ったのは10～23区の26,157㎡である。調査は７月から開始し、初めに調査対象地点全域の茶樹伐採を実施した。伐採終了後、重機掘削と人力掘削に取りかかった。作業は15区から着手し、23区まで順に実施した。23区の調査は９月に終了し、次に、10区から14区の調査を順に10月まで実施した。10月に埋め戻しを実施し、確

表２　空港関連遺跡全体の経過　　確認調査------　本調査——　資料整理——

	平成９年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
Ａ地点			------		--------	——	——	
Ｂ地点			------ ------	-------		——	——	
Ｃ地点	-------- ——	——						
Ｄ地点			------	--------	----- ——	——	——	
Ｊ地点	-------		------			——	——	——
Ｋ地点					------			
Ｏ地点	---------- ——	--------- ——		----------	---------- ——	——	——	——
Ｒ地点					---			
横断道路 榛原地区				------ ——		——		
横断道路 島田地区					---			

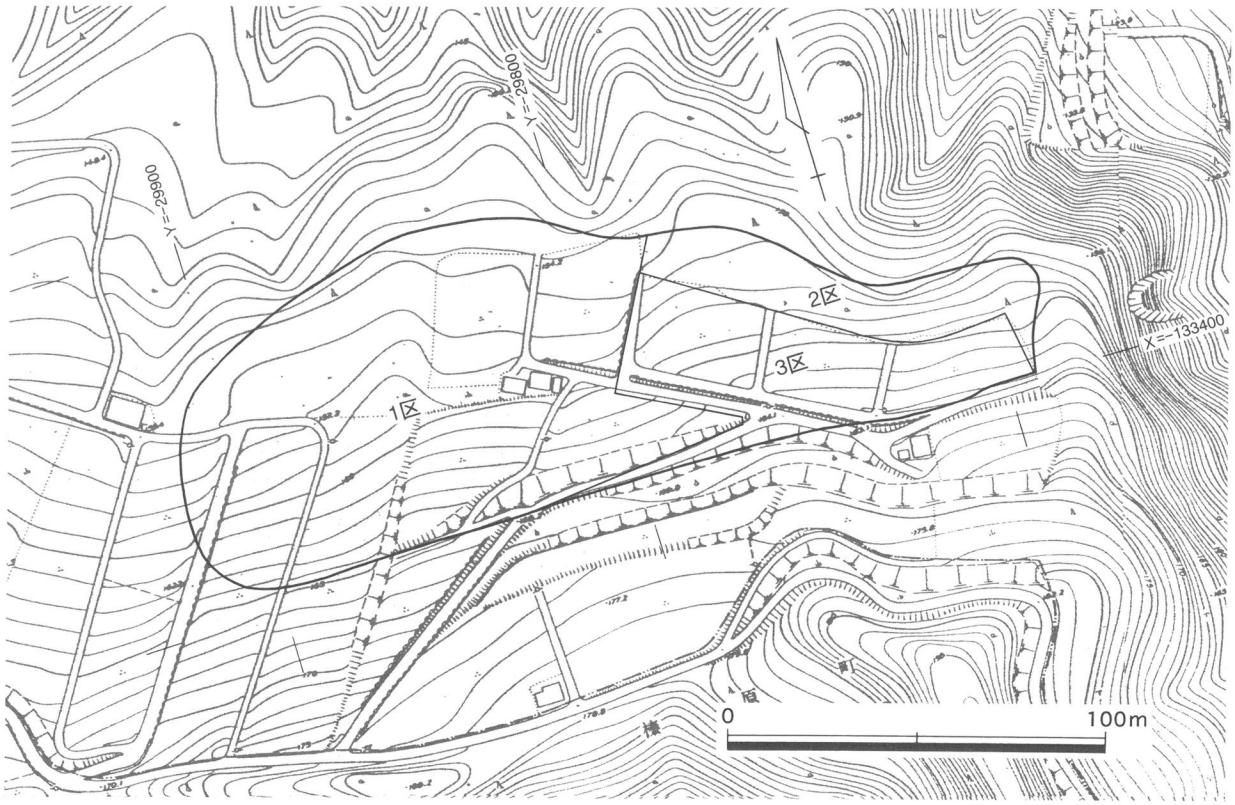


図４　Ｊ地点の調査区（1/2,000）

認調査を終了した。調査の結果、15区では前年度に調査を実施した３区から続く流路を検出し、13区と14区では溝や柱穴を検出した。

確認調査の結果から、13～15区の4,700㎡については本調査を行うこととなった。11月から重機掘削と人力掘削を開始し、12月まで作業を実施した。調査の結果、平安時代末～鎌倉時代初頭の区画溝で囲われた掘立柱建物等の存在が明らかとなった。

その他の空港関連遺跡　平成10年度はＯ地点の他にＣ地点の整理作業と報告書作成作業も実施した。作業は一部Ｏ地点の作業と平行して４月から10月まで実施し、報告書を刊行した（註１）。

３．平成11年度

ミョウガ原遺跡　平成11年度はＪ地点とＯ地点の調査を実施した。Ｊ地点は２区と３区の合計4,451㎡を対象とした確認調査を行った。Ｊ地点は５月に茶樹と森林伐採を行った後、重機掘削と人力掘削にとりかかった。６月まで掘削作業を実施したが、わずかな山茶椀片が出土したのみであった。

Ｏ地点は27区～39区の確認調査（24,439㎡）と24区～26区の本調査（5,999㎡）を実施した。調査対象地点はいずれも茶畑であったため、掘削作業に先がけ５月から６月まで茶樹等の伐採作業を実施した。確認調査は６月から重機掘削と人力掘削を開始した。調査は28区、29区、33区、27区、30区、32区の順に行い、８月に32区の調査が終了した時点で他の空港関連遺跡の調査を優先させるために作業を一端中断した。作業は１月から再開し、34区から37区まで順に掘削作業を実施した。掘削作業は２月まで行い、３月に埋め戻し作業を実施して、平成11年度の確認調査を終了した。調査の結果、28区、29区で縄文時代の土坑と遺物を検出し、31区、33～35区では灰釉陶器山茶椀が出土した他、柱穴や溝等の遺構が検出できた、これらの地区は遺構が更に広がることも、判明した。

Ｏ地点の本調査は８月から重機掘削と人力掘削を開始した。本調査は初めに24区からとりかかり、25区、26区の順に調査を実施した。24区と25区では前年の13区と14区の調査で検出した溝や掘立柱建物の続きを検出した。３月に掘削作業と実測を終え、撤収を行い、平成11年度の作業を終了した。

その他の空港関連遺跡　平成11年度はこの他に、Ａ地点、Ｂ地点、Ｄ地点の確認調査も実施した。確認調査はＡ地点の5,133㎡、Ｂ地点の86,525㎡、Ｄ地点の18,077㎡を対象として、６月から翌年１月まで実施した。この結果、Ｂ地点では古墳１基を検出した（坂口千頭ヶ谷古墳）。

４．平成12年度

ミョウガ原遺跡　平成12年度はＯ地点の40～50区の確認調査と28～30・33～35・46・47・51～53区の

表３　ミョウガ原遺跡調査面積

地点名			平成９年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	合　計
Ｊ地点	確認調査	対象面積	8,253㎡		4,451㎡			20,957㎡
		実掘面積	659㎡		222㎡			1,540㎡
Ｏ地点	確認調査	対象面積	14,509㎡	26,157㎡	24,439㎡	39,945㎡	1,330㎡	106,380㎡
		実掘面積	1,126㎡	1,840㎡	2,423㎡	4,016㎡	40㎡	9,445㎡
	本調査面積		8,042㎡	4,700㎡	5,999㎡	9,808㎡	8,952㎡	37,501㎡
合　計	確認調査	対象面積	22,762㎡	26,157㎡	28,890㎡	39,945㎡	1,330㎡	127,337㎡
		実掘面積	1,785㎡	1,840㎡	2,645㎡	4,016㎡	40㎡	10,985㎡
	本調査面積		8,042㎡	4,700㎡	5,999㎡	9,808㎡	8,952㎡	37,501㎡

表４　ミョウガ原遺跡年度別調査地点

地点	調査の種別	平成９年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度
Ｊ地点	確認調査	１		２・３		
Ｏ地点	確認調査	１～９	10～23	27～39	40～50	54
	本 調 査	３～５	13～15	24～26	28～30・34・35・46・47・51～53	48・50・54

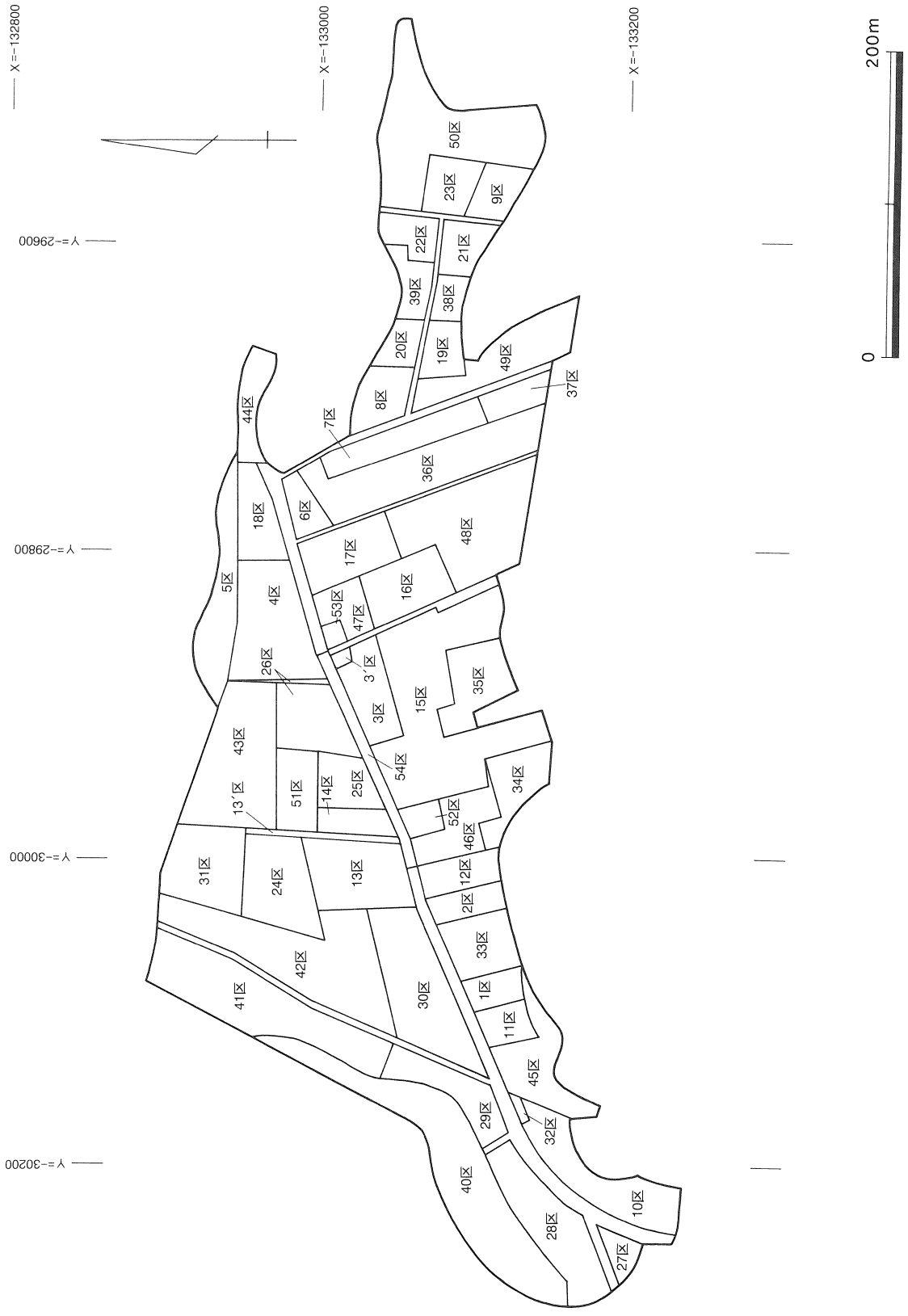


図５　O地点の調査区（1/4,000）

本調査を実施した。確認調査は５月から12月まで39,945㎡を対象として実施した。調査はまず、41～43区・45～50区について行った。これらの調査区は調査以前に茶畑であったため、掘削に先立ち、５月に茶樹の伐採を実施した。重機掘削と人力掘削は６月に41区と42区から着手した。７月には43区、45区、47区、48区の調査を実施し、８月に49区と50区、９月に49区の調査を行った。40区と44区は調査以前、森林であったため10月に樹木の伐採を実施した。重機掘削と人力掘削は11月から12月まで行った。確認調査の結果、46区・47区・50区では溝や柱穴が検出され、山茶椀が出土した。

本調査は４月から翌年の３月まで9,808㎡について実施した。まず、４月に着手したのは33区である。33区の調査は５月で終了し、次いで、28～30区の調査に取りかかった。30区は６月中に調査を終え、29区は７月まで、28区は８月まで調査を行った。７月には新たに53区の調査を開始した。また、53区に隣接する47区も確認調査の結果、本調査を行うことになり、併せて調査を実施した。９月には35区の調査を開始した。11月には35区、47区、53区の調査が終了したため、新たに34区の調査に取りかかった。なお、34区に隣接する46区についても、確認調査の結果、本調査を実施することが決定したため、46区の本調査も11月から開始した。46区に隣接する52区の調査は34区と46区の調査に併行して１月から開始した。３月には34区、46区、52区の掘削作業と実測、撮影を終え、平成12年度の調査を完了した。これら、一連の調査の結果、縄文時代中期と平安時代後半～鎌倉時代初頭の遺構・遺物について明らかになった。特に目を引くのは34区で検出した地鎮に関わる遺構である。この遺構は平安時代後半に位置づけられる遺構である。

その他の空港関連遺跡　平成12年度はミョウガ原遺跡以外に横断道路榛原地区の確認調査と本調査、Ｂ地点とＤ地点の確認調査も実施した。横断路榛原地区の確認調査は4,716㎡を対象として４月に実施し、古墳や竪穴住居跡等を検出した。そのため、引き続き５月から９月まで2,891㎡を対象として本調査を実施した。Ｂ地点の10,094㎡、Ｄ地点の22,586㎡をそれぞれ対象とした確認調査は８月から12月に実施した。Ｂ地点では古墳２基（水掛渡Ｄ古墳群）を検出した。

表５　その他の空港関連遺跡確認調査面積

地点名		平成９年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	合　計
Ａ地点	対象面積			5,133㎡		80,996㎡	86,129㎡
	実掘面積			280㎡		4,392㎡	4,672㎡
Ｂ地点	対象面積			86,525㎡	10,094㎡	2,611㎡	99,230㎡
	実掘面積			4,652㎡	946㎡	60㎡	5,658㎡
Ｃ地点	対象面積	1,000㎡					1,000㎡
	実掘面積	50㎡					50㎡
Ｄ地点	対象面積			18,077㎡	22,586㎡	4,456㎡	45,119㎡
	実掘面積			1,053㎡	1,511㎡	223㎡	2,787㎡
Ｋ地点	対象面積					10,965㎡	10,965㎡
	実掘面積					623㎡	623㎡
Ｒ地点	対象面積					3,653㎡	3,653㎡
	実掘面積					220㎡	220㎡
横断道路榛原地区	対象面積				4,716㎡		4,716㎡
	実掘面積				1,580㎡		1,580㎡
横断道路島田地区	対象面積					4,600㎡	4,600㎡
	実掘面積					40㎡	40㎡
合　計	対象面積	1,000㎡		109,735㎡	37,395㎡	107,281㎡	255,412㎡
	実掘面積	50㎡		5,985㎡	4,037㎡	5,558㎡	15,630㎡

表６　遺跡別本調査面積

遺跡名	ミョウガ原遺跡	吉峠遺跡	水掛渡Ｃ古墳群	水掛渡Ｄ古墳群	坂口千頭ヶ谷古墳	御陣場古墳	星久保古墳群
調査面積	37,501㎡	1,000㎡	2,200㎡	5,606㎡	150㎡	400㎡	2,891㎡
調査年度	平成９～13年度	平成13年度	平成９年度	平成13年度	平成13年度	平成13年度	平成12年度

５．平成13年度

ミョウガ原遺跡　平成13年度はＯ地点の54区の確認調査と、48区・50区の本調査を実施した。確認調査は４月に1,330㎡を対象として実施した。調査の結果、柱穴や溝を検出し、山茶椀等が出土した。そのため、本調査を行うこととなった。

本調査は48区の調査を４月から実施した。ただし、６月から７月は50区の調査を優先させるため、48区の調査は一時中断し、８月から再開した。８月からは48区の調査と併行して、54区の本調査も開始した。48区の調査は９月に終了した。54区の調査は10月まで掘削作業を行い、11月初頭に実測と撮影を終了した。11月９日には撤収作業を終えて、平成９年度から続いたミョウガ原遺跡の現地調査を全て終えた。

その他の空港関連遺跡　平成13年度はＡ地点、Ｂ地点、Ｄ地点の確認調査と本調査をそれぞれ実施し、Ｋ地点とＲ地点、横断道路島田地区の確認調査も行った。

４月から６月まではＡ地点の80,996㎡とＢ地点の2,611㎡を対象とした確認調査を実施し、縄文時代の遺構を検出した。７月から８月までは4,456㎡を対象としたＤ地点の確認調査を実施し、古墳１基の存在が明らかとなった。８月から９月には10,965㎡を対象としたＫ地点の確認調査を実施した。Ｄ地点は確認調査の結果、本調査を実施することとなり９月から11月まで400㎡を対象として調査を行った。10月には前年度までの調査で遺構の存在が確認されていたＢ地点（5,756㎡）の本調査を開始した（水掛渡Ｄ古墳群、坂口千頭ヶ谷古墳）。なお、Ｂ地点の調査と併行して、11月にはＲ地点（3,653㎡）、11月には横断道路島田地区（4,600㎡）の確認調査も実施した。１月からはＡ地点（吉峠遺跡）の本調査を実施した（1,000㎡）。

これらの調査のうち、Ｋ地点と横断道路島田地区の確認調査では何も検出されなかった。Ｒ地点の確認調査では山茶椀等が出土したものの、遺構の検出には至らなかった。本調査ではＡ地点で縄文時代早期の遺構を検出し、Ｂ地点で縄文時代早期の遺構と遺物、古墳時代後期の遺構と遺物を調査した。Ｄ地点の本調査でも古墳時代後期の古墳を調査した。

一連の調査は３月に実施したＡ地点とＢ地点の撤収作業を以て終了し、平成13年度の現地調査を終えた。

６．平成14～16年度

空港関連遺跡の現地調査については、平成13年度を以て一区切りがついたため、平成14年度以降は資料整理作業と報告書作成作業を実施することになった。

資料整理作業と報告書作成作業は平成16年８月まで当研究所本部にて実施した。作業を行った地点は、Ａ地点、Ｂ地点、Ｄ地点、Ｊ地点、Ｏ地点、横断道路榛原地区である。これらの地点の作業を併行して実施したが、平成14年度は横断道路に関わる作業を優先させた。横断道路榛原地区に関わる報告書は平成14年12月に刊行し（註２）、横断道路榛原地区の作業を終了した。引き続いて、Ａ地点、Ｂ地点、Ｄ地点に関わる作業を優先させて実施した。平成15年12月にはＡ地点、Ｂ地点、Ｄ地点の報告書を刊行し（註３）、これらの３地点の作業を終了した。ミョウガ原遺跡に関わるＪ地点とＯ地点の作業は平成16年８月まで実施し、本書の刊行を以て作業を終了した。

註

註１　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1999　『水掛渡古墳群Ｃ群』
註２　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　2002　『星久保古墳群』
註３　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　2003　『吉峠遺跡・水掛渡Ｄ古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳・御陣場古墳・権現御陣場遺跡』

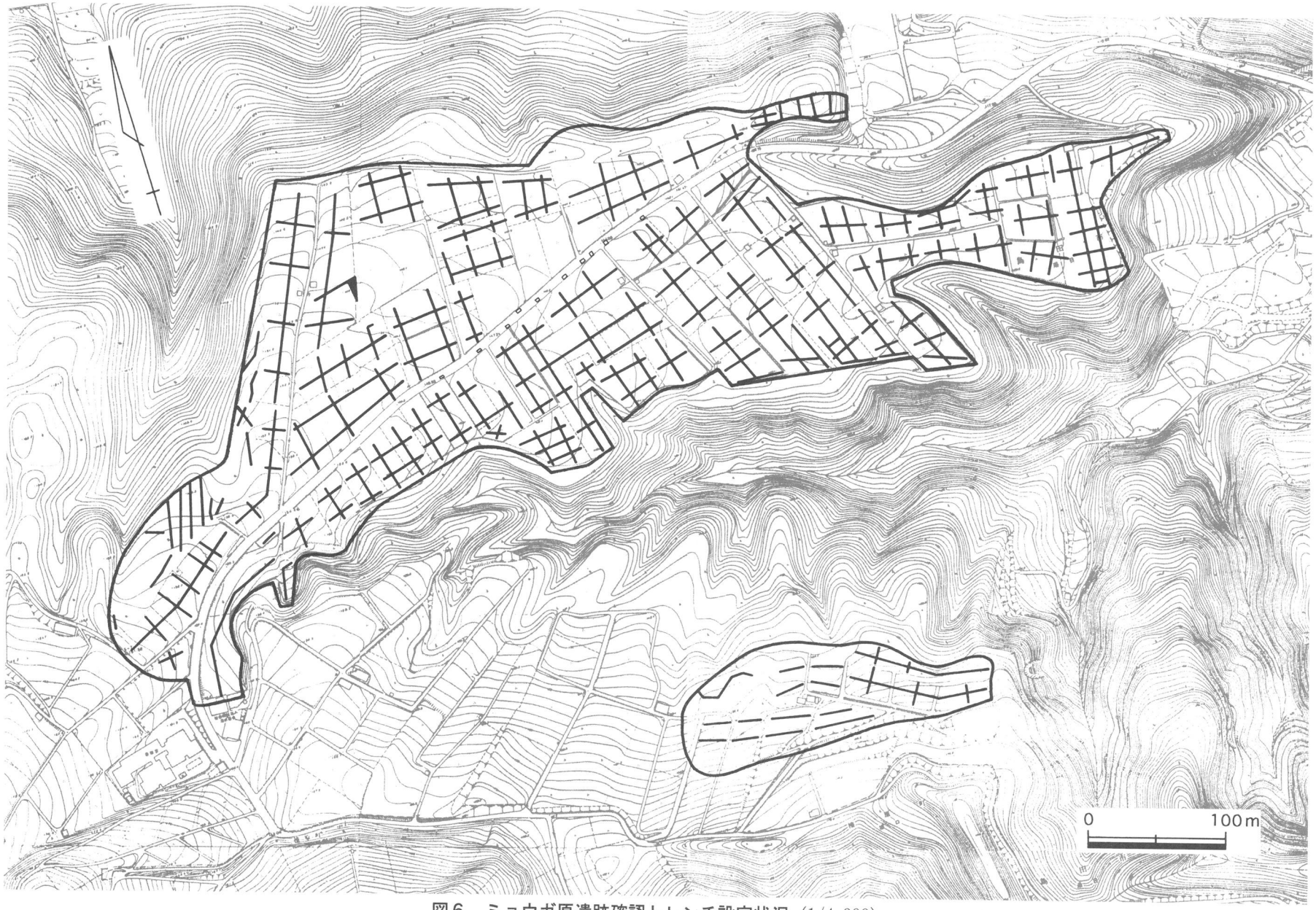


図6　ミョウガ原遺跡確認トレンチ設定状況（1/4,000）

第３章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

１．遺跡の位置

ミョウガ原遺跡は静岡県島田市湯日字茗荷原他に所在する遺跡である。静岡県は東西約150km、南北約115kmにわたる広さを持ち、南は太平洋に面し、北は富士山や赤石山脈に代表される山岳地帯となっている。静岡県のほぼ中央には赤石山脈を源とする大井川が流れている。大井川は山間部では蛇行を繰り返しながら南流し、その沖積平野に至ると向きを大きく東へ向け駿河湾に注ぐ。向きを変えた大井川の右岸に広がるのは「牧ノ原台地」である。牧ノ原台地は浸食により、幾つかの支脈に分岐している。牧ノ原台地北東部では支脈と支脈の間に河川が東流し、駿河湾に注いでいる。その河川とは、北から湯日川、坂口谷川、勝間田川である。静岡空港建設が計画されたのは、湯日川と坂口谷川で挟まれた支脈上である。この支脈は標高210ｍの高尾山・物見塚を最高点として、東西に稜線がのびている。ミョウガ原遺跡は物見塚の北西約0.5ｍに所在する。その位置はＪＲ島田駅から南に約3.0km、東名高速道路吉田I.Cから北西に約5.6kmの距離である。ミョウガ原遺跡のうちＯ地点は標高約145ｍの丘陵平坦部で、Ｊ地点は標高155ｍ～165ｍの丘陵緩斜面に広がっている。ミョウガ原遺跡からは、北東遠くに富士山、北から北西にかけては南アルプス山脈、西と南は物見塚に連なる稜線、東には木々の隙間から湯日川の流れと駿河湾を眺望することができる。

２．地理的環境

ミョウガ原遺跡の所在する牧ノ原台地の成因は大井川の河川堆積が長い年月をかけて隆起したもので、隆起扇状地とも称される。そのため、この付近の地山には円礫が多く含まれている。これらの円礫は河川の流路の影響を受けて列をなすことがある。この現象はインブリケーション構造とも呼ばれ、ミョウガ原遺跡を始め、空港関連遺跡では至る所で見られた。さて、牧ノ原台地は掛川層群・相良層群を基盤に小笠・坂部原礫層、古谷泥層、牧ノ原礫層、色尾・長者原段丘群礫層の順で層位が形成されている。ミョウガ原遺跡は十数万年前に堆積したと言われる牧ノ原礫層によって形成される丘陵平坦面に所在している。先にも述べたが、牧ノ原台地は風雨の浸食により、至る所に解析谷が形成されている。ミョウガ原遺跡周辺でも解析谷が見られ、Ｏ地点とＪ地点の間には発達した解析谷が存在する。この解析谷が織りなす景観が、ミョウガ原遺跡の環境を特徴付けているといえる。Ｊ地点とＯ地点の周囲の状況をみると、先述したとおりＪ地点とＯ地点の間には深く急峻な谷が入り込む。Ｏ地点は地点内にも東側から解析谷が入り込んでいる。Ｏ地点の北に目を転じると、急斜面を下った先は湯日川が流れている。湯日川の両岸には狭小ではあるものの沖積平野が形成されている。Ｏ地点の東から入り込む谷を下ると、この沖積平野に至ることができる。湯日川を下ると、大井川の沖積平野に出ることができる。Ｏ地点の西側は物見塚から延びる丘陵稜線が金谷方面へとつながっている。次にＪ地点を見ると、北側については先述の通りである。東側にも解析谷が入り込み、急斜面となっている。南側は物見塚から延びる丘陵の尾根であり、稜線の向こう側は急斜面である。西側は緩斜面が続き、約0.3km先でＯ地点から続く丘陵尾根とつながっている。Ｊ地点は物見塚から西に延びる稜線の北側の緩斜面、Ｏ地点は三方を急斜面で囲まれた平坦地といえる。調査以前は、丘陵平坦面や緩斜面は茶畑として利用されていたが、急斜面地は杉や檜が植林されている程度の利用である。

第２節　歴史的環境

ミョウガ原遺跡では旧石器時代、縄文時代、平安時代～鎌倉時代初頭の遺構・遺物を検出した。ミョウガ原遺跡の歴史的環境については、周辺遺跡の様相を概観することで捉えたい。

旧石器時代　ミョウガ原遺跡周辺では旧石器時代の遺構が検出された遺跡は無いが、吹木原遺跡(7)、屋敷原遺跡（15）、御小屋原遺跡（11・12）、原ノ平遺跡（22）、青木原遺跡（30）、宮裏遺跡（40）で遺物が発見されている。いずれも、ミョウガ原遺跡とは湯日川を隔てた丘陵上に所在する遺跡である。本書で報告するミョウガ原遺跡の調査でも、ナイフ形石器が出土している。この遺跡が所在する丘陵では、初出の資料である。そのため、ミョウガ原遺跡でこの時期の遺物が確認されたことは大きな成果といえよう。もっとも、資料は断片的なものであり、歴史像の解明には今後の資料の増加を待ちたい。

縄文時代　縄文時代になると遺跡の数は増す。特に、大井川と湯日川に挟まれた丘陵上では、その調査例も多い。その多くは縄文時代中期の遺跡である。多角形住居が発見された東鎌塚原遺跡（19）はその代表の一つである。また、この丘陵上には中原遺跡（38）や青木原遺跡（30）のように草創期に遡る遺跡もみられる。前期の遺跡としては屋敷原遺跡（15）、後期・晩期の遺跡としては風西遺跡（18）などが知られている。ミョウガ原遺跡の調査では、草創期～中期の遺物、中期の遺構を検出している。また、静岡空港関連遺跡としては、吉峠遺跡（66）、水掛渡Ｄ古墳群（64）、権現様御陣場遺跡（52）で縄文時代前期の遺構や遺物について調査をしている。空港予定地の丘陵では草創期から中期に至るまで、人々が生活を営んでいた痕跡をうかがうことができるが、キャンプサイト的な利用のようである。

図７　ミョウガ原遺跡周辺の遺跡分布図（1/50,000）

弥生時代　数多い縄文時代の遺跡にくらべると弥生時代の遺跡は少ない。宮裏遺跡（40）では中期の遺物が出土している。この他、五輪塔遺跡（37）、地蔵原遺跡（43）、松ノ木原遺跡（45）、長軒屋遺跡（49）がこの時期の遺跡として知られているが、その実態は判然としない。この時期の遺跡は湯日川の沖積平野の下層に存在する可能性も指摘されている（島田市1996）。

古墳時代　古墳時代になると遺跡の数は増加するが、そのほとんどが後期の群集墳である。空港関連遺跡では水掛渡Ｃ古墳群（56）、水掛渡Ｄ古墳群（64）、坂口千頭ヶ谷古墳（65）、星久保古墳群（55）の調査を実施しているが、これらも全て横穴式石室を埋葬施設とする古墳時代後期の円墳であった。盛行する後期の古墳にくらべ、前期と中期の古墳は非常に少ない。現状では、坂口谷川右岸の倉見原１号墳が当地では前期に位置づけられる唯一の古墳である。稲荷山古墳（75）は中期の可能性が指摘されている。

集落跡を見ると、青木原遺跡（30）、中原遺跡（38）、宮裏遺跡（40）等では後期の集落跡が調査されている。古墳時代後期では盛行する古墳にくらべ集落遺跡として確認されているものは少ないが、これらの遺跡の多くは律令期にまで継続的に集落が営まれる。空港関連の調査では星久保古墳群内において、後期の住居跡を検出している。いっぽうで、前期から中期については全く確認されていない状況である。この他に、沼伏遺跡（47）は古墳時代の祭祀遺跡として知られている。

奈良時代～平安時代　律令期にはミョウガ原遺跡周辺は遠江国榛原郡に含まれる。この時期の遺跡としては、まず、寺院である竹林寺（71）が注目できる。奈良時代初期に建立された竹林寺は平安時代初期に焼失するが、再建され平安時代中期まで存続した。竹林寺の瓦を焼いた窯として南原瓦窯（72）と六千ヶ谷瓦窯（74）が知られている。青木原遺跡（30）、宮上遺跡（32）、中原遺跡（38）、宮裏遺跡（40）はこの時期の集落遺跡である。このうち、青木原遺跡では円面硯が、宮上遺跡では螺髪が出土している。『倭妙類聚鈔』には榛原郡内に存在した９つの郷と驛家が記されている。上述した集落遺跡の一帯は、この内の「初倉驛家」に比定される地である。また、これらの遺跡の中心に位置する敬満神社は『延喜式』で名大神に格付けされる式内社である。これらの遺跡は鎌倉時代まで継続して集落が営まれる。本書で報告するミョウガ原遺跡も平安時代後半～鎌倉時代初頭の集落遺跡である。

平安時代後半になると、ミョウガ原遺跡の周辺は質侶牧（質侶荘）の領域に組み込まれる。おおよそ

表７　周辺遺跡地名表

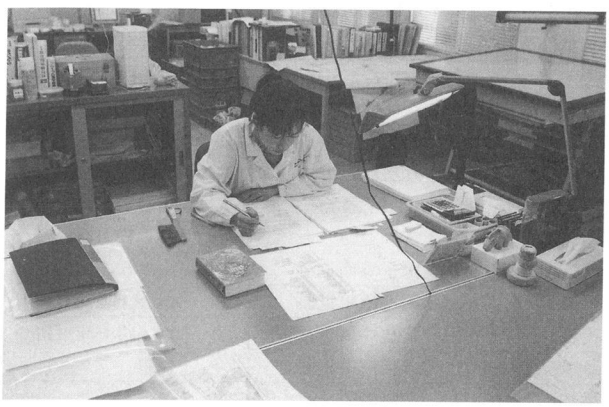
番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	ミョウガ原遺跡	19	東鎌塚原遺跡	37	五輪塔遺跡	55	星久保古墳群	73	南原古窯
2	天王町遺跡	20	本村原遺跡	38	中原遺跡	56	水掛渡Ｃ古墳群	74	六千ヶ谷瓦窯
3	下坂遺跡	21	本村原古墳群	39	高根森古墳群	57	水掛渡Ａ古墳群	75	稲荷山古墳
4	唐沢遺跡	22	原ノ平遺跡	40	宮裏遺跡	58	水掛渡Ｂ古墳群	76	御馬ヶ谷古墳群
5	唐沢原古墳群	23	半段遺跡	41	鶴ヶ谷古墳群	59	庚申塚古墳	77	入道ヶ谷古墳
6	唐沢原遺跡	24	東照宮遺跡	42	鶴ヶ谷南古墳群	60	岡田原Ⅰ遺跡	78	浄雲尊古墳群
7	吹木原遺跡	25	えびす森遺跡	43	地蔵原遺跡	61	水掛渡遺跡	79	神ノ郷古墳
8	双川遺跡	26	原ノ平古墳群	44	沼伏神社遺跡	62	六ッ塚古墳群	80	海戸遺跡
9	叶針山古墳群	27	大原遺跡	45	松ノ木原遺跡	63	9TEE古墳	81	水ヶ谷経塚
10	西原遺跡	28	沼伏原古墳群	46	沼伏古墳	64	水掛渡Ｄ古墳群	82	勝間田城
11	御小屋原Ⅰ遺跡	29	色尾原遺跡	47	沼伏遺跡	65	坂口千頭ヶ谷古墳	83	ひきた遺跡
12	御小屋原Ⅱ遺跡	30	青木原遺跡	48	船山古墳	66	吉峠遺跡	84	六本松Ⅰ遺跡
13	御小屋原古墳	31	尼沢遺跡	49	長軒屋遺跡	67	医王寺南遺跡	85	六本松Ⅱ遺跡
14	丸山Ⅰ古窯	32	宮上遺跡	50	湯日城	68	岡田原Ⅲ遺跡	86	落井上原遺跡
15	屋敷原遺跡	33	敬満神社経塚	51	杉木原遺跡	69	宮裏中原古墳群	87	島田宿大井川川越遺跡
16	奥ノ沢古墳群	34	谷口原古墳	52	権現様御陣場遺跡	70	岡田原Ⅱ遺跡		
17	丸山古窯	35	愛宕塚古墳	53	作寺古墳	71	竹林寺		
18	風西遺跡	36	谷口原遺跡	54	王屋敷寺院	72	南原瓦窯		

の区分ではあるが、湯日川上流は質侶荘、湯日川下流と坂口谷川流域は初倉荘に比定される。質侶荘は11世紀初頭に遠江守大江公資によって開発され、私領化されることで成立したとされる。その後、紆余曲折を経て、質侶荘は大治３（1128）年に藤原永範から円勝寺に寄進される。「藤原永範寄進状案」には質侶牧の南限について、「坂口中山」と記載されている。この坂口中山は物見塚から東西に延びる稜線、あるいは島田市船木の島田ゴルフ場付近から榛原町坂口の坂口神社に越える山と考えられている。質侶荘の郷の一つに湯日郷が存在する。湯日郷は治承３（1179）年の『湯日郷四至注文案』には湯日郷の南限として、「八条院御庄坂口境細峰」が記されている。この坂口境細峰も物見塚・高尾山から東西に延びる稜線と考えられている。これらを勘案すると、ミョウガ原遺跡は質侶荘湯日郷の南限に近く、初倉荘との境に立地するといえる。平安時代末になると、この周囲では窯業が行われるようになる。

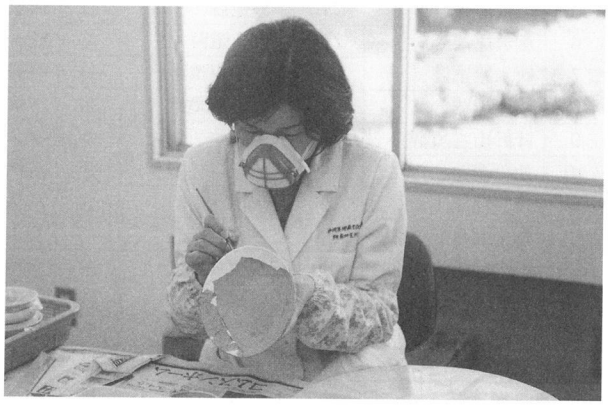
鎌倉時代以降　鎌倉時代に入っても、円勝寺領質侶荘は存続していた。青木原遺跡（30）、宮上遺跡（32）、中原遺跡（38）、宮裏遺跡（40）では山茶椀を伴った遺構が検出されている。南北朝～室町時代になると、勝間田川流域に勢力基盤を置く勝間田氏が付近一帯に勢力をのばす。物見塚の南東に所在する石雲院は1455年の創建で、勝間田氏と縁が深い。1476年には今川氏が勝間田氏をうち破り、この地に勢力を広げてくる。1560年の桶狭間の戦い以降、今川氏の勢力が衰えると、武田氏と徳川氏がこの地をめぐって争い、最終的には徳川氏の勢力下に置かれる。徳川氏が江戸に移ると、この地は掛川城主山内氏の勢力下に入り、江戸時代では掛川藩領、相良藩領、島田代官所領、旗本所領が地域と時期を混在し見られる。近代以降は牧ノ原台地の開墾が進み、茶畑が至る所に広がる景観となり、現在へとつながる。なお、ミョウガ原遺跡の一帯は調査以前、茶畑が広がっていた。

本調査の状況　1

本調査の状況　2



整理作業の状況　1



整理作業の状況　2

第３節　基本層序

ミョウガ原遺跡が所在する「牧ノ原台地」一帯は大井川の河川堆積物が隆起したものである。ミョウガ原遺跡の基盤となる「牧ノ原礫層」は７～13万年前に堆積したものと考えられている。礫層にはインブリケーション構造が認められ、当時の大井川は北から南へ流れていたことが判明した（註１）。牧ノ原礫層の上には、シルトや礫を多く含む粘土層が広がっている。これも、大井川の河川堆積に由来するものである。この層は、丘陵中央付近では黄褐色、丘陵端部では赤褐色を呈する。ところで、湯日川を隔てて北側に広がる丘陵も牧ノ原礫層が基盤となっている。この丘陵上では中世の堆積層である「黒ボク」が河川堆積層の上に広がっていた。一方、ミョウガ原遺跡では「黒ボク」はほとんど見られなかった。ただし、一部に薄いものの中世遺物の包含層がみられたので、この丘陵にも「黒ボク」あるいはそれに類する層が広がっていた可能性はある。ミョウガ原遺跡周辺では、茶畑の開墾により深くまで天地返しが行われている。天地返しによる撹乱はほとんどの地区で第Ⅴ層の牧ノ原礫層、あるいは第Ⅳ層の黄褐色粘土層にまで達している。表土・耕作土を除去すると地山となっており、第Ⅳ層または第Ⅴ層の上面が遺構検出面となった。ミョウガ原遺跡では層位から時代を把握することはほとんどできなかった。

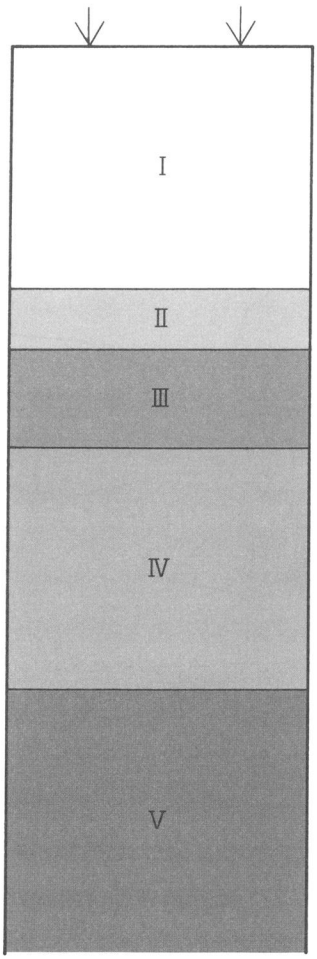


図８　基本層序

第Ⅰ層　表土・耕作土層　調査以前に茶畑であった箇所では、耕作土層の厚さは50～100cm程度である。森林部分では10～30cm程度、表土層の厚さがある。遺物はこの層から多く出土した。

第Ⅱ層　褐色粘土層　最大で10cm程度の厚さがある。山茶椀や灰釉陶器などの遺物包含層で、集落廃絶後の堆積層と考えられる。ただし、天地返しが深くおよんでいる場合はこの層は消滅している。第Ⅱ層が確認できたのは、３区と54区の一部である。炭化物や焼土の粒子が混ざるが、礫はほとんど混ざらない。

第Ⅲ層　明黄褐色粘土層　10～30cmの厚さがある。炭化物が極少量混ざり、礫はほとんど混ざらない。調査区内の低位部に堆積したものが、部分的に残存したようである。縄文時代以前の遺物包含層の可能性もあるが、出土遺物は無かった。

第Ⅳ層　黄褐色粘土層　50cm前後の厚さがあり、礫やシルトを多く含む地山である。多くの調査区で、この層の上面が遺構検出面となった。

第Ⅴ層　礫　層　地山の牧ノ原礫層である。この層の上面が遺構検出面となった調査区もある。５～30cm程度の円礫が多く混ざる層である。丘陵縁辺部では表土の直下がこの層になっている。

註

1　加藤芳朗氏の御教示による

第４章　調査の成果

第１節　概　要

ミョウガ原遺跡では、旧石器時代の遺物を始め、縄文時代と平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物を調査した。ここでは、調査成果を時代別に概観する。なお、調査地区別の成果については表８のとおりである。まず、旧石器時代では、２点のナイフ形石器が出土した。点数は少ないながらも、ミョウガ原遺跡が所在する丘陵における旧石器時代の遺物としては初出の資料として注目できる。

縄文時代の遺構としては、陥穴と土坑、竪穴住居跡を検出した。陥穴は48区で検出し、５基が尾根を横切るように並んでいた。竪穴住居跡は34区で１棟検出した。住居跡の中からは中期の土器片とともに、多数の剥片が出土した。その様子から、この住居で石器が制作されたと考えられる。土坑は５区、24区、28区で検出した。このうち、５区の土坑からは中期の土器片と石皿が出土した。中期においては、小規模な集落が営まれた可能性がある。この他、撹乱土中から、尖頭器や石鏃、石斧、土器が出土している。断片的であるが、草創期、早期、前期、中期の各期に渡る資料である。ただし、継続的に生活が営まれた様子はうかがえない。

平安時代後半～鎌倉時代になると、この地に集落が営まれていた様子が確認できる。この集落は掘立柱建物を中心としたもので、集落の所々に区画溝が存在する。また、調査区中央部で西から東に流れる自然流路もこの時期に人の手が加えられているようである。掘立柱建物跡は54棟存在することが確認できた。ただし、復原はできなかったものの、より多くの建物が存在していた可能性は高い。掘立柱建物

図９　O地点年度別本調査範囲（1/5,000）

は数棟単位で、まとまりを持って存在するようである。中でも注目できるのは、集落跡北西で検出した建物群である。この建物群は北、西、南を溝で囲まれ、東には柵が存在する。時期は12世紀中葉～13世紀前半に位置づけられる。建物以外で注目できる遺構としては、集落跡南西で検出した土坑群である。この土坑群は５基の土坑が東西南北の十字に配列されている所に第一の特徴がある。二つ目の特徴としては、それぞれの土坑の底面に円礫が充填されている所である。第三の特徴として、東と南、西の土坑では中央部に灰釉陶器の長頸瓶が据えられていたことである。中央の土坑にも長頸瓶が据えられていた可能性がある。この土坑群は地鎮祭祀に関わる遺構と考えられ、11世紀代に位置づけられる。

以上がミョウガ原遺跡の調査で得られた成果の概要である。次節以下、調査の成果を遺構と遺物に分け、時代別に記す。

表８　地区別の遺構・遺物

地点	区	時代	遺構	主な出土遺物	調査年度 確認	調査年度 本調査
J	1	平安～鎌倉	炭焼窯３	山茶椀	9	—
	2		—	—	11	—
	3		—	—	11	—
O	1	—	—	—	9	—
	2	縄文 平安～鎌倉	—	剥片 山茶椀	9	—
	3 3'	縄文(草創期) 平安～鎌倉	— 流路・導水遺構1	尖頭器 山茶椀・青磁	9	9・11
	4	縄文 平安～鎌倉	 掘立柱建物跡５	剥片 山茶椀	9	9
	5	縄文(中期) 平安～鎌倉	土坑１ 溝１	縄文土器・石皿 山茶椀・青磁	9	9
	6	平安～鎌倉	—	山茶椀	9	—
	7	平安～鎌倉	—	山茶椀	9	—
	8	平安～鎌倉	—	山茶椀	9	—
	9	平安～鎌倉	—	山茶椀	9	—
	10	—	—	—	10	—
	11	—	—	—	10	—
	12	—	—	—	10	—
	13 13'	平安～鎌倉	掘立柱建物跡５・溝・土坑２・柵跡５	山茶椀	10 —	10 12
	14	縄文 平安～鎌倉	 掘立柱建物跡４・溝	石匙・両極石器 山茶椀	10	10
	15	縄文 平安～鎌倉	 流路・柱穴	石鏃・両極石器 山茶椀	10	10
	16	平安～鎌倉	—	灰釉陶器・山茶椀	10	—
	17	平安～鎌倉	—	山茶椀	10	—
	18	縄文 平安～鎌倉	— —	剥片 山茶椀	10	—
	19	縄文	—	剥片	10	—
	20	縄文	—	剥片	10	—
	21	—	—	—	10	—
	22	—	—	—	10	—
	23	—	—	—	10	—
	24	縄文(草創期) 平安～鎌倉	— 溝３	尖頭器 山茶椀	—	11
	25	縄文 平安～鎌倉	— 掘立柱建物跡６・柵跡４・土坑４	石鏃 山茶椀・釘	—	11
	26	縄文 平安～鎌倉	— 掘立柱建物跡５・柵跡１・土坑２	石鏃 山茶椀	—	11
O	27	—	—	—	11	—
	28	縄文 平安～鎌倉	土坑２	石匙・石斧 山茶椀	11	12
	29	縄文 平安～鎌倉	— 土坑３・溝	石鏃・石錐 山茶椀	11	12
	30	—	溝？	—	11	—
	31	平安～鎌倉	溝	—	11	—
	32	—	—	剥片	11	—
	33	—	溝？	—	11	12
	34	縄文(中期) 平安～鎌倉	竪穴住居跡１ 竪穴状遺構３・掘立柱建物跡14・祭祀土坑５・土坑２	縄文土器・石鏃・石錐・石匙 灰釉陶器・山茶椀・釘	11	12
	35	平安～鎌倉	掘立柱建物跡６・柵跡１・溝	緑釉陶器・灰釉陶器・山茶椀	11	12
	36	※１			11	—
	37	—	—	—	11	—
	38	—	—	—	11	—
	39	—	—	—	11	—
	40	中世	炭焼窯１	—	12	—
	41	平安～鎌倉	—	山茶椀	12	—
	42	平安～鎌倉	溝	山茶椀	12	—
	43	平安～鎌倉	溝	山茶椀	12	—
	44	—	—	—	12	—
	45	平安～鎌倉	—	山茶椀	12	—
	46	※２			12	12
	47	縄文(草創期) 平安～鎌倉	— 掘立柱建物跡２・溝・石組遺構１	尖頭器 山茶椀	12	12
	48	縄文 平安～鎌倉	陥穴５ 掘立柱建物跡４・溝	石鏃 灰釉陶器・山茶椀	12	13
	49	—	—	—	12	—
	50	縄文 平安	集石土坑１ 掘立柱建物跡１・竪穴状遺構１	 灰釉陶器	12	13
	51	—	—	—	—	12
	52	※２			12	12
	53	※３			12	12
	54	平安～鎌倉	掘立柱建物跡３・導水施設１・土坑２・柵１	山茶椀	13	13

※１　36区の一部は48区の本調査の際に併せて調査を実施した。その内容は48区に記した。
※２　46区・52区は34区と一連の調査区として調査を実施した。その内容は34区に記した。
※３　53区は47区と一連の調査区として調査を実施した。その内容は47区に記した。

第２節　平安時代～鎌倉時代の遺構

１．概　要

ミョウガ原遺跡では平安時代後半から鎌倉時代初頭にかけての集落跡を検出した。遺構としては、54棟の掘立柱建物跡、35条の溝状遺構、29基の土坑を調査した。また、遺跡の中央を東西に横切る自然流路も検出した。遺構は均等に分布するのではなく、偏在傾向が認められる。その分布状況から、調査区北西部（13・14・24・25区）、北側中央部（25・26区）、北東部（３・４・26・47・53・54区）、南西部（34・46・52区）、南側中央部（35区）、南東部（48区）、東端部（50区）と大きく７つの遺構群に区ができる。そこで、以下に遺構集中箇所別に概観を記す。

まず、調査区北西部の遺構群からみる。ここでは、６棟の掘立柱建物跡が検出できた。このうち、SH-1～SH-6（註１）は、北、西、南の三方をSD-2、東をSA-5により囲まれた範囲に展開する。更に、この遺構群は北と西をSD-1により囲まれている。ここにおける主な出土遺物はⅠ期～Ⅲ期の山茶椀であり、12世紀中葉～13世紀前半に時期を求めることができる（註２）。

北側中央部においては、11棟の掘立柱建物の存在を確認した。遺物としては、Ⅰ期～Ⅲ期の山茶椀が主体を占めている。時期は北西部の遺構群と同じ、12世紀中葉～13世紀前半に求めることができる。

北東部の遺構集中箇所では、12棟の掘立柱建物跡の存在が判明した。また、SR-1からのびる２基の石組み溝の存在も注目できる。その一つはSD-18である。この溝はSR-1から直線的に北方にのびてSF-11につながる。もう一つはSD-19で、この溝はSR-1から東方に直線的にのびた後、直角に北へ折れ曲がり、SF-14へと続いている。この２条の溝は、自然流路から土坑に水を導き入れる施設と考えられる。なお、SF-14には上屋が存在していたようである。これらの遺構やその周辺からはⅠ期～Ⅲ期の山茶椀を中心とした遺物が出土している。また、SR-1から出土した山茶椀の中には墨書が認められるものもあった。

次に、自然流路SR-1を挟んだ南側の集落域をみることにする。まず、南西部では14棟の掘立柱建物跡を調査した。ただし、先述した３カ所の遺構集中箇所に比べると掘立柱建物跡は散在的である。このうち、SH-34～37はSD-29によって西と南を区画されている。南西部の遺構集中箇所において、特筆すべきものとしては、５基の土坑群で構成される遺構群があげられる。この５基の土坑はSF-16を中心に東西南北それぞれの方向に土坑が配置され、「十」文字に並ぶ。各土坑の底面には円礫が敷き詰められ、SF-17～19は中央部に灰釉陶器の長頸瓶も据えられていた。長頸瓶は土師器の坏身で蓋をされていたようである。この５基の土坑群は、その特徴から地鎮祭祀に関わる遺構である可能性を指摘された（註３）。この土坑群を含めた南西部の遺構群では折戸53号窯式～東山72号窯式併行期の灰釉陶器、Ⅰ期～Ⅲ期の山茶椀を出土している。時期的には11世紀代、12世紀中葉～13世紀前半に位置づけられる。

次に、南側中央部と南東部、東端部の遺構群である。南側中央部では６棟、南東部では３棟の掘立柱建物跡、東端部では１棟の掘立柱建物跡をそれぞれ検出した。南側中央部と南東部では、柱穴や周囲から折戸53号窯式併行期～東山72号窯式併行期の灰釉陶器を中心とした遺物が出土し、概ね11世紀代の掘立柱建物跡と捉えられる。

この他にも、この時期の遺構を検出した調査区はある。また、上述した遺構群については残存状況による見かけ上の偏在である可能性があることを断っておく。一例として、調査区南半部の中央部である15区では、耕作による撹乱が著しく深く、遺構の検出には至らなかった。しかし、山茶椀等の遺物は表土中から多数出土している。遺構の広がりを確認できなかったこのような調査区でも、本来的には集落跡が広がっていた可能性を指摘できる。以下、上述した遺構群の順で調査の成果について記す。

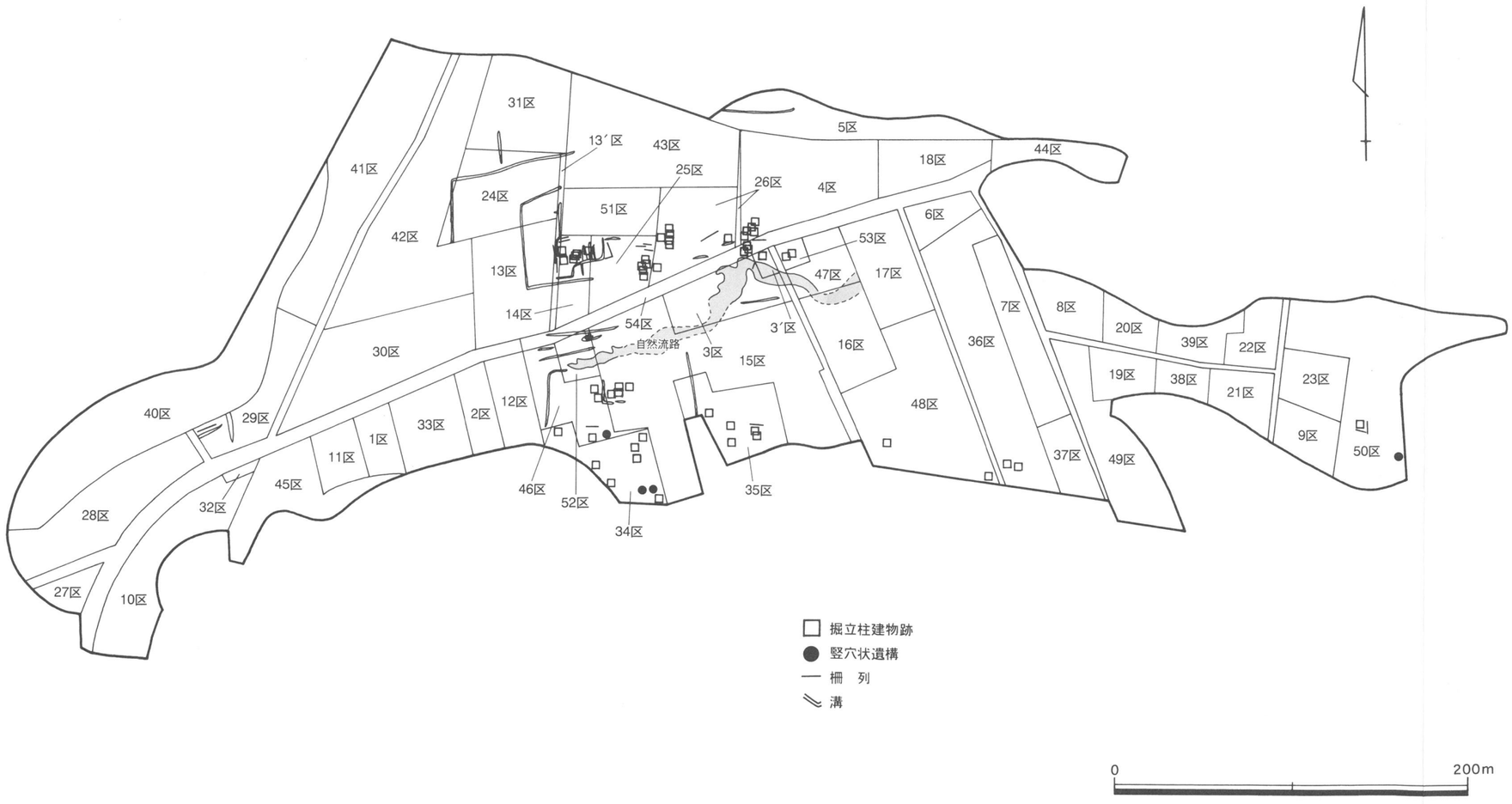


図10　ミョウガ原遺跡Ｏ地点平安～鎌倉時代の遺構概略図（1/3,000）

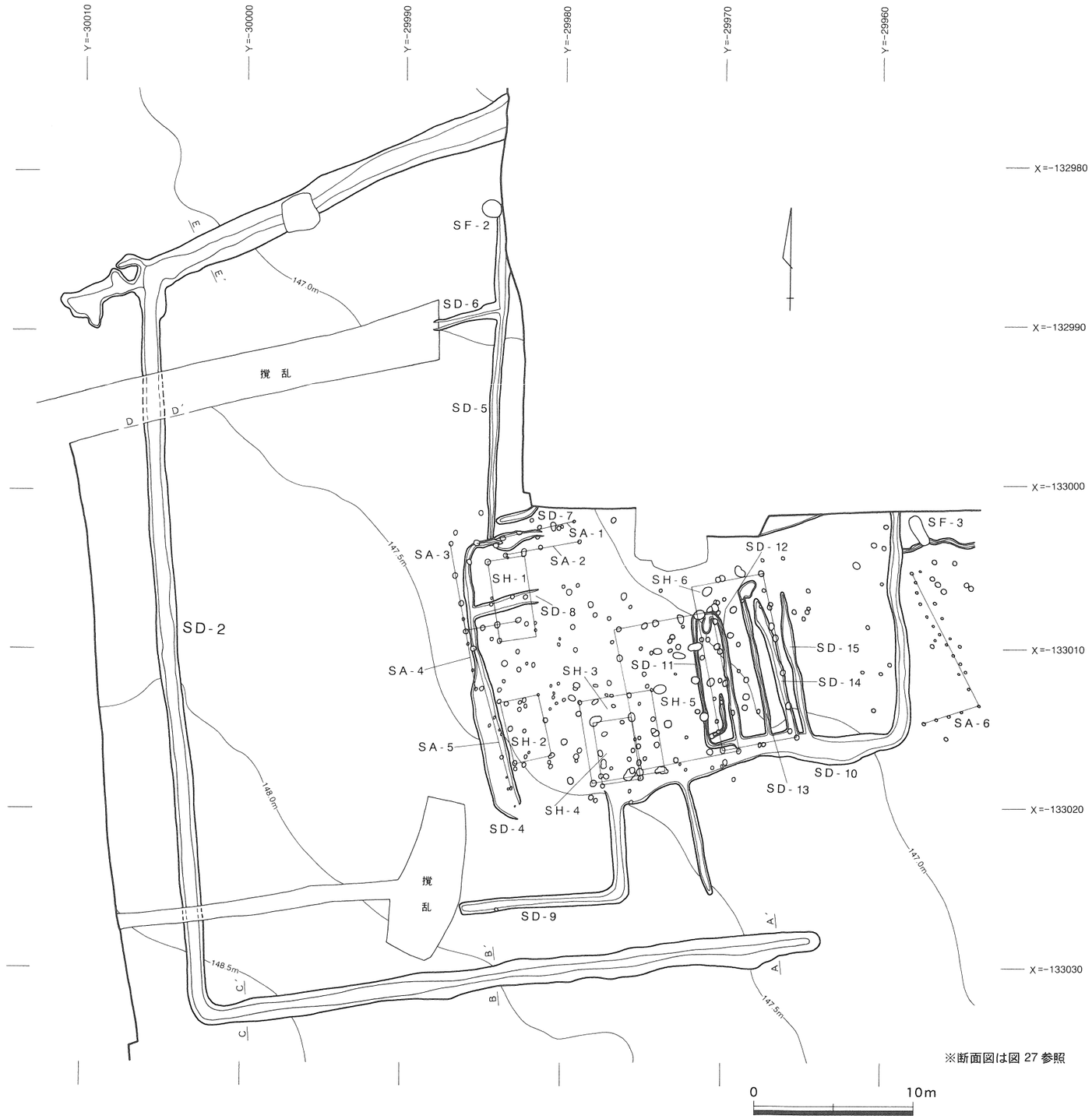


図11　調査区北西部の遺構群（1/300）

２．北西部の遺構群

(1)　掘立柱建物跡

①　SH-1（図12）

SH-1は平成12年度の調査において13区で検出した東西１間、南北２間の掘立柱建物跡である。規模は梁行2.7m、桁行5.4m、桁行方位はN-8°-Wである。柱穴間距離は桁間が2.2m～2.4m、梁間が2.2～2.6mである。柱穴規模は直径15～35cm、深さ５～15cmである（註４）。P-1とP-3の間にあるP-2は間柱と考えられる。柱穴からの出土遺物はなかった。なお、この建物跡の周囲にはSA-1～3（図22・23）があり、その他にも多数の柱穴がある。柵と捉えた柱穴やその他の柱穴はあるいは掘立柱建物を構成する柱穴であった可能性もあるが、今回の調査では掘立柱建物跡として確認することはできなかった。ここでは、SH-1周辺に他にも掘立柱建物が存在した可能性を指摘しておく。

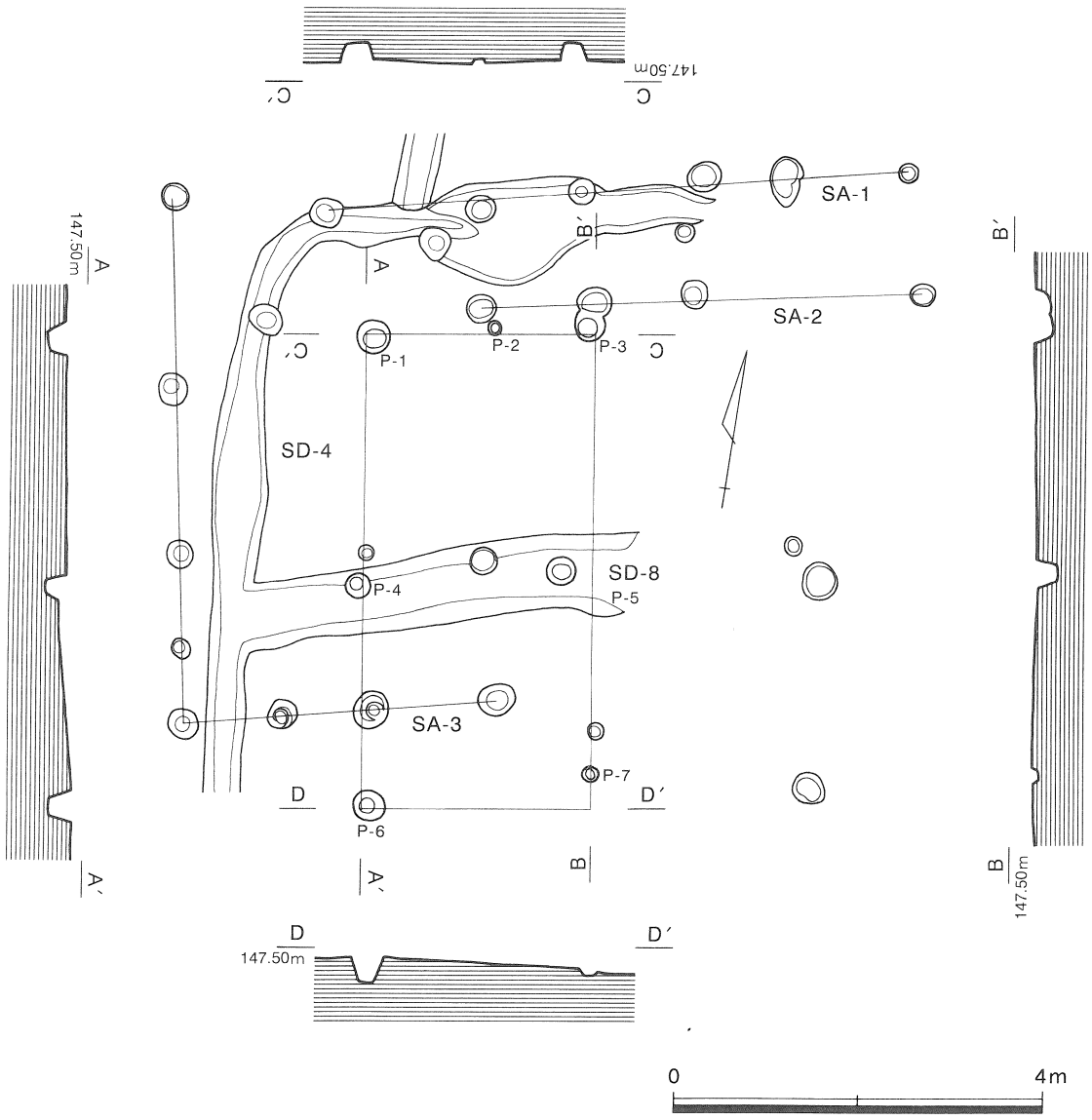


図12　SH-1実測図（1/80）

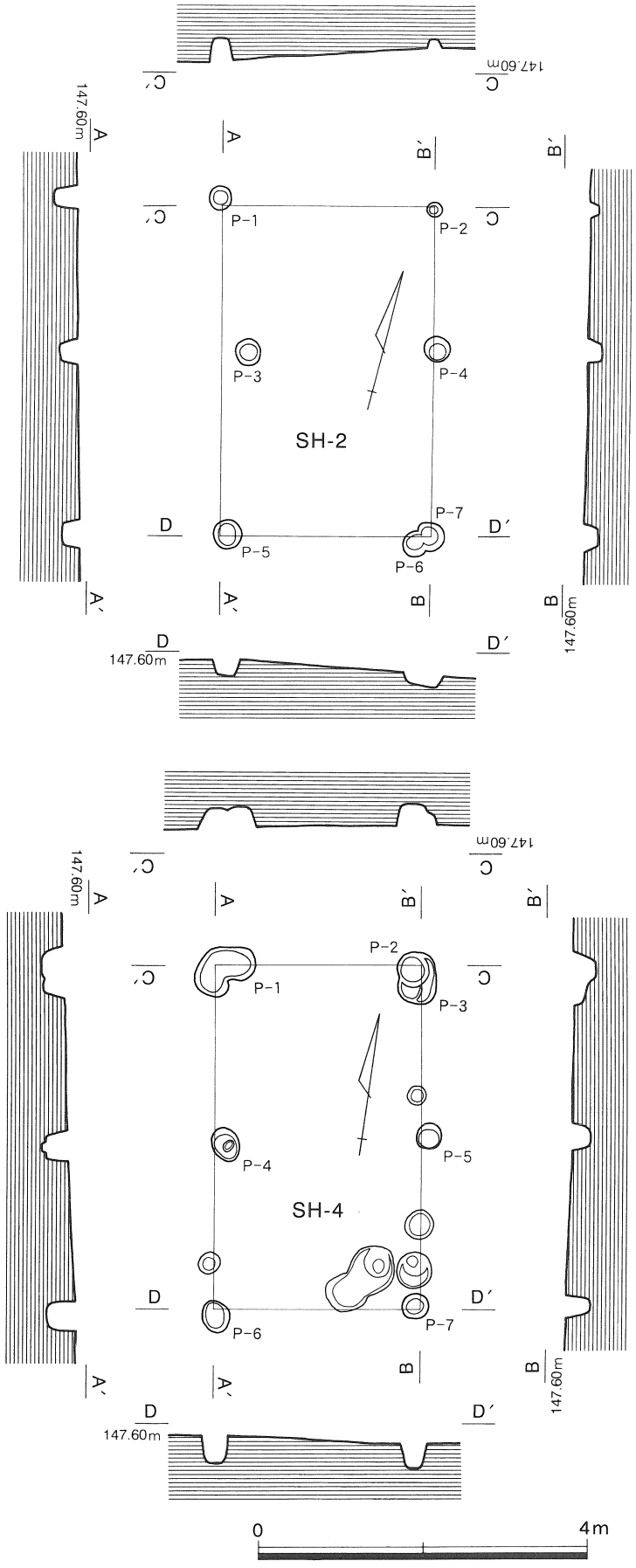


図13　SH-2・SH-4実測図（1/80）

② SH-2（図13上）

SH-2は東西１、南北２間の掘立柱建物跡である。平成12年度の調査において13区で検出した。規模は梁行が2.8m、桁行が4.3m、桁行方位はN-14°-Wである。柱穴間距離は桁間が2.2～2.6m、梁間が1.7～2.2mである。柱穴規模は直径20～35cm、深さ20～30cmである。柱穴からの出土遺物はなかった。SH-2の周辺にもSH-1と同様に他にも掘立柱建物跡が存在した可能性がある。

③ SH-3（図14）

SH-３は東西２間、南北２間の掘立柱建物跡である。平成10年度に14区で検出した。規模は東西4.8m、南北5.8mで、長辺はN-11°-Eに方位をとる。柱穴間距離は東西方向では1.9～2.6mである。おおよそ６尺５寸～７尺であるが、P-5・P-7のみ2.6mとやや広い。柱穴規模は直径20～40cm前後、深さ20～40cmである。柱穴のうち、P-9では底部に礫が据えられていた。遺物はP-1から山茶椀、P-7から小椀、P-8から小皿が出土している（図145－420～424）。

④ SH-4（図13下）

SH-４は東西１間、南北２間の掘立柱建物跡である。平成10年度に14区で検出した。規模は梁行2.9m、桁行4.7m、桁行方位はN-8°-Wである。柱穴間距離は桁間では2.4m、梁間はP-1・P-6が2.2mである以外は2.1mである。桁間８尺、梁間７尺といえる。柱穴規模は直径30～40cm程度、深さ30～40cm程度である。P-6からうかがえる柱の太さは直径15cm前後である。SH-4の各柱穴からの出土遺物は無かった。

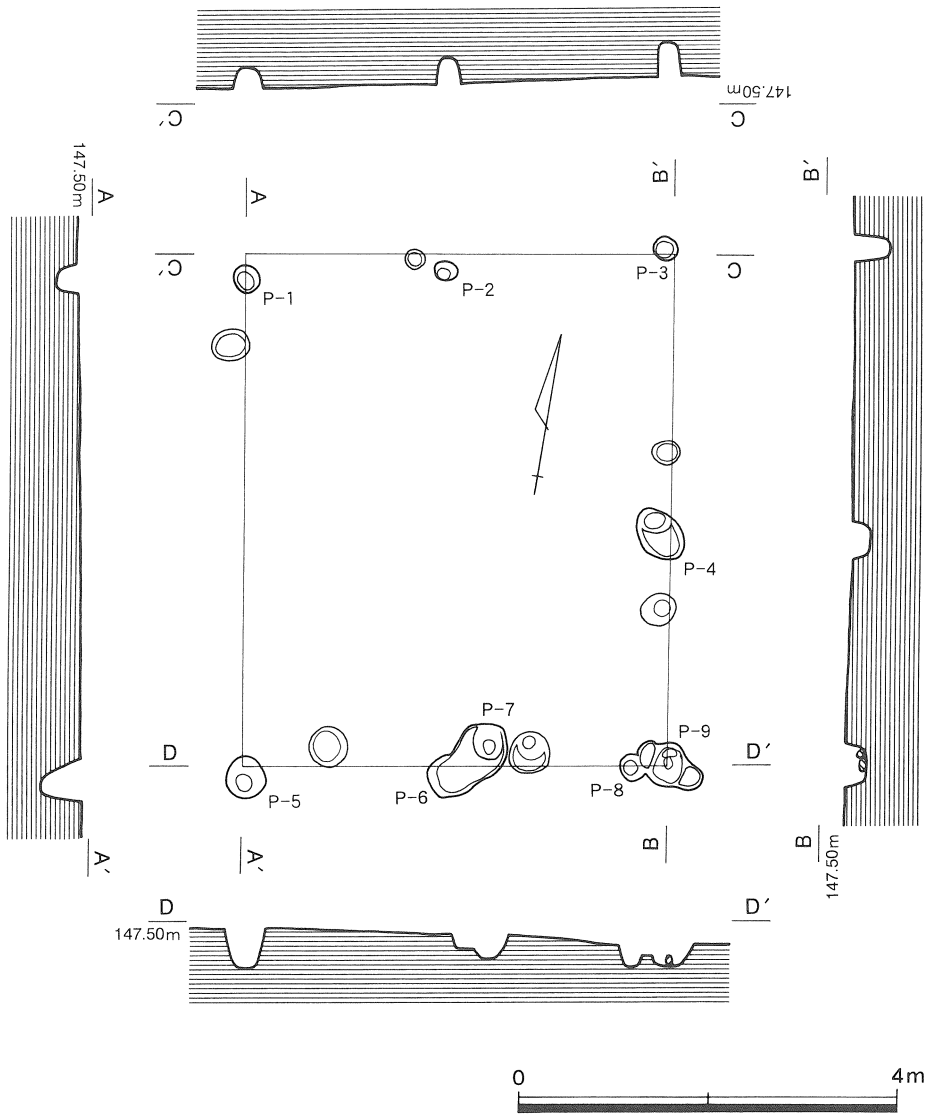


図14　SH-3実測図（1/80）

⑤　SH-5（図15～17）

SH－５は東西３間、南北４間の総柱建物跡で、平成12年度の調査で検出した遺構である。桁行方位はN-11°-W、規模は梁行6.7m、桁行9.6mとミョウガ原遺跡では最大規模を誇る建物跡である。柱穴間距離は桁間を見るとP-1・P-2間のように1.6mと狭いものや、P-7・P-8間のように2.4mと広いものもあるが、平均的には1.9～2.3mといえる。梁間も同様に多少の差異はあるが、平均的には1.9～2.3m程度といえる。柱穴規模は直径20～80cm、深さ20～40cmである。P-19やP-22からうかがえる柱の直径は15cm前後である。

この掘立柱建物跡ではP-3・P-8・P-12・P-13・P-14・P-16・P-21のように柱穴底部に礫が据えられていたものがある。また、P-7・P-16・P-17・P-22からは遺物が出土した（図145－425～430）。これらの遺物は立柱祭祀に関わるものと考えられる。出土した遺物は破片ではあるが、12世紀中葉～13世紀前半に位置づけられ、SH-5は13世紀前半に建てられた物であることがうかがえる。なお、この建物は更に西側に１間のび、東西４間、南北５間の総柱建物であった可能性も考えられる。ただし、調査では北西

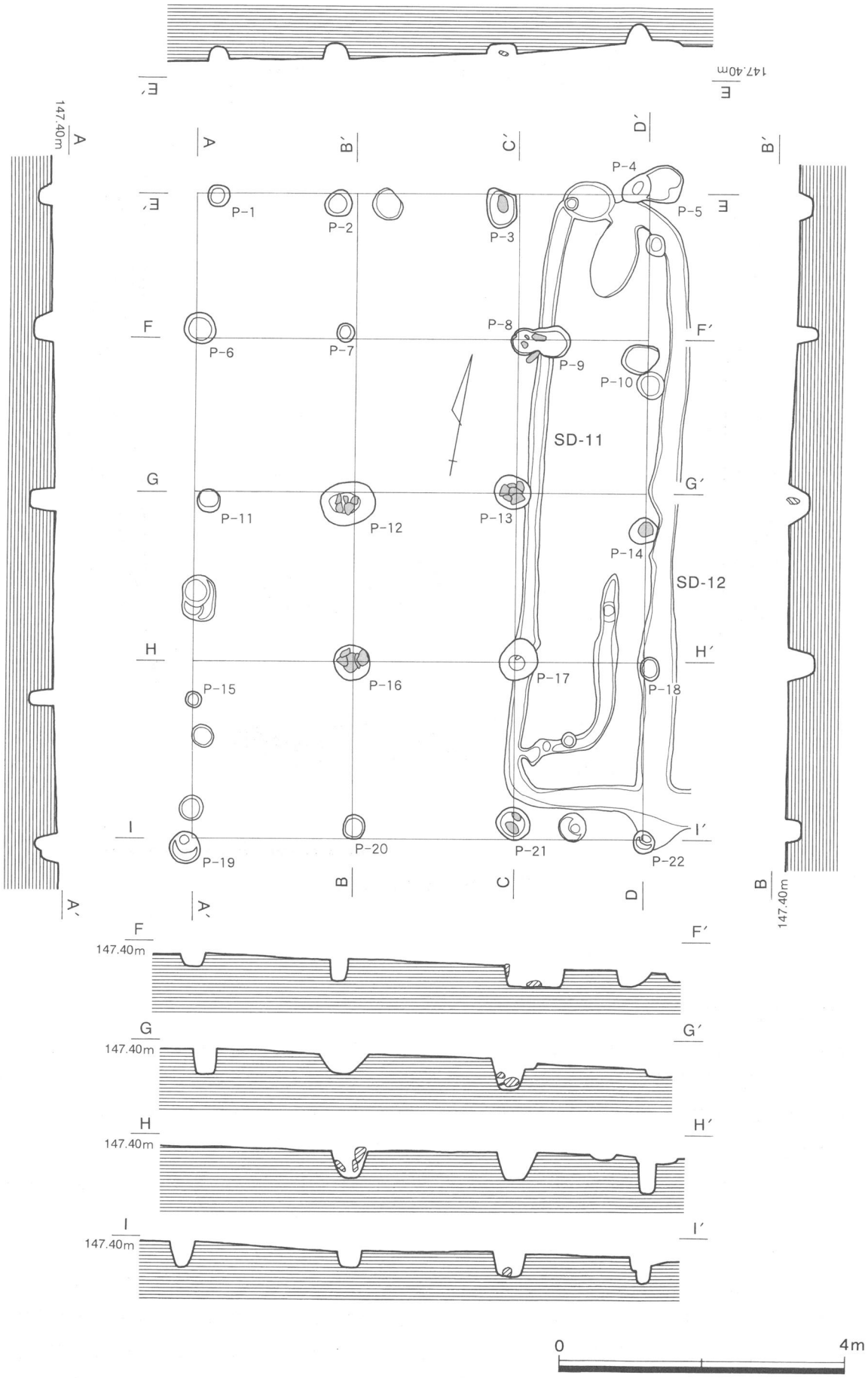


図15　SH-5実測図１（1/80）

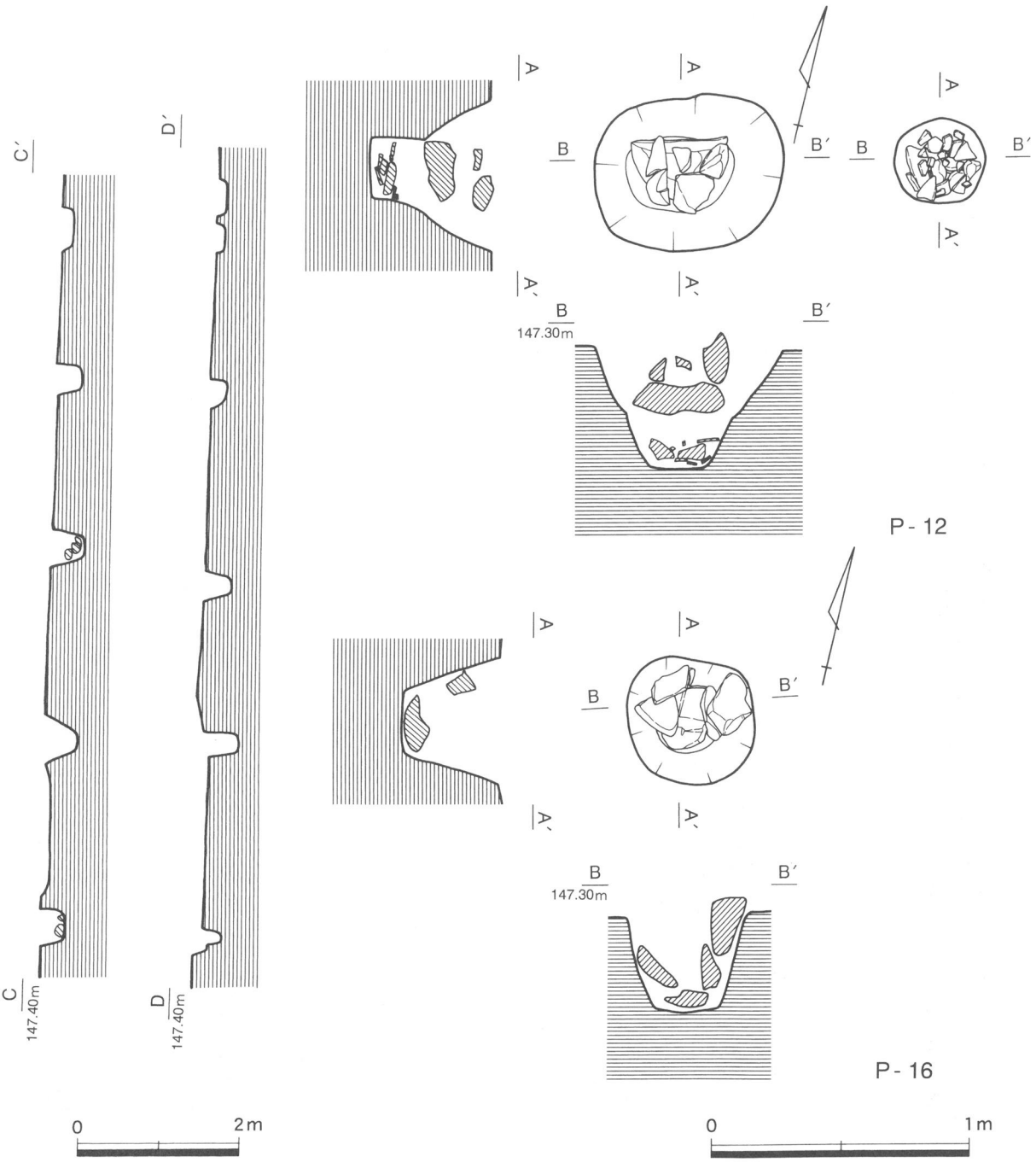


図16　SH-5実測図２（1/80）

図17　SH-5　P-12(上)・P-16(下)実測図（1/25）

部の柱穴を検出することができなかったため確証を得ることができなかった。そのため、ここでは東西３間、南北５間の建物に復原した（註５）。

SH-3、SH-4、SH-5はそれぞれ重複しているが、その前後関係を把握することはできなかった。ただし、その位置関係からこの３棟の建物は併存していたものでないことは明らかである。SH-3とSH-4は後述するSH-6と併存していた可能性がある。

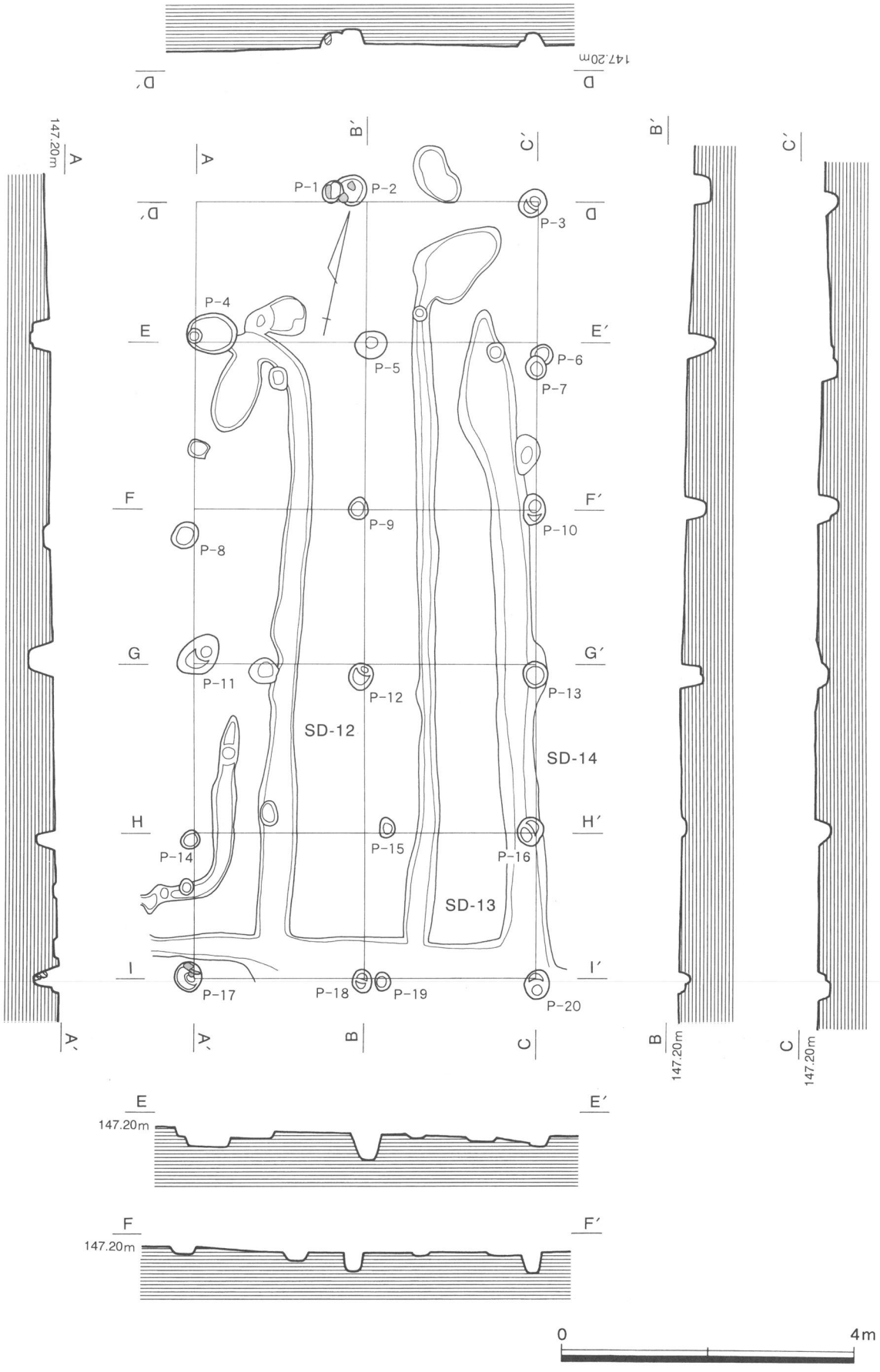


図18　SH-6実測図１（1/80）

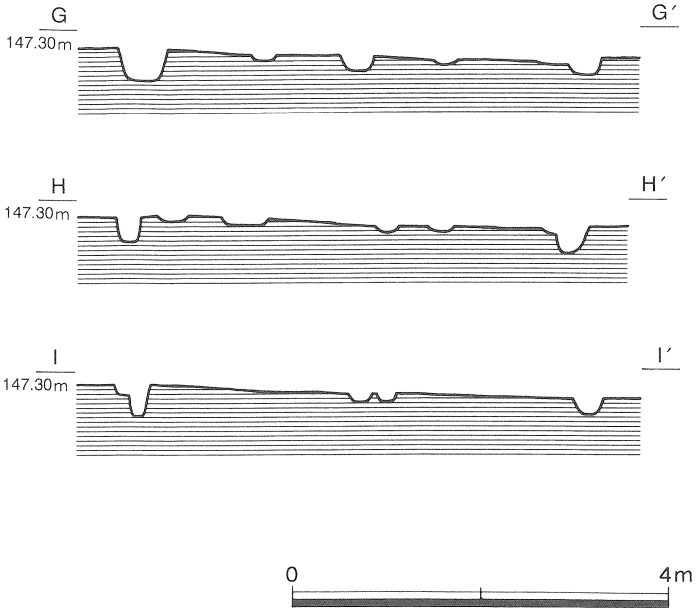


図19　SH-6実測図２（1/80）

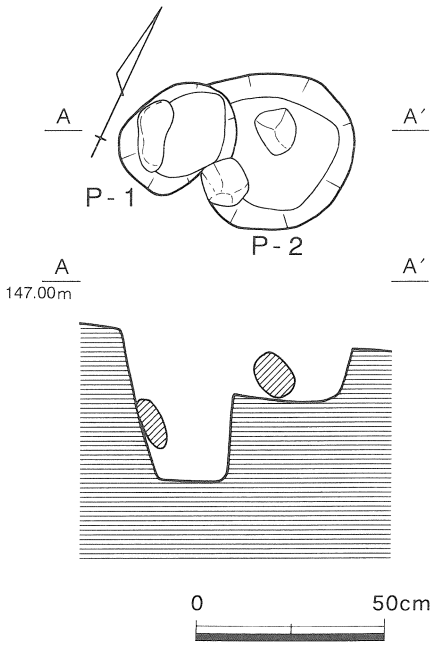


図20　SH-6　P-1・P-2実測図（1/20）

⑥　SH-6（図18～20）

SH-4は東西２間、南北５間の総柱建物跡である。平成10年度と平成11年度の調査で検出した。桁行方位はN-12°-Wで、規模は梁行5.1m、桁行11.2mである。柱穴間距離は桁間を見ると2.0～2.7mで、2.3m前後のものが多い。梁間は1.7～2.8mで、2.1m前後のものが多いといえる。柱穴規模は直径20～70cm、深さ10～40cmである。P-3・P-4・P-10～12・P-16～20からうかがえる柱の直径は15～20cm程度である。

この建物においても、P-1・P-2・P-11・P-17のように、柱穴内に礫が据えられていたものがある（図20）。P-6からは山茶椀の破片が出土遺物したが、体部の細片であるため時期は特定し難い。周囲から出土した遺物から考えると、12世紀中葉～13世紀前半の建物と捉えられる。SH-5とは重複するが、前後関係については明らかにすることはできなかった。

⑵　柵跡

①　SA-1（図12・21）

SA-1はSH-1の北側で検出した遺構である。６基のピットが並び、その方位はN-79°-E、長さは6.6mである。ピットの規模は直径25～40cm、深さ15～25cmである。ピットからの出土遺物は無かった。なお、SH-1の所でも述べたことであるが、本書では柵として捉えたSA-1は、本来的には掘立柱建物を構成する柱列であった可能性もある。時期はSH-1をはじめとする周囲の遺構と同時期で、12世紀中葉～13世紀前半と考えられる遺構である。

②　SA-2（図12・21）

SA-2はSH-1の北側で検出した遺構で、約1.3m北側にはSA-1が所在する。SA-2は４基のピットが東西に並び、その規模は5.2mである。ピットの規模は直径30～40cm、深さ10～20cmである。各ピットからの出土遺物はなかった。この遺構もSH-1と同様に掘立柱建物の一部であった可能性がある。なお、SA-2のP-1、P-2、P-3、P-4とSA-1のP-2・P-3、P-4、P-6がそれぞれ対応した位置に存在することも注目できる。あるいは一連の遺構であった可能性もあるが、ここではそれぞれ別個の遺構として捉えた。

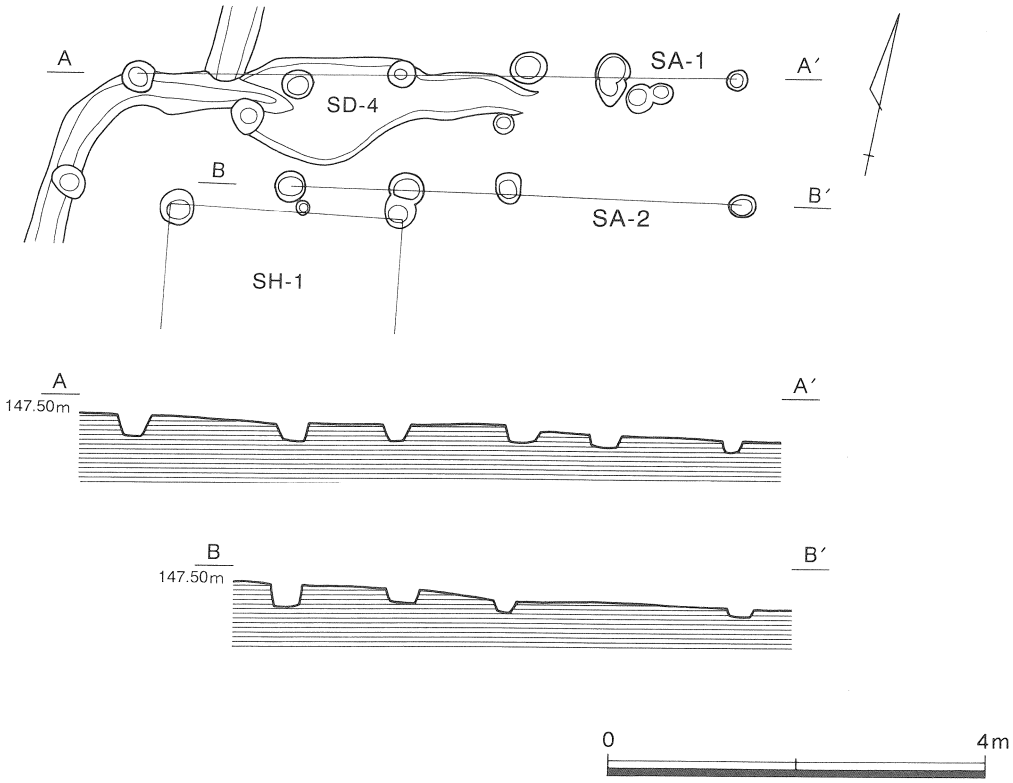


図21　SA-1・SA-2実測図（1/80）

③　SA-3（図12・22左）

SA-3は一部がSH-1と重複する遺構である。南北方向に４基のピットが並び、この南端部の東側の直交方向に４基のピットが並ぶ遺構である。規模は東西3.8m、南北6.0mである。東西方向では約1.0～1.3m、南北方向では約1.9～2.0mの間隔でピットが並ぶ。ピットの規模は直径30～40cm、深さ10～40cmであり、出土遺物はなかった。この遺構も先述したSA-1やSA-2と同様に掘立柱建物を構成する遺構の一部であった可能性がある。

④　SA-4（図22右）

SA-4は一部がSA-3、SA-5と重複する遺構である。４基のピットが並び、その方位はN-1°-W、規模は4.8mである。ピットは直径20cm前後、深さ10～20cmの大きさである。SA-3あるいはSA-5と一連の遺構の可能性もあるが、他よりもピットの直径が一回り小さいため、別の遺構と捉えた。なお、各ピットからの出土遺物はなかった。

⑤　SA-5（図23）

SA-5は一部がSA-4と重複する遺構である。７基のピットがN-15°-Wに並ぶ。その規模は9.6mである。ピットの直径は20～40cm、深さ10～20cmで、出土遺物は無かった。

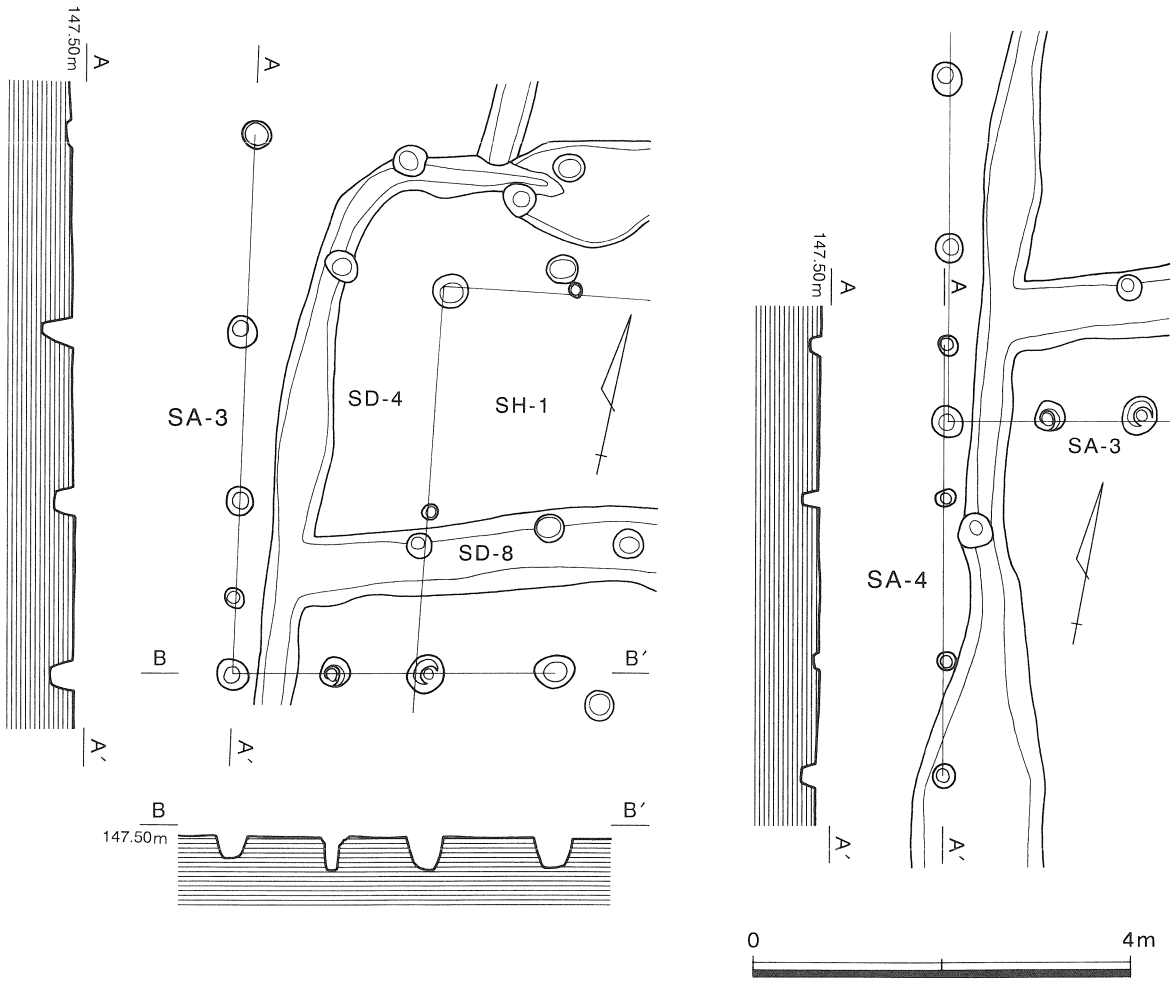


図22　SA-3(左)・SA-4(右)実測図（1/80）

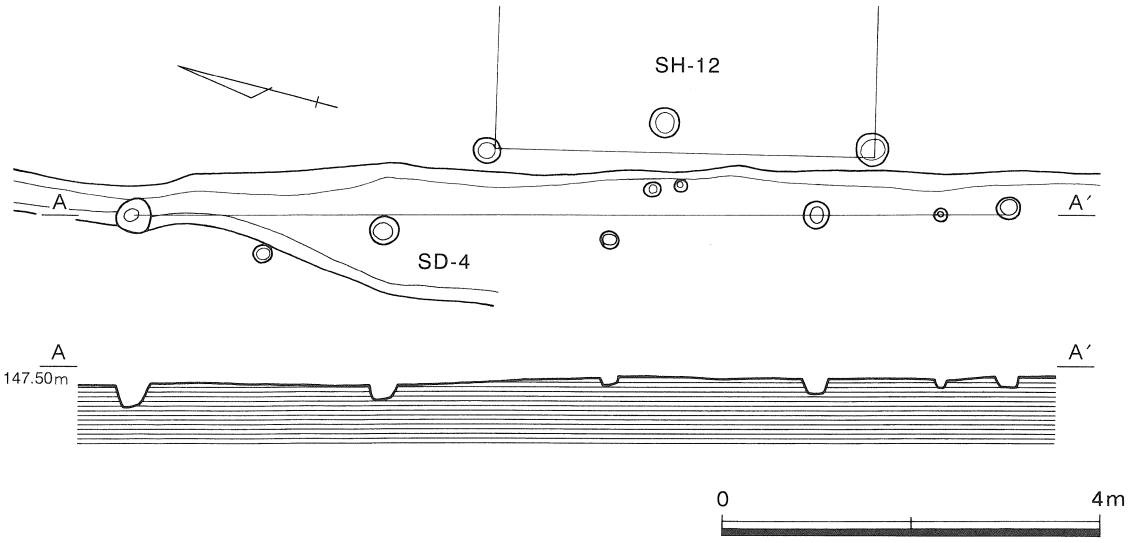


図23　SA-5実測図（1/80）

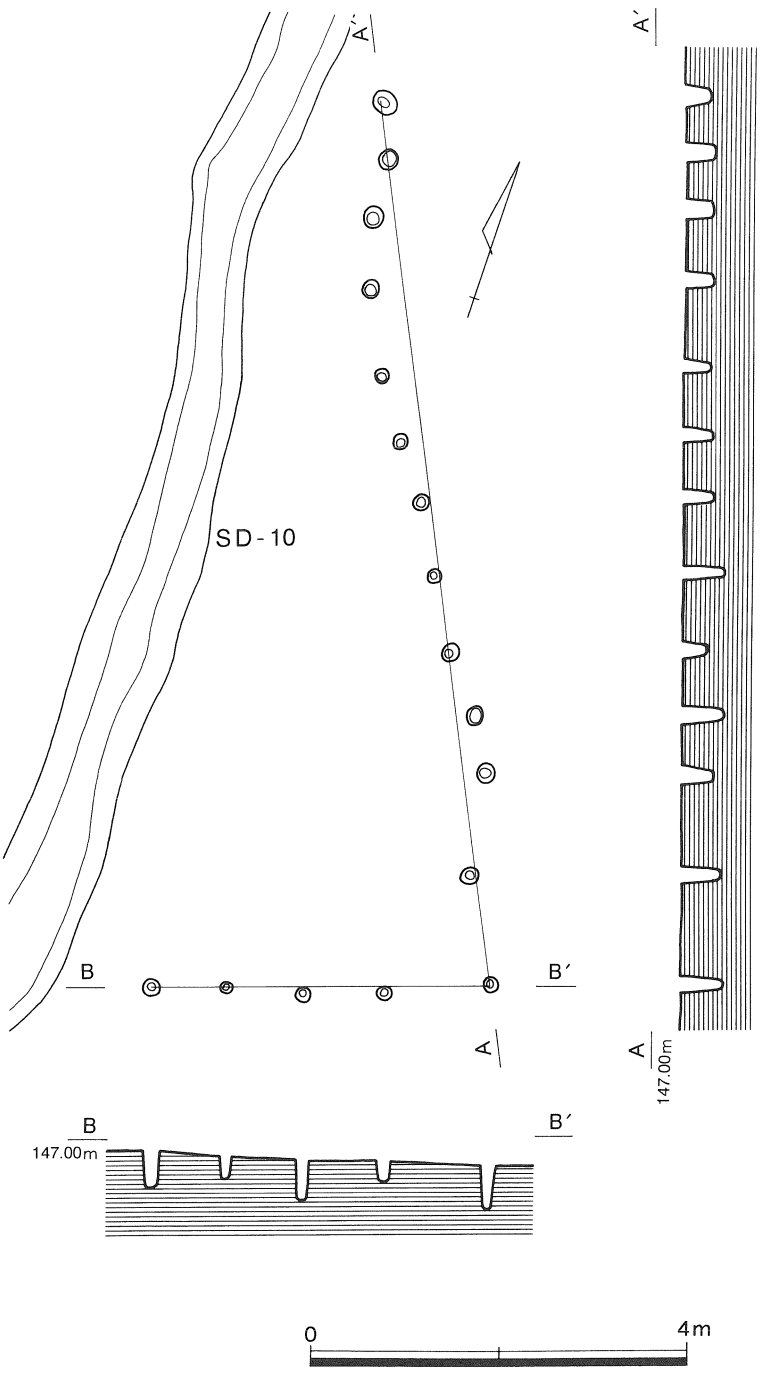


図24　SA-6実測図（1/80）

⑥　SA-6（図24）

SA-6はSH-6から約7.7m東に所在し、平成11年度の調査で検出した。この遺構は「L」字状に合計17基のピットが並ぶ。規模は東西3.8m、南北9.6mである。東西は約0.8～1.0m、南北は概ね60～80cmの間隔でピットが並ぶ。各ピットは直径10～20cm、深さ20～50cmである。ここで注目できるのは、東西に並ぶ5基のピットは深さが深い物と、浅い物が交互に並ぶことである。この様子は南北に並ぶピットの一部でもうかがえる。さて、この遺構は調査区北西部における遺構群の東端部に位置する遺構として位置づけられる。この柵と後述するSD-2によりSH-1～6の掘立柱建物跡とその周辺の柱穴は取り囲まれている状況にある。SA-6は調査区北西の住居跡群を区画する遺構と考えられる。なお、ピットから遺物は出土しなかった。

(3)　溝状遺構

①　SD-1（図25・26）

SD-1は24区を中心として検出した「L」字状の溝である。平成11年度と12年度の調査で検出した遺構である。検出できた規模は南北が約32m、東西が73mである。南北については、南方向に更に続くと考えられるが、後世の撹乱が著しく検出することはできなかった。東西方向をみると、東側は徐々に浅くなり消滅していた。後述するSD-2の状況を勘案すると、これ以上には続かない可能性も十分考えられる。深さは北西隅が最も深く0.4m、ここから南や東へ向い徐々に浅くなる。東端部では0.1mに満たない深さであった。

遺物出土状況　遺物は山茶椀や甕が出土した（図139－311～321）。特に、東西方向の東端付近からは甕の破片が集中して出土した。遺構の東端部から出土した遺物はいずれも底面からの出土であり、遺構の時期を示すものといえる。ここから出土した山茶椀はⅡ期～Ⅲ期に位置づけられ、甕も12世紀代に位置づけられる。そのため、SD-1は12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。

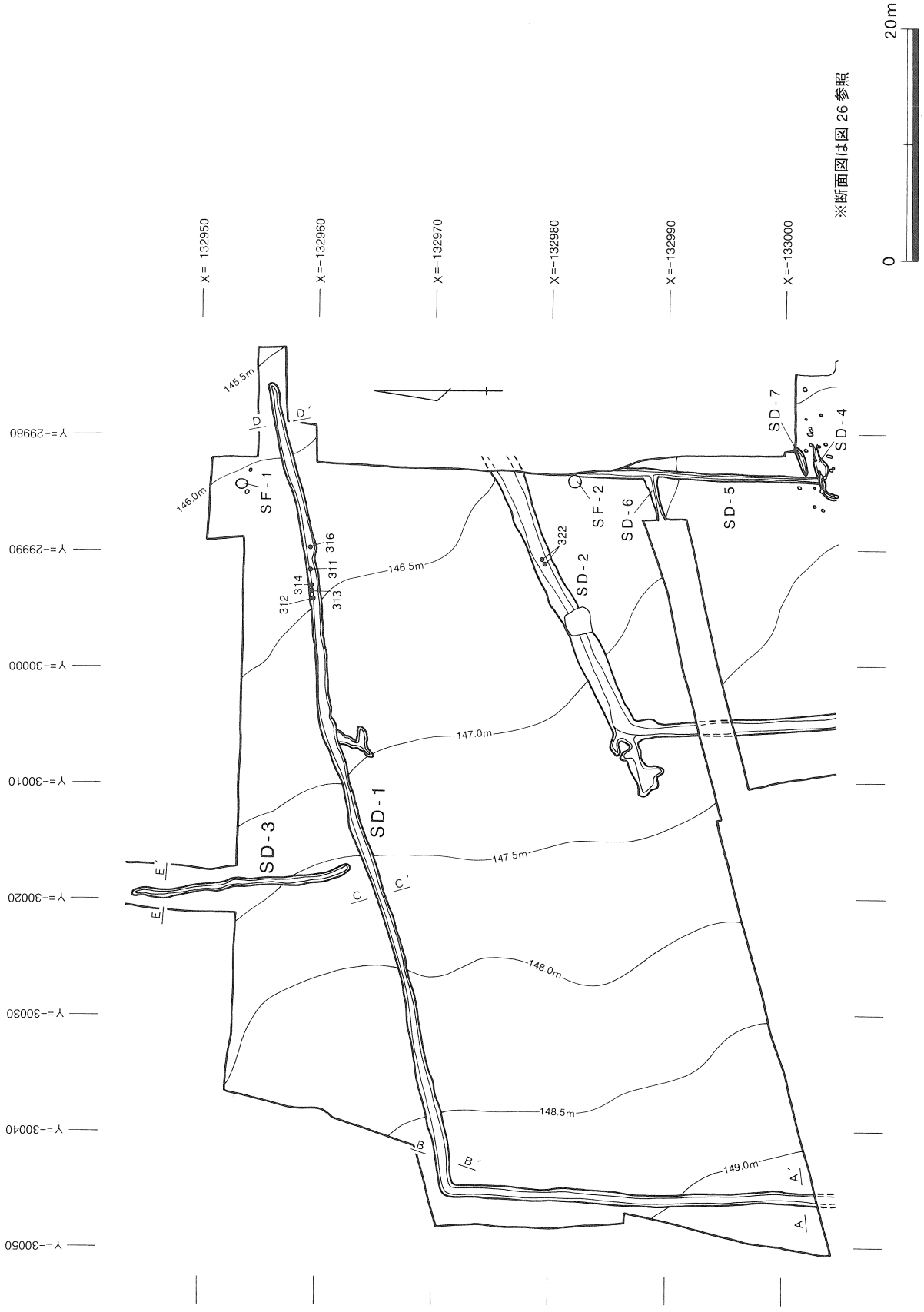


図25　SD-1・SD-2北辺・西辺・SD-3全体図（1/500）

② SD-2（図25・27）

SD-2は13区を中心として、24区、14区、25区と広範囲に渡る遺構である。SD-2は「コ」字状の平面形を持つ溝で、平成10～12年度の調査で検出した。東西は北辺が26m、南辺が40m、南北は西辺が43mであった。南辺は25区で完結している。北辺は更に東へのびる可能性もあるが、撹乱が深くまで入り込み不明である。おそらく、南辺と同程度はのびるであろう。深さは南辺の東端部が最も深く、約0.7mである。南辺における深さは、ほぼ保たれ、南西隅では0.6mである。西辺は北に向い徐々に浅くなり、北西隅では0.3mの深さである。北辺は平均して0.2m程度の深さである。

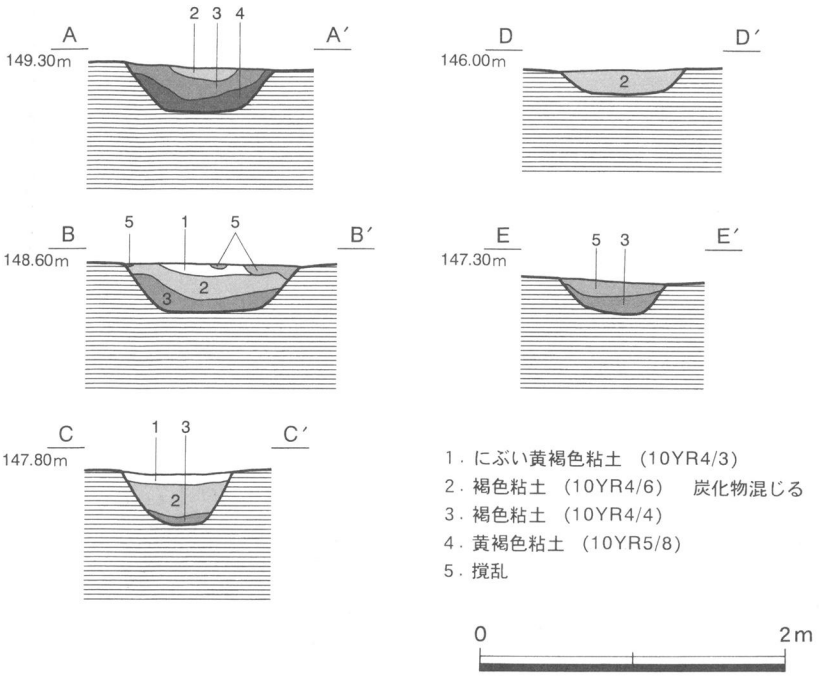


図26 SD-1・SD-3土層断面図 (1/50)

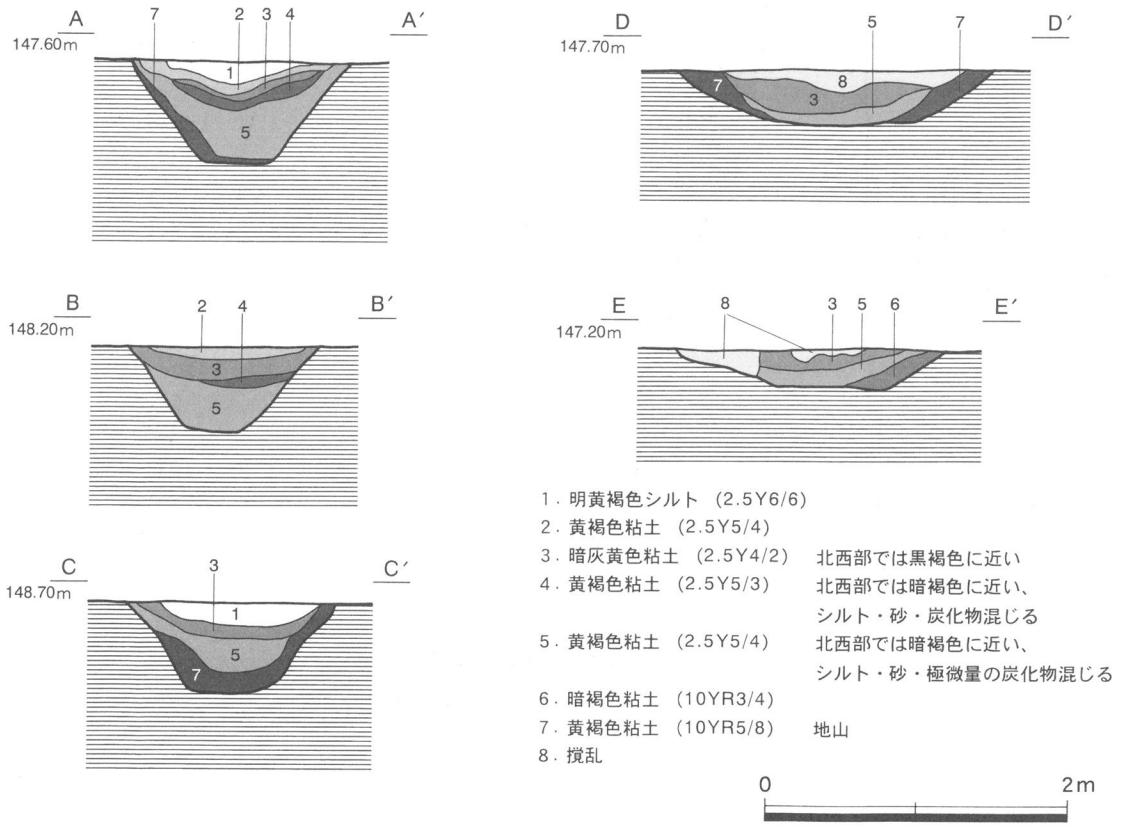


図27 SD-2土層断面図 (1/50)

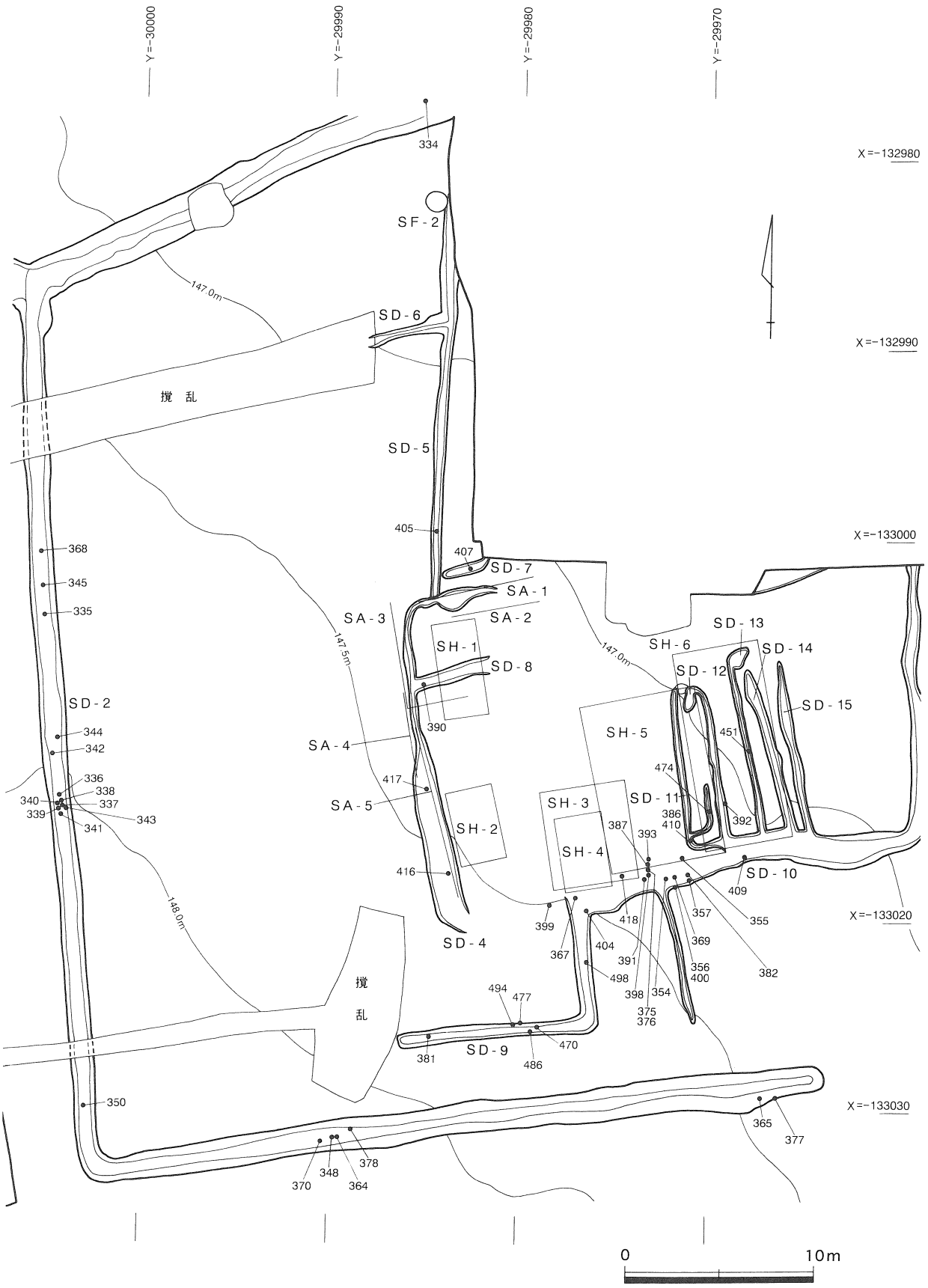


図28　調査区北西部の掘立柱建物群（1/300）

遺物の出土状況　遺物は遺構底面や覆土から出土した。出土したのは山茶椀が主体であるが、渥美産の甕や少量ではあるが灰釉陶器、青磁・白磁も出土した（図140～142）。遺物量は西辺が最も多く、特に南西隅付近からは集中して出土した。また、南辺からの出土遺物も多かった。これに比べると、北辺からの出土遺物はやや少ない。山茶椀はⅠ期～Ⅲ期－１のもので、12世紀後中葉～13世紀前半に位置づけられる。底面から出土している山茶椀の中ではⅢ期が最も新しい時期に位置づけられ、SD-2の廃絶年代としては13世紀前半と言える。

③　SD-3（図25・26）

SD-3はSD-1北辺ほぼ中央の北方約1.2mに存在し、南北方向に走る溝である。平成11年度の調査で検出した。検出できた長さは8.5mである。深さは最深部で0.1mと浅い物であった。出土遺物はなかったが、最下層の覆土がSD-1の覆土と近似することから、SD-1と近い時期の遺構と考えられる。

④　SD-4～16（図25・28）

SD-4～16はSH-1～6付近で検出した溝である。平成10～12年度の調査で検出した。いずれも極浅い溝で、深さは0.05～0.1m程度である。また、切り合い等も不明であり、新旧の判断はつけられない。ただし、覆土が似ていることから、いずれもほぼ同時期のものと考えられる。これらの溝は、雨水等を処理し流すための溝、あるいは雨水等の流れにより形成されたものと考えられる。

遺物出土状況　遺物は各溝から、山茶椀等が出土した（図143・144）。特に、SD-9・10は出土量が多かった。これらの溝から出土した山茶椀はⅠ期～Ⅲ期に位置づけられる。このことから、溝の廃絶時期としては13世紀前半と考えられる。

⑷　土　坑

①　SF-1（図29左）

SF-1は平成12年度の調査で検出した土坑で、SD-1東端付近の北側約4.0mに所在する。円形の平面形を持ち、直径1.0m、深さ0.1mである。土坑底部には炭化物が多く、敷きつめられたかのようであった。ただし、壁面や底面に火をうけたような痕跡はなかった。

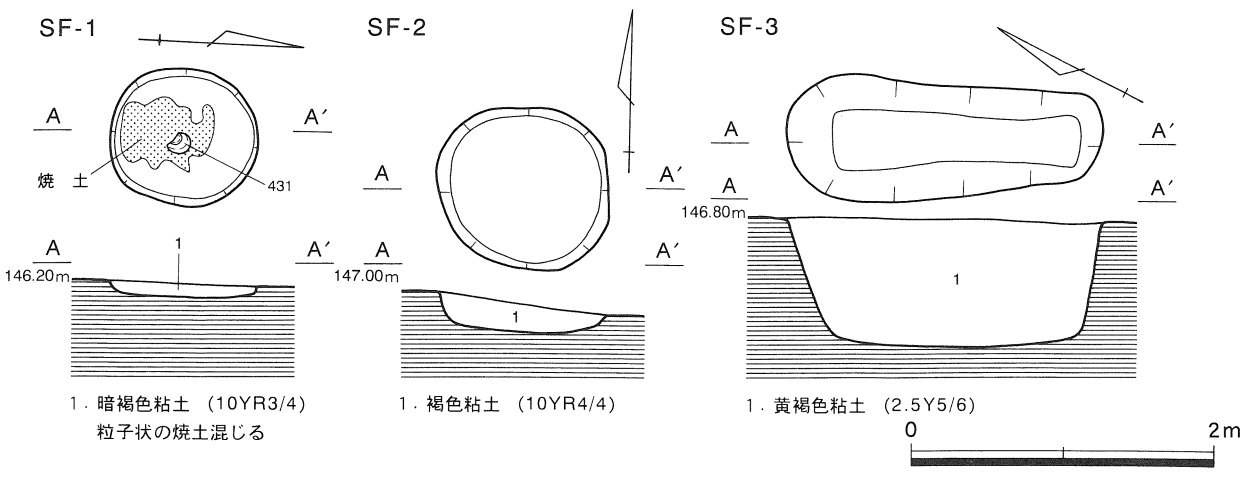


図29　SF-1～3実測図（1/50）

土坑底面からは山茶椀の椀と甕が出土した（図146－431・432）。このうち、431の山茶椀は底面からふせた状況で出土した。この山茶椀はⅡ期に位置づけられ、SF-1の時期は12世紀後半に求めることができる。

② SF-2（図29中）

SF-2はSD-2北辺の東端部に近い地点で平成12年度の調査で検出した土坑である。SD-1からは南に3.2mの位置に所在する。円形の平面形をとり、直径は1.2m、深さ0.2cmである。遺物は出土しなかったため、時期を特定することはできない。ただし、覆土の様子や周囲の出土遺物から、SF-2は12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。

③ SF-3（図29右）

SF-3はSA-1の北東約1.8mで、平成11年度の調査で検出した土坑である。平面形は隅丸長方形で、長辺は2.1m、短辺は0.8m、深さは0.9mである。遺物は山茶椀と小椀の細片が出土したが、いずれも図示し得るものではなかった。山茶椀の椀と小椀がⅡ期～Ⅲ期に位置づけられることから、SF-3は12世紀後半～13世紀前半の遺構と考えられる。

３．北側中央部の遺構群

(1) 掘立柱建物跡

① SH-7（図30）

SH-7は平成11年度の調査で検出した、東西１間、南北３間の掘立柱建物跡で、桁行方位はN-4°-Wである。規模は桁行6.4m、梁行3.1m、柱穴間距離は梁間1.85～2.0m、桁間2.6～3.0mである。柱穴は直径20～30cm、深さ10～30cmの規模である。柱穴から出土遺物はなかったが、周囲の出土遺物から12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。なお、西側の柱穴はいずれも2.0m間隔で並び、北側の延長線上2.0mの所にも柱穴がある。あるいはSH-7は更に北側に１間広がる可能性もある。なお、北側中央部の掘立柱建物群では、SH-7のように桁行３間、梁行１間の掘立柱建物跡が多いことも特徴である。

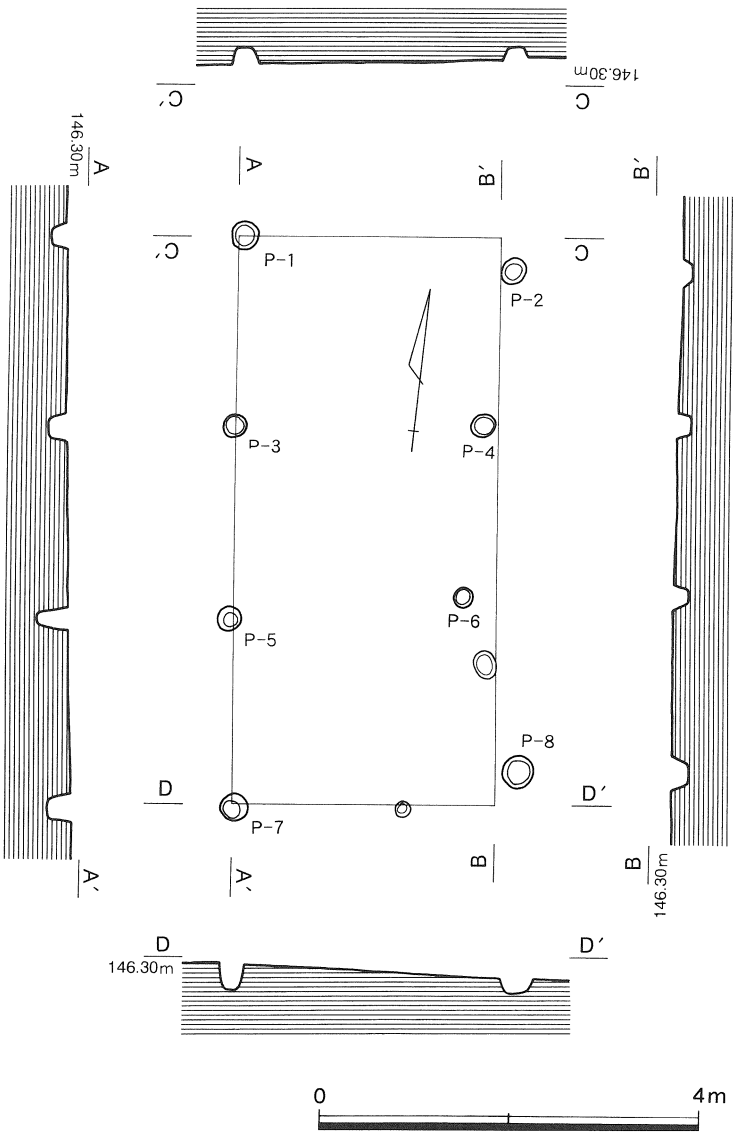


図30　SH-7実測図（1/80）

② SH-8（図32左）

SH-8はSH-7の南西約2.5mに所在し、平成11年度の調査で検出した掘立柱建物跡である。東西１間、南北２間で、桁行方位はN-7°-Wである。

※断面図は図 55 参照

図31　調査区北側中央部の遺構群（1/400）

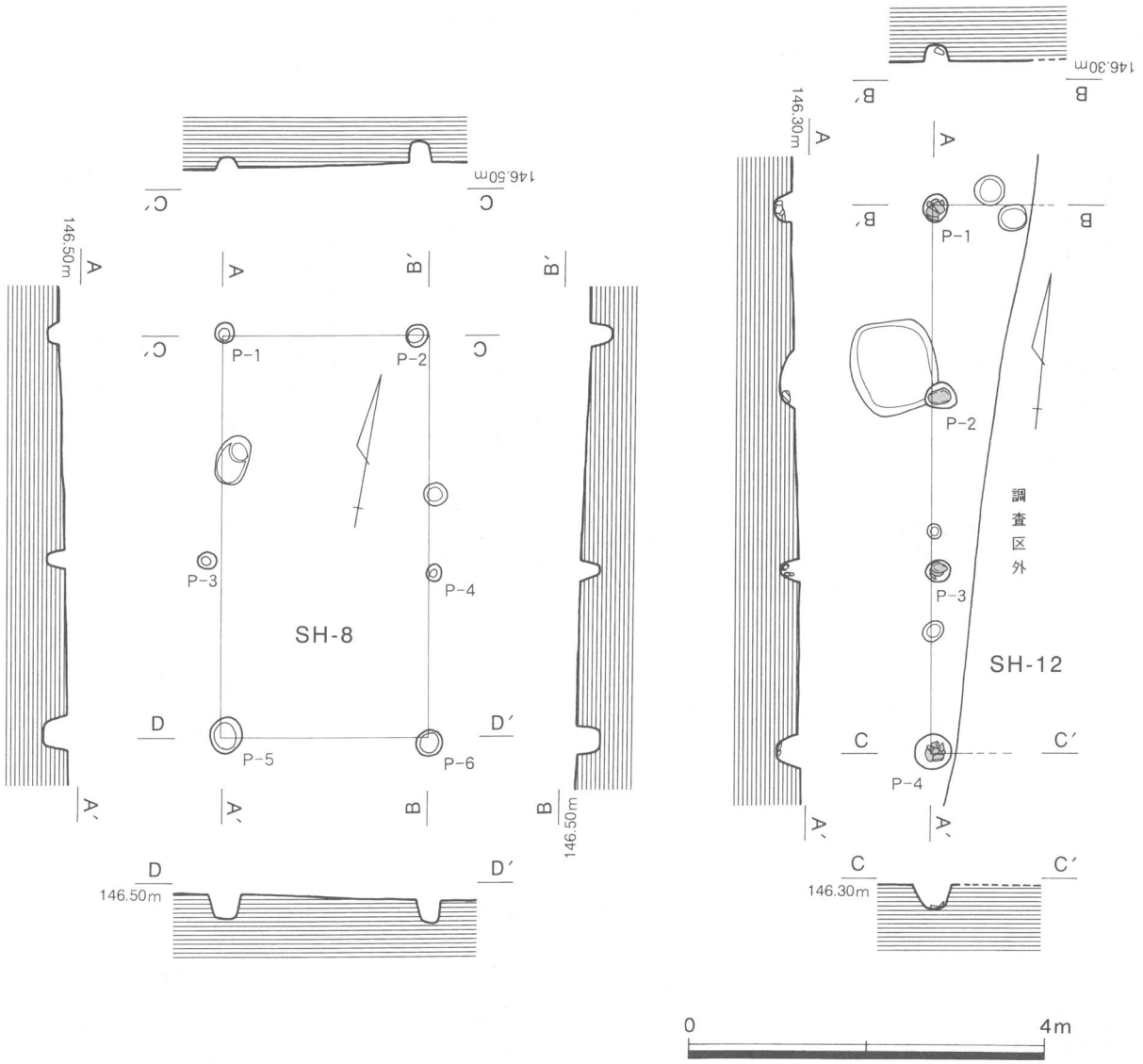


図32　SH-8(左)・SH-12(右)実測図（1/80）

規模は梁行2.6m、桁行4.8mである。柱穴間距離は桁間2.2～2.5m、梁間2.0～2.6mである。柱穴規模は20～35cm、深さ10～30cmである。柱穴からの出土遺物がないため、時期を特定することはできないが、柱穴覆土や周囲の出土遺物の様子から、他の掘立柱建物跡と同様に12世紀中葉～13世紀前半のものと考えられる。

③　SH-9（図33上）

SH-9は東西３間、南北１間の掘立柱建物跡で、平成11年度の調査で検出した遺構である。SH-7の南方4.5m、SH-8の南方1.3mに所在する。北側中央部の遺構群における他の掘立柱建物が南北に桁行方位をとるのに対し、SH-9は東西にとり、桁行方位はN-88°-Eである。規模は梁行2.2m、桁行3.2mである。柱穴間距離をみると、梁間は概ね1.7m程度であるが、P-7・P-8間が1.1mと狭く、P-5・P-6間が2.1mと広い。桁間は1.9～2.05mである。柱穴の規模は直径20～35cm、深さ15～25cmである。柱穴から遺物は出土しなかったため、時期を断定することはできないが、周囲の掘立柱建物跡同様の12世紀中葉～13世紀前半のものと考えられる。

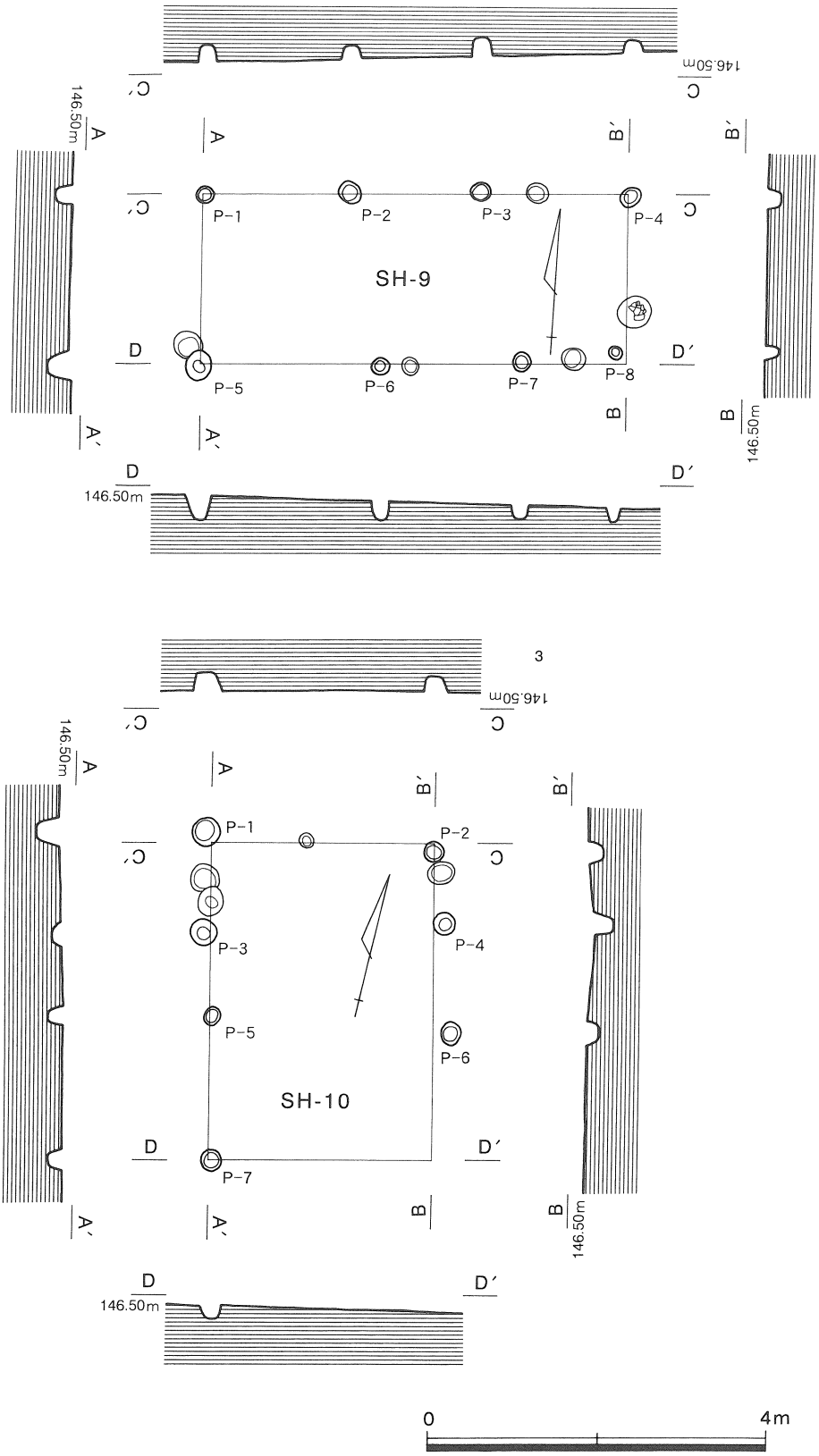


図33　SH-9(上)・SH-10(下)実測図（1/80）

④　SH-10（図33下）

SH-10は一部がSH-9の南西部分と重複する掘立柱建物跡である。平成11年度の調査で検出した。東西１間、南北２間、桁行方位はN-14°-Wである。規模は桁行4.2m、梁行3.0mである。P-3とP-4は間柱と考えられる。柱穴間距離は桁間が2.7～2.8m、梁間が1.7～2.1mである。柱穴規模は直径20～30cm、深さ15～20cmである。

柱穴からの出土遺物はなかったが、これも他の掘立柱建物と同様に12世紀中葉～13世紀前半のものと考えられる。

⑤　SH-11（図34）

SH-11は平成11年度に検出した。25区と26区にまたがる遺構である。ただし、中央部は調査以前、側溝であり、非常に深い撹乱となっていた。そのため、全貌を把握することはできず、あるいは掘立柱建物跡ではない可能性もある。

SH-11は南北２間、東西１間で、桁行方位はN-2°-Wである。規模は梁行2.2m、桁行4.4mである。梁間は1.8～2.05m、桁間は1.9m前後と推定される。柱穴規模は直径20～40cm、深さ10～30cmである。

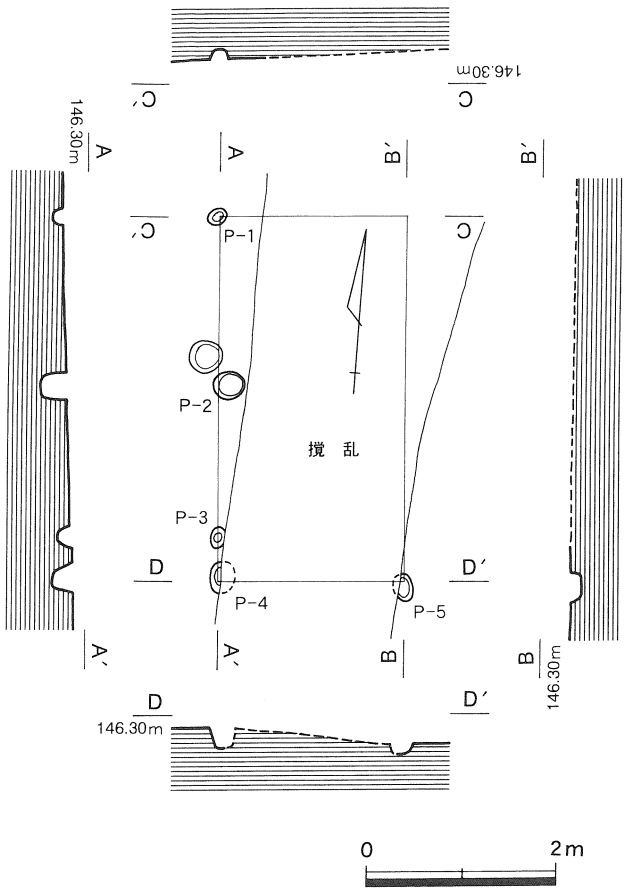


図34　SH-11実測図（1/80）

柱穴からの出土遺物はなかったが、他の掘立柱建物と同時期の12世紀中葉～13世紀前半のものと考えられる。

⑥　SH-12（図32右・36）

SH-12は平成11年度の調査において検出した遺構で、SH-8やSH-9、SH-12と一部が重複する。掘立柱建物跡であると断定はできないが、その可能性が高い柱穴群である。

直径30～40cm、深さ20～30cmの柱穴が6.4mの範囲に1.9～2.1mの間隔で並ぶ。この柱列の西側には対応する柱列が存在せず、東側に対応する柱列があると考えたい。なお、東隣の26区においては、この柱列と対応する遺構は検出されなかった。以上を勘案すると、SH-12は南北３間、東西１～２間の掘立柱建物と考えられる。桁行方位はN-6°-Wである。

柱穴底面にはP-1・P-2では礫、P-3・P-4では礫と甕片が据えられていた。なお、P-3では底面から釘が出土

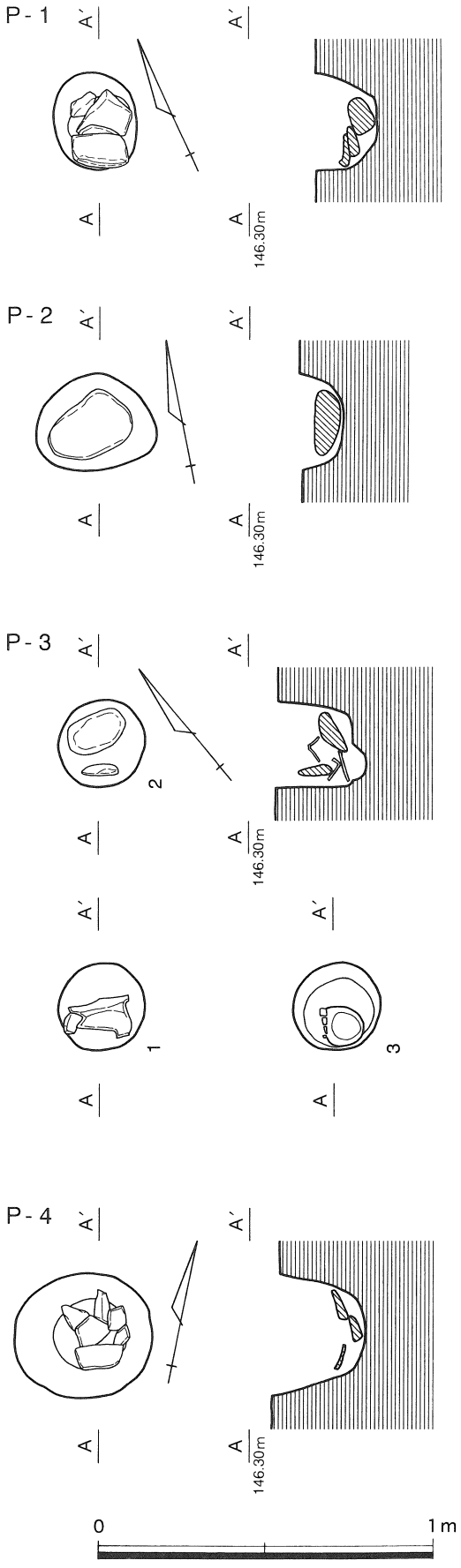


図35　SH-12　P-1～4実測図（1/20）

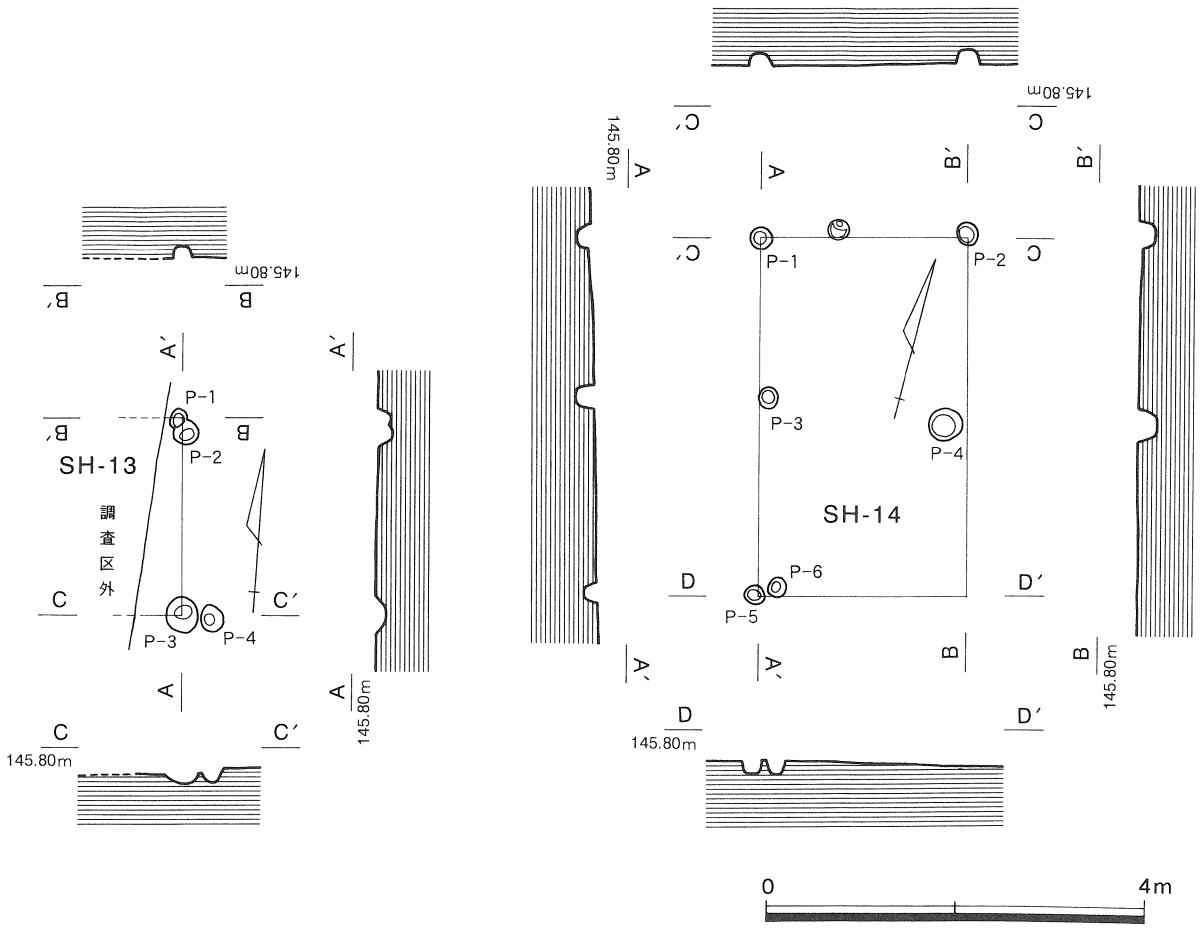


図36　SH-13(左)・SH-14(右)実測図（1/80）

した（図36）。P-3から出土した遺物（図149－500～502）は立柱祭祀にかかわるものと考えられる。柱穴の出土遺物からは時期を特定し難いが、周囲の出土遺物からは12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。ただし、SH-8やSH-9、SH-12との前後関係は明らかにできない。

⑦　SH-13（図36左）

SH-13は平成11年度の調査において26区で検出した遺構である。ただし、検出できたのは、それぞれ2基がほぼ重複して存在する４基の柱穴であり、掘立柱建物跡ではない可能性も考えられる。柱穴の直径は20～40cm、深さ10～15cmである。柱穴間の距離は2.0m前後である。SH-13は北や南、東に柱列が続かないことから、西側にのびると考えられる。ただし、西隣の25区では対応する柱列は検出できなかった。おそらくSH-13は南北１間、東西２間程度の規模と考えられる。この場合、桁行方位はN-86°-Eとなる。なお、柱穴から遺物は出土しなかった。

⑧　SH-14（図36右）

SH-14は平成11年度に調査を行った26区の北西部で検出した掘立柱建物跡で、南北２間、東西１間で、桁行方位はN-10°-Wである。規模は梁行2.3m、桁行3.9mである。柱穴の規模は直径12～18cm、深さ10～15cm、柱穴間距離は桁間が1.95～2.2m、梁間が1.65～2.0mである。柱穴からの出土遺物はなかったが、12世紀中葉～13世紀前半のものと考えられる。

⑨　SH-15（図37上）

SH-15は平成11年度の調査において26区で検出した掘立柱建物跡である。一部がSH-14やSH-16と重複する。ただし、前後関係は不明である。

東西１間、南北３間、桁行方位はN-4°-Wである。規模は梁行2.3m、桁行6.3mである。柱穴間距離は桁間が1.95～2.1mで、７尺～８尺５寸と言える。梁間は1.6～2.35mであるが、西側に比べ、東側は不揃いである。柱穴規模は直径10～30cm、深さ20～30cmである。なお、掘立柱建物跡と認識したが、西側の柱列であるP-1・P-2・P-4・P-6が連なる柵であった可能性もある。P-1からは山茶椀の細片が出土したが、時期は特定できない。周囲の出土遺物から12世紀中葉～13世紀前半の掘立柱建物跡と考えられる。

⑩　SH-16（図38）

SH-18は平成11年度の調査において26区で検出した。この掘立柱建物跡は、SH-15やSH-17と一部が重複し、東西1間、南北２間、桁行方位はN-9°-Wである。規模は梁行3.0m、桁行4.5mである。柱穴間距離は桁間では2.5～2.75m、梁間が2.0～2.1mで、梁間に比べ桁間が広い。柱穴の規模は直径30cm前後、深さ10cm前後である。なお、P-2は間柱の可能性がある。この掘立柱建物跡も柱穴からの出土遺物はなかった。時期はSH-13～15と同様の12世紀中葉～13世紀前半と考えられる。

⑪　SH-17（図37下）

SH-17は26区で平成11年度の調査で検出した掘立柱建物跡である。北半がSH-16と重複する。東西１間、南北２間、桁行方位N-9°-Wの遺構である。規模は梁行2.4m、桁行3.8mである。柱穴

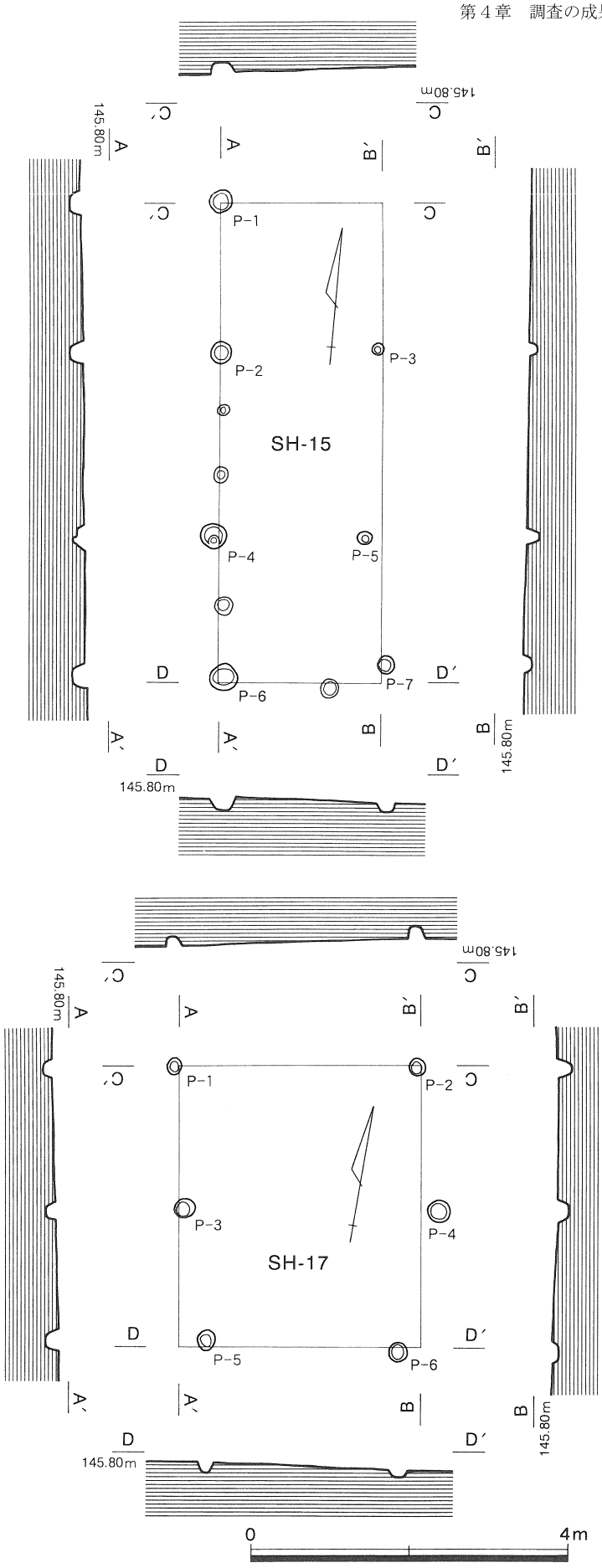


図37　SH-15（上）・SH-17（下）実測図（1/80）

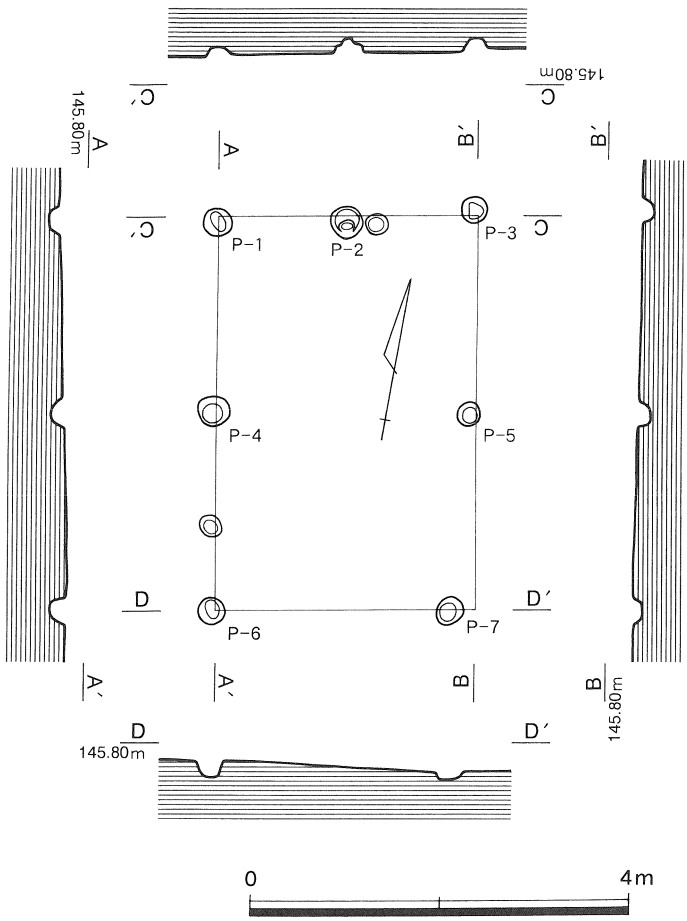


図38　SH-16実測図（1/80）

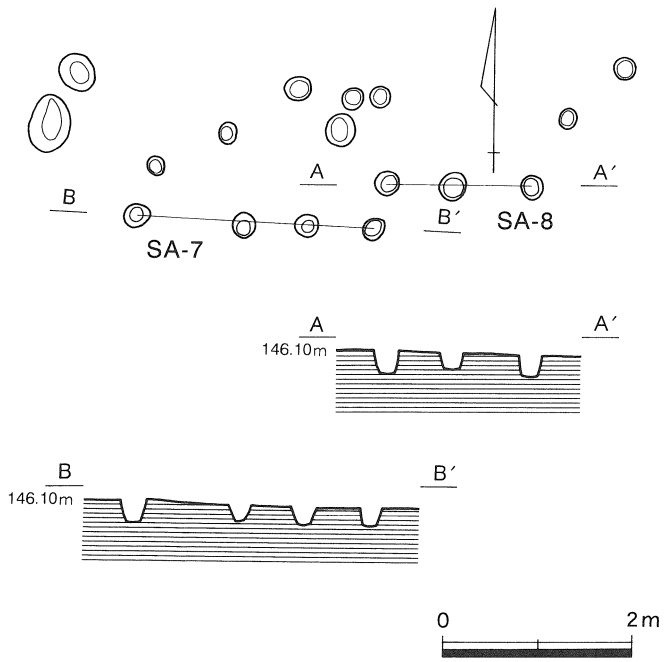


図39　SA-7・SA-8実測図（1/80）

間距離は桁間では、2.4～3.2m、梁間では1.7～1.8mである。柱穴規模は直径20～30cm、深さ10～20cmである。出土遺物がなかったため、時期を断定できないが、同地区の他の掘立柱建物跡と同様に12世紀中葉～13世紀前半に位置づけられる。

(2)　柵　跡

①　SA-7（図39）

SA-7は平成11年度の調査で検出した遺構である。SH-8の約5.5m北北西に所在する。直径約25cm、深さ30cmのピット４基が0.7～1.0mの間隔で東西に並ぶ。その規模は2.8mである。ピットから遺物などは出土しなかったため、時期を断定することはできないが、SH-8と同様に12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。

②　SA-8（図39）

SA-8は平成11年度の調査において25区で検出した遺構である。SH-8の北方約６m、SH-7の0.2m北東に所在する。直径25～30cm、深さ20～25cmのピット３基が東西1.8mの範囲に並ぶ。ピット間の距離は0.7mと0.8mである。この遺構も出土遺物はなかったが、周囲の出土遺物から、12世紀中葉～13世紀前半のものと考えられる。

③　SA-9（図40）

SA-9は25区で平成11年度に検出した。SH-8の北方約３mに所在し、５基のピットがN-65°-Wに並ぶ。その規模は4.4mである。ピットの直径は20cm前後、深さは10～15cm、ピットの間隔0.8～1.2mの間隔で並ぶ。出土遺物は無かったが、25区の他の遺構と同様に、12世紀後中葉～13世紀前半のものと考えられる。

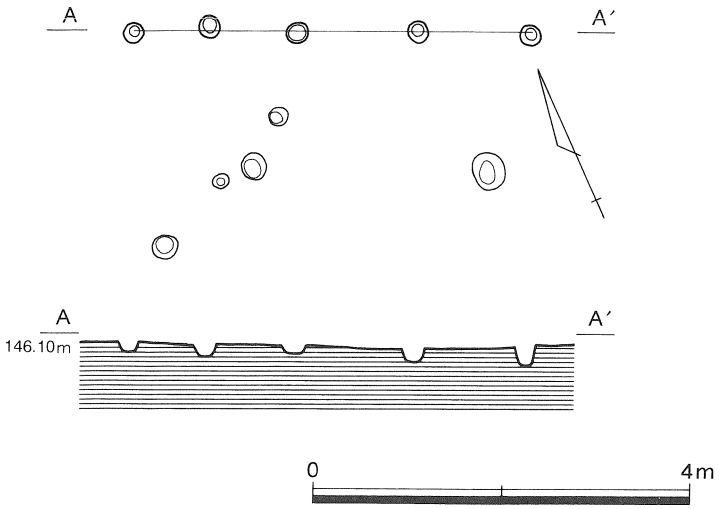


図40　SA-9実測図（1/80）

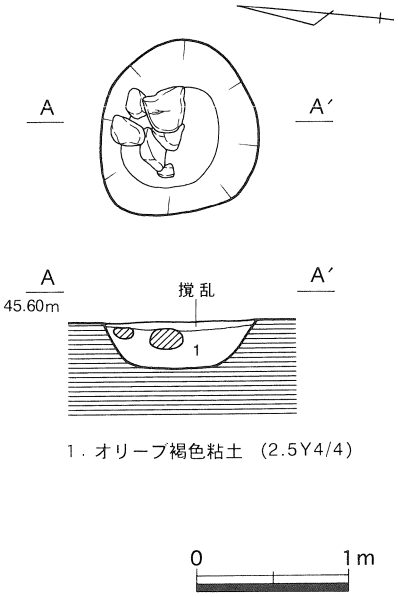


図41　SF-7実測図（1/50）

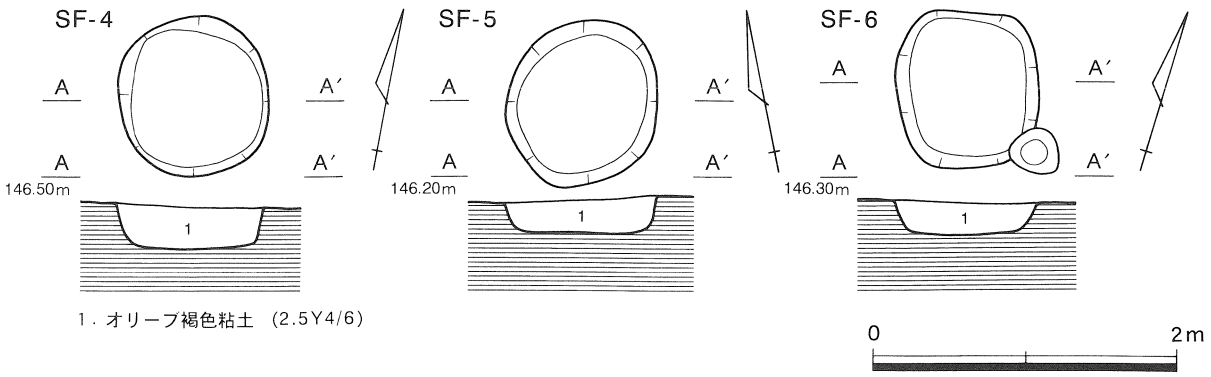


図42　SF-4～6実測図（1/50）

(3)　土　坑

①　SF-4～6（図42）

SF-4～6は円形の平面形態をとる土坑である。SF-4はSH-7と重複する土坑で、直径1.1m、深さ0.3cmの規模である。SF-5はSH-8の0.5m東に位置し、直径1.2m、深さ0.2mの規模である。SF-6は方形の土坑で、長辺1.1m、短辺0.9m、深さ0.2mである。SF-4からは、山茶椀の小皿と釘が出土した（図149－499・503）。SF-5とSF-6からも山茶椀の細片が出土したが、図示し得るものではなかった。12世紀後半～13世紀前半に位置づけられる遺構である。

②　SF-7（図41）

SF-7は26区で検出した土坑で、SH-14の0.5m西に所在する。最大径1.2mの不正形な円形を呈し、深さは0.4mである。土坑の中央部には10～30cm程度の礫が据えられていた。出土遺物は無く、時期は断定できないが、他の遺構と同時期のものと考えられる。性格は不明である。

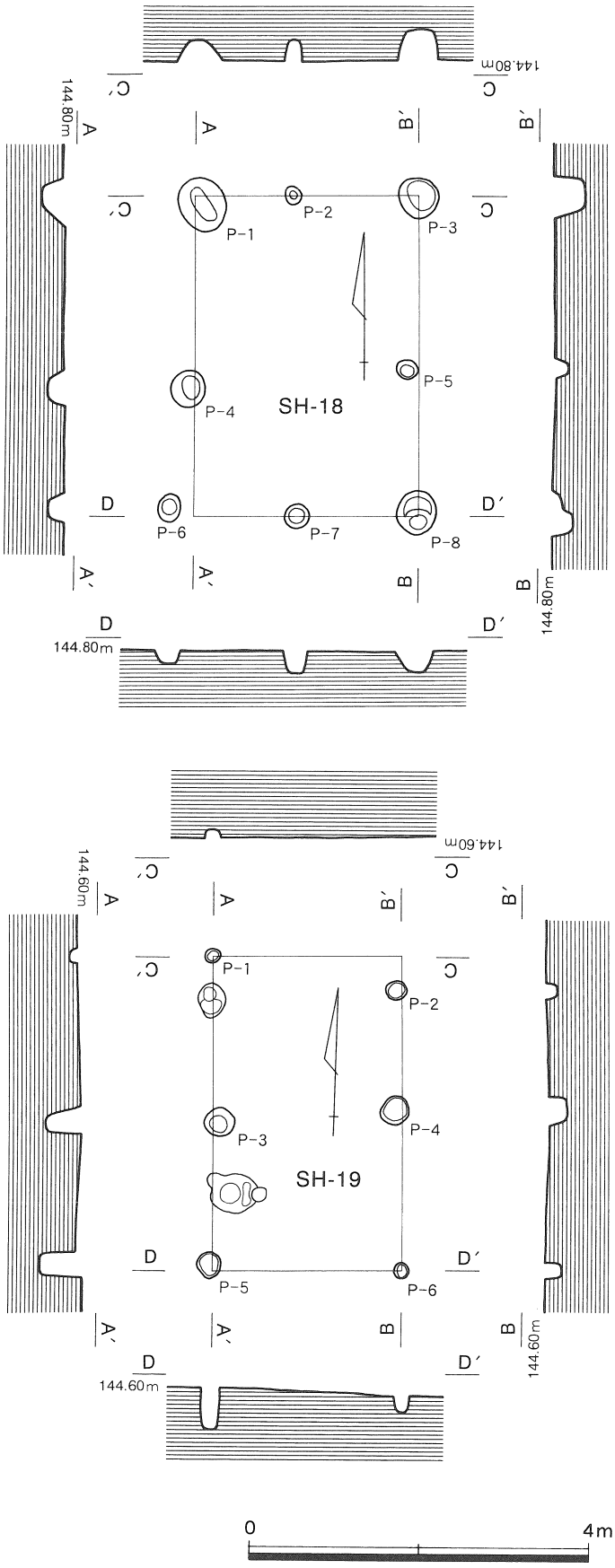


図43　SH-18(上)・SH-19(下)実測図（1/80）

3．北東部の遺構群

(1)　掘立柱建物跡

①　SH-18（図43上）

SH-18は平成11年度の調査において26区で検出した。北東部の遺構群の中では最も北西に位置する掘立柱建物跡である。東西２間、南北２間で、桁行方位はN-0°-Wである。ただし、P-2・P-7を間柱とする桁行２間、梁行１間の掘立柱建物の可能性もある。規模は梁行3.3m、桁行4.2mである。桁間はP-1・P-2の間が狭く1.1mであるが、その他は1.4～1.5mである。梁間はP-4・P-6間が狭く1.4mであるが、その他は1.8～2.1mである。柱穴規模は直径30～60cm、深さ20～40cmである。柱穴からの出土遺物は無かったが、周囲からはⅡ期～Ⅲ期に位置づけられる山茶椀が出土している。これ以外に時期を違える遺物は出土していない。そのため、SH-18は12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。

なお、SH-18周辺では、この他は多数のピットを検出できた。掘立柱建物跡として確認し得たものはSH-18に限られるが、この他にも数棟の掘立柱建物跡が存在したことは十分に考えられる。

②　SH-19（図43下）

SH-19は平成９年度の調査で検出し、SH-20やSH-21と重複して存在する掘立柱建物跡である。東西１間、南北２間で、桁行方位はN-3°-Wである。規模は桁行2.5m、梁行3.9mである。桁間は2.1～2.3m、梁間はP-2・P-4間が1.4mとやや狭いが、その他は1.8～2.0mである。柱穴の規模は直径20～30cm、深さ５～50cmである。北側の柱穴が浅い傾向にある。柱穴からの出土遺物は無かった。この遺構の周囲からはⅡ期～Ⅲ期に位置づけられる山茶椀

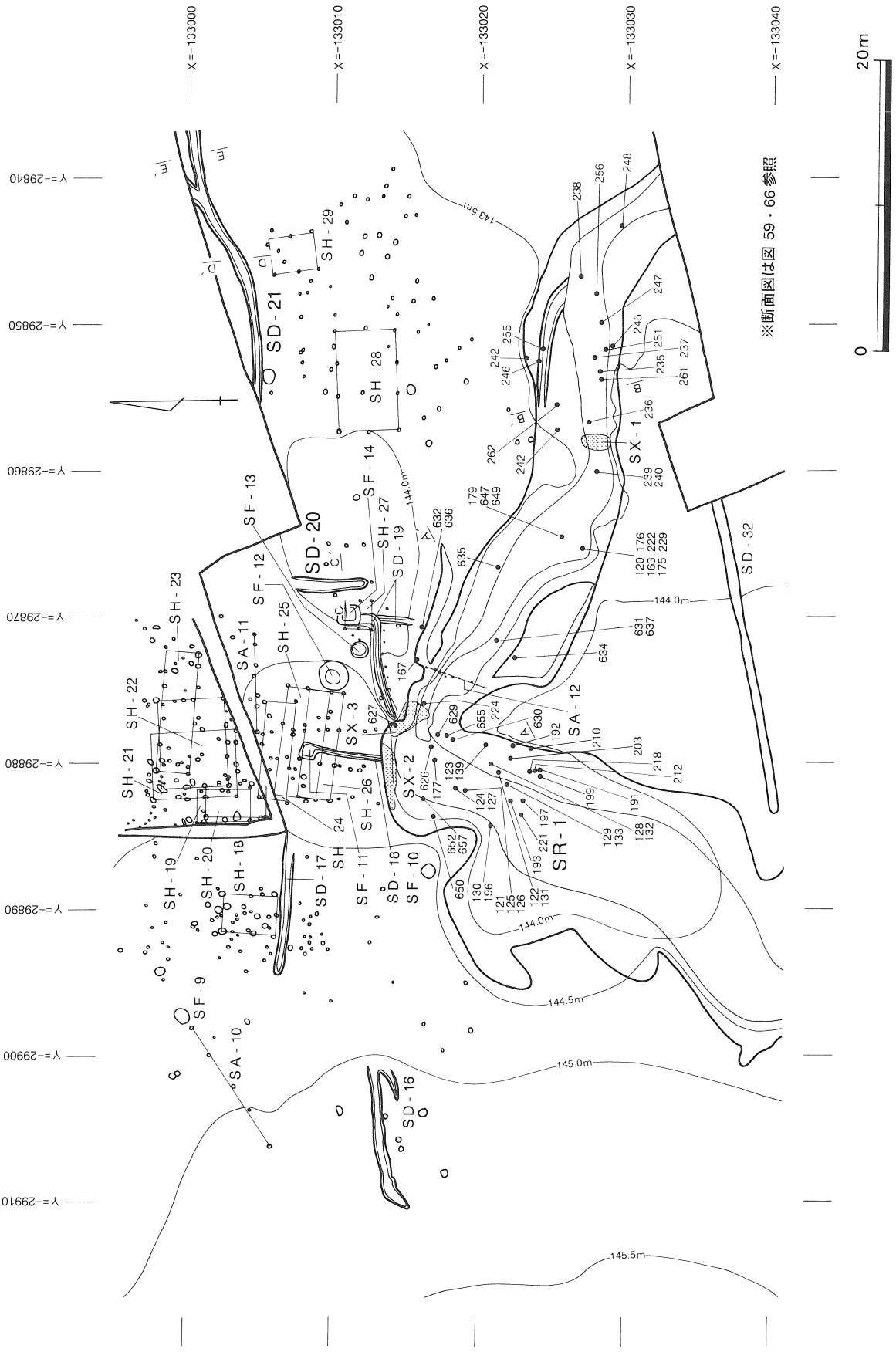


図44　調査区北東部の遺構群（1/400）

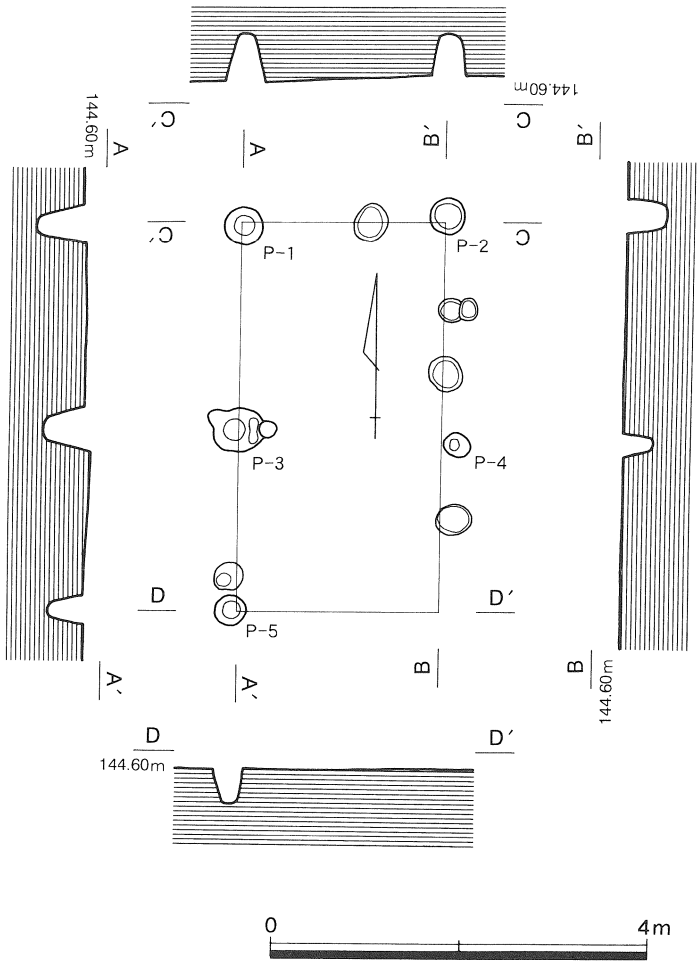


図45　SH-20実測図（1/80）

が出土している。そのため、SH-19は12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。なお、重複して所在するSH-10やSH-21との前後関係については不明である。同時期に存在した掘立柱建物でないことは明らかである。

③　SH-20（図45）

SH-20はSH-19と重複して存在した掘立柱建物跡で、平成９年度の調査で検出した。また、北東部の一部はSH-21とも重複する。なお、南東隅の柱穴については、検出できなかった。この掘立柱建物跡は東西１間、南北２間、桁行方位はN-1°-Eである。規模は梁行2.5m、桁行4.5mで、桁間は2.2～2.3m、梁間は1.9～2.4mである。柱穴の規模はP-3がやや大きく、東西60cm、南北40cm、深さ60cmであるが、その他のものは直径30～40cm、深さ30～50cmの規模である。

遺物はP-1とP-3から出土した（図156－559・560）。共にⅢ期の山茶椀の椀である。これらの遺物から、SH-20は13世紀前半の遺構と考えられる。なお、SH-21との前後関係については不明である。

④　SH-21（図46）

SH-21は平成９年度の調査において４区で検出した東西２間、南北４間の掘立柱建物跡である。桁行方位はN-3°-Wである。この遺構はSH-18、SH-19、SH-22、SH-23と重複して所在する。規模は梁行4.5m、桁行6.1mであり、ミョウガ原遺跡北東部の遺構群における掘立柱建物跡の中では、SH-28、SH-22に次ぐ規模の掘立柱建物跡である。柱穴間距離をみると、桁間が2.2～2.6m、梁間が1.8～2.2mで、梁間に比べ、桁間がやや広い傾向にある。柱穴の規模は直径30～40cm、深さ10～40cmである。

遺物はP-2とP-6から山茶椀の椀と小皿が出土した（図156－561・566・567）。これらの遺物からSH-21は12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。重複するSH-19やSH-20、SH-22やSH-23との前後関係については不明である。なお、この遺構の南東部には撹乱が斜行するように入り込む。そのため、北東部の柱穴については検出することができなかった。

⑤　SH-22（図47）

SH-22は平成９年度の調査で検出した総柱の掘立柱建物跡である。この建物跡は東西３間、南北２間で、その規模は梁行5.0m、桁行6.4mである。ミョウガ原遺跡北東部の掘立柱建物跡の中では、SH-28と並び、規模の大きな建物と言える。なお、SH-22は更に南側に１間広がり、東西３間、南北３間の総柱の掘立柱

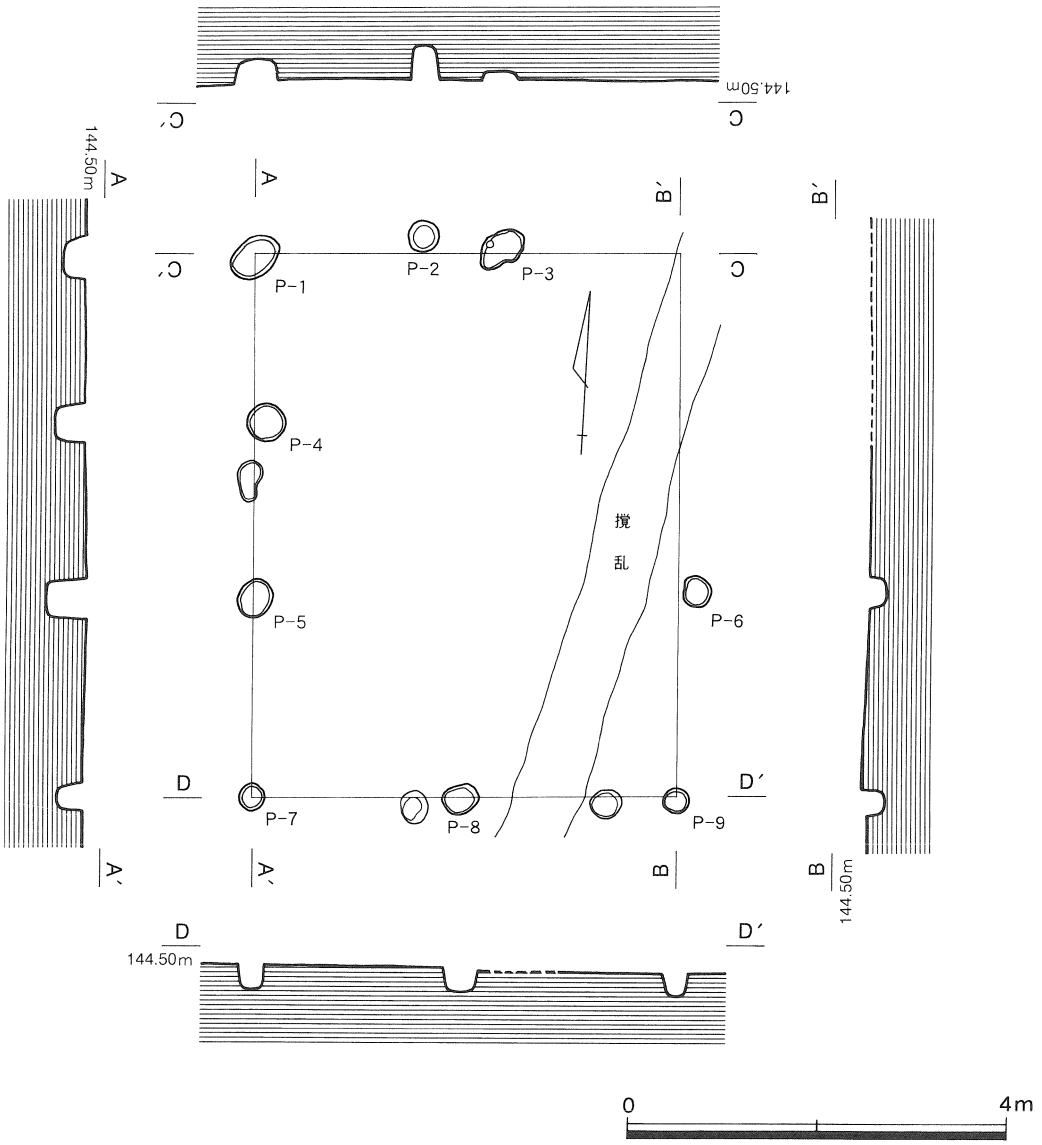


図46　SH-21実測図（1/80）

建物である可能性もある。しかし、SH-22の南側は撹乱が深くまで入り込み、遺構を検出することはできなかった。そのため、ここではその可能性を指摘するにとどめる。なお、この遺構は中央部を南北に横切るように撹乱が入り込む。そのため、建物北辺のP-2とP-3・P-4間の柱穴については検出できなかった。桁行方位はN-86°-Eであり、柱穴間距離は桁間が2.0～2.4mで、概ね2.1mといえる。梁間は1.8～2.4mである。柱穴の規模は直径20～40cmであるが、40cm前後のものが多い。深さは20～40cmである。柱穴の直径は周囲の掘立柱建物跡の柱穴と比べると幾分、規模が大きいといえる。

柱穴からの出土遺物は無く、時期を直接うかがうことはできないが、先述したSH-19～21と同様に12世紀中葉～13世紀前半の掘立柱建物跡と考えられる。なお、SH-22はSH-20、SH-21、SH-23と重複して検出された。これらの掘立柱の前後関係については不明である。なお、SH-19とは重複しない。SH-19とSH-22が併存した可能性はあるが、非常に近接して立地することから、その可能性は低いと考えたい。SH-22はその規模や総柱建物であることを勘案すると、ミョウガ原遺跡北東部における中心的な建物であったと考えられる。

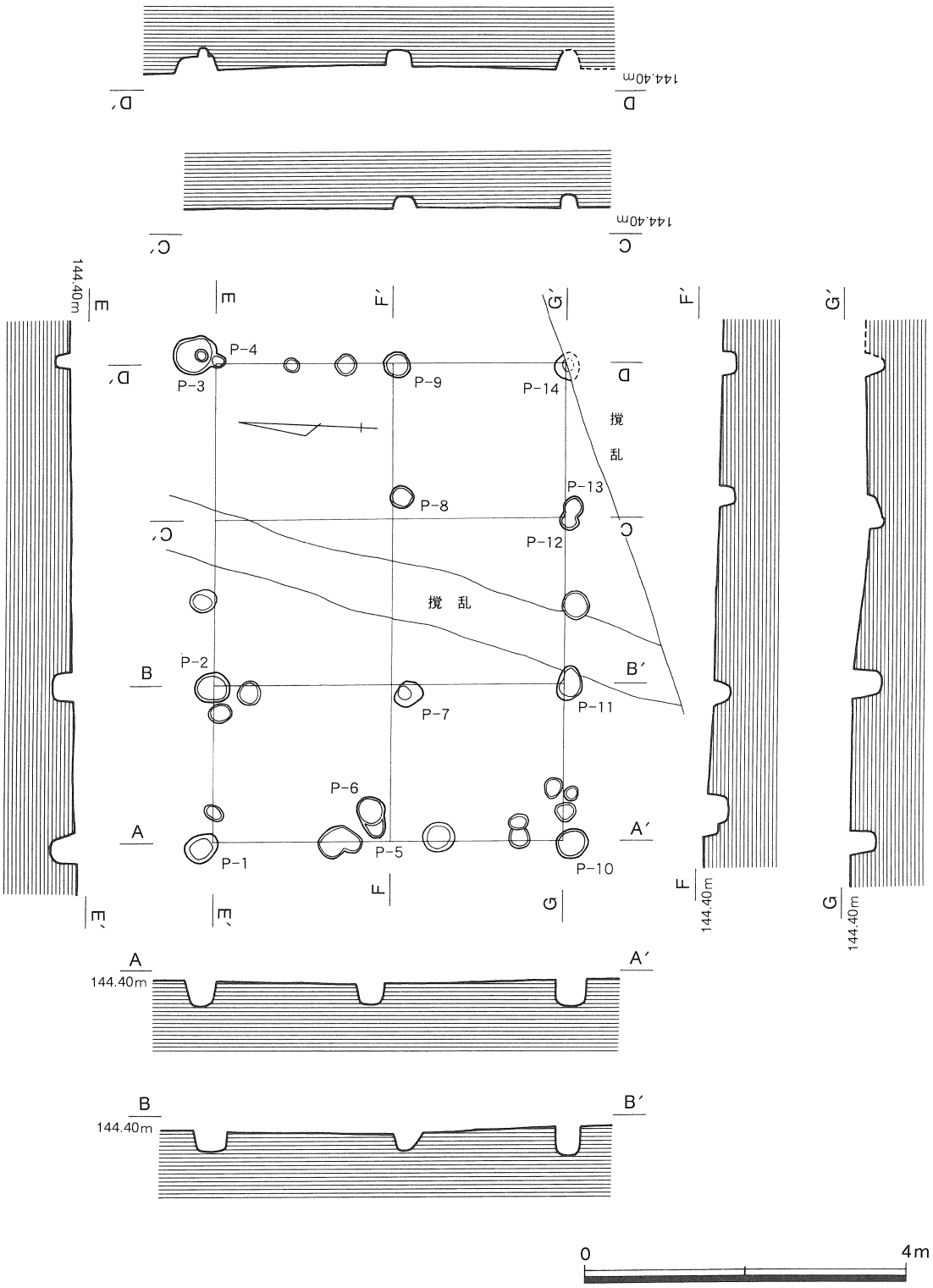


図47　SH-22実測図（1/80）

⑥　SH-23（図48上）

SH-23は平成９年度の調査で検出した東西４間、南北１間の掘立柱建物跡である。規模は桁行9.0m、梁行2.6mで、桁間1.3～1.4m、梁間1.9～2.6mである。桁行方向はN-85°-Wである。柱穴の規模は直径20～60cm、深さ20～50cmである。P-3～5から推定される柱の直径は20cm程度である。柱穴からの出土

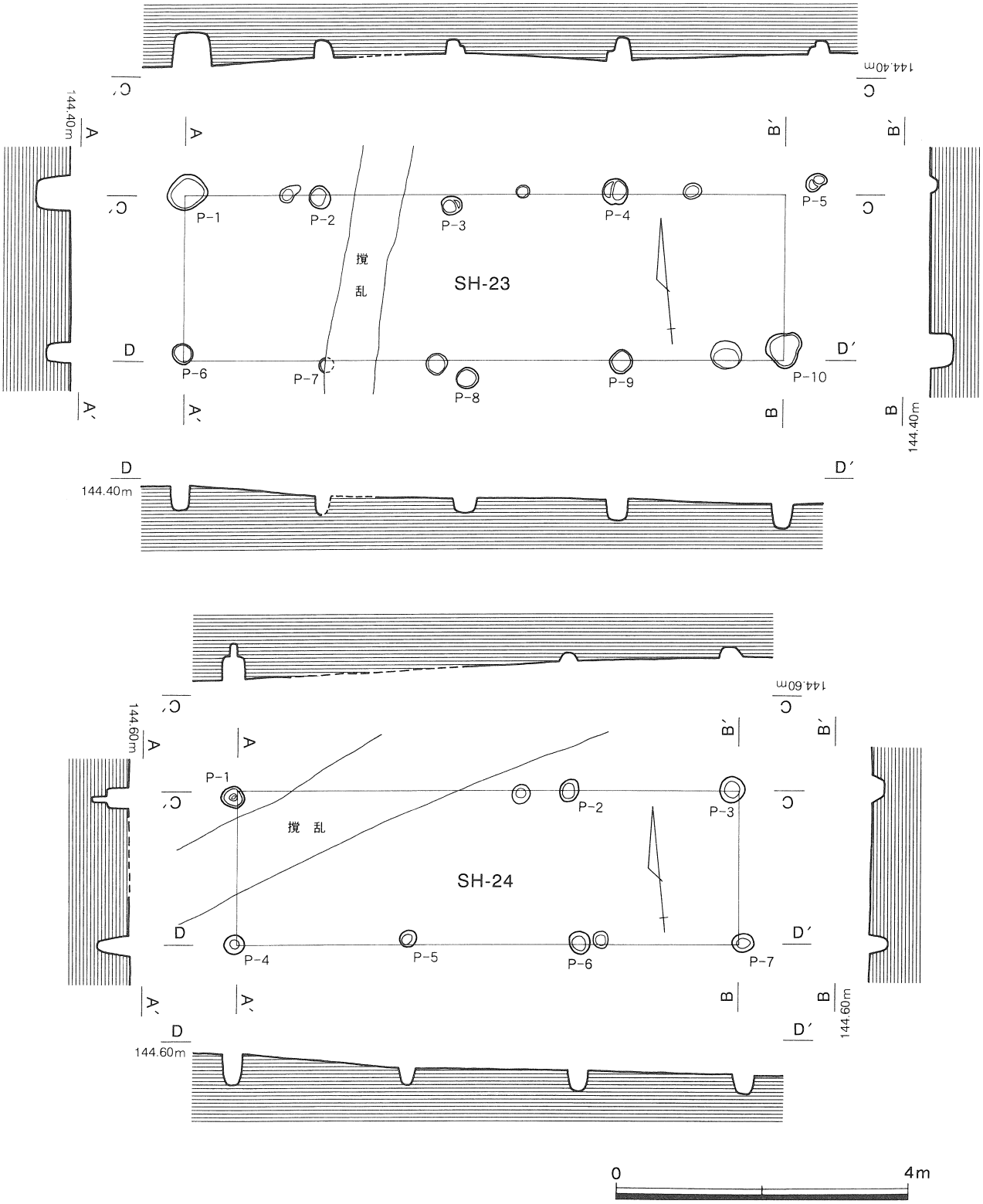


図48　SH-23(上)・SH-24(下)実測図（1/80）

遺物は無かった。時期は、他の掘立柱建物跡と同じく12世紀中葉～13世紀前半と考えられる遺構である。SH-21やSH-22と重複して存在するが、新旧については不明である。

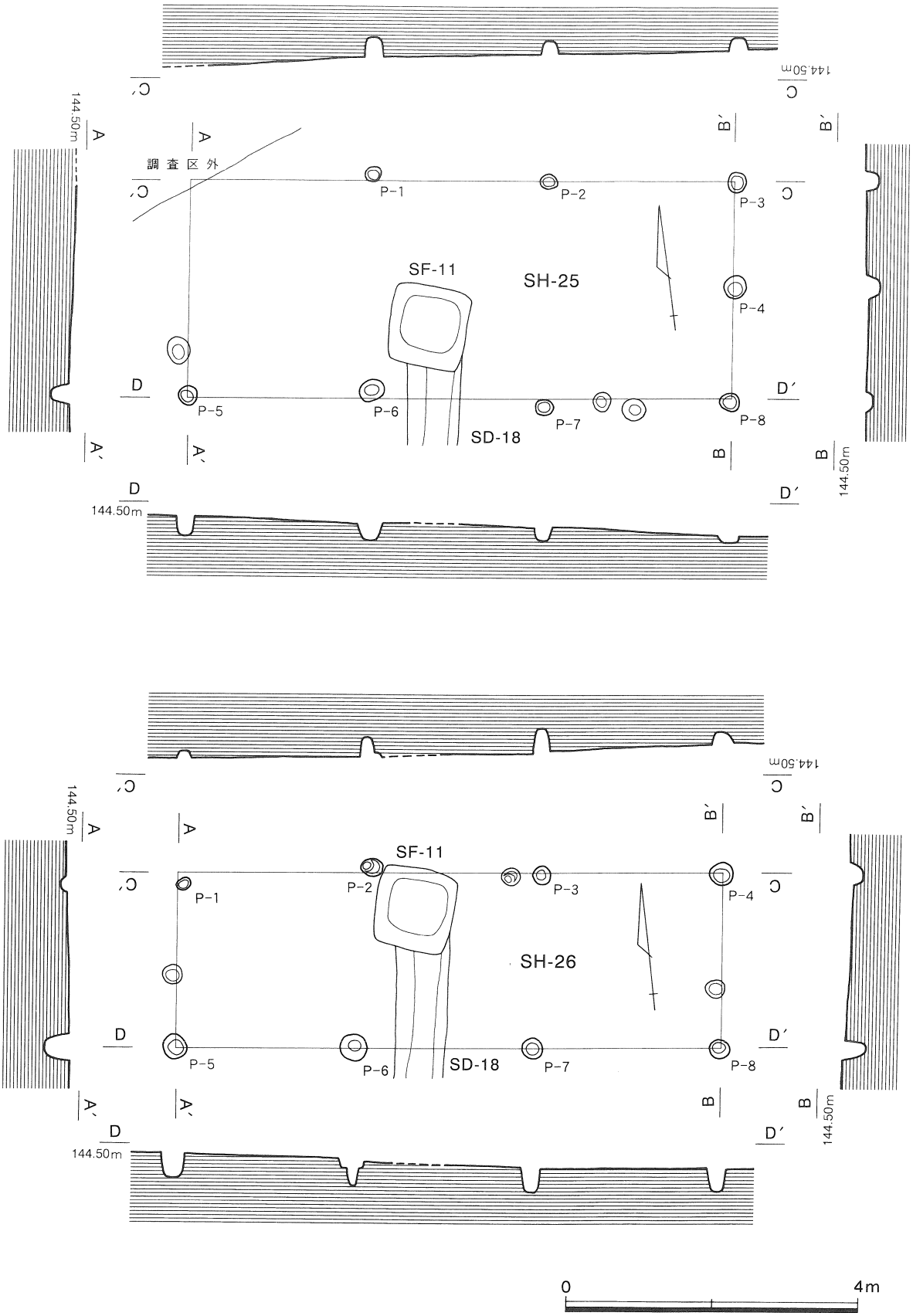


図49　SH-25(上)・SH-26(下)実測図 (1/80)

⑦　SH-24（図48下）

SH-24は平成９年度に調査した４区と平成13年度に調査した54区にまたがる遺構である。この遺構はSH-21の約1.5m南に位置し、SH-25と重複して存在する。東西３間、南北１間の掘立柱建物跡で、桁行方位はN-84°-Wである。規模は桁行7.2m、梁行2.4mである。梁間は2.2～2.4m、桁間は2.1mで、７尺を基準としているようである。柱穴規模は直径20～30cm、深さ10～50cmである。P-1からうかがえる柱の直径は10cm前後である。柱穴からの出土遺物はなかったが、54区の東側ではⅠ期の小椀とⅡ期～Ⅲ期に位置づけられる椀が出土している。このことから、SH-24は12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。

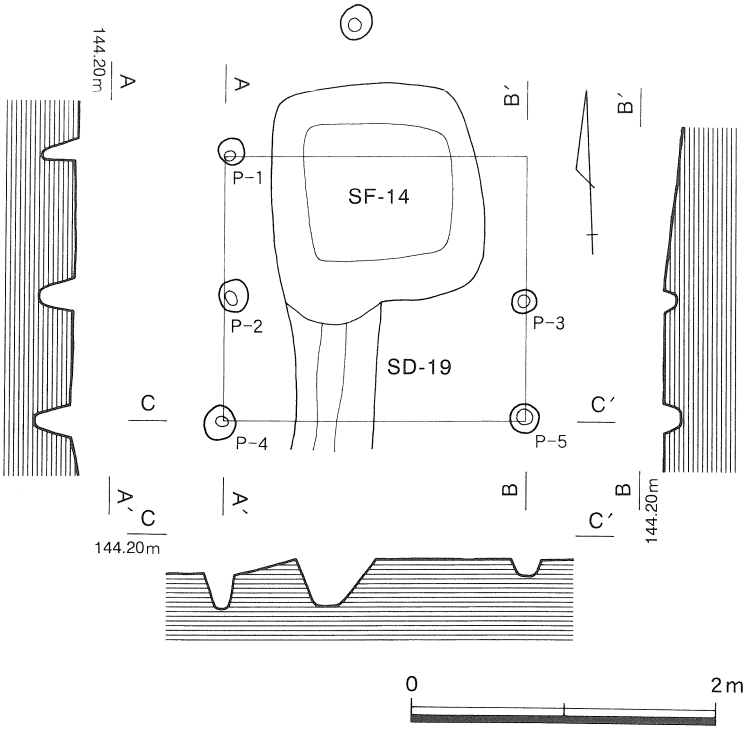


図50　SH-27実測図（1/80）

⑧　SH-25（図49上）

SH-25は平成13年度の調査において、54区で検出した掘立柱建物跡である。東西３間、南北１間で、桁行方位がN-83°-Wの建物跡である。SF-11の直上に位置し、一部がSH-24やSH-26と重複する。規模は桁行7.7m、梁行3.4m、梁間は2.4～2.6m、桁間は2.9～3.1mである。柱穴規模は直径20～40cm、深さ10～30cmである。なお、北西隅の柱穴については検出できなかった。柱穴からの出土遺物は無かったが、SH-24と同様に12世紀中葉～13世紀前半の掘立柱建物跡と考えられる。

⑨　SH-26（図49下）

SH-26は東西３間、南北１間の掘立柱建物跡である。平成13年度の調査でSH-25や導水遺構１と重複して検出された遺構である。桁行方位はN-83°-Wで、規模は桁行7.8m、梁行2.6mである。梁間が2.4～2.6m、桁間が2.2～2.4mである。重複するSH-25に比べると桁間が狭い。柱穴規模は直径20～40cm、深さは10～40cmであった。P-6からは柱の直径が10cmであったことがうかがえる。柱穴からの出土遺物はないが、SH-26もSH-24やSH-25同様に12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。なお、重複して存在する、SH-25との前後関係は不明である。また、SF-11の直上に位置することから、SH-25と同様にこの遺構の上屋であった可能性がある。

⑩　SH-27（図50）

SH-27は平成11年度における３'区の調査で検出した遺構である。東西１間、南北２間の掘立柱建物跡で、桁行方位はN-0°-Wである。規模は桁行3.2m、梁行3.6m、桁間3.1～3.2m、梁間1.3～1.5mである。柱穴規模は25～35cm、深さ20～40cmである。位置関係からSF-14に伴う上屋と考えられる遺構である。

柱穴からの出土遺物はなかったが、SF-16が13世紀前半に位置づけられるので、SH-27もこの時期の遺構と考えられる。

⑪ SH-28（図51）

SH-28は平成12年度の調査において53区で検出した遺構である。先述したSH-19～27とはやや離れた場所に所在する。この遺構は東西３間、南北２間の掘立柱建物跡で、桁行方位はN-88°-E、規模は桁行7.2m、梁行4.4mである。柱穴間距離をみると、桁間1.8～2.4m、梁間2.1～2.8m、概ね2.1mといえる。総柱の掘立柱建物と捉えたが、P-6は間柱である可能性もある。柱穴規模は直径25～30cm、深さ20～40cmである。柱穴からの出土遺物はなかったが、53区ではⅠ期の山茶椀の小椀とⅡ期～Ⅲ期に位置づけられる山茶椀の椀が出土している。SH-28も同時期の、12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。

⑫ SH-29（図52）

SH-29は平成12年度の調査で検出した遺構で、SH-28の東北東約4.5mに所在する。東西1間、南北２間、桁行方位N-9°-Wの掘立柱建物跡である。規模は梁行2.9m、桁行3.4mで、桁間が2.1～2.6m、梁間が1.4～1.6mである。柱穴の規模は直径15～30cm、深さ10～25cmである。柱穴からの出土遺物はなかった

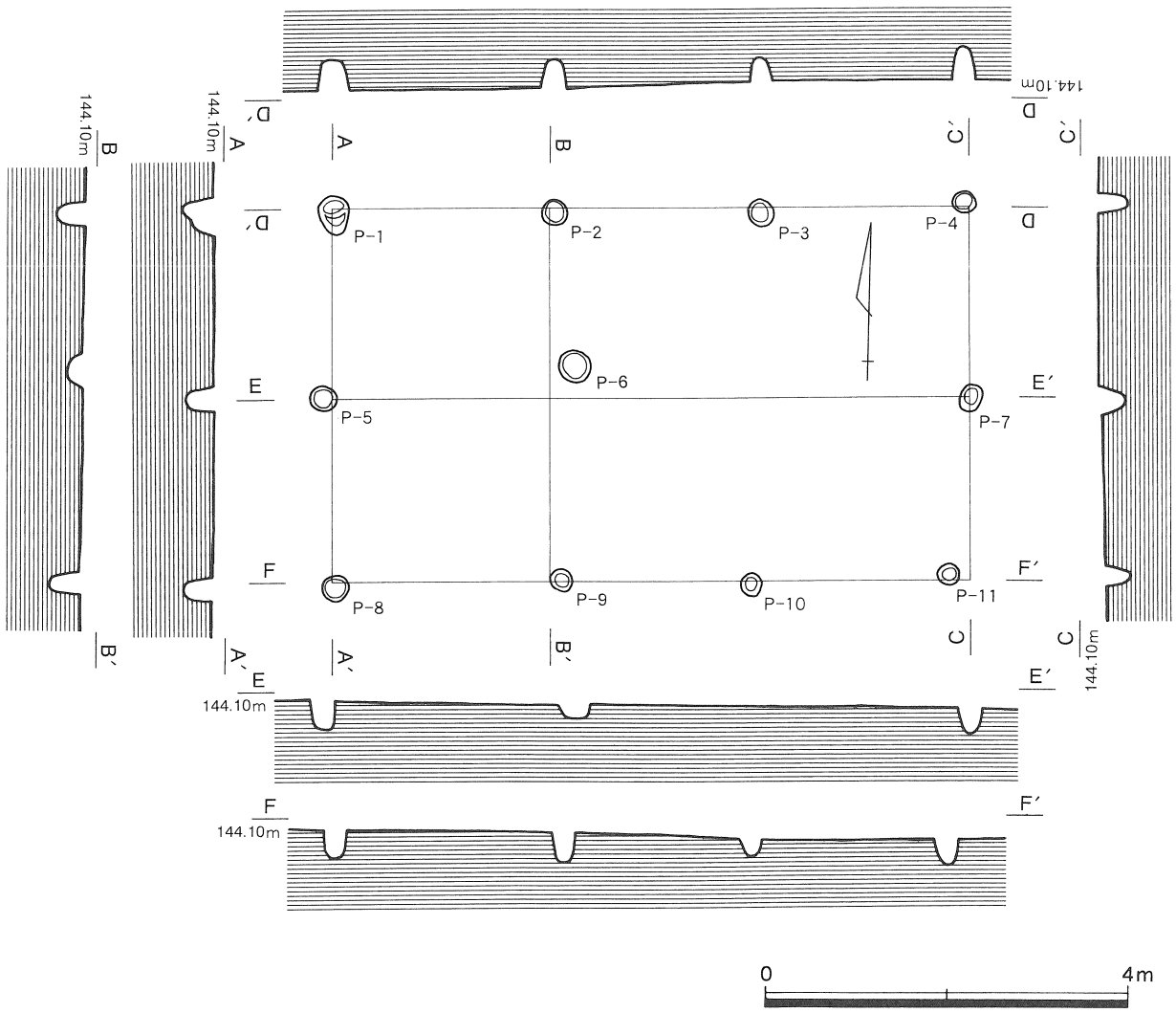


図51　SH-28実測図（1/80）

が、柱穴の覆土や周囲の出土遺物から、SH-18～28と同時期の12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。

⑵　柵　跡

①　SA-10（図53）

SA-10は平成11年度の調査において、26区で検出した遺構である。SH-18の約７ｍ西方に位置する。この遺構は５基のピットがN-57°-Eに並ぶ。その長さは、10.2ｍである。ピットの規模は直径20～35cm、深さ10～30cmで、西側のものほど浅い傾向にある。ピットからの出土遺物はなく、周囲からの出土遺物も非常に少なかった。そのため、時期を確定しがたいが、ピットの覆土が周辺の掘立柱建物跡と近似していることから、平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構と考えたい。

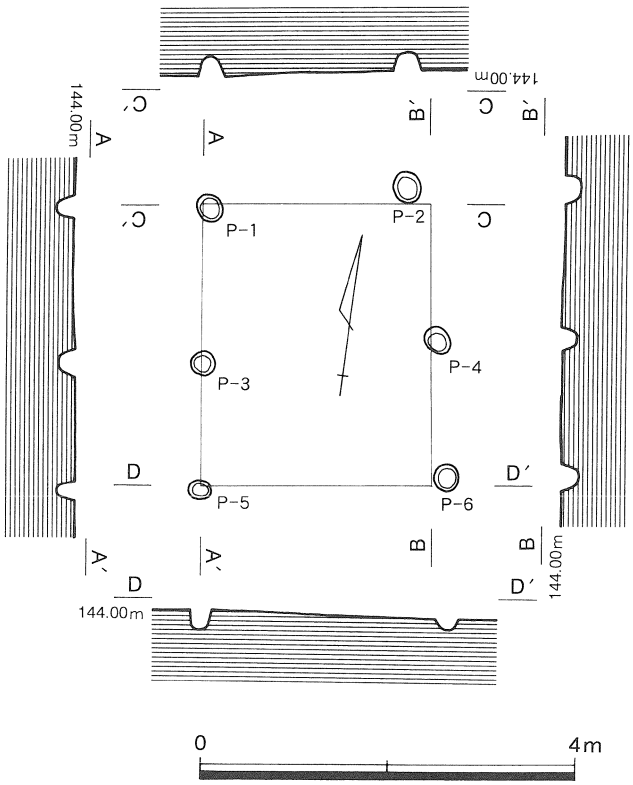


図52　SH-29実測図（1/80）

②　SA-11（図54）

SA-11は平成13年度の調査において、54区で検出した遺構である。SH-24の北に近接して所在する。この遺構は８基のピットが7.8ｍの長さで、ほぼ東西に並んでいる。特徴的なのは２基が一対となってピットが並ぶ点である。P-1とP-2、P-3とP-4、P-5とP-6、P-7とP-8がそれぞれ対となっている。対となるピット間の距離は70～80cmである。各ピットの規模は直径20～25cm、深さ10～35cmである。出土遺物はなかったが、周囲の掘立柱建物跡と同時期の12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。

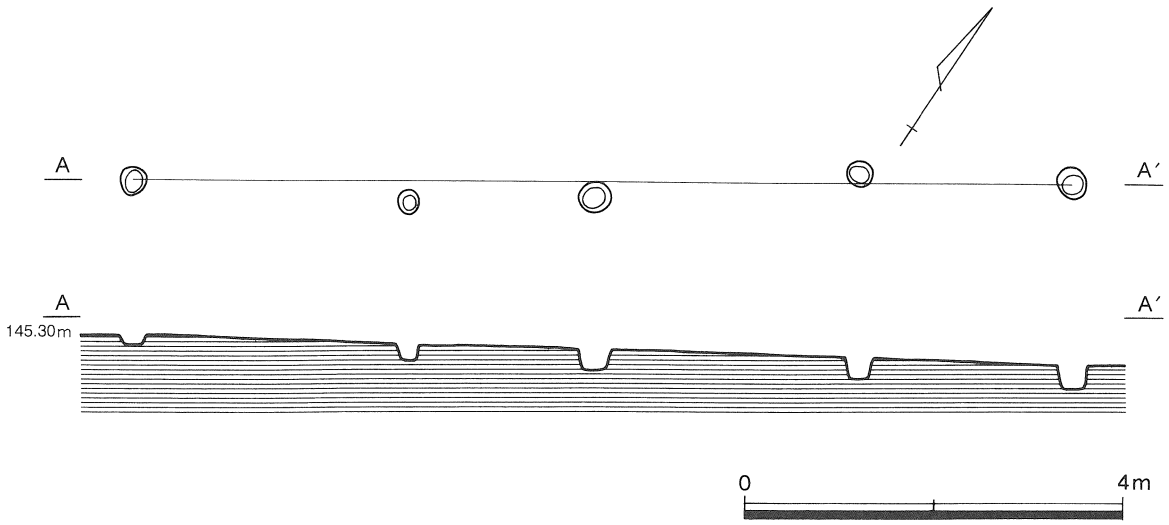


図53　SA-10実測図（1/80）

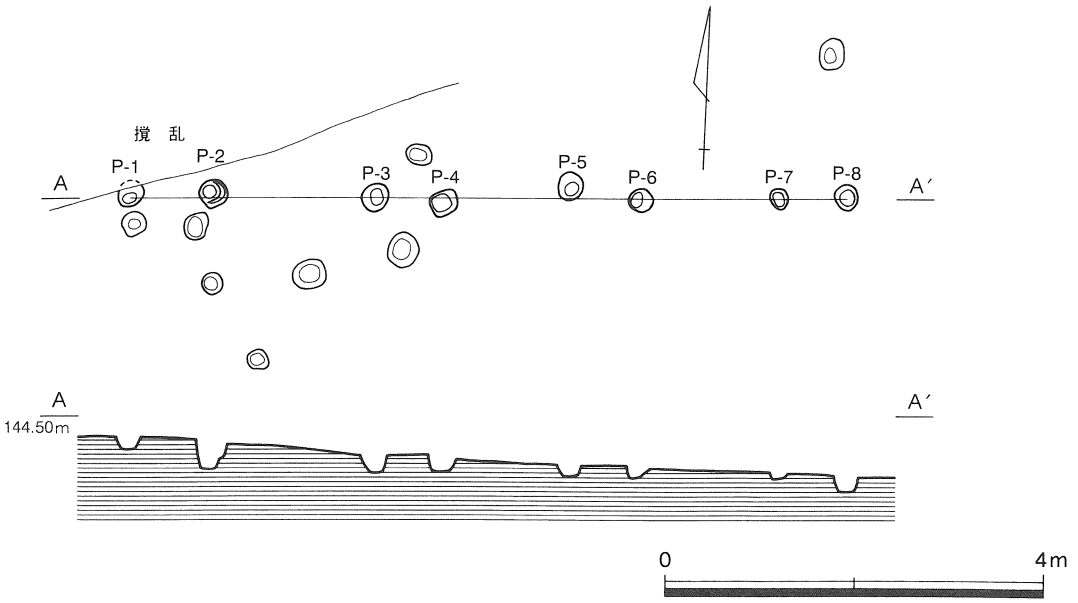


図54　SA-11実測図（1/80）

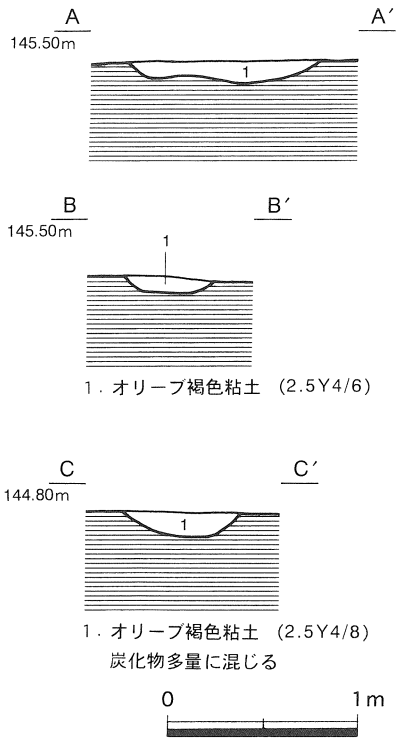


図55　SD-16・SD-17土層断面図（1/40）

⑶　溝状遺構

①　SD-16（図44・55上中）

SD-16は平成11年度における、26区の調査で検出した東西に流れる溝である。検出できた総延長は約9.5mである。深さは中央部付近が最も深いが、東側では深さを減じ消滅する。最深部でも0.15mと浅い溝である。山茶椀の椀と小皿の細片が出土したことから、12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。なお、人為的な溝ではなく、自然流路の可能性もある。

②　SD-17（図44・図55下）

SD-17は平成11年度に26区の調査で検出した東西方向の溝である。検出できた長さは約10mである。深さは約0.2mであり、この深さは西端から東端に至るまでほぼ保たれる。覆土からは山茶椀の小皿が出土した（図155－557・558）。これらの遺物と、周囲の出土遺物とを合わせて勘案すると、SD-17は13世紀前半以降に廃絶された溝と言える。なお、東に隣接する54区では、この溝の続きを検出することはできなかった。

③　SD-18・SF-11（図56）

SD-18はSF-11と一連の遺構と考えられるため、あわせて記す。両者とも平成13年度の調査において、54区で検出した遺構である。まず、SD-18を見ることにする。この溝はSR-1から北に向かって4.5m延びて、SF-11へと続く。深さは0.2～0.25mであるが、SR-1からSF-11へ向かって溝の底面が非常に緩やかに下降する。さて、SD-18はこれまでに記した他の溝状遺構とは異なる大きな特徴がある。それは、溝の中に最大径10～40cm程度の円礫が並べられることである。これらの礫は一部疎らな所もあるが、ほぼ溝の端から端まで寸断なく並べられ、二重になる部分もあった。なお、石材には加工した様子はなく、全て自然石である。

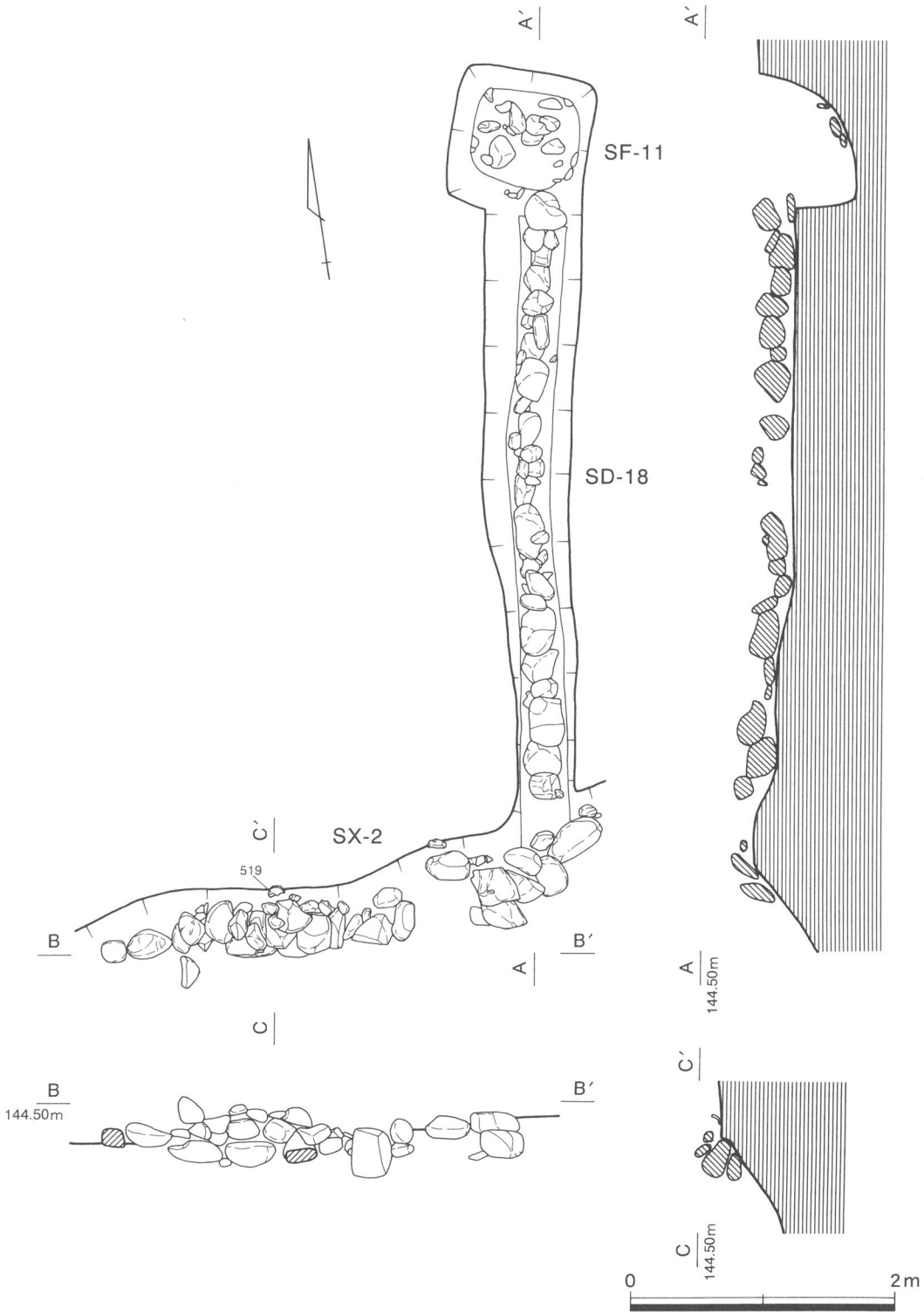


図56　SD-18・SF-11・SX-2実測図（1/50）

次にSF-11をみることにする。SF-11は東西1.05m、南北1.08mのほぼ正方形といえる平面形である。深さは0.65mである。底面には最大径10～30cm程度の円礫が存在したが、敷きつめられてはいなかった。SF-11からは山茶椀と釘が出土した（図151－520・521・525）。山茶椀はⅢ期-１に位置づけられることから、SF-11は13世紀前半に廃絶された遺構と考えられる。また、これにつながるSD-18についても同時期の遺構と考えられる。

さて、SD-18とSF-11からなる一連の遺構は導水の施設と考えられる。SD-18はSF-11に向かって、緩やかに底面が下っており、溝内に礫を詰めることで暗渠的な役割を果たしていたと考えられる。そして、SF-11は自然流路からSD-18を介して導き入れた水を溜める土坑であったといえる。そこで、この一連の遺構を導水遺構１と呼称したい。なお、SF-11の直上にはSH-25やSH-26があり、これらの掘立柱建物跡は上屋であった可能性がある。

④　SD-19・SF-14（図57・58）

SD-19とSF-14も一連の遺構と考えられるため、併せて記す。共に、平成11年度の調査において３'区で検出した遺構である。まず、SD-19であるが、この遺構は「L」字状の平面形態を持ち、総延長は8.25mである。少し詳しく見ると、この溝はSR-1から東北東方向へ3.0mのび、向きを約20°東に変えて3.9m続いている。更に、向きをほぼ直角に北へ変えて1.25mのびて、SF-14へとつながる。なお、SF-14とは正反対の方向へ、2.0m程のびる深さ0.1m程度の溝も確認できた。溝の幅は共に、0.3m前後である。溝の底面は自然流路から遠ざかるに従い、ゆるやかに下ってSF-14へと続いている。溝の西端では標高143.900mであるが、SF-14に繋がる部分では標高143.700mであり、その比高差は0.2mである。なお、SF-14の底面は更に一段低くなり、SD-19北端部の底面とは0.3m程度の差がある。

SD-19はSD-18と同様に溝の中に、最大径10～40cm程度の円礫が並べられていた。礫はいずれも自然石である。礫の並びは一部不揃いの所もあるが、30～40cm程度の円礫を主体として、溝に対して長軸を直角に据え、丹念に並べられている様子がうかがえる。特に、溝の西半部では顕著である。

次に、SF-14をみることにする。この土坑は東西1.3m、南北1.4mの規模で、ほぼ正方形の平面形態を持つ。底面には最大径10～40cm程度のやや偏平な円礫が敷きつめられ、一部２重に敷かれる部分もある。検出面から敷石上面までの深さは0.45m、土坑底面までの深さは0.65mである。

SD-19とSF-14の性格は、上述したSD-18・SF-11と同様に導水の施設と考えられる。SD-19が自然流路から水を導き入れる役割を果たし、SF-14が貯水の役割を果たしていたといえる。SF-14の直上にはSH-27があり、上屋の可能性が高い。時期については、SF-19とSF-14から山茶椀が出土している（図152－526～537）。この中には墨書が記されたものもある。これらの山茶椀はⅡ期－２～Ⅲ期－１に位置づけられる。528は底面から、529と532は壁面に伏せた状態で出土しているため、これらの遺物からSF-14の廃絶年代は13世紀前半に位置づけられる。SD-19についても同時期の遺構と言える。

さて、SD-18の東西に連なる部分の南側には６基の小穴が存在した。６基のピットは直径10cm程度、深さ10～20cm程度の規模で、4.55mの範囲に並んでいる。各ピット間の距離はP-1とP-2の間を除き0.7～0.8mである。柵等の施設の可能性が考えられる。また、SD-19の西端部から約1.5m東にはSD-19を挟むように２基のピットがある。ピットの規模は直径25cm前後、深さ10cm程度である。この２基のピットもこの導水の施設に伴う遺構と考えられる。ただし、その機能については不明である。

ところで、この遺構を検出した３'区はミョウガ原遺跡の中で唯一、遺構面が２面残存した範囲である。SD-19とSF-14は上面の検出段階では、溝に並べられた石材頂部の一部、SF-14と周囲のピットの存在について確認できた。上面を除去したところ、SD-19の掘り方を検出することができた。この確認面が下面であり、上面の約0.05m下である。上面と下面、並びに中間の層からは、Ⅱ期-２～Ⅲ期-１に位置づけられる山茶椀が出土した。上面と下面の間に大きな時間差は見出し難い。これらのことから、この周辺はSD-19を構築後に、ある程度整地されたと考えられる。

なお、SD-18・SF-11とSD-19・SF-14については、全く同時期に機能していたものか、時期を違えるものであるのかは、不明である。しかし、出土遺物からみると、ほぼ同時代の遺構であることは明白である。以後、SD-19・SF-14を導水遺構２と呼称する。

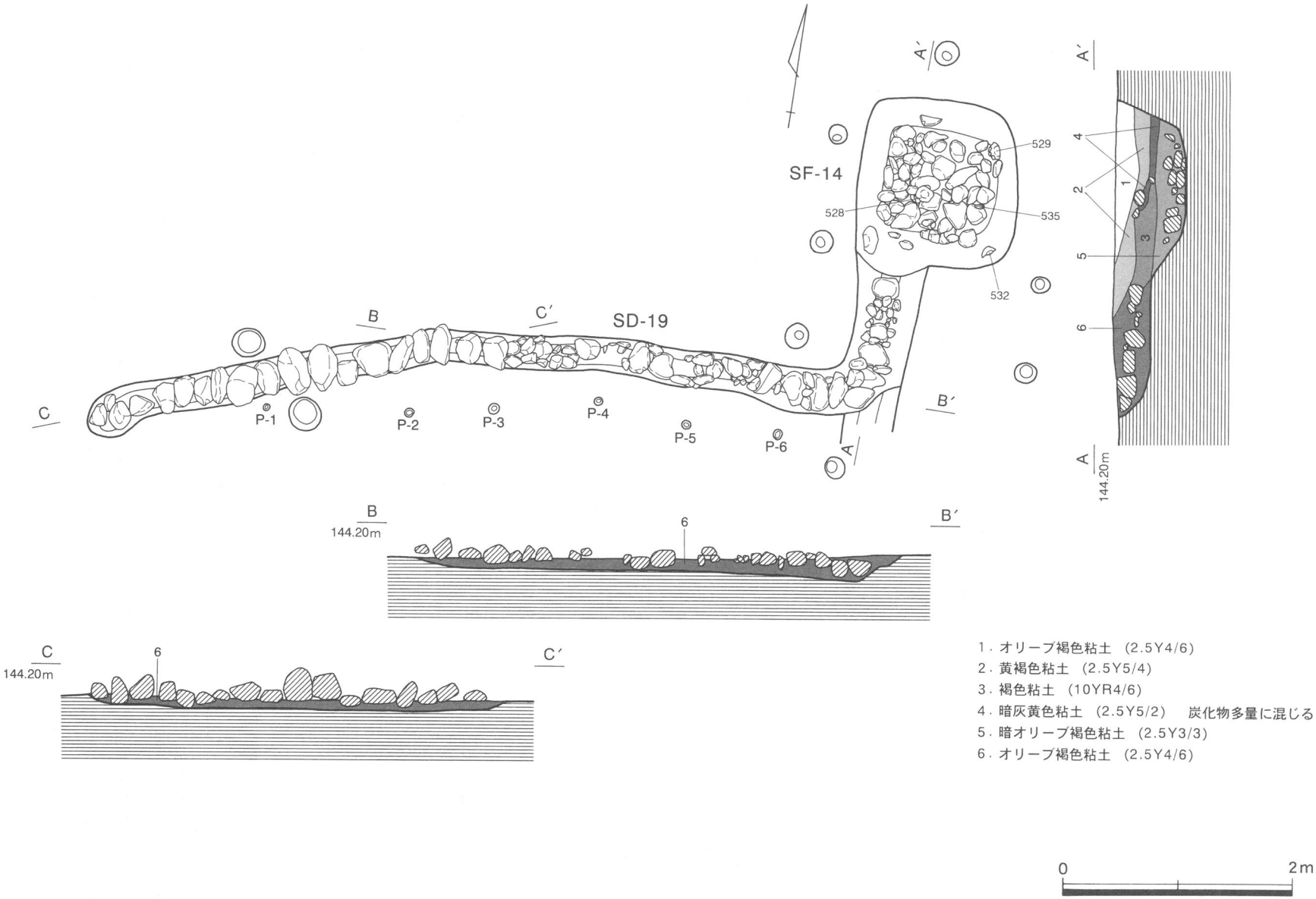


図57 SD-19・SF-14実測図 (1/50)

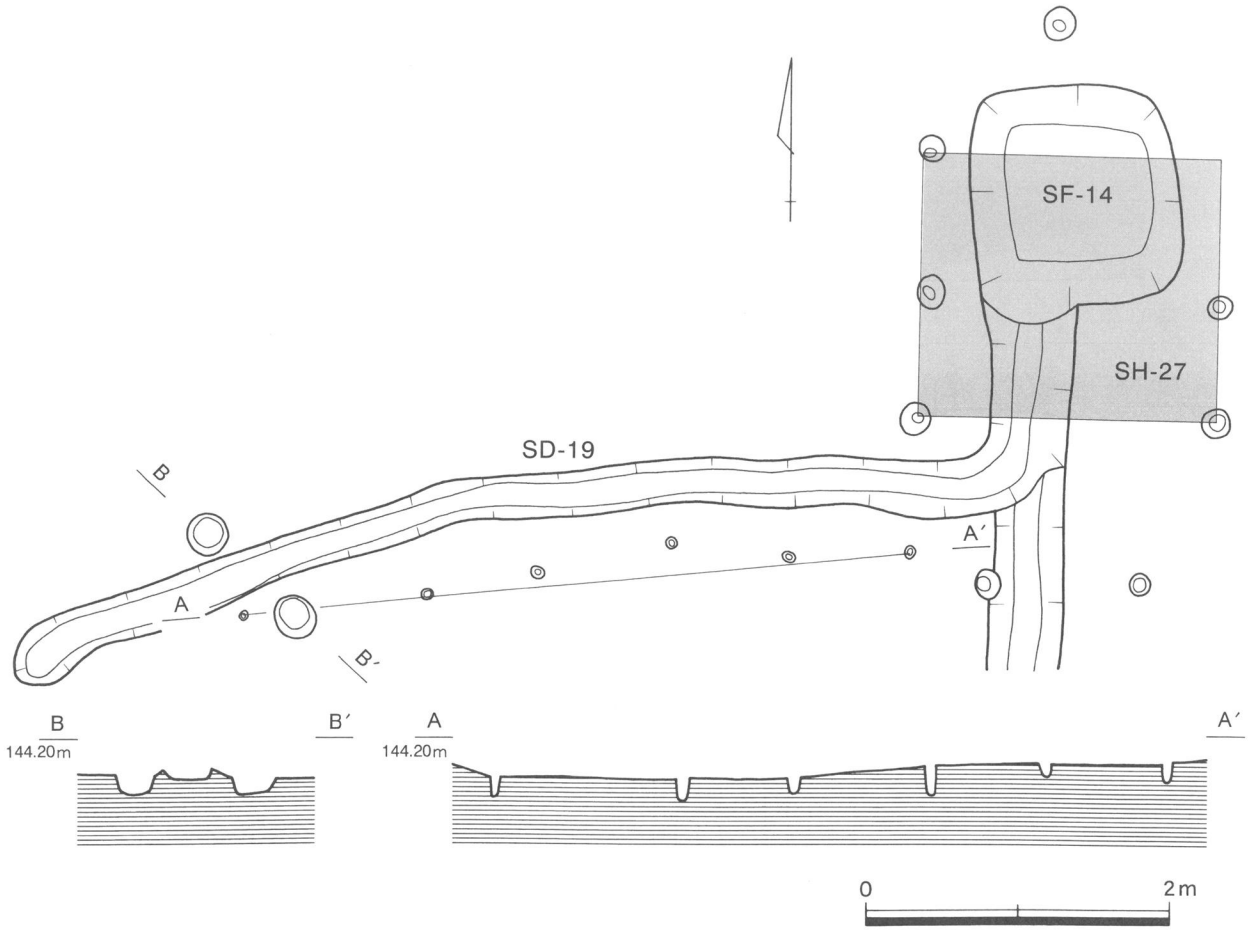


図58　SD-19・SF-14掘り方実測図（1/50）

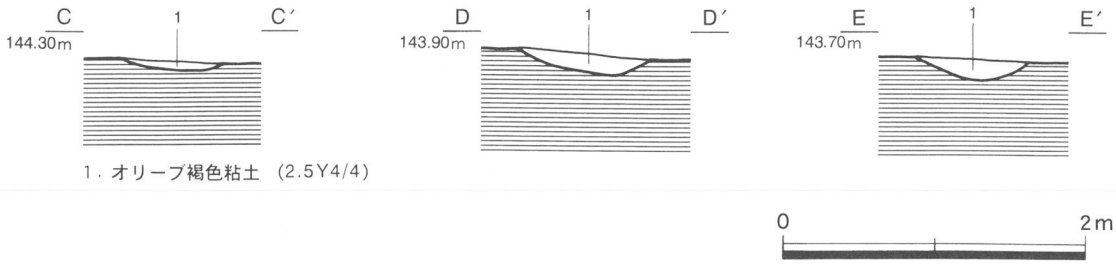


図59　SD-20・SD-21土層断面（1/50）

⑤　SD-20（図44・59左）

SD-20は平成12年に調査した47区・53区、平成13年度に調査した54区で検出した遺構である。SD-20は約4.5mの長さが検出でき、幅は最大で0.9mである。深さは最深部でも0.1m程度と浅いものであった。更に、北側に延びる可能性もある。出土遺物はなかったが、覆土や周囲の出土遺物から、12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。

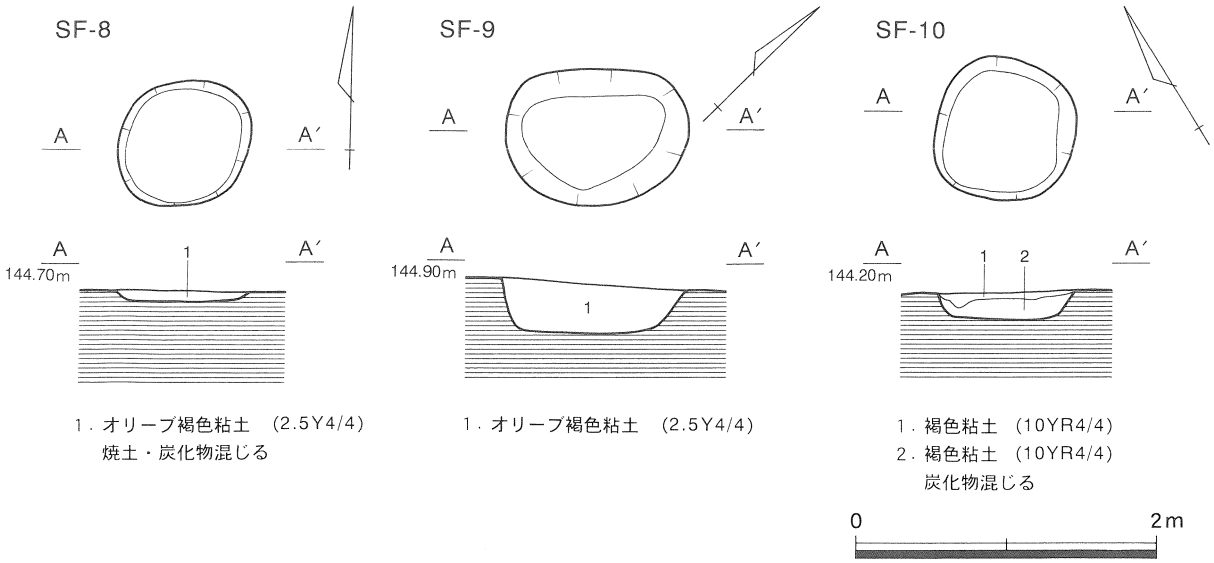


図60　SF-8～10実測図（1/50）

⑥　SD-21（図44・59中右）

SD-21は平成12年度に調査を行った53区で検出した溝である。概ね東西方向の溝で27.5mの長さに渡り検出できた。幅は最大で1.1m、深さは最深部で0.2mである。この溝は、更に西側や東側にも続くと考えられるが、隣接する調査区では検出できなかった。極浅い溝であるため、撹乱により消滅したものと考えられる。なお、SD-21は途中、西端部から14.5mのところで、北側に分岐する。分岐した溝は5.0mのびるが、その先は撹乱が深く、検出はできなかった。SD-21からは山茶椀等の破片が出土した。細片であり、図示しなかったが、概ねⅡ期～Ⅲ期に位置づけられるものである。そのため、SD-21は13世紀前半の遺構と考えられる。

⑷　土　坑

①　SF-8（図60左）

SF-8は平成11年度の26区の調査で検出した土坑である。平面形は円形に近い隅丸方形で、東西0.9m、南北0.8m、深さは0.1mである。遺物は出土しなかった。時期については断定ができないが、平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構と考えられる。性格についても不明である。

②　SF-9（図60中央）

SF-9もSF-8と同様、平成11年度に26区で検出した土坑である。不正形な円形の平面形態をとる。東西は最大で1.1m、南北は最大で1.2mである。深さは0.3mである。この土坑からは図155-555・556の山茶椀の椀と小皿が出土した。時期については、13世紀前半に位置づけられる。

③　SF-10（図60右）

SF-10は平成13年度に54区で検出した平面円形の土坑である。自然流路の北側に所在する。規模は、直径0.9m、深さ0.2mである。この土坑からの出土遺物はなく、時期や性格については不明である。ただし、周囲の出土遺物のほとんどが12世紀中葉から13世紀前半に位置づけられることを考えると、この土坑もほぼ同時期のものと考えられる。

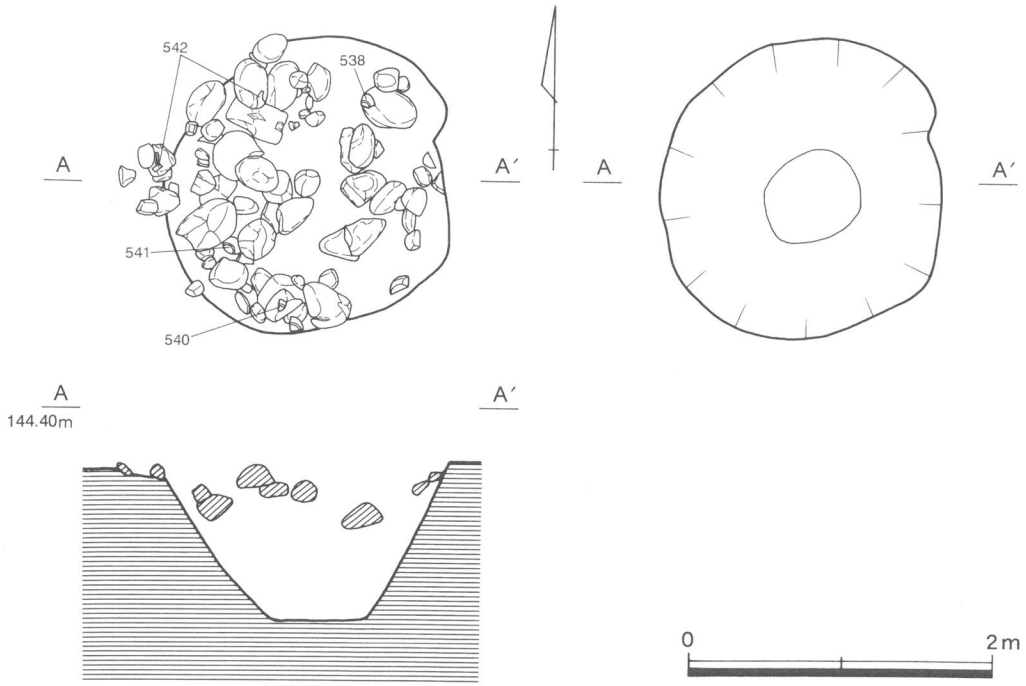


図61　SF-12実測図（1/50）

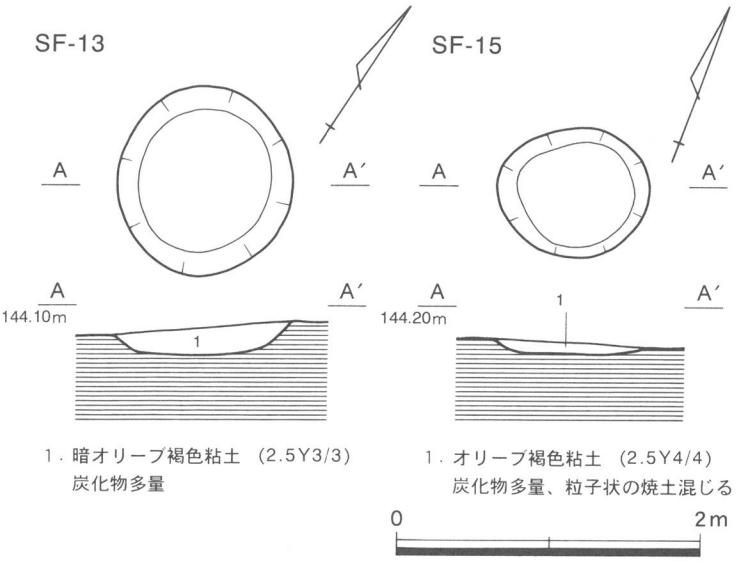


図62　SF-13(左)・SF-15(右)実測図（1/50）

④　SF-12（図61）

SF-12は平成13年度に調査した54区で検出した土坑である。検出時は土坑上面に礫が多数存在する状態が確認できた。土坑上面に存在した礫はいずれも円礫で、最大径５～40cm程度の大きさである。土坑の規模は直径2.0m、深さ1.1mである。この土坑からは山茶椀や釘、火打金が出土した（図153－538～549）。出土したのは土坑覆土の中でも上部の方で、礫と混在していた。なお、土坑覆土は分層することができず、埋められたかの状況を呈していた。この土坑は埋め戻しが行われ、最後に礫と山茶椀を投棄したようである。出土した山茶椀はⅠ期～Ⅲ期-１に位置付けられることから、土坑の廃絶年代は13世紀前半と考えられる。なお、性格については不明である。

⑤　SF-13（図-62左）

SF-13は３’区で平成11年度に検出した土坑で、SF-14の西に所在する。円形の平面形で、直径は1.2m深さが0.2mである。この土坑からは破片ではあるが山茶椀が出土した。周囲の出土遺物と併せて勘案すると、SF-13は12世紀中葉～13世紀前半に位置づけることができる。

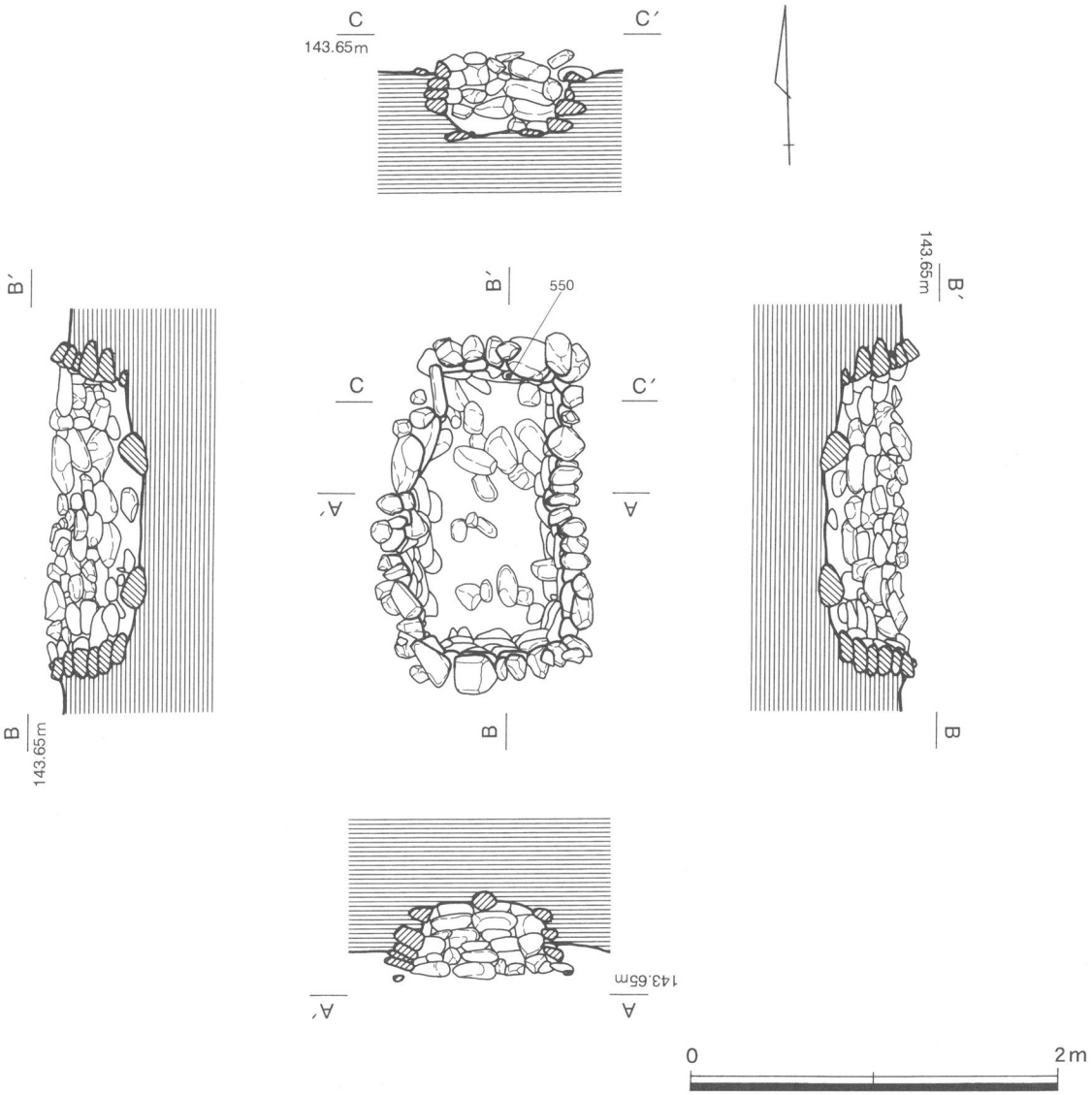


図63　SX-1実測図（1/40）

⑥　SF-15（図62右）

SF-15は平成12年度に調査した53区で検出した土坑である。平面円形の土坑で、直径0.9m、深さ0.1mの規模である。覆土からは山茶椀の細片が出土したが、時期を特定することはできない。ただし、この周囲から出土している山茶椀はいずれもⅠ期～Ⅲ期-１に位置づけられるので、この土坑も同時期の12世紀中葉～13世紀前半のものと考えられる。

なお、SF-11とSF-14については、それぞれSD-18、SD-19と併せて記したとおりである。

⑸　その他の遺構

①　SX-1（図63）

SX-1は自然流路SR-1の中に所在し、平成12年度の調査で53区において検出した石組みの遺構である。SF-16は南北に長い長方形の平面形を有し、長軸はN-1°-Eに方位をとる。規模は内側底面で計って、南北1.4m、東西0.5m、深さ0.5mである。石材は小口積み、あるいは横積みされる。使用されるいずれも円礫の自然石である。石材の規模は最大径20～40cm程度のものが多く、最も大きな石材でも最大60cm程

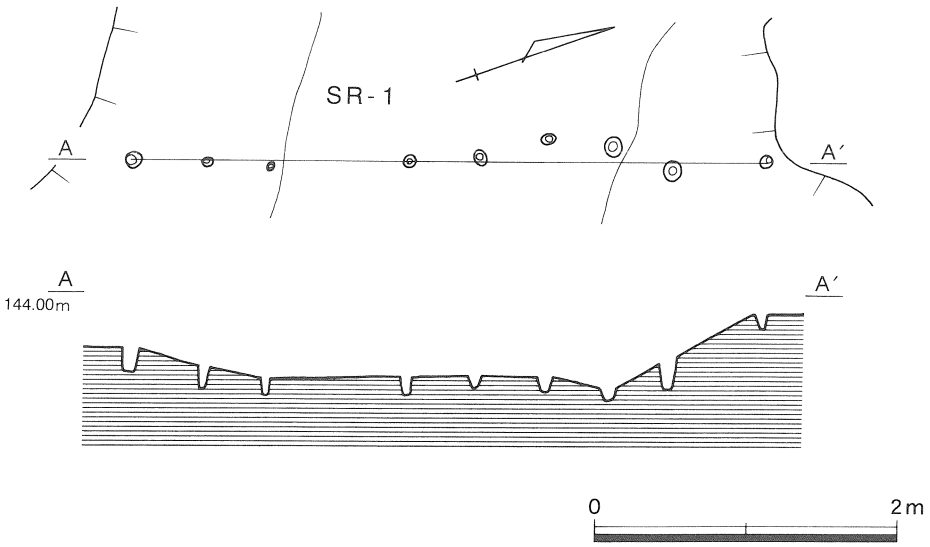


図64　SA-12実測図（1/50）

度の規模である。壁面はほぼ垂直に積み上げられているが、上方ではやや外に開く。底面には礫が散在していたが、敷きつめられた様子ではない。掘り方については、検出面、断面の両者で観察したが確認できなかったが、おそらく、SR-1がある程度埋没した段階で構築されたものであろう。なお、遺構からは灰釉陶器と山茶椀、青磁が出土している（図154－550～553）。山茶椀はⅠ期～Ⅱ期に位置づけられ、SX-2は12世紀中葉の遺構と考えられる。これは、SR-1から出土した山茶椀と大きく時期を違えるものではない。そのため、SX-1とSR-1は近似した時期のものと言える。SX-1の性格については、明言できないが、底部がSR-1の底面の砂層にまで達しており、調査時は常に水がしみ出てきたことなどを勘案すると、取水に関わる施設であった可能性を指摘できる。

② SA-12（図64）

SA-12はSR-1底面で検出した杭列である。この遺構は平成11年度に調査を実施した3'区で検出した。直径5～10cm程度の小穴9基が0.3～0.8m、概ね0.4m程度の間隔で並ぶ。その長さは4.2mである。小穴の深さは5～10cmである。出土遺物はなかったが、この遺構はSR-1を底面まで検出した段階で存在を確認できたので、SR-1底面出土土器からSA-12の年代を推測できる。SR-1底面からはⅠ期～Ⅲ期-1の山茶椀が出土している。SA-1は12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

遺構の性格については、自然流路SR-1を横切る様に設置されていることから、堰的な役割を担っていたと考えられる。おそらく、流路をせき止め、水位を上げることで、SD-18やSD-19に水を流し込むことを目的としていたのであろう。なお、3'区におけるSR-1の遺物出土量は、SA-12より上流（西側）の方が下流（東側）よりも幾分多い。

③ SX-2（図56）

SX-2は自然流路SR-1北岸になされた護岸と考えられる石積みである。この遺構は平成13年度における54区の調査で検出した。ミョウガ原遺跡を概ね東西に流れるSR-1は3区の東寄りでは進路を北東に変え、54区に突き当たり、向きを南東にむける。SX-2はSR-1が向きを直角的に変えた箇所に所在する。3.9mの長さに渡り検出でき、最大径10～40cmの円礫が使用されていた。SR-1の斜面に沿うように、一部は3段程度積み上げられている。特に検出範囲の西よりの部分の遺存状況が良好であった。本来的にはこの

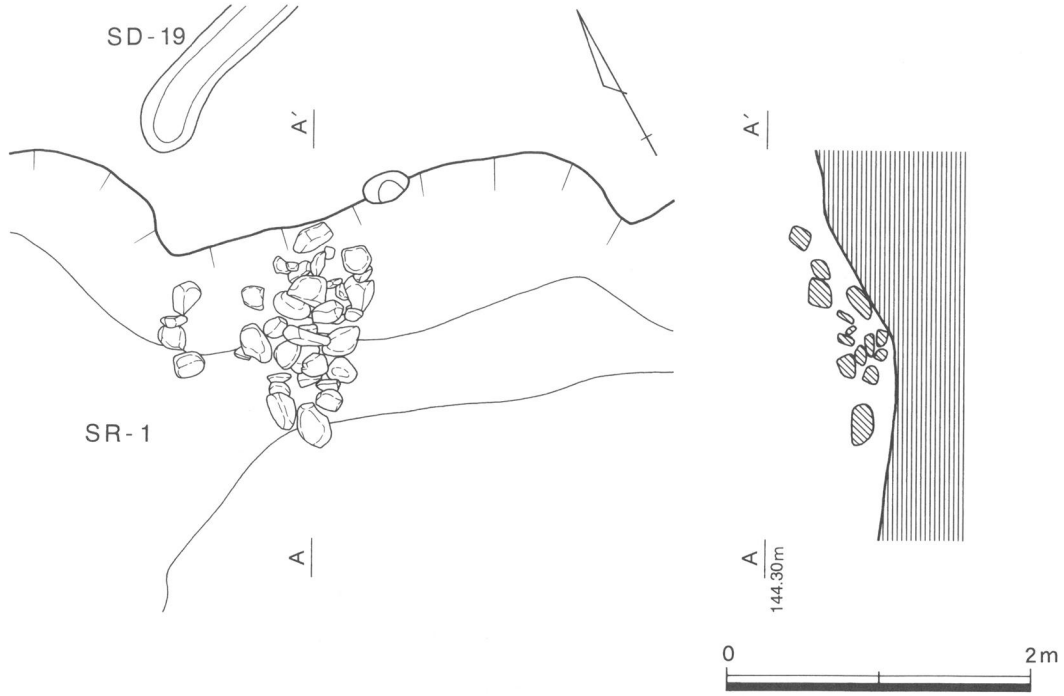


図65　SX-3実測図（1/50）

範囲に限なく積み上げられていた可能性がある。現状ではSR-1の底面には達していないが、後述するSX-3の状況を鑑みるとSX-2も元来、SR-1底面から石材が積み上げられていた可能性が高い。なお、この遺構の西端から約3.2m地点には、北からSD-18がつながっている。石組みの中に混ざり、Ⅰ期～Ⅲ期-１に位置づけられる山茶椀が出土したことから（図151－519・522・523)、この遺構は12世紀中葉～13世紀前半のものと考えられる。性格については、自然流路が大きく流れを変える突き当たりにあるので、護岸を目的としたものと考えられる。加えて、SD-18に水を導き入れる部分の補強的な役割も考えられる。

④　SX-3（図65)

SX-3は平成11年度における３’区の調査で検出した遺構である。SX-2からは南東へ約２ｍの距離にある。この遺構は直径10～40cm程度の円礫の自然石が不規則に積み上げられていた。ただし、石材の全てが元位置を留めるとは考えがたい。SX-3近辺におけるSR-1の覆土には10～20cm程度の円礫が幾つか混入していた。SX-3はより広範囲に広がっていた可能性があり、SX-2とつながっていたとも考えられる。この石組み中からの出土遺物はなかった。ただし、石材がSR-1底面から積み上げられていることから、SR-1底面出土遺物によって構築の時期をうかがえ、SX-3は12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。

なお、自然流路SR-1において、護岸の石組みと考えられる遺構はSX-2とSX-3のみであるが、54区の南東隅では、SR-1の覆土に20～40cm大の石材が多く存在した。そのため、この付近にも護岸石積みがなされていた可能性がある。

4．自然流路

(1) SR-1（図66）

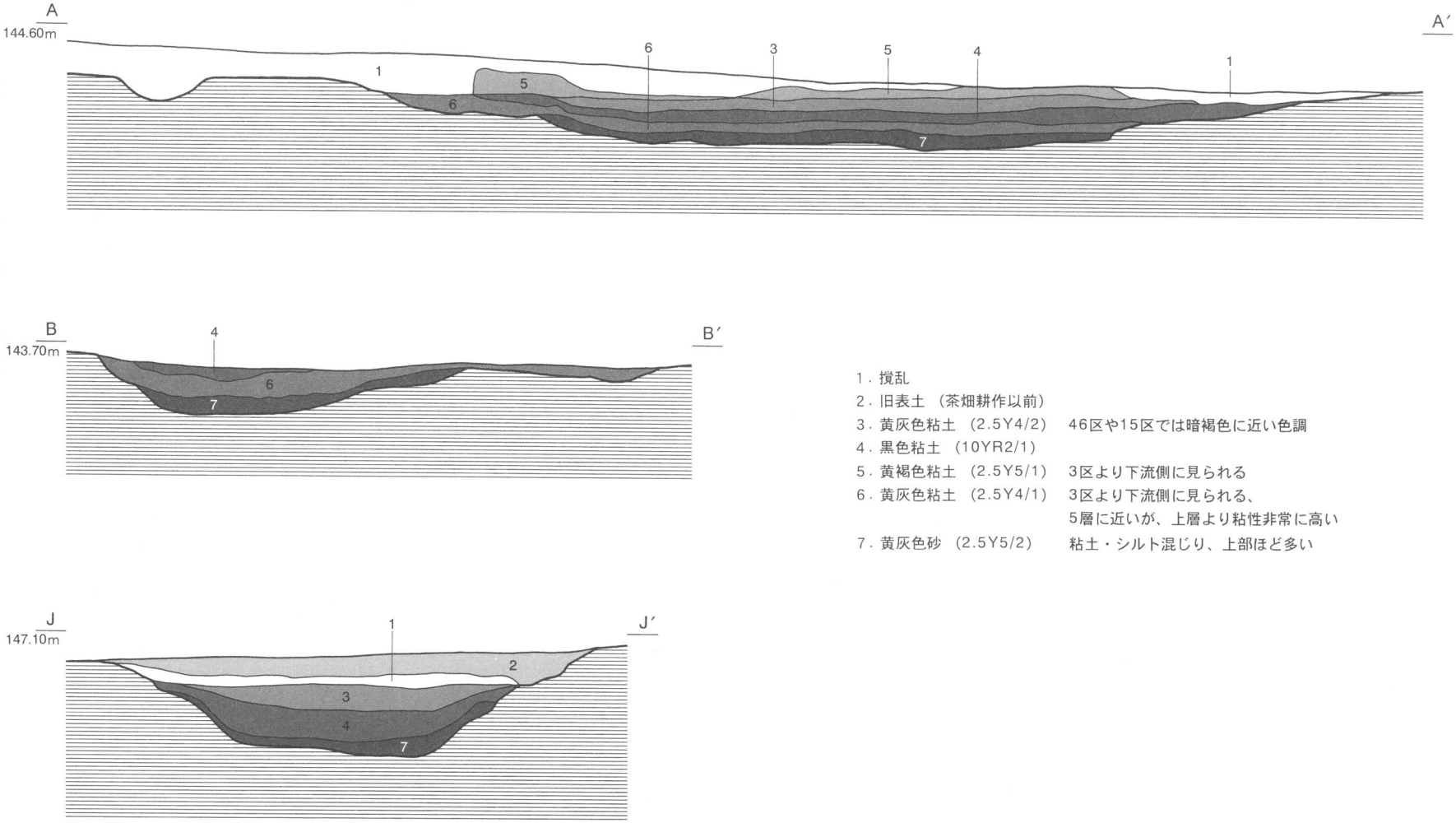
ミョウガ原遺跡は静岡空港関連遺跡の地点名ではＪ地点とＯ地点が相当する。集落跡の中心となるのはＯ地点であるが、ここでは、調査地点の中央部を西から東へと流れる自然流路を検出した。これがSR-1である。SR-1は複数の調査区にまたがる遺構である。この流路を検出した調査区は、西から順に46区、52区、15区、３区、54区、３'区、47区、53区である。

SR-1は46区を西端とする。調査の結果、SR-1がこれ以上西に広がることはないことが判明した。SR-1は46区から15区、３区の中央部までは僅かに南北へ蛇行して東へと向かう。３区の東半部分に至ると、北西に向きを変える。北に向かった流れは54区・３'区で直角的に南東へと折れ曲がり、47区・53区へと続く。53区の南に隣接する16区では深くまで入り込んだ撹乱のため、検出することはできなかったが、ここで向きを北北東へと転じるものと考えられる。そして、54区の東南端へとつながり、東へと流れていく。54区の東に隣接する17区では、16区と同様に撹乱のため、SR-1は検出されなかった。断定はしかねるが、おそらく、SR-1はこのまま東へ延び、遺跡の東側に存在する谷へとつながっていくと考えられる。なお、上記の調査区で検出したSR-1であるが、その検出状況は一様ではなかった。15区では遺構の中央部に沿うかのように、茶畑の区画と排水を兼ねた側溝があり、SR-1中央部には非常に深い撹乱が及んでいた。15区において、SR-1は遺構の上端を確認した程度である。

さて、SR-1は総延長が約190m、最大幅が約12m、最深部では検出面から1.1mの深さであった。このように、幅、深さがともにある遺構で、ミョウガ原遺跡の遺構集中箇所をほぼ南北に分断する流路として捉えられる。層位については、残存状況の比較的良好な46区と３'区、53区において、把握できた。底面はいわゆる牧ノ原礫層と呼ばれる数万～十数万年以前の大井川の堆積層にまで達しており、底面直上は黄灰色の砂層で、底面に近いところほど、砂や小礫が多くまざっている。黄灰色砂層の上には黄褐色粘土層が広がる。その上には、黒色粘土、黄褐色粘土、旧表土の順に堆積している。もっとも、場所により色調や土質に差異があり、堆積の程度も一様ではない。

ところで、SR-1は自然流路であるが、人為的に改変されている箇所が存在する。それは54区や３'区で見られた流路北岸のSX-2やSX-3である。この２者は護岸施設と考えられる遺構である。また、SR-1底面で検出したSX-12は堰と考えられる杭列である。なお、53区で検出したSX-1はSR-1が、ある程度埋没してから構築されたものと考えられる遺構である。上記の遺構以外にも、SR-1は人為的な改変を受けている可能性がある。それは遺物の出土状況から推測できる。SR-1では最下層、並びに底面から12世紀中葉～13世紀前半の山茶椀を出土している。ミョウガ原遺跡においては、SR-1以南では灰釉陶器も多く出土しているが、灰釉陶器を主体とした堆積層はSR-1には見られなかった、また、これより古い時代の堆積層についても存在しなかった。これらのことから、SR-1は13世紀前半に浚渫された可能性が考えられる。浚渫が行われたのが、SR-1の全域であるのかは不明であるが、SR-1に手が加わっていることは確かであろう。

遺物は、山茶椀を主体とした遺物が各調査区の各層位から出土したが（図123～138)、特に３'区周辺から集中して出土した（図129～133)。出土した遺物の中には墨書土器もみられた。山茶椀は大半がⅠ期～Ⅲ期に位置づけられるが、これは最下層から最上層まで同様である。特定の層位が特定の型式に偏ることはみられなかった。SR-1の廃絶年代としては13世紀前半に位置づけられる。これは集落が廃絶される時期と同時期である。なお、ミョウガ原遺跡は平安時代後半から集落が形成される。SR-1が何時から利用されているのかは断定できないが、集落の水源を考えた場合、他に確たる水源がないことから、SR-1は集落形成が開始された当初から利用されていた可能性がある。



1．撹乱
2．旧表土 （茶畑耕作以前）
3．黄灰色粘土 （2.5Y4/2） 46区や15区では暗褐色に近い色調
4．黒色粘土 （10YR2/1）
5．黄褐色粘土 （2.5Y5/1） 3区より下流側に見られる
6．黄灰色粘土 （2.5Y4/1） 3区より下流側に見られる、5層に近いが、上層より粘性非常に高い
7．黄灰色砂 （2.5Y5/2） 粘土・シルト混じり、上部ほど多い

図66 SR-1土層断面実測図 (1/60)

5．南西部の遺構群

南西部は平成12年度に調査を行った34区、46区、52区、更に、平成13年度に調査を行った54区の西半に相当する（図68）。

(1) 掘立柱建物跡

① SH-30（図67）

SH-30は東西３間、南北２間の掘立柱建物跡で、平成12年度の調査で検出した。桁行方位はN-60°-Wで、規模は桁行5.0m、梁行4.6mである。梁間は1.4～1.7mで概ね1.6mである。桁間は1.8～2.3mである。柱穴規模は直径20cm前後、深さ10～40cmである。P-9からうかがえる柱の直径は15cm程度である。なお、柱穴からの出土遺物はなかったが、周囲からは山茶椀や灰釉陶器が出土している。時期は特定し難いが、前項までに述べた掘立柱建物跡とは桁行方位が異なることや、出土遺物は東山72号窯式併行期の灰釉陶器が中心であることから、SH-30は11世紀代の遺構と考えられる。

② SH-31（図69）

SH-31は東西２間、南北３間の掘立柱建物跡で、平成12年度の調査で検出した。桁行方位はN-13°-E、規模は梁行4.6m、桁行8.6mである。柱穴間距離は桁間が1.9～2.4mで、平均すると2.1m前後である。梁間は2.5～3.0mで、概ね2.6～2.7mである。柱穴の規模は直径20cm前後、深さ10～40cmである。

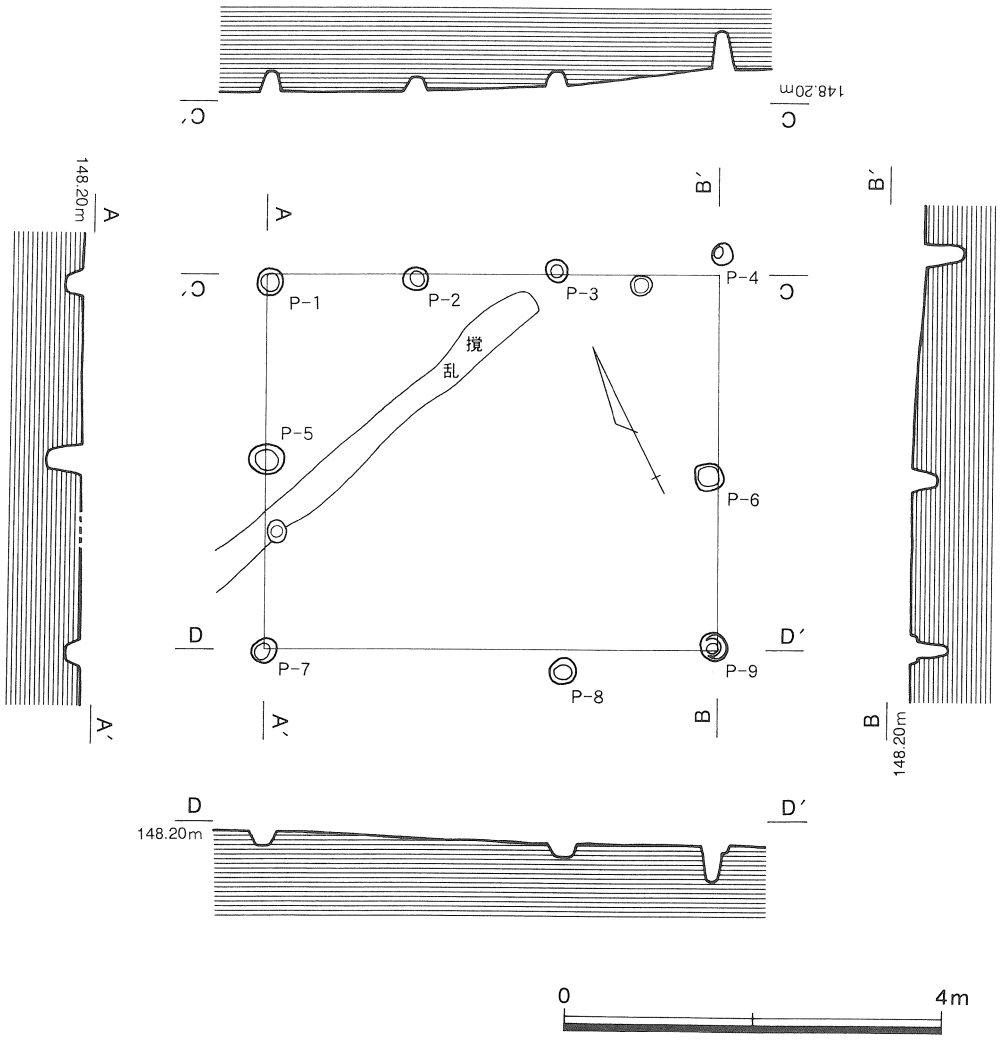


図67　SH-30実測図（1/80）

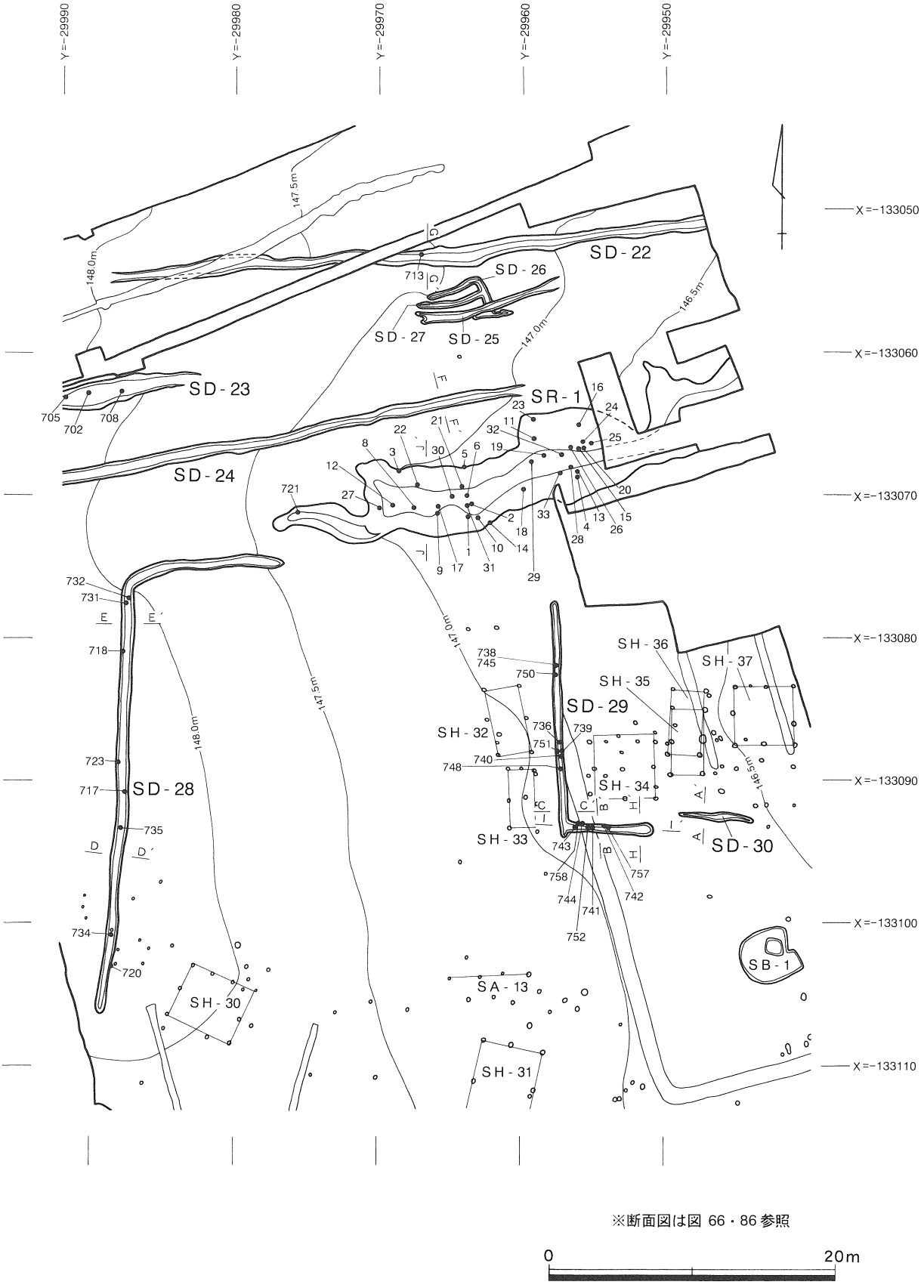


図68　調査区南西部の遺構群①（1/400）

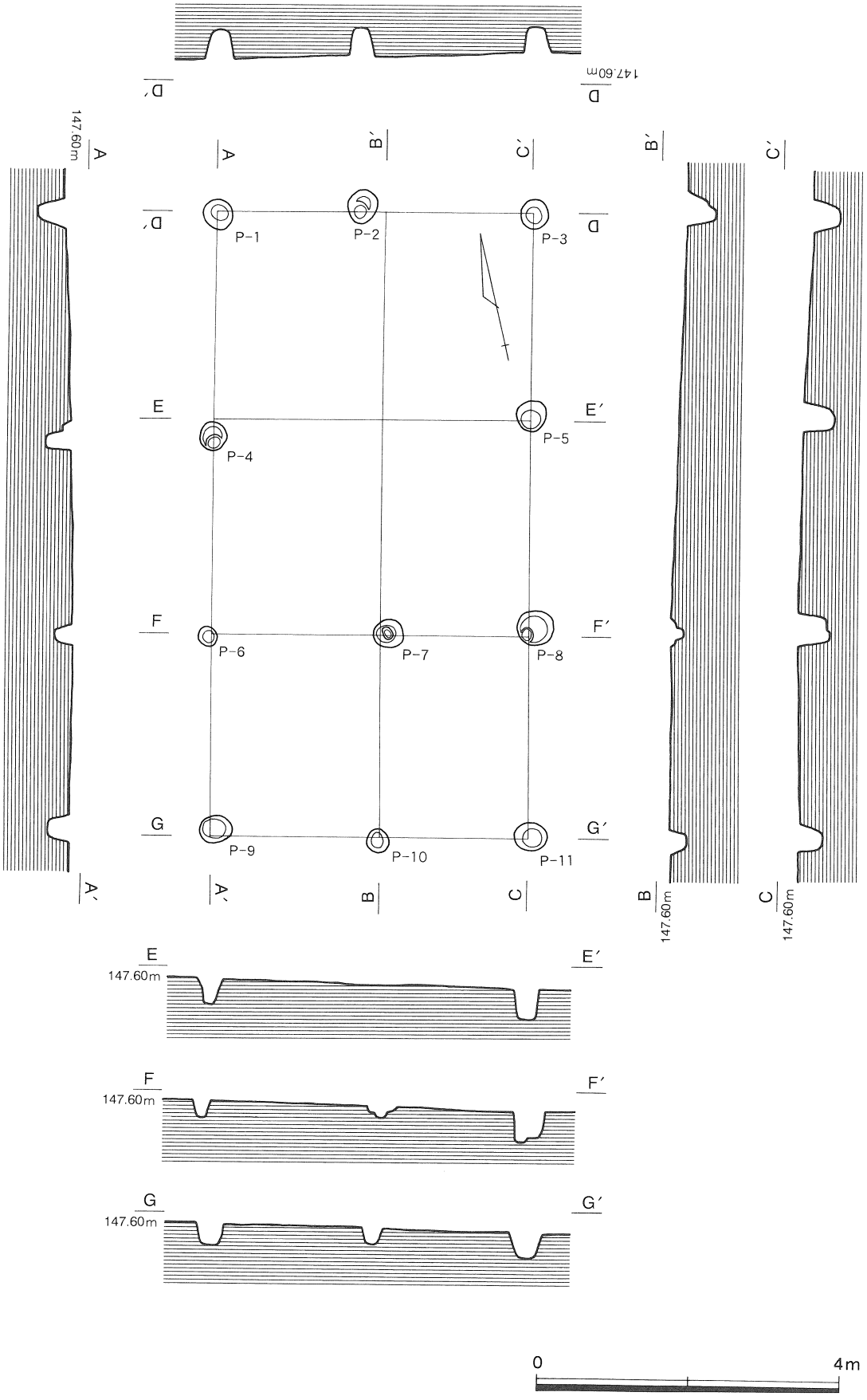


図69　SH-31実測図（1/80）

柱穴のうち、P-11からは11世紀代に位置づけられる灰釉陶器が出土し（図167－767）、SH-31はこの時期の掘立柱建物跡と考えられる。なお、SH-31はミョウガ原遺跡南西部の掘立柱建物跡の中ではSH-39とともに、最も規模の大きい建物跡である。

なお、P-5を間柱と捉えたが、P-7とP-8との間の柱穴が存在した可能性もあり、総柱の掘立柱建物跡であったことも十分考えられる。

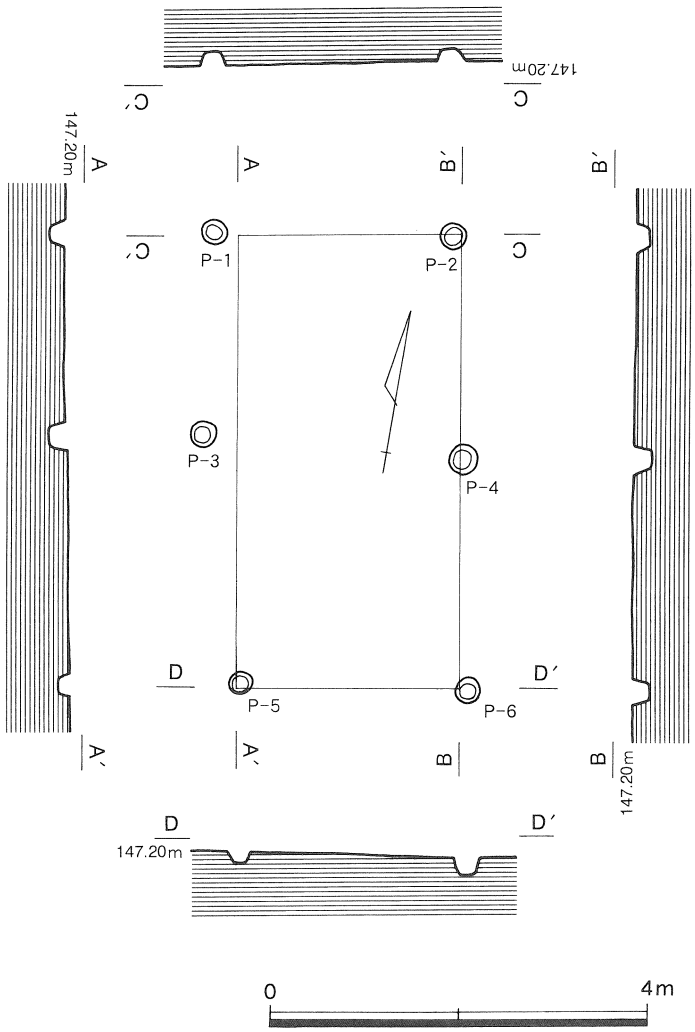


図70　SH-32実測図（1/80）

③　SH-32（図70）

SH-32は平成12年度に検出した東西１間、南北２間の掘立柱建物跡である。SH-32の１ｍ南にはSH-33が所在する。桁行方位はN-8°-Wで、梁行3.0m、桁行5.0mである。柱穴間距離は桁間が2.4～2.7m、梁間が2.1～2.6mである。柱穴規模は直径20～30cm、深さ20cm前後である。

柱穴からの出土遺物はなかったが、周囲からは灰釉陶器や山茶椀が出土している。時期は断定し難いが、SD-28やSD-29との位置関係を勘案するとSH-32は12世紀中葉～13世紀前半の遺構の可能性が高い。

④　SH-33（図71）

SH-33は平成12年度の調査で検出した東西１間、南北２間の掘立柱建物跡である。約１ｍ北にはSH-32、約４ｍ東北東にはSH-34が所在する。この掘立柱建物跡の桁行方位はN-0°-W、規模は梁行2.4m、桁行4.8mである。柱穴間距離を見ると、桁間は1.9～2.0m、梁間は2.0～2.3mである。P-1とP-3間にみられるP-2は間柱と考えられる。柱穴規模は直径30cm前後、深さ10～20cmである。柱穴から出土遺物はなかった。周囲からは、灰釉陶器と山茶椀が出土している。時期は特定し難いが、12世紀中葉～13世紀前半の溝と考えられるSD-29やSD-28との位置関係を考えると、SH-33は12世紀中葉～13世紀前半の掘立柱建物跡と捉えられる。

⑤　SH-34（図72）

SH-5は東西２間、南北２間の総柱の掘立柱建物跡である。平成12年度の調査で検出した遺構で、約4.5m西北西にはSH-32、約４ｍ西南西にはSH-34、約１ｍ東にはSH-35とSH-36が存在する。なお、SH-32やSH-33との間にはSD-29が所在する。このSD-29は「L」字状の溝で、SH-34はこの溝に西側と南側

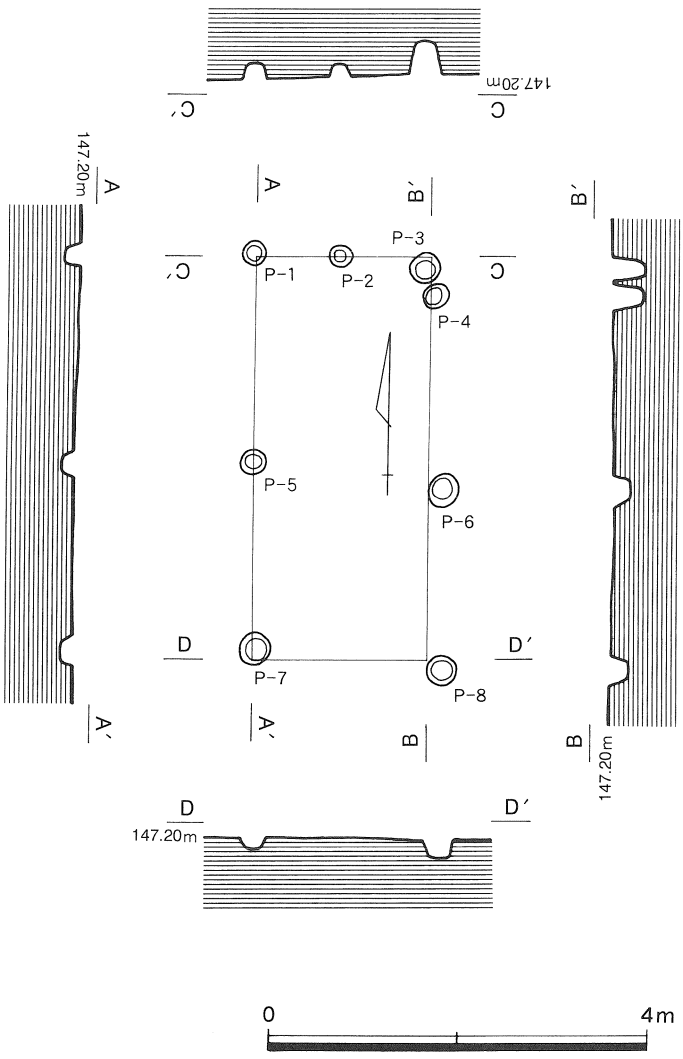


図71　SH-33実測図（1/80）

をとり囲まれる。SH-34とSD-29との距離はSH-34の西側で約２ｍ、南側で約1.5ｍである。

SH-34の規模は東西4.9m、南北5.0ｍである。なお、南北方向はN-2°-Wに方位をとる。柱穴間距離をみると、東西はP-2とP-3の間が2.6ｍとやや広いが、その他は2.0～2.2ｍである。南北方向は1.9～2.4ｍである。柱穴規模は直径30cm前後、深さ10～40cmである。遺物は柱穴のP-6から灰釉陶器、P-7から山茶椀の小皿が出土した（図167-768・769）。出土遺物と、SD-29との位置関係から、SH-34は12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。なお、南西隅の柱穴については検出することができなかった。SH-34はSD-29で区画された範囲に所在する４棟の掘立柱建物跡の中では最も規模の大きな建物跡である。

⑥　SH-35（図74左）

SH-35は平成12年度の調査で、後述するSH-36と重複する掘立柱建物跡である。SH-35はSD-29により区画された範囲に所在し、約１ｍ西にはSH-34、約２ｍ東にはSH-37がある。

SH-35は東西１間、南北２間、桁行方位はN-1°-Eである。規模は梁行2.6m、桁行5.1ｍである。柱穴間距離は桁間2.2～2.3m、梁間2.1～2.4ｍである。柱穴規模は直径30～40cm、深さ30cm前後である。ただし、P-4は一辺50cmの方形の掘り方を持つ。

遺物はP-4から山茶椀が出土した（図167-771）。出土遺物とSD-29との位置関係からSH-35はSH-34と同様に12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。

⑦　SH-36（図74右）

SH-36は平成12年度の調査で検出した掘立柱建物跡で、先述したSH-35と重複して検出された遺構である。SD-29により区画された範囲に所在し、約１ｍ西にはSH-34、約２ｍ東にはSH-37がある。

SH-36は東西１間、南北２間の掘立柱建物で、桁行方位はN-4°-Eである。規模は梁行2.7m、桁行5.0ｍである。柱穴間距離は桁間が2.2m、梁間が2.1～2.5ｍである。柱穴規模は直径30～40cm、深さ10～40cmである。なお、建物東辺で、P-3に対応する柱穴については、撹乱のため、検出できなかった。

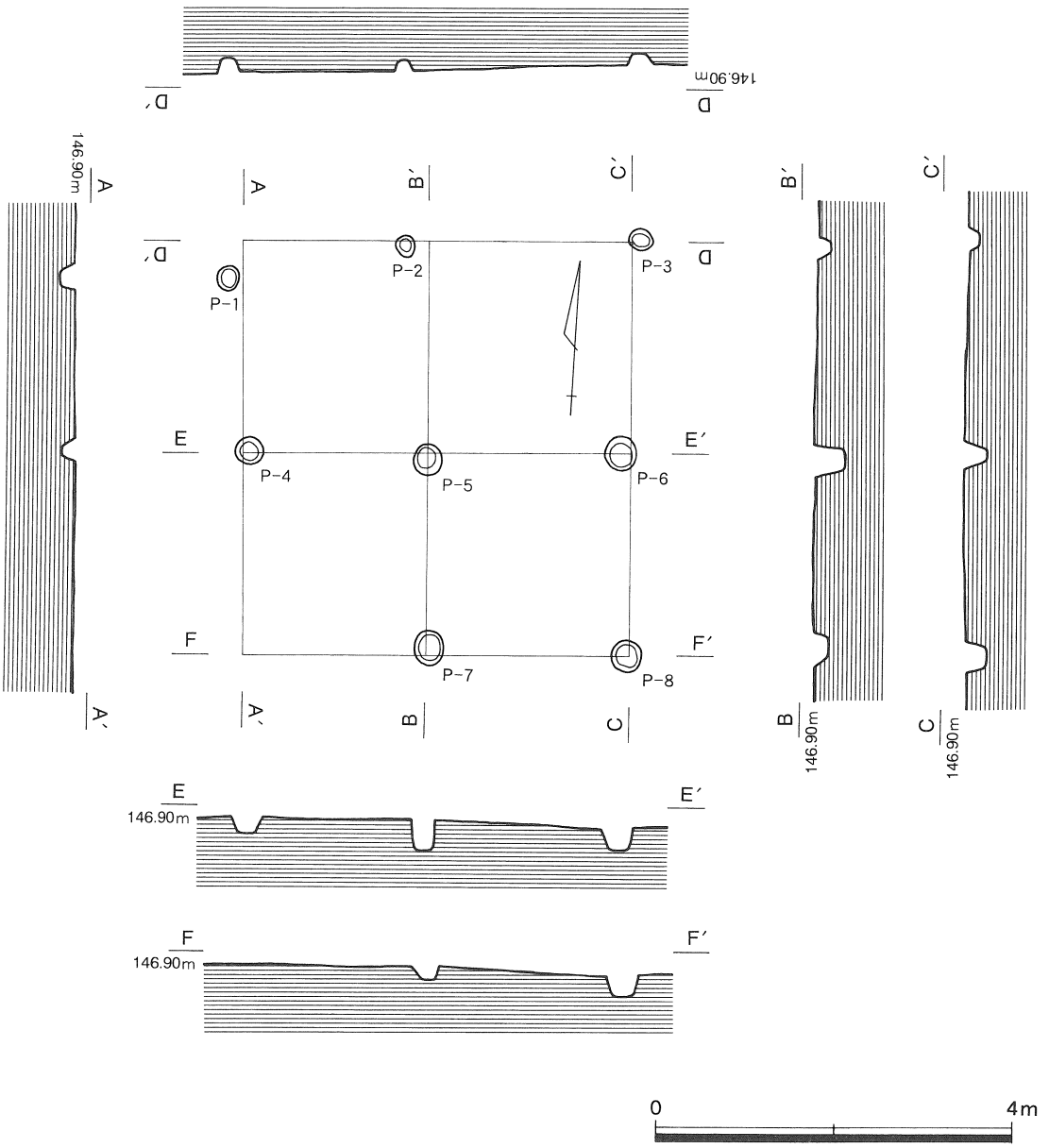


図72　SH-34実測図（1/80）

柱穴からの出土遺物はなかったため、時期については断定ができない。ただし、周囲から灰釉陶器や山茶椀が出土している。これらの出土遺物と、12世紀中葉～13世紀前半の遺構であるSD-29との位置関係を考えると、SH-36は12世紀中葉～13世紀前半の掘立柱建物跡と捉えられる。

⑧　SH-37（図73上）

SH-37は平成12年度の調査で検出した東西２間、南北２間の掘立柱建物跡である。SH-35・SH-36の約２ｍ東に所在する。規模は東西4.5m、南北4.5m、南北方向の柱列はN-1°-Wに方位をとる。柱穴間距離は東西が1.95～2.1m、南北が1.5～2.6mである。柱穴規模は直径30～40cm、深さ10～30cmである。

柱穴からの出土遺物はなかったが、先述したSH-34～SH-36と同様に12世紀中葉～13世紀前半の遺構と考えられる。

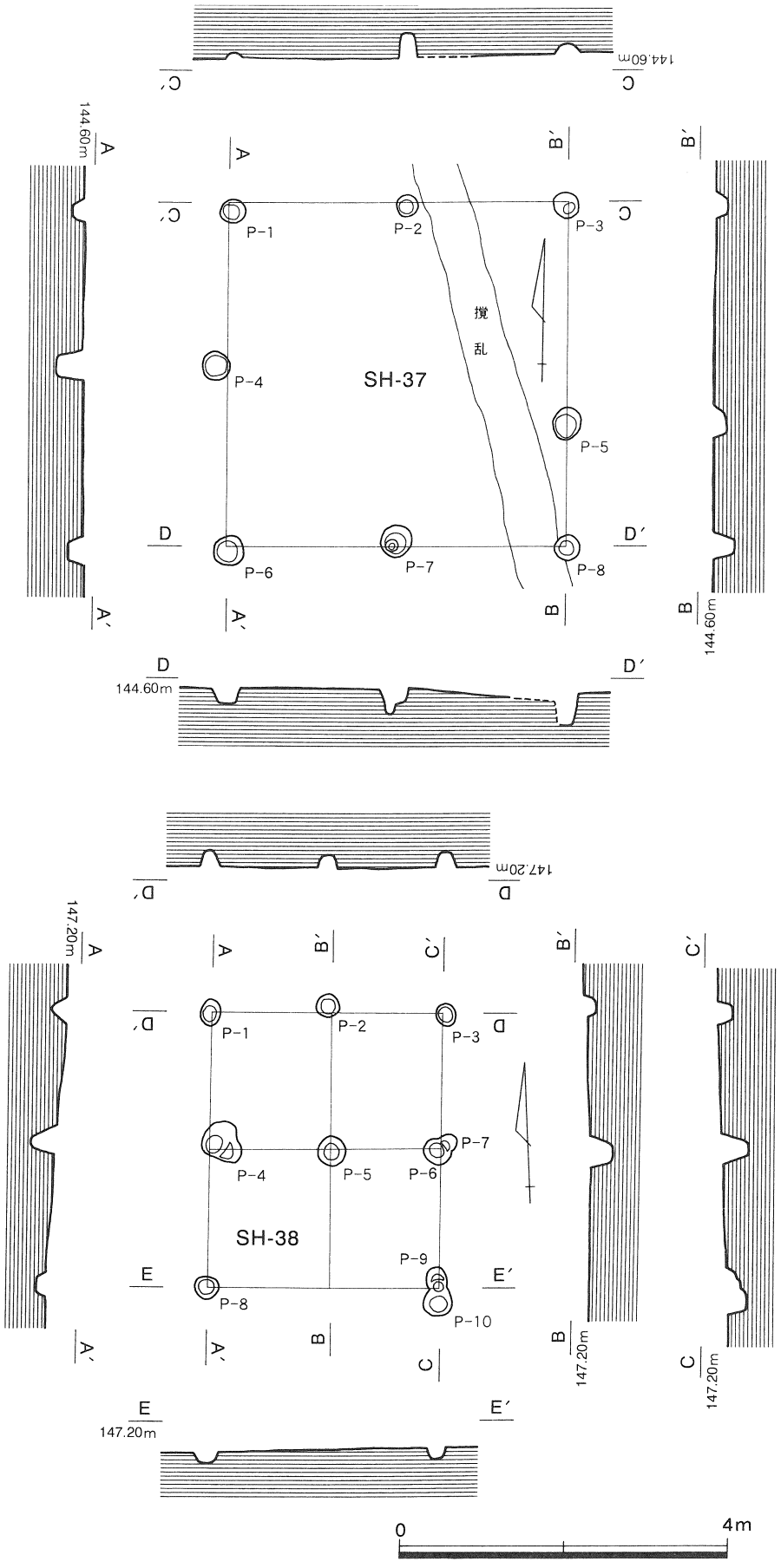


図73　SH-37(上)・SH-38(下)実測図（1/80）

⑨　SH-38（図73下）

SH-38は平成12年度の調査で検出した遺構である。東西２間、南北２間の総柱の掘立柱建物跡で、規模は東西3.1m、南北3.8mである。南北方向の柱列は方位をN-4°-Eにとる。柱穴間距離は東西が1.3～1.4m、南北が1.6～1.8mである。柱穴の規模は直径30～40cm、深さ15～30cmである。P-10底面からは折戸53号窯式併行期に位置づけられる灰釉陶器の椀が１点出土した（図76）。底部のみの破片であるが、墨痕が底面に残り、転用硯と考えられる（図168－772）。周囲の出土遺物も併せて勘案すると、SH-38は10世紀後半～11世紀前半の掘立柱建物跡と考えられる。

⑩　SH-39（図77）

SH-39は平成12年度の調査で検出した総柱の掘立柱建物跡で、東西３間、南北２間、桁行方位はN-71°-Wである。規模は梁行4.8m、桁行8.4mである。柱穴間距離は梁間が2.6～2.8m、桁間が1.9～2.3mである。柱穴の規模は直径20～30cm、深さ20～30cmである。

SH-39はP-9の柱穴から灰釉陶器の破片が出土した（図168－773）。灰釉陶器は周囲からも多く出土

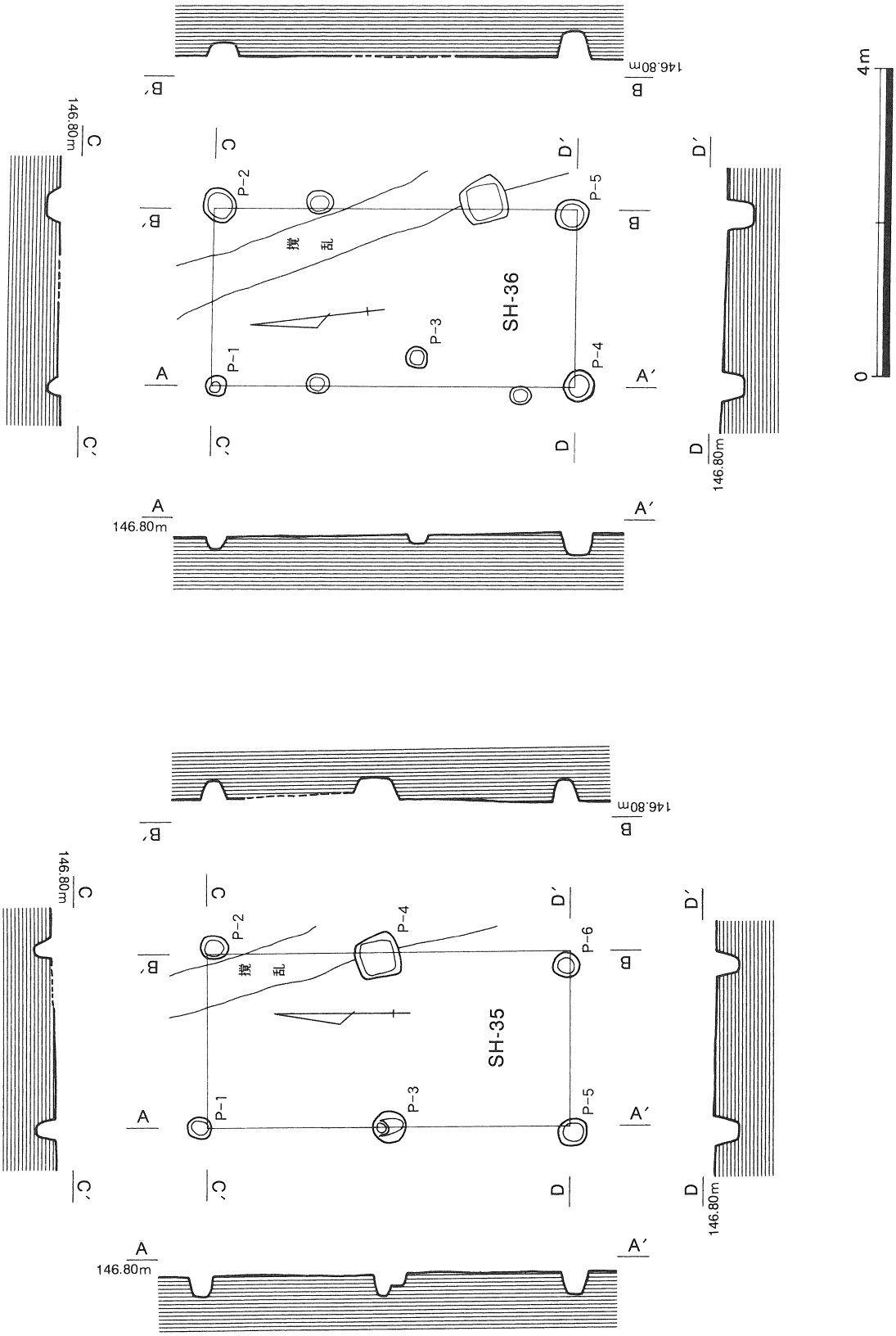


図74　SH-35(左)・SH-36(右)実測図 (1/80)

図75　調査区南西部の遺構群②（1/400）

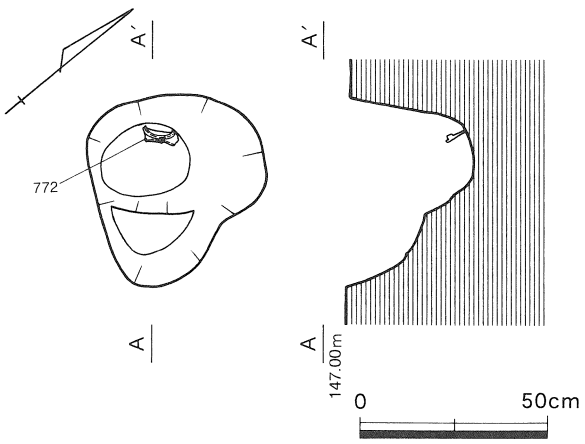


図76　SH-38　P-4遺物出土状況図（1/20）

した。これらの遺物から、SH-39は11世紀代の掘立柱建物跡と考えられる。

⑪　SH-40（図78）

SH-40は東西３間、南北３間の掘立柱建物跡で、平成12年度の調査において検出した。5.5m南南西にはSH-42が所在する。規模は東西4.8m、南北4.2mである。南北の柱列はN-3°-Eに方位をとる。柱穴間距離は東西が1.3～1.4m、南北1.4～2.1mである。これまでに述べたミョウガ原遺跡南西部における掘立柱建物跡と比較すると、柱穴間距離がや

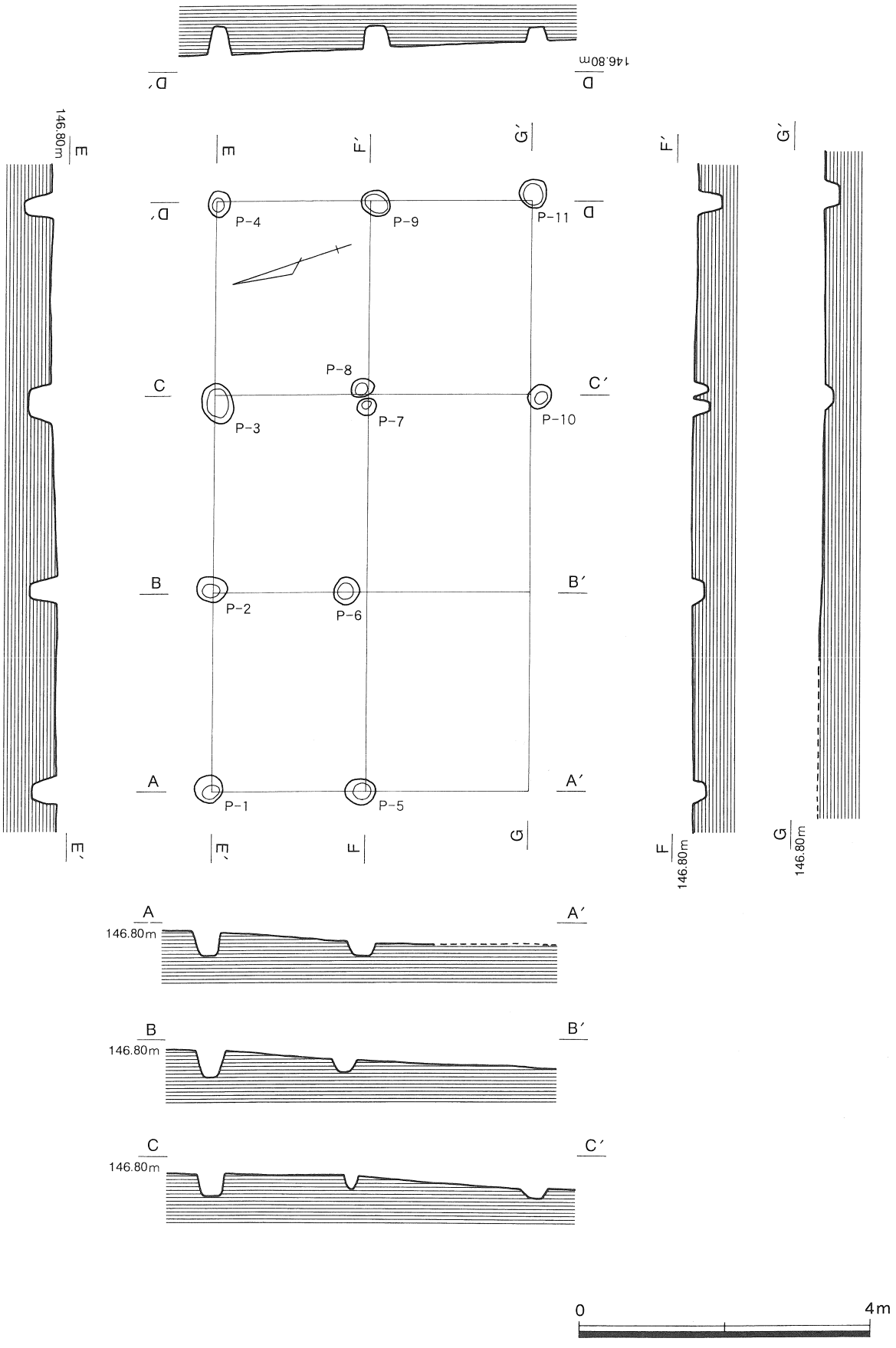


図77　SH-39実測図（1/80）

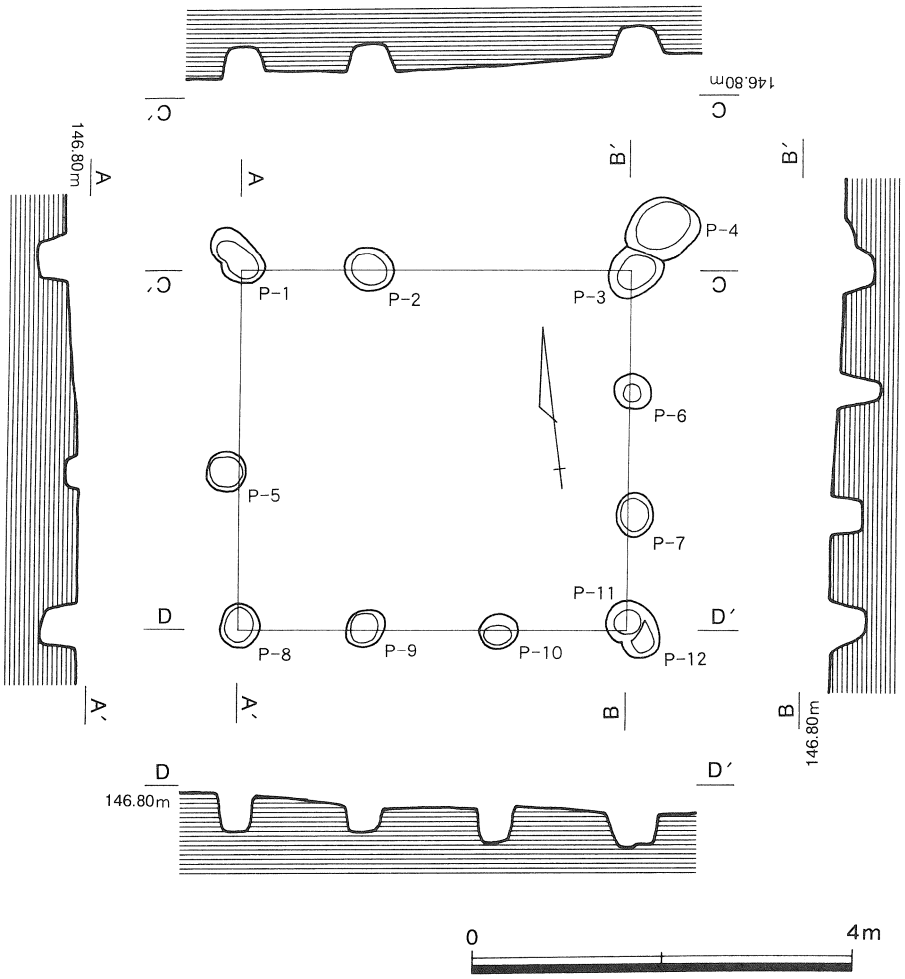


図78　SH-40実測図（1/80）

や狭いといえる。柱穴の規模は直径40cm前後、深さ10～40cmである。なお、北辺においてP-10と対応する柱穴、西辺においてP-6と対応する柱穴は検出できなかった。

柱穴からの出土遺物はなく、時期を特定できないが、周囲からは灰釉陶器と山茶椀が出土している。遺構の時期については特定し難いが、出土遺物の主体となるのは折戸53号窯式～東山72号窯式の灰釉陶器であることから、11世紀代の遺構の可能性がある。なお、後述するSH-41との新旧については不明である。

⑫　SH-41（図79）

SH-48は平成12年度に調査を実施した34区で検出した東西２間、南北２間の掘立柱建物跡である。この遺構はSH-40と柱穴の一部を共有し、約0.5m南にはSH-42が所在する。規模は東西5.0m、南北4.9m、南北の柱列はN-13°-Wに方位をとる。柱穴規模は直径40cm前後、深さ20～40cmである。なお、東辺で西辺のP-4と対応する柱穴は検出されなかった。中穴間距離は東西が1.1～1.3m、南北が1.8～2.5mである。

SH-41は柱穴からの出土がなかった。時期は、SH-40と同様に特定はできない。ただし、10世紀後半～11世紀代の遺構と考えられるSF-17より後出するものと考えられるため、11世紀以降の遺構と考えられる。

⑬　SH-42（図80）

SH-42は平成12年度に調査を実施した34区で検出した遺構である。0.5m北にはSH-41、5.5m北北東にはSH-40が所在する。東西３間、南北２間の総柱の掘立柱建物であるが、南西隅の柱穴を検出することはできなかった。桁行方位はN-90°-Wで、桁行5.3m、梁行4.3mの規模である。柱穴間距離は梁間が1.4～1.9mで、平均すると1.9mである。桁間は1.7～2.2mで、平均すると2.0mである。柱穴の規模は20～40cm、深さ10～30cmである。

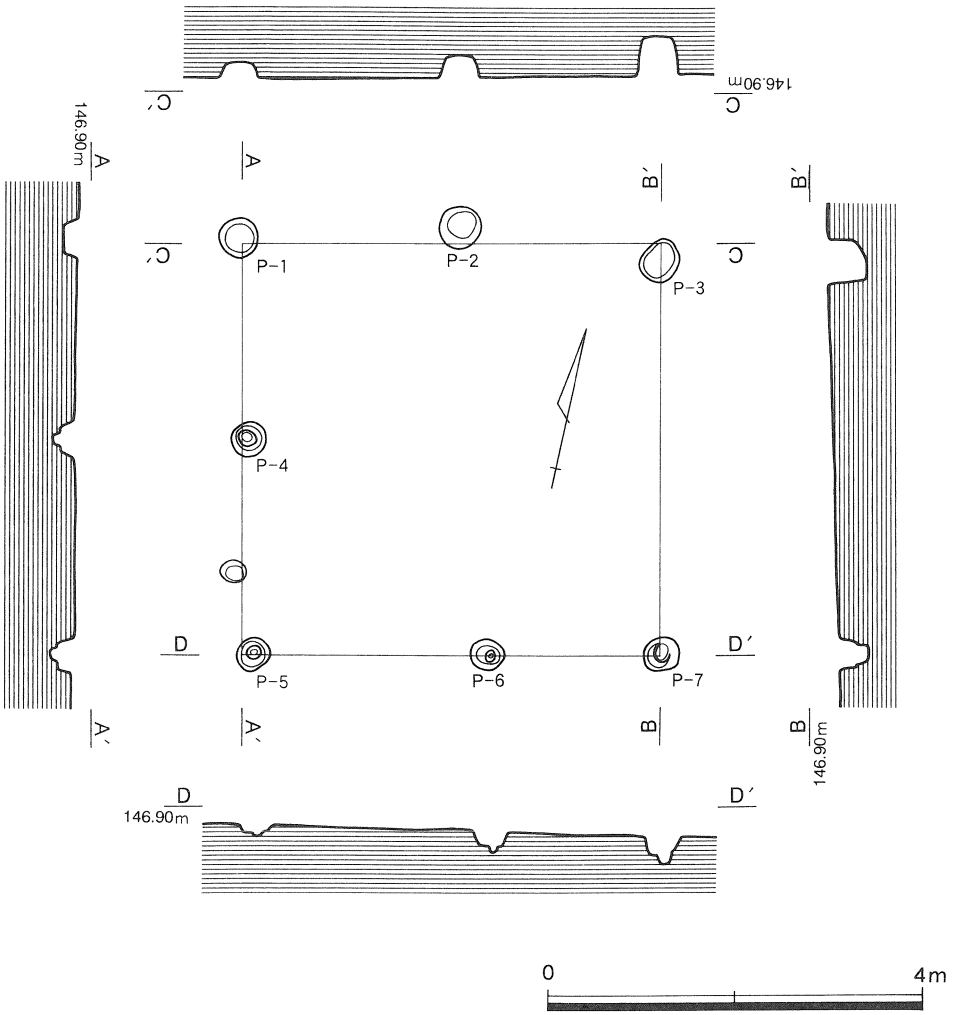


図79　SH-41実測図（1/80）

柱穴からの出土遺物はなかった。時期は特定できないが、周囲の出土遺物において、中心となるのは東山72号窯式併行期の灰釉陶器である。そのため、SH-42は10世紀～11世紀の掘立柱建物跡の可能性が考えられる。なお、SH-40～SH-42の周囲には掘立柱建物跡として確認できなかったものの、多数の柱穴がある。これらの幾つかは、本来的には掘立柱建物を構成していた柱穴である可能性もある。調査では３棟を復原したのみであるが、他にも数棟の掘立柱建物が存在したことも考えられる。

⑭　SH-43（図81）

SH-43は東西２間、南北１間の掘立柱建物跡である。平成12年度の調査で検出した。この遺構の約6m北北西にはSB-2が所在する。桁行方位はN-89°-Wで、規模は桁行3.4m、梁行2.2mである。柱穴間距離梁間は1.3～1.4m、桁間が1.6mである。柱穴の規模は直径40cm前後、深さ20～30cmである。調査では、先述したとおり、東西２間、南北２間と捉えたが、南側は調査区外に続いていることも想定できる。あるいは、南北２間以上の総柱建物であった可能性も十分考えられる。

柱穴からの出土遺物は無かった。周囲からは縄文土器や灰釉陶器が出土している。柱穴覆土の様子や周囲の出土遺物からSH-43は10世紀～11世紀の遺構と考えられる。

⑵ 竪穴状遺構

① SB-1（図82）

SB-1はSH-37の南方約13m地点で、平成12年度の調査で検出した遺構である。不正形な平面形を呈し、規模は東西4.6m、南北4.2mである。深さは検出面から測り0.1m程度であった。SB-1内の北西部には東西1.2m、南北1.1mの方形の土坑が存在する。この土坑の深さは10cm程度である。

遺物は北西部の方形土坑を含め、覆土や底面から灰釉陶器や土師器が出土した（図169）。灰釉陶器は折戸53号窯式～東山72号窯式併行期に位置付けられる。そのため、SB-1は10世紀後半～11世紀前半の遺構と考えられる。性格については不明である。

② SB-2（図83）

SB-2は平成12年度の調査において、ミョウガ原遺跡南東部の34区で検出した竪穴状遺構である。この遺構の約11.5m南東にはSH-43、約４m東にはSB-3、１m南にはSF-23が存在する。SB-2の平面形は南北にやや長い不正形な長方形を呈し、長辺4.0m、短辺3.45mの規模である。長辺はN-15°-Eに方位をとる。

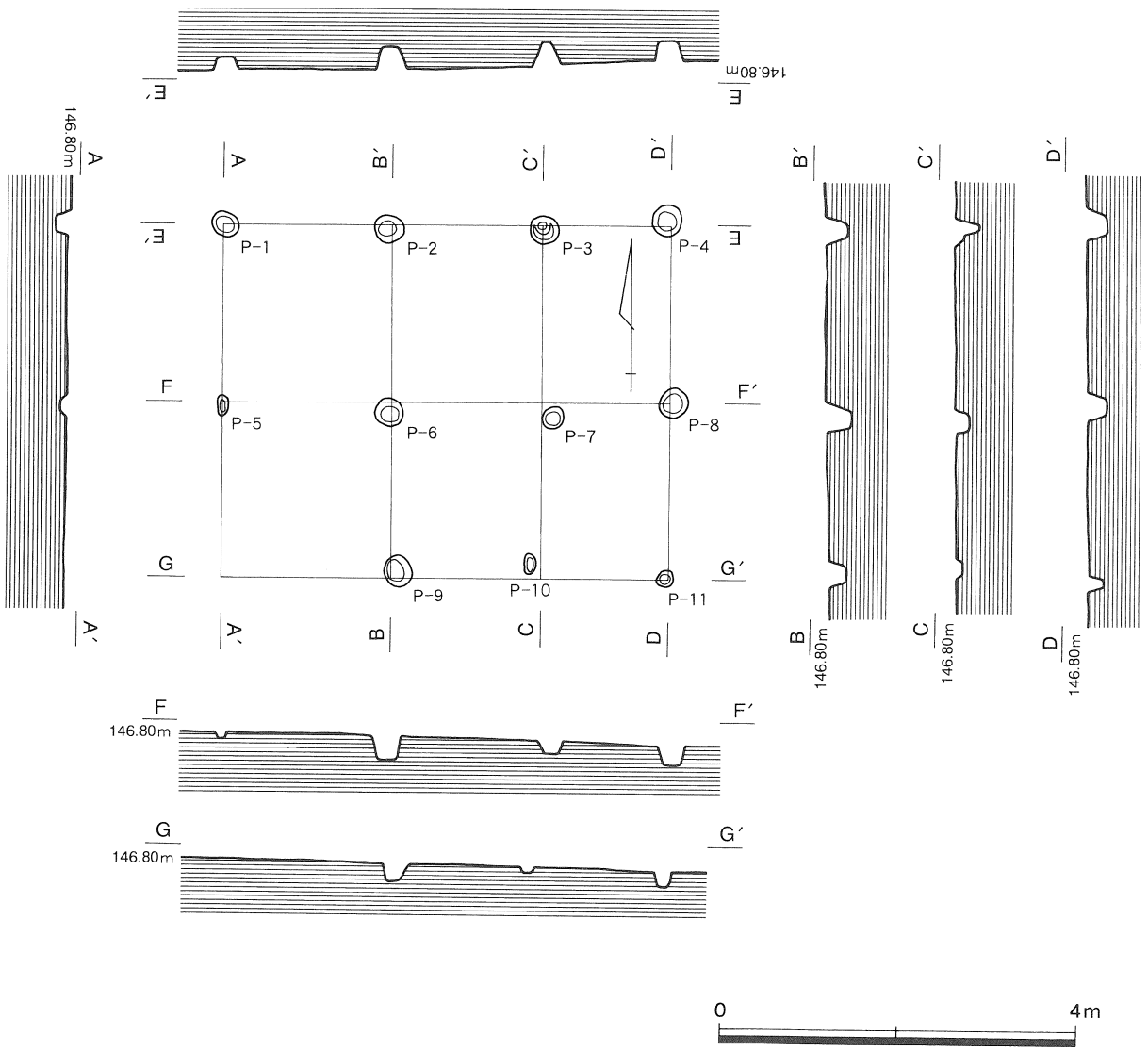


図80　SH-42実測図（1/80）

SB-2の南東部分の床面には、焼成を受けている箇所があった。焼成を受けている範囲は遺構床面全体の１/６程度である。また、焼成を受けた床面の下部には、方形の平面形態を持つ土坑が存在した。

この土坑の規模は１辺が1.3m、深さは0.3mである。更に、この土坑底面の東寄りには直径0.6m、深さ0.45mの土坑が存在した。SB-2において、これらの土坑以外には、直径30cm、深さ５cm程度の極浅いピットが４基存在するのみであった。

遺物は床面や覆土から灰釉陶器や土師器が出土した（図170−788〜792）。また、床面南東部の方形土

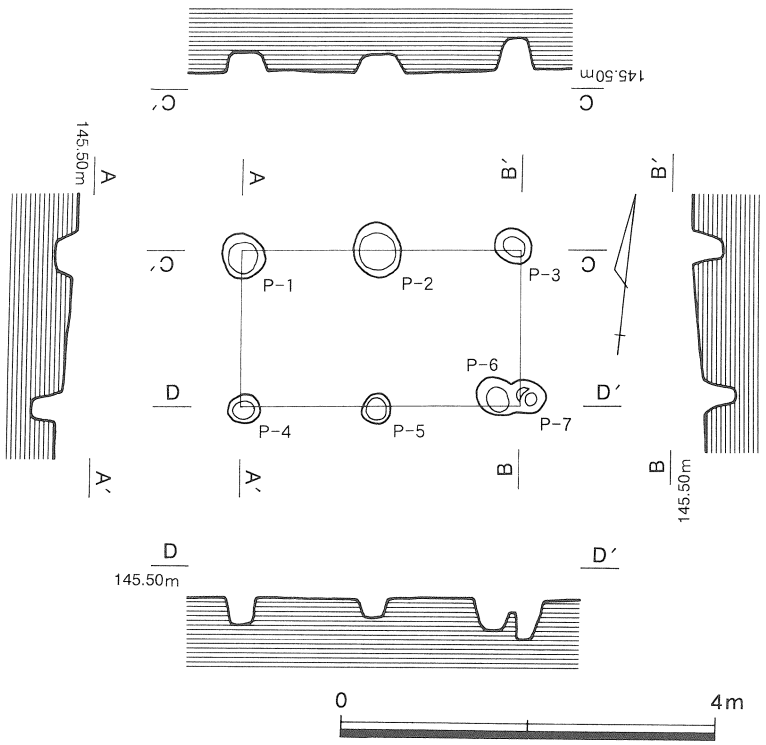


図81　SH-43実測図（1/80）

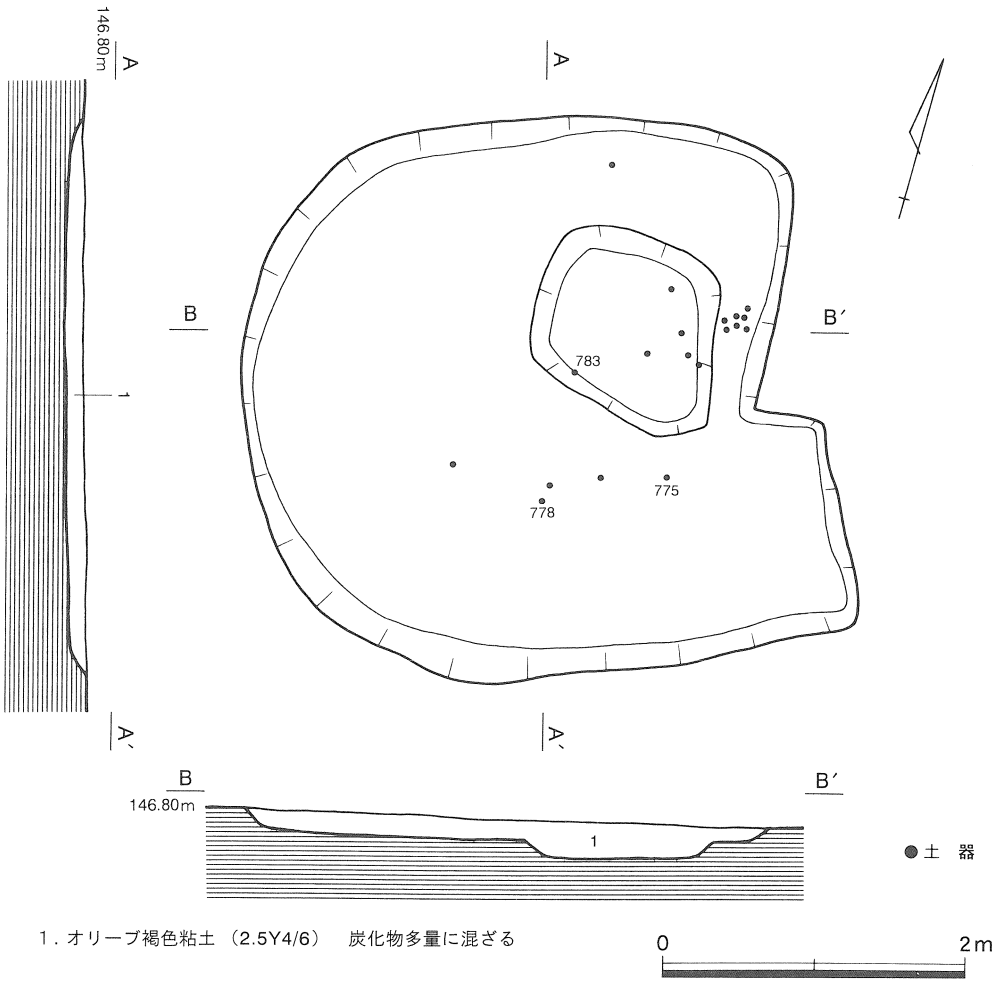


図82　SB-1実測図（1/50）

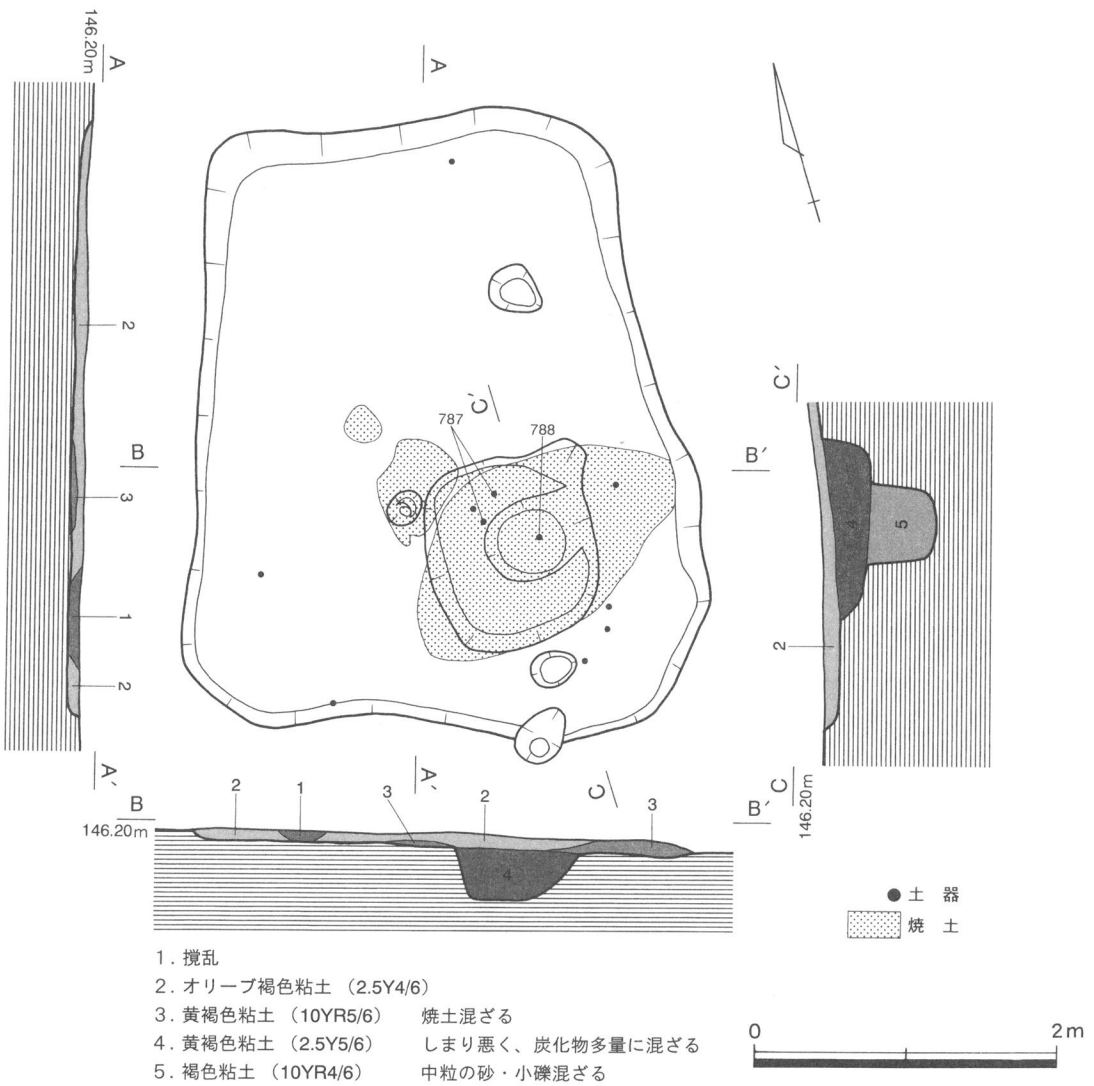


図83 SB-2実測図 (1/50)

坑の覆土からも灰釉陶器が出土した（図170－787)。この灰釉陶器は底面に墨書で「虫」と記されている。なお、方形土坑内の円形土坑からの出土遺物はなかった。出土した灰釉陶器は折戸53号窯式～東山72号窯式併行期に位置づけられる。これらの出土遺物から、SB-2は10世紀～11世紀の遺構と考えられる。

③ SB-3（図85)

SB-3は平成12年度に調査を実施した34区の南東部で検出した竪穴状遺構である。４m西にはSB-2、６m南南西にはSH-43が存在する。SB-3は不正形な楕円形状の平面形を有し、規模は短軸が2.8m、長軸が3.2m、深さは15cmである。長軸の方位はN-12°-Wである。

遺構の覆土や底面からは灰釉陶器が出土した（図170-793～796)。灰釉陶器は10世紀後半～11世紀代の所産である。底面からの出土であり、SB-3の時期を示すものと考えられる。

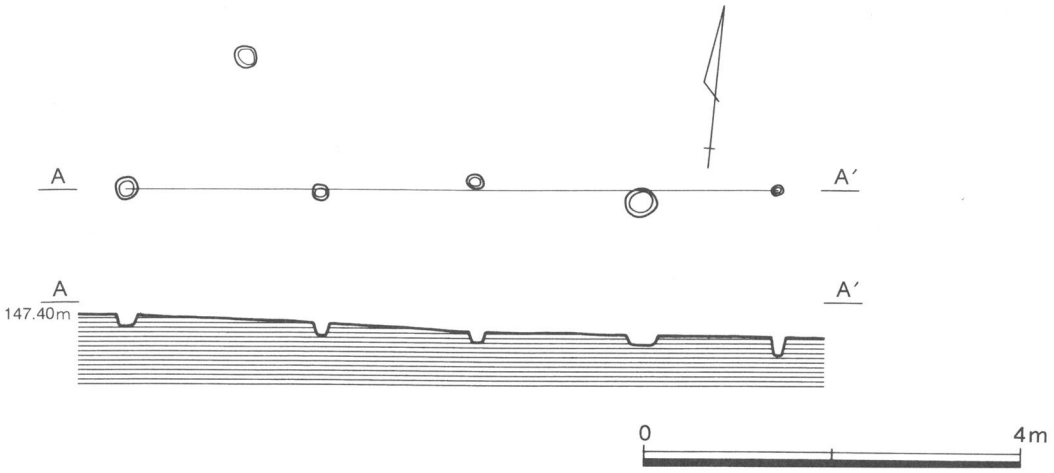


図84　SA-13実測図（1/80）

⑶　柵　跡

①　SA-13（図84）

SA-13は平成12年度の調査で検出した遺構である。この遺構の4.5m南にはSH-31が所在する。SA-13は５基のピットがN-84°-Eの方位で並ぶ。その長さは7.0mで、各ピット間の距離は1.7～2.0mである。ピットの規模は直径15～35cm、深さ15～20cmである。なお、ピットからの出土遺物はなかった。時期については周囲の出土遺物や覆土の様子から10世紀～11世紀の遺構と考えられる。なお、ここでは、柵と捉えたが、あるいは掘立柱建物の一部である可能性もある。

ミョウガ原遺跡南西部（34区、46区）では、調査では確証を得ることはできなかったものの、この他にも柵や掘立柱建物跡の一部である可能性を持つ小穴が存在する。

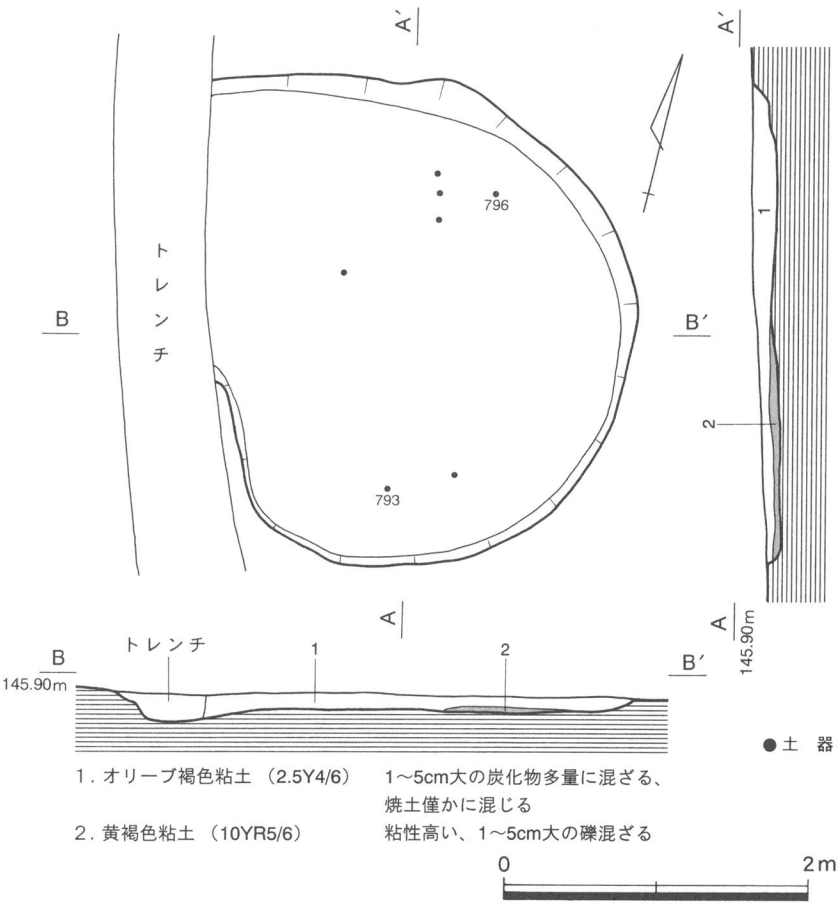


図85　SB-3実測図（1/50）

(4) 溝状遺構（図68・86）

① SD-22

SD-22は平成10年度に調査を実施した15区、平成12年度に調査した52区、平成13年度に調査した54区に渡って検出した遺構である。SD-22は東西方向の溝で、N-85°-Eに方位をとる。検出できた長さは60mに及び、幅は最大で0.5m、深さは最深部で0.3mである。更に、東西両方向へのびるものと考えられるが、撹乱のため検出できなかった。遺物はⅡ期～Ⅲ期の山茶椀が出土している（図164－692～697・713)。これらの出土遺物から、SD-22は12世紀後半～13世紀前半の遺構と考えられる。

② SD-23

SD-23は平成12年度の調査で検出したN-81°-Eに方位をとる東西方向の溝状遺構である。検出できた長さは23m、幅は最大で2.0m、深さは0.2mである。西側に更に続くと考えられるが、西隣の調査区では撹乱のため、検出できなかった。遺物は灰釉陶器と山茶椀の破片が出土した（図164－700～712)。遺構の時期は12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

③ SD-24

SD-24は平成12年度の調査で検出した。この遺構はN-80°-Eに方位をとる東西方向の溝で、検出できた長さは41m、最大幅は1.1m、深さは最深部でも0.2mと浅いものであった。この遺構も更に西側に続くと考えられるが、SD-23と同様に西隣の12区では検出できなかった。遺物は山茶椀片が出土している（図164－698・699)。この溝も12世紀後半～13世紀前半の遺構と考えられる。

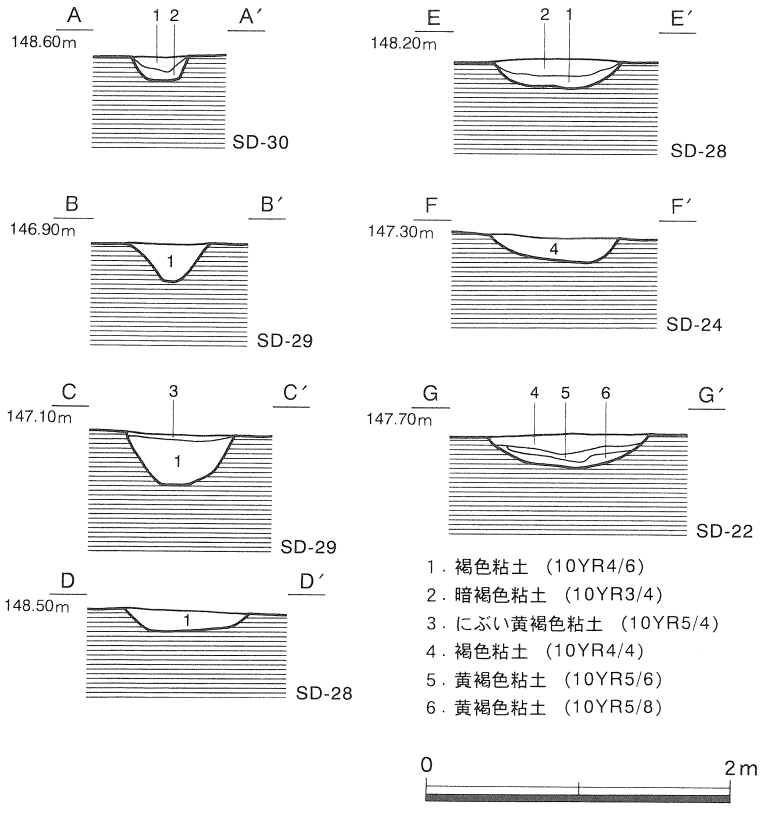


図86　SD-22・SD-24・SD-28～30土層断面図（1/50）

④ SD-25

SD-25は平成12年度の調査で検出した東西方向の溝状遺構である。検出できた長さは9.5mで、N-75°-Eに方位をとる。幅は最大で0.3m、深さは0.1mと浅いものである。なお、西端から約5m地点でSD-26が北から接続する。出土遺物はなかったが、覆土はSD-22やSD-23と近似することから、12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

⑤　SD-26

SD-26は平成12年度の調査で検出した「L」字状の溝状遺構である。この遺構は東西方向に4m長さがあり、東端で直角的に南に折れ曲がり2.0mのびてSD-25につながる。総延長は6m、幅は最大で0.3m、深さは0.1mである。なお、この溝が直角的に折れ曲がり南北方向に向きを変えた箇所から0.5mのところで、西からSD-27が接続する。東西方向はN-70°-E、南北方向はN-25°-Wに方位をとる。出土遺物はなかったが、SD-25と同様に12世紀後半～13世紀前半の遺構と考えられる。

⑥　SD-27

SD-27は平成12年度の調査で検出した溝状遺構である。南北方向の溝で、その方位はN-70°-Eである。検出した長さは3.4m、最大幅は0.3m、深さ0.1mである。この遺構は東端でSD-26と接続する。出土遺物はなかったが、SD-25やSD-26と同時期の12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

⑦　SD-28

SD-28は平成12年度の調査において46区で検出した遺構である。「L」字状の平面形を持つ溝である。この遺構は南北方向に31mの長さを持ち、北端部で東側へ直角的に折れ曲がり、東西方向の長さは11mである。南北方向の方位はN-6°-E、東西方向の方位はN-85°-Eである。この溝の最大幅は0.8mであり、深さは0.2mである。遺物は底面や覆土から灰釉陶器や山茶椀が出土した（図165－717～735）。

注目できるのは、遺構の北西隅付近から山茶椀の小皿がまとまって出土したことである。ここからは９点の小皿が伏せた状態で一括して出土した（図87）。遺構底面からは２cm程度浮いた状態である。出土状況から、これらの小皿はSD-28がある程度、埋没した時期に一括して置かれたものと捉えられる。

これらの出土遺物から、SD-28は12世紀後半～13世紀前半に廃絶されたものと考えられる。

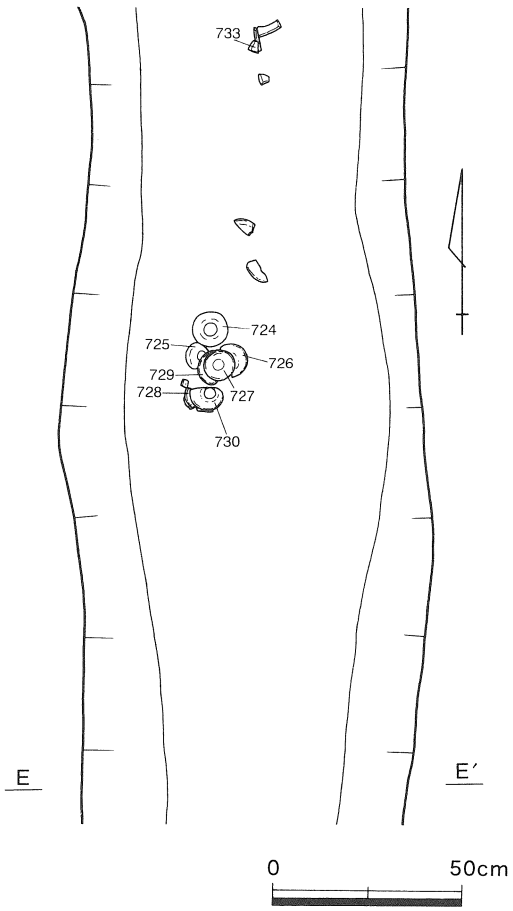


図87　SD-28遺物出土状況（1/20）

⑧　SD-29

SD-29は平成12年度の調査で検出した「L」字状の溝状遺構である。南北方向の長さは16.5mで、南端部で東側へ直角的に折れ曲がり、6.0mのびている。南北方向はN-4°-W、南北方向はN-87°-Wに方位をとる。幅は最大で0.3m、深さは0.4mである。

この遺構で東西方向に走る部分の東端部はやや深くなり、石材が詰められていた。石材の大きさは最大径10～40cm程度で、円礫であるが、一部に割石も混ざっていた（図88）。

遺物は破片となってはいたが、この集石部を始め遺構の各所から灰釉陶器や山茶椀が出土した。Ⅲ期に位置づけられる山茶椀は遺構底面からも出土していることから、この溝の廃絶年代としては、13世紀前半が考えられる。灰釉陶器は周囲からの流れ込みによるものと考えられる。

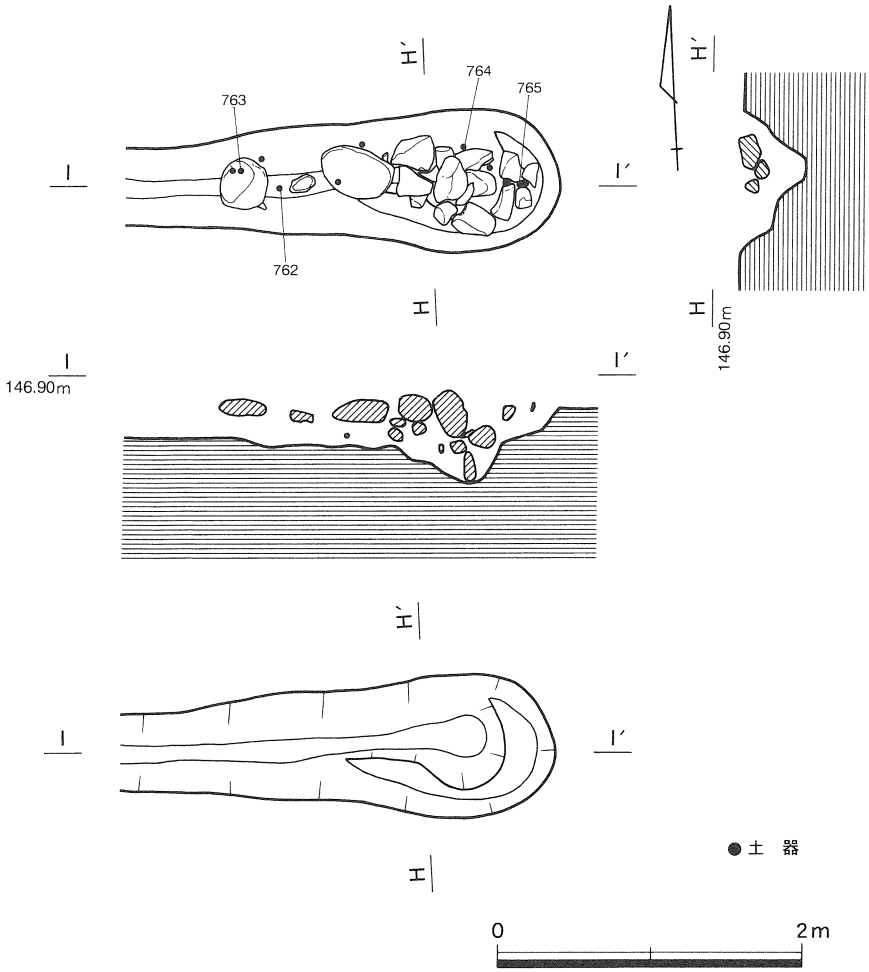


図88　SD-29集石部（1/50）

この溝はSH-34～37を区画するものと推定される。集石は意図的なものと考えられるが、その性格は不明である。

⑨　SD-30

SD-30は平成12年度の調査で検出した溝状遺構で、SD-29東端部から測り２m東北東に所在する。検出した長さは５m、最大幅は0.5m、深さは0.2m、方位をN-89°-Wにとる東西方向の溝状遺構である。この遺構からは灰釉陶器片が出土したが、詳細な時期はつかめなかった。周囲の出土遺物を勘案すると、SD-30は12世紀後半～12世紀前半の遺構と位置づけられる。

⑸　土　坑

ミョウガ原遺跡南西部では６基の土坑を検出した。いずれも平成12年度の調査で検出した遺構である。このうち、SF-16～20は５基の土坑が東西南北の十字に配置されるという特徴と、各土坑が幾つかの共通する特徴を持っている。この５基の土坑は地鎮祭祀に関わる遺構と考えられる。そのため、SF-16～20については、それぞれ、地鎮土坑１～５とも呼称することにする。

個々の遺構について述べるに先立ち、SF-16～20の位置関係について記す。５基の土坑群はSF-16を中心として、SF-17～20が東西南北に配置され、平面的には「十」字状を呈する（図89）。東西9.1m、南北6.2mの範囲にわたる土坑群である。SF-16を中心としてみると、SF-17が3.0m東、SF-18が1.7m南、SF-19が2.4m西、SF-20が2.5m北に所在する。なお、SF-17とSF-16、SF-20を結んだ方位はN-2°-Eである。５基の土坑に共通する特徴としてあげられるのは、いずれも最大径２～５cm程度の円礫が敷きつめられていたことである。円礫の色調や、数量は土坑により差があるが、いずれも表面が潤滑な小礫が使用されている。以下、各土坑の状況について述べる。

①　SF-17　地鎮土坑１（図90）

SF-17はこの土坑群の中心に位置する遺構である。やや東西に長い楕円形の平面形を呈し、規模は長径79cm、短径64cmである。深さは13cmであるが、中央はさらに12cm深くなっている。この中央部の窪みは、ほぼ円形の平面形を有し、規模は長径35cm、短径28cmである。SF-16の底面には円礫が敷きつめられていた。確認できた礫は408個で、赤色系173個、灰色系151個、白色系63個、黒色系15個、青緑色系13個であ

図89　地鎮祭祀の土坑群全体図（1/100）

る。なお、赤色系はチャートで極少量砂岩が混ざる。灰色系は砂岩（中粒）、白色系は石英、黒色系は珪質頁岩、青緑色系が凝灰岩である。礫は他の４基の土坑にも見られたが、SF-16が他の土坑と異なるのは、礫が一部２重になっている点である。この点は土坑の東半、特にその南側で顕著であった。検出段階では土坑の東端部に土師器の破片があった。これは坏身と考えられる。

さて、土坑の中央部に窪みがあることは先述したが、ここには礫や遺物が無かった。後述するSF-17～19では土坑中央部に長頸瓶が据えられており、SF-16もその可能性はある。ただし、土層断面では、上部から撹乱が入り込んだ様子はなかった。そのため、撹乱などにより遺物が取り除かれたとは考えにくい。もっとも、SF-16中央部の窪みの上部には礫が敷きつめられていなかったことを考慮に入れると、この位置に何かが置かれていた可能性は高いであろう。なお、この周辺の表土からは、長頸瓶の破片が出土している。これはSF-17～19から出土した長頸瓶とは異なる個体と考えられる。あるいは、SF-16にも元来は長頸瓶が据えられていたのかもしれない。もっとも、この場合、長頸瓶はSF-16検出面より高い位置に据えられていたと言える。なお、土坑の北東より底面には直径12cm、深さ10cm程度の撹乱が見られた。これは樹木の根跡である。

次に、SF-16の構築方法について考えてみたい。SF-16はまず、楕円形の土坑が掘削され、ついで、そ

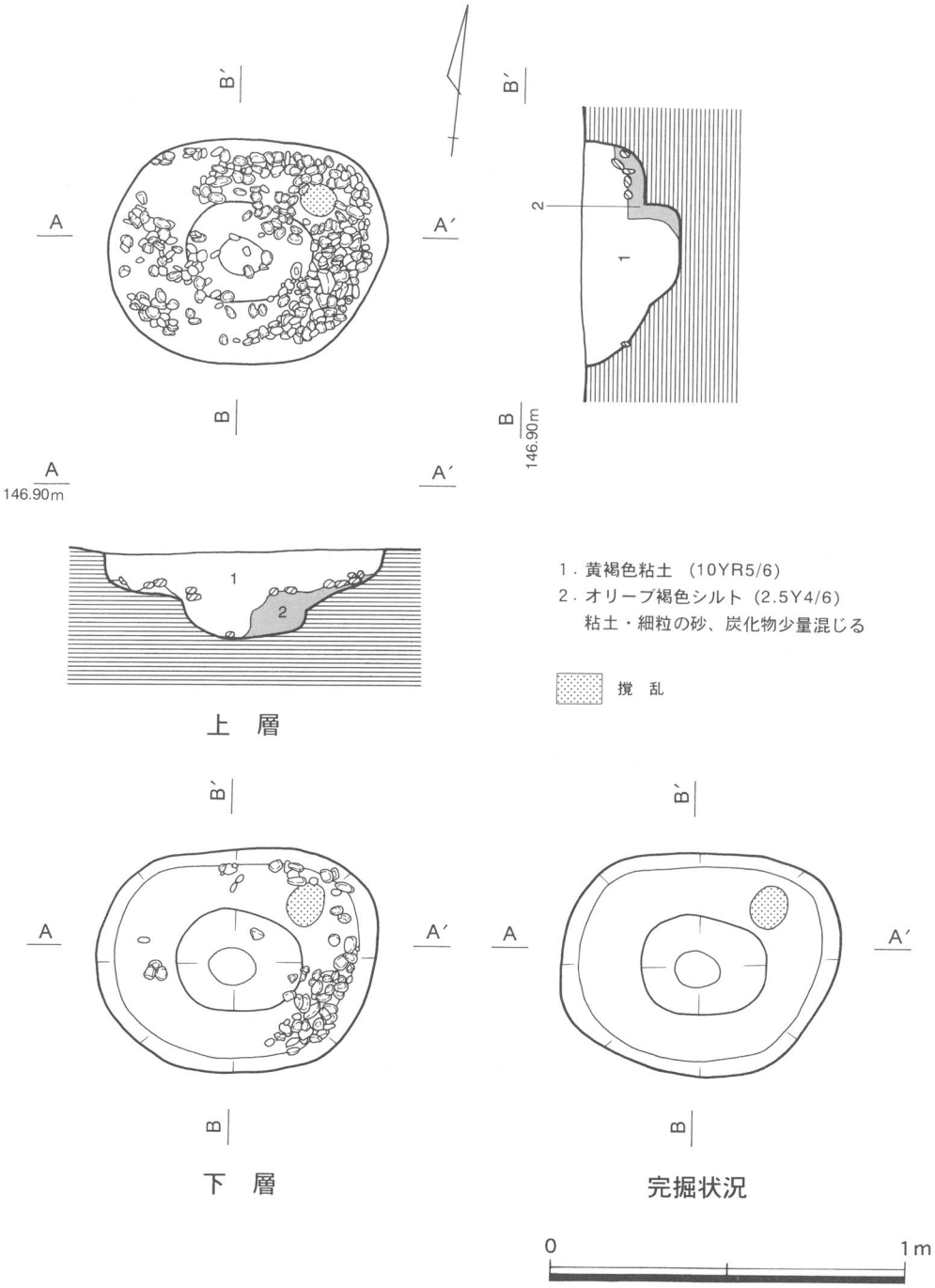


図90 SF-16実測図 (1/20)

の中央部に円形の小穴が掘削された。円形の小穴には有機質の何かが据えられた可能性も考えられる。その後、楕円形の土坑底面には礫が充填され、埋め戻しが行われた。ある程度、埋め戻された時点で、土師器の坏身を用いた何らかの行為が行われたと考えられる。

② SF-17 地鎮土坑２ (図91)

SF-17はSF-16の東側3.0mに所在する土坑である。この土坑は南北に長い楕円形の平面形をとる。その規模は、長径75cm、短径48cm、深さ20cmである。なお、SF-17の南側には柱穴が接している。この柱穴はSH-40のP-9で、SF-17よりも新しい遺構である。SF-17をはじめとした土坑群よりも、SH-40は後出

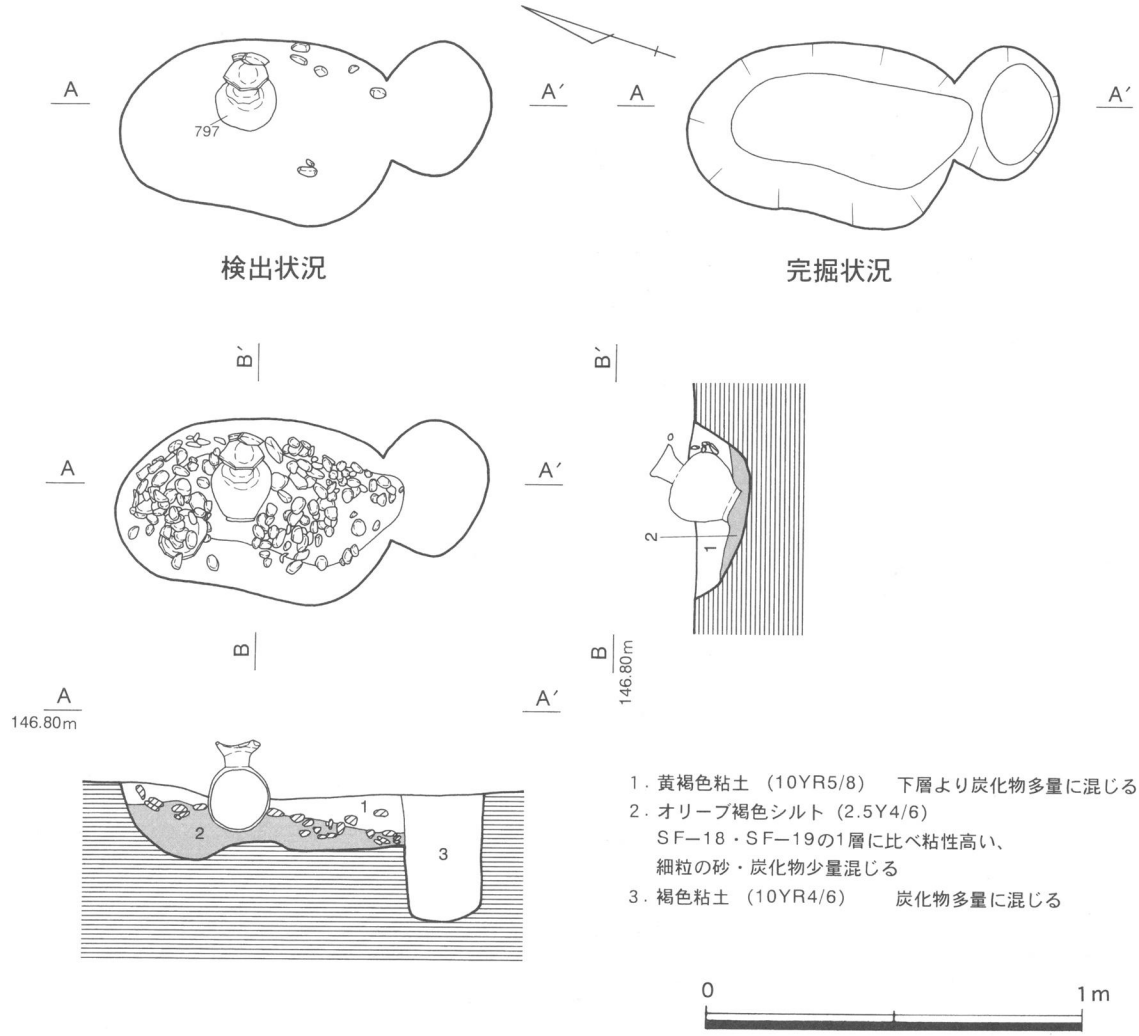


図91　SF-17実測図 (1/20)

する遺構と位置づけられる。

さて、SF-17はまず、表土を除去したところ、土坑の輪郭が現れると共に、長頸瓶の体部上半と数個の円礫を検出した。覆土を掘削すると、土坑の全面に円礫が現れた。礫の総数は260個、灰色系83個、青緑色は52個、黒色は38個、白色系は65個、赤色は22個である。灰色系は細粒の砂岩と頁岩、青緑色は凝灰岩、黒色は凝灰岩、白色は凝灰岩、赤色はチャートである。灰色系と白色系が多いが、白色の凝灰岩の多くは青緑色を帯びており、灰色系のものは青みがかっている。これらも、青緑色系の範疇として捉えることができ、SF-17の礫は青緑色が主体といえる。なお、礫は土坑の底面に完全に接している状況ではなく底面からは５～10cm程度離れていた。

土坑内には礫の他に、土師器の坏身と先述した灰釉陶器の長頸瓶があった。土師器坏身は土坑北西部の底面から正位置で出土し、底面からは５cm程度浮いていた。なお、坏の中にも礫は見られた。この土師器は風化が著しく、取り上げは不可能であった。灰釉陶器の長頸瓶は土坑のほぼ中央から出土したが、口縁部が東側に傾いた状態であり、直立はしていなかった。ただし、後述するSF-19と同様に、SH-17の長頸瓶も本来的には直立していたと考えられる。耕作の影響を受け傾斜したものであろう。なお、SF-18やSF-19のように土坑中央部を掘り窪めて長頸瓶を据えた痕跡はなかった。長頸瓶の口縁部付近には土師質の付着物があり、土師器により蓋が長頸瓶になされていた可能性がある。

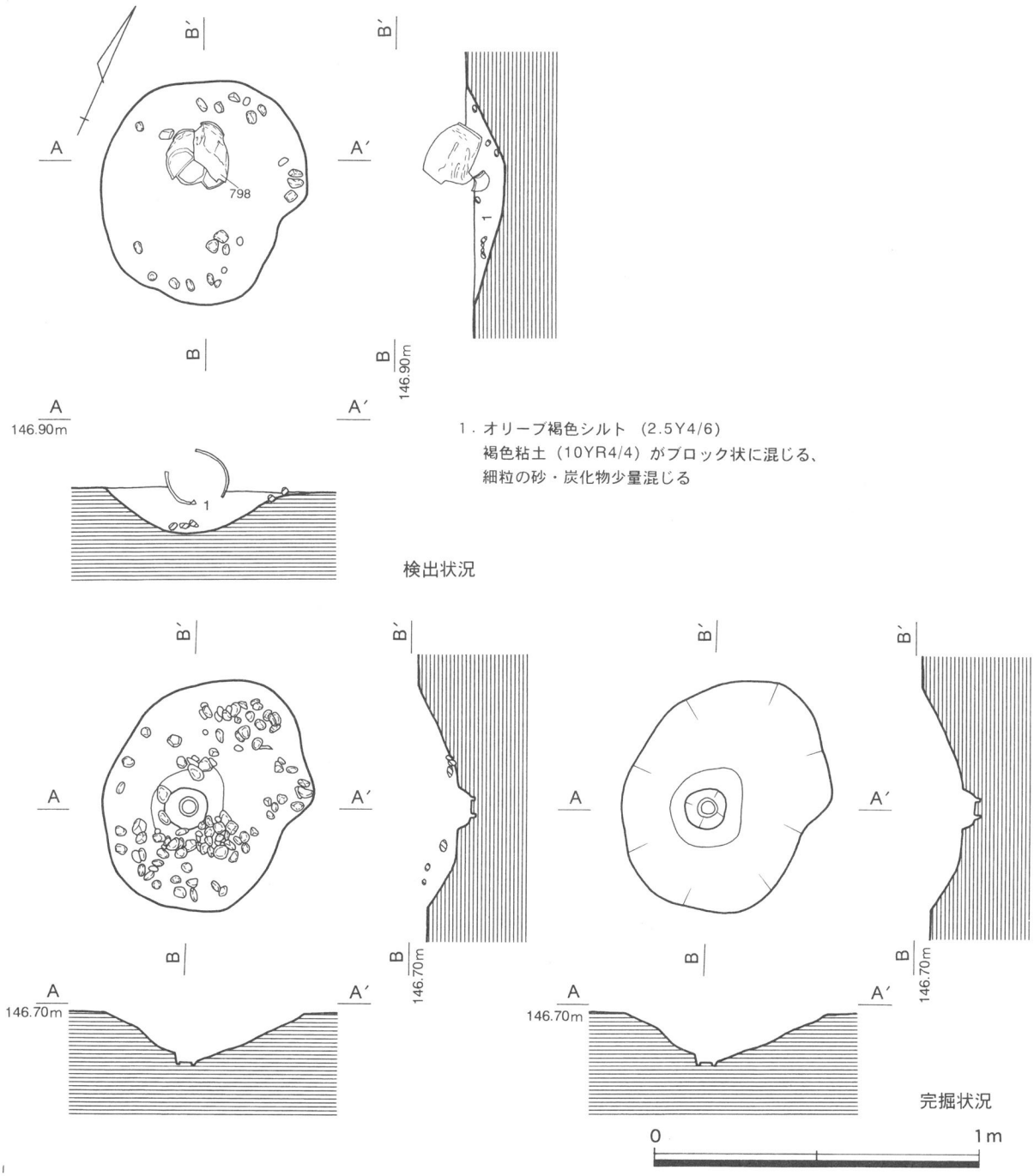


図92　SF-18実測図（1/20）

以上の状況から、SF-17は土坑を掘削した後に、長頸瓶を底面上に据え、５～10cm程度埋め戻しを行ったと考えられる。埋め戻しにより長頸瓶を固定した段階で土師器坏身を据え、土坑内全面に玉石を充填し、その後に土坑を完全に埋め戻したと考えられる。検出時、長頸瓶の上半部が土坑内から突出していたが、本来、この土坑は長頸瓶を覆い隠す程度の深さを持っていたのであろう。なお、長頸瓶の中からは何も出土しなかった。

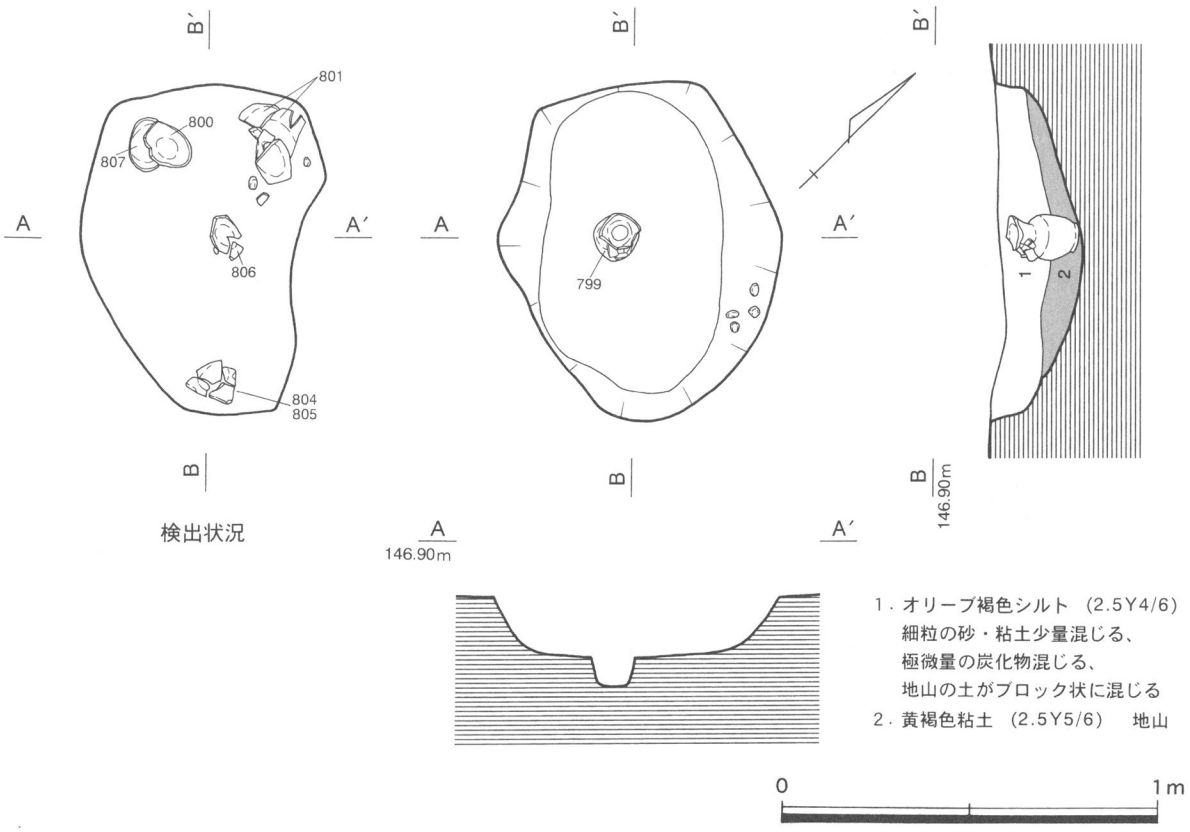


図93　SF-19実測図（1/20）

③　SF-18　地鎮土坑３（図21）

SF-18はSF-16の1.7m南で検出した土坑である。この土坑は不正形な円形の平面形をとり、その規模は南北68cm、東西63cmの長さで、深さは12cmである。SF-17は表土を重機で除去したところ、横倒しになった灰釉陶器の長頸瓶体部が現われた。周囲を精査したところ、遺構の輪郭が現れ、初めに検出した長頸瓶は土坑中央より、やや北西に寄った場所にあることが判明した。更に、土坑の覆土中に20個程度の赤色の礫が存在することを確認した（図92上）。なお、この土坑が、地鎮祭祀土坑群発見の契機となった遺構である。この長頸瓶を取り上げ、覆土を除去すると、土坑底面に敷設された礫の存在が明るみにでた。礫の中には土坑底面からわずかに浮いたものもある。覆土中から出土したものを含め、礫の総数は117個であり、このうち赤色系が98個、白色系が15個、灰色系が４個である。赤色系の礫はチャートが主体で砂岩が極少量混ざる。白色は石英が主体、灰色系は砂岩である。遺構底面の中央部には直径25cm程度の不正形な円形の掘込みが確認できた。この掘込みは長頸瓶底部を据えていた痕跡と考えられ、横倒しで出土した長頸瓶は元来、ここに据えられていたものと考えられる。耕作等により、２次的な移動をうけたのであろう。

以上から、SF-18はまず、円形の土坑が掘削された後、中央に長頸瓶が据えられたと考えられる。長頸瓶の周囲に赤色を主体とした礫を敷きつめた後に、埋め戻しが行われたようである。なお、埋め戻しの過程においても礫が充填されたようである。

④　SF-19　地鎮土坑４（図93）

SF-19はSF-16の2.4m西で検出した土坑である。楕円形の平面形をとる遺構で、規模は長径80cm、短

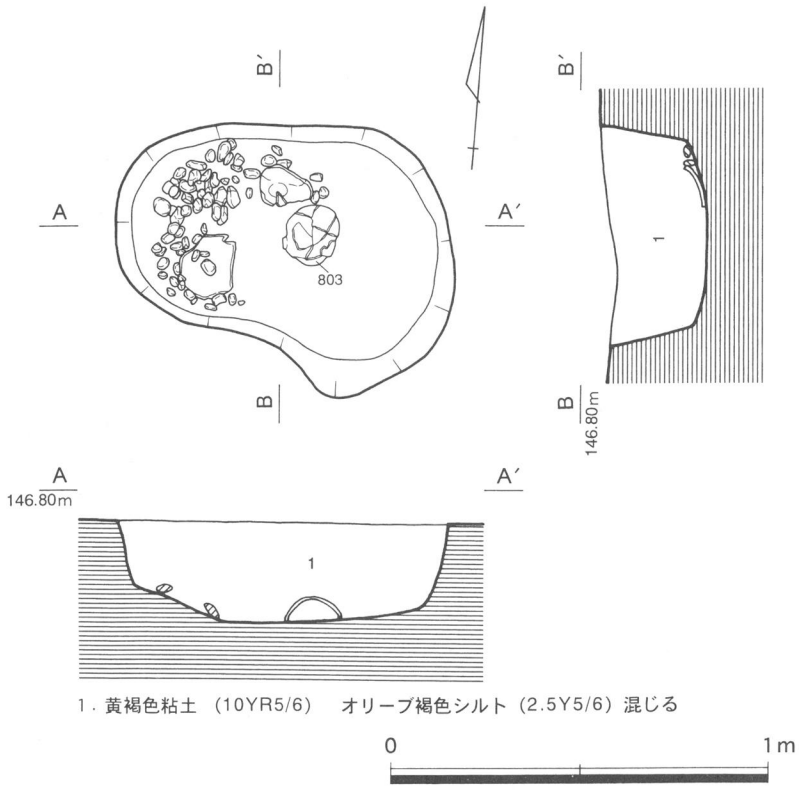


図94 SF-20実測図 (1/20)

径67cm、深さ15cmである。長軸はN-46°-Wである。SF-19は表土を除去したところ、覆土であるオリーブ褐色シルトの中に５個程度の白色の礫と７点の土師器坏身が存在することを確認できた。覆土は色調や土質が明らかに他とは異なるため容易に判別ができた。

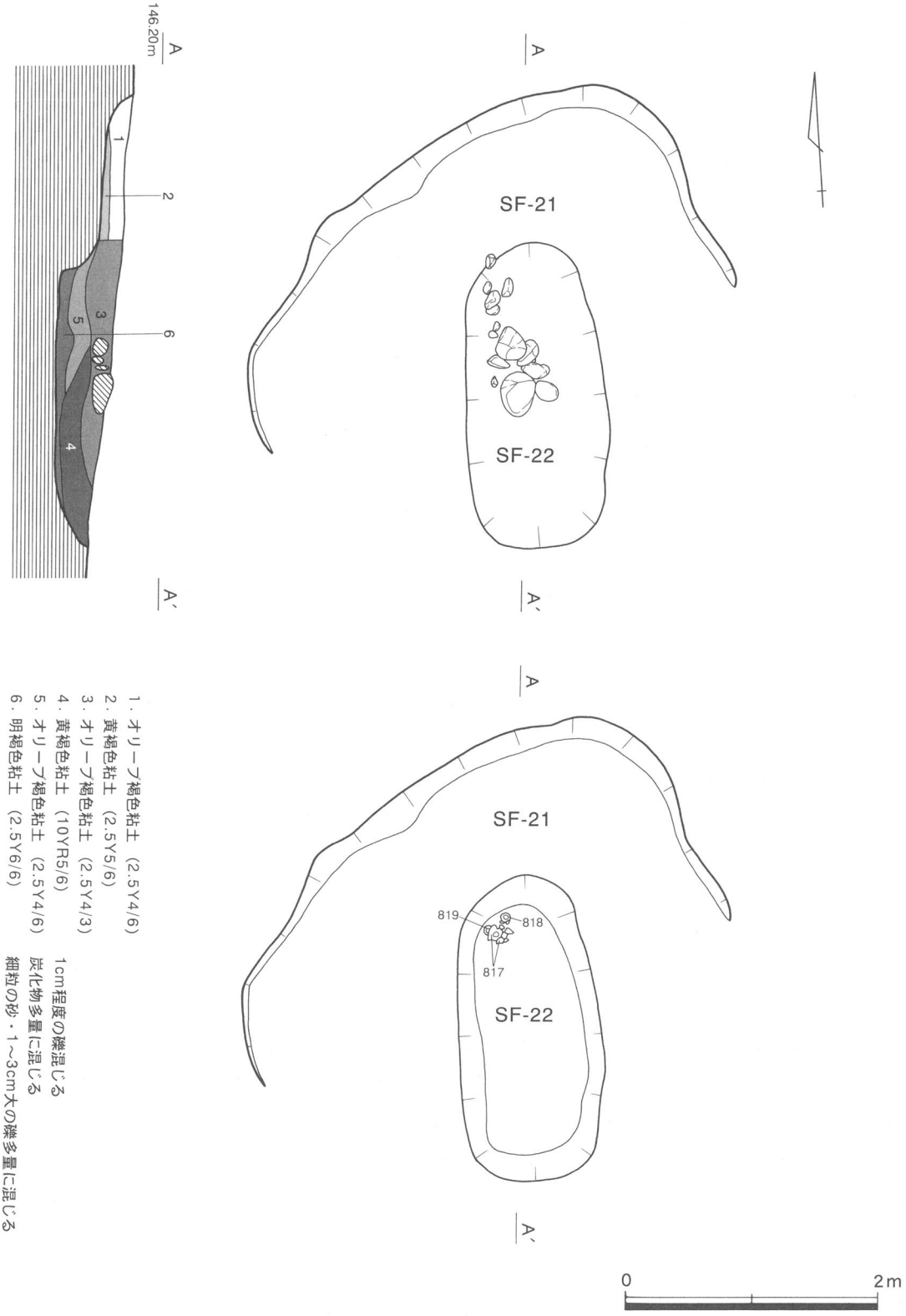
土師器の出土状況をみると、804・805は土坑南東部、806は土坑中央部、801は土坑北部、800と807は土坑西部から出土した。この６点のうち806は他と重複することなく出土したが、804と805、800と807がそれぞれ重なった状態で出土した。801も別個体が上に重なっていた。なお800は807の上に重なった状態である。土師器はいずれも割れた状態で出土した。しかし、意図的に破砕されたものであるのかは不明である。なお、７点の土師器坏身は出土状況から、覆土と一緒に埋められたことがうかがえる。

さて、土師器の坏身を取り上げ、覆土を掘削すると、土坑の中央から灰釉陶器の長頸瓶が現れた。長頸瓶の下半は土坑底面に埋め込まれていた。土坑を半裁して確認したところ、長頸瓶の大きさに合わせて、土坑中央の底面が掘り窪められている状況が明らかとなった。長頸瓶の口縁部には、ほぼ全周するかのように土師質の付着物があった。原型を留めていないものの、土師器の坏であると考えられる。蓋として長頸瓶に被せられていたものであろう。なお、長頸瓶の中からは何も出土しなかった。土坑底面の東寄りには白色の礫４個が敷設されていた。この礫は石英で、覆土から出土したものを合わせると、SF-19からは合計13個の礫が出土した。

以上から、SF-19は楕円形状の土坑が掘削された後、中央部のみを長頸瓶の大きさに合わせ掘り窪め、底に灰釉陶器の長頸瓶を設置し、底面には白色の礫を敷設したと言える。その後、10cm程度埋め戻した段階で、７点の土師器坏身が置かれ、更に埋め戻しが行われたと考えられる。

⑤ SF-20 地鎮土坑５ (図94)

SF-20はSF-16の2.5m北に所在する土坑である。この遺構は東西にやや長い不正形な楕円形の平面形をとり、その規模は東西90cm、南北72cm、深さは26cmである。SF-20は表土を除去した段階では、遺構の輪郭がうかがえる程度であった。覆土を取り除くと、底面に礫と３点の土師器坏身があることが判明した。土師器の内、中央から出土したものは伏せた状態で、その他の２点は正位置で出土した。底面に敷設された礫は赤色系が58個、白色系９個、灰色系４個で、総数は71個である。赤色系は主にチャートで砂岩が極少量混在する。白色は全て石英、灰色は全て砂岩である。なお、SF-18やSF-19でみられた遺構



1．オリーブ褐色粘土　(2.5Y4/6)
2．黄褐色粘土　(2.5Y5/6)
3．オリーブ褐色粘土　(2.5Y4/3)
4．黄褐色粘土　(10YR5/6)　1cm程度の礫混じる
5．オリーブ褐色粘土　(2.5Y4/6)　炭化物多量に混じる
6．明褐色粘土　(2.5Y6/6)　細粒の砂・1～3cm大の礫多量に混じる

図95　SF-21・SF-22実測図（1/50）

中央部の窪みについてはSF-20では存在しなかった。この遺構は撹乱を受けた様子もないため、本来的にも遺構底面に長頸瓶は設置されなかったものと考えられる。ただし、検出面より高位置に長頸瓶が設置されていた可能性は否定できない。

以上から、SF-20は土坑を掘削し、土師器の坏身３点と色系を主体とした礫を底面に置き、その後に埋め戻しが行われたと考えられる。なお、土坑の覆土がSF-17～19と若干異なる点も特徴的である。

上述した地鎮土坑１～５（SF-16～20）の出土遺物は10世紀～11世紀代のものと考えられる。周囲の出土遺物と併せて考えると10世紀後半～11世紀前半の遺構と位置づけられる。

⑥　SF-21・SF-22（図95）

SF-21・SF-22は平成12年度に調査を実施した34区の南端部で検出した土坑である。SF-21とSF-22は重複する遺構でSF-21の南側にSF-22が入り込む形となっている。土層の観察から、SF-22が後出することがうかがえる。なお、SF-21の0.5m北にはSB-2が所在する。

SF-21は遺構の南半分を削平されていた。平面形については不明であるが、不正形な方形の可能性がある。検出した規模は東西4.0m、南北2.8mで、深さは0.15mと浅い遺構である。覆土からは灰釉陶器が出土した（図173－808～815）。出土した灰釉陶器は11世紀代に位置づけられ、SF-21の時期を示すものと考えられる。

SF-22はSF-21の覆土を掘り込むように掘削された遺構である。南北に長い隅丸長方形の平面形をとり、その規模は南北2.4m、東西1.1m、深さは0.5mである。この遺構は表土を除去した段階で、数個の礫が存在することを確認した。

SF-21の覆土を除去し、SF-22の最上層を取り除くと最大径５～30cm程度の円礫15個程が現れた。SF-22最上層は自然堆積したものと考えられるため、これらの礫がSF-22の上部におかれたものと考えられる。SF-22は覆土を掘削すると、底面から山茶椀の椀１点と小皿３点が現れた（図173－816～819）。これらの山茶椀はⅢ期に位置づけられるため、SF-22は13世紀前半の遺構と考えられる。この遺構の性格については不明である。

⑹　その他の遺構

ミョウガ原遺跡南西部においては、上述した以外にも多数の柱穴を検出した。これらの柱穴は、調査で認識した以外の掘立柱建物跡や柵の可能性もある。

平成10年度に調査を実施した15区の南西端部においても多数の柱穴を検出している（図96）。この調査区からは10～11世紀の灰釉陶器が出土している。この調査区では掘立柱建物跡として復原できるものはなかったが、おそらく、建物自体は存在していたものと考えられる。

なお、34区ではここに述べた遺構以外に、縄文時代に位置づけられる竪穴住居跡を１棟検出している。また、これに関わる土器や石器も出土している。これについては、次節で記すことにする。

６．南側中央部の遺構群

ミョウガ原遺跡の南側中央部は、平成12年度に調査を実施した35区に相当する。ここでは６棟の掘立柱建物跡と１条の溝、１列の柵跡を検出した（図98）。

(1)　掘立柱建物跡

①　SH-44（図97）

SH-44は東西２間、南北２間の掘立柱建物跡で、規模は東西3.2m、南北4.0mである。南北の柱列はN-14°-Wに方位をとる。柱穴間距離は東西が1.6～2.0m、南北が2.0～2.2mで、東西間に対し南北間がやや広い。柱穴規模は直径20～30cm、深さ10～30cmであった。この掘立柱建物跡において、柱穴からの出土遺物は無く、時期を断定することはできない。ただし、周囲からは10～11世紀代の灰釉陶器が出土しているため、SH-44もこの時期の遺構と考えられる。なお、南西隅の柱穴は検出できなかった。

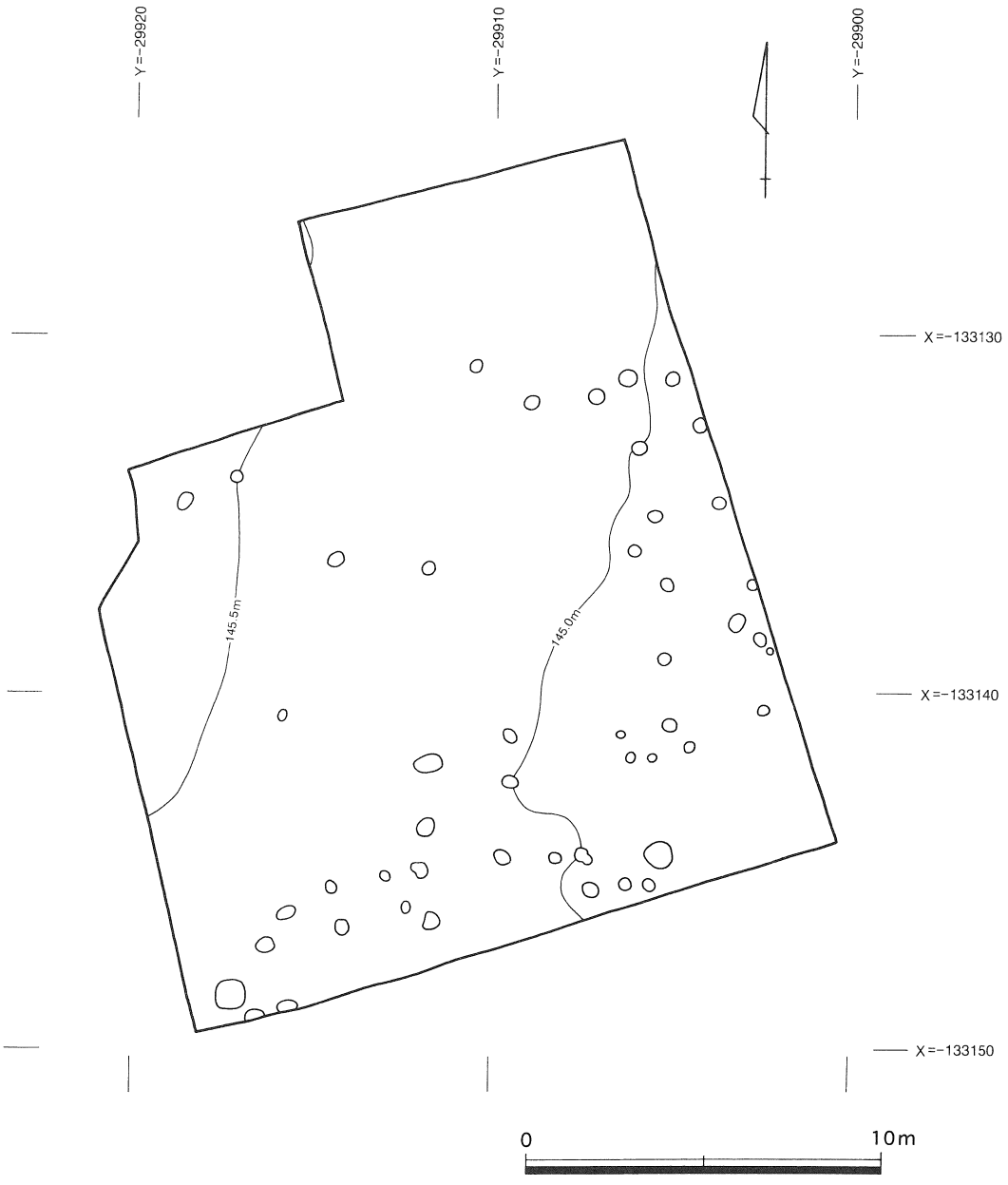


図96　15区全体図（1/200）

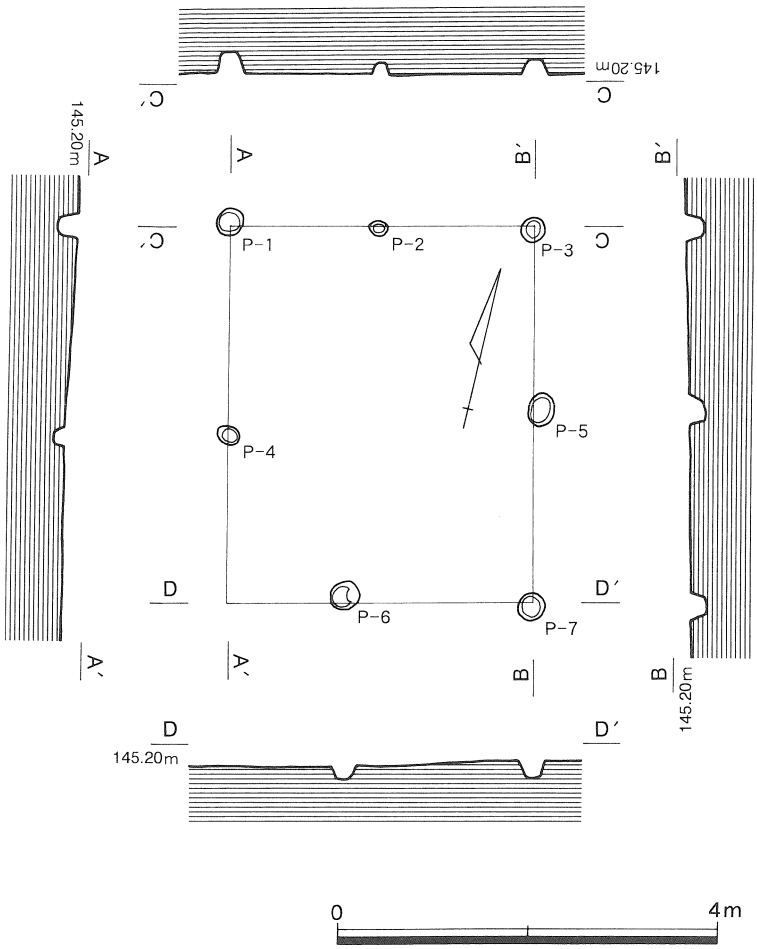


図97　SH-44実測図（1/80）

② SH-45（図99）

SH-45は35区の中央部西側で検出した東西２間、南北３間の掘立柱建物跡である。この遺構の7.5m北西にはSH-44、3.5m南にはSH-46、8.0m東にはSH-48が所在する。SH-45とSH-46、SH-47の３棟は並ぶように建てられている。

SH-48は桁行方位N-4°-W、規模は梁行4.8m、桁行6.2mである。穴間距離を見ると、桁間は建物北辺では2.2m、南辺では1.4～2.8mである。なお、南辺では立て替えによる柱穴の移動が考えられる。梁間は1.7～2.0mである。柱穴の規模は直径30～40cm、深さ30～50cmである。柱穴のうち、P-5からは灰釉陶器の破片（図179-934）、P-4からは土師器の破片が出土した。柱穴からの出土遺物と周囲から出土した遺物と併せて勘案すると、SH-45は10世紀後半～11世紀の掘立柱建物跡と考えられる。

③ SH-46（図100）

SH-46はSH45の南方3.5mで検出した掘立柱建物跡である。この遺構の3.0m南にはSH-47が、8.5m東にはSH-49が所在する。SH-46は北隣のSH-45と、南隣のSH-47と３棟が南北に並ぶように検出された遺構である。

SH-46は東西３間南北３間の建物で、桁行方位はN-5°-Wである。規模は梁行5.4m、桁行7.6mである。柱穴間距離は桁間が1.4～1.9m、梁間が2.1～2.4mである。桁間に比して梁間がやや広い傾向にある。柱穴規模は直径20～40cm、深さ20～50cmである。P-4やP-6、P-8からうかがえる柱の直径は15cm前後である。

柱穴のうち、P-1からは緑釉陶器底部の破片が出土した（図179－930）。この遺物は底面からは浮いた状態であり、周囲からの流れ込みによるものと考えられる。SH-46の直接の時期を示すとまでは言えない遺物である。SH-46は周囲の出土遺物や柱穴覆土の状況から10世紀後半～11世紀代の遺構と考えられる。

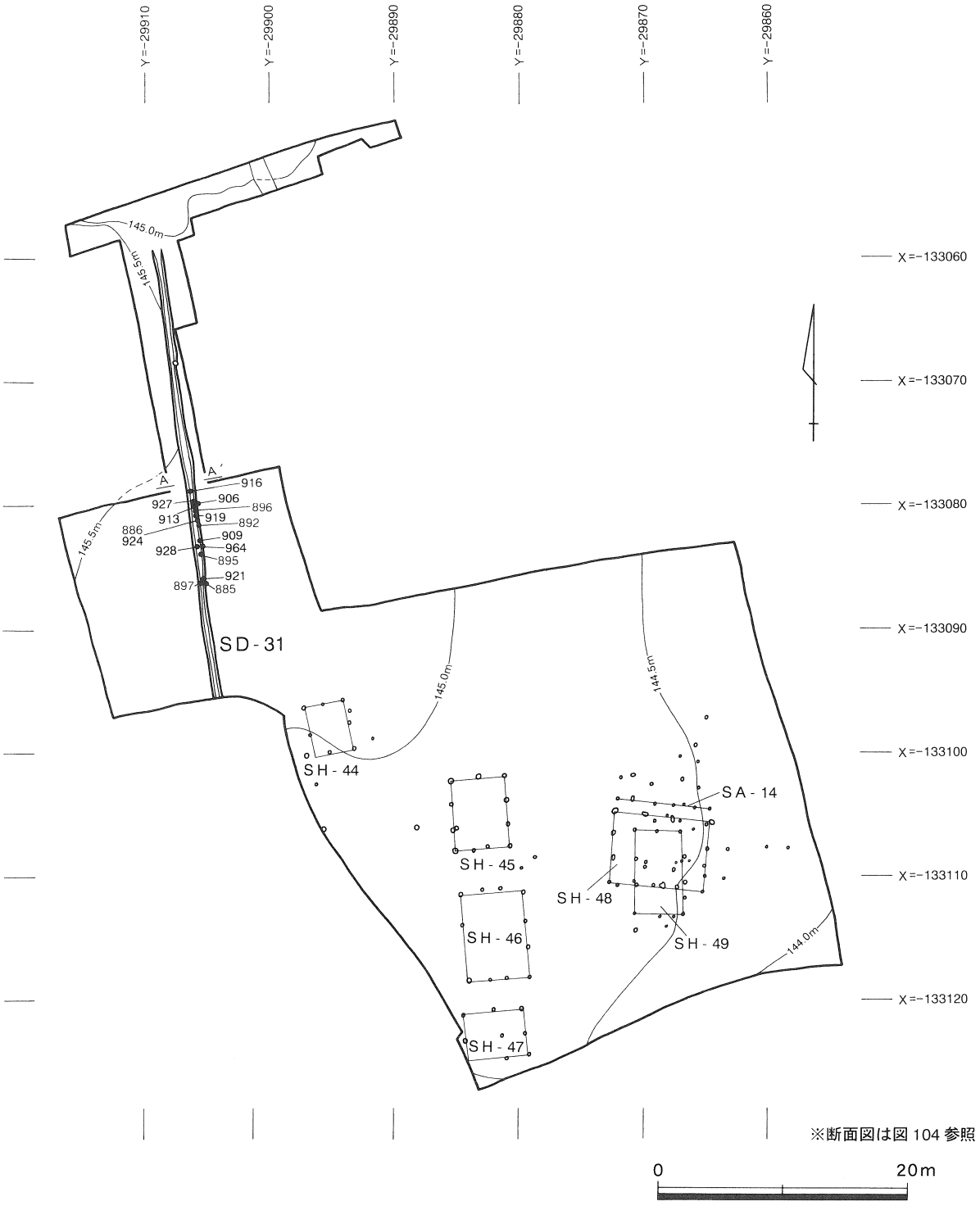


図98　調査区南側中央部の遺構群（1/500）

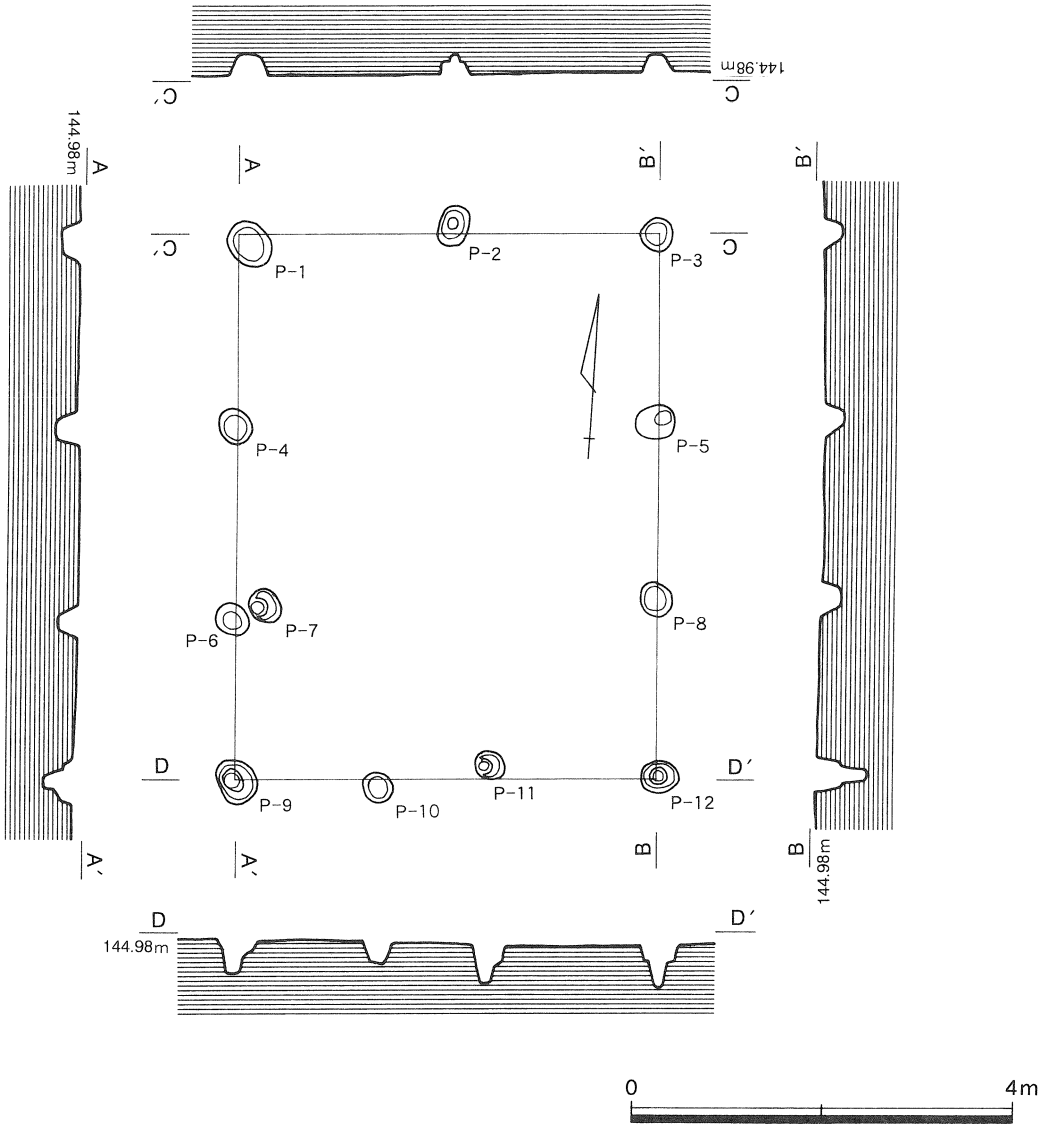


図99　SH-45実測図（1/80）

④　SH-47（図101）

SH-47は東西２間、南北２間の総柱の掘立柱建物跡である。SH-46の南方約３ｍの所で検出した遺構である。約11ｍ北東にはSH-49が所在する。SH-45～47は３棟が南北に並ぶように立地するが、SH-47はその南端の掘立柱建物跡である。

SH-47は東西5.1m、南北5.2ｍの規模で、ほぼ正方形の平面形をとる建物である。南北の柱列はN-1°-Eに方位をとる。これはSH-45やSH-46とは若干異なる方位である。柱穴間距離は東西方向、南北方向ともに1.9～2.9ｍである。柱穴規模は直径30～40cm、深さ10～40cmである。P-8から柱の直径は10cmであることがうかがえる。なお、南西隅の柱穴については調査においては、検出することはできなかった。

遺物はP-8から山茶椀片が出土した。この遺物は柱穴底面からは浮いた状態で出土した。掘立柱建物の廃絶後の流れ込みによるものであろう。SH-47の時期については、周囲の出土遺物等から10世紀後半～11世紀代と考えられる。

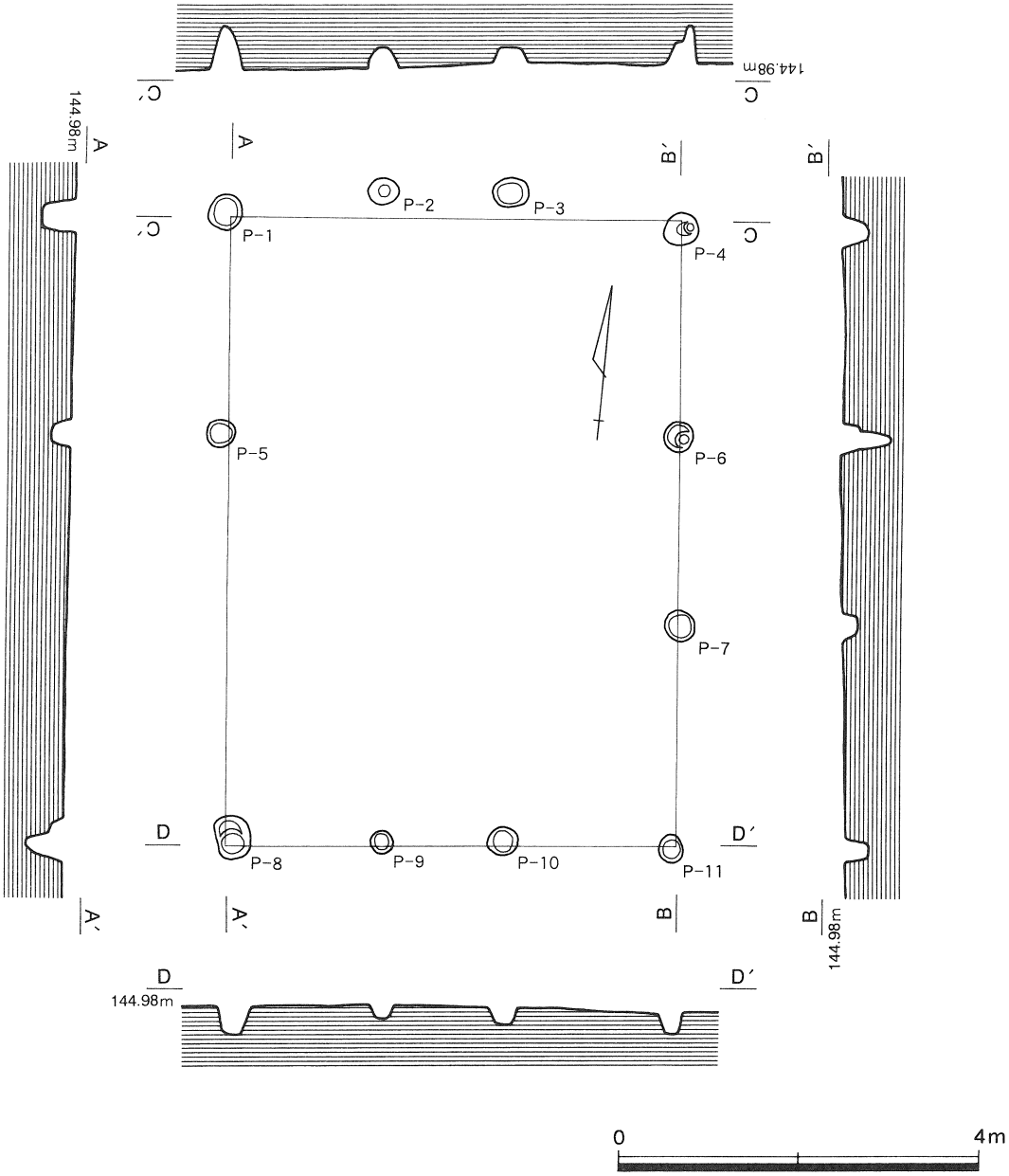


図100　SH-46実測図（1/80）

⑤　SH-48（図102）

SH-48はSH-5の8.0m東に所在する掘立柱建物跡である。後述するSH-49と一部が重複して検出した。この掘立柱建物跡は東西４間、南北３間で、桁行方位はN-93°-Wである。規模は桁行8.4m、梁行6.0mである。柱穴間距離を見ると、梁間はP-16とP-17の間が1.4mとやや狭く、P-1とP-2の間が2.6mとやや広いが、その他は1.8～2.2mである。桁間は1.4～2.2mである。柱穴の規模は、直径20～50cm、深さ10～60cmである。P-2・P-4・P-7・P-10からうかがえる柱の直径は10cm前後である。

柱穴のうち、P-7からは灰釉陶器片が出土した。建物周囲の表土からも灰釉陶器が出土している。柱穴から出土した遺物は細片であるため、時期を特定しがたいが、周囲から出土した遺物と併せて考えると、SH-48は10世紀後半～11世紀前半の掘立柱建物跡と考えられる。

なお、SH-48の1.0m北側にはSA-14が所在する。この遺構はSH-48に付随する柵としてとらえたが、あるいは、庇である可能性もある。SA-14については後述する。

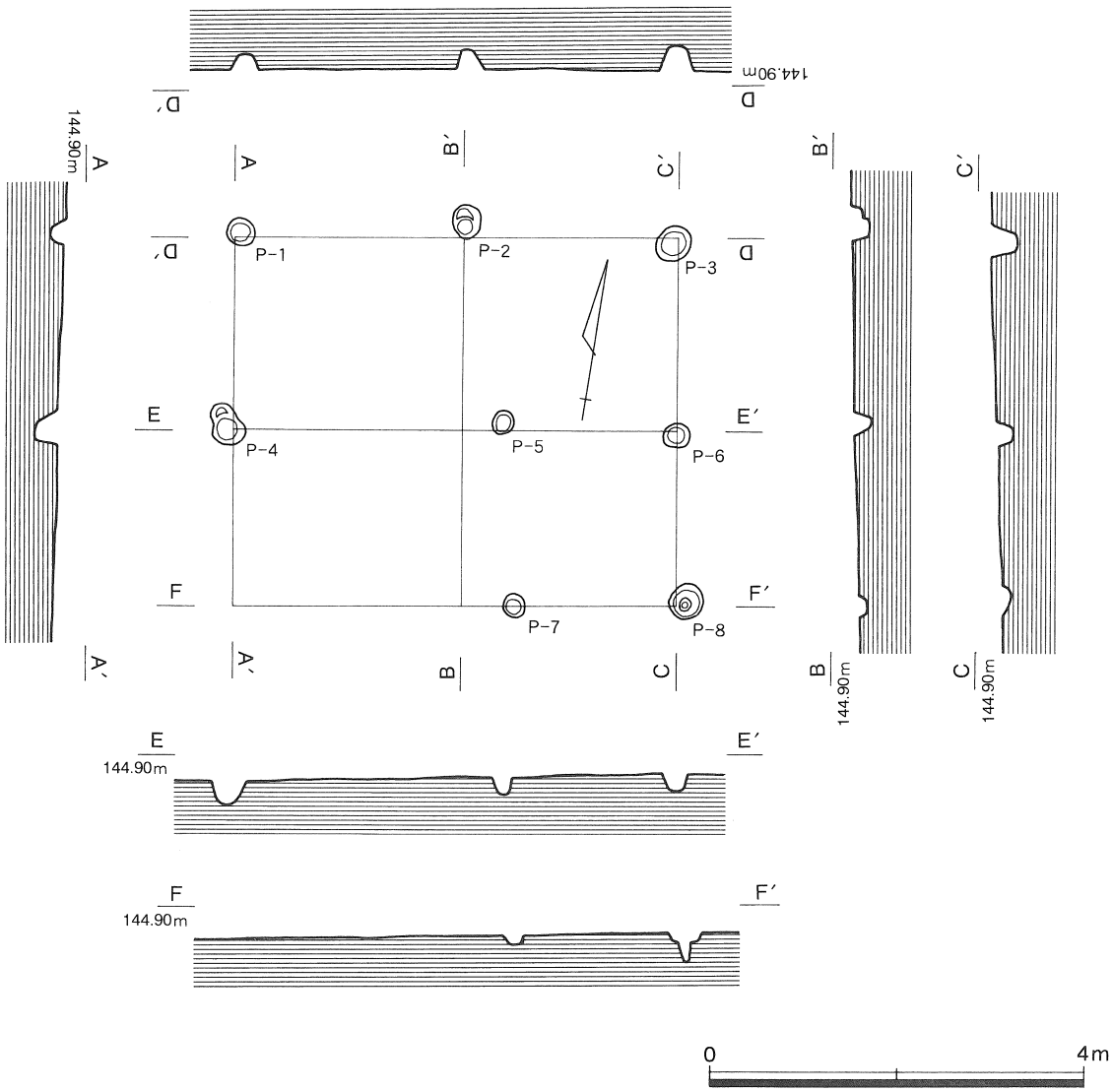


図101　SH-47実測図（1/80）

⑥　SH-49（図103）

SH-49はSH-46の約8.5m東で検出した掘立柱建物跡である。この遺構の北半はSH-49と重複する。なお、SH-48とSH-49の新旧については調査では明らかにすることはできなかった。

SH-49は東西２間、南北３間の掘立柱建物跡で、桁行方位はN-1°-Wである。規模は梁行4.2m、桁行7.0mである。柱穴間距離をみると、桁間は1.8～2.0mである。梁間はP-1とP-4の間が2.3m、P-6とP-8の間とP-7とP-10の間が2.5mとやや広いが、その他は1.8～2.0mである。柱穴規模は直径20～30cm、深さは10～20cmである。P-3とP-4、P-5から柱の直径は10cm前後であったことがうかがえる。

SH-49ではP-4から灰釉陶器の椀の破片が出土した（図180－937）。また、周囲の出土遺物の状況や柱穴の覆土から考えると、この掘立柱建物跡は10世紀後半～11世紀前半の遺構であろう。先述したが、SH-49はSH-48と重複して検出した遺構である。共に10世紀後半～11世紀前半の遺構と考えられるが、両者の前後関係については不明である。ただし、大きな時間差は考えがたい。

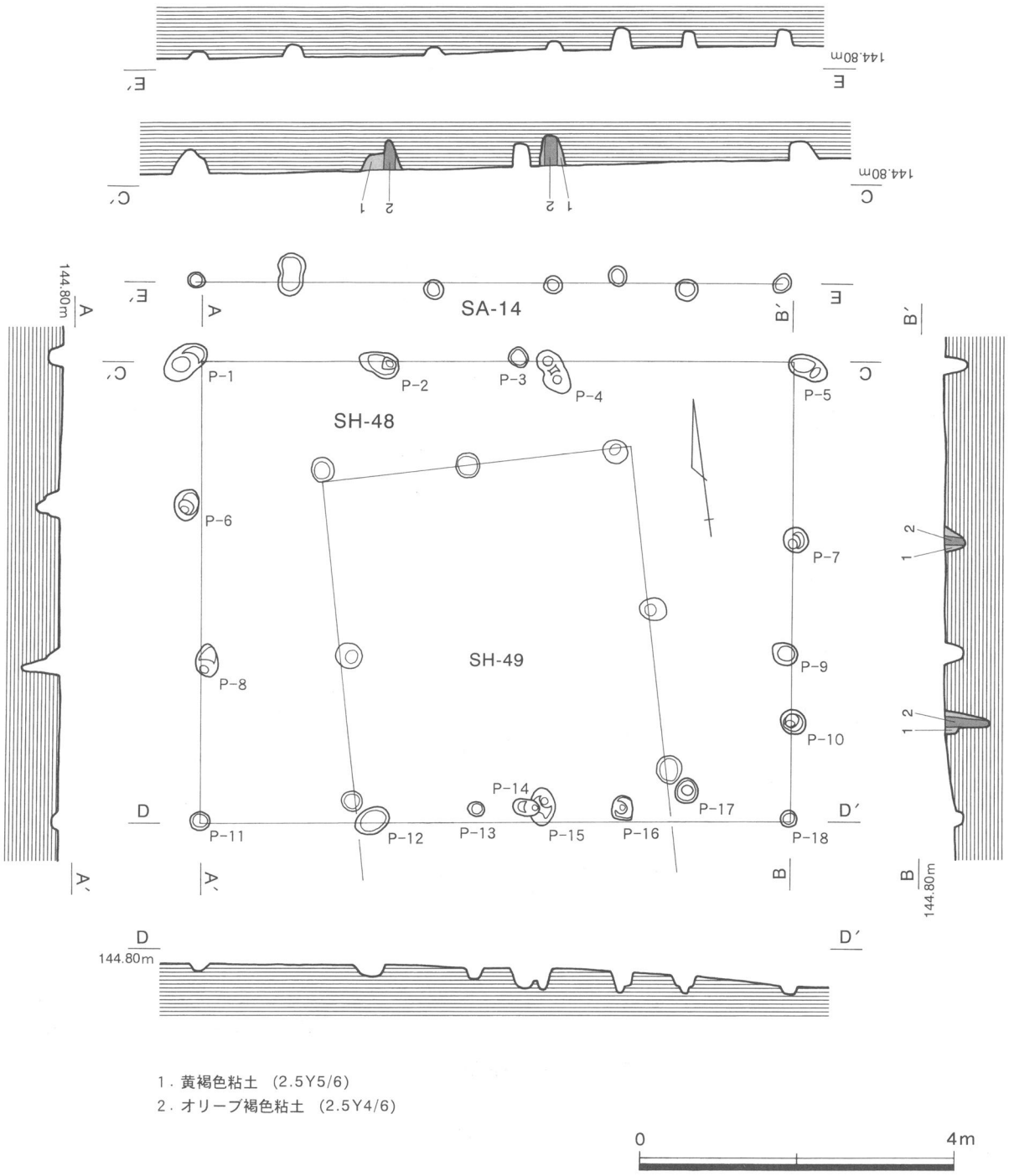


図102　SH-48・SA-14実測図（1/80）

⑵　柵　跡

①　SA-14（図102）

SA-14はSH-38の1.0m北側で検出した遺構である。８基の柱穴が東西にならび、その長さは7.7mである。柱列はN-82°-Wに方位をとる。柱穴間距離は0.9～1.8mと差があるが、平均的には1.0m程度といえる。柱穴の規模は直径20～30cm、深さ10～30cm程度である。柱穴からの出土遺物はなかったが、周囲からは山茶椀が多く出土している。また、出土遺物に加え、この遺構がSH-48に付随する庇あるいは柵と考えられることから、SH-48と同時期の10世紀後半～11世紀前半に位置づけられる。

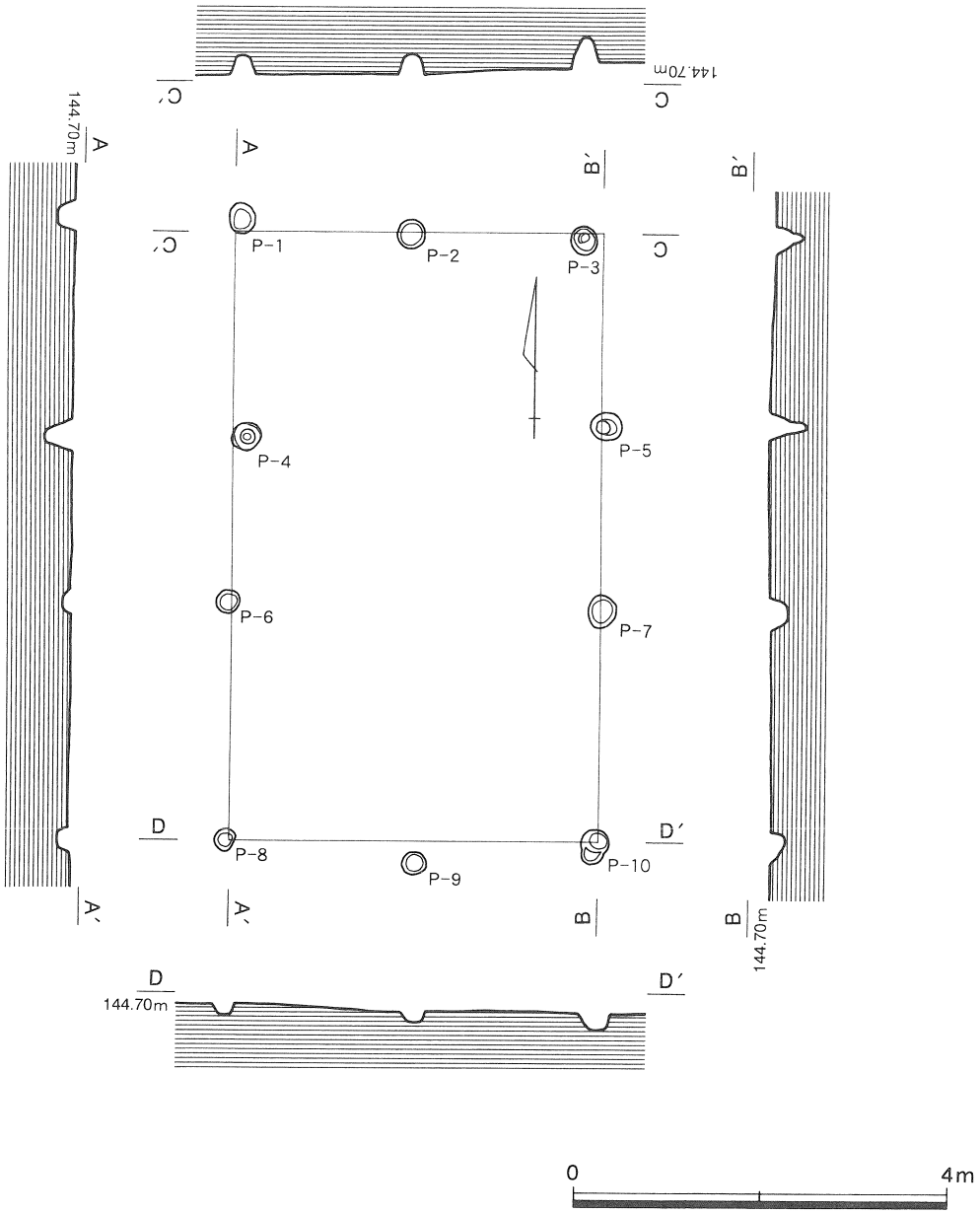


図103　SH-49実測図（1/80）

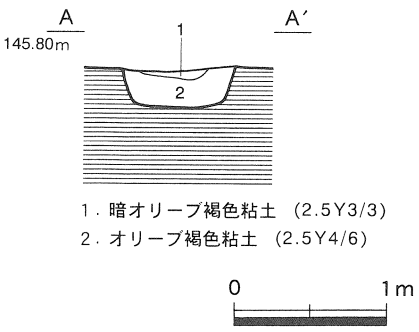


図104　SD-31断面図（1/50）

(3)　溝

①　SD-31（図104）

SD-31は調査区北西部で検出した溝で、北端部は平成10年に調査を実施した15区に続いている。検出できた長さは36.2mで、最大幅は1.0m、深さは0.3mである。

覆土や底面からは灰釉陶器や山茶椀が出土した（図177～178－885～928）。出土遺物からSD-31の廃絶年代は13世紀前半と考えられる。

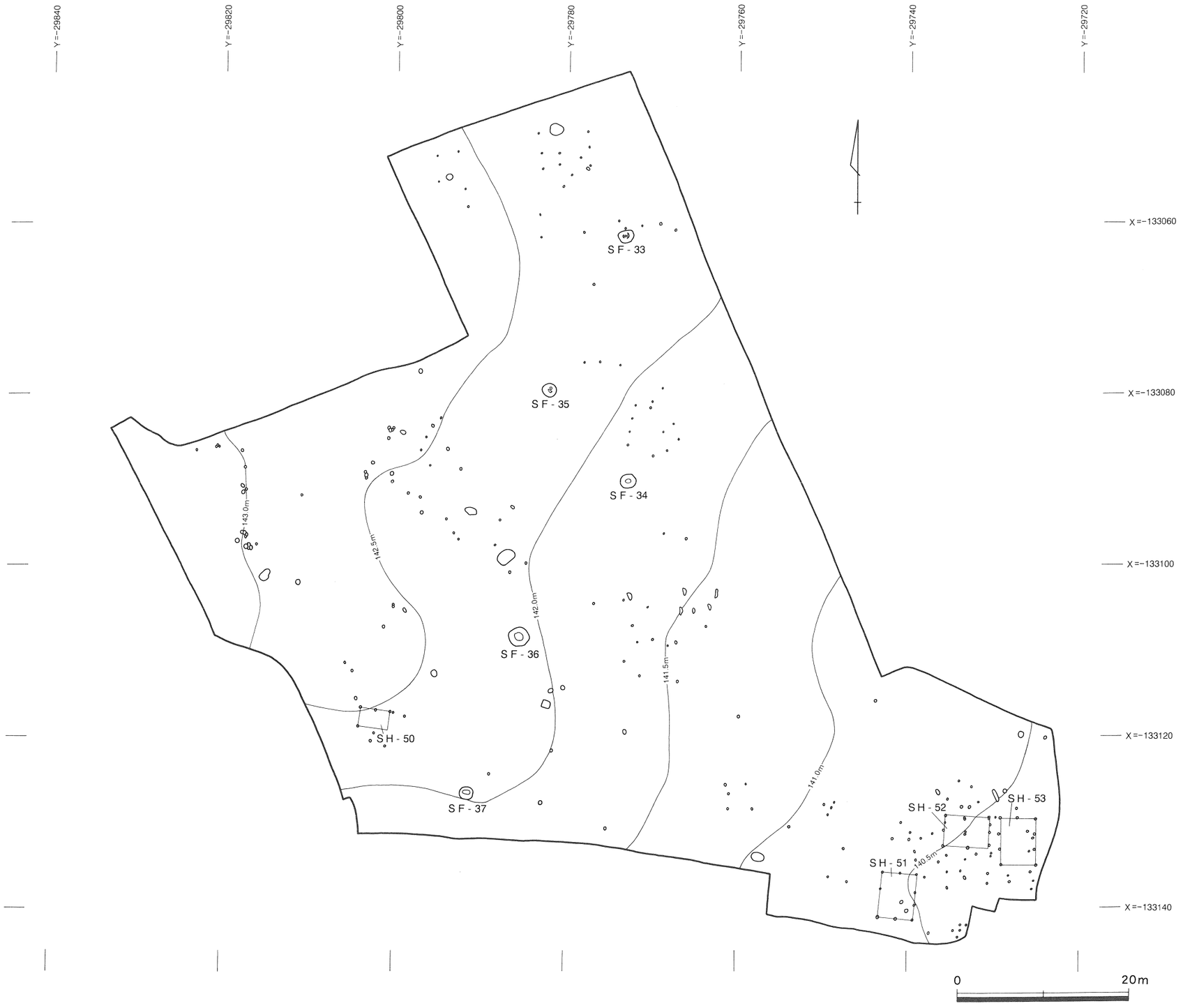


図105　調査区南東部の遺構群（1/500）

７．南東部の遺構群（図105）

ミョウガ原遺跡南東部は調査区では平成13年度に本調査を実施した48区全域と平成12年度に調査を実施した36区南端の一部である。

(1)　掘立柱建物跡

①　SH-50（図106）

SH-50は48区の南西部で検出した掘立柱建物跡である。この掘立柱建物跡は東西２間、南北１間、桁行方位はN-82°-Wである。規模は桁行2.5m、梁行4.2mである。柱穴間距離を見ると、桁間は2.2mと2.8m、梁間は1.7～1.95mである。柱穴規模は直径20～40cm、深さ10～30cmである。

柱穴からの出土遺物はなかった。周囲からは少量ではあるが、灰釉陶器が出土している。これらの出土遺物と柱穴の覆土から、SH-50は10世紀後半～11世紀前半の遺構の可能性が指摘できる。なお、この掘立柱建物跡の周囲には、他に掘立柱建物跡として復元できる遺構はなかった。

②　SH-51（図107）

SH-51は48区の南東端部で検出した掘立柱建物跡である。この遺構の北東4.5mにはSH-52が所在する。なお、この遺構の南側３mは調査区外となっている。調査区内は平坦面が広がっているが、調査区外に至ると急傾斜で下っている。

SH-51は東西２間、南北３間で、桁行方位はN-5°-Eである。規模は桁行5.8m、梁行4.4mである。柱穴間距離は桁間が1.9～2.1m、梁間が1.5～2.1mである。P-5とP-6の間のみ1.5mと他に比べ狭い。柱穴規模は直径25～45cm、深さ20～40cmである。建物北辺に対し南辺の柱穴の方が、規模が幾分大きい傾向にある。遺物はP-7とP-9から灰釉陶器（図182－995・986）、P-5から甕と考えられる土師器の細片が出土している。遺構の周囲からも灰釉陶器は多く出土している。これらの灰釉陶器は11世紀代に位置づけられ、SH-51はこの時期の遺構と考えられる。

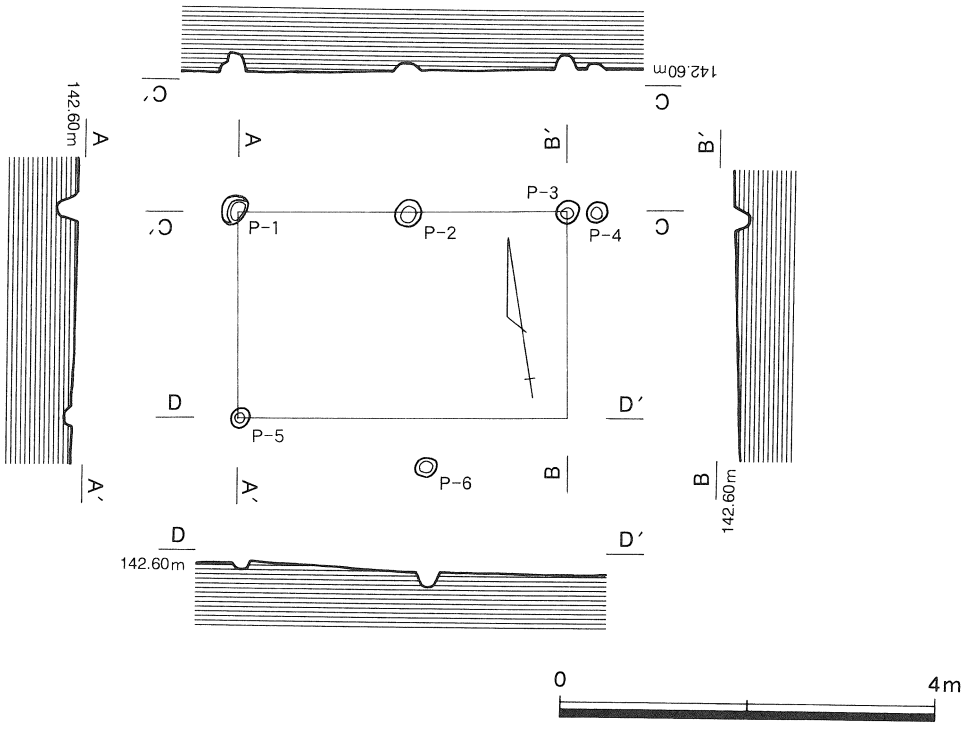


図106　SH-50実測図（1/80）

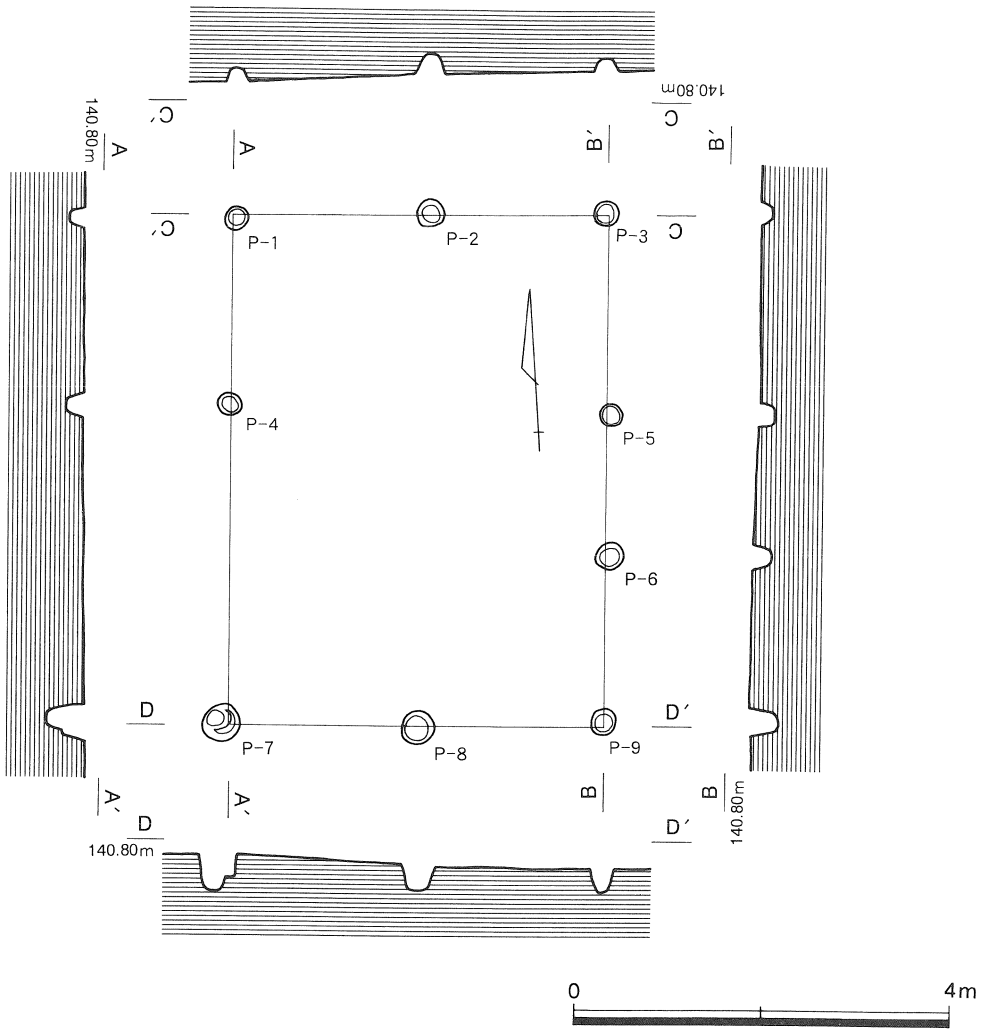


図107　SH-51実測図（1/80）

なお、SH-51の北東や南東では、この他にも多くのピットを検出している。これらのピットの中には灰釉陶器や土師器の細片が覆土中から出土したものもある。調査では掘立柱建物跡として復元できなかったが、これらのピットは掘立柱建物の一部であった可能性は考えられる。

③　SH-52（図108）

SH-52は平成13年度における48区の調査で検出した総柱の掘立柱建物跡である。ただし、調査区自体は36区に該当する範囲で検出した遺構である。この遺構の1.5m南西ではSH-51、1.3m東ではSH-53を検出している。

SH-52は東西２間、南北２間で、南北方向の柱穴はN-0°-Eに方位をとる。規模は東西5.9m、南北4.0mである。柱穴間距離を見ると、東西方向では2.4～2.8m、南北方向は1.5～1.9mで、南北方向に比べ、東西方向の柱穴間が広いといえる。柱穴の規模は直径20～30cm、深さは15～35cmである。

SH-52の柱穴の中には遺物を出土したものがある。遺物はP-1、P-2、P-11の覆土から出土している。ただし、いずれも出土遺物は土師器の細片であり、時期は特定し難い。なお、これらの遺物は覆土中からの出土であり、掘立柱建物廃絶後に流れ込んだものと考えられる。

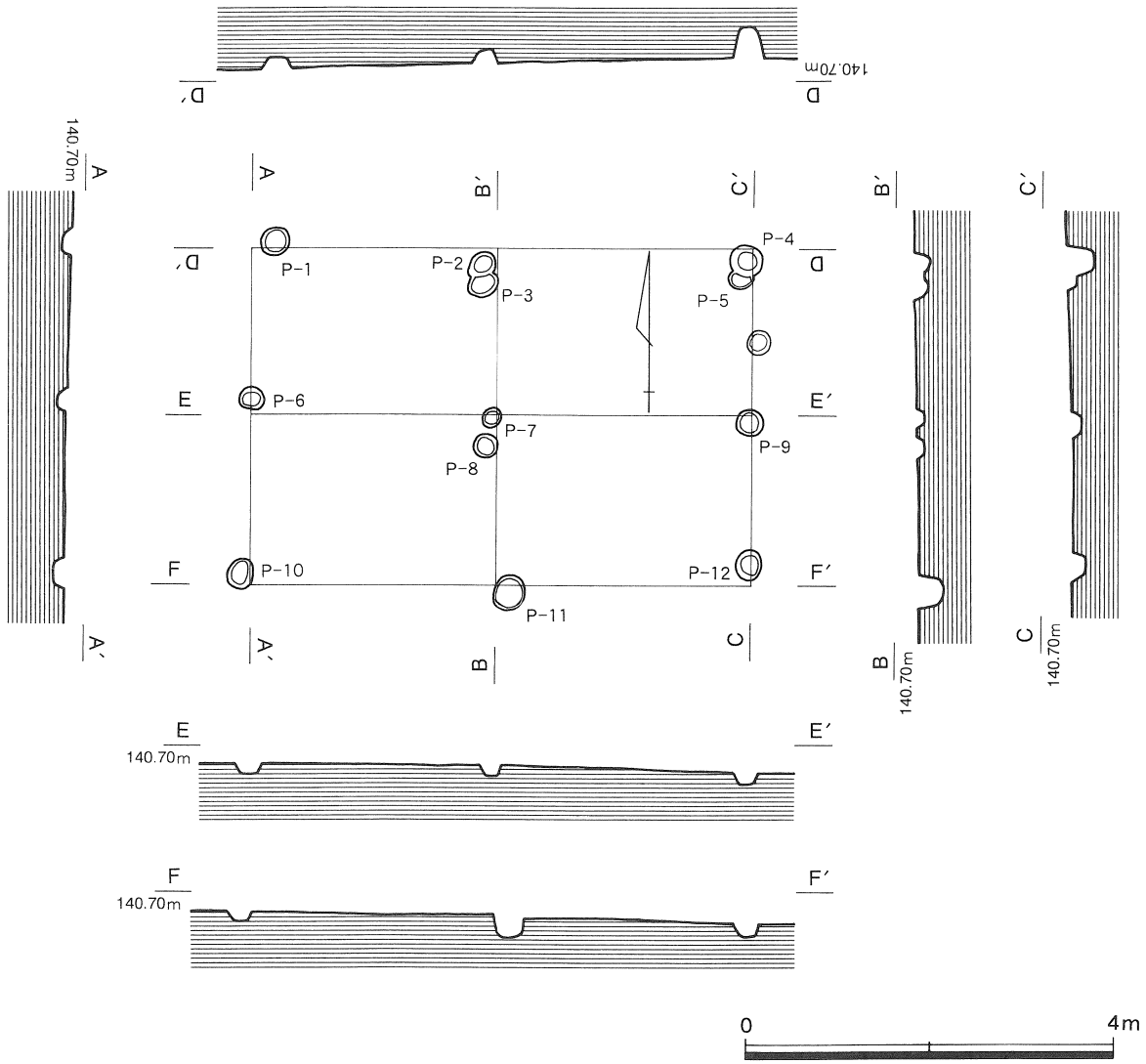


図108　SH-52実測図（1/80）

建物周辺の表土からは、灰釉陶器が多数出土している。SH-52の時期については、柱穴の出土遺物だけでは特定できないが、周囲からの出土遺物もあわせて考えると、11世紀代の遺構と位置づけることができる。

④　SH-53（図109）

SH-53は平成13年度の調査で検出した遺構である。ただし、調査区自体は36区に該当する。この遺構の1.3m西隣には先述したSH-52が所在する。

SH-53は東西２間、南北３間の掘立柱建物跡である。桁行方位はN-5°-Eで、規模は桁行5.7m、梁行4.4mである。柱穴間距離をみると、桁間は2.0mと2.1m、梁間はP-3とP-5の間が1.7mとやや狭いが、その他はいずれも1.9mである。なお、建物南辺においてP-8とP-9の間には柱穴を検出することができなかった。柱穴規模は直径30～40cm、深さ15～40cmである。

SH-53の柱穴のうち、P-6～P-9は覆土中から遺物を出土した。P-6とP-8からは灰釉陶器体部の細片が１点、P-7からは土師器片、P-9からは灰釉陶器口縁部の細片が出土している。細片であるため、時期に

ついては特定できない。ただし、SH-53の周辺では10世紀後半～11世紀前半に位置づけられる灰釉陶器が出土していることから、柱穴から出土した灰釉陶器も同時期のものと考えられる。SH-53もこの時期の遺構と考えられる。なお、調査ではSH-53は桁行３間の掘立柱建物跡と捉えたが、南側に更に１間広がる可能性もある。

ところで、この掘立柱建物跡周辺には建物跡として復元できた柱穴以外にも多くのピットが存在する。SH-52やSH-53の他にも掘立柱建物が存在した可能性は十分考えられる。

(2) その他の遺構

48区では上述した４棟の掘立柱建物跡の他、いくつかの遺構を検出した。その多くは小穴である。調査区の北東部や中央部にはピットが集中する箇所もみられた。これらは確認することはできなかったものの、掘立柱建物跡であった可能性もある。これらの遺構から遺物は出土しなかったが、覆土はSH-50～SH-53と似たものであり、同時期のものと考えられる。なお、48区では掘立柱建物跡とピット以外に、平安時代後半～鎌倉時代初頭に位置づけられる遺構は検出されなかった。

時代は異なる遺構であるが、縄文時代のものと考えられる陥穴５基もこの調査区で検出している。この陥穴については、次節で述べる。

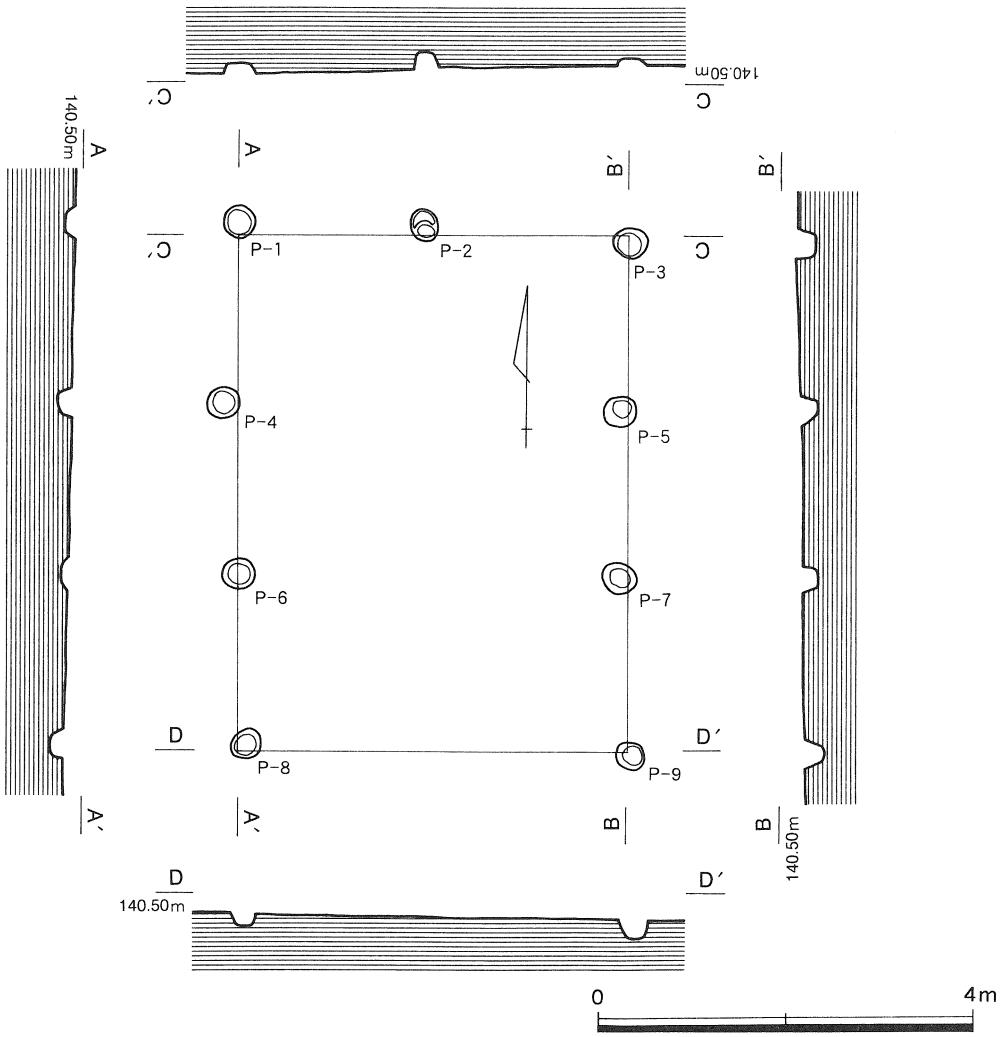


図109　SH-53実測図（1/80）

８．調査区東端部の遺構群（図110）

ミョウガ原遺跡の東端部とは平成13年度に調査を実施した50区に相当する。先述した遺構群からは、やや離れた所にある。最も近い南東部の遺構群からみても、125ｍ東に離れた場所である。この調査区はミョウガ原遺跡の所在する台地平坦面では最東端であり、調査区の東側と南側は著しい急斜面となっている。調査区からは南に物見塚、北東には湯日川や大井川、志太平野を一望できる。

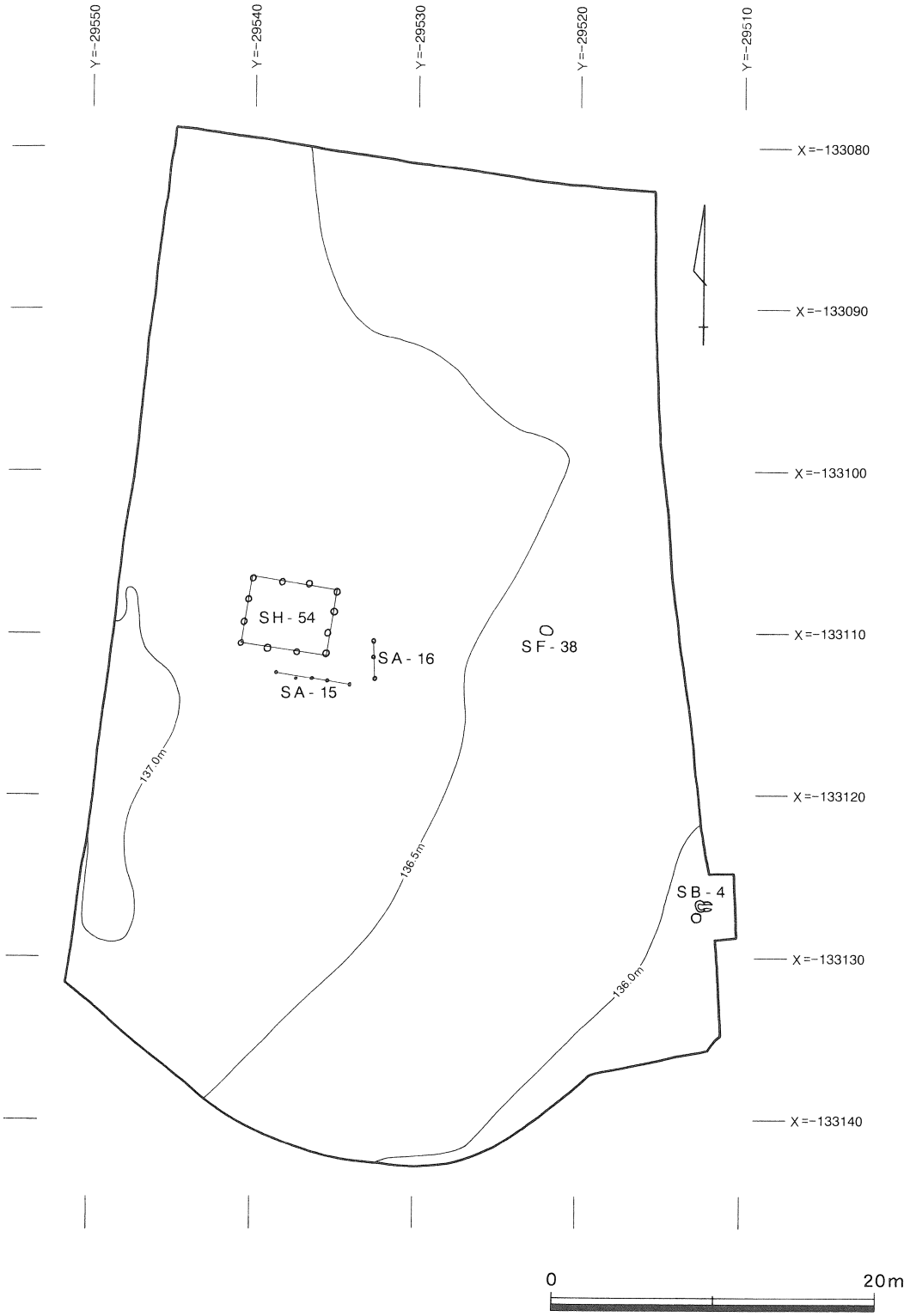


図110　調査区東端部の遺構群（1/400）

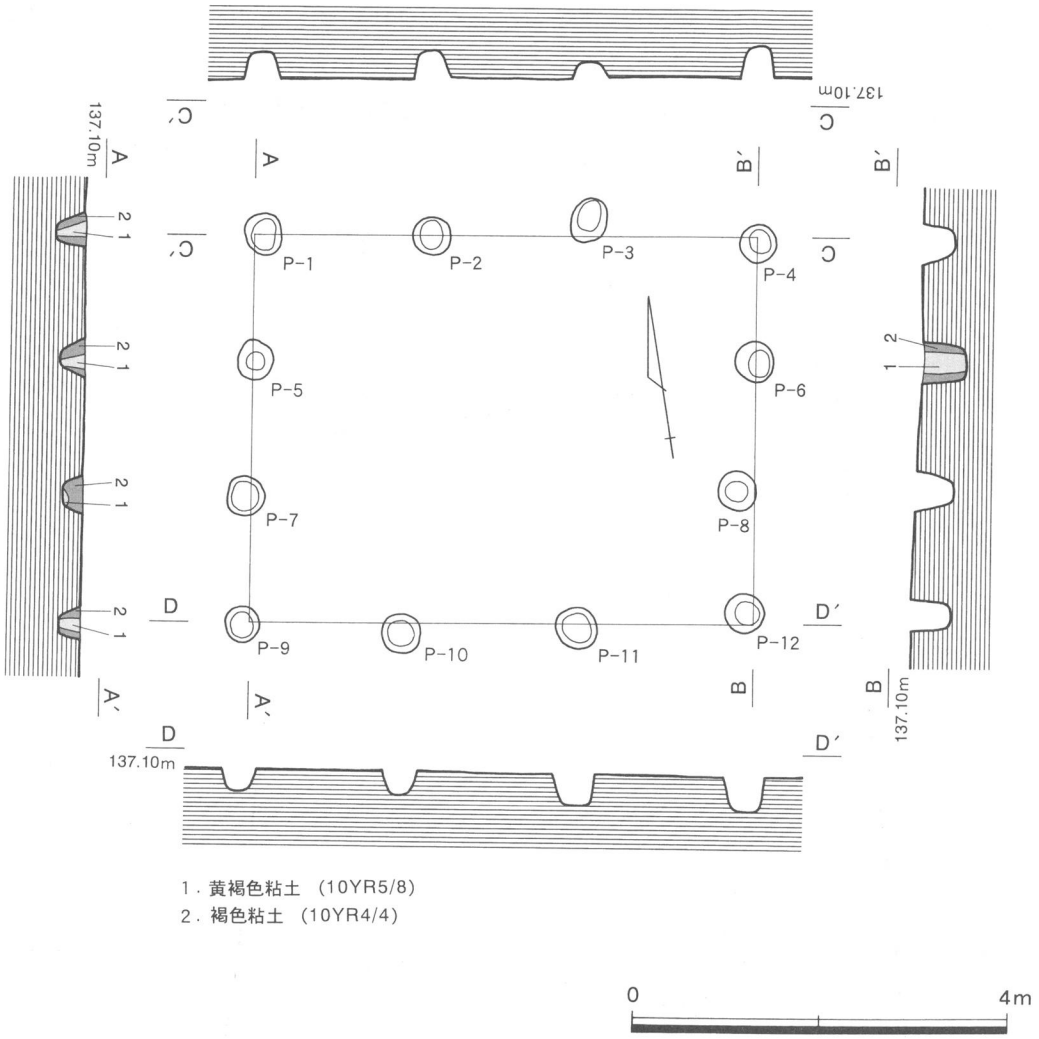


図111　SH-54実測図 (1/80)

(1)　掘立柱建物跡

①　SH-54 (図111)

SH-54は50区の中央部分で検出した東西３間、南北３間掘立柱建物跡である。この掘立柱建物跡の2.5m東にはSA-16、1.4m南にはSA-15が所在する。SH-54は東西5.7m、南北4.6mの規模で、桁行方位はN-81°-Wである。柱穴間距離は梁間1.6～1.8m、桁間1.2～1.4mである。柱穴規模は直径30～40cm、深さ25～50cmである。P-1、P-5、P-9から柱の直径は15～20cmとうかがえる。柱穴からの出土遺物はなかった。また、周囲からの出土遺物も無かった。そのため、時期については手がかりを欠く。ミョウガ原遺跡において検出されている掘立柱建物跡はいずれも平安時代後半～鎌倉時代初頭であることを考慮にいれると、SH-54も同時期の遺構の可能性がある。ただし、規模や柱穴覆土の様子は他の掘立柱建物跡と若干様相が異なる。そのため、時期を違える可能性も否定できない。

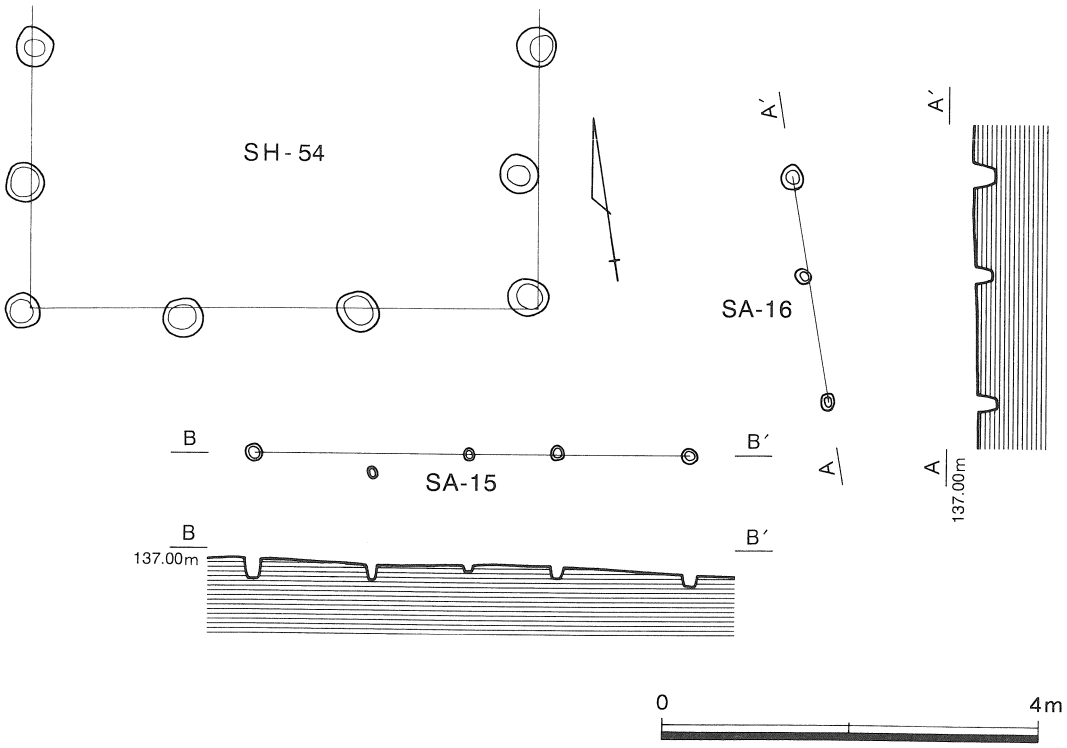


図112　SA-15・SA-16実測図（1/80）

⑵　柵　跡

①　SA-15（図112）

SA-15は50区の中央部で検出した遺構である。この遺構の1.4m北には上述したSH-54が存在する。

SA-15はN-80°-Wに方位をとる柵跡で、４基のピットが東西4.8mに渡り並ぶ。その位置からSH-54に付随する柵と考えられる。ピット間の距離は0.9～1.3mである。ピットの規模は直径10～20cm、深さ10～30cmである。この遺構からの出土遺物はなかった。時期については断定ができないが、SH-54と同時期の遺構と考えられる。

②　SA-16（図112）

SA-16は50区のほぼ中央で検出した柵跡である。この遺構はSH-54の2.5m東に位置し、SA-16の1.3m西南西にはSA-15が所在する。

SA-16は南北方向に３基のピットが並ぶ。その長さは2.6mで、N-2°-Eに方位をとる。この遺構も上述したSA-15同様にSH-54に付随する柵と考えられる。ピット間の距離はP-6とP-7の間が1.0m、P-7とP-8の間が1.3mである。柱穴の規模は直径10cm前後、深さ20～30cmである。この遺構も出土遺物はなかった。時期についてはSH-54と同時と考えられ、平安時代後半～鎌倉時代初頭の可能性があげられる。

⑶ その他の遺構

① SB-4（図113）

SB-4は50区の南東部で検出した遺構である。検出したのは竪穴住居跡の竈の袖部と考えられる遺構と土坑である。竪穴住居跡の柱穴や壁面については検出できなかった。後世の開墾により削平されたものと考えられる。耕作地の隅部に位置したこの範囲のみが残存したものと考えられる。

まず、竈について見ると、袖部は北側の幅は最大34cm、検出長は55cm、残存高は22cmである。南側の袖部は検出長47cm、最大幅23cm、残存高25cmであった。袖部は地山の上に、褐色粘土を主体として構築されている。なお、構築補強材等は見られなかった。焚口の幅は25cmで、燃焼部は５cm程度掘り込まれている。なお、この竈は、更に東側に続いている可能性が考えられた。そのため、東側に1.5m程調査区を拡幅して、遺構の広がりを確認したが、撹乱となっており遺構の検出には至らなかった。そのため、煙道等については不明である。遺物は焚出口から土師器の甕の細片が出土した。

竈の南西には土坑が存在した。この土坑は不正形な円形の平面形をもち、規模は最大径60cm、深さ10cmである。底面からは灰釉陶器が出土した（図184－1025・1026）。この出土遺物から、SB-4は11世紀代の遺構と考えられる。

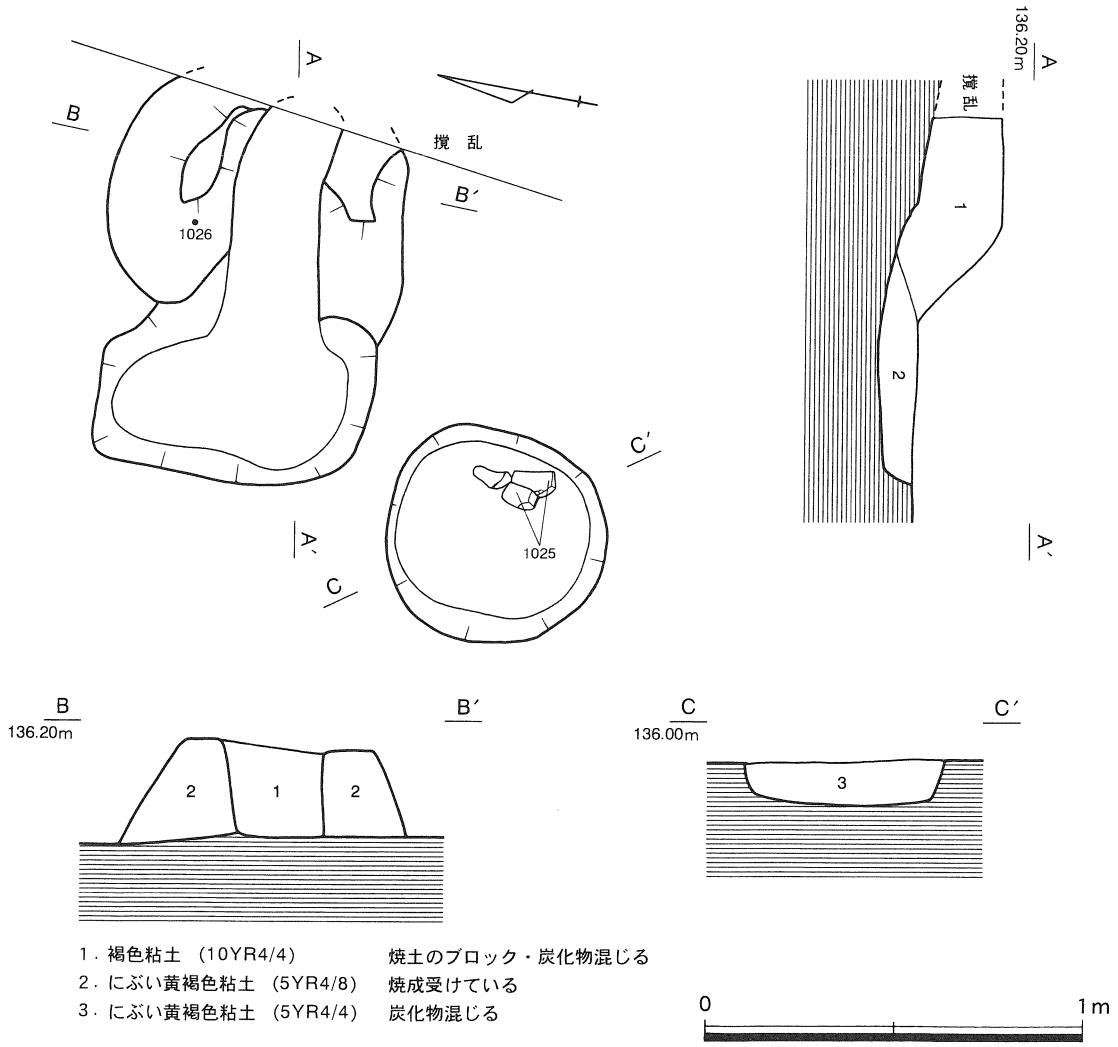


図113　SB-4実測図（1/20）

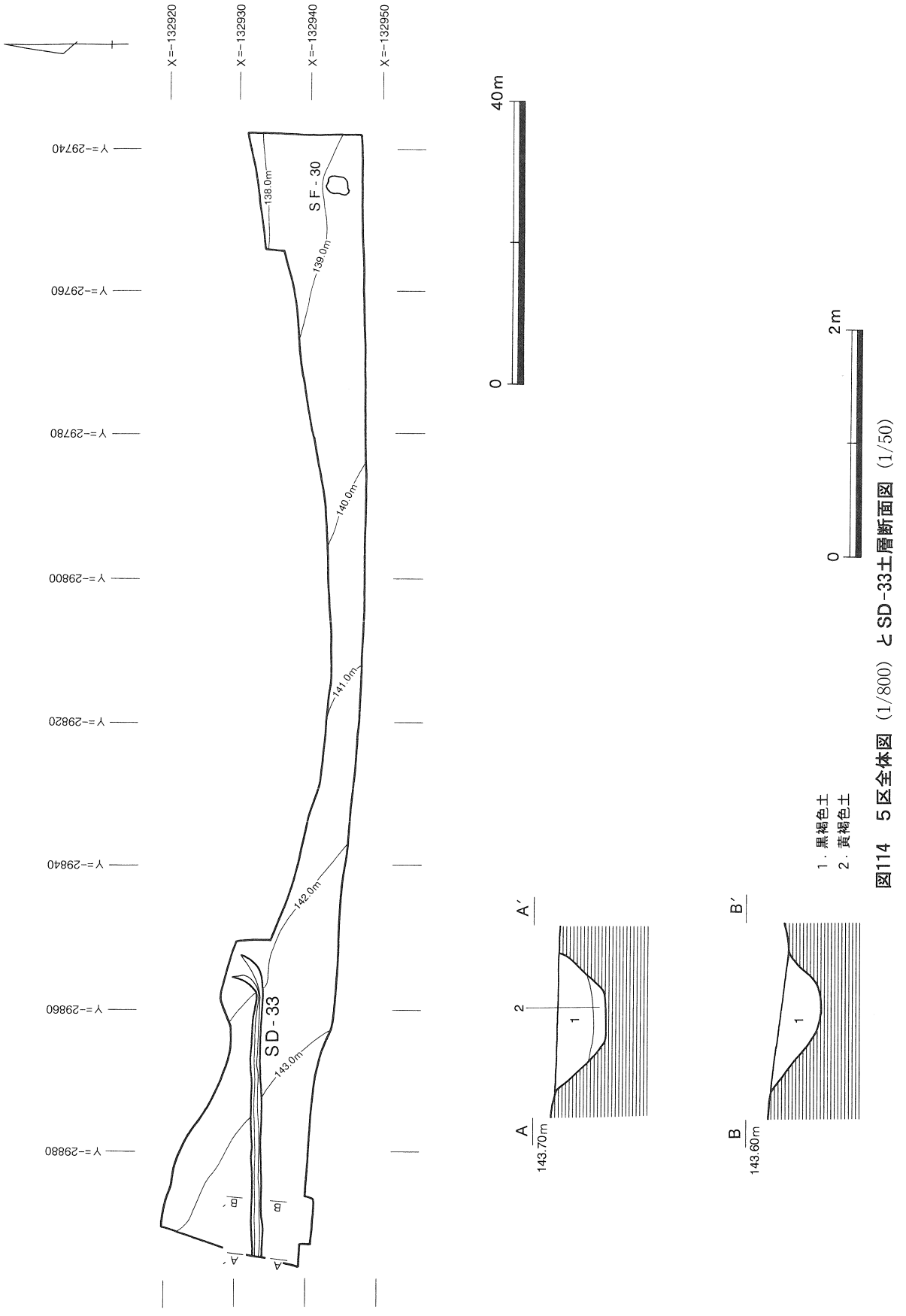


図114　５区全体図（1/800）**とSD-33土層断面図**（1/50）

９．その他の調査区の遺構

⑴　５区の遺構（図114）

５区はミョウガ原遺跡の所在する台地平坦面の北縁部に位置する調査区で、平成９年度に調査を実施した。調査区の北側は急斜面となり下っている。この調査区では、１条の溝（SD-33）と土坑を検出した。出土遺物から溝は平安時代末～鎌倉時代初頭、土坑は縄文時代に位置づけられる。

①　SD-33

SD-33は東西方向の溝で、27ｍの長さに渡り検出ができた。最大幅は0.3m、深さは0.5ｍである。この遺構の東端部は北に向きを変えている。元来、更に西側に続いていたと考えられるが、撹乱により破壊され、続きは検出できなかった。この遺構からは少量ではあるが、山茶椀や青磁が出土した（図184-1027・1028）。出土遺物からこの溝の、廃絶年代は13世紀前半と考えられる。

なお、５区で検出した土坑（SF-30）については、次節で述べる。

⑵　29区の遺構（図116）

29区は平成12年度に調査を行った。ミョウガ原遺跡の中では西方に位置する調査区である。

①　SA-15（図115）

SA-15は調査区の北西部で検出した遺構である。６基のピットがN-76°-Eに方位をとり、東西に並ぶ。その長さは11.3ｍである。ピット間の距離は、1.1～3.0ｍである。ピットの規模は直径20～30㎝、深さ20㎝前後である。ピットからの出土遺物はなく、周囲からの出土遺物もなかった。そのため、時期を特定しがたい。ただし、ピットの覆土は、これまでに述べた掘立柱建物跡の柱穴の覆土と似ているため、近い時期の遺構の可能性が考えられる。

②　SD-34（図116・117左）

SD-34は29区の西半部で検出した溝である。東西方向の溝で、14.6ｍの長さが検出できた。最大幅は0.9m、深さは0.3ｍである。この遺構は更に西へと続くと考えられるが、隣接する28区では撹乱のため、続きは検出できなかった。SD-34からは遺物が出土しなかった。周囲からの出土遺物も無く、先述したSA-15と同様に時期を特定することはできなかった。ただし、この遺構も覆土がこれまでに述べた、他の溝と似た状況にあるため、平安時代後半～鎌倉時代初頭の可能性が考えられる。

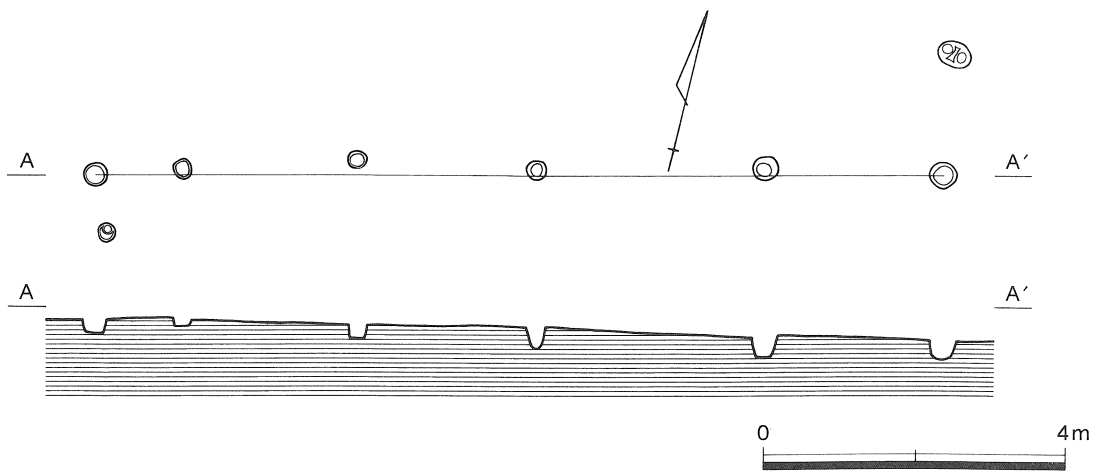
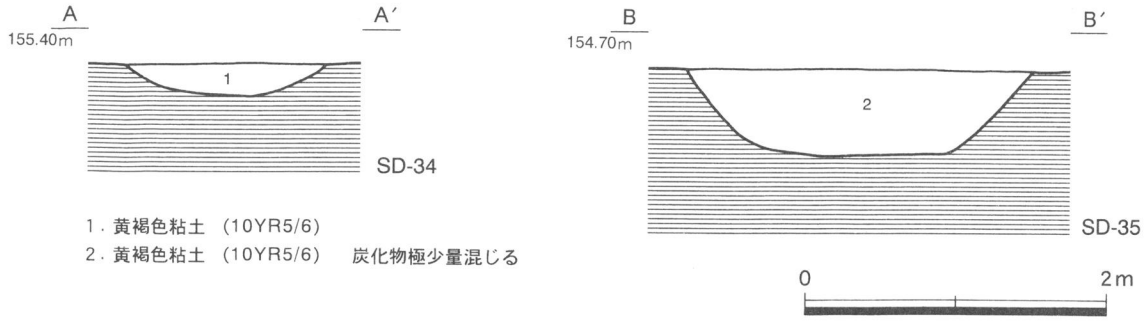


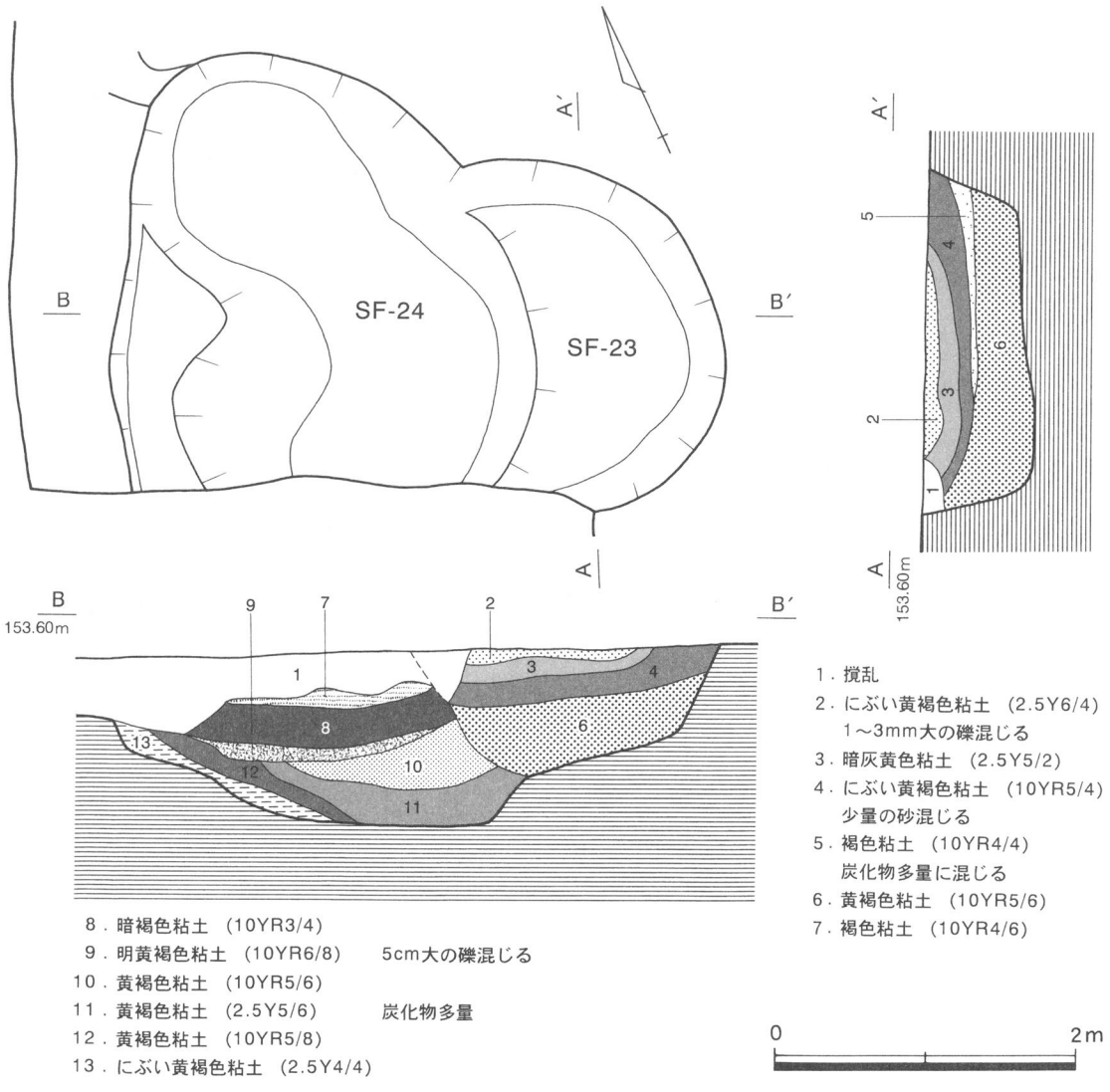
図115　SA-17実測図（1/100）

図116　29区の全体図（1/200）



1．黄褐色粘土　(10YR5/6)
2．黄褐色粘土　(10YR5/6)　炭化物極少量混じる

図117　SD-34(左)・SD-35(右)実測図 (1/50)



1．撹乱
2．にぶい黄褐色粘土　(2.5Y6/4)
　1～3mm大の礫混じる
3．暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)
4．にぶい黄褐色粘土　(10YR5/4)
　少量の砂混じる
5．褐色粘土　(10YR4/4)
　炭化物多量に混じる
6．黄褐色粘土　(10YR5/6)
7．褐色粘土　(10YR4/6)
8．暗褐色粘土　(10YR3/4)
9．明黄褐色粘土　(10YR6/8)　5cm大の礫混じる
10．黄褐色粘土　(10YR5/6)
11．黄褐色粘土　(2.5Y5/6)　炭化物多量
12．黄褐色粘土　(10YR5/8)
13．にぶい黄褐色粘土　(2.5Y4/4)

図118　SF-23・SF-24実測図 (1/50)

③　SD-35（図116右）

SD-35は29区の中央部で検出した溝である。検出長は16.6mである。北側に隣接する40区は地境の溝が入り込み、続きを検出することはできなかった。最大幅は2.9m、深さは0.5mである。この溝からも出土遺物はなく、周囲からも出土遺物はなかった。先述したSA-15とSD-34同様に時期を特定し難いが、覆土の様子から、この遺構も平安時代後半～鎌倉時代初頭の可能性が指摘できる。

④　SF-23・SF-24（図118）

SF-23・SF-24は平成12年度に調査を実施した29区で検出した土坑である。先述したSD-35から約40m、北北東に所在する。

SF-23は不正形な円形の平面形をとり、最大径は2.3m、深さは0.8mであった。SF-24も平面形は不正形な円形で、最大径は3.1m、深さは1.2mである。層位の観察から、SF-24が古く、SF-23が新しいことが言える。ただし、覆土の様子から大きな時期差は考えがたい。

遺物はSF-24の覆土からⅡ期～Ⅲ期のものと考えられる山茶椀の破片が出土している（図184－1029・1031）。これらの出土遺物から、SF-23・SF-24の時期については平安時代後半～鎌倉時代初頭の遺構と考えられる。

⑤　SF-25（図119）

SF-25はSF-23・SF-24の南南東約30mに所在する遺構で、平成12年度の調査で検出した遺構である。この遺構は円形の平面形で、直径0.8m、深さ0.9mの規模

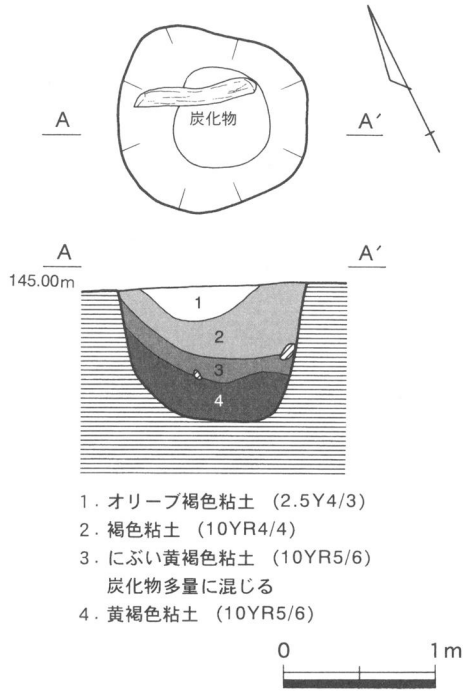


図119　SF-25実測図（1/50）

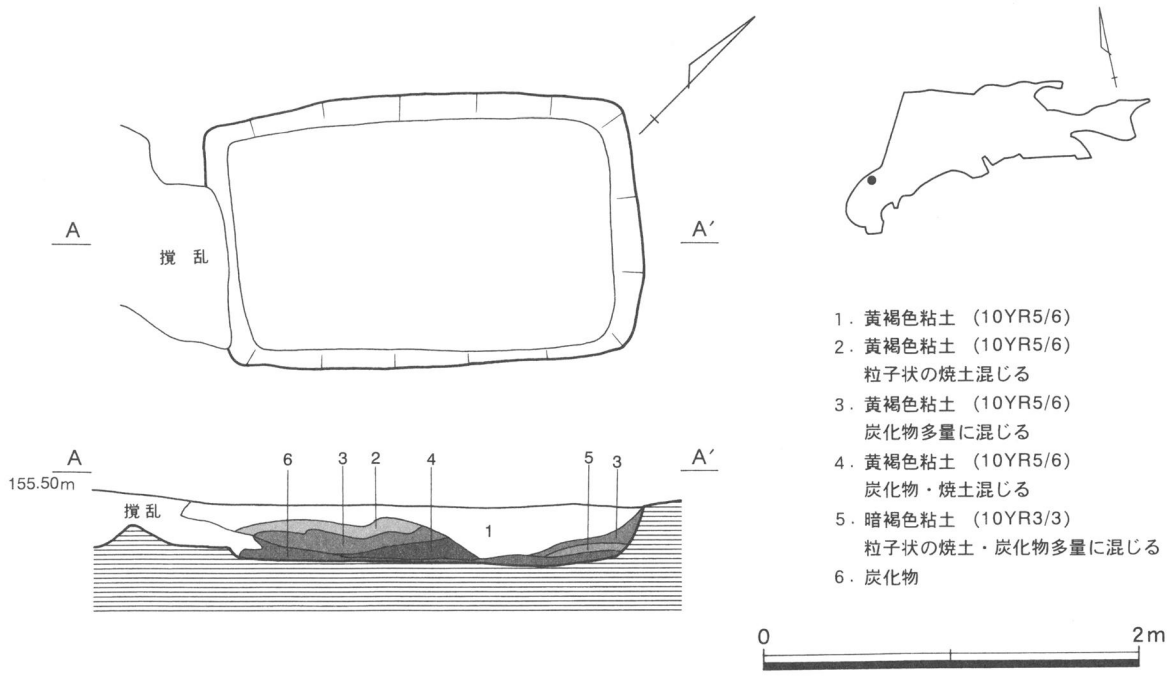


図120　SF-26実測図（1/40）

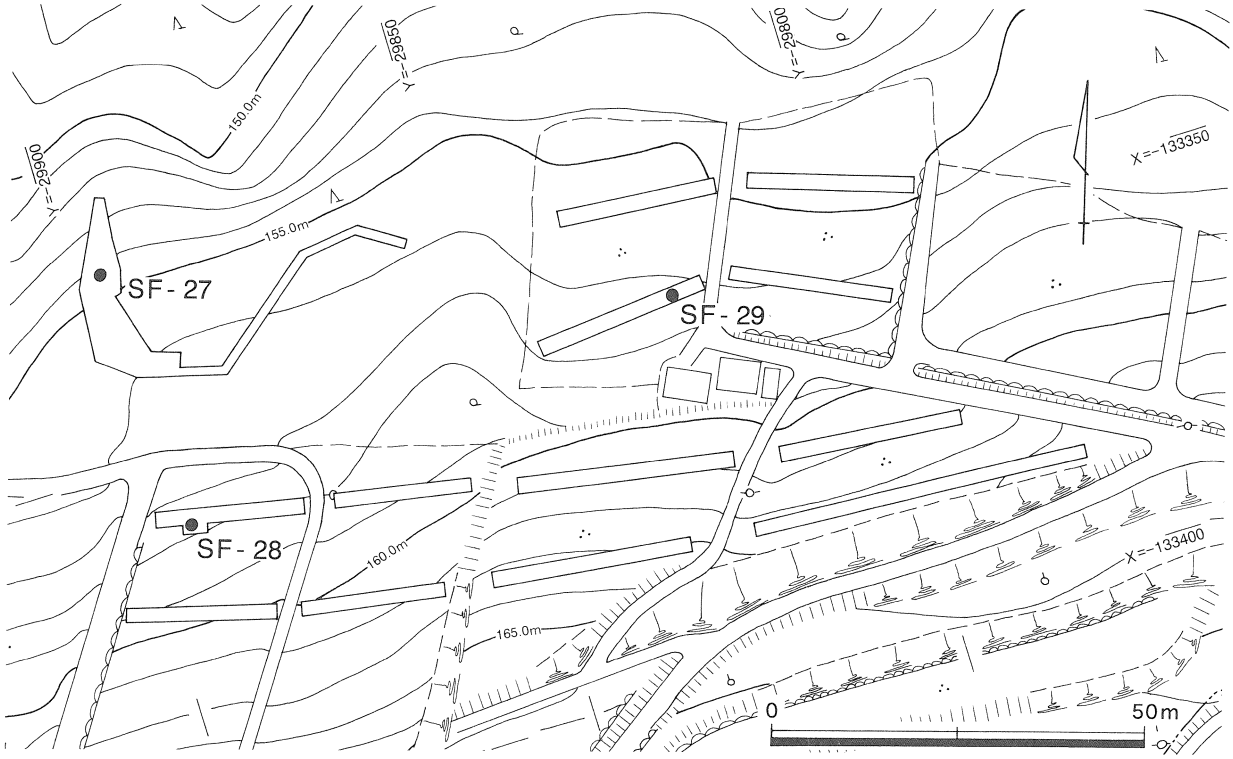


図121　J地点全体図（1/1,000）

である。遺構の底面には長さ0.8m、最大幅0.15mの木質状のものが貼り付いていたが、取り上げは不可能であった。遺物は覆土から山茶椀の小片が出土した。遺物の時期は特定できないが、12世紀後半～13世紀前半に位置づけられる可能性が高く、SF-25も同時期の遺構と考えられる。

(3)　40区検出の遺構

①　SF-26（図120）

SF-26は平成12年度に確認調査を実施した40区で検出した炭焼窯と考えられる遺構である。この遺構の平面形は長方形で、規模は2.4m、幅1.4m、深さ0.3mである。長辺の方位はN-44°-Eである。壁面や底面は焼成を受けていた。煙道については検出できなかったものの、撹乱が入り込む南西部にあったものと考えられる。この遺構からの出土遺物は無かった。また、周囲からの出土遺物もなかった。時期については中世のものと考えられる。

(4)　J地点検出の遺構

ミョウガ原遺跡は空港関連遺跡のO地点とJ地点に相当する。これまでに述べた遺構は空港関連遺跡のO地点に所在する。遺構はJ地点でも検出した。検出した遺構は3基の土坑である（図122）。J地点はO地点の南方約200mにあり、O地点とJ地点の間には深い谷が入り込んでいる。

①　SF-27（図122上）

SF-27はJ地点の北西部で検出した炭焼窯と考えられる遺構で、平成9年度の調査で検出した。全長3.3m、最大幅1.4m、深さ0.3mの長方形の平面形を持つ土坑の西側に長さ0.4m、幅0.4mの煙道が付く。遺構の底面は焼成を受けていたが、特に中央部と煙道に近い部分は強く火を受けていた。また、土坑西寄りには炭化物の塊もみられた。遺構の底面には長さ1.4m、最大幅2.5m、深さ0.05mの溝が存在した。こ

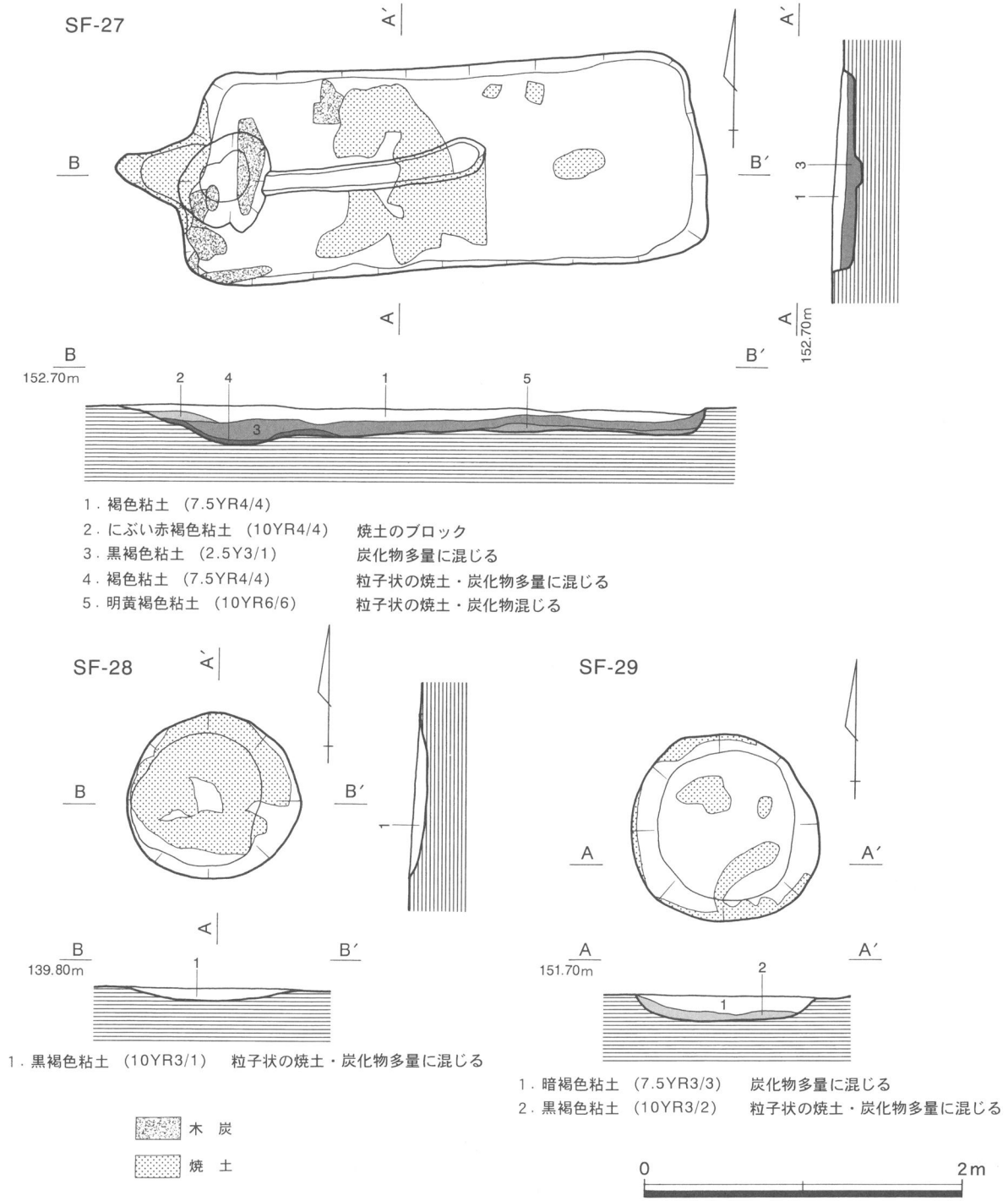


図122　SF-27～29実測図（1/40）

の溝の壁面や底面も焼成をうけていた。SF-27からの出土遺物はなかったが、炭化物を分析に出したところ、西暦1235±50年という結果がえられた（註６）。そのため、この土坑は中世のものとして位置づけられる。

②　SF-28（図122左下）

SF-28はSF-27の南方約15mのところで検出した土坑である。円形の平面形をとり、直径は1.2m、深さ0.2mの規模である。この土坑の底面と壁面の一部は焼成を受けていた。覆土には粒子状の焼土や炭化

物が含まれていた。SF-28からの出土遺物はなかった。そのため、時期については特定できない。ただし、SF-28と形状が似ているSF-29は覆土中の炭化物を分析した結果、13世紀後半～14世紀前半という年代が得られた。そのため、SF-28もこれに近い時期のものと考えられる。

③ SF-29（図122右下）

SF-29はSF-27の東北東約90m地点で検出した土坑である。平面形は円形で、規模は直径1.1m、深さ0.1mである。土坑の底面と壁面は強く焼成を受けていた。また、土坑の覆土には多くの炭化物と、焼土が混ざっていた。この土坑からは遺物が出土しなかった。遺構底面から出土した炭化物を分析に出した結果、西暦1295±50年という成果をえられた（註７）。そのため、SF-29は13世紀後半～14世紀前半の遺構と位置づけられよう。

註

1　現地調査では便宜上、調査区毎に遺構番号を付したが、本報告書ではこれとは別に改めて番号を付した。番号は遺跡の北西部から南東方向に向かって付ける事を原則とした。なお、ミョウガ原遺跡における現地調査は、空港建設工事の工程の都合上、調査地区単位で実施した。そのため、隣接した調査区であっても、地区番号が大きく異なる場合も多い。また、SR-1のように遺構によっては、複数の地区にまたがるものも存在する。そのため、調査年次・担当者によって同一遺構の解釈にも若干の齟齬がある。報告にあたっては、統一を図るように努めた。

2　水野正好、磯部武雄氏の御教示による。

3　山茶椀については松井1988・1993、河合2001を参照した。灰釉陶器については、山下1995を参照した。

4　深さは検出面から計測した数値である。以下、土坑や溝等に関わる深さも検出面からの値である。

5　平野吾郎氏から南北５間、東西２間で、庇の付随する掘立柱建物である可能性があることを指摘された。

6　Ｊ地点のSF-27・SF-28出土の炭化物については、株式会社古環境研究所に放射性炭素年代測定を委託した。測定方法は加速器質析（AMS法）である。共に前処理として、酸－アルカリ－酸の洗浄、調整は石墨調整である。測定結果は別表のとおりである。

7　註６に同じ

別表　測定結果

資料名	^{14}C年代（年BP）	δ^{13}C測定値（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	歴年代	
SF-27出土炭化物	860±50	−27.4	820±50	交点	AD 1235
				2σ	AD 1065～1075,
					AD 1155～1258
				1σ	AD 1195～1270
SF－29出土炭化物	710±50	−26.9	680±50	交点	AD 1295
				2σ	AD 1295
				1σ	AD 1285～1310,
					AD 1355～1385

（２σ：95%　probability，１σ：68%　probability）

(1) **^{14}C年代測定値**　資料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。^{14}C半減期は5,568年を用いた

(2) **δ^{13}C測定値**　資料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位対比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位対比からの千分偏差（‰）で表す。

(3) **補正^{14}C年代値**　δ^{13}C測定値から資料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

(4) **歴年代**　過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより、歴年代（西暦）を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。

表９　掘立柱建物跡計測表

名　称	桁行方位	桁　行		梁　行		梁間（m）	桁間（m）	検出調査区	備　考
		間数	規模	間数	規模				
SH-1	N-8°-W	2	5.4	1	2.7	2.2～2.6	2.2～2.4	13'区	
SH-2	N-14°-W	2	4.3	1	2.8	1.7～2.2	2.2～2.6	13'区	
SH-3	N-11°-E	2	5.8	2	4.8	2.5～3.0	1.9～2.6	14区	
SH-4	N-8°-W	2	4.7	1	2.9	2.1～2.2	2.4	14区	
SH-5	N-11°-W	4	9.6	3	6.7	1.9～2.3	1.6～2.4	14区	総柱
SH-6	N-12°-W	5	11.2	2	5.1	1.7～2.8	2.0～2.7	14区	総柱
SH-7	N-4°-W	3	6.4	1	3.1	1.85～2.0	2.6～3.0	25区	
SH-8	N-7°-W	2	4.8	1	2.6	2.0～2.6	2.2～2.5	25区	
SH-9	N-88°-E	3	3.2	1	2.2	1.1～2.1	1.9～2.05	25区	
SH-10	N-14°-W	2	4.2	1	3.0	1.7～2.1	2.7～2.8	25区	
SH-11	N-2°-W	2	4.4	1	2.2	1.8～2.05	1.9	25・26区	
SH-12	N-6°-W	3	6.4	(1)	-	1.9～2.1	-	25区	
SH-13	(N-86°-E)	(2)	-	(1)	-	(2.0)	(2.0)	26区	
SH-14	N-10°-W	2	3.9	1	2.3	1.65～2.0	1.95～2.2	26区	
SH-15	N-4°-W	3	6.3	1	2.3	1.6～2.35	1.95～2.1	26区	
SH-16	N-9°-W	2	4.5	1	3.0	2.0～2.1	2.5～2.75	26区	
SH-17	N-9°-W	2	3.8	1	2.4	1.7～1.8	2.4～3.2	26区	
SH-18	N-0°-W	2	4.2	2	3.3	1.4～2.1	1.1～1.5	26区	
SH-19	N-3°-W	2	3.9	1	2.5	1.4～2.0	2.1～2.3	4区	
SH-20	N-1°-E	2	4.5	1	2.5	1.9～2.4	2.2～2.3	4区	
SH-21	N-3°-W	4	6.1	2	4.5	1.8～2.2	2.2～2.6	4区	
SH-22	N-86°-E	3	6.4	2	5.0	1.8～2.4	2.0～2.1	4区	総柱
SH-23	N-85°-W	4	9.0	1	2.6	1.9～2.6	1.3～1.4	4区	
SH-24	N-84°-W	3	7.2	1	2.4	2.2～2.4	2.1	4区・54区	
SH-25	N-83°-W	3	7.7	1	3.4	2.4～2.6	2.9～3.1	54区	
SH-26	N-83°-W	3	7.8	1	2.6	2.4～2.6	2.2～2.4	54区	
SH-27	N-0°-W	2	3.2	1	3.6	1.3～1.5	3.1～3.2	3'区	
SH-28	N-88°-E	3	7.2	2	4.4	2.1～2.8	1.8～2.4	53区	
SH-29	N-9°-W	2	3.4	1	2.9	1.4～4.6	2.1～2.6	53区	
SH-30	N-60°-W	3	5.0	2	4.6	1.4～1.7	1.8～2.3	46区	
SH-31	N-13°-E	3	8.6	2	4.6	2.5～3.0	1.9～2.4	46区	(総柱)
SH-32	N-8°-W	2	5.0	1	3.0	2.1～2.6	2.4～2.7	46区	
SH-33	N-0°-W	2	4.8	1	2.4	2.0～2.3	1.9～2.0	46区	
SH-34	N-2°-W	2	5.0	2	4.9	1.9～2.4	2.0～2.6	46区	総柱
SH-35	N-1°-E	2	5.1	1	2.6	2.1～2.4	2.2～2.3	46区	
SH-36	N-4°-E	2	5.0	1	2.7	2.1～2.5	2.2	46区	
SH-37	N-1°-W	2	4.5	2	4.5	1.5～2.6	1.95～2.1	46区	(東西:梁、南北:桁)
SH-38	N-4°-E	2	3.8	2	3.1	1.6～1.8	1.3～1.4	34区	総柱
SH-39	N-71°-W	3	8.4	2	4.8	2.6～2.8	1.9～2.3	34区	総柱
SH-40	N-3°-E	3	4.8	3	4.2	1.3～1.4	1.4～2.1	34区	
SH-41	N-13°-W	2	5.0	2	4.9	1.1～1.3	1.8～2.5	34区	
SH-42	N-90°-W	3	5.3	2	4.3	1.4～1.9	1.7～2.2	34区	総柱
SH-43	N-89°-W	2	3.4	1	2.2	1.3～1.4	1.6	34区	
SH-44	N-14°-W	2	4.0	2	3.2	2.0～2.2	1.6～2.0	35区	
SH-45	N-4°-W	3	6.2	2	4.8	1.7～2.0	1.4～2.8	35区	
SH-46	N-5°-W	3	7.6	3	5.4	2.1～2.4	1.4～1.9	35区	
SH-47	N-1°-E	2	5.2	2	5.1	1.9～2.9	1.9～2.9	35区	総柱
SH-48	N-93°-W	4	8.4	3	6.0	1.4～2.6	1.4～2.2	35区	
SH-49	N-1°-W	3	7.0	2	4.2	1.8～2.5	1.8～2.0	35区	
SH-50	N-82°-W	2	4.2	1	2.5	1.7～1.95	2.2～2.8	48区	
SH-51	N-5°-E	3	5.8	2	4.4	1.5～2.1	1.9～2.1	48区	
SH-52	N-90°-W	2	5.9	2	4.0	2.4～2.8	1.5～1.9	48区	総柱
SH-53	N-5°-E	3	5.7	2	4.4	1.7～1.9	2.0～2.1	48区	
SH-54	N-81°-W	3	5.7	3	4.6	1.6～1.8	1.2～1.4	50区	

第３節　平安時代～鎌倉時代の遺物

遺物は調査範囲のほぼ全域において出土した。ここでは、遺構別、地区別に出土遺物を述べる。

１．自然流路（SR-1）の出土遺物

(1)　土器類

①　46区（SR-1西端部）の出土土器

調査区の西から東へと流れるSR-1の西端部である46区においてSR-1は撹乱層、旧表土層、黄灰色粘土層、黒色粘土層、黄灰色砂層に分層でき（註１）、各層から遺物が出土した（層位は図66参照）。更に遺構底面からも遺物が出土した。

撹乱・旧表土層の出土土器（図123－１～７）　１～５は山茶椀の椀である。１は口縁部から体部の１/８が残存し、口径15.1cmと推定される。２～５は底部のみの残存で、高台径は6.0～7.3cmである。底部は２・３・５が糸切り、４はナデである。その他の部位は全点、横ナデによる調整である。３は高台に籾殻痕、４と５はスノコ痕が確認できる。１～３と５の焼成は良好で１と２は灰色、３はにぶい黄燈色、５は暗青灰色を呈する。４の焼成はやや悪く、灰白色を呈する。２は見込みに重ね焼き痕がある。

６は底部のみの残存であるが、灰釉陶器の椀である。底部は糸切りされ、その他は横ナデによる調整が行われる。焼成は良好で灰白色を呈し、見込みには重ね焼き痕がある。

７は山茶椀の小椀で、底部のみが残存した。焼成は良好で青灰色を呈する。底部は糸切りの後ナデによる調整が行われている。高台にはスノコ痕が確認できる。

時期は2・3がⅡ期-２、７はⅠ期と考えられる（註２）。１・４・５はⅢ期に位置づけられる。６は折戸53号窯式併行期に位置づけられる。この他、上層からは30点程の山茶椀の破片が出土している。１～

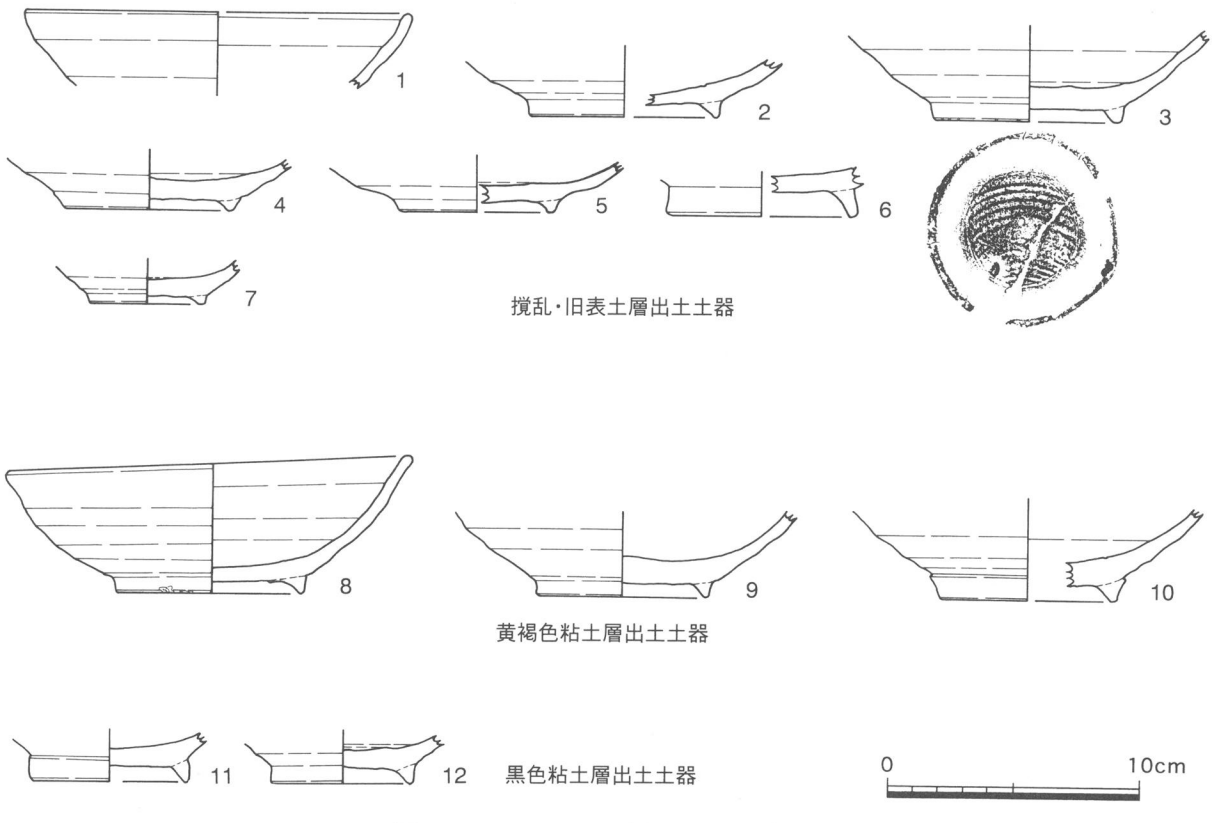


図123　SR-1の出土遺物１（46区①）

７をはじめとし、いずれも東遠江で生産された山茶椀、灰釉陶器である。

黄灰色粘土層（第３層）の出土土器（図123－８～10）　８～10は東遠江で生産された山茶椀である。８は全体の約３/５が残存し、口径15.8cm、高台径7.2cm、器高5.5cmである。内外面の一部には自然釉が付着する。９と10は底部のみの残存で、高台径はともに6.6cmである。３点とも底部は糸切りされ、その他は横ナデによる調整が行われる。８は籾殻痕、９と10はスノコ痕が高台に確認できる。10は見込みに重ね焼き痕を有する。いずれも焼成は良好で８は青灰色、９は灰色、10は灰黄褐色を呈する。８と９はⅡ期-２、10がⅢ期に位置づけられる。

黒色粘土層（第４層）の出土土器（図123－11・12）　11と12は灰釉陶器の椀である。11と12は底部のみの残存であった。ともに焼成は良好で灰白色を呈する。底部は糸切り、その他は横ナデによる調整が行われている。２点とも東遠江で生産されたもので、折戸53号窯式併行期に位置づけられる。この他、10点程の山茶椀が出土している。いずれも東遠江で生産された山茶椀である。

黄灰色砂層（第７層）の出土土器（図124－13～29）　13～21は山茶椀の椀である。13は全体の約１/２、14は約３/５が残存した。13は口径16.0cm、器高5.2cm、高台径7.0cmである。14は口径16.2cm、高台径7.1cm、器高5.4cmである。13の底部は糸切りであるが、14の底部は糸切りの後ナデによる調整が行われている。ともにその他の調整は横ナデである。高台を見ると、13は高台にスノコ痕、14は籾殻痕が確認できる。15は口縁部のみの残存で、口径は14.0cmと推定される。

16～21は底部のみの残存で、高台径は5.9～7.6cmである。いずれも底部は糸切りが行われるが、21のみ糸切り後にナデによる調整が行われる。底部以外の調整は全て横ナデである。16～17、20は高台にスノコ痕、18と21は籾殻痕、16と17・19・21の見込みには重ね焼き痕が確認できる。焼成はいずれも良好で、13・14・19・20は灰色、15と16～18・21は灰白色を呈する。いずれも東遠江で生産されたもので、13と14・18～21はⅢ期-１に、16と17はⅡ期-２に位置づけられる。なお、16と17は底部に墨書が確認できた。断定はできないが、16は２文字ないしは３文字で「□（□）力」、17は「大」であろうか（註３）。

22と23は灰釉陶器の椀であるが、ともに底部の一部が残存したのみである。両者焼成は良好で、22は灰白色、23は灰黄色を呈する。底部は糸切りされ、その他は横ナデによる調整が行われる。22は見込みに重ね焼き痕が確認でき、体部内面には自然釉が付着する。23は折戸53号窯式併行期、22はこれより新しい時期に位置づけられる。共に、東遠江産の灰釉陶器である。

24は底部のみが出土した山茶椀の小椀で、高台径は4.4cmである。焼成は良好で灰色を呈し、内面に自然釉が付着する。調整は底部が糸切り、その他が横ナデである。

25～27は山茶椀の小皿であるいずれも焼成は良好で灰白色を呈し、調整は底部が糸切り、その他は横ナデである。25は体部内面、26と27は口縁部、28は体部の内外面に自然釉が付着する。25と26はⅡ期、27と28がⅢ期と考えられる。いずれも東遠江産の山茶椀である。

29は白磁碗である。残存したのは底部の約１/２で、残存高は2.4cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。Ⅰ類に分類でき、11世紀以前に位置づけられる。

底面の出土土器（図125）　30と33は灰釉陶器の椀、31と32は山茶椀の小椀である。30～32は完形で、30は31の上に伏せた状態で出土した。

30は口径14.3cm、高台径6.8cm、器高4.5cm、底部は糸切りの後にナデによる調整が行われ、その他の部位の調整は横ナデである。この土器の内面には１カ所、外面には２カ所、墨書が確認できる。内面と外面の墨書の一つは「千・万」、外面の一つは「王」あるいはそれに類する記号と考えられる。焼成は良好で灰白色を呈する。内面には墨痕も確認できる。

31は口径8.4cm、高台径4.0cm、器高2.4cm、焼成は良好で青灰色を呈する。底部は糸切りされ、その他は横ナデによる調整が行われている。底面には墨書が確認できる。「一楽」であろうか。

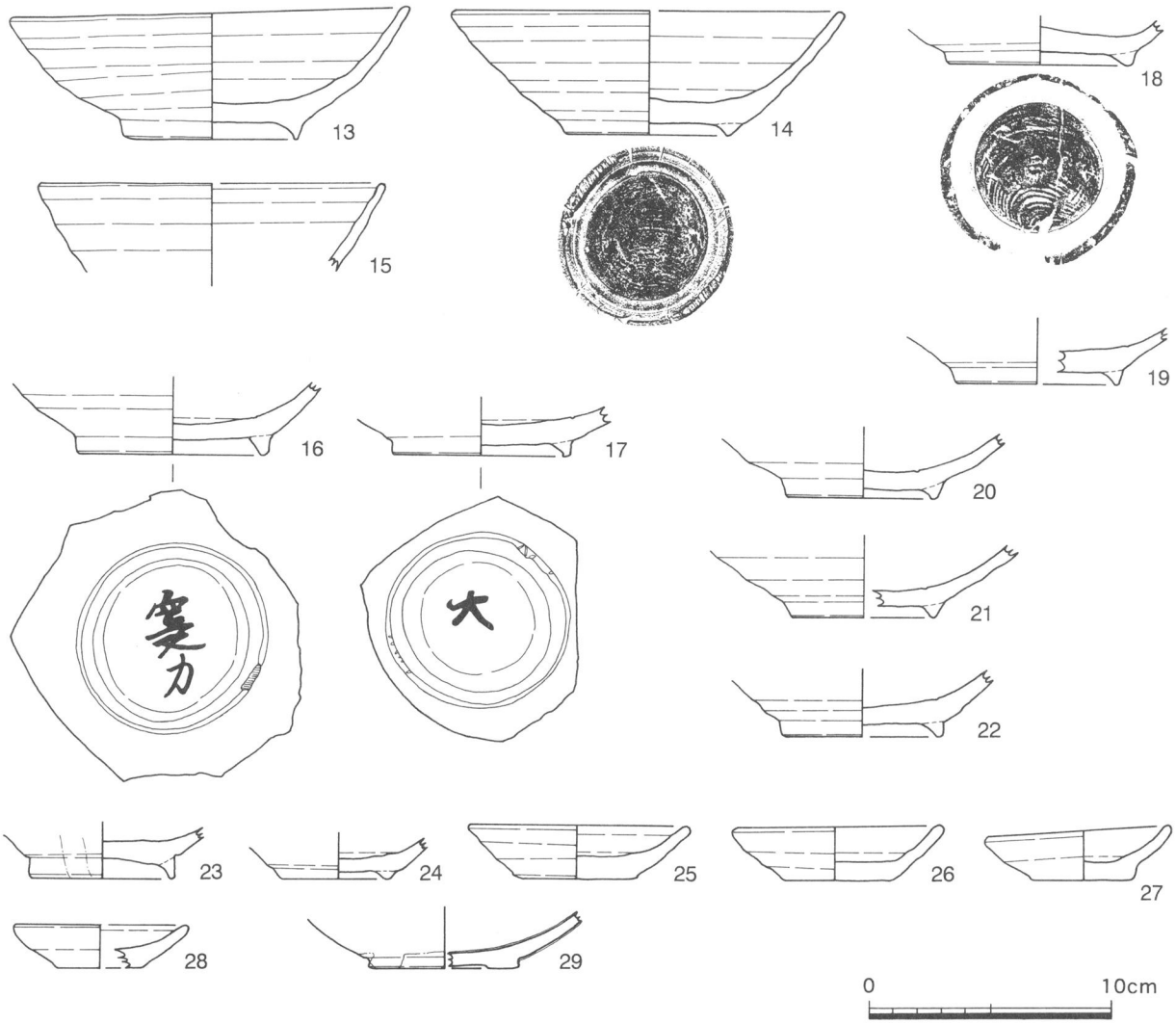


図124　SR-1の出土遺物２（46区②）

32は口径8.3cm、器高4.3cm、高台径3.4cm、焼成は良好で灰白色を呈する。底面は糸切りの後にナデによる調整が行われ、その他は横ナデが行われる。底面には「拾」と考えられる墨書が確認できる。

33は底部の約１/４が残存し、高台径は7.35cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈する。底部は糸切り、その他は横ナデによる調整で、高台にはスノコ痕が残る。底面には判読できないが墨書が認められる。

いずれも、東遠江で生産されたものである。30と33は折戸53号窯式併行期で10世紀後半～11世紀前半、31と32はⅠ期-２で12世紀前半～中葉に位置づけられる。底面からはこの他、灰釉陶器や山茶椀の破片が30点程出土した。

②　15区（SR-1西半）の出土土器（図126）

SR-1は15区においては遺構の中央に撹乱が深く入り込んでいた。SR-1は上から、撹乱層、暗褐色粘土層、黒色粘土層、黄灰色粘土層の順で層位が確認できた（註４）。

撹乱層の出土土器（図126－34～36）　34と35は灰釉陶器の椀である。ともに底部の破片であった。焼成は良好で34はにぶい黄燈色、35は灰白色を呈する。34の底部は糸切り、35は摩滅のため判然としない。その他の調整は横ナデである。34の内面には自然釉が付着する。いずれも、折戸53号窯式～東山72号窯式併行期に位置づけられ、東遠江で生産された灰釉陶器である。

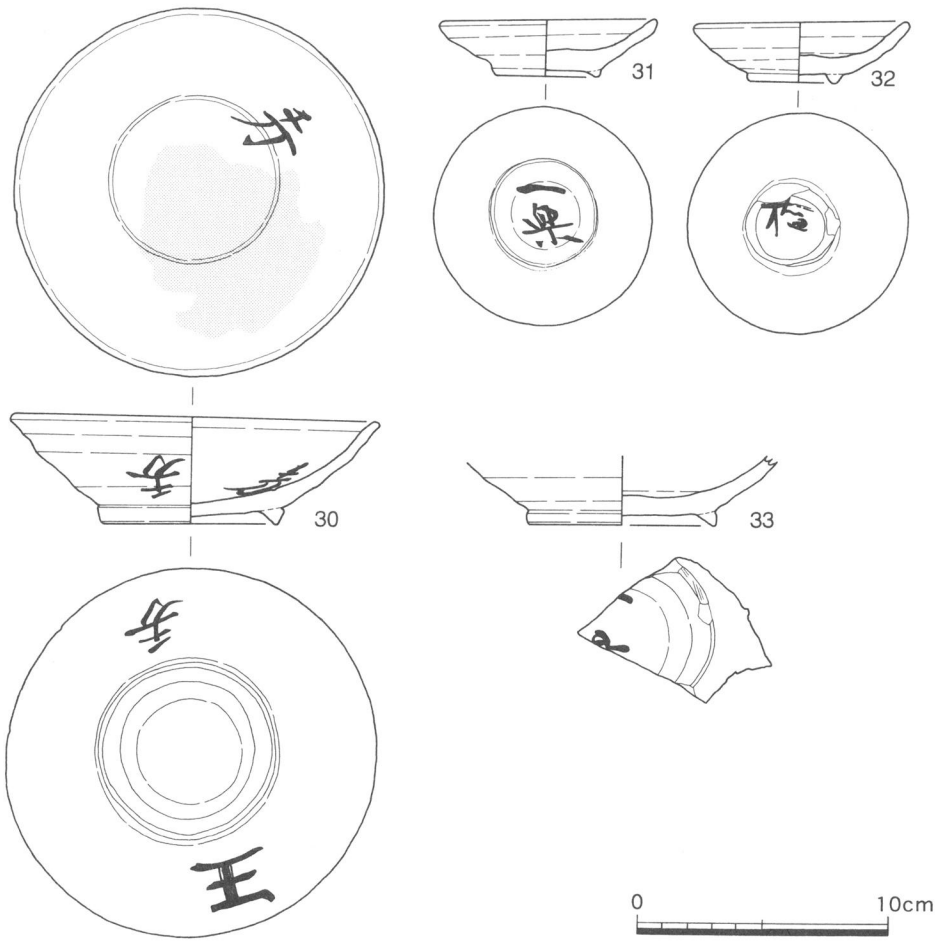


図125　SR-1の出土遺物３（46区③）

36～40は山茶椀の椀である。38は体部下半の一部を欠き、その他は底部の破片であった。38は口径17.1cm、器高5.9cmと推定され、高台径は7.3cmである。36・37・39・40は高台径6.1～7.0cmである。底部は36・38～40は糸切りされるが、37のみ糸切りの後ナデが行われる。その他の調整は横ナデである。36は見込みに重ね焼き痕、37は高台にスノコ痕が確認できる。いずれも焼成は良好で、36は灰白色、37と38・40は灰色、39は青灰色を呈する。36～38がⅡ期、39・40はⅢ期に位置づけられ、いずれも東遠江産の山茶椀である。

41と42は山茶椀の小皿である。41は口径7.6cm、器高2.1cm、焼成はやや悪く灰白色を呈する。42は口径7.2cm、器高2.2cm、焼成は良好で灰白色を呈する。共に、底部は糸切り、その他は横ナデによる調整が行われる。東遠江産のもので、Ⅲ期に位置づけられる。

43～45は山茶椀の小椀である。いずれも口縁部を欠く。焼成は良好で43と44が黄灰色、45が灰色を呈する。調整は底部が糸切り、その他は横ナデであるが、45については高台部と体部の境はヘラ削りされる。いずれも、東遠江で生産されたもので、Ⅰ期-２に位置づけられる。

46は甕の口縁部と考えられる須恵器である。細片であるため口径を推定することはできなかった。焼成は良好で灰白色を呈する。内外面に自然釉が付着する。

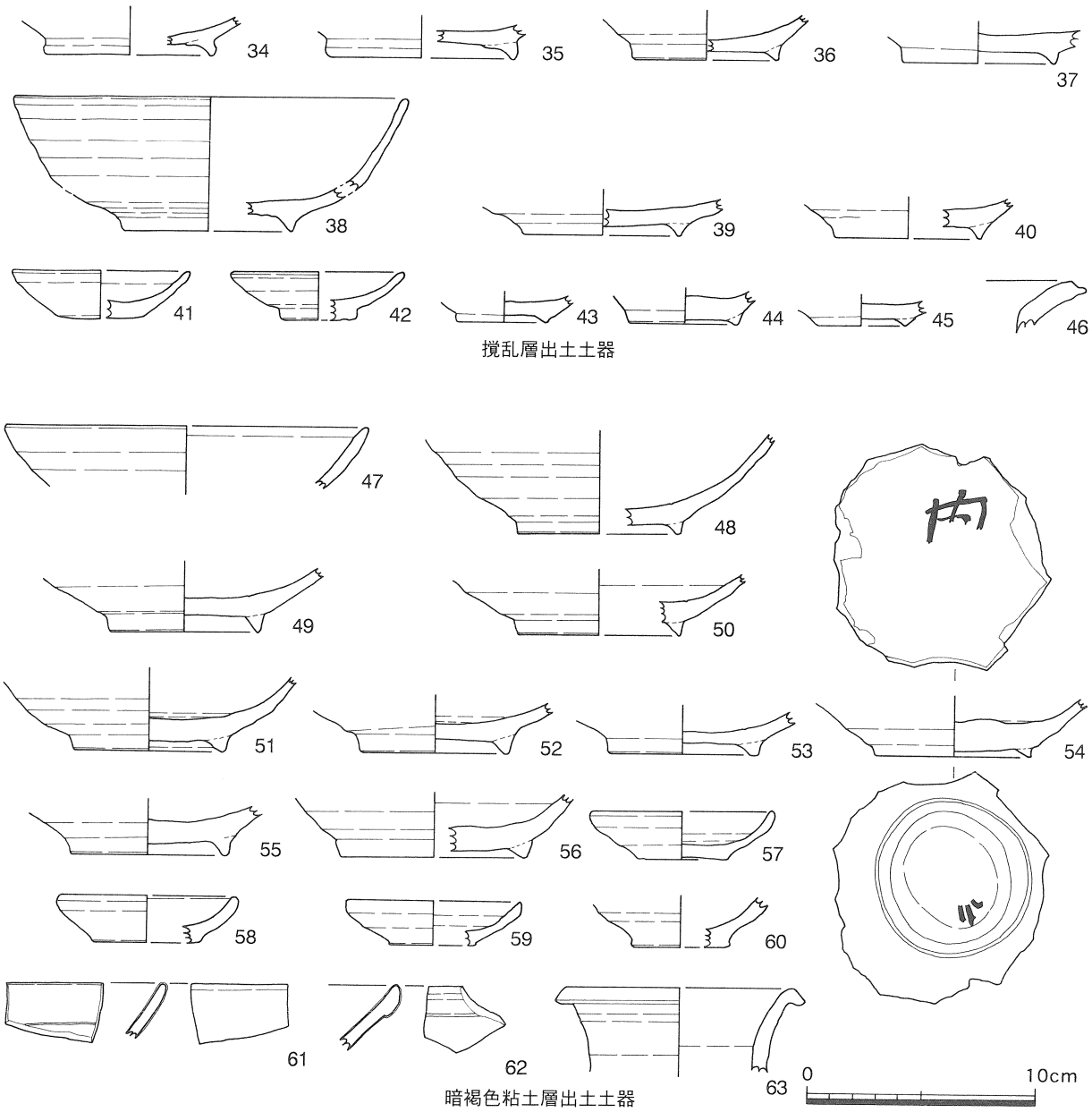


図126　SR-1の出土遺物４（15区①）

暗褐色粘土層（第３層）の出土土器（図126－47～63）　47～56は山茶椀の椀であるが、完形に復元できるものはなかった。口縁部のみが残存した47は口径15.8cmと推定される。48～56は底部の破片であった。高台径は6.2～8.1cmである。底部はいずれも糸切りされ、その他は横ナデによる調整が行われる。ただし、56は糸切りの後にナデが行われているようである。高台を見ると、52・53はスノコ痕、54は籾殻痕が確認できる。焼成は良好で47と50・52・54は灰色、48は灰褐色、49は灰黄色、51と55・56は灰白色、53は青灰色を呈する。なお、48～50・53は見込みに重ね焼き痕が確認できる。また、54は見込みと底部に墨書らしき痕跡があるが、判読はできなかった。48～50はⅡ期に位置づけられる。51～56はⅢ期に位置づけられる。いずれも、東遠江産のものである。

57～60は山茶椀の小皿である。いずれも体部は内湾気味に立ち上がり、口径7.6～7.9cm、器高2.0～2.1cmである。焼成は全て良好で、57が灰黄色、58と59が灰色、60が灰白色を呈する。底部は糸切り、その他の調整は横ナデである。Ⅲ期に位置づけられることができる東遠江産の小皿である。

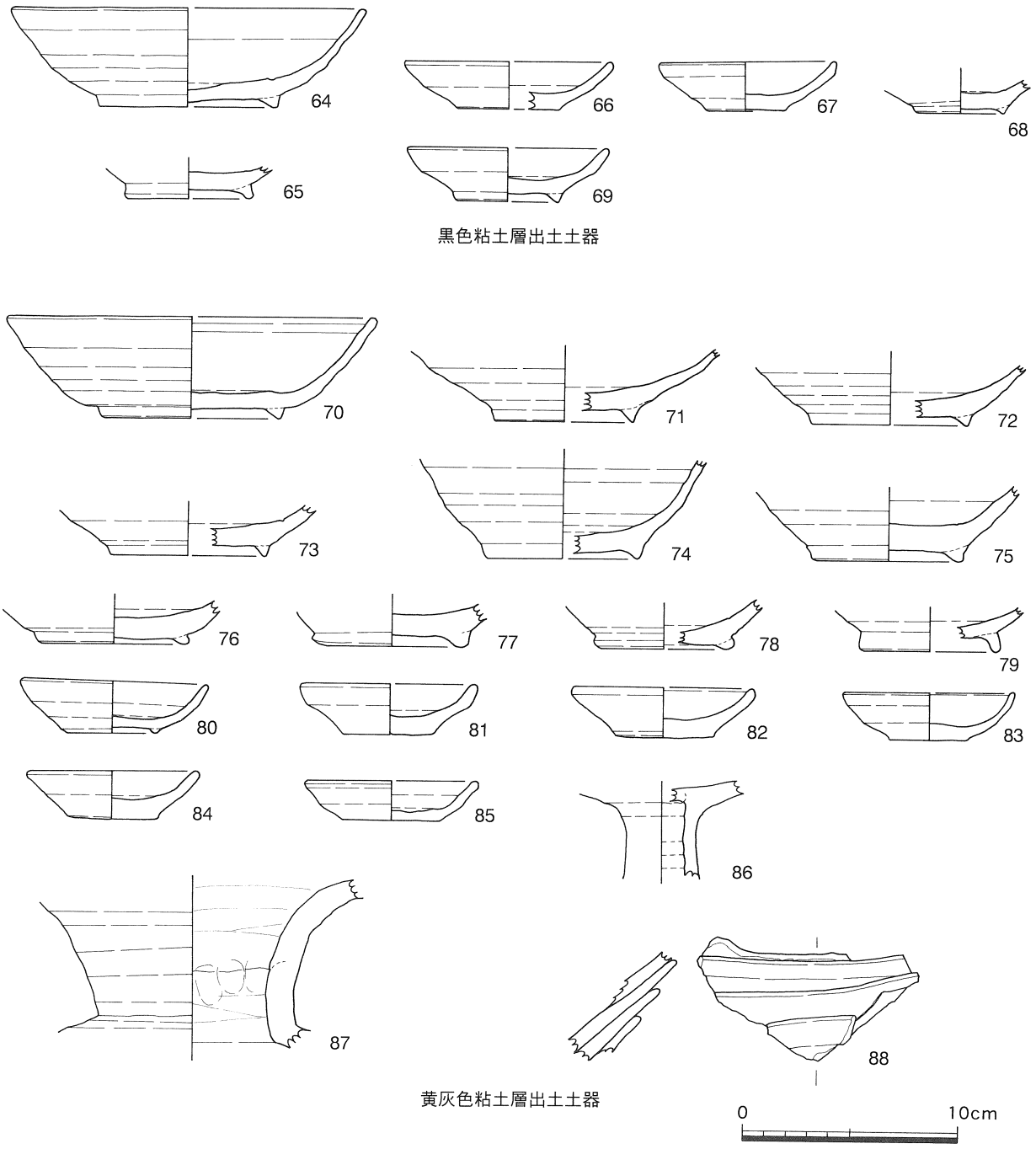


図127　SR-1の出土遺物５（15区②）

61と62は白磁である。ともに口縁部の一部が出土した。61は白磁皿である。釉薬はやや青みを帯びた白色である。内面に沈線を有し、Ⅴ類またはⅧ類と考えられる。62は白磁碗で、玉縁を有する口縁部を持つ。釉は灰色を帯びた白色である。Ⅳ類に分類できる。

63は短頸壷である。残存したのは口縁部から頸部にかけての約１/６である。残存高は3.7cm、口径は10.0cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈する。

黒色粘土層（第４層）の出土土器（図127－64～69）　64・66～69は東遠江産の山茶椀、65は灰釉陶器の椀である。64は全体の約１/２が残存した椀である。口径16.2cm、高台径8.4cmとそれぞれ推定され、器高は4.7cmである。65は底部の破片であった。66と67は小皿で、66は口径9.4cm、器高4.7cm、67は口径

8.15cm、器高2.4cmである。68と69は小椀で、68は底部のみの残存、69は口径9.1cm、器高2.5cmである。64～67・69の底部は糸切り、68は糸切り後にナデによる調整が行われている。その他の調整はいずれも見込みに至るまで横ナデである。64・65・68は見込みに重ね焼き痕が確認できる。焼成は良好で64と67・68は灰色、65と66は灰白色、69はオリーブ灰色を呈する。

64と66・67がⅡ期-２、65は折戸53号窯式～東山72号窯式併行期、68と69はⅠ期-２に位置づけられる。なお、69の底面には墨書らしき跡が確認できるが、判然としない。ここでは、その可能性を指摘するに留める。

黄灰色粘土層（第６層）の出土遺物（図127－70～88）　70から77は山茶椀の椀である。全貌がうかがえたのは70のみで、口径16.7cm、器高4.8cmである。高台径は6.3～8.1cmである。いずれも、底部は糸切り、その他は見込みに至るまで横ナデである。高台を見ると、71と75・77は籾殻痕が確認できる。73と75・76は見込みに重ね焼き痕が確認できる。70～76の焼成は良好で70は灰白色、71・73・76は灰色、72は黄灰色、74・75は青灰色を呈する。77の焼成はやや悪く、明褐灰色を呈し、焼き歪みがある。70～76は東遠江産で70～73はⅢ期-１、74～76はⅡ期に位置づけられる。77は湖西・渥美産の山茶椀で、Ⅱ期に位置づけられる。

78と79は東遠江産の灰釉陶器である。共に、底部のみの残存であった。78は焼成が悪く、灰色を呈し、調整については摩滅のため不明である。79は焼成良好で灰白色を呈する。78は東山72号窯式、79は折戸53号窯式併行期に位置づけられる。

80は山茶椀の小椀である。完形で出土し、口径は8.5cm、器高2.6cm、高台径4.0cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。底部は糸切りされ、その他は横ナデによる調整である。底面には墨書らしき痕跡が確認できるが、判読はできなかった。東遠江産で、Ⅰ期に位置づけられる。

81～85は山茶椀の小皿で、81と84は完形で出土した。81～84は東遠江、85は湖西・渥美で生産されたものである。口径は7.6～8.5cm、器高は1.9～2.6cmである。調整は底部が糸切り、その他は見込みに至るまで横ナデである。85は口唇部の内外面に自然釉が付着する。焼成はいずれも良好で81・84は灰色、82・83・85は灰白色を呈する。いずれもⅡ期に位置づけられる。

86は須恵器の高坏、87は甕である。86は体部下半と脚部上半が残存した。焼成は良好で灰白色を呈する。87は頸部のみが残存し、焼成は良好で灰色を呈する。

88は山茶椀の椀４個体が釉着した資料である。いずれも焼成は良好で灰色あるいは灰白色を呈する。湖西・渥美産の山茶椀である。

③　３区（SR-1中央部）の出土土器（図128）

SR-1は３区では、表土の下に、二つの層位が確認できた。上層が黒色粘土層、下層が黄灰色粘土層である（註５）。

黒色粘土層（第４層）の出土土器（図128－89～92）　この調査区においては撹乱が深くまで入り込み、暗褐色粘土層が残存しなかった部分もある。そのため、暗褐色粘土層の出土遺物は少なかった。89～92はいずれも東遠江で生産された山茶椀で、89～91は椀、92は小皿あるいは小椀である。89～91は底部のみの残存で、高台径は6.6～7.8cmである。いずれも焼成は良好で89は暗オリーブ灰色、90はオリーブ灰色、91は青灰色を呈する。調整は底部が糸切り、その他は横ナデである。91は高台にスノコ痕が確認できる。89と90はⅡ期、91はⅢ期に位置づけられる。

92は口縁部のみの残存で、口径は8.3cmと推定される。焼成は良好で明オリーブ灰色を呈する。残存部位の調整は横ナデである。

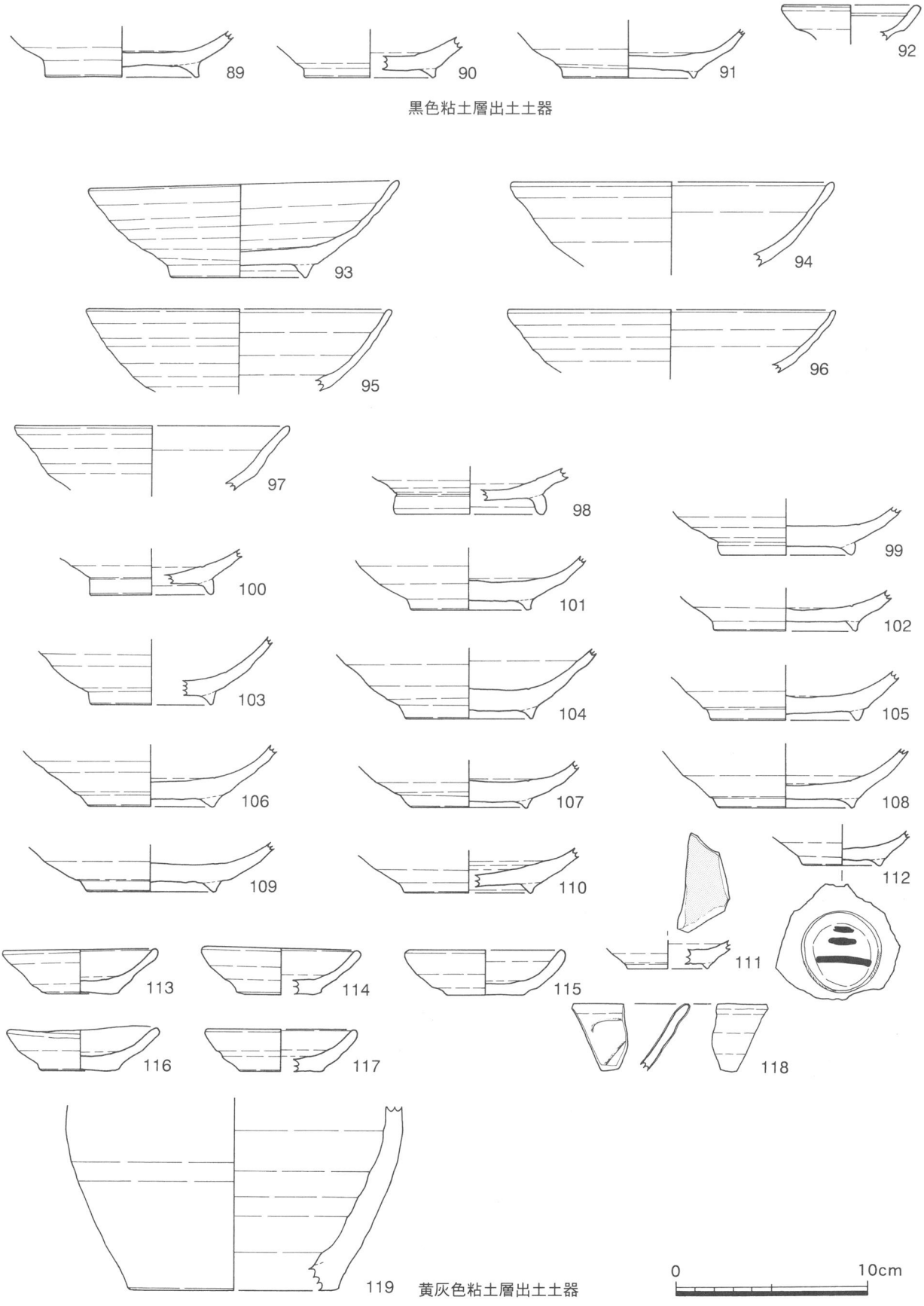


図128　SR-1の出土遺物６（３区）

黄灰色粘土層（第６層）の出土土器（図128－93～119）　93～96・101～110は山茶椀の椀である。93は完形に復元でき、口径は16.1cm、器高は5.1cmである。94～96は口縁部から体部が残存し、口径15.8～16.8cmである。いずれも焼成は良好で、93・96は灰色、94・95は灰白色を呈する。93は高台にはスノコ痕が確認できる。いずれも東遠江産の山茶椀である。

97～100は東遠江産の灰釉陶器である。97は口縁部が残存し、口径は14.1cm、焼成は良好で、97はオリーブ灰色を呈する。98～100は底部の破片であった。98は爪形の高台を持ち、体部内面には灰釉が施釉される。99は体部と高台の接点がヘラ削りされる。いずれも焼成は良好で98が灰白色、99が灰黄色、100が灰色を呈し、底部の調整は糸切りである。

101～110は底部のみが出土した山茶椀である。高台径は6.0～7.8cmである。底部は101～106・108・110が糸切り、107と109はナデである。101・105・107・108は高台にスノコ痕、106は籾殻痕が確認できる。焼成は良好で101は青灰色、102・105・107・109は灰色、103・106・108・110は青灰色、104は明黄褐色を呈する。いずれも東遠江産である。

111と112は山茶椀の小椀であり、共に底部のみの残存であった。高台径は111が4.6cm、112が4.1cmである。２点とも焼成は良好で灰白色を呈する。111は見込みに墨痕が確認できる。転用硯であろうか。112は底部に「三」と記された墨書が確認できる。両者、東遠江で生産されたものである。

113～117は山茶椀の小皿である。113は完形で出土した。口径7.8～8.0cm、器高2.2～2.5cm、底径3.8～4.2cmである。113と114・116は体部から口唇部にかけて直線的で、115と117は内湾する。調整は全て、底部が糸切り、体部は横ナデである。焼成はいずれも良好で113・116は灰色、114・115は灰白色、117は明青灰色を呈する。116の口縁部には自然釉が付着する。５点とも東遠江産である。

118は龍泉窯系の青磁碗で、Ａ２類に分類される。残存したのは口縁部の一部のみであった。

119は須恵器の甕で、底部から体部の一部が出土した。残存高は9.7cmであった。底径は10.3cmと推定される。焼成は要項で灰白色を呈する。

98は折戸53号窯式併行期、99と100は折戸53号窯式～東山72号窯式併行期、111～112がⅠ期-２、94・101～103はⅡ期、104～110・113～117はⅢ期に位置づけられる。

④３’区（SR-1中央北東部、護岸・導水遺構周辺）の出土土器（図129～133）

SR-1はここでは、上層である黒色粘土層、下層である黄灰色粘土層に分層できた。遺物は両者から出土し、更に、遺構底面（黄灰色砂層）からも出土した（註６）。

黒粘土層（第４層）の出土土器（図129－120～134）　120と121は山茶椀の椀で、共に底部の破片である。両者、焼成は良好で灰白色を呈する。底部は糸切り、その他は横ナデ、見込みには重ね焼き痕、高台にはスノコ痕が共通して確認できる。特筆すべきこととして、120は底部に墨書が明白に残り、「三」と記されている。

122～132は山茶椀の小皿である。129は完形で出土した。口径は7.4～8.4cm、器高1.8～2.5cm、底径3.6～4.4cmである。調整を見ると、いずれも底部は糸切り、体部内外面は横ナデであるが、122～124・126・127は見込みがナデ、その他の個体は横ナデである。131と132は見込みに重ね焼き痕がある。焼成は良好で、灰色である128を除き、灰白色を呈する。129は体部外面、130～132は底面に墨書が確認できた。129は「の」字状の記号、132は「二」である。130は「丈」、131は「二」あるいは「三」の可能性が考えられる。

133は山茶椀の小椀で底部のみが残存した。高台径は4.1cm、焼成は良好で灰色を呈する。底部は糸切り、その他は横ナデである。高台にはスノコ痕、見込みには重ね焼き痕がある。底部は墨書が記されているが明白ではない。「○」状の記号であろうか

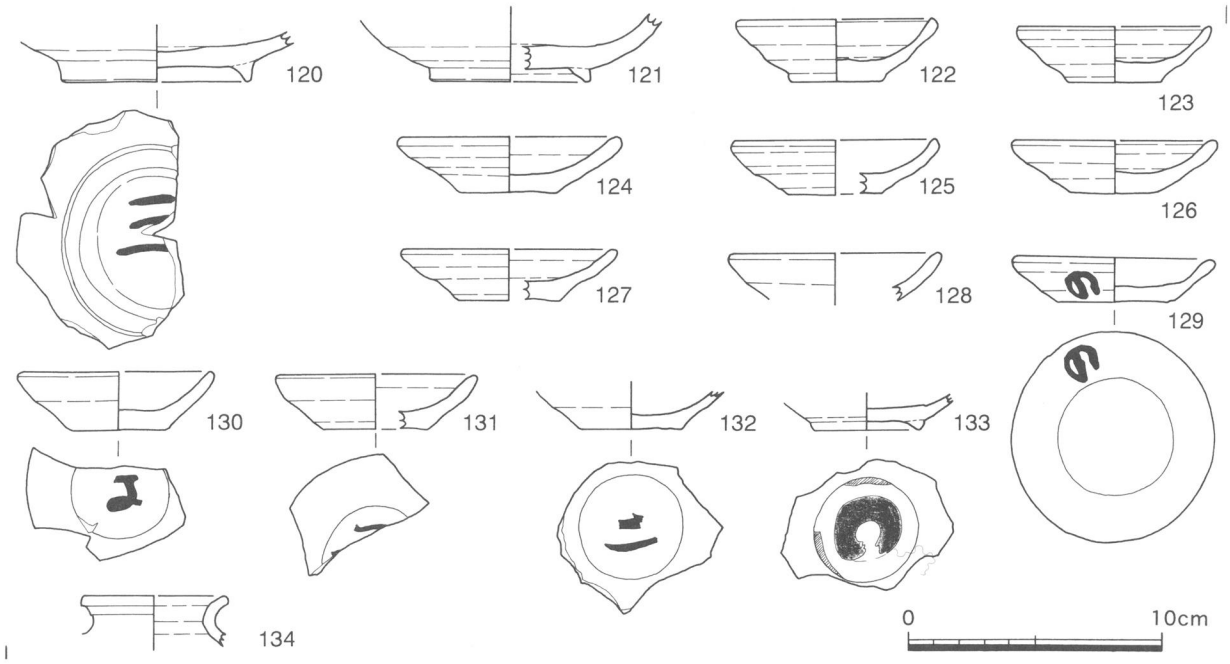


図129　SR-1の出土遺物７（３'区①）

134は灰釉陶器の小型の瓶類である。口縁部から頸部にかけての一部が残存した。口径は5.5cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈する。

上述したものは、いずれも東遠江で生産されたものである。133はⅠ期、120～123・125・130・131はⅡ期、124～129はⅢ期に位置づけられる。

黄灰色粘土層（第６層）の出土土器（図130・131－135～186）　３'区は狭い範囲にもかかわらず多くの遺物が出土し、ミョウガ原遺跡における遺物集中地点の一つとして位置づけられる。黄灰色粘土層は中でも最も多くの遺物が出土した層位である。135は灰釉陶器の椀である。口径16.2cm、器高5.0cm、高台径6.9cmで、底部は糸切り、見込みはナデ、体部は横ナデの調整が行われる。焼成は良好で灰色を呈する。体部と高台の境はヘラ削りされる。

136～149は山茶椀の椀である。口径15.4～16.4cm、器高4.8～5.4cm、高台径5.2～7.8cmである。いずれも底部は糸切りで、見込みについては136と137・139・140がナデ、その他の個体は横ナデによる調整が行われる。その他の部位は横ナデである。136は高台に籾殻痕、142・143・145～149はスノコ痕がある。焼成は良好で136・142～144・146・149は灰白色、137～141・145・147・148は灰色を呈する。142・143・147～149は見込みに重ね焼き痕を有する。いずれも東遠江産で、136～138・142～144はⅡ期-１～２、140・145～149はⅢ期-１に位置づけられる。

上述した12点のうち、139と143は、底部に墨書が明白に残る。139は二字程度記されていたようであるが、上の一字のみ判読でき「積」と記される。143は「大玉」と記される。144は「二」あるいは「三」と記されていたようである。また、142は見込みには墨痕がある。内面が摩滅していることと合わせて、転用硯であった可能性がある。なお、145と146も底部に墨書らしき痕跡があるが、確定はできず、その可能性を指摘するに留める。

150～152は東遠江産の灰釉陶器の椀である。いずれも底部のみの出土であった。３点とも体部と高台部の接点はヘラ削りされ、底部は糸切り、その他は横ナデで調整される。焼成は全て良好で灰白色を呈する。

153～156は山茶椀の小椀である。口径は8.2～8.8cm、器高は2.2～2.7cm、高台径は3.6～5.1cmである。いずれも底部は糸切り、体部内外面は横ナデであるが、見込みについては155がナデ、その他は横ナデである。153と154は重ね焼き痕、154は高台にスノコ痕が確認できる。４点とも焼成は良好で、153と154は灰白色、155と156は灰色である。なお、153と154は底部に墨書が記され、153は「二」、154は「拾」と記される。いずれも東遠江で生産されたもので、153～156はⅠ期-２に位置づけられる。

157～174は山茶椀の小皿である。160と162は完形で出土した。174は底部のみの残存であった。口径は157が9.1cmとやや大きく、158～160・165・166は8.0～8.4cmで８cm台前半、161～164・167～174は7.5～7.9cmで7cm台である。器高は1.8～2.7cm、底径は3.4～5.0cmである。

161を除き、焼成は良好で157～159・162・165～174は灰白色、160・163・175は灰色、164は褐灰色を呈する。底部は糸切り、体部は横ナデ、157と158・164～166・168・170・174は見込みがナデで、その他の個体は横ナデである。161の焼成は悪く、にぶい橙色で、調整については判然としない。160は底部に別個体の小皿片が釉着している。162は重ね焼き痕がある。なお、171と175の底面には墨書があり、171は「十」字状の記号、175は「六」が記される。いずれも東遠江で生産されたもので、Ⅱ期-２～Ⅲ期-１に位置づけられる。

176は灰釉陶器の小皿と考えられる。体部から底部にかけて残存した。非常に緻密な胎土を持ち、焼成は良好で灰白色を呈する。体部上半は屈曲し、稜を持つ。東遠江や湖西・渥美産のものではない。

176は子持ちの小皿で、完形で出土した。口径6.9cm、器高2.2cmの小皿の上に、２個の子皿（椀）が載る。子皿は口径3.0cmと3.3cm、器高は共に1.3cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。東遠江で生産されたものである（註７）。

177～180は青磁の碗である。いずれも体部の破片であった。177と178は龍泉窯系の青磁で、釉が青みを帯びた緑色に発色する。177は内面には蓮華文が片彫りされ、口縁部には浅い沈線を有する。Ａ２類に分類できる。178も釉が青みを帯びた緑色に発色し、内面にはヘラと櫛状の工具で花文様の文様が描かれる。Ａ３類に分類される。179と180は同安窯系の青磁で、Ｂ類に分類できる。179は内面にヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様があり、外面には細かい櫛目を有する。180は釉が黄色味を帯びた緑色に発色する。外面には櫛目を有する。

181・182は鉢、183・184は甕である。181は体部下半、182は底部のみの残存である。182は見込みに重ね焼き痕を有す。183は体部上半から口縁部が残存し、焼成は良好でにぶい黄褐色を呈する。口縁部には自然釉が付着する。184は口縁部と頸部が残存した。焼成は良好で灰色を呈する。

185は須恵器の短頸壷で、口縁部から頸部が残存した。焼成は良好で灰色を呈する。186は灰釉陶器の長頸瓶である。口縁部から頸部にかけての約１／６が残存した。口径は19.7cmと推定される。焼成は良好で灰白色を呈する。

黄灰色砂層（第７層）・底面の出土土器（図132・133－187～233）　187～204は山茶椀の椀である。いずれも破片で出土したが、187～190は全体の様子をうかがうことができた。その他は底部の破片であった。口径16.0～17.0cm、器高5.0～5.9cm、高台径7.0～7.8cmである。調整を見ると、底部は糸切りされ、体部は横ナデである。見込みの調整は187と188・190はナデ、189は横ナデである。焼成は良好で187・189は灰色、188・190は灰白色を呈する。４点とも東遠江産で、Ⅱ期-１～２に位置づけられる。

191～204は底部のみ残存した山茶椀の椀である。高台径は5.3～7.7cmで、高台には191～197・199～201・203がスノコ痕、202は籾殻痕が確認できる。調整を見ると、いずれも底部は糸切りであるが、糸切り後、195は中央に円形のナデ、202はナデが行われる。193のみ見込みはナデによる調整で、その他の個体は横ナデである。焼成はいずれも良好で191・193・195～198・202～204は灰白色、192は青灰色、194・199～201は灰色を呈する。200は体部内面に自然釉が付着する。なお、191・192・194・195・198・200～203は

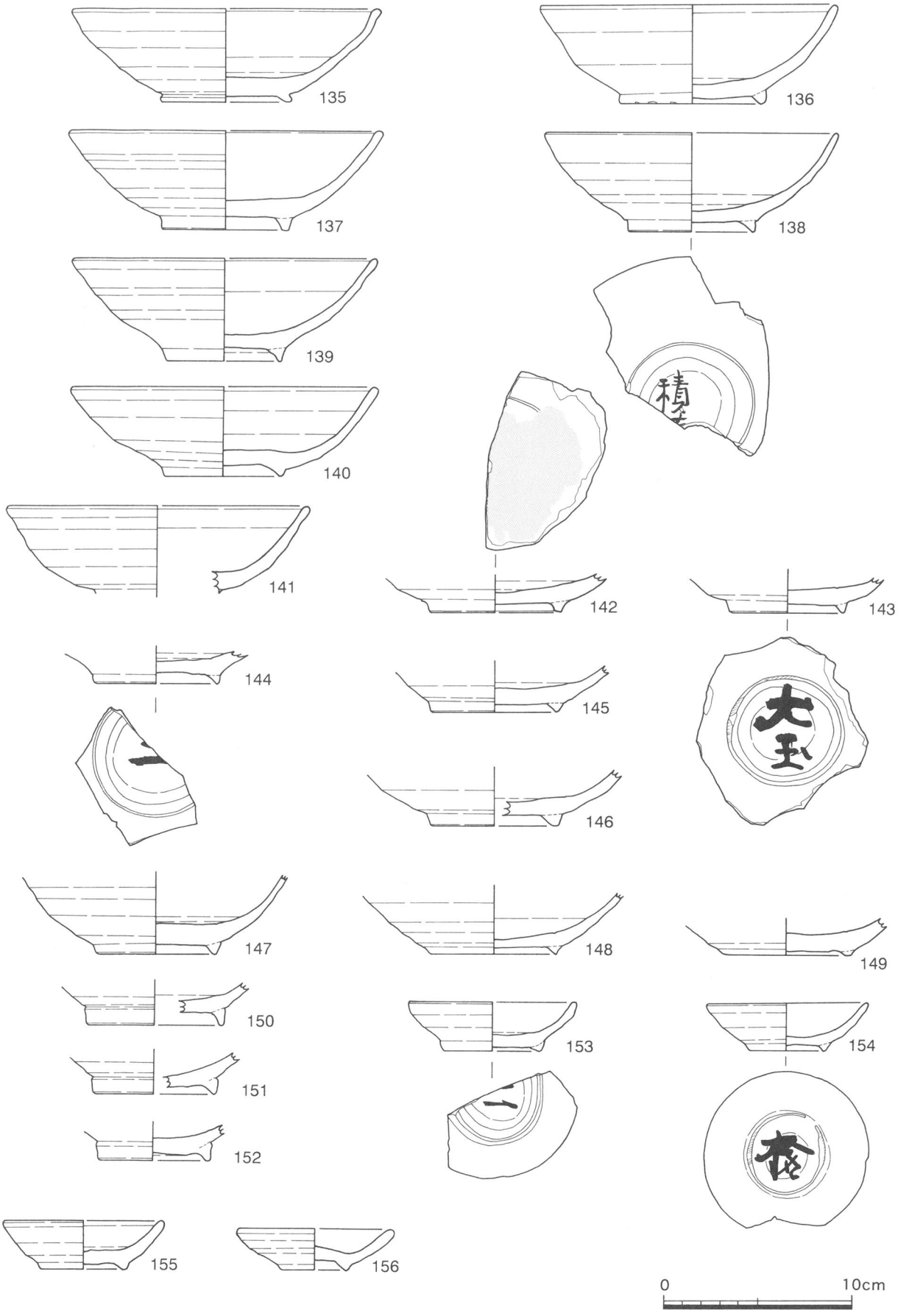


図130　SR-1の出土遺物８（３'区②）

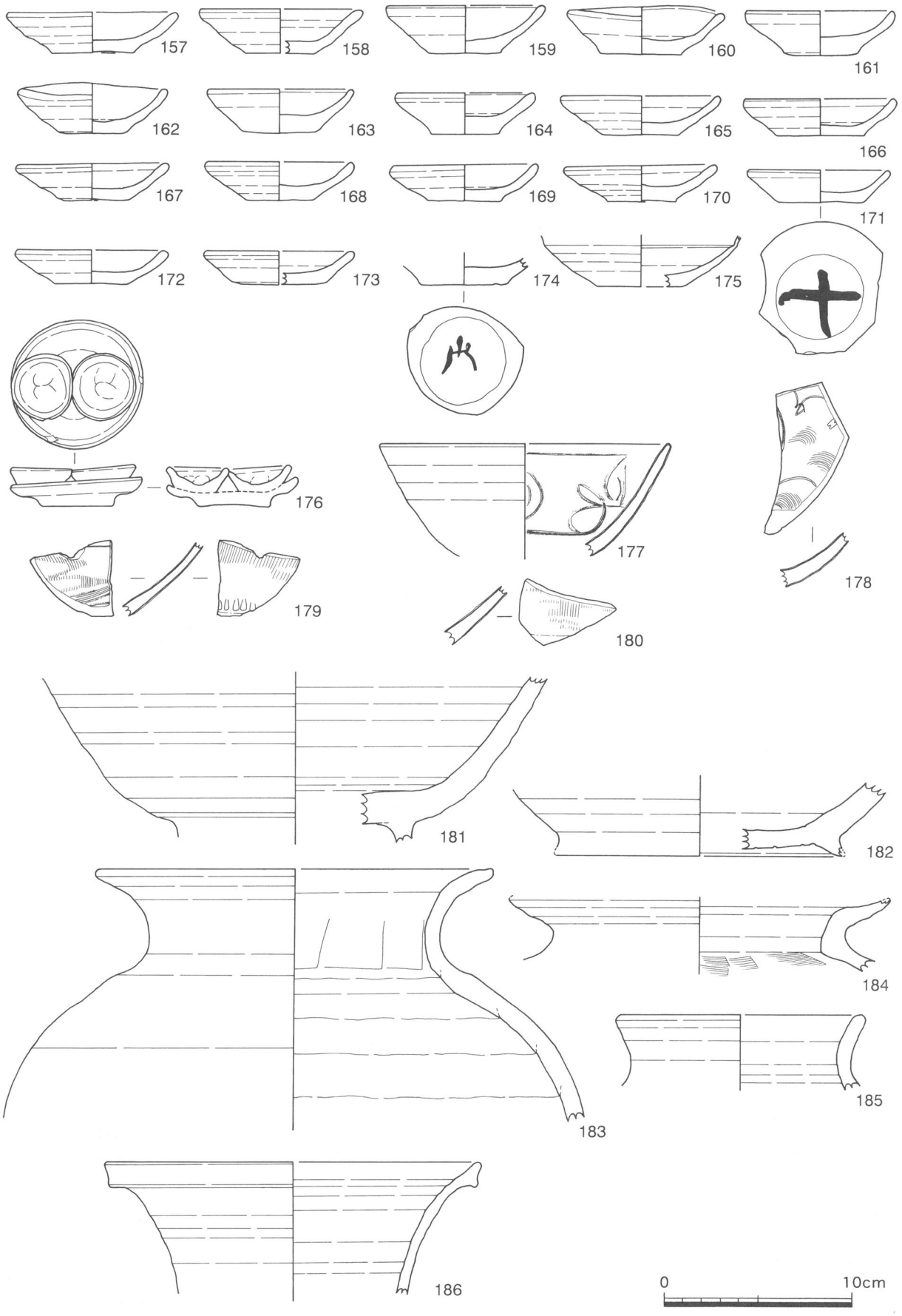


図131　SR-1の出土遺物９（３'区③）

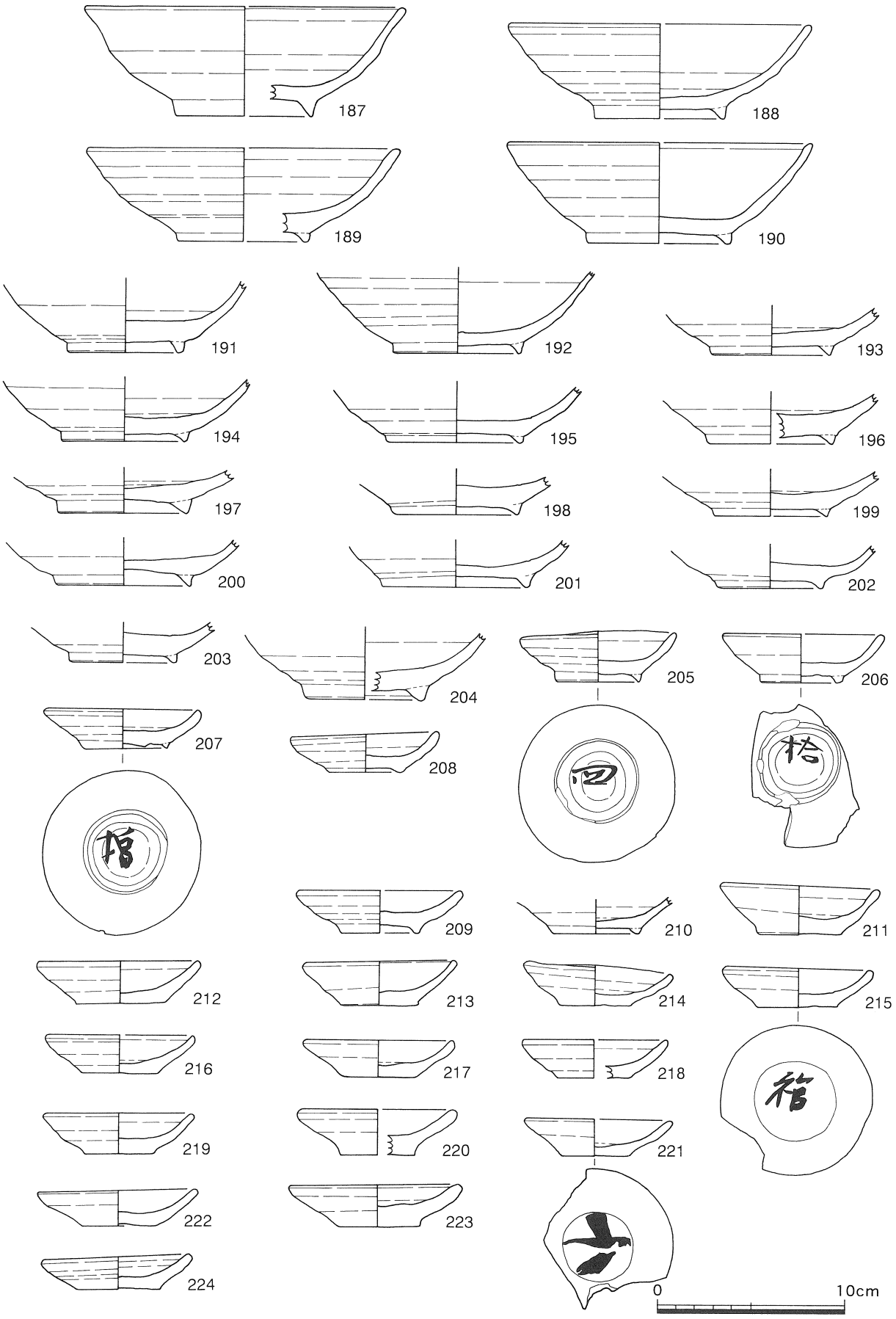


図132　SR-1の出土遺物10（３'区④）

見込みに重ね焼き痕がある。204のみ湖西・渥美産の山茶椀で、Ⅲ期に位置づけられる。その他はいずれも東遠江産で、Ⅱ期-２～Ⅲ期-１に位置づけられる。

205～210は山茶椀の小椀である。205・207・208は完形で出土し、210は底部のみの残存であった。口径は7.7～8.6cm、器高2.2～2.75cm、高台径3.8～4.4cmである。焼成はいずれも良好で205は灰色、206～210は灰白色である。209は口縁部に、210は底部内面に自然釉が付着する。205～207・210の調整は底部が糸切り、その他は横ナデである。208は底部が糸切り後にナデ、体部が横ナデ、見込みがナデ、209は底部が糸切り、体部が横ナデ、見込みがナデである。なお、206は高台にスノコ痕が確認できた。特筆すべきこととしては205～207は底部に墨書が確認できることである。205は「四」、206は「拾」、207は「増」と記される。いずれも、東遠江で生産されたもので、Ⅰ期-２に位置づけられる。

211～226は山茶椀の小皿である。このうち、211・213・214・217・223～225は完形で出土し、226は底部のみの残存であった。口径は7.5～8.9cm、器高2.0～2.8cm、底径3.6～5.3cmである。焼成は223を除き良好で、211・213・216・220・222は灰色、212・214・215・217・219・221・224～226は灰白色。218は褐灰色を呈する。223は灰黄褐色を呈し、一見すると土師器のようである。215は見込みに重ね焼き痕があり、222は口縁部の外面に自然釉が付着する。なお、211の口縁部側面は耳皿の様に歪んでいるが、これが焼き歪みか意図的なものであるのかは判然としない。調整については、223は表面の風化が著しく判然としなかったが、その他の個体は底部が糸切りで体部が横ナデであることは一致する。ただし、見込みの調整は若干差異が見られ、216・219・220・222・224は見込みがナデ、その他の小皿の見込みは横ナデであった。225は湖西・渥美産であるが、その他は東遠江で生産されたものである。時期はⅡ期-２～Ⅲ期-１に位置づけられる。注目できるのは、215・221・225・226は底面に墨書が確認できたことである。215は「福」と記され、221は「六」の可能性がある。225は「の」字状の記号と考えられる。226は不鮮明であるため、判読はできなかった。なお、213も体部外面に墨書らしき痕跡があるが、断定はできず、その可能性を指摘するに留める。

227は白磁の碗である。直立した高台を有し、釉は薄く施釉される。内面には櫛で花文が描かれ、見込みには浅い沈線状の段を有する。Ⅴ類に分類される。

228は須恵器の瓦鉢である。残存したのは全体の約１/４で、口径は19.9cm、最大径は22.3cm、器高は9.0cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈する。底部先端は横ナデ、底部はヘラ削りの後、ナデ、外面体部下半はヘラ削り、外面体部上半から内面は横ナデである（註８）。

229は須恵器の長頸瓶である。残存したのは体部から頸部にかけての１/３で、頸部径は10.6cm、胴部最大径は18.8cmである。焼成は良好でにぶい褐色を呈する。

230と231は甕あるいは瓶類の底部と考えられる。共に焼成は良好で灰色を呈し、底面には籾殻痕がある。232は短頸壷、233は渥美産の甕である。232は口縁部から頸部の一部が残存し、口径は14.5cmと推定される。233は底部のみの残存であった。共に焼成は良好で232は灰白色、233は灰色を呈する。

⑤　47区・53区（SR-1東部）の出土土器（図134・135－234～262）

多数の出土遺物があった３区や３'区に比べると、47区・53区からの出土遺物は少なかった。遺物は黄灰色粘土層と底面から出土した（註９）。

234～245は山茶椀の椀である。このうち、234～241は東遠江で生産されたものである。いずれも破片で出土したが、234～237の４点は全体の様子をうかがうことができた。口径は12.6～16.3cm、器高は5.3～5.5cm、高台径は5.25～7.0cmである。234は高台にスノコ痕が確認できる。調整は底部が糸切り、体部が横ナデである点は共通する。見込みについては、234は横ナデであるが、235～237はナデである。焼成はいずれも良好で234は青灰色、235は灰黄色、236は灰色、237は灰白色を呈する。234～236がⅡ期-２、237

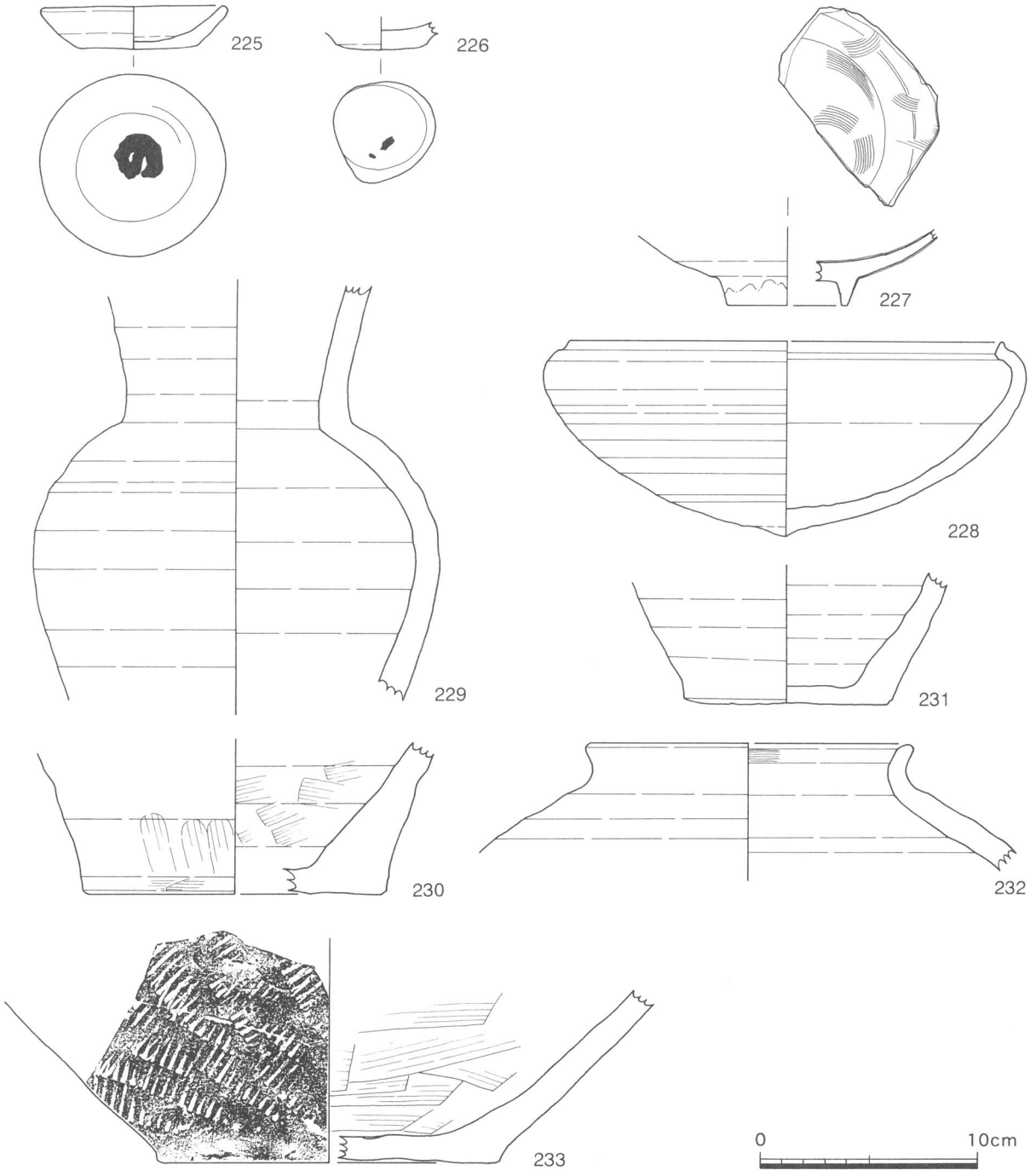


図133　SR-1の出土遺物11（３'区⑤）

はⅢ期-１に位置づけられる。なお、234の底面には墨書があり、「○」状の記号が記される。

238～241は東遠江産の山茶椀で、底部のみの残欠であった。高台径は5.8～7.1cm、239・241の高台にはスノコ痕が認められる。焼成はいずれも良好で238は灰白色、239は青灰色、240・241は灰色を呈する。なお、239～241は重ね焼き痕がある。238は表面が風化しているため、調整については不明であるが、その他のものは底部が糸切り、体部が横ナデである。238はⅡ期あるいはⅠ期に位置づけられ、残る３点はⅡ期-２に位置づけられる。239は底面に墨書で、「三」と記される点が注目できる。

242～245は湖西・渥美産の山茶椀であるが、242～244は底部、245は口縁部から体部の一部のみの残存であった。245の口径は16.1cmと推定され、残存部位の一箇所に輪花が確認できる。灰釉がツケガケで施

釉されている。高台径は6.2～7.0cmで、243の高台には籾殻痕が残る。調整は底部が糸切り、残る部位はいずれも横ナデである。焼成は４点とも良好で灰白色を呈する。243は重ね焼き痕がある。243はⅡ期、242と244はⅢ期に位置づけられる。

246と247は灰釉陶器の椀である。共に底部のみが残存した。高台径は246が6.6cm、247が6.8cmである。２者とも焼成は良好で246は灰色、247は灰褐色を呈する。調整も共通し、底部が糸切り、その他は横ナデである。246は高台にスノコ痕、見込みに重ね焼き痕がある。247は体部内面に灰釉が施釉される。247は折戸53号窯式併行期、246はこれより新しい時期に位置づけられる。共に東遠江産のものである。

248～251は山茶椀の小椀である。口径は7.6～8.4cm、器高は2.0～2.7cm、高台径は3.6～4.3cmである。調整は体部の横ナデは一致するが、底部と見込みの調整に差異がある。248は底部外と糸切り後にナデが行われ、他の３点は糸切りである。見込みについては248と249はナデ、250と251は横ナデである。焼成はいずれも良好で、248・250・251は灰白色、249は灰色を呈する。250の高台にはスノコ痕が残る。４点とも東遠江で生産されたもので、１期に位置づけられる。なお、注目できるのは251である。この小椀は内面に墨痕が残り、転用硯の可能性がある。

252～256は山茶椀の小皿である。口径は7.3～8.3cm、器高1.8～2.5cm、底径3.8～4.5cmである。255を除き焼成は良好で252～254は灰白色、256は灰色を呈する。焼成の悪い255の表面は一部風化し、灰色を呈する。調整については底部の糸切り、体部の横ナデは一致するか、見込みに違いがある。横ナデである254を除く４点はナデが行われる。いずれも東遠江産で、Ⅱ期-２～Ⅲ期に位置づけられる。

257は青磁の碗、258は白磁の碗である。257は龍泉窯系の青磁で口縁部の極一部、輪花の部分のみが残存した。内面にはヘラの片彫りで文様が描かれ、Ａ２類に分類できる。258は底部のみ残存し、有は灰色を帯びた白色に発色する。内面見込みの釉は輪状にかき取られ、Ⅷ類に分類できる。

259はほぼ完形に復元できた片口鉢で、口径23.4cm、高台径9.6cm、器高11.8cmである。焼成は良好で黄灰色を呈する。260と261は須恵器である。260は長頸瓶の頸部で、体部上半から頸部にかけて残存した。体部残存部位の最大径は17.7cm、頸部径は9.2cmである。261は瓶類の底部と考えられる。共に焼成は良好で260は外面が黄灰色、内面が灰色、261は灰色を呈する。

262は布目瓦の破片で、残存長6.0cm、厚さ2.0cmである。格子の敲き目が確認できる。

⑥　３区表土の出土土器（図136・137－263～304）

自然流路を検出した調査区は西から46区、15区、３区、47区、53区であるが、このうち、３区は調査区の大半を自然流路が占めていた。そのため、３区で表採あるいは表土除去時に出土した遺物は、元来自然流路に伴っていた可能性が高い。そこで、以下にその遺物について記す。

263～266は須恵器の坏蓋である。263は調査区南西部から出土し、口径は16.6cmと推定される。264と265は調査区北西部から出土し、口径は264が15.3cm、265が15.8cmと推定される。266は表採した頂部の細片である。いずれも焼成は良好で263と264は灰白色、265と266は灰色を呈する。

267～272は山茶椀の椀で、267と272は南東、268と269は南西、270は中央、271は北西から出土した。267は全体の約２/３が残存し、268～272は体部から口縁部の一部が残存した。口径については、267～269がやや小さく13.9～15.5cmと推定され、270～271は15.8～16.7cmと推定される。267の器高は5.6cm、高台径は8.4cmである。体部から口縁部にかけての調整はいずれも横ナデである。なお、267の底部は糸切りである。268～273の焼成は良好で、268はオリーブ灰色、269～271は灰色、272は緑灰色を呈し、焼成のやや悪い267は灰白色を呈する。いずれも東遠江で生産された山茶椀で、Ⅱ期～Ⅲ期に位置づけられる。

273と274は共に南西から出土した灰釉陶器の椀である。２点とも底部のみの残存で、底部は糸切り、焼成は良好で灰白色を呈する。折戸53号窯式併行期～東山72号窯式併行期に位置づけられる。

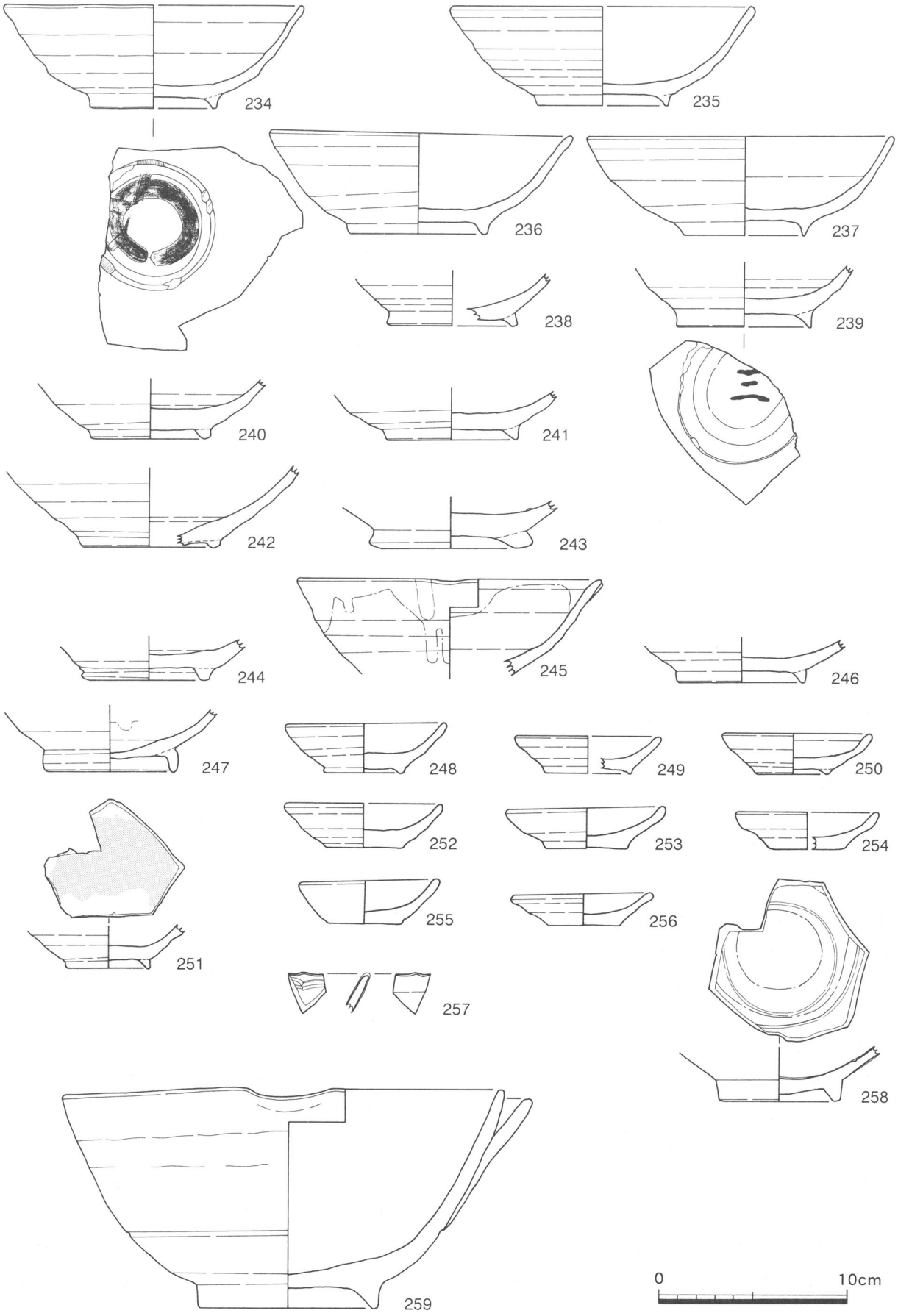


図134　SR-1の出土遺物12（47・53区①）

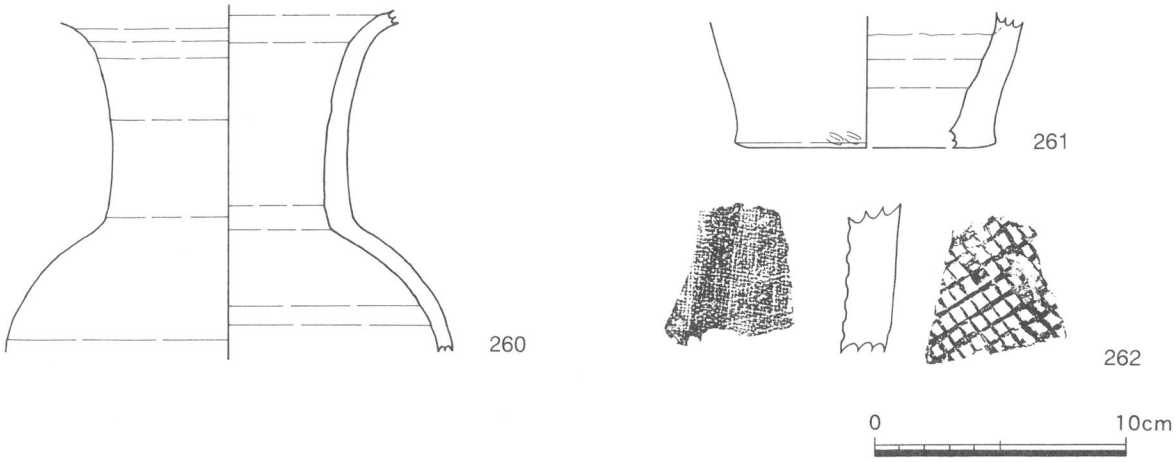


図135　SR-1の出土遺物13（47・53区②）

275～286は底部のみが残存した山茶椀の椀である。275～277・280・281は表面採取、278・282は中央部の南側、279・283は南西、284は南東、285は中央部の北側、286は北西から出土した。高台をみると、275・277～282・284・285はスノコ痕、286は籾殻痕が確認できる。なお、高台径は5.1～8.0cmである。いずれも底部が糸切りされるが、285のみ糸切り後にナデが行われる。その他の部位の調整はいずれも横ナデである。全点、焼成は良好で275・280・285・286は灰白色、276・284は黄灰色、277・281は灰色、278は緑灰色、279・283は青灰色、282は明オリーブ灰色を呈する。285は湖西・渥美系の山茶椀でⅡ期に位置づけられる。その他は東遠江で生産された山茶椀で、275～277・284はⅡ期、278～283・285はⅢ期に位置づけられる。なお、284の底面には墨書で「三」と記される。

287～291は山茶椀の小椀である。287・289は南東、288は北西、290・291は中央の南側から出土した。口径は7.9～8.7cm、器高2.2～2.8cm、高台径3.8～4.6cmである。焼成はいずれも良好で287～290は灰色、291は灰白色を呈する。底部は糸切りされるが、289と290は糸切り後にナデが行われる。その他の調整は見込みに至るまで横ナデである。なお、288・290は内面が摩滅していた。５点とも東遠江で生産されたもので、Ⅰ期に位置づけられる。

292～299は山茶椀の小皿である。292・294は北西、293は中央の南側、295・296は南東、197は中央の北側、298と299は北東から出土した。口径7.4～8.9cm、器高2.0～3.1cm、底径3.8～4.8cmである。いずれも焼成は良好で292・294・295・298・299は灰色、292・297は灰白色、296は黄灰色を呈する。なお、294は内面が摩耗している。調整は共通して、底部が糸切り、その他が横ナデである。いずれも東遠江産で、Ⅱ期-２～Ⅲ期-２に位置づけられる。297は底面に明白に墨書が残る。判読はできないが、「壱」の可能性がある。

300と303は須恵器で、300は高坏、303は箱坏である。300は脚部上半と坏部下半の１/２程度が残存し、中央部の北側から出土した。303は中央南側から出土した。残存部位の調整は横ナデで、口径は12.6cmと推定される。共に焼成は良好で灰色を呈する。

301は鉢である。体部上半から口縁部にかけて残存し、口径は27.5cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈する。302は北西から出土した龍泉窯系の青磁碗で体部下半の小片である。Ａ２類に分類される。

304は伊勢鍋、305～307は土師器の甕である。304～306は南西、307は北西から出土した。いずれも口縁部の一部が出土したのみである。304は内面が黄灰色、外面が灰褐色を呈する。305～307はにぶい黄燈色を呈する。

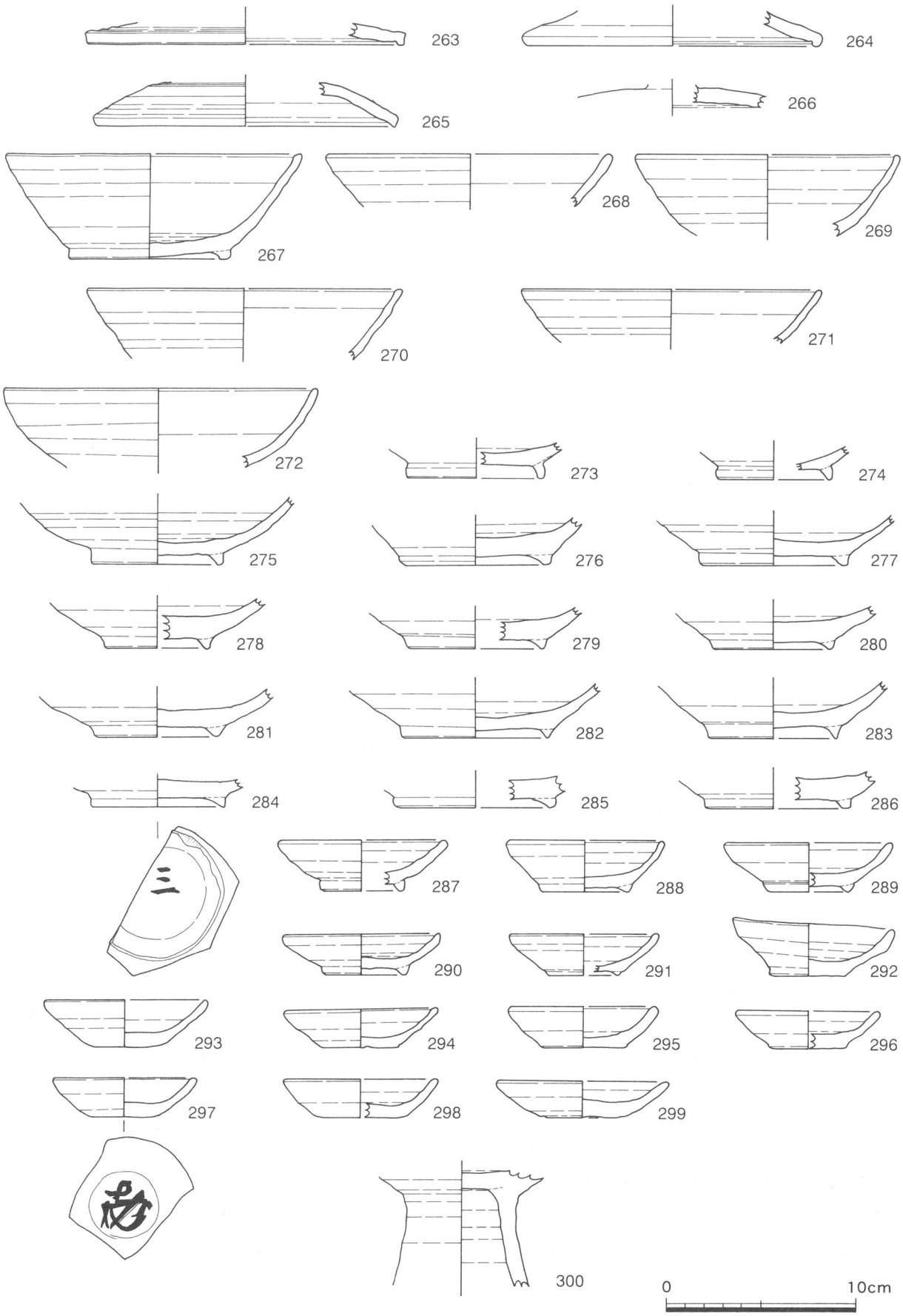


図136　３区表土の出土土器１

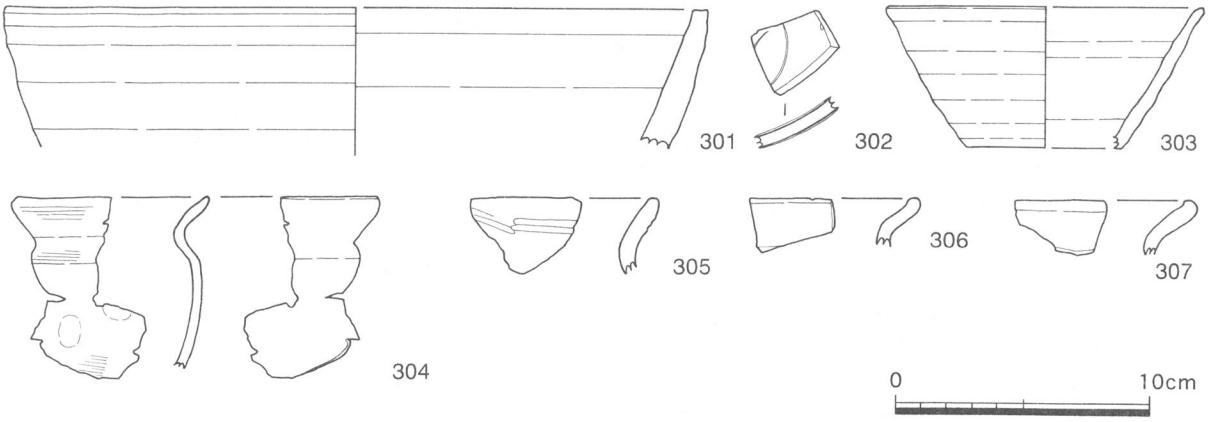


図137　３区表土の出土遺物２

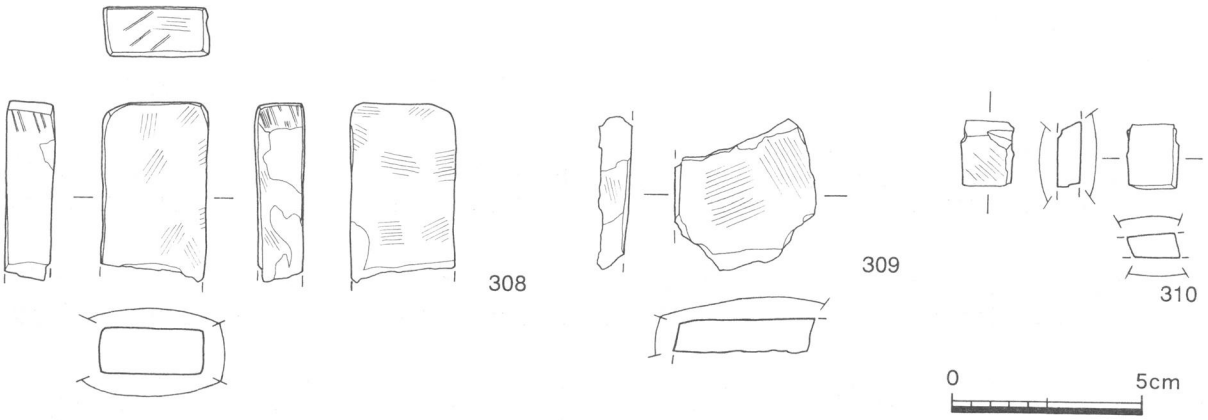


図138　SR-1の出土遺物14

⑵　その他の出土遺物（図138－308～310）

自然流路SR-1からは土器以外に、308～310の砥石が出土した。308は３’区の灰色粘土層、309は３区の北西部で表面採取、310は３区の灰色粘土層から出土した。石材はいずれも凝灰岩である（註10）。

なお、SR-1からはスラグが３’区の灰色粘土層で２点、53区で１点出土している。

２．北西部の出土遺物

ミョウガ原遺跡北西部における本調査区である13区、14区、14’区、24区、25区西半は、「コ」字状方形区画と６棟の掘立柱建物跡等を検出した。溝や土坑、柱穴からは山茶椀を中心とした遺物が出土している。また、表土からも多数の山茶椀等が出土した。以下に、遺構別の出土遺物、地区別の表土出土遺物について記す。

⑴SD-1の出土遺物（図139－311～321）

SD-1は24区と13’区で検出した「L」字状の区画溝である。ここからは山茶椀や渥美産の甕片が出土した。特に、SD-1北辺の東端では甕が破砕されたかのように、まとまって出土した。

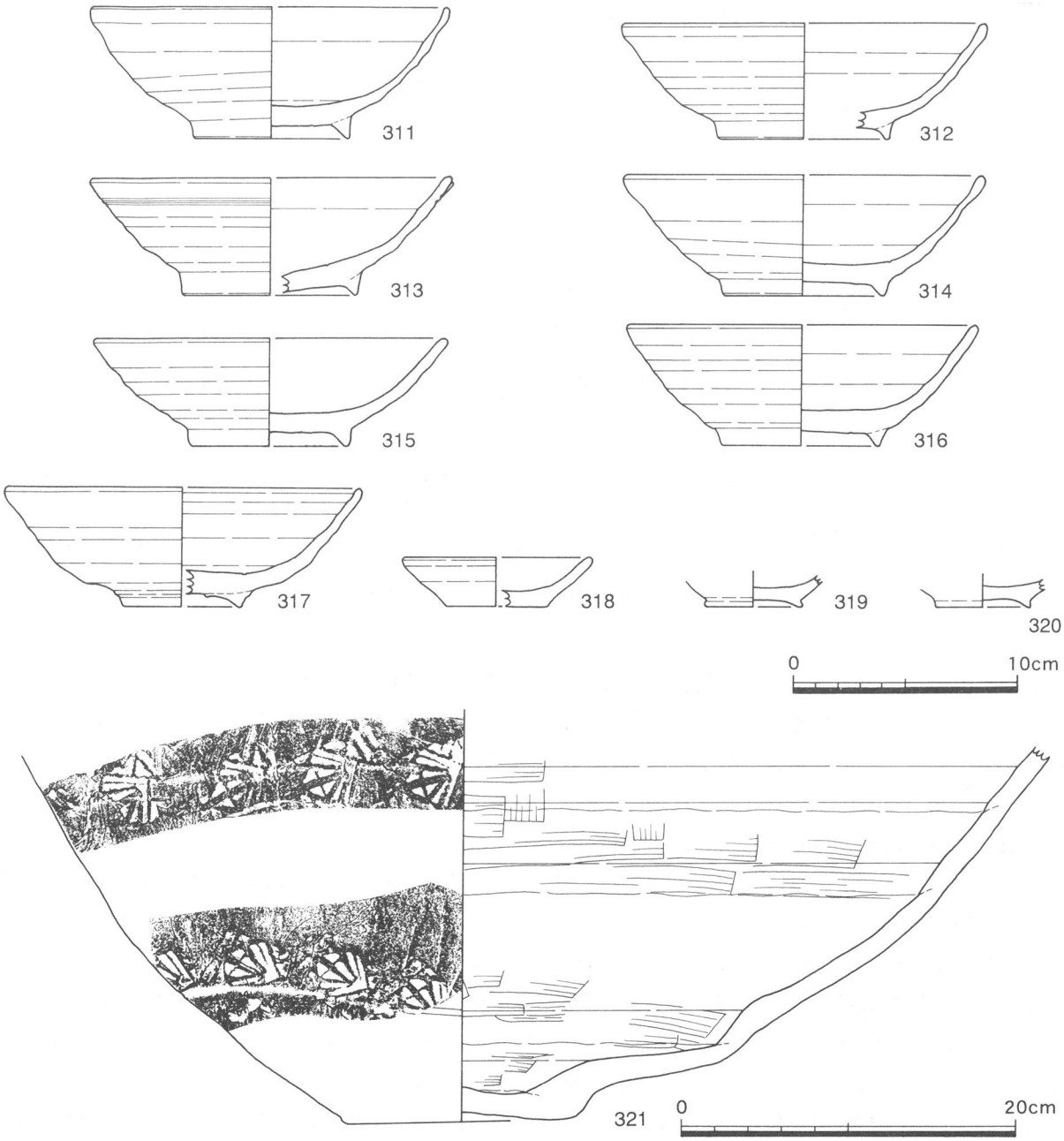


図139　SD-1の出土遺物

311～317は山茶椀の椀である。311と315は溝の北辺底面から、312～314・316は西辺底面から、317は北辺の東端底面から出土した。口径15.4～16.0cm、器高4.7～5.9cm、高台径5.5～7.6cmである。底部は315が糸切り後にナデが行われているが、その他は糸切りである。体部の調整はいずれも横ナデである。なお、311・314が高台にスノコ痕、312は籾殻痕がある。焼成はいずれも良好で311は灰白色、312は内面がにぶい黄色で外面が灰色、313～314・316・317が灰色、315はにぶい褐色を呈する。313と314・317は見込みに重ね焼き痕がある。311～315はⅡ期-２、316と317はⅢ期-１に位置づけられる。

318は山茶椀の小皿、319と320は山茶椀の小椀である。318は口径8.2cm、器高2.2cm、底径4.5cmで、焼成は良好、灰色を呈する。底部は糸切り、体部の調整は横ナデである。319と320は底部のみの残存で、高台径は4.4cmと4.2cmである。共に焼成は良好で灰色を呈する。底部の調整は糸切り後にナデが行われる。319と320はⅠ期、318はⅢ期-１に位置づけられる。

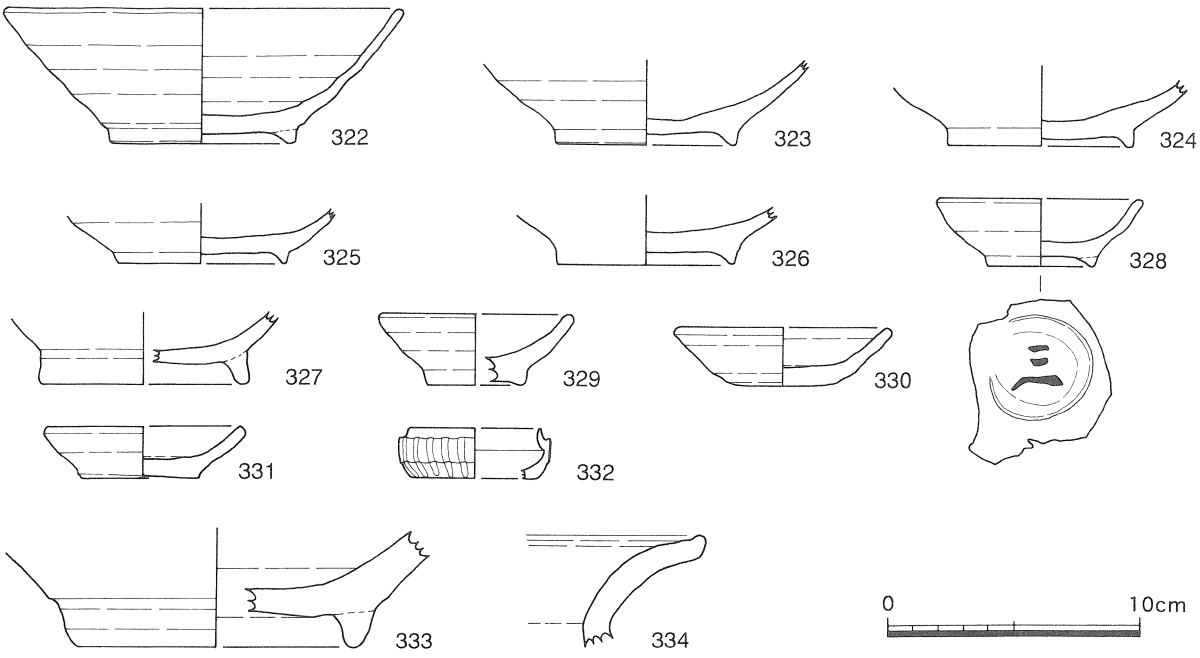


図140　SD-2の出土遺物１（北辺）

321は底部のみの残存であるが、渥美産の甕である。SD-1北辺東端の底面から出土し、同一固体と考えられる破片が多数、溝の覆土や周囲の表土から出土した。残存高22.6cm、底径12.7cm、残存部位の最大径61.7cmである。底部は平底である。12世紀後半～13世紀前半に位置づけられる。

⑵　SD-2北辺の出土遺物（図140－322～334）

SD-2は「コ」字状の区画溝である。この溝の北辺からは322～334の土器が出土した。322～327は山茶椀の椀である。322は遺構底面から出土し、口径15.6cm、高台径6.9cm、器高5.4cmである。焼成は良好で灰色を呈する。底部は糸切りされ、高台との境をヘラ状の工具で一周なでている。高台にはスノコ痕が残る。323～327は底部のみの残存である。高台径は6.6～8.3cmで、323は高台にスノコ痕が確認できる。焼成はいずれも良好で、323・325は黄灰色、324・326・327は灰色を呈する。いずれも底部は糸切りされ、横ナデである。327はⅠ期、その他の個体はⅡ期-２～Ⅲ期-１に位置づけられる。

328と329は山茶椀の小椀である。口径は328が8.0cm、329が7.4cm、器高は328が2.7cm、329が2.8cm、高台径は328が4.2cm、329が3.8cmである。両者とも、焼成は良好で黄灰色を呈し、底部は糸切りされ、体部は横ナデで調整される。328の底面には墨書で「三」と記される。329は見込みに重ね焼き痕がある。両者、Ⅰ期に位置づけられる。

330と331は山茶椀の小皿である。共に、体部から口唇部にかけては直線的である。順に、口径は8.4cmと7.6cm、器高は2.3cmと2.1cm、底径は4.4cmと4.3cmである。両者、焼成は良好で330は内面が黄灰色で外面が灰黄色、331は内外面とも灰色である。調整も共通し、底部が糸切り、体部が横ナデである。Ⅲ期に位置づけられ、13世紀前半のものと言える。

332は青白磁の合子で、明青灰色の釉が施釉される。残存したのは全体の約１/４であった。口径は5.2cm、器径は6.0cm、底径は5.0cmとそれぞれ推定され、器高は2.0cmである。

333は底部の破片であるが、鉢と考えられる。高台径は10.9cmと推定される。焼成は良好で灰白色を呈する。底部は未調整、高台はナデ、体部外面下半はヘラ削り、内面は横ナデの調整である。

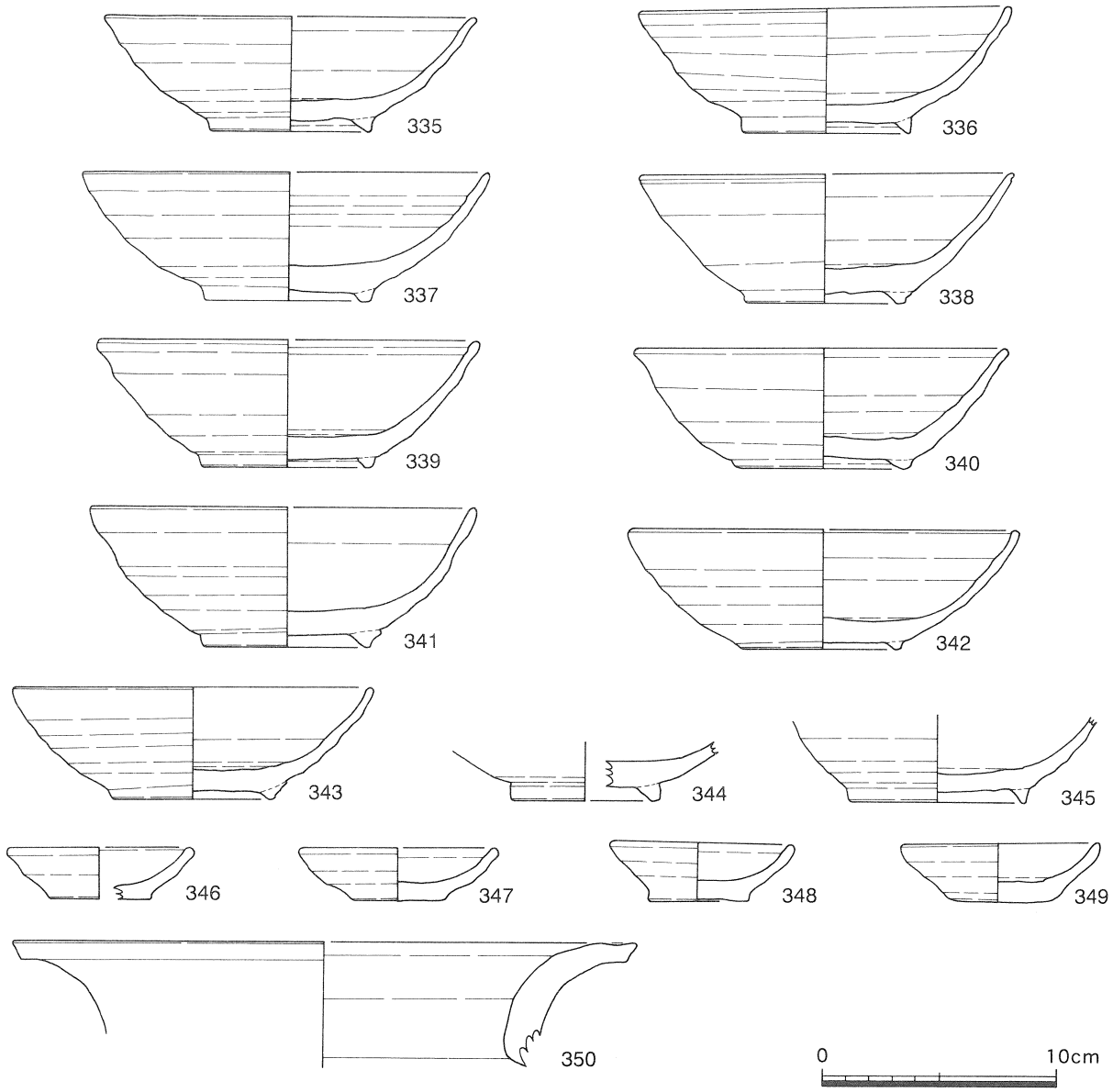


図141　SD-2の出土遺物２（西辺）

334は底面から出土した甕で、残存したのは口縁部のごく一部である。渥美産の甕と考えられる。焼成は良好で灰色を呈する。

⑶　SD-2西辺の出土遺物（図141－335～350）

335～350はSD-2の西辺から出土した。335～345は山茶椀の椀で、344と345は底部のみの残存であった。口径は15.8～17.2cm、器高は5.0～6.0cm、高台径は6.7～7.2cmである。いずれも体部から口縁部にかけての調整は横ナデである。底部は336・344・345がナデ、343はヘラ削りが行われている。その他の個体は糸切りである。なお、高台には335・341・345ではスノコ痕、338・340・343・344では籾殻痕が残る。焼成についてみると、338と339を除きいずれも良好で、335・337・341・342は灰白色、336、340・343・344は灰色、345は褐灰色を呈する。焼成のやや悪い、338と339は共に灰白色である。

なお、336・340・341・344・345は見込みに重ね焼き痕がある。以上の11点は、335～341・334・335がⅡ期-２、342と343がⅢ期に位置づけられる。いずれも東遠江で生産された山茶椀である。

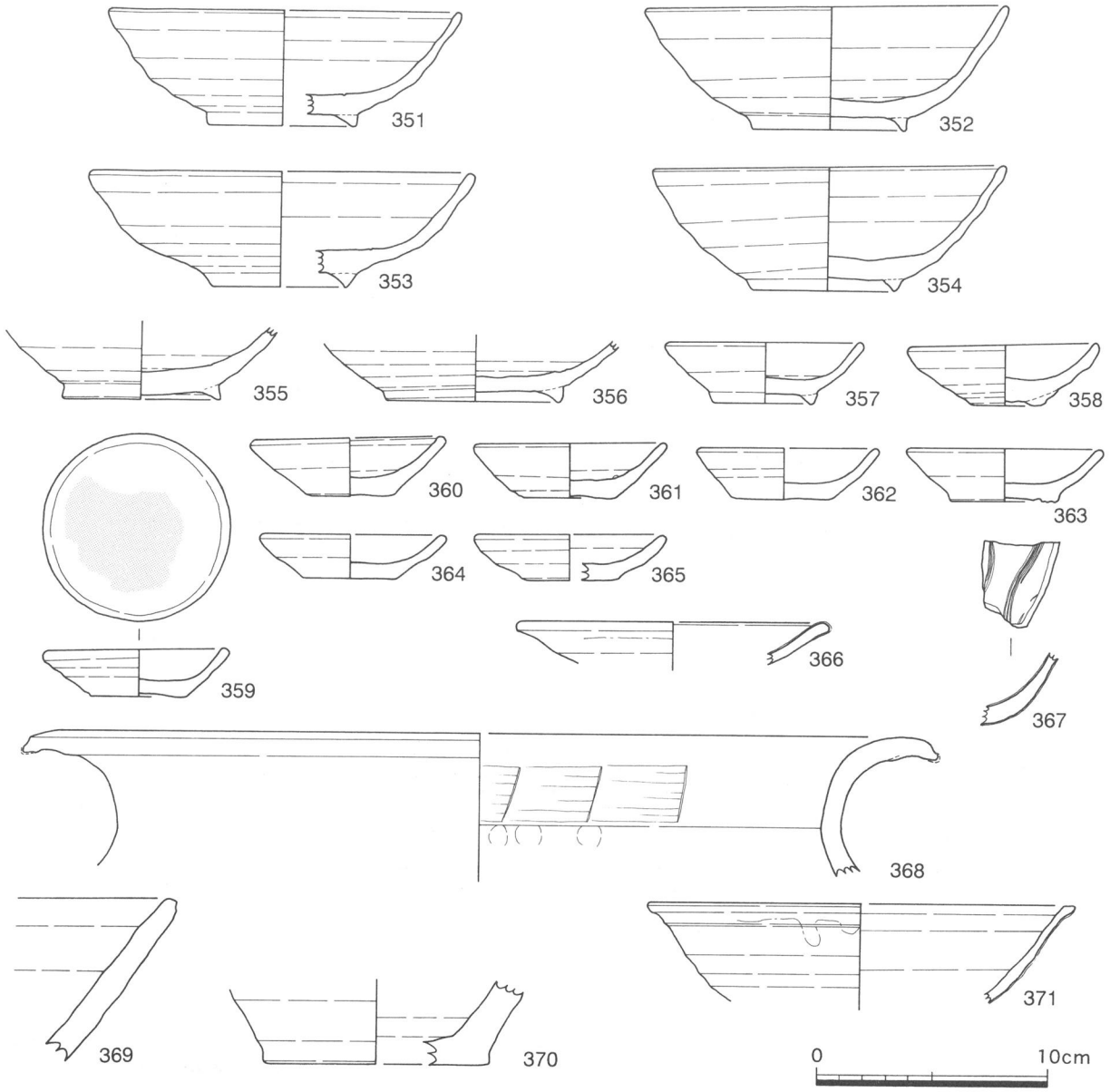


図142　SD-2の出土遺物３（南辺）

346～349は山茶椀の小皿である。348と349は完形で出土した。口径は7.8～8.3cm、器高は2.2～2.6cm、底径は3.8～4.2cmである。底部は糸切り、その他は横ナデにより調整が行われる。４点とも焼成は良好で、346と349は灰色、347は灰白色、348は黄灰色を呈する。いずれも東遠江で生産されたもので、Ⅱ期～Ⅲ期に位置づけられる。なお、348はSD-2南辺から出土した破片と接合できた。

350は覆土から出土した甕である。残存したのは口縁部の一部で、残存高は5.4cm、口径は26.4cmと推測される。焼成は良好で黒褐色を呈する。常滑産の甕と考えられ、12世紀～13世紀に位置づけられる。なお、同一個体と考えられる体部の破片が溝の覆土や撹乱土、表土からも出土している。

⑷　SD－２南辺の出土遺物（図142－351～371）

351～371がSD-2の南辺から出土した遺物である。351～356は山茶椀の椀であるが、355と356は底部のみの残存であった。口径は15.1～16.4cm、高台径は5.6～7.3cm、器高は5.0～5.5cmである。調整を見る

と、底部の調整に違いがある。354と356の底部は糸切りの後にナデが行われる。その他の固体は糸切りである。体部から口縁部の調整は横ナデである点は共通する。なお、６点とも見込みに至るまで横ナデである。焼成は355を除き良好で、351は青灰色、352・353は灰色、354・356は灰白色を呈する。焼成が悪い355は灰白色を呈する。なお、353・355と356は見込みには重ね焼き痕がある。いずれも、東遠江で生産されたもので、353がⅢ期-１、それ以外はⅡ期に位置づけられる。

357・358は山茶椀の小椀である。体部から口唇部にかけて、357は直線的であるが、358は内湾気味となる。底部の調整も異なり、357は糸切り、358は糸切り後にナデが行われている。357は口径8.3cm、器高2.7cm、高台径4.2cm、358は口径8.0cm、器高2.8cm、高台径2.7cmである。共に、焼成は良好で灰色を呈する。両者、東遠江産でⅠ期-２に位置づけられる。

359～365は山茶椀の小皿で、359は完形品で出土した。口径は7.55～8.3cm、底径は3.8～4.4cm、器高は1.9～2.65cmである。焼成はいずれも良好で、359・360は灰白色、361～363は灰色、364は青灰色、365は黄灰色を呈する。360・361は見込みに重ね焼き痕があり、364は内面に自然釉が付着している。なお、359は内面が摩滅し、見込みに墨痕がある。この小皿は転用硯と考えられる。

366・371は白磁、367は青磁である。366と371は口縁部の一部、371は底部の一部が残存したのみである。366は皿で、釉は灰色をおびた発色をする。口径は13.0cmと推定される。Ⅲ類に分類される釉ハギの皿である。371は碗で、口径は18.3cmと推定される。灰色を帯びた白色を呈し、Ⅷ類に分類される。367は龍泉窯系の青磁碗で、Ａ２類に分類される。

368は甕である。残存したのは口縁部の約１/８で、残存高は6.1cm、口径は36.4cm、残存部位の最大径は39.8cmである。焼成は良好で灰褐色を呈する。外面には釉が付着する。渥美産と考えられる。この土器の破片は、西辺からも出土した。

369は鉢である。残存したのは口縁部の一部である。焼成は良好で灰白色を呈する。370は甕の底部である。底部の約１/８が残存し、底径は8.9cmと推定される。なお、354～357・367・369は住居跡周辺の溝から出土した破片と接合できた。

⑸　住居跡群周辺の出土遺物（図143・144－372～419）

SH-1～６周辺には極浅い溝が幾つか存在した（SD-4～16）。この中には雨落ちにより形成されたものも含まれていると考えられる。遺物はこれらの溝からも出土した。

372～391は山茶椀の椀である。いずれも破片で出土し、全体の様子をうかがえたのは、373と376のみである。口径は15.7～17.8cm、高台径は5.7～7.0cm、373と376の器高は5.3cmである。377は指押さえで作り出された輪花が１箇所確認できた。いずれも、焼成は良好で372・375～378・382～384・387・391は灰色、373・381・389は黄灰色、374・385・386・388は青灰色、379・380・390は灰白色を呈する。なお、378・382・383・386・387・389・390は見込みに重ね焼き痕がある。調整は体部から口唇部の内外面はいずれも横ナデである。底部は糸切りされるが、379・381～383はナデにより最終調整が行われている。なお、383は底面中央に円形のナデがある。379～381・382～385・389はスノコ痕、391は籾殻痕が高台にある。378・380・385は底面に墨書が確認できる。ただし、判読はできなかった。

390と391は湖西・渥美産、その他は東遠江産の山茶椀である。時期は378がⅠ～Ⅱ期、372～374・379・380・382～384がⅡ期、その他はⅢ期に位置づけられる。

392～399は山茶椀の小椀である。口径7.8～8.5cm、器高2.3～2.6cm、高台径3.3～4.6cmである。いずれも焼成は良好で392・394・395は黄灰色、393は灰色、396～399は灰白色を呈する。392・394・397は見込みに重ね焼き痕がある。底部は糸切りされるが、394・399は糸切り後にナデが行われている。高台には394と399はスノコ痕、395は籾殻痕が残る。いずれも東遠江系の山茶椀で、Ⅰ期に位置づけられる。

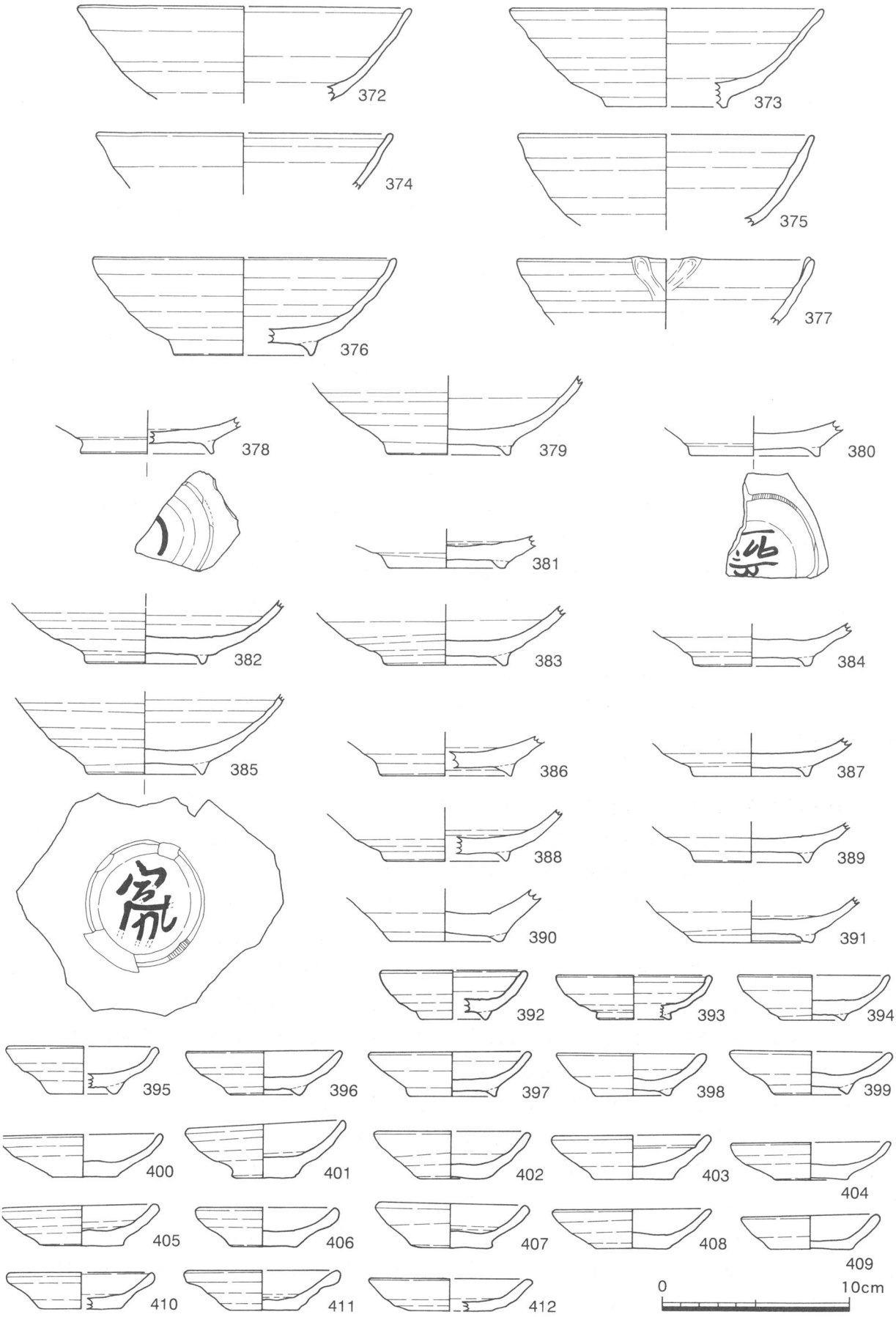


図143　SD-4～16の出土遺物１

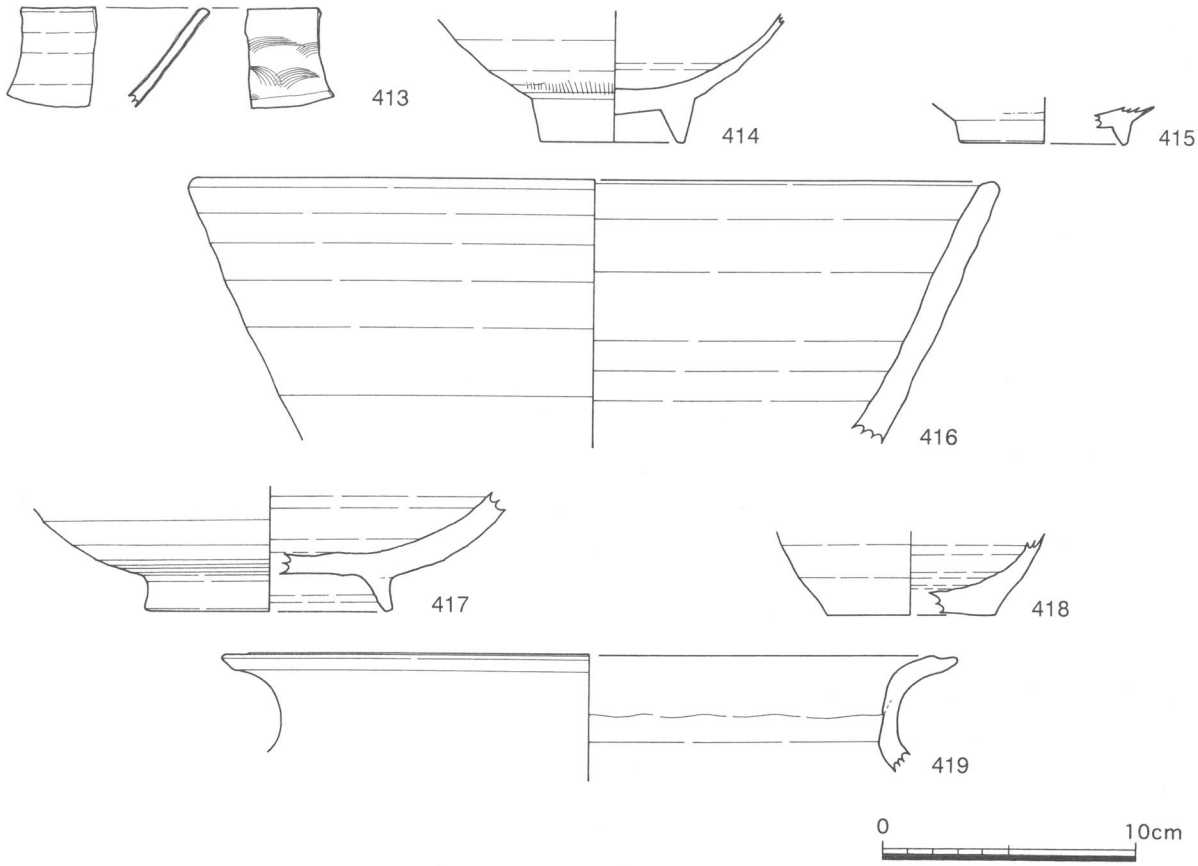


図144　SD-4～16の出土遺物２

400～412は山茶椀の小皿である。401・409は完形であった。口径は7.2～8.5cm、底径は3.2～4.4cm、器高は400～411では1.9～2.6cm、412はやや低く1.8cmである。いずれも焼成は良好で、400・403・404・410は灰白色、401・402・405・407・408・411は灰色、406・412は黄灰色、409はにぶい黄燈色を呈する。406・408は重ね焼き痕がある。412は湖西・渥美産の小皿であるが、その他は東遠江で生産されたものである。Ⅱ期-１～Ⅲ期-１に位置づけられる。

413～415は白磁である。413と415は掘立柱建物群の南に所在するSD-9、414は北西のSD-5から出土した。413はⅧ類に分類され、内面には花文が櫛書きされている。414と415は共に底部のみの残存である。414はⅤ類に分類される椀で、高台径は5.7cmである。

416と417は鉢である。416は口縁部の約１/８、417は底部の１/４が残存した。共に焼成は良好で灰白色を呈するが、別個体と考えられる。416は残存高10.4cm、口径は31.4cmと推定される。体部下半の外面はヘラ削り、その他は横ナデで調整される。湖西・渥美産の鉢である。417は残存高4.8cm、高台径9.3cmと推定される。見込みには重ね焼き痕を有し、体部外面下半はヘラ削り、その他の残存部位は横ナデで調整される。

418は甕の底部と考えられる。底部の約１/４が残存し、焼成は良好で灰色を呈する。底部は糸切りされる。419は甕であるが、口縁部の一部が出土したのみある。口径は27.2cmと推定され、焼成は良好で褐色を呈する。口縁部付近には灰オリーブ色の釉が付着する。

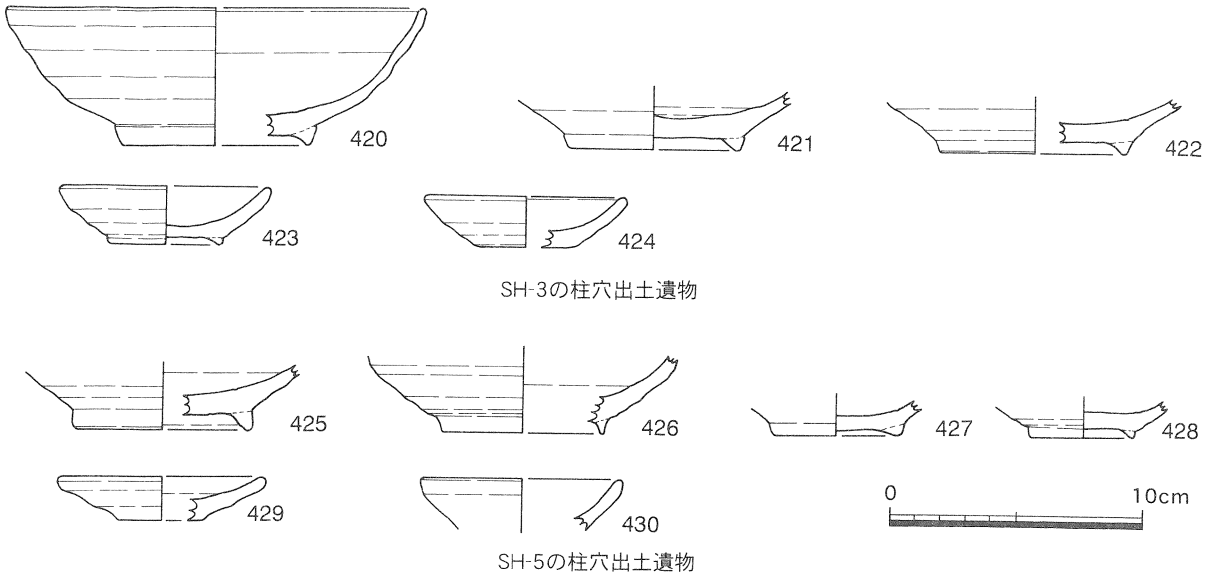


図145　SH-3・SH-5の柱穴の出土遺物

⑹　柱穴と土坑からの出土遺物

①　SH-3の柱穴の出土遺物（図145－420～424）

420～424はSH-3の柱穴から出土した遺物である。420～422は山茶椀の椀でP-1から出土した。いずれも破片の出土であった。このうち、420は全貌をうかがえ、器高5.4cm、口径16.3cm、高台径7.3cmと推測される。３点とも焼成は良好で420はオリーブ灰色、421は灰白色、422は黄灰色を呈する。420は見込みに重ね焼き痕があり、421は高台にスノコ痕を有する。いずれも東遠江で生産された山茶椀で、Ⅲ期に位置づけられる。

423は山茶椀の小椀でP-7から出土した。口径は8.1cm、器高2.3cm、高台径4.4cmである。焼成は良好でオリーブ灰色を呈する。底部は糸切りの後にナデによる調整が行われている。

424は山茶椀の小皿である。P-8から出土し、口径は7.8cm、器高は2.0cm、底径は3.2cmと推測される。焼成は良好で灰色を呈する。なお、この個体は表土から出土した破片と接合し、遺構廃絶後に流れ込んだものと考えられる。

423と424は共に東遠江で生産されたもので、423はⅠ期、424はⅢ期に位置づけられる。

②　SH-5の出土遺物（図145－425～430）

425～429はSH-5の柱穴から出土した遺物である。425と426は山茶椀の椀である。共に底部のみの破片であった。425はP-17から、426はP-22から出土した。共に焼成は良好で425は青灰色、426は灰白色を呈する。425は高台にスノコ痕、見込みに重ね焼き痕を確認できる。427と428は山茶椀の小椀である。427がP-16、428はP-19からの出土である。共に底部のみの残存であった。焼成は良好で427は灰白色、428は灰色を呈する。両者、見込みに重ね焼き痕を有し、428の底部は糸切り後にナデによる調整が行われる。429は山茶椀の小皿でP-7から出土した。口径は7.8cm、底径は3.3cmとそれぞれ推測され、器高は1.8cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。

SH-5の柱穴から出土した遺物で、425と427・428はⅠ期～Ⅱ期、429はⅢ期-２に位置づけられる。

430はSH-6のP-4とP-8の中間に位置する柱穴から出土した山茶椀の小皿である。口縁部のみの残存で、口径は7.8cmと推定される。焼成は良好で褐灰色を呈する。この柱穴はSH-6あるいはSH-5を構成していた柱穴の可能性もあるため、ここに記した。

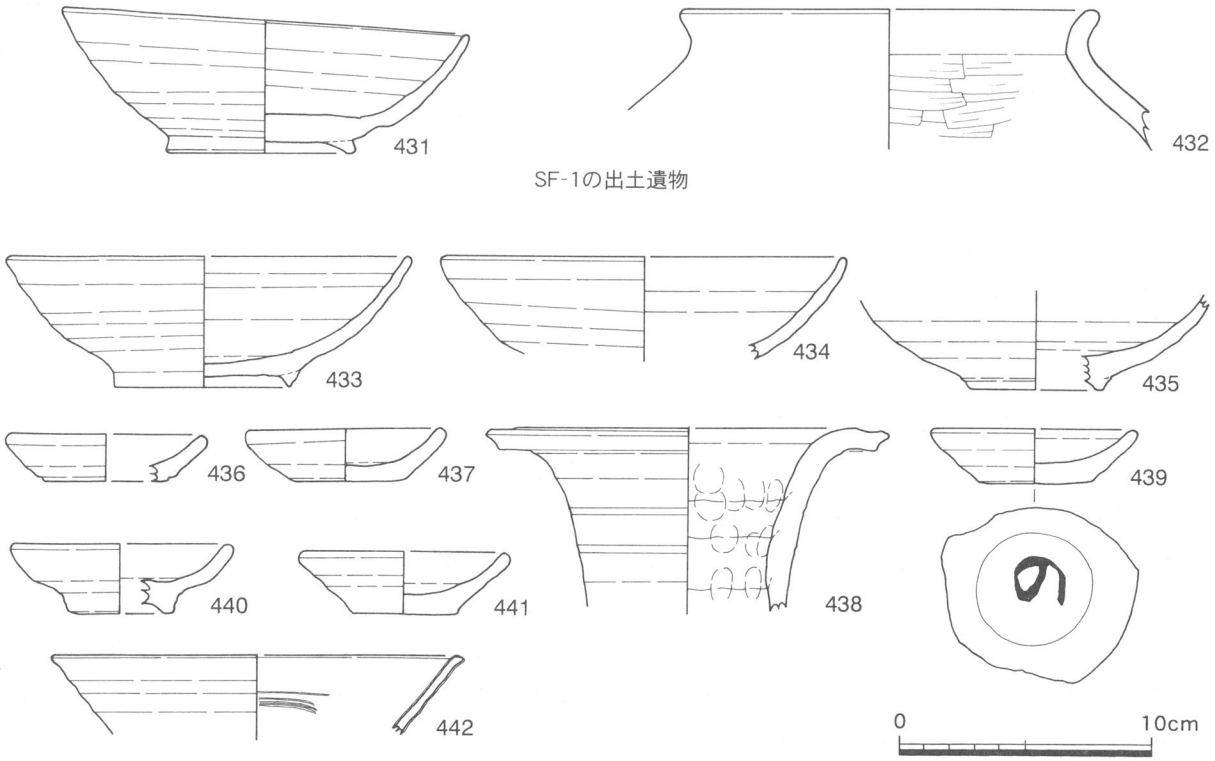


図146　SF-1とその他の柱穴の出土遺物

③　SF-1の出土遺物（図146－431・132）

431と432はSF-1から出土した遺物である。431は山茶椀の椀で全体の約２/３が残存した。口径は15.9cm、器高5.8cm、高台径7.0cmである。焼成は良好で灰色を呈する。見込みには重ね焼き痕を有する。東遠江で生産された山茶椀で、Ⅱ期-１に位置づけられる。

432は甕で口縁部の一部が残存したのみである。焼成は良好で外面は灰オリーブ色、内面は灰色を呈する。

④　その他の柱穴からの出土遺物（図146－433～442）

433～438はSH-5のP-1から約1.5m北西に位置する柱穴から出土した遺物である。433～435は山茶椀の椀である。いずれも焼成は良好で433と434は灰色、435は灰白色を呈する。口径は433、434共に15.7cmと推測され、433の器高は5.2cm、高台径は6.5cmである。433は高台にスノコ痕を有し、底部はナデにより最終調整が行われる。

436と437は山茶椀の小皿である。共に焼成は良好で灰白色を呈する。436は口径7.6cm、器高1.9cm、底径4.8cm、437は口径7.5cm、器高2.2cm、底径4.1cmである。これらはいずれも東遠江産の山茶椀でⅢ期に位置づけられる。

438は灰釉陶器の長頸瓶である。遺存したのは口縁部の一部であった。焼成は良好で灰白色を呈する。これも東遠江で生産されたものと考えられる。

439はSH-5のP-3から１m南西に位置する柱穴から出土した山茶椀の小皿である。口径は8.0cm、器高2.2cm、高台径4.5cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。底部には墨書が残り、「の」字状の記号が記されている。東遠江で生産された小皿で、Ⅲ期に位置づけられる。

440は山茶椀の小椀で、SA-1のP-5から3.5m東にあるピットから出土した。焼成は良好で黄灰色を呈し、口径8.55cm、器高2.75cm、高台径3.4cmである。

441はSA-1のP-5の東隣にあるピットから出土した山茶椀の小皿である。口径7.9cm、器高2.5cm、底径4.1cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。440と441は共に東遠江で生産されたもので、440はⅠ期、440はⅢ期に位置づけられる。

442はSH-5のP-19に近接する柱穴から出土した白磁の碗である。口縁部の一部が遺存し、口径は16.1cmと推測される。Ⅴ類に分類される。

(7) 表土除去時の出土遺物

① 24区の出土遺物（図147－443～459）

443～459は24区表土掘削時の出土遺物である。443～448は山茶椀の椀である。いずれも底部のみの残欠で、高台径は6.8～7.4cmである。底部はいずれも糸切りされるが、444はナデにより最終調整が行われる。焼成はいずれも良好で、443は褐灰色、444は灰黄色、445～448は灰色を呈する。いずれも、東遠江系の山茶椀で、443がⅠ期、444がⅡ期、残りの４点がⅢ期に位置づけられる。

449は山茶椀の小椀、450と451は山茶椀の小皿である。449は口径8.2cm、高台径3.2cmと推定され、器高は2.85cmである。焼成は良好で灰黄色を呈する。450は口径6.8cm、器高1.9cm、底径3.2cm、451は口径8.5cm、器高1.7cm、底径4.8cmである。共に焼成は良好で灰色を呈する。451は重ね焼き痕がある。上記の３点は東遠江で生産されたもので、449はⅠ期、450と451はⅢ期に位置づけられる。

452は白磁の碗である。残存したのは口縁部のごく一部であった。Ⅴ類あるいはⅧ類に分類され、灰白色の釉が施釉される。

453～456は甕である。いずれも頸部から口縁部の一部が残存したのみである。いずれも焼成は良好で灰黄色、または黄灰色を呈する。455と456は口唇部に釉が付着している。

457と458は砥石である。457は淡緑灰褐色凝灰岩で、458は珪質凝灰岩である。

459は釘で、残存長は6.0cmであった。断面は方形で幅は0.2～0.5cmである。

② 13区・13'区・14区、25区北西の出土遺物（図148－460～498）

460～476は山茶椀の椀である。このうち、463～468は体部から口縁部の一部、464～476は底部のみの残存であった。口径は14.4～18.1cm、器高5.3～5.8cm、高台径6.0～7.4cmである。調整をみると、体部内外面と口縁部はいずれも横ナデである。底部については糸切りされるが、469の底部はナデにより最終調整が行われている。なお、462と476は籾殻痕、473はスノコ痕が高台に残る。いずれも焼成は良好で460・464・465・474・476は灰白色、461・466・473は青灰色、462・463・467・469・470・475は灰色、468は黄灰色、471は灰黄色、472はオリーブ灰色を呈する。460・469・470・474～476は見込みに重ね焼き痕がある。以上、17点のうち、476を除く16点は東遠江で生産された山茶椀である。461や464～473はⅡ期、460・474～475はⅢ期に位置づけられる。476は湖西・渥美産の山茶椀でⅢ期に位置づけられる。

477～486は山茶椀の小椀である。口径8.2～9.0cm、器高2.1～2.7cm、高台径3.4～5.3cmである。調整について見ると、いずれも体部から口唇部にかけての内外面は横ナデであり、底部は糸切りされている。ただし、481と484の底部は糸切り後にナデが行われている。なお、478は高台にスノコ痕、見込みに重ね焼き痕がある。いずれも焼成は良好で477～479・481・485は黄灰色、480・482・483・486は灰色、484は灰白色を呈する。上述した小椀10点はいずれも東遠江で生産されたもので、Ⅰ期に位置づけられる。なお、483は底部に「の」字状の記号と考えられる墨書が確認できる。

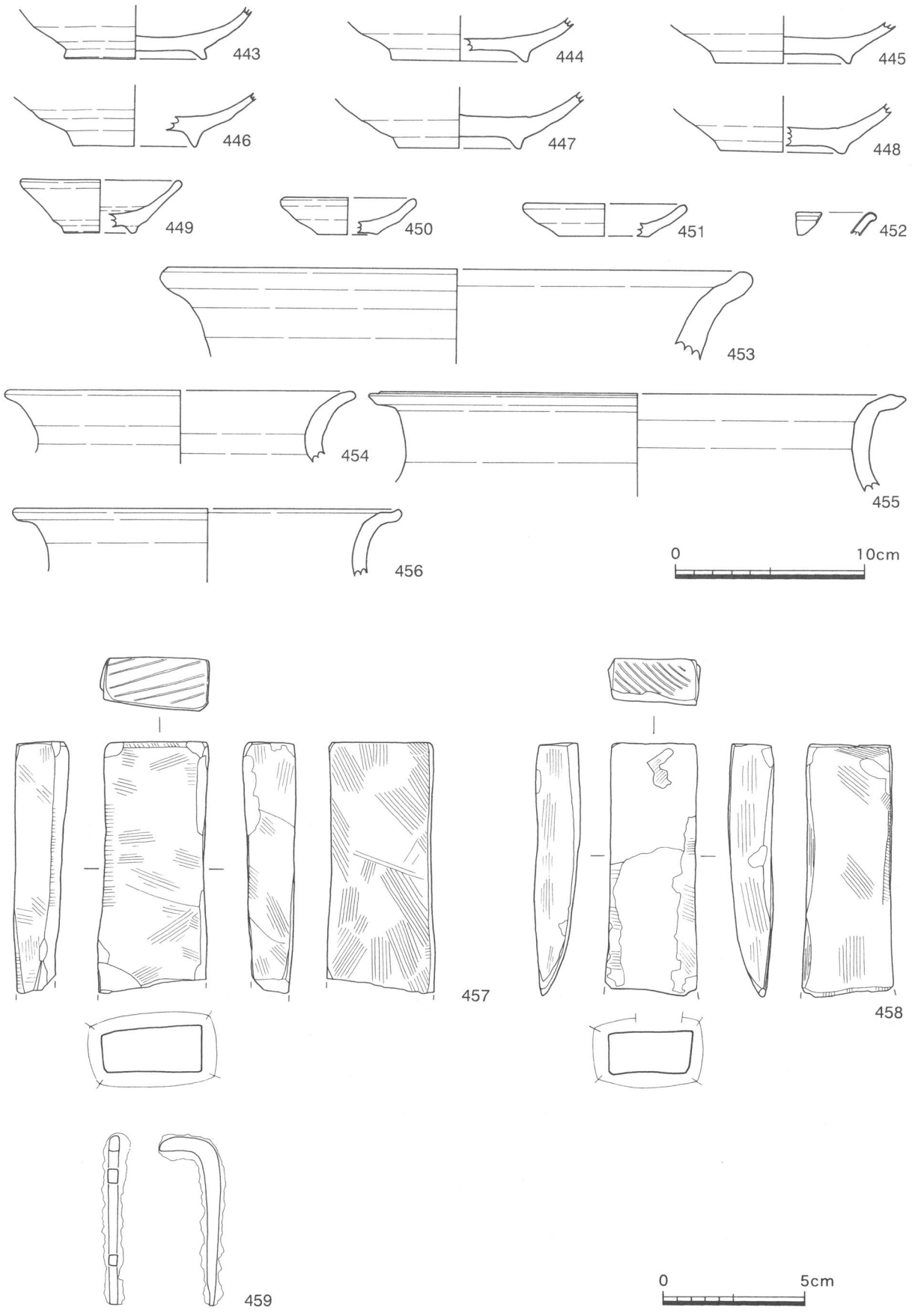


図147　24区表土の出土遺物

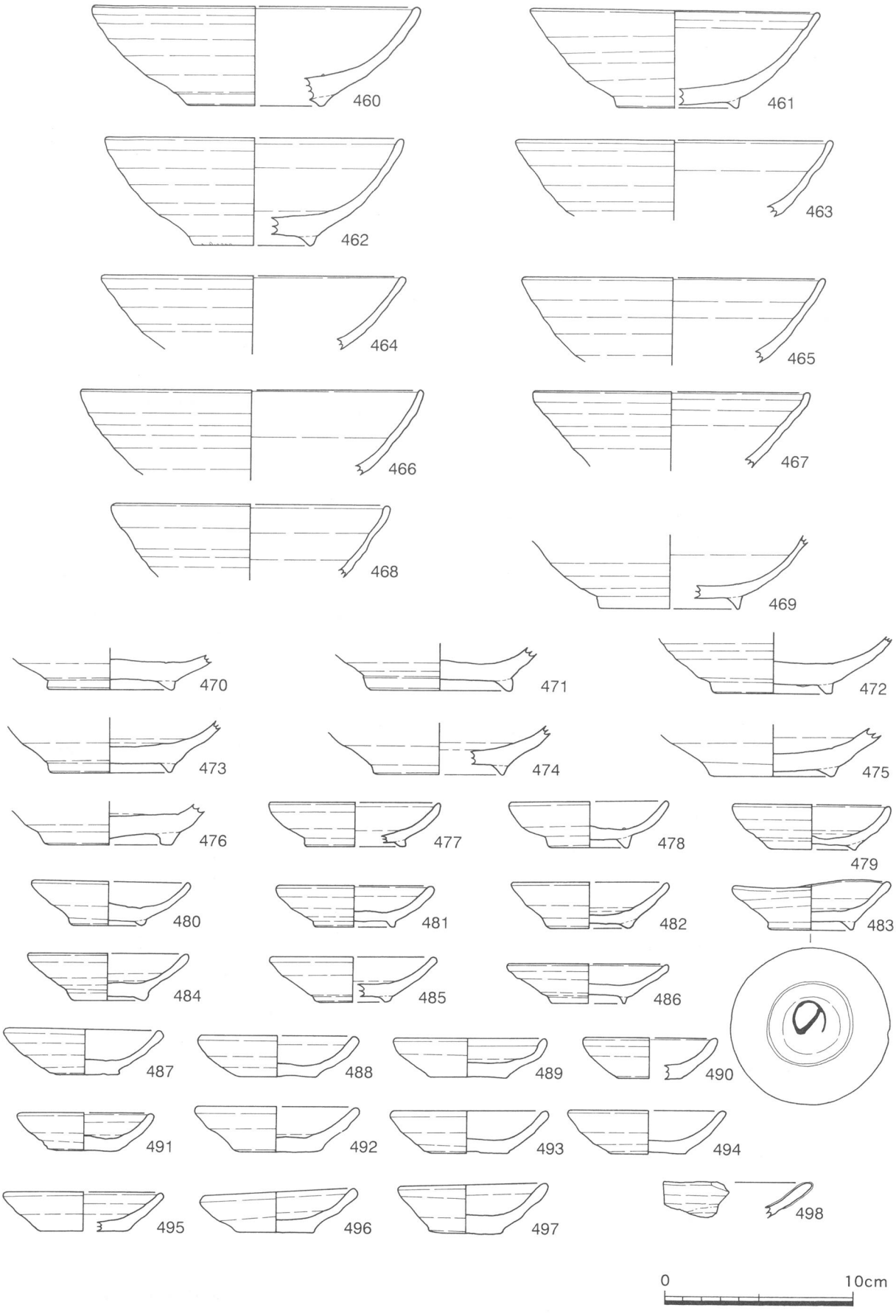


図148　13区・13'区・14区、25区北西表土の出土遺物

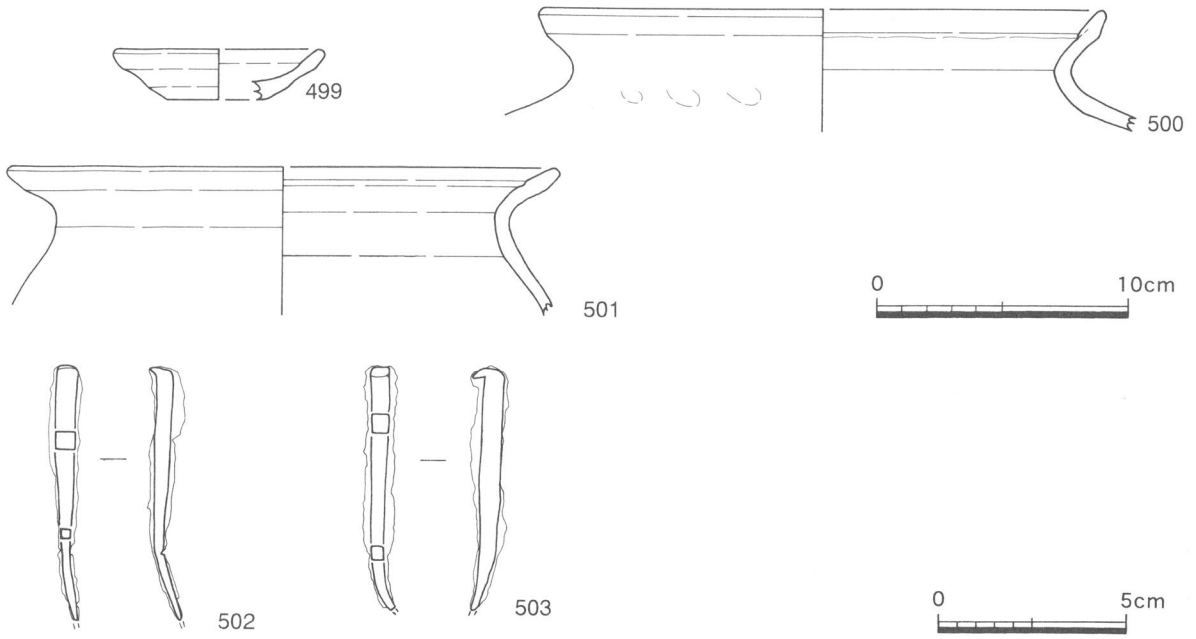


図149　SH-12・SF-4の出土遺物

487～497は山茶椀の小皿で、口径7.0～8.5cm、器高2.0～2.7cm、底径3.5～4.4cmである。調整は底部が糸切り、その他は横ナデであり、これは全点に共通する。焼成はいずれも良好で、487は内面が灰黄色で外面が灰色、488・491は灰色、489はオリーブ灰色、490・495は黄灰色、492・494・497は褐灰色、493が褐色、496は灰白色を呈する。これら11点の小皿はいずれも東遠江で生産されたもので、おおむねⅢ期に位置づけられる。498は龍泉窯系の青磁の碗で、Ａ２類に分類できる。

３．北側中央部の出土遺物

⑴　柱穴と土坑からの出土遺物（図149－499～503）

499と503はSF-4の覆土から出土した。499は山茶椀の小皿である。全体の約１/３が残存し、口径7.9cm、器高2.0cm、底径4.0cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈する。東遠江産で、Ⅲ期-１に位置づけられる。503は鉄釘である。残存長6.8cm、幅0.2～0.6cm、厚さ0.5cmである。

500～502はSH-12のP-3から出土した。柱穴の底面から502が、その上から501、更にその上から500が出土した。500と501は土師器の甕で、ともに口縁部の一部が残存したのみである。500は口径22.4cm、501は口径21.5cmと推定される。共に焼成は良好で、にぶい黄燈色を呈する。503は鉄釘で残存長6.5cm、幅0.2～0.5cm、厚さ0.2～0.6cmである。

⑵　表土の出土遺物（図150－504～518）

504～518は表土からの出土遺物である。504～510は山茶椀の椀、511は灰釉陶器の椀で、504～506は体部から口縁部にかけての一部、507～511は底部の一部が出土した。口径14.2～16.8cmと推定され、高台径は507～510は6.4～7.1cm、511は5.5cmである。焼成はいずれも良好で、504・505・507～510は灰色、506と511は灰白色である。508は見込みに重ね焼き痕がある。調整は底部が糸切り、その他は横ナデである。509はスノコ痕、510は籾殻痕を高台に有する。506は湖西・渥美産であるが、504・505・507～510は東遠江産のもので、Ⅱ期-２～Ⅲ期-１に位置づけられる。511は折戸53号窯式～東山72号窯式併行期の東遠江で生産された灰釉陶器と考えられる。

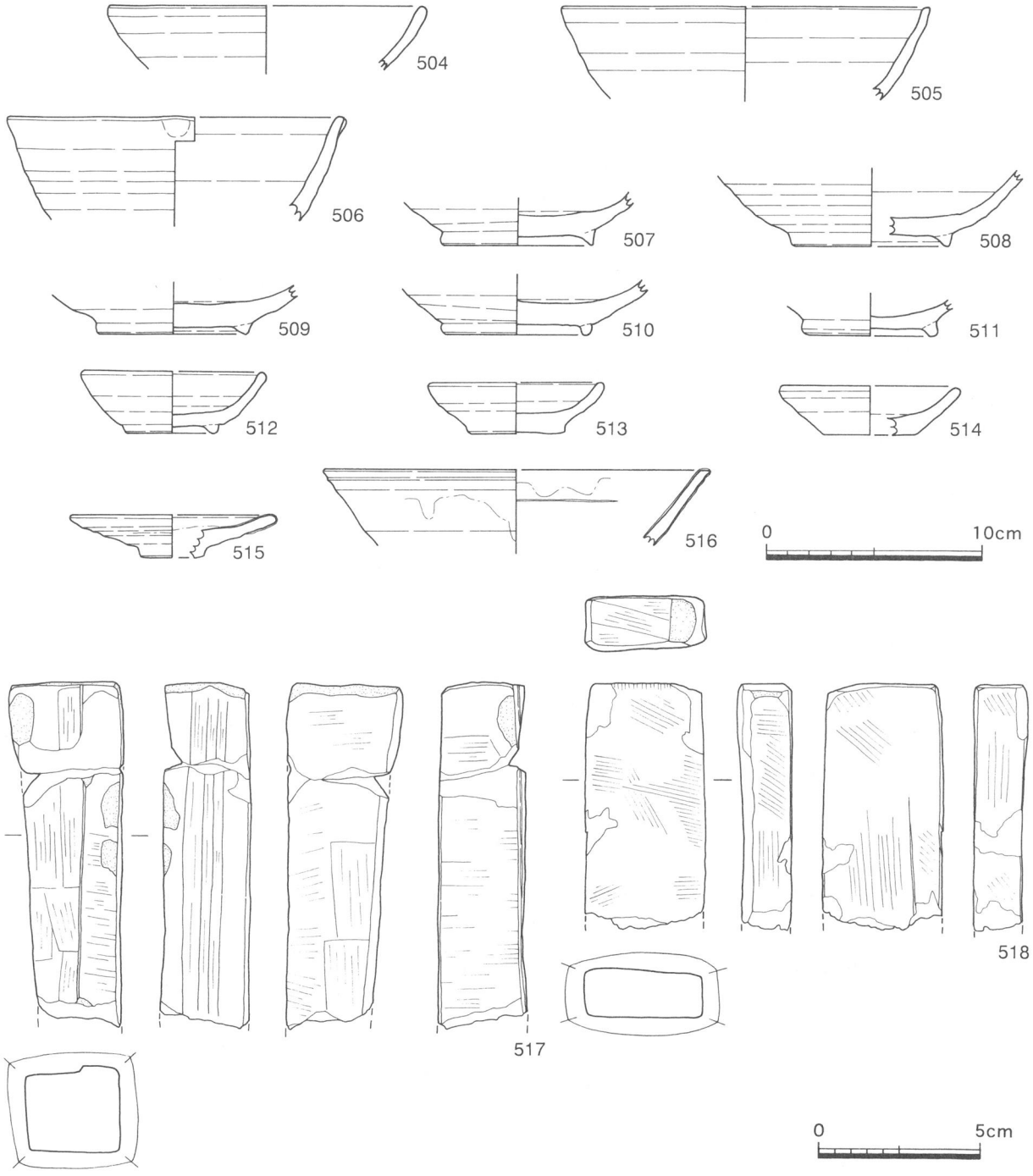


図150　調査区北側中央部表土の出土遺物

512は山茶椀の小椀、513と514は山茶椀の小皿である。512は口径8.35cm、器高2.9cm、高台径4.0cm、513は口径7.85cm、器高2.4cm、底径4.1cm、514は口径7.9cm、器高2.35cm、底径4.0cmである。いずれも焼成は良好で512と513は灰白色、245は灰色を呈する。底部は糸切り、その他の調整は横ナデである。３点とも東遠江産で、512がⅠ期、513と514がⅢ期に位置づけられる。

515は白磁の皿、516は白磁の碗である。515は釉ハギの皿で、Ⅲ類に分類される。516はⅧ類に分類され、口径は17.2cmと推定される。

517と518は砥石である。517は凝灰岩製で残存長10.75cm、幅2.7～3.55cm、厚さ2.3～2.7cmである。残存する面のうち４面に使用痕がある。518は残存長7.65cm、幅0.36～0.37cm、幅1.5～1.7cmである。凝灰

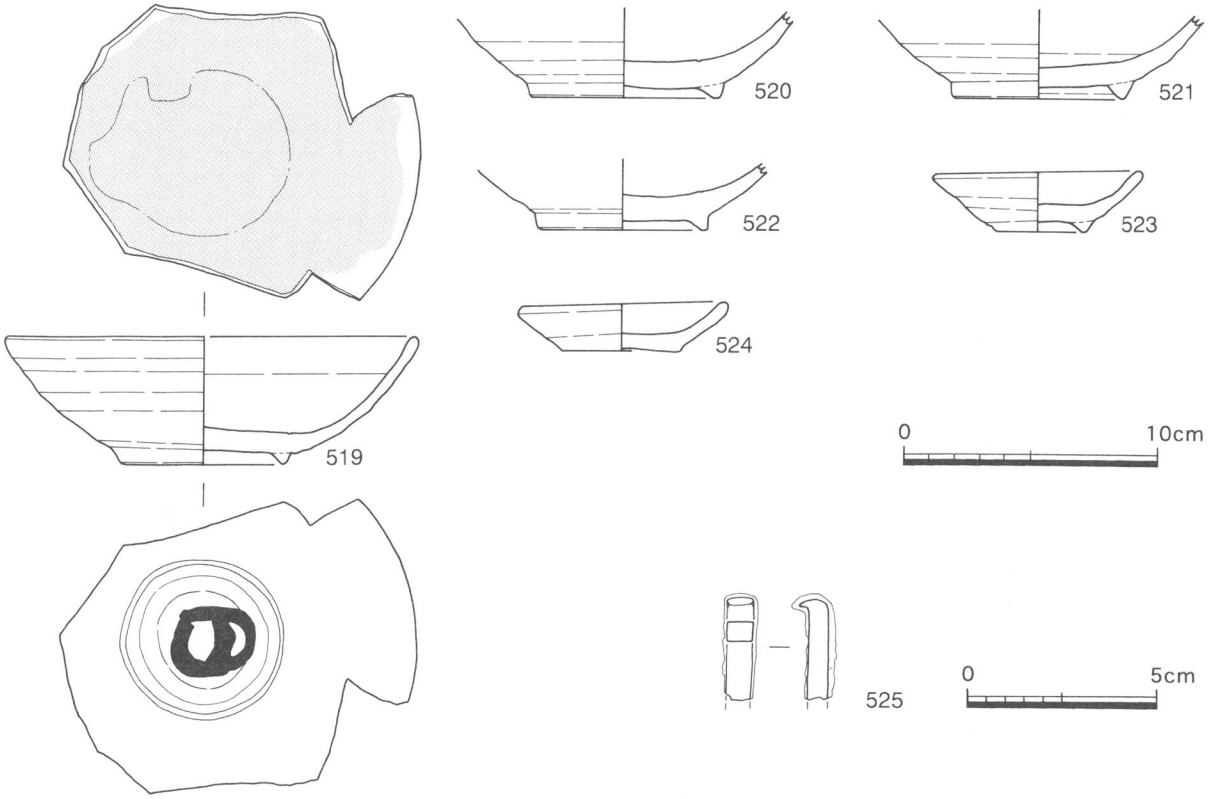


図151　SD-18・SF-11・SX-2の出土遺物

岩製で、残存する５面に使用痕がある。

４．北東部からの出土遺物

(1)　SD-18・SF-11・SX-2の出土遺物（図151－519～525）

519～524は山茶椀で、519～522は椀、523は小椀、524は小皿である。519と522・523はSX-2から出土した。SX-2は流路の護岸と考えられる石組である。520・521はSF-11の覆土から出土した。いずれも東遠江で生産された山茶椀である。

519～522の椀のうち、全体の形状をうかがえたのは519のみで、その他の３点は底部のみの出土であった。519口縁部の約２/３を欠き、口径は16.0cmと推定される。器高は5.1cm、高台径は6.0cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。断面が三角形状となる高台には籾殻痕を有する。底部は糸切り、その他は横ナデで調整される。内面には墨痕が確認でき、表面は摩滅している。転用硯であったと考えられる。なお、底面には墨書が残る。「○」に「一」の字が組み合わされた記号のようである。

520～521は高台径6.2～7.1cmで、520と521は高台にスノコ痕が残る。調整は底部が糸切り、その他の部位は横ナデである。３点とも焼成は良好で、見込みには重ね焼き痕を有し、520と522は灰白色、521は灰色を呈する。520は見込みが摩滅している。Ⅱ期～Ⅲ期に位置づけられる。

523の小椀はほぼ完形で出土した。口径8.0cm、器高2.4cm、底径3.6cmである。524の小皿は全体の約４/５が残存し、口径7.9cm、器高2.0cm、底径4.6cmである。２点とも焼成は良好で523は内面灰白色、外面が黄灰色を呈する。524は内面が灰黄色、外面が褐灰色を呈する。底部は共に糸切りで、体部の調整は横ナデであるが、524は見込みがナデ、523は見込みに至るまで横ナデである。両者とも、東遠江産のもので、523がⅠ期、524がⅢ期に位置づけられる。

525は釘の破片である。SF-11の覆土から出土した。残存長は2.5cm、幅は0.5cmである。

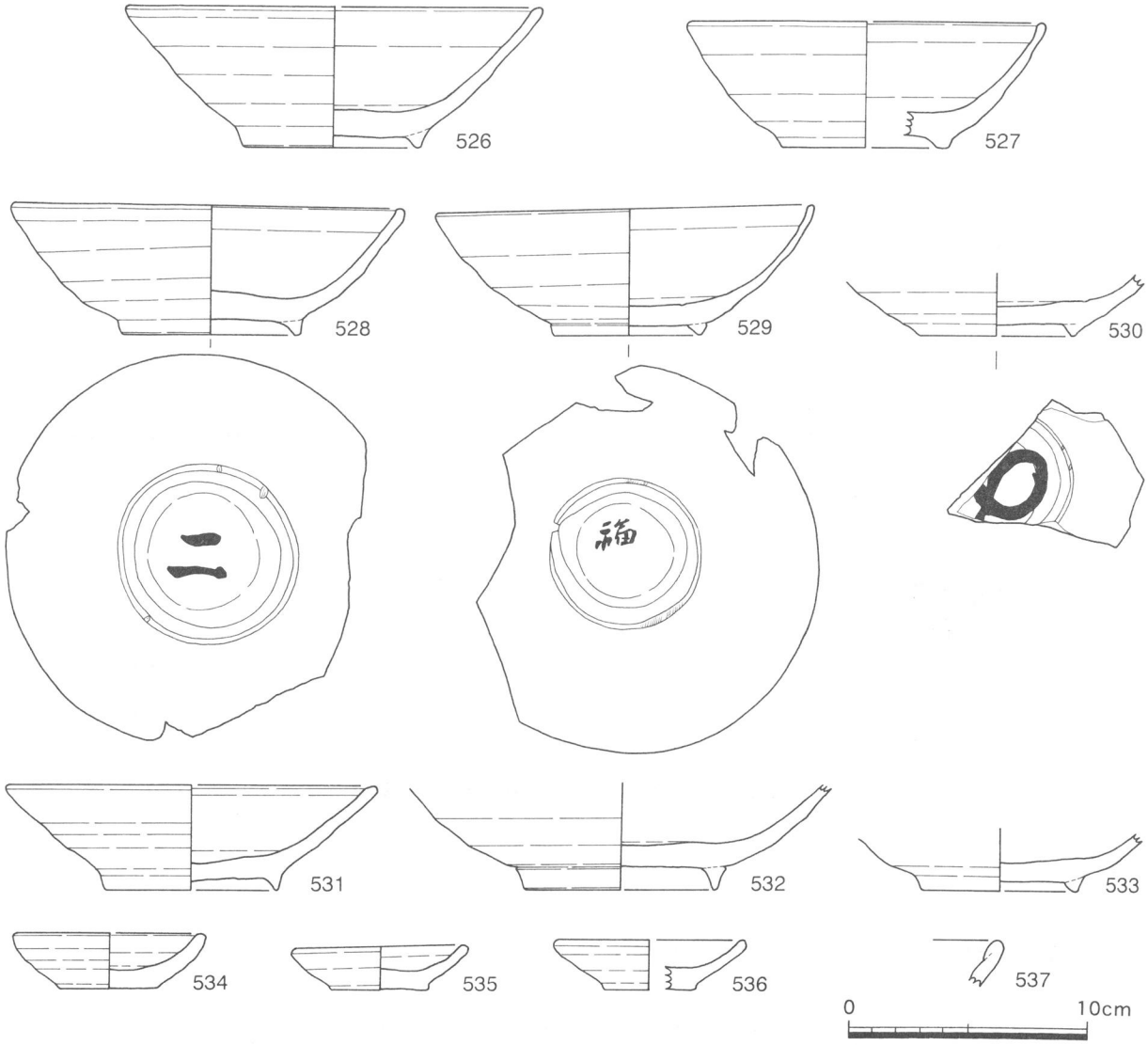


図152　SD-19・SF-14の出土遺物

⑵　SD-19・SF-14の出土遺物（図152－526～537）

526と527はSD-19から、528～537はSF-14から出土した。SD-19は「L」字状の石組み部分と石組みが無い部分に分かれるが（図57）、526と527は石組みが無い部分からの出土である。528はSF-14の底面から正位置で、529と532は壁面に伏せた状態、530と531・533～537は覆土から出土した。537は伊勢鍋で、口縁部の一部の残存にとどまった。

526～533は山茶椀の椀である。このうち、530と532・533は底部のみの残存である。口径14.8～17.2cm、器高4.4～5.9cm、高台径6.1～7.4cmである。調整を見ると、体部から口縁部にかけての内外面はいずれも横ナデであるが、見込みの調整については差異がある。526と527・531はナデ、528～530は横ナデである。８点とも底部は糸切りされるが、531は糸切り後にナデが行われている。なお、526と529・530は高台にスノコ痕、527・528・532は籾殻痕がある。いずれも焼成は良好で526～529・531は灰白色、530・532は青灰色、533は灰色を呈する。530は見込みに重ね焼き痕がある。

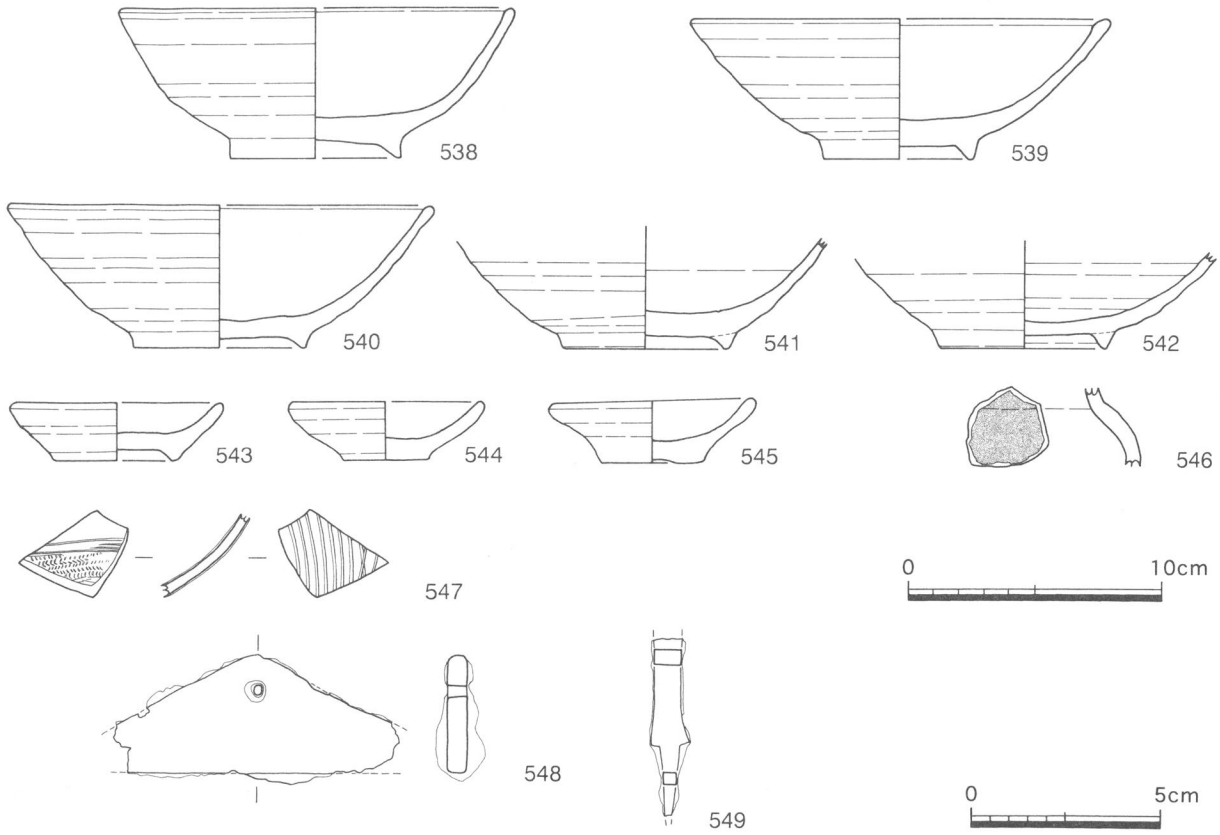


図153　SF-12の出土遺物

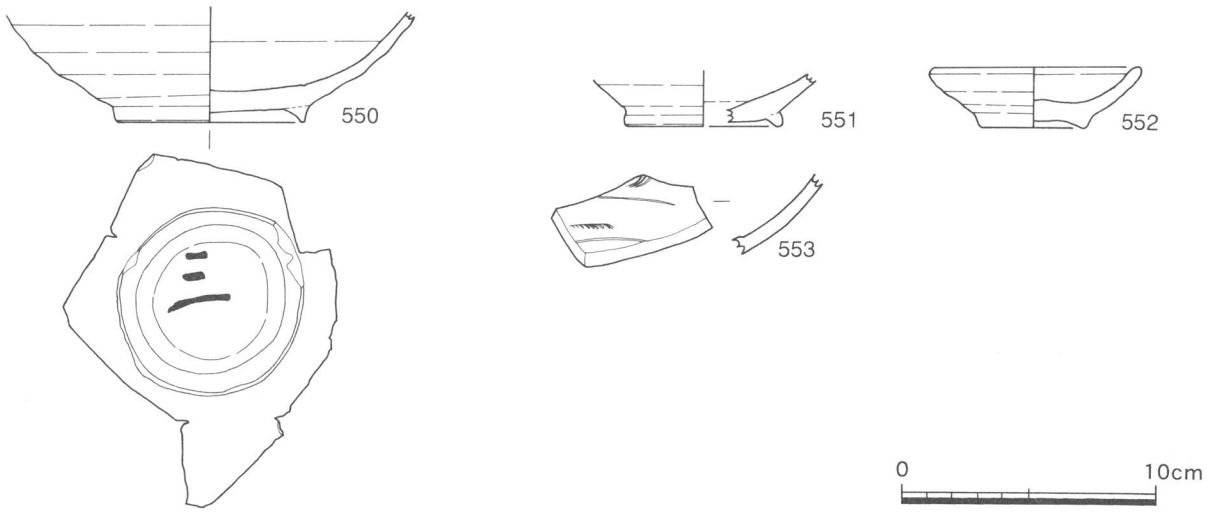


図154　SX-1の出土遺物

上記の８点は東遠江で生産されたもので、Ⅱ期-２～Ⅲ期-１に位置づけられる。なお、528～530は底面に墨書が明白に残り、528は「二」、529は「福」と記されている。530の墨書は記号と考えられる。

534～536は山茶椀の小皿で、535は完形で出土した。口径は7.1～7.8cm、器高2.1～2.4cm、底径3.8～4.0cmである。焼成はいずれも良好で534は灰白色、535と536は灰色を呈する。調整を見ると、３点とも底部が糸切り、口縁部から体部の内外面が横ナデ、見込みがナデである。いずれもⅢ期に位置づけられる東遠江産の山茶椀である。

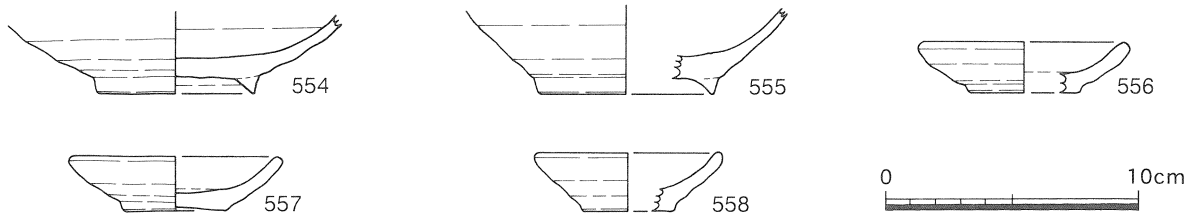


図155　SF-9・26区の柱穴、SD-17の出土遺物

⑶　SF-12の出土遺物（図153－538～549）

538～549がSF-12から出土した遺物である。このうち、538～541は覆土でも上層部からの出土である。538～542は山茶椀の椀である。541と542は底部のみの残存であった。口径は15.2～16.5cm、器高5.5～5.9cm、高台径6.0～6.8cmである。542の高台にはスノコ痕が認められる。焼成はいずれも良好で538は褐灰色、539・542は灰色、540は黄灰色、541は灰白色を呈する。自然釉が538では口縁部の内外面、539は体部内面に付着する。なお、539・541・542は見込みに重ね焼き痕がある。調整をみると、体部から口縁部の内外面はいずれも横ナデ、底部は糸切りである。538～540の見込みはナデが行われるが、541と542は横ナデである。いずれも東遠江産の山茶椀で538～540はⅡ期、541と542はⅢ期に位置づけられる。

543は山茶椀の小椀である。口径8.0cm、器高2.3cm、高台径4.8cm、焼成は良好で灰白色を呈する。底部が糸切りの後ナデ、見込みはナデ、その他は横ナデで調整される。

544と545は山茶椀の小皿である。544は口径7.4cm、器高2.3cm、底径3.4cm、545は口径7.9cm、器高2.3cm、底径4.0cmである。共に、焼成は良好で灰色を呈し、底部は糸切り、見込みはナデ、その他は横ナデで調整される。東遠江産のものでⅢ期に位置づけられる。

546は小型の瓶類の体部上半と考えられる破片である。全貌はうかがえなかったが、内面には朱が付着する。

547は体部下半の一部が出土した同安窯系の青磁の碗で、Ｂ類に分類される。内面には櫛でジグザグ文が描かれ、外面にはヘラ状の施文具によって片彫り風の沈線が入れられている。

548は火打ち金、549は釘あるいは鏃と考えられる。

⑷　SX-1の出土遺物（図154－550～553）

550～553はSX-1の出土遺物である。550は山茶椀の椀、551は灰釉陶器の椀、552は山茶椀の小皿、553は白磁の碗である。552は完形で出土したが、その他は破片であった。いずれも焼成は良好であった。550と551は灰白色、552は灰色を呈する。調整を見ると、550は底部が糸切り、その他が横ナデ、高台にはスノコ痕がある。551は底部が糸切り、その他は横ナデである。552は底部が糸切り、見込みはナデ、その他は横ナデである。なお、550の底面には墨書で「三」と記されている。550と552は東遠江産の山茶椀で、550がⅡ期、552はⅠ期に位置づけられる。551は折戸53号窯式～東山72号窯式併行期に位置づけられる。

553は内面には見込みに浅い沈線、櫛で花文が描かれているようである。Ｖ類に分類される。

⑸　SF-9・26区の柱穴からの出土遺物（図155－554～556）

554はSH-18のP-2の南東に所在する柱穴から出土した山茶椀の椀である。底部の約１/２が残存し、高台径は6.0cmである、焼成は良好で灰白色を呈する。底部は糸切りの後にナデで調整が行われる。

555と556はSF-9から出土した山茶椀である。555は椀、556は小皿である。555は底部の約１/４が残存

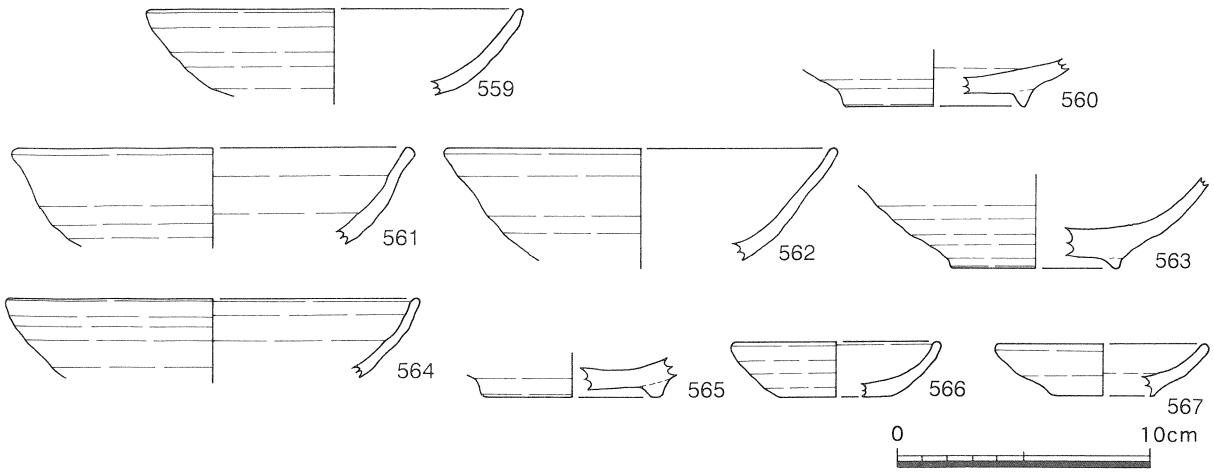


図156　SH-20・SH-21と周辺の柱穴の出土遺物

し、高台径は6.8cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈する。高台にはスノコ痕、見込みには重ね焼き痕を有する。556は口径7.9cm、底径4.2cmと推定され、器高は2.0cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。

以上の３点はいずれも東遠江産の山茶椀で、554はⅡ期、555と556はⅢ期に位置づけられる。

(6)　SD-17からの出土遺物（図155－557・558）

557と558はSD-17から出土した山茶椀の小皿である。557は口径8.1cm、器高2.1cm、底径3.8cm、558は口径7.1cm、器高2.3cm、底径3.5cmである。共に焼成は良好で557は灰色、558は灰白色を呈する。底部は糸切り、その他は横ナデによる調整が行われる。２点とも東遠江産の山茶椀で、Ⅲ期に位置づけられる。

(7)　SH-20・SH-21とその周辺の柱穴出土遺物（図156－559～567）

559と560はSH-20の柱穴から出土した山茶椀の椀である。559はSH-20のP-3から出土した。残存したのは体部から口縁部の一部で、口径は14.5cmと推定される。560はSH-20のP-1から出土した。底部のみの残存で、高台径は7.1cmである。共に、焼成は良好で、灰色を呈する。なお、559の体部内面から口縁部外面にかけて、自然釉が付着する

561・566・567はSH-21とその周囲の柱穴から出土した山茶椀である。561はP-6の西隣の柱穴から出土した椀である。残存したのは体部から口縁部にかけての一部で、口径は15.3cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈する。566と567はSH-21のP-2から出土した小皿である。566は全体の約１/５が残存し、口径は8.2cm、器高は2.2cm、底径は4.4cmと推定される。567は全体の１/４が残存し、口径8.4cm、器高2.1cm、底径3.8cmである。共に焼成は良好で灰色を呈する。

562～565はSH-22周辺の柱穴から出土した山茶椀の椀である。562はP-14東方の柱穴から、563はP-4の東隣の柱穴から、564はP-9南東の柱穴から、565はP-9北隣の柱穴から出土した。562は口径15.3cm、563は高台径6.5cm、564は口径16.2cm、565は高台径6.8cmとそれぞれ推定される。焼成はいずれも良好で、562と565は灰白色、563は灰色、564はオリーブ灰色を呈する。563は見込みには重ね焼き痕がある。以上の９点のうち、562・566は湖西・渥美産、その他は東遠江産の山茶椀で、Ⅱ期～Ⅲ期に位置づけられる。

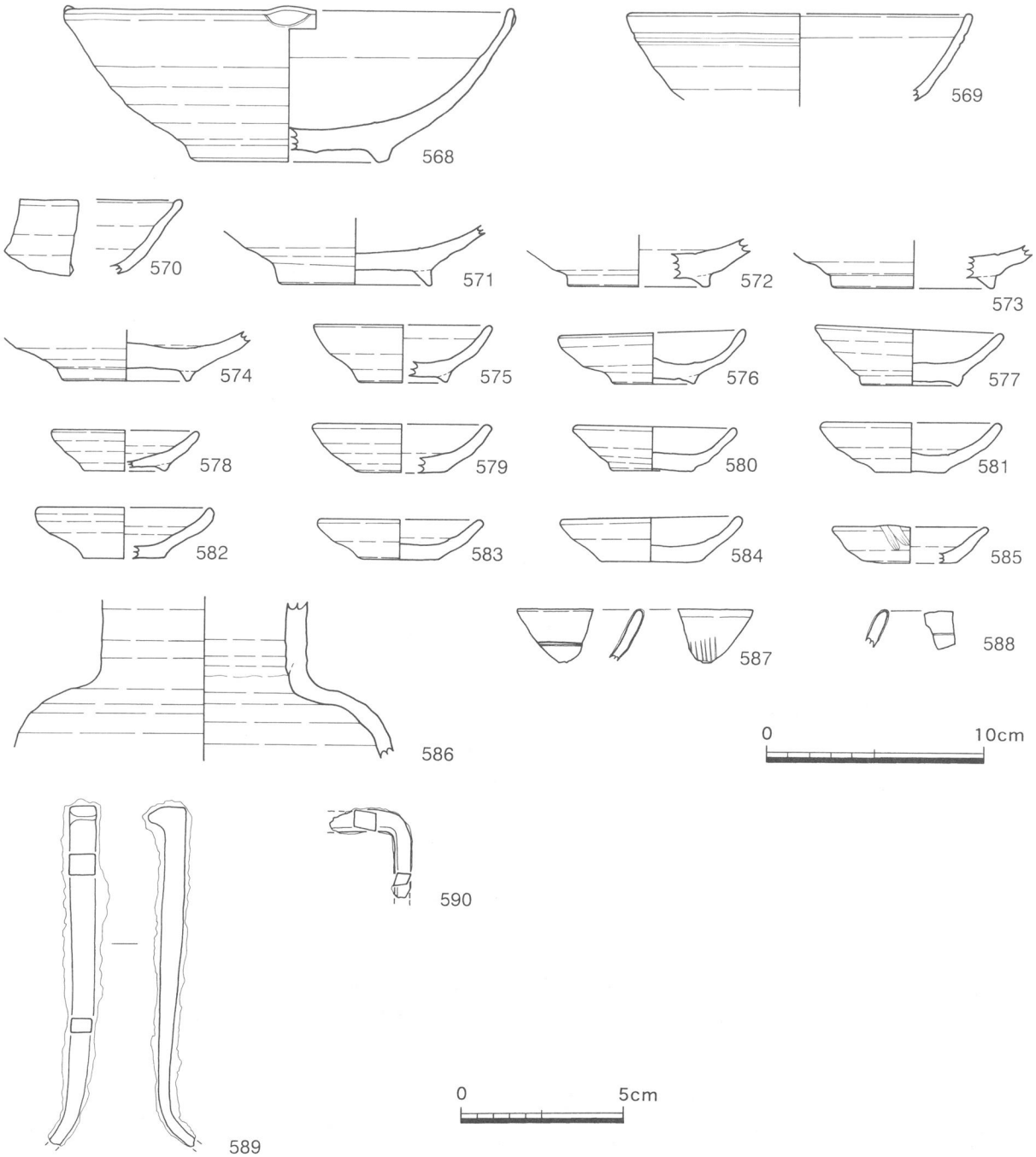


図157　26区表土の出土遺物

⑻　表土除去時の出土遺物

①　26区の出土遺物（図157－568～590）

568～590が26区東半部の表土除去時に出土した遺物である。568～574は山茶椀の椀である。569と570は体部から口縁部、571～574は底部のみの残存であった。唯一、全体の様子がうかがえた568は輪花椀で口径20.4cm、器高7.0cm、高台径8.2cmである。輪花は指押さえで形成される。569は口径15.6cmと推定される。571～574の高台径は5.5～7.0cmである。焼成はいずれも良好で、568・571・572・574は灰白色、569・573は灰色、570は黄灰色を呈する。571～574は見込みに重ね焼き痕を有する。調整は体部から口唇部にかけては横ナデ、底部は糸切りである。ただし、574の底部はナデによる最終調整が行われる。なお、571・573は高台にスノコ痕がある。

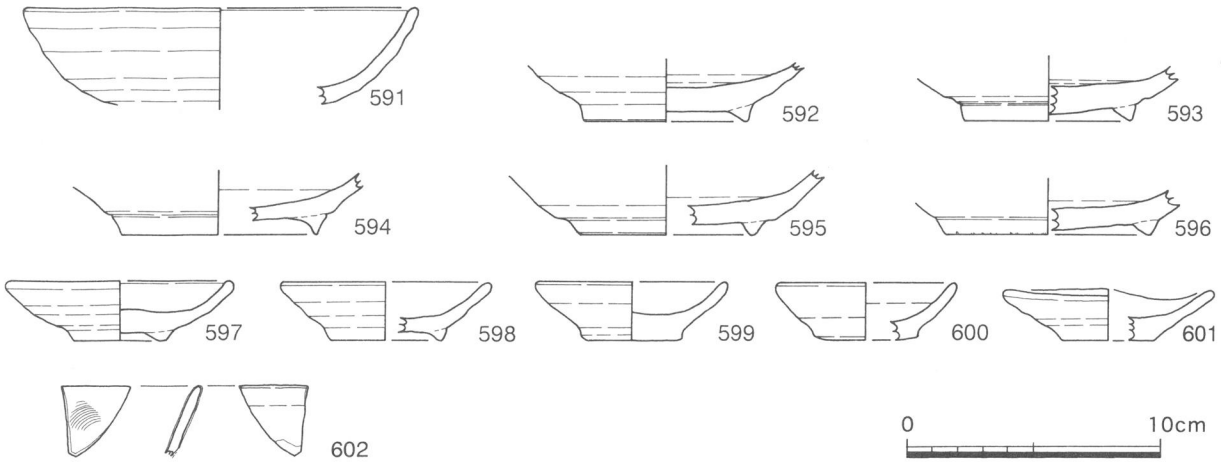


図158　４区表土の出土遺物

575～578は山茶椀の小椀である。口径は6.7～8.5cm、器高1.9～2.8cm、高台径3.5～4.4cmである。いずれも、焼成は良好で灰色を呈する。調整は体部から口唇部内外面と見込みは横ナデである点は共通する。底部の調整には若干の差異があり、576と577は糸切りの後にナデによる最終調整が行われる。なお、576は見込みに重ね焼き痕があり、自然釉も付着する。

519～585は山茶椀の小皿である。口径は7.0～8.2cm、器高1.7～2.4cm、底径3.2～4.4cmである。いずれも焼成は良好で580・585は灰白色、579・581・583・584は灰色、582は黄灰色を呈する。調整は底部が糸切り、その他は横ナデが行われる。なお、581の見込みには重ね焼き痕があり、581と585の内面と口縁部外面には自然釉が付着する。

以上の山茶椀は湖西・渥美産である585を除き、いずれも東遠江産のものである。568や小椀である575～578はⅠ期、571～573はⅡ期、その他はⅢ期に位置づけられる。

586は灰釉陶器の長頸瓶である。焼成は良好で灰白色を呈する。587は同案窯系の青磁碗でＢ類に分類される。588はⅤまたはⅧ類の白磁の碗である。ともに口縁部の一部が出土した。

589と590は鉄釘である。589は残存長10.6cm、幅0.4～0.8cm、厚さ0.3～0.6cmである。断面は長方形で、頭部の長さは1.2cmである。590は残存長2.8cm、幅0.4～0.6cm、厚さ0.4～0.7cmである。

②　４区の出土遺物（図158－591～602）

591～602が４区の表土除去時の出土遺物である。591～596は山茶椀の椀である。591は体部から口縁部の約１/６が残存し、口径は15.3cmと推定される。592～596は底部のみの残存で、高台径は6.4～8.0cmである。いずれも焼成は良好で、591～593は灰色、594・596は灰白色、595はオリーブ灰色を呈する。なお、595は見込みに重ね焼き痕がある。底部は糸切り、その他の部位は横ナデで調整される。594・595は高台にスノコ痕、596は籾殻痕が残る。

597と598は山茶椀の小椀である。597は口径8.1cm、器高2.4cm、高台径3.6cm、598は口径8.2cm、器高2.3cm、高台径4.3cmである。焼成は良好で共に、灰白色を呈する。底部はナデである。

599～601は山茶椀の小皿である。口径は6.9～8.3cm、器高1.6～2.3cm、底径3.6～4.1cmである。いずれも焼成は良好で599・601は灰白色、600は灰色を呈する。

以上の11点の山茶椀のうち、596は湖西・渥美産であるが、その他は東遠江産であった。このうち、597と598はⅠ期、592はⅡ期、その他はⅢ期に位置づけられる。

602は龍泉窯系の青磁碗で、口縁部の一部が出土した。Ａ３類に分類される。

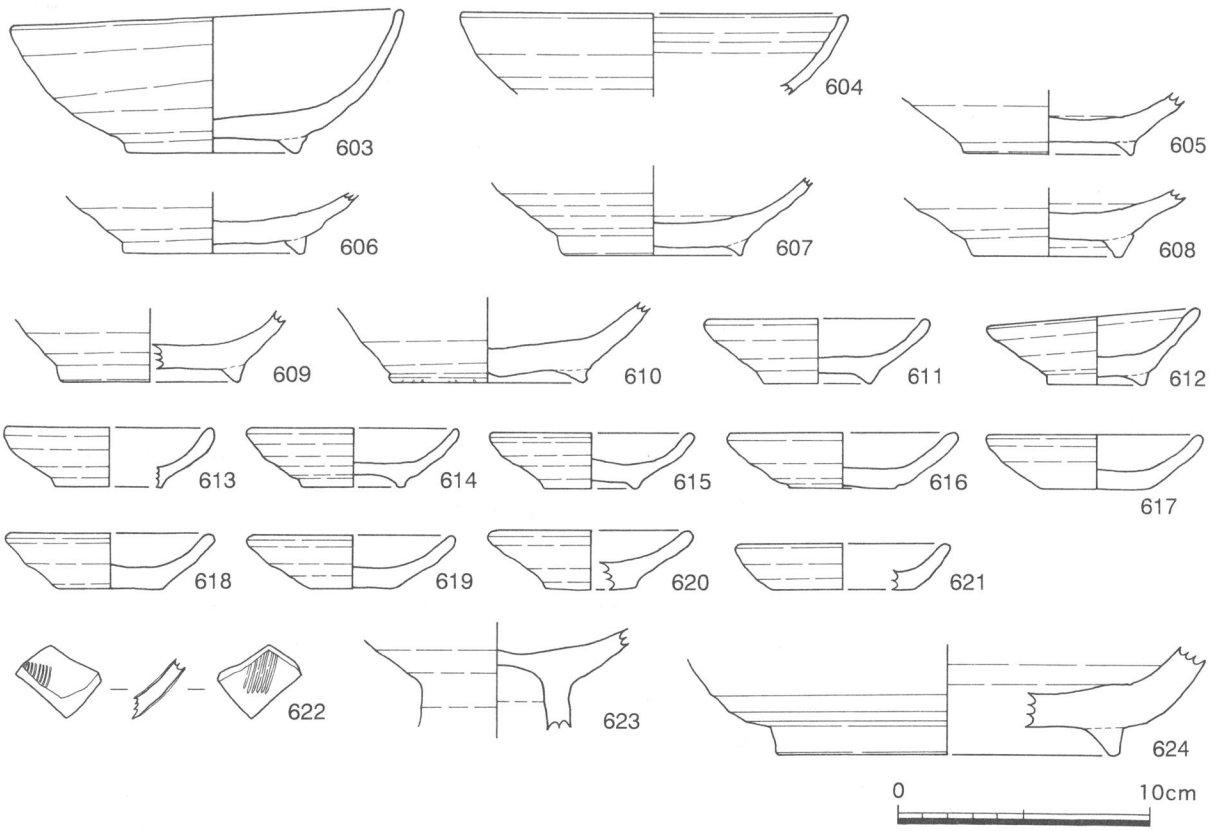


図159　54区表土と柱穴の出土遺物

③　54区の出土遺物（図159－603～624）

603～624は平成13年度に調査を実施した54区の東半から出土した遺物である。このうち、611はSA-11のP-2の柱穴から出土した遺物である。

603～610は山茶椀の椀である。全体の様子がうかがえたのは603のみである。603は口径15.3cm、器高5.7cm、高台径6.6cmである。604は口径15.2cmと推測される。605～610の高台径は5.8～7.5cmである。焼成はいずれも良好で、603・605・606・608は灰色、604は青灰色、607・609・610は灰白色を呈する。605・606・608は見込みに重ね焼き痕を有する。調整は体部から口唇部にかけての内外面が横ナデである点は全点共通している。底部は糸切りされるが、608はナデによる最終調整が行われる。見込みを見ると、603はナデであるが、その他は横ナデである。なお、605・607はスノコ痕、608・610は籾殻痕を高台に有する。603～609は東遠江産で、610は湖西・渥美産である。605～607・609はⅡ期、603・608・610はⅢ期に位置づけられる。

611～615は山茶椀の小椀である。口径7.9～8.6cm、器高2.2～2.6cm、高台径3.8～4.2cmである。５点とも焼成は良好で、611は黄灰色、612は灰褐色、613～615は灰色を呈する。底部は611がナデ、その他は糸切りである。見込みの調整は611と612・614・615がナデ、613は不明である。全点、体部から口唇部の内外面は横ナデである。いずれも東遠江で生産されたもので、Ⅰ期に位置づけられる。

616～621は山茶椀の小皿である。口径7.8～8.9cm、器高1.8～2.4cm、底径3.6～5.5cmである。調整を見ると、底部の糸切りと体部から口縁部にかけての横ナデは全点共通している。見込みの調整は616～620がナデ、621は横ナデである。いずれも焼成は良好で616～620は灰色、621は灰白色を呈する。621の口縁部には自然釉が付着する。616～620は東遠江産、621は湖西・渥美産である。いずれもⅢ期に位置づけられる。

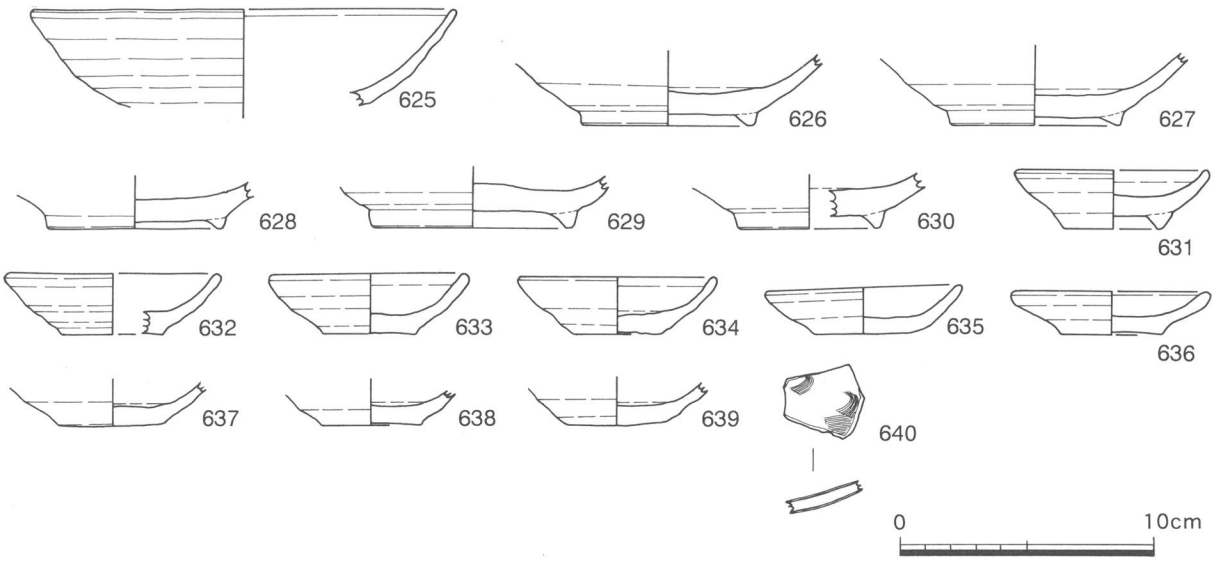


図160　3’区遺構検出面の出土遺物（上面）

622は同安窯系の青磁碗で、体部下半の一部が残存した。内面には櫛で花文が描かれるようである。外面には櫛書きの文様がある。Ｂ類に分類される。623は須恵器の高坏で脚部上半と坏部下半の約２/３が残存した。焼成は良好で灰白色を呈する。624は鉢の底部である。焼成は良好で灰色を呈する。見込みには重ね焼き痕を有する。

④　3’区遺構検出面（上面）の出土遺物（図160－625～640）

3’区は遺構面が二面確認できた。上面はSD-18・SF-14が機能していた時期、下面はSD-18・SF-14を構築する前の時期と考えられる。

625～630は山茶椀の椀である。625は体部から口縁部のみの残存で口径は16.6cmと推定される。焼成は良好で灰白色を呈する。626～630は底部のみの残欠であった。高台径は5.3～7.6cmである。626と628・629の高台にはスノコ痕がある。底部はいずれも糸切りされる。ただし、626は底部の中央のみナデが行われる。その他の部位は横ナデによる調整である。焼成はいずれも良好で626～628は灰色、629と630は灰白色を呈する。なお、628は見込みに重ね焼き痕を有する。６点とも東遠江産の山茶椀で、626～629はⅡ期、630はⅢ期に位置づけられる。

631は山茶椀の小椀、632～639は山茶椀の小皿である。631は口径7.4cm、器高2.3cm、高台径4.0cmである。調整は底部が糸切り、見込みがナデ、その他は横ナデである。632～639は口径7.4～8.2cm、器高1.7～2.4cm、底径3.2～4.2cmである。いずれも底部が糸切りである。見込みついては、633・635・636はナデ、その他の個体は横ナデである。焼成はいずれも良好で631・633・637～639は灰白色、632は灰色、634は青灰色、635と636は黄灰色を呈する。638は内面に自然釉が付着する。上記の９点のうち、635は湖西・渥美産であるが、その他は東遠江産のものである。631はⅠ期、632～635はⅡ期-２～Ⅲ期-１、636はⅢ期-２に位置づけられる。

640は白磁の碗で、体部の一部のみの出土である。内面には櫛による花文が確認できる。ⅤまたはⅦ類に分類できる。

なお、626・627・629～631・634・637は、接合する破片がSR-1の覆土からも出土した。

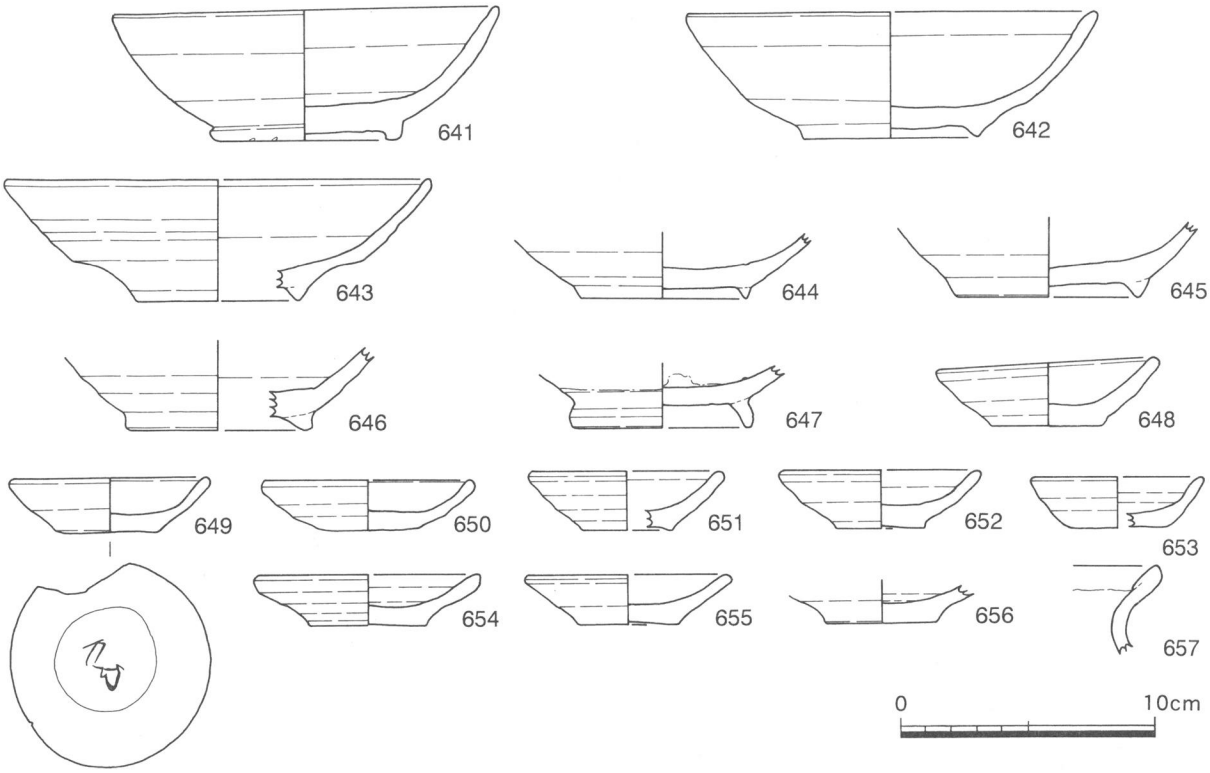


図161　3'区遺構検出面の出土遺物（下面）

⑤　3'区遺構検出面（下面）の出土遺物（図161－641～657）

641～657が3'区下面の出土遺物である。641～646は山茶椀の椀である。口径15.1～17.1cm、器高4.8～5.2cm、高台径6.5～7.3cmである。ただし、643は焼き歪みにより口径が大きくなっていると考えられる。調整を見ると、底部は糸切り、体部から口縁部については横ナデであることは全点共通する。見込みについては641ではナデであるが、その他は横ナデである。なお、641は籾殻痕、644はスノコ痕が高台に残る。焼成は良好で、641と644・646は灰白色、642と643は灰色、645は灰黄色を呈する。641は体部内面から口縁部外面にかけ自然釉が付着する。644と646は見込みに重ね焼き痕がある。641はⅡ期、642～645はⅢ期に位置づけられる東遠江産のもので、646はⅡ期に位置づけられる湖西・渥美産のものである。

647は底部のみの残存であるが、灰釉陶器の椀である。焼成は良好で灰白色を呈し、ツケガケで施釉される。底部は糸切りである。高台にはスノコ痕が確認でき、見込みには重ね焼き痕がある。東遠江で生産された灰釉陶器で、折戸53号窯式併行期に位置づけられる。

648～656は山茶椀の小皿で、口径6.7～8.6cm、器高2.0～2.7cm、底径3.6～4.4cmである。焼成はいずれも良好で648は褐灰色、649・651・652・654・655は灰白色、650・653はにぶい黄燈色、656は灰色を呈する。いずれも底部は糸切りである。見込みは、648・650・651・653・654ではナデ、その他は横ナデである。いずれも東遠江産の山茶椀で、Ⅲ期に位置づけられる。

657は伊勢鍋である。残存したのは口縁部のごく一部であった。周囲から、この個体と同一個体と考えられる細片が出土したが、接合することはできなかった。

なお、647・649・650・652・655・657はSR-1の覆土から接合する破片が出土した。

⑥　47区・53区の出土遺物（図162－658～688）

53区では調査区の全体から遺物が出土したが、3'区や54区と接する北西部から特に多くの遺物が出土した。657は調査区の北東、659～667・669～688は調査区の北西、668は調査区の南西部から出土した。

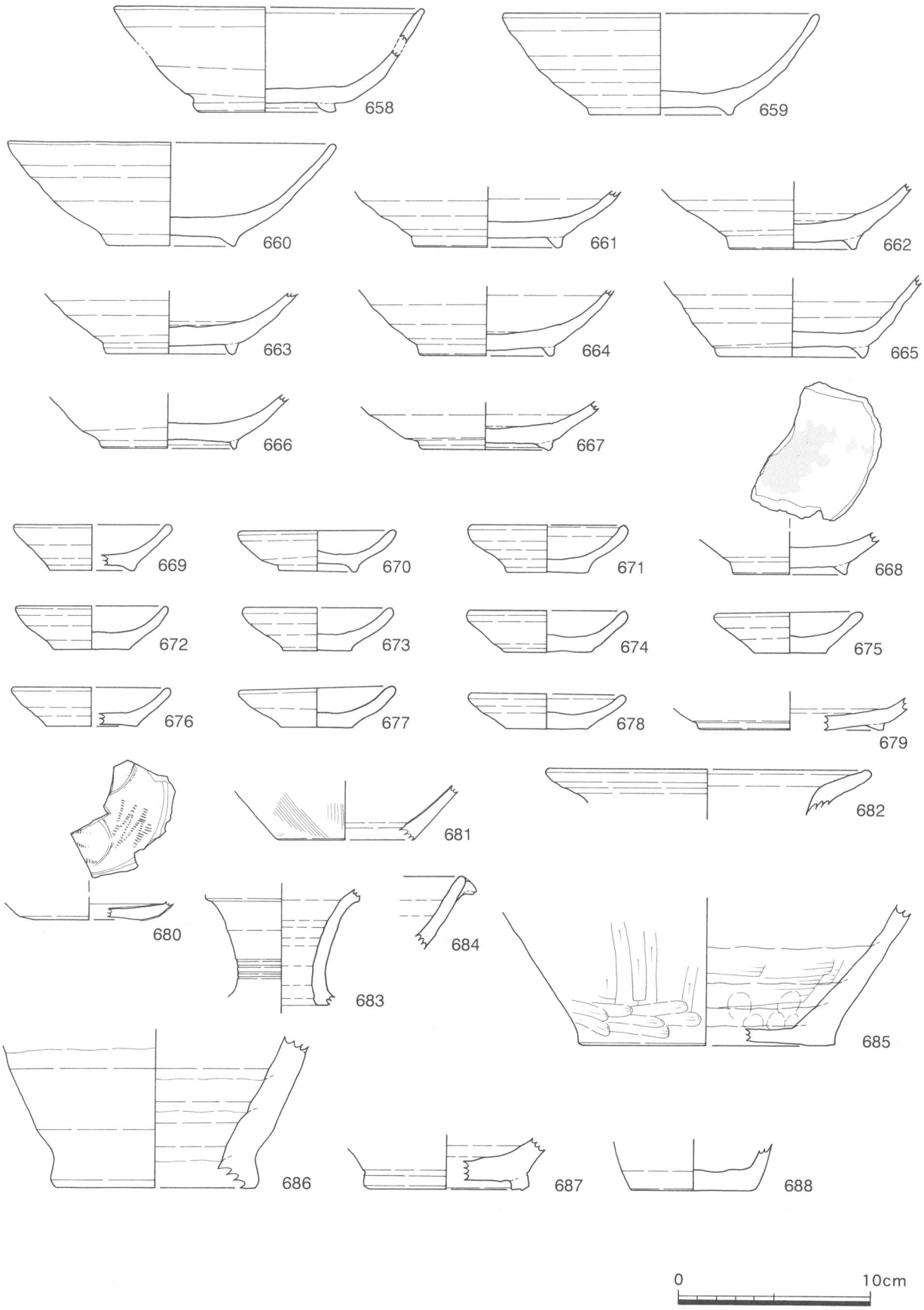


図162　53区表土の出土遺物

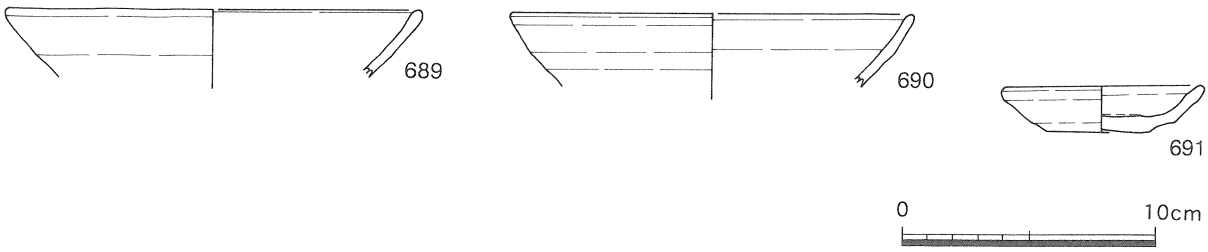


図163　SD-32の出土遺物

658～668は山茶椀の椀である。661～668は底部のみの出土であった。口径15.9～16.4cm、器高5.3～5.5cm、高台径5.7～7.4cmである。いずれも底部は糸切りであるが、658と662～664の底部の中央部が糸切り後に円状のナデが行われている。見込みの調整は659と660はナデであるが、その他の個体は横ナデである。なお、658と661～663の見込みには一条の沈線が巡る。高台をみると、658と662は籾殻痕が、661・663～668にはスノコが確認できる。いずれも、焼成は良好で658・664は灰白色、659～663・666～668は灰色、665はにぶい黄燈色を呈する。なお、661・666・667は見込みに重ね焼き痕がある。

以上の11点は東遠江で生産された山茶椀で、658・661～666・668はⅡ期、659・667はⅢ期に位置づけられる。なお、668の見込みには墨痕があり、表面は摩滅している。転用硯と考えられる。

669と670は山茶椀の小椀である。669は口径8.0cm、器高2.4cm、高台径4.4cm、670はほぼ完形で出土し、口径7.9cm、器高2.2.cm、高台径4.0cmである。ともに焼成は良好で669は黄灰色、670は灰色を呈する。調整は両者、底部が糸切り、見込みがナデ、その他が横ナデである。２点とも東遠江で生産されたもので、Ⅰ期に位置づけられる。

671～678は山茶椀の小皿である。口径7.4～8.1cm、器高1.9～2.5cm、底径3.6～4.8cmである。いずれも、焼成は良好で671・673・675～677は灰色、672・674は黄灰色、678は灰白色を呈する。調整は、底部が糸切り、見込みは671～673・675～678がナデ、674は横ナデ、体部から口唇部の内外面は横ナデである。Ⅱ期～Ⅲ期に位置づけられる東遠江産の山茶椀である。

679は須恵器の坏身である。残存したのは底部一部のみであった。焼成は良好で灰白色を呈し、高台径は9.4cmと推定される。

680と681は青磁である。680は同安窯系青磁の皿で、底部の一部の出土に留まった。焼成は良好で、黄色みを帯びた緑色の釉が施釉される。内面にはヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文がある。外面底部には施釉されない。681は同安窯のB類に分類される青磁の碗である。内面には施釉されるが、外面は施釉されない。外面には櫛書文がある。

682と683・686～688は瓶類の破片である。682は口縁部のみの残存で、口径は16.5cmと推測される。683は頸部の一部が残存した灰釉陶器の長頸瓶である。焼成は良好で青灰色を呈する。686～688は底部のみの残存であった。684は片口鉢の口縁部である。注口付近の極一部の出土に留まった。685は甕の底部である。底面には籾殻痕が残る。

⑻SD-32出土遺物（図163－689～691）

689～691はSD-32から出土した山茶椀である。SD-32はSR-1の南東部に所在する東西方向の溝である。688と689は椀、690は小皿である。688は口径16.1cm、689は口径15.8cmとそれぞれ推定される。共に焼成は良好で、灰色を呈する。690は完形品で口径7.7cm、器高1.9cm、底径3.7cmであった。焼成は良好で灰白色を呈する。底部は糸切り、その他は横ナデで調整される。３点とも東遠江系の山茶椀でⅢ期のものと考えられる。

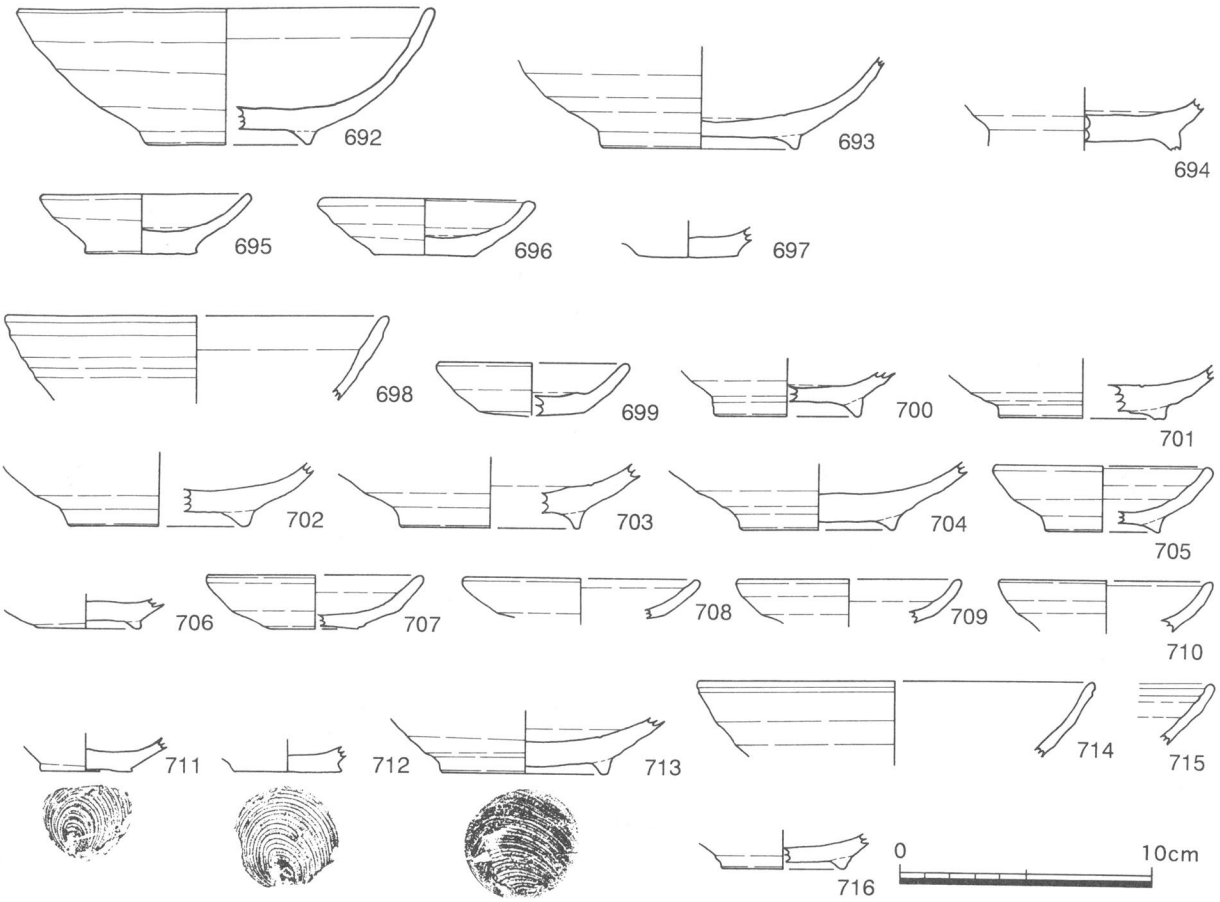


図164　SD-22～24・30の出土遺物

５．南西部からの出土遺物

(1)　SD-22～24・30の出土遺物

SD-22出土遺物（図164－692～697・713）　692～697・713がSD-22の出土遺物である。692と693は山茶椀の椀、694は灰釉陶器の椀、695～697は山茶椀の小皿である。692は口径16.4cm、器高5.4cm、高台径6.2cm、693は高台径7.5cm、713は高台径6.2cmである。いずれも、焼成は良好で692・693は灰色、713は青灰色を呈し、３点とも見込みには重ね焼き痕がある。底部は692がナデ、その他は糸切りである。692と693の高台にはスノコ痕がある。

694の灰釉陶器は底部のみの残存で、高台径7.2cmである。焼成はやや悪く、灰白色を呈する。底部は糸切り、その他は横ナデによる調整である。なお、高台の接地部は摩滅し欠損していた。

695～697の小皿は口径8.1～8.1cm、器高2.3～2.4cm、底径3.8～4.0cmである。焼成はいずれも良好で695は灰黄色、696と697は灰色を呈する。696は重ね焼き痕を有する。

SD-22から出土した上記の６点は全て東遠江で生産されたもので、694は詳細な時期を把握できないが、折戸53号窯式併行期以降と考えられる。693・713はⅡ期-２、692と695～697はⅢ期に位置づけられる。

SD-24出土遺物（図164－698・699）　698と699はSD-24から出土した山茶椀である。698は椀で、体部から口縁部にかけての約１/６が残存した。口径は14.9cmと推定される。699は小皿で、全体の約１/２が残存し、口径7.4cm、器高2.1cm、底径4.2cmである。ともに焼成は良好で698は灰色、699は灰白色を呈する。ともに東遠江産で、Ⅲ期に位置づけられる。

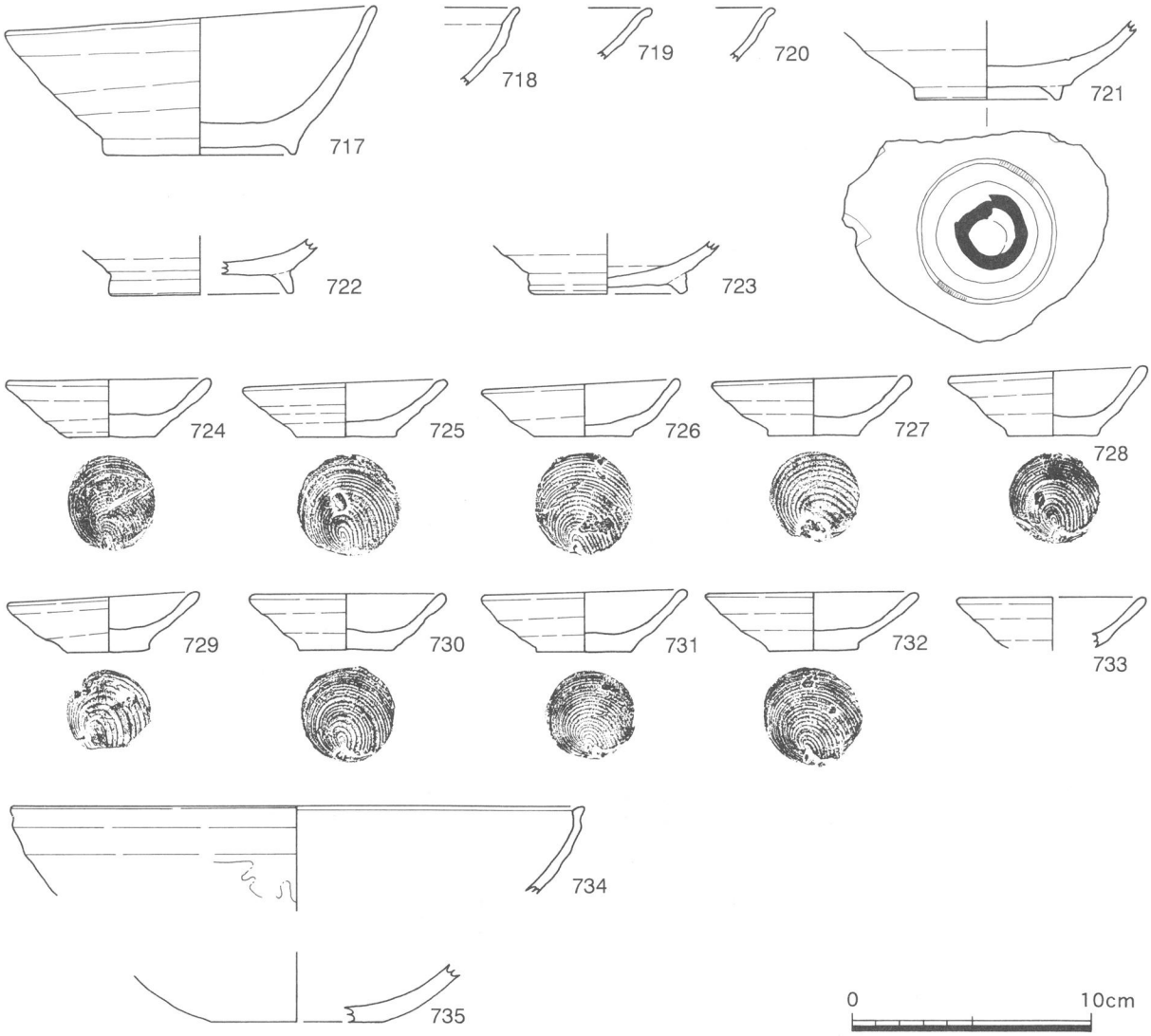


図165　SD-28の出土遺物

SD-23出土遺物（図164－700～712）　700～712はSD-23から出土した遺物である。704～706、708・712は遺構底面からの出土であった。700は灰釉陶器の椀で、底部の約２/３が出土した。高台径は5.5cmと推定される。焼成は良好で灰白色を呈する。東山72号窯式に併行する時期に位置づけられ、東遠江で生産されたものである。

701～712は山茶椀である。701～704は椀で、いずれも底部のみの残存であった。高台径は5.8～6.9cmいずれも焼成は良好で701と703は灰色、702は青灰色、704は灰白色を呈する。なお、701は重ね焼き痕が見込みに確認でき、704は体部内面に自然釉が付着する。調整はいずれも底部が糸切り、体部内外面と見込みは横ナデである。701と703・704は高台にスノコ痕を有する。

705と706は小椀である。705は全体の約２/５の残存で、口径8.4cm、器高2.6cm、高台径4.5cmと推定される。706は底部のみの残存で、高台径は4.0cmである。共に焼成は良好で705は灰色を呈し、内面に自然釉が付着する。706は灰白色を呈する。調整は底部が糸切り、その他は横ナデである。

707～712は小皿である。708～710は口縁部のみ、711と712は底部のみの残存であった。口径は8.4～9.1cm、器高2.1cm、底径2.6～4.1cmである。いずれも焼成は良好で、707・708・710は灰色、709・711・712は灰白色を呈する。707は口縁部外面に、711は内面に自然釉が付着する。711は見込みに重ね焼き痕も確認できる。調整は底部が糸切り、その他は横ナデである。

701～712はいずれも東遠江産で、705と706がⅠ期、その他はⅡ期-２～Ⅲ期-１に位置づけられる。

SD-30出土遺物（図164－714～716）　714～716がSD-30から出土した山茶椀である。714と715は椀で、口縁部から体部の一部が残存した。714は口径15.6cmと推定される。716は小椀で、底部のみの残存であった。高台径は4.7cmである。いずれも、焼成は良好で、714と716は灰白色、715は青灰色を呈する。この３点は東遠江産の山茶椀で、716はⅠ期、714はⅢ期に位置づけられる。

⑵　SD-28の出土遺物（図165－717～735）

SD-28の出土遺物は717～735である。724～730の小皿は一箇所から集中して出土した（図87）。

717と721は山茶椀の椀である。717は全体の約３/４が残存し、口径15.3cm、器高6.2cm、高台径8.0cmである。721は底部のみの残存で、高台径5.8cmである。共に焼成は良好で717は灰黄色、721は灰白色を呈する。721は見込みに重ね焼き痕がある。調整は底部が糸切り、体部内外面が横ナデである点は共通するが、見込みが717はナデ、721は横ナデで調整される点は異なる。なお、ともに高台にはスノコ痕を有する。両者とも東遠江産の山茶椀でⅡ期に位置づけられる。721の底面には墨書が明白に残り、「○」状の記号が記される。

718～720・722・723は灰釉陶器の椀である。718～720は口縁部の一部、722と723は底部のみの出土である。いずれも焼成は良好で灰白色を呈する。718と719は灰釉が施釉される。722と723は高台径が7.2cmと6.1cmで、底部は糸切りされている。いずれも東遠江で生産されたもので、折戸53号窯式～東山72号窯式併行期に位置づけられる。

724～733は山茶椀の小皿である。口径7.8～8.6cm、器高2.4～2.9cm、底径3.6～4.2cmである。焼成はいずれも良好で、724～732は灰色、733は青灰色を呈する。724の口縁部内外面には自然釉が付着する。調整は底部が糸切り、体部から口唇部にかけては横ナデ、見込みはナデである。上記の10点はいずれも東遠江産の山茶椀でⅢ期に位置づけられる。

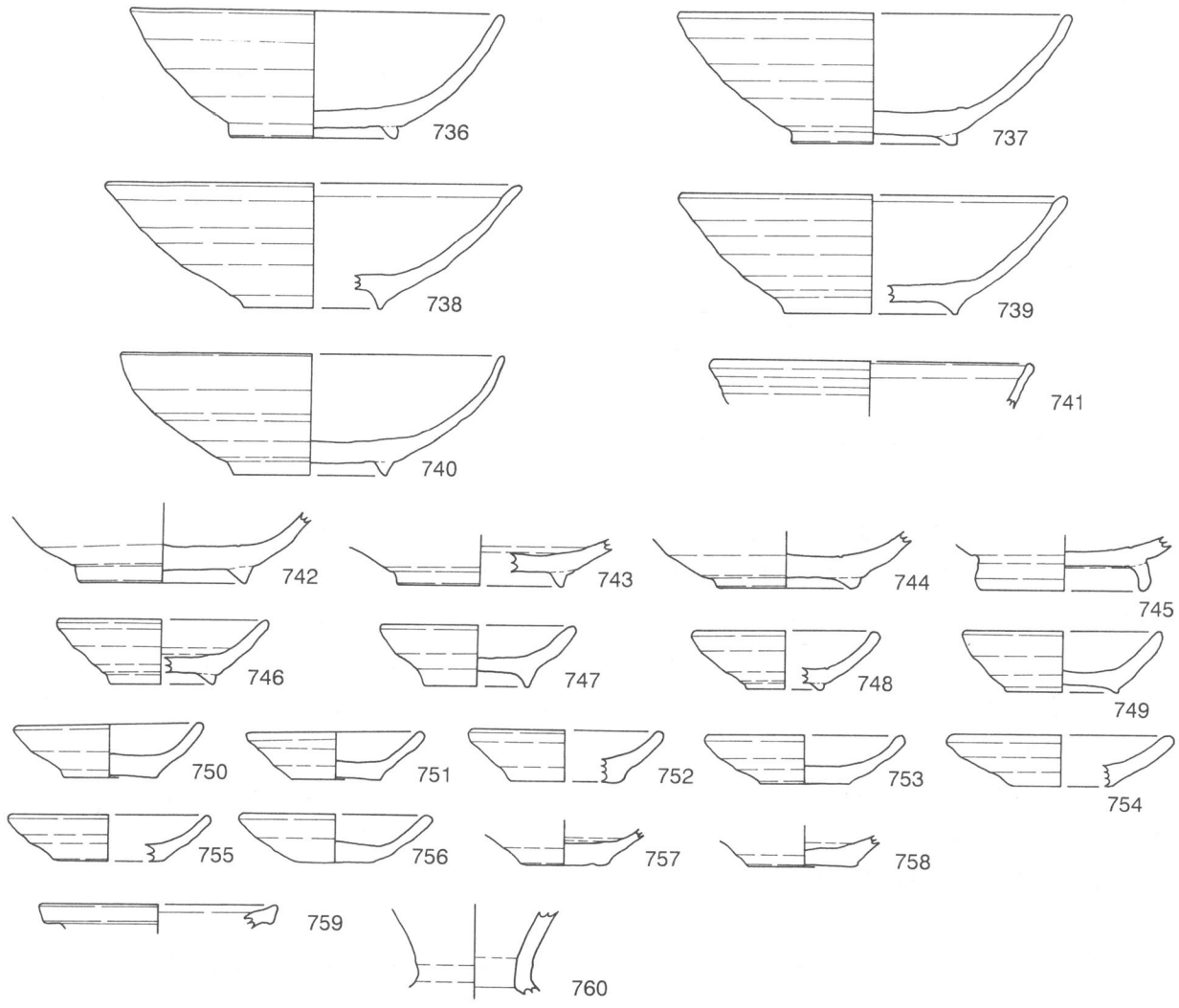
734・735は灰釉陶器の瓦鉢で、胎土や灰釉の付着状況から同一個体と考えられる。口径は24cm前後、器高は９cm前後と推測される。焼成は良好で灰白色を呈する。内面と外面には灰釉が施釉される。

⑶　SD-29の出土遺物（図166－736～766）

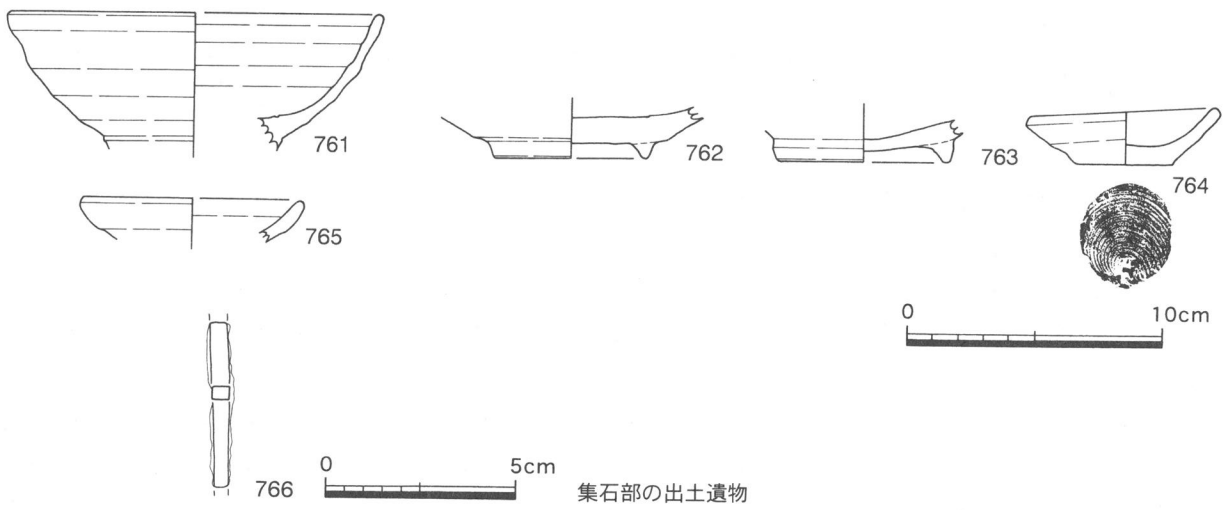
736～766がSD-29から出土した遺物である。このうち、761～766は東端の集石部からの出土である。

736～744は山茶椀の椀である。741は口縁部のみ、742～744は底部のみの残存であった。口径は736～740が15.2～17.1cm、741は13.1cmとやや小振りである。器高4.9～5.7cm、高台径5.3～7.2cmである。焼成は743がやや悪い以外は、いずれも良好である。色調は736～738・742が灰色、739はにぶい黄燈色、740・741・743・744は灰白色を呈する。なお、737は見込みに重ね焼き痕がある。調整をみると、底部は糸切り、体部から口唇部にかけての内外面は横ナデである点は全点共通する。見込みは736～740がナデ、741～744は横ナデで調整される。736～738・740はスノコ痕、739は籾殻痕を高台に有する。いずれも東遠江産の山茶椀で、736・737・743はⅡ期、738～740・742・744はⅢ期に位置づけられる。

745は灰釉陶器の椀で、底部の約１/３が残存した。高台径は6.4cmと推定される。焼成は良好で灰黄色を呈する。見込みには重ね焼き痕があり、底部はナデによる調整が行われる。東遠江産の灰釉陶器で折戸53号窯式併行期に位置づけられる。



集石部以外の出土遺物



集石部の出土遺物

図166　SD-29の出土遺物

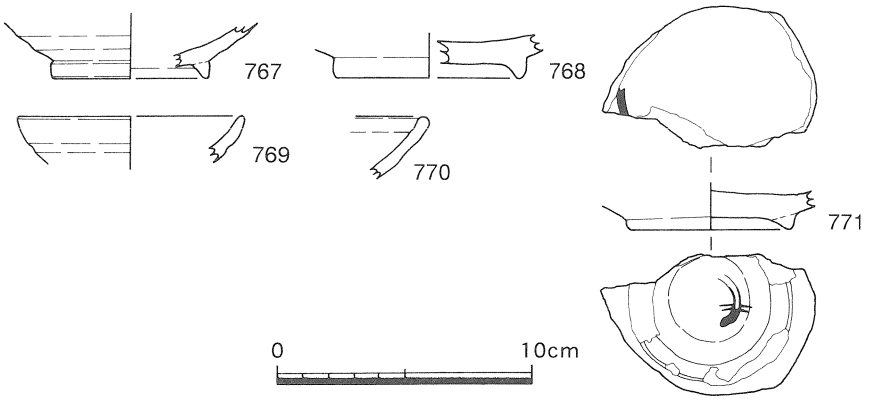


図167　SH-31・SH-34・SH-35の柱穴とSH-37周辺の柱穴出土遺物

746～749は山茶椀の小椀である。口径7.8～8.6cm、器高2.5～2.67cm、高台径4.0～4.4cmである。焼成はいずれも良好で、746・747・749は灰白色、748は灰色を呈する。746・747は内面に自然釉が付着し、748の見込みには重ね焼き痕がある。底部は746と747がナデである。747・749の見込みはナデである。いずれも東遠江産のもので、Ⅰ期に位置づけられる。

750～758は山茶椀の小皿で、750は完形で出土し、757と758は底部のみの残存であった。口径は7.1～8.8cm、器高1.6～2.3cm、底径3.0～4.7cmである。いずれも焼成は良好で750はオリーブ灰色、751・755は灰色、752・754は灰黄色、753・756～758は灰白色を呈する。752は外面に、754は内面に自然釉が付着する。見込みの調整については、750・751・753・756はナデであるが、その他は横ナデである。いずれも東遠江産の山茶椀で、Ⅱ期～Ⅲ期に位置づけられる。

759と760は灰釉陶器の長頸瓶の口縁部と頸部と考えられる個体である。共に焼成は良好で灰白色を呈する。759は口径9.7cmと推定される。断定はできないがこの２点は同一個体である可能性がある。

761～766はSD-29の南東端部にある集石部から出土した遺物である。761と762は山茶椀の椀で、761は体部から口唇部、762は底部のみの残存であった。761は口径14.6cmと推定され、762は高台径5.9cmである。ともに焼成は良好で761は灰白色、762は青灰色を呈する。共に、見込みには重ね焼き痕がある。両者とも東遠江産の山茶椀でⅢ期に位置づけられる。

763は灰釉陶器の椀である。底部のみの出土で、高台径は6.3cmと推定される。焼成は良好で灰白色を呈する。底部はナデによる調整が行われている。東遠江で生産された灰釉陶器で、折戸53号窯式併行期に位置づけられる。

764は山茶椀の小皿、765は小椀あるいは小皿と考えられる。764は完形で出土し、口径7.2cm、器高2.3cm、底径3.8cmである。765は口径8.4cmと推定される。共に焼成は良好で灰色を呈する。なお、764の内面には自然釉が付着し、見込みの調整はナデである。

766は鉄釘と考えられる。残存長は4.4cmで、断面は長方形を呈し、幅0.4cm、厚さ0.4cmである。

⑷　掘立柱建物跡と周辺の柱穴出土遺物

SH-31出土の遺物（図167－767）　767はSH-31のP-11から出土した灰釉陶器の椀で、底部の約１/６が残存した。高台径6.0cmは推定される。焼成は良好で灰色を呈する。見込みには重ね焼き痕が確認できる。東遠江で生産されたもので、東山72号窯式に併行する時期と考えられる。

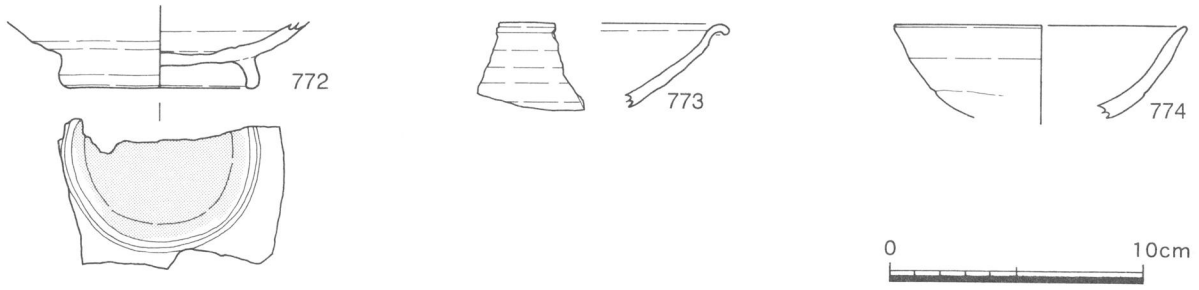


図168　SH-38・SH-39の柱穴とSH-43周辺の柱穴出土遺物

SH-34の出土遺物（図167－768・769）　768と769はSH-34の柱穴から出土した遺物である。768はP-7から出土した灰釉陶器で、底部のみの残存であった。高台径は7.1cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈する。769はP-6から出土した山茶椀の小皿である。残存したのは口縁部から体部にかけての約１/９で、残存高は1.8cm、口径は8.8cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈する。共に、東遠江産で、368は東山72号窯式に併行する時期、369はⅡ期以前と考えられる。

SH-35の出土遺物（図167－771）　771はP-4から出土した山茶椀の椀である。底部のみの残存で、高台径は6.1cmである。焼成は良好で灰白色を呈し、見込みには重ね焼き痕がある。底部と見込みには墨書らしき痕跡があるが、判読はできない。この山茶椀は東遠江産で、Ⅱ期に位置づけられる。

SH-37周辺の柱穴の出土遺物（図167－770）　770はSH-37のP-6の南に所在する柱穴から出土した山茶椀である。口縁部の一部のみの残存であった。焼成は良好で灰白色を呈する。

SH-38の出土遺物（図168－772）　772はP-4から出土した灰釉陶器である。残存したのは底部の約１/２で、高台径は7.0cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。見込みには重ね焼き痕が確認できる。底面はナデによる調整が行われているほか、墨痕が確認でき、表面の摩滅が著しい。そのため、転用硯であると考えられる。折戸53号窯式併行期に位置づけられる。

SH-39の出土遺物（図168－773）　773はP-9から出土した灰釉陶器の椀である。残存したのは口縁部の一部のみである。焼成は良好で灰色を呈する。

SH-43周辺の柱穴の出土遺物（図168－774）　774はSH-42のP-1の北西に所在する柱穴から出土した土師器の坏身である。残存したのは体部から口縁部の約１/５で、残存高は3.6cm、口径は11.6cmと推定される。焼成は良好で、浅黄橙色を呈する。調整は横ナデによる調整が行われているようであるが、表面の風化が著しく断定はできない。

⑸　SB-1の出土遺物（図169－775～786）

775～786がSB-1の出土遺物である。775～781は灰釉陶器の椀である。775と776は全貌が把握できたが、777は口縁部、778から781は底部のみの残存である。775は口径13.5cm、器高4.2cm、高台径6.4cm、776は口径12.6cm、器高3.8cm、高台径5.5cm、777は口径14.1cmである。778～781は高台径5.9～8.4cmである。いずれも焼成は良好で、775・777～779・781は灰白色、776・780は灰色を呈する。778は見込みに重ね焼き痕があり、灰釉がツケガケで施釉される。底部を見ると、775は糸切り、776はナデ、その他は残存せず、不明である。これらはいずれも東遠江で生産されたものである。時期は折戸53号窯式併行期とその前後と考えられる。

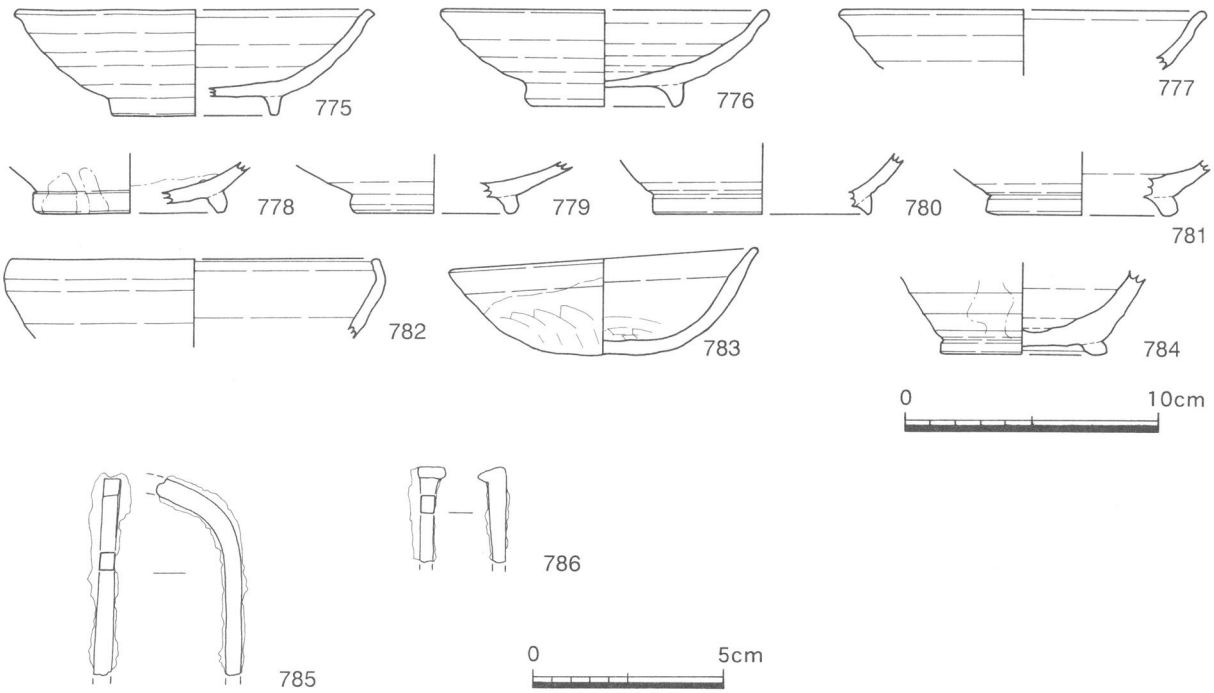


図169　SB-1の出土遺物

782は遺構覆土から出土した瓦鉢である。口縁部の極一部が残存し、口径は14.4cmと推定される。器径は15.0cm前後であろう。焼成は良好で灰白色を呈する。

783は遺構底面から出土した土師器の坏身である。ほぼ完形に復元でき、器高4.2cm、口径12.0cmである。焼成は良好で浅黄橙色を呈する。調整は口縁部が横ナデ、その他はヘラナデである。口縁部には煤が付着し、内面の一部には赤彩が施されていたようである。

784は灰釉陶器の長頸瓶と考えられる。残存したのは底部のみで、高台径は6.9cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈する。外面には灰釉が施釉されていたようである。

785と786は鉄釘である。785は残存長5.2cmで、断面は長方形を呈し、幅0.4～0.5cm、厚さ0.4～0.5cmである。786は長方形の断面を呈し、残存長2.5cm、幅0.3～0.7cm、厚さ0.4～0.8cmである。

⑹　SB-2の出土遺物（図170－787～792）

787～792がSB-2から出土した遺物である。このうち、787はSB-2内の南東隅にある方形の土坑底面から出土した。790はSB-2の覆土から、その他はSB-2の遺構底面からの出土であった。

787～791はいずれも灰釉陶器である。787は全体の２/３、788は全体の１/３、789は体部から口縁部にかけて、790は口縁部の一部、791は底部のみの残存であった。口径は12.7～15.7cm、器高は4.0～4.1cm、高台径は5.7～6.3cmである。焼成はいずれも良好で、787・788・790・791は灰白色、789は灰色を呈する。なお、787と791は見込みに重ね焼き痕がある。789は内外面ともに灰釉が施釉される。施釉方法については判然としないが、刷毛塗りのようである。底部は788がナデ、その他の固体は糸切りである。なお、787は底面には「虫」と記した墨書が認められる。いずれも東遠江産の灰釉陶器で、788と789・791は折戸53号窯式に併行する時期、787はこれより新しい時期の物と考えられる。

792は土師器の坏身で、全体の約２/３が残存した。口径は12.0cmと推定され、器高は4.1cmである。焼成は良好でにぶい、橙色を呈する。調整については、表面の風化が著しく不明である。

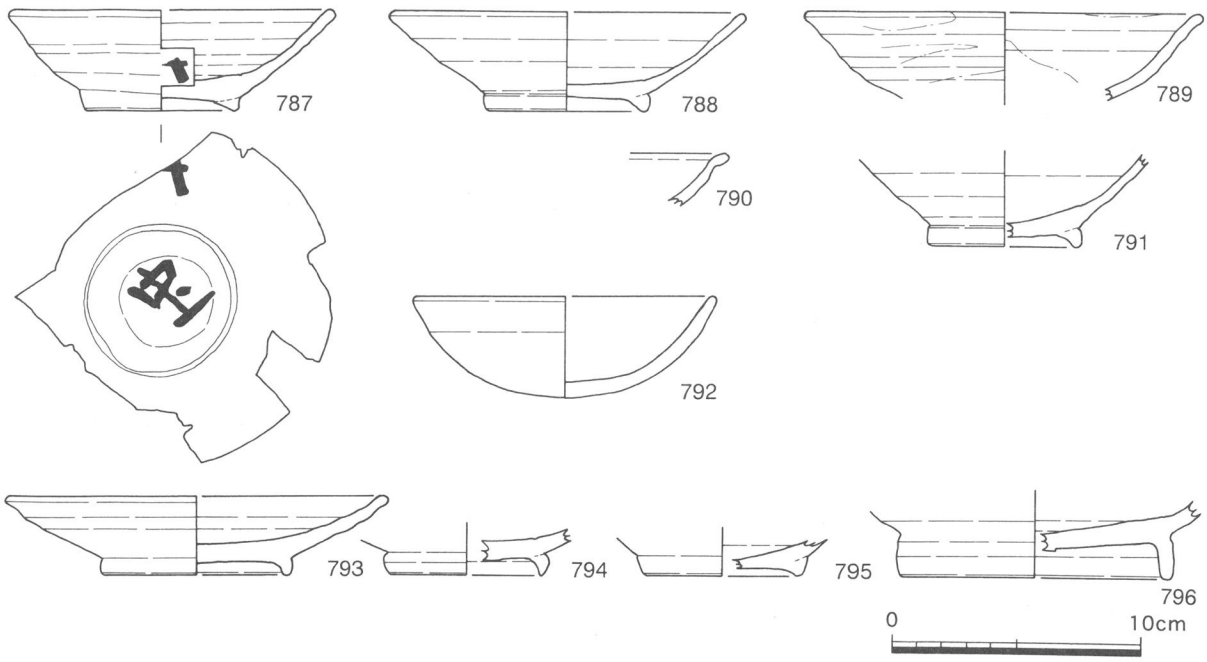


図170　SB-2・SB-3の出土遺物

⑺　SB-3の出土遺物（図170－793～796）

793～796がSB-3から出土した遺物である。いずれも、灰釉陶器である。793は皿で、全体の約１/２が残存した。器高は3.2cm、口径15.0cm、高台径7.2cmである。焼成は良好で灰黄色を呈する。底部は糸切りされる。見込みには判然としないが、墨痕らしきものがある。内面は使い込まれ摩滅している。

794と795は椀である。共に底部のみの残存で、高台径は794が6.0cm、795が9.0cmである。794は焼成が良好で、灰白色を呈する。795は焼成が悪く軟質で表面の風化が著しい。色調はにぶい黄燈色を呈する。底部は795では糸切り、794はナデによる調整が行われている。

796は底部のみが残存した大椀である。高台径は10.7cmと推定され、焼成は良好で灰白色を呈する。底部には糸切り痕が確認でき、見込みには重ね焼き痕がある。

以上の４点は東遠江産で、794は折戸53号窯式に併行する時期、その他はこれと同時期かやや遅れる時期に位置づけられる。

⑻　SF-16～SF-20（地鎮土坑１～５）の出土遺物

SF-16～SF-20は地鎮祭祀に関わると考えられる土坑である。この５基の土坑のうち、遺物はSF-17、SF-18、SF-19、SF-20の４基から出土した。

①　SF-17の出土遺物（図171－797）

797がSF-17から出土した遺物である。SF-17からはこの他に土師器の坏身が土坑の西寄りから出土している。ただし、風化が著しく図示し得なかった。

797は土坑の中央部からの出土した灰釉陶器の長頸瓶である。頸部と体部が離れて出土したが、完形に復原できた。器高は24.9cm、口径12.8cm、胴部最大径16.4cm、高台径9.2cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。頸部内外面と体部外面には灰釉が施釉される。東遠江産のものと考えられる（註10）。

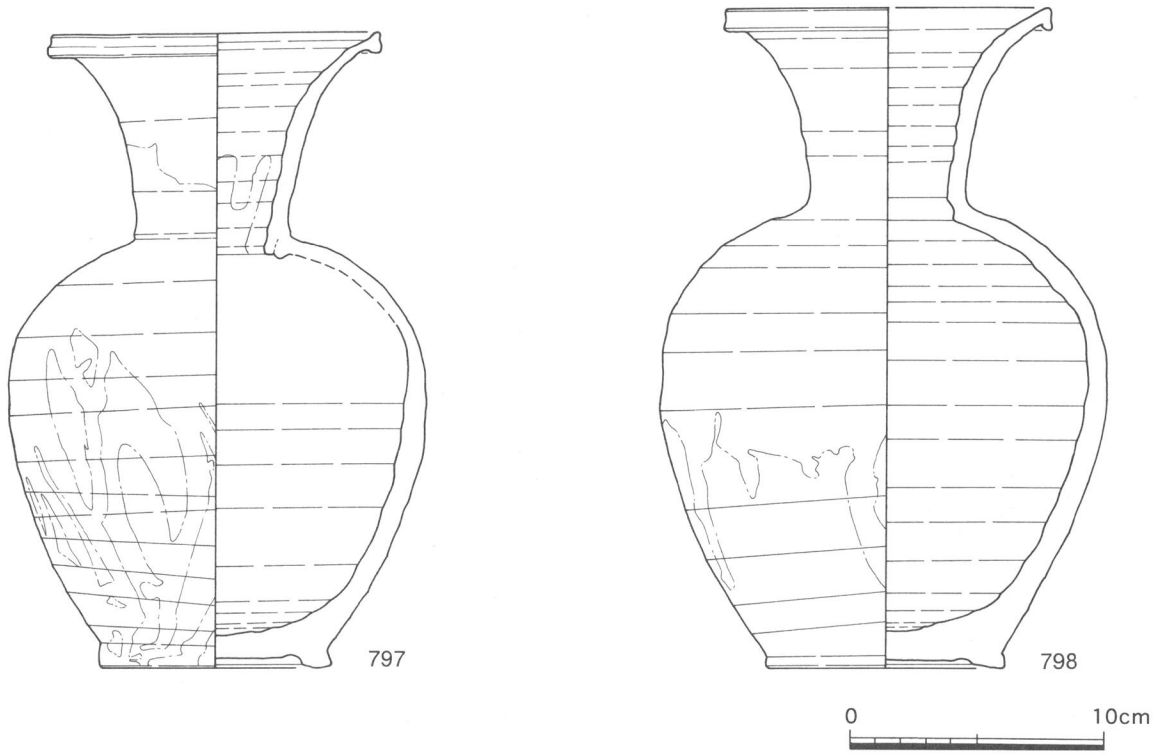


図171　SF-17・SF-18の出土遺物

②　SF-18の出土遺物（図171－798）

SF-18からは798が出土した。798は土坑の中央から横倒しの状態で出土した。地鎮祭祀に関わると考えられる土坑群発見の契機となった遺物でもある。

798は灰釉陶器の長頸瓶である。ただし、頸部から口縁部については、表土除去時に出土した。器高は26.2cmと推定され、口径は12.7cm、体部最大径は17.5cm、高台径は10.5cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。外面には灰釉が施釉され、発色も良好である。東遠江産であると考えられる。

③　SF-19の出土遺物（図172－799～802・804～807）

SF-19からは799の灰釉陶器と、800～802・804～807の土師器坏身７点が出土した。このうち、７点の土師器は遺構検出段階に、覆土の上部から出土した。799は土坑底面からの出土である。

799は土坑の中央部に据えられていた長頸瓶である。ほぼ完形で出土した。器高18.2cm、口径11.6cm、胴部最大径12.7cm、高台径7.0cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。体部には灰釉が施釉されるが、発色は不良である。東遠江産と考えられる。

800～802・804～807は土師器の坏身である。いずれも風化が著しく、残存したのは全体の１/６～１/２程度である。口径12.0～13.5cm、器高3.5～4.8cmである。７点とも焼成は良好で、浅黄橙色を呈する。調整については判然としないが、口縁部はいずれも横ナデの様である。806と807は体部下半の外面に指頭痕が確認できる。その他の個体の体部はヘラナデのようである。なお、800は外面口縁部から内面にかけて、801と802・806は内面に赤彩がされている。また、805も内外面に赤彩されているようであるが、表面が風化しているため判然としない。800と801の赤彩部分は明赤褐色、802は橙色である。804の外面には煤が付着する。

この土坑では、上記以外に１～３個体程度の土師器坏身片が出土したが、いずれも風化が著しく復元や図化することはできなかった。

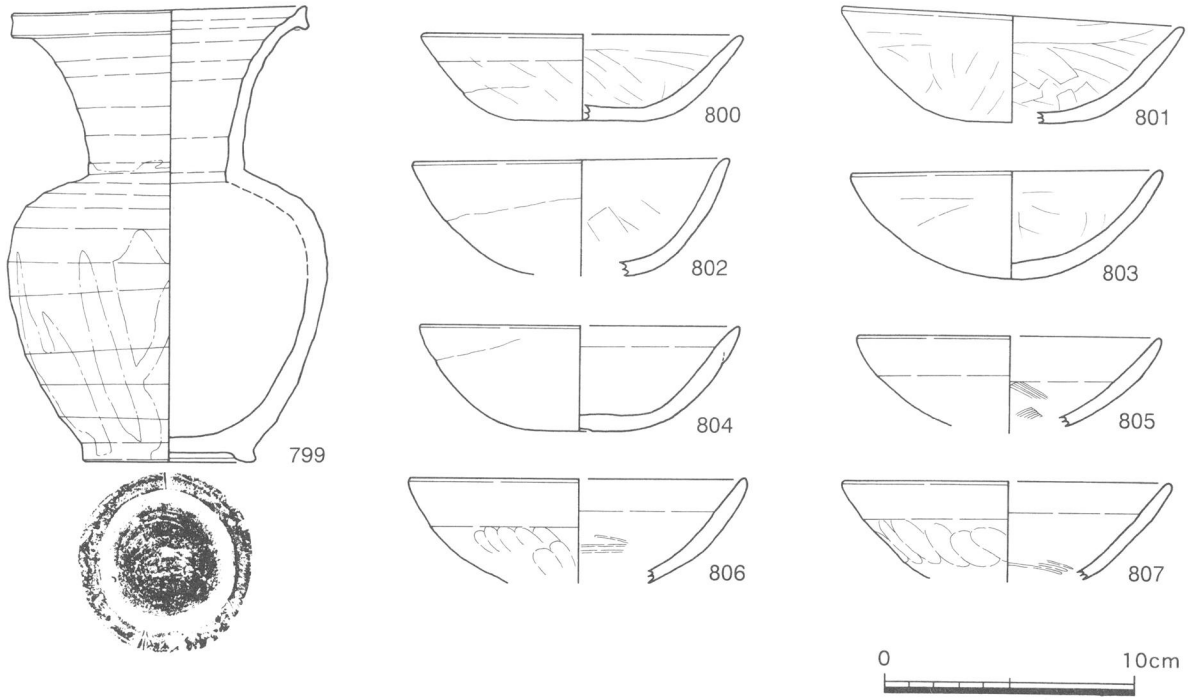


図172　SF-19・SF-20の出土遺物

④　SF-20の出土遺物（図172－803）

SF-20からは803が出土した。803は土師器の坏身で、遺構底面からの出土である。残存したのは全体の約２/３で、器高は4.9cm、口径は12.3cmである。焼成は良好で浅黄橙色を呈する。表面の風化が著しく調整については断定できないが、体部はヘラナデ、口縁部は横ナデのようである。なお、内面は赤彩され、明赤褐色を呈する。

⑼　SF-21・SF-22の出土遺物

SF-21とSF-22は重複する遺構であり、SF-21が古く、SF-22が新しい。

①　SF-21の出土遺物（図173－808～815）

SF-21からは808～815が出土した。808～812は灰釉陶器の椀で、808～810は体部から口縁部、811と812は底部のみの残存であった。口径は13.4～14.8cm、高台径は811が6.1cm、812が7.9cmである。いずれも焼成は良好で、810が灰色を呈し、残りの４点は灰白色を呈する。なお、812は見込みに重ね焼き痕がある。809は内外面には炭化物が付着し、灯明皿として使われたようである。811の底部はナデである。いずれも東遠江で生産された灰釉陶器で折戸53号窯式に併行する時期と考えられる。

813と814は山茶椀の椀である。共に底部のみの残存であった。813は高台径6.4cmで、高台にはスノコ痕が確認できる。814は底径6.0cmである。いずれも焼成は良好で灰白色を呈する。この２点は東遠江産の山茶椀で、813がⅠ期～Ⅱ期、814がⅢ期-２に位置づけられる。この２点はSF-21からの出土であるが、SF-22の掘削に伴いSF-21に紛れ込んだものと考えられる。

815は灰釉陶器の托で、脚部のみの残存であった。残存高は4.8cmである。焼成は良好でにぶい黄橙色を呈する。

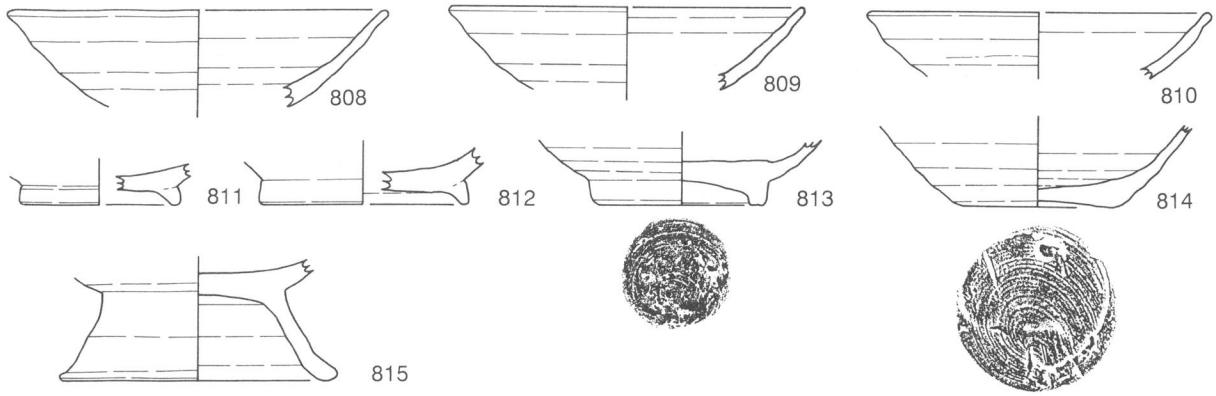


図173　SF-21・SF-22の出土遺物

② SF-22の出土遺物（図173－816～821）

SF-22からは816～821が出土した。このうち、816～819は遺構底面からまとまって出土し、元位置を留めるものと考えられる。

816～819は山茶椀である。816は椀で、ほぼ完形に復元できた。口径16.2cm、高台径6.2cm、器高5.5cmである。焼成は良好で灰色を呈する。底部は糸切りである。高台には籾殻痕が確認できる。なお、底部には墨書らしきものがうかがえるが、確証を得るものでは無く、その可能性を指摘するに留める。

817～819は小皿である。いずれもほぼ完形で出土した。口径は7.3～7.8cm、器高2.2～2.3cm、底径3.5～4.1cmである。３点とも焼成は良好で、817は灰白色、818と819は灰色を呈する。

820と821は覆土から出土した灰釉陶器の椀である。底部のみの残存で、820は高台径5.3cm、821は高台径6.2cmである。共に焼成は良好で灰白色を呈する。821の底部はナデによる調整が行われる。

以上の灰釉陶器、山茶椀は共に東遠江産のものである。816～819はⅢ期－１に位置づけられる。820と821は折戸53号窯式～東山72号窯式に併行する時期と考えられる。なお、820と821はSF-21からの混入と考えられる。

⑽　表土除去時の出土遺物

① 46区表土の出土遺物（図174－822～844）

822～829は灰釉陶器の椀である。822～827・829は底部のみ、828は口縁部の一部の出土に留まる。高台径は5.4～8.2cmである。いずれも焼成は良好で822～826・828・829は灰白色、827は灰色を呈する。823は見込みに重ね焼き痕がある。底部の調整をみると、822と823・825がナデ、824と826・828は糸切りである、829はヘラケズリである。これらの灰釉陶器はいずれも東遠江産と考えられる。このうち、822・829は黒笹14号窯式併行期、823・824・826折戸53号窯式併行期、その他は折戸53号窯式～東山72号窯式

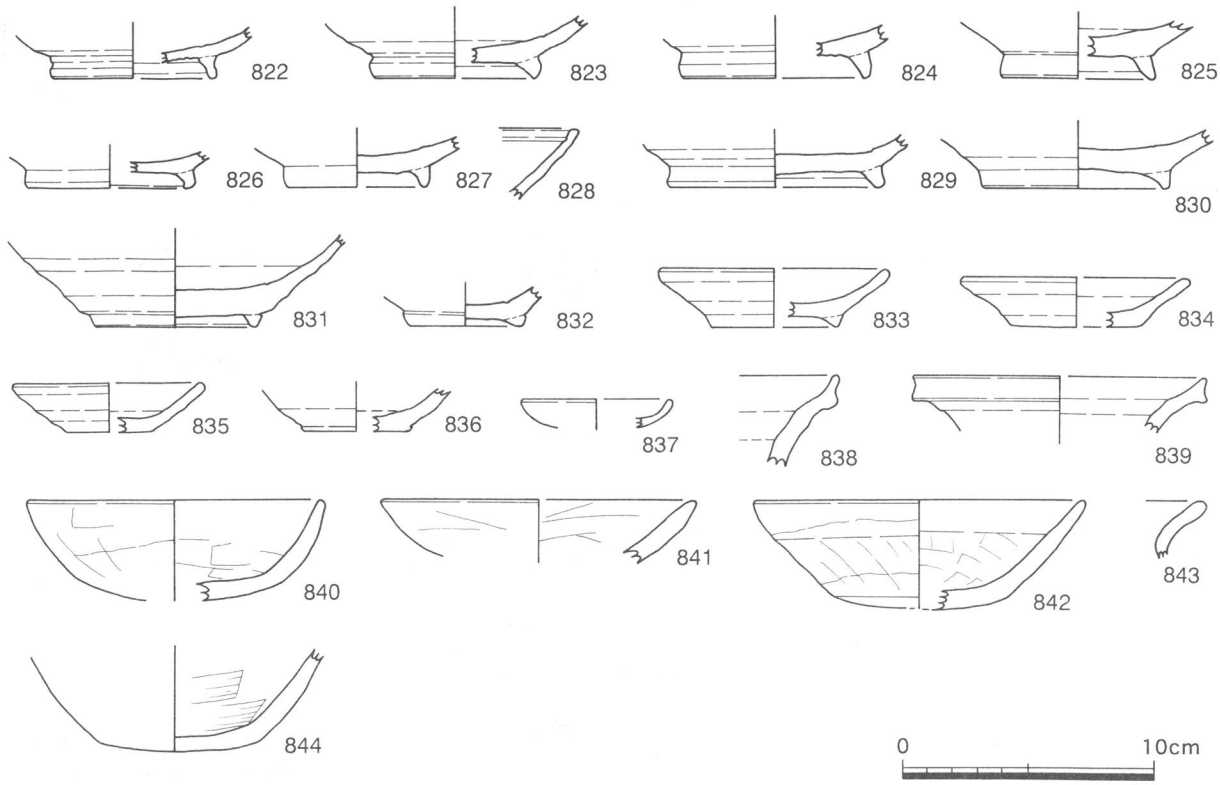


図174　46区表土の出土遺物

併行期に位置づけられる。

830と831は山茶椀の椀である。共に底部のみの残存であった。高台径は830が7.1cm、831が6.2cmである。両者、焼成は良好で830はにぶい橙色、831は灰色を呈し、見込みには重ね焼き痕がある。調整をみると、底部は糸切り、その他の部位は横ナデである。また、共に、高台にはスノコ痕を有する。２点とも、東遠江産の山茶椀でⅡ期～Ⅲ期に位置づけられる。

832と833は山茶椀の小椀である。832は高台径4.3cm、832は口径8.0cm、器高2.3cm、高台径5.0cmである。共に焼成は良好で832は灰色、833は青灰色を呈する。832の底部はナデ、833が糸切りである。Ⅰ期に位置づけられる東遠江産のものである。

834～837は山茶椀の小皿である。口径は7.4～8.8cm、器高2.0cm、底径3.4～5.3cmである。いずれも焼成は良好で834と837は灰白色、835と836は灰色を呈する。834の内面から口縁部外面にかけて自然釉が付着する。834～836は東遠江産の山茶椀でⅢ期に位置づけられる。838と839は灰釉陶器の長頸瓶で、共に口縁部の一部が出土したのみである。焼成は良好で灰白色を呈する。

840～844は土師器である。このうち、840～842は坏身で、口径は11.5～13.0cm、器高は4.0～4.5cmである。３点とも焼成は良好であるが、表面は風化している。色調は840が灰白色、841と842はにぶい黄橙色である。調整は口縁部が横ナデ、体部はヘラナデのようであるが、表面が風化しているため、判然としない。なお、840は内面と口縁部外面、842は内面が赤彩される。また、840の口縁部内外面、842の内外面の所々には煤が付着する。

843は甕の口縁部、844は甕の底部と考えられる破片である。843の焼成はやや悪く、浅黄燈色を呈する。844は焼成良好で、にぶい黄燈色を呈する。調整については、843は表面の風化が著しく不明である。844は内面が板ナデであるが、外面は風化が著しく不明である。

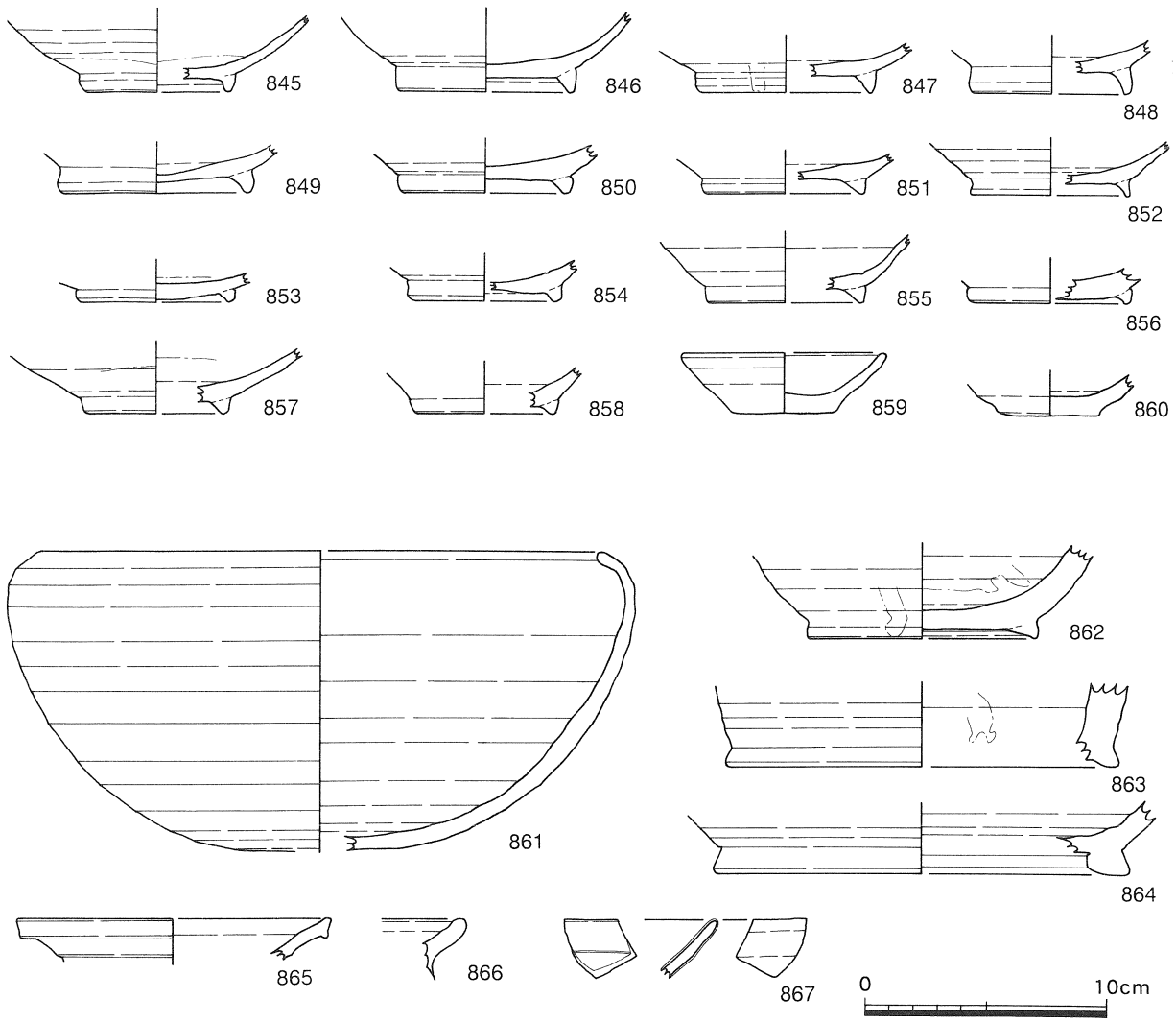


図175　34区表土の出土遺物

②　34区表土の出土遺物（図175－845～867）

845～867が34区の表土から出土した遺物である。845～856は灰釉陶器の椀である。いずれも底部が残存したのみで、高台径は5.6～7.5cmである。いずれも焼成は良好で、845・847～849・851～855は灰白色、846と850・856は灰色を呈する。845・849・850・854・856は見込みに重ね焼き痕がある。845は灰釉が刷毛塗りで内外面に、853は体部内面と外面の高台まで灰釉が施釉される。底部は845・848・849・854が糸切り、850～852はナデ、853はヘラケズリ、846は高台にスノコ痕がある。853は黒笹90号窯式併行期、その他は折戸53号窯式～東山72号窯式併行期に位置づけられる。

857と858は山茶椀の椀である。共に底部のみの残存で、857は高台径6.2cm、858は高台径5.5cmである。857は焼成良好で灰白色、858は焼成がやや悪く、軟質で、にぶい橙色を呈する。

859と860は山茶椀の小皿である。859は口径6.4cm、器高2.5cm、底径4.4cm、860は底径4.2cmである。共に焼成は良好で、灰色を呈する。859は内面に自然釉が付着し、860は見込みに重ね焼き痕がある。857～860はいずれも東遠江産で、Ⅱ期～Ⅲ期に位置づけられる。

861はSF-21・SF-22付近から出土した灰釉陶器の瓦鉢である。全体の約１/５程度の残存であったが、全容をうかがうことはできた。器高12.4cm、口径23.3cm、最大径26.0cmと推定される。焼成は良好で灰白色を呈する。外面の口縁部から体部上半にかけて灰釉が施釉される。

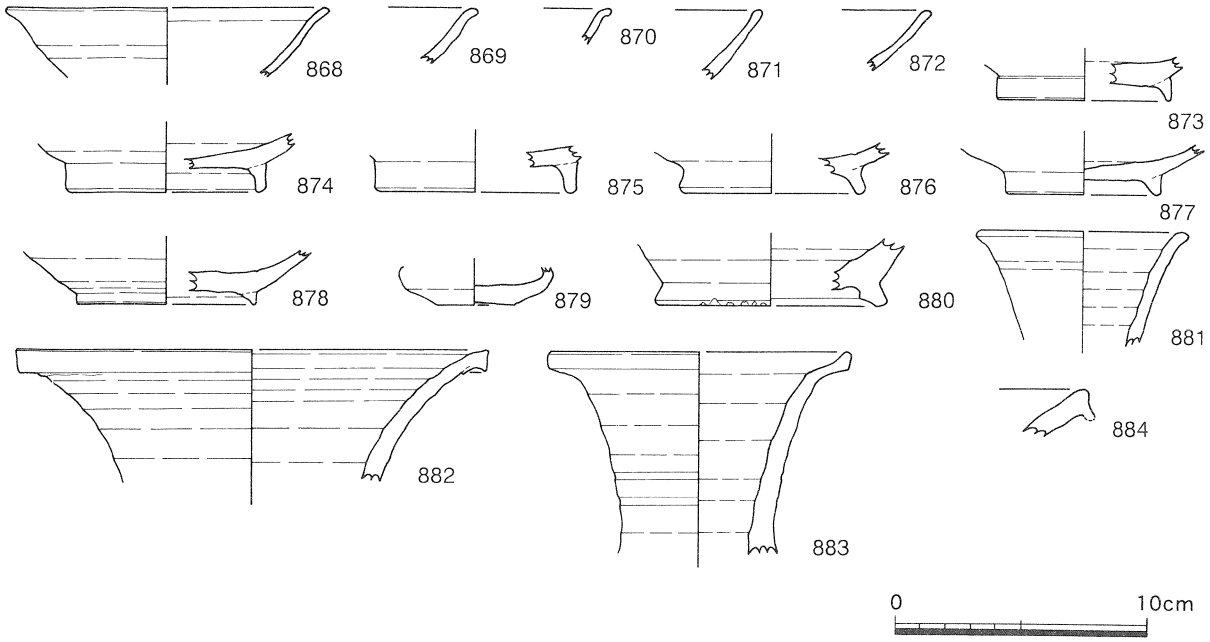


図176　15区南西部の出土遺物

862～865は灰釉陶器の瓶類である。862～864は底部のみ、865は口縁部のみの残存であった。862は底部の約１/３が残存し、高台径は9.4cmと推定される。863は高台径16.3cm、865は口径12.9cmと推定される。いずれも焼成は良好で862は灰褐色、863は灰色、864はにぶい橙色、865は灰白色を呈する。862の内外面には灰釉が施釉される。なお、865はSF-17～19から出土した長径瓶とは明らかに異なる個体であり、SF-16あるいはSF-20に伴うものの可能性もある。862は865と異なる個体と考えられ、これも土坑群に伴う遺物である可能性を持つ。

866は土師器の甕で、残存したのは口縁部の極一部である。焼成はややわるく、表面の風化が著しい。そのため、調整については不明である。色調は橙色を呈する。

867は口縁部の一部のみの残存であるが、Ⅲ類に分類される白磁の皿である。釉は灰色を帯びた白色である。

③　15区南西部の出土遺物（図176－868～884）

868～884が15区の南西部から出土した遺物である。868～876は灰釉陶器である。868～872は口縁部のみの残存で、868は口径12.6cmと推定される。873～876は底部のみの残存で、高台径は6.7～7.4cmである。底部は873がナデ、874と875は糸切りである。いずれも焼成は良好で868・872・874・876は灰白色、869が灰色、870はにぶい黄燈色、871は黄灰色、873は浅黄色を、875は赤灰色呈する。876は見込みに重ね焼き痕があり、872はツケガケで灰釉が施釉される。いずれも東遠江産で折戸53号窯式併行期以降に位置づけられる。

877と878は山茶椀の椀である。共に底部のみの残存で、877は高台径5.9cm、878は7.0cmである。２点とも焼成は良好で877は灰黄色、878は灰色を呈する。878は見込みに重ね焼き痕がある。共に、東遠江産でⅡ期に位置づけられる。

879の灰釉陶器は底部のみの残存であるが、体部が折り曲げられている様子が確認でき、耳皿の可能性がある。焼成は良好で灰色を呈する。

880～883は長頸瓶である。880は灰釉陶器で底部の約１/10が残存した。焼成は良好で、灰白色を呈し、

内面には自然釉が付着する。881は頸部から口縁部にかけての約１/５が残存し、残存高4.6cm、口径は7.9cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈する。882は頸部から口縁部の約１/10が残存し、残存高は5.2cm、口径は18.6cmである。焼成は良好で灰色を呈する。内面には自然釉が付着する。883は口縁部から頸部にかけての約１/２が残存した。残存高は8.0cm、口径は11.7cmと推定される。頸部は２条の沈線を有する。焼成は良好で灰白色を呈する。884は甕の口縁部と考えられる細片である。焼成は良好で、黄灰色を呈する。

６．南側中央部の出土遺物

(1)　SD-31の出土遺物（図177・178－885～928）

885～928がSD-31から出土した遺物である。885～903は山茶椀の椀である。このうち、885～888は全貌がうかがえたが、889は体部から口縁部のみ、890～902は底部のみの残存であった。口径15.9～16.6cm、器高5.2～6.0cm、高台径6.2～7.6cmである。いずれも焼成は良好で885と886・897・901はにぶい黄燈色、887・888・890・894・896・899・902・903は灰色、889・892・893は灰白色、891・895は灰黄色、898は灰黄褐色、900は黄灰色を呈する。888と900は見込みに重ね焼き痕を有する。889は口縁部の内外面に自然釉が付着する。897は高台に籾殻痕が確認できる。885・887～896・898～899・900～903は東遠江産で、885はⅠ期、887～896・898～899はⅢ期、900～903はⅡ期に位置づけられる。886は知多産でⅢ期-１、897は湖西・渥美産でⅢ期に位置づけられる。

904～911は灰釉陶器の椀である。いずれも底部のみの残存で、高台径は6.2～6.8cmである。いずれも焼成は良好で904は褐灰色、905・907・910・911は灰白色、906は灰色、908は灰褐色、909は浅黄色を呈する。底部をみると、904・907～908は糸切り、905と906・909・911はナデによる調整が行われている。いずれも東遠江産の灰釉陶器で904・906～908・911は折戸53号窯式併行期、905は折戸53号窯式～東山72号に位置づけられる。

912～918は山茶椀の小皿である。912と913はほぼ完形に復元でき、917と918は底部のみの残存であった。口径8.2～8.5cm、器高1.8～2.6cm、底径3.8～4.8cmである。いずれも焼成は良好で912・915・916・918は灰白色、913は黄灰色、914は浅黄橙色、917はにぶい黄燈色を呈する。913は口縁部に自然釉が付着する。917は湖西・渥美産であるが、その他は東遠江産でⅢ期に位置づけられる。

919と920は山茶椀の小椀である。共に底部のみの出土であった。焼成は良好で919は灰白色、920は灰色を呈する。Ⅰ期に位置づけられる東遠江産の山茶椀である。

921は耳皿である。全体の約２/３が残存した。器高2.4cm、底径4.2cmである。最大幅は8.9cmである。焼成はやや悪く軟質で、灰白色を呈する。

922は鉢の底部である。高台径は10.3cmと推定され、焼成は良好で青灰色を呈する。923は托の脚部である。焼成は良好で灰白色を呈する。

924～927は甕である。924は頸部の約１/７が残存し、頸部径は26.9cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈し、常滑産と考えられる。925は底部の約１/６が残存し、底径は21.2cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈し、渥美産の甕と考えられる。926は東遠江産の甕で、底部の約１/７が残存した。底径は10.6cmと推定される。焼成は良好で灰色を呈する。927は底部の約１/８が残存し、底径は23.8cmと推定される。体部外面には併行文の叩き目が確認できる。焼成は良好で灰白色を呈し、在地のものと考えられる。928は渥美産の甕と考えられる甕の体部の破片である。焼成は良好で灰色を呈する。

(2)　SH-45・SH-46の柱穴と周辺の出土遺物（図179－929～936）

930はSH-46のP-1から、934はSH-45のP-5から、その他はSH-45・SH-46周辺の表土除去時に出土し

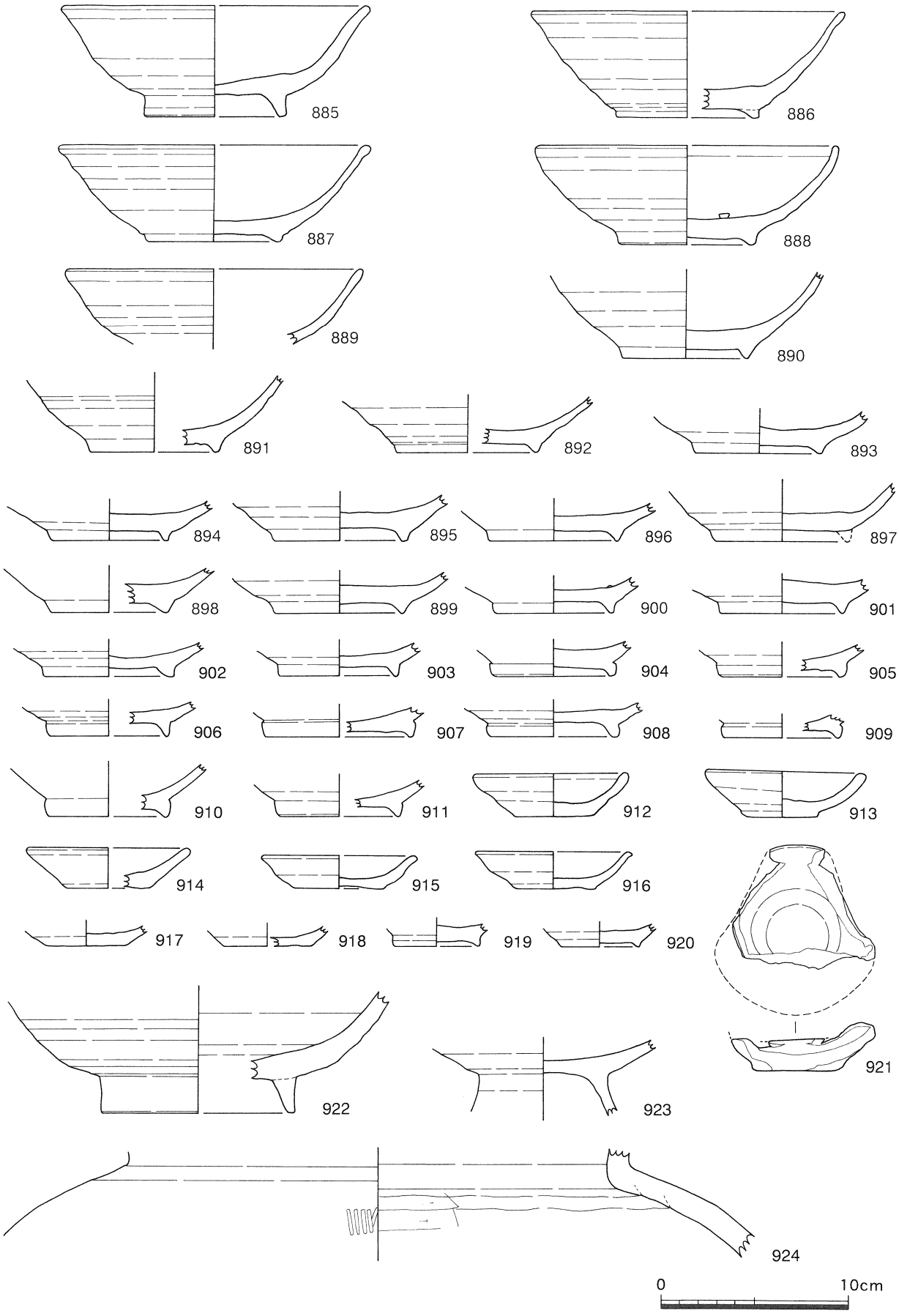


図177　SD-31の出土遺物１

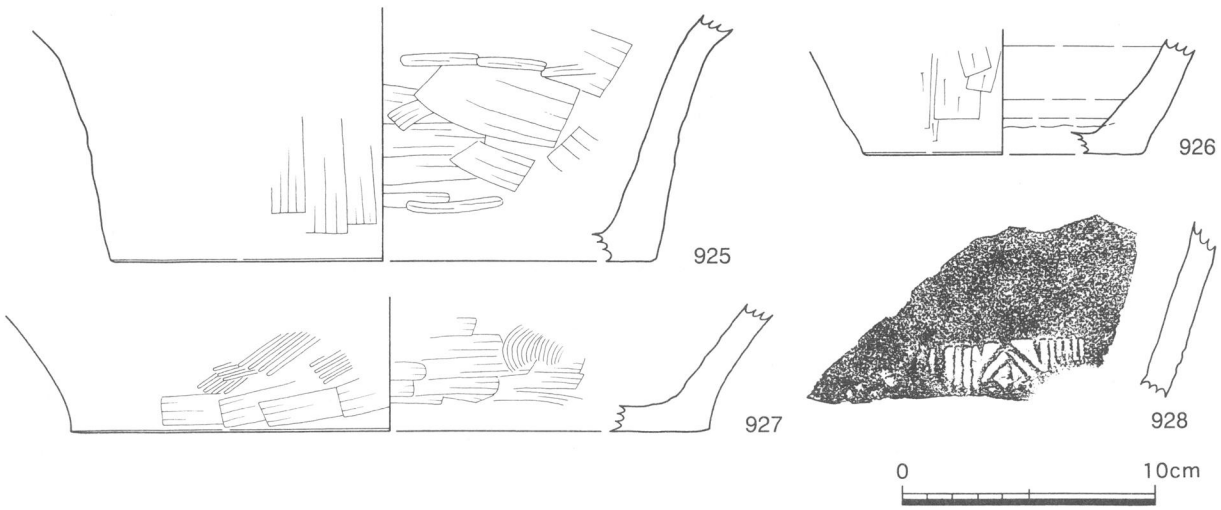


図178　SD-31の出土遺物２

た遺物である。929と934は灰釉陶器の椀で、929は底部のみ、934は体部から口縁部のみの残存であった。共に焼成は良好で、灰白色を呈する。929の見込みには重ね焼き痕がある。

930は緑釉陶器の椀である。残存したのは底部の約１/５である。残存高は2.1cm、高台径は6.4cmと推定される。焼成は良好で、緑釉が内面から高台の外面に至るまで施釉されている。

931は山茶椀の小皿、932は小皿あるいは小椀、933は小椀である。931は口径7.7cm、器高2.2cm、底径4.4cm、932は口径7.4cm、933は高台径3.6cmである。３点とも焼成は良好で、931と932は灰色、933は灰白色を呈する。東遠江産で931と932はⅢ期、933はⅠ期に位置づけられる。

935は灰釉陶器の長頸瓶で、口縁部の約１/７が残存した。口径は12.6cmと推定される。焼成は良好で灰白色を呈する。内面には自然釉が付着している。936も灰釉陶器の長頸瓶の口縁部と考えられる。焼成は良好で灰白色を呈する。内外面には自然釉が付着する。

⑶　SH-49の柱穴とSA-14・SH-48周辺の出土遺物（図180－937～949）

937はSH-49のP-4から、939はSA-14の北側の柱穴から出土した。938・940～949はSH-48周辺の表土から出土した遺物である。

937～946は灰釉陶器である。937は椀で、全体の約１/２が残存した。口径14.0cm、器高3.6cm、高台径5.9cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。938は皿で、口縁部から体部の約１/３が残存した。口径は15.7cmである。焼成は良好で灰色を呈する。939～945は椀で、いずれも底部のみの残存であった。高台径は5.7～7.4cmである。焼成は良好で、939と942は灰色、940・941・945は灰白色、943は浅黄色、944は灰黄色を呈する。なお、939と943は見込みに重ね焼き痕がある。946は小椀と考えられ、高台径は4.2cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。

947は瓶類の底部と考えられる。高台径は11.0cmと推定され、焼成は良好で灰黄色を呈する。

948と949は土師器の甕である。ともに口縁部の一部が残存したのみで、948は口径20.0cm、949は口径19.8cmと推定される。ともに焼成は良好で、浅黄橙色を呈する。

⑷　35区の表土出土遺物

①　SD-31周辺の表土出土遺物（図181－950～954）

950～954は表土除去時にSD-32周辺から出土した遺物である。950と951は山茶椀の小皿、952～954は

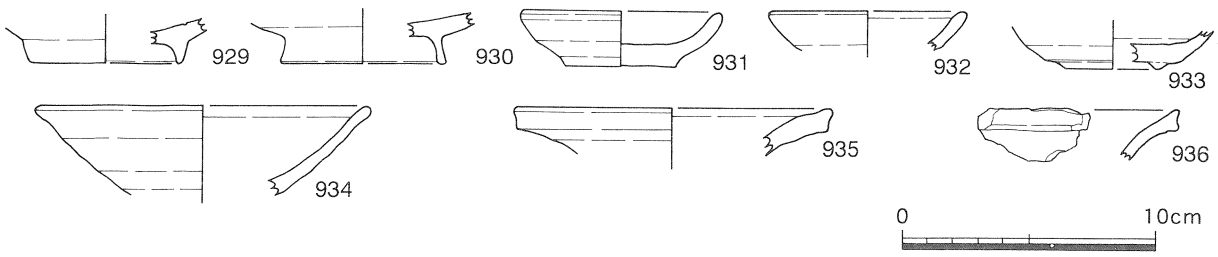


図179　SH-45・SH-46の柱穴と周辺の出土遺物

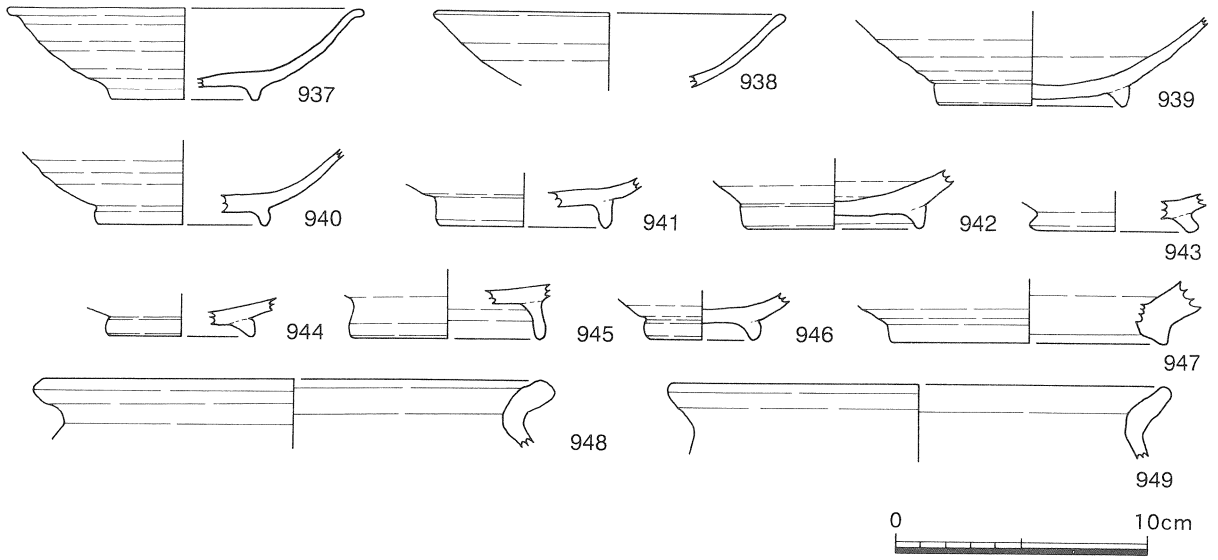


図180　SH-49の柱穴とSH-48・SA-14周辺の出土遺物

灰釉陶器の椀である。950は口径8.4cm、器高2.2cm、底径4.6cm、951は口径8.6cm、器高2.2cm、底径4.4cmである。共に焼成は良好で950は灰色、951は灰白色を呈する。この２点は東遠江産の山茶椀で、Ⅲ期に位置づけられる。

952～954は底部のみの残存で、高台径は6.3～7.2cmである。いずれも焼成は良好で952と953は灰白色、954は灰色を呈する。底部は952が糸切り、953と954はナデによる調整が行われている。３点とも東遠江産で、折戸53号窯式に併行する時期に位置づけられる。

②　その他の出土遺物（図181－955～983）

955～983は34区の北西部を除く範囲から出土した遺物である。955と974～977は山茶椀である。955と974・975・977は椀で、955は全体の約1/5が残存、974・975・977は底部のみの残存であった。955は口径13.4cm、器高4.0cm、高台径6.2cm、974は高台径6.5cm、975は高台径5.5cm、977は高台径7.1cmである。いずれも焼成は良好で、955は灰色、974・975・977は灰白色を呈する。974は高台に籾殻痕、977は見込みに削痕が確認できる。976は小皿で、口径7.9cm、器高1.7cm、底径3.7cm、焼成は良好で灰色を呈する。955と974～976は東遠江産で、955がⅡ期、974～976がⅢ期に位置づけられる。977は湖西・渥美産で、Ⅰ期に位置づけられる。

956～973は灰釉陶器の椀である956～958は体部から口縁部、959～975は底部が残存したのみである。口径は12.2～14.6cm、高台径は5.2～7.2cmである。いずれも焼成は良好で956～959・961～964・966・969～973は灰白色、960・965・968は灰黄色、967は灰色を呈する。972は見込みに重ね焼き痕がある。底部を

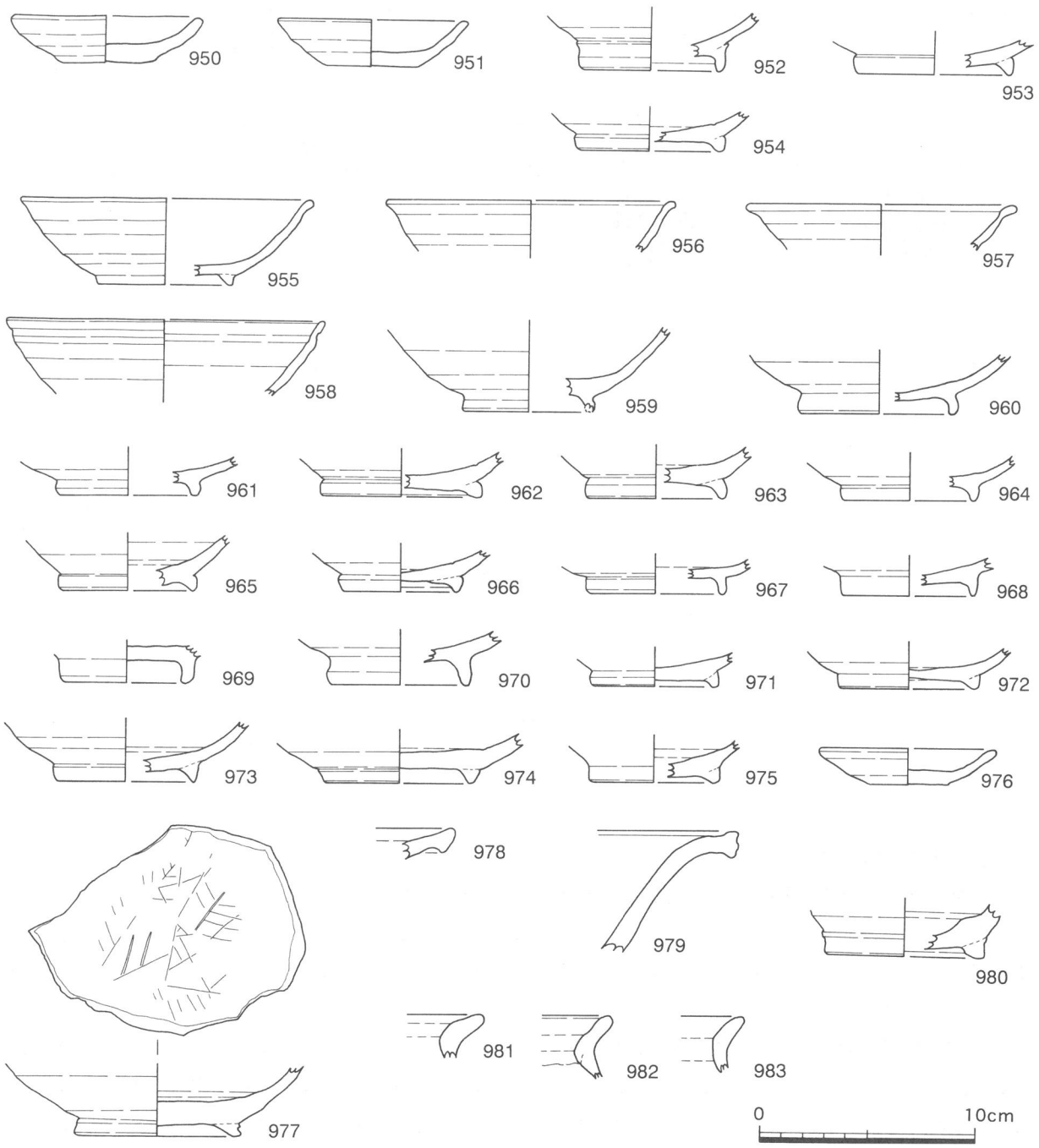


図181　35区表土の出土遺物

みると、960・963・968・969・970はナデ、その他は糸切りである。なお、967の高台には釉着を引きはがした痕跡がある。いずれも東遠江産で、960・963・967～970は折戸53号窯式、その他は東山72号窯式以降に併行する時期と考えられる。

978と980は灰釉陶器の長頸瓶の破片である。978は口縁部の一部のみ、980は底部のみの残存であった。共に焼成は良好で灰白色を呈する。979は甕の口縁部の破片である。焼成は良好で褐灰色の釉が施釉される。胎土は灰白色を呈する。

981～983は土師器の甕である。いずれも口縁部の一部が出土したに留まる。981と982は焼成が悪く、表面の風化が著しい。そのため、調整については不明である。983は焼成良好で、内外面とも横ナデによる調整が行われている。色調は981が橙色、982と983は浅黄橙色である。

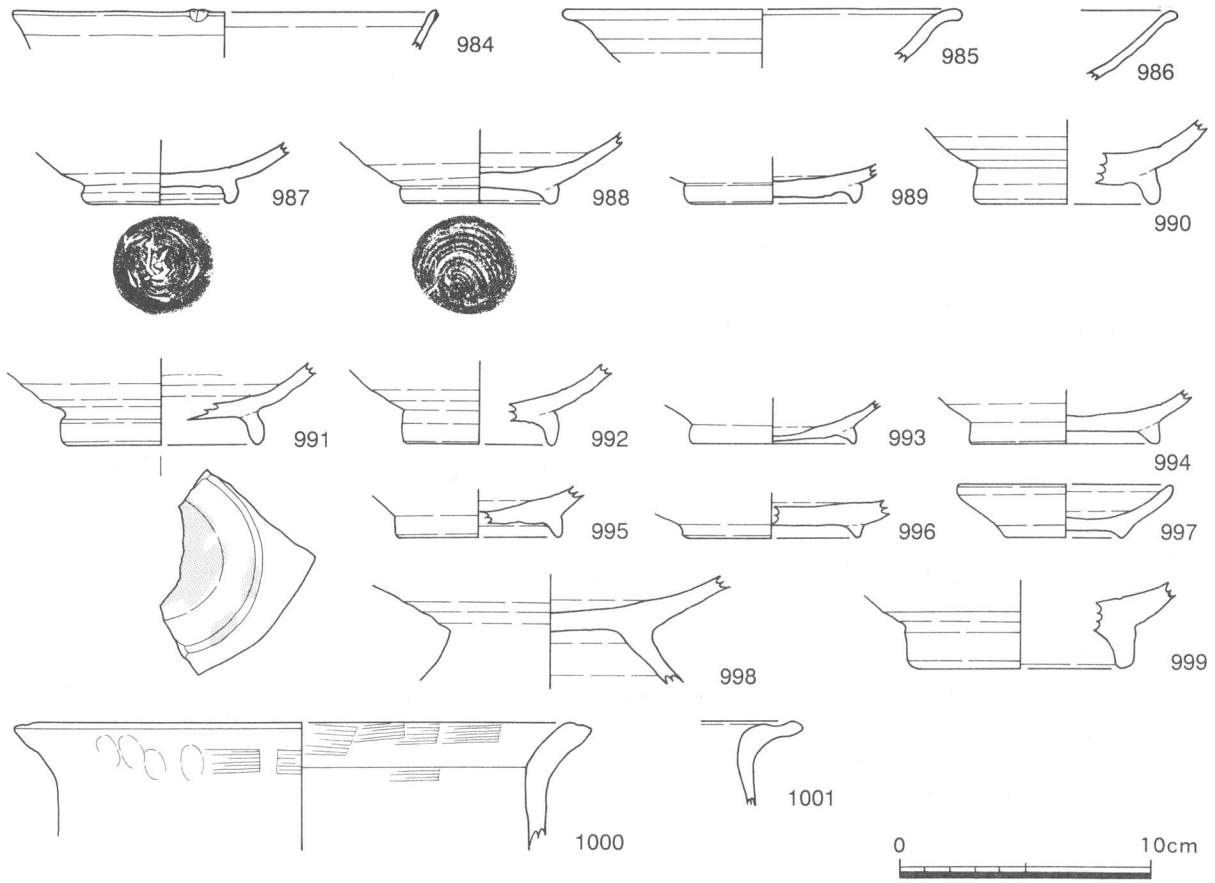


図182　SH-51～53の柱穴と周辺表土の出土遺物

7．南東部の出土遺物

(1)　柱穴とSH-51～53周辺表土の出土遺物（図182－984～1001）

984～986・995は柱穴からの出土遺物である。984はSH-53のP-8の南西にある柱穴、985は調査区北東部の柱穴、SH-51では986がP-9、995はP-7から出土した。987～994・996～1001はSH-51～53周辺の表土除去時に出土した遺物である。

984～993は灰釉陶器の椀で、984～986は口縁部のみ、987～993は底部のみの残存であった。口径は15.4～16.7cm、高台径5.3～7.5cmである。いずれも焼成は良好で、984・985・987～989・991～992は灰白色、986と990は黄灰色、993は灰色を呈し、987・990・992は重ね焼き痕をもつ。988は高台にスノコ痕がある。底部は990と991がナデ、その他の個体は糸切りである。なお、987は底面にヘラ記号がある。また、991の底面には墨痕があり転用硯の可能性も考えられるが、表面に摩滅した様子はない。

994～997は山茶椀である。994～996は底部のみが出土した椀である。997は小椀で、口径8.4cm、器高2.1cm、高台径4.7cmである。４点とも焼成は良好で994は灰黄色、995は灰白色、996は灰色、997は黄灰色を呈し、994は重ね焼き痕がある。高台には994が籾殻痕、997はスノコ痕を有する。

上記の遺物はいずれも東遠江産で、987・990～992は折戸53号窯式併行期、その他の灰釉陶器は折戸53号窯式併行期～東山72号窯式併行期、994～997はⅠ期～Ⅱ期に位置づけられる。

998は灰釉陶器の托である。焼成は良好であるが、やや軟質であり、表面が風化している。999は鉢の底部と考えられる。焼成は良好で、灰白色を呈する。内面は自然釉が付着し、底部には重ね焼きの痕跡が見られる。1000は清郷型甕で、口縁部の破片のみの残存であった。表面の風化が著しいが、外面に指頭痕が確認できる。焼成は良好でにぶい黄橙色を呈する。1001は土師器の甕で、口縁部の極一部が出土

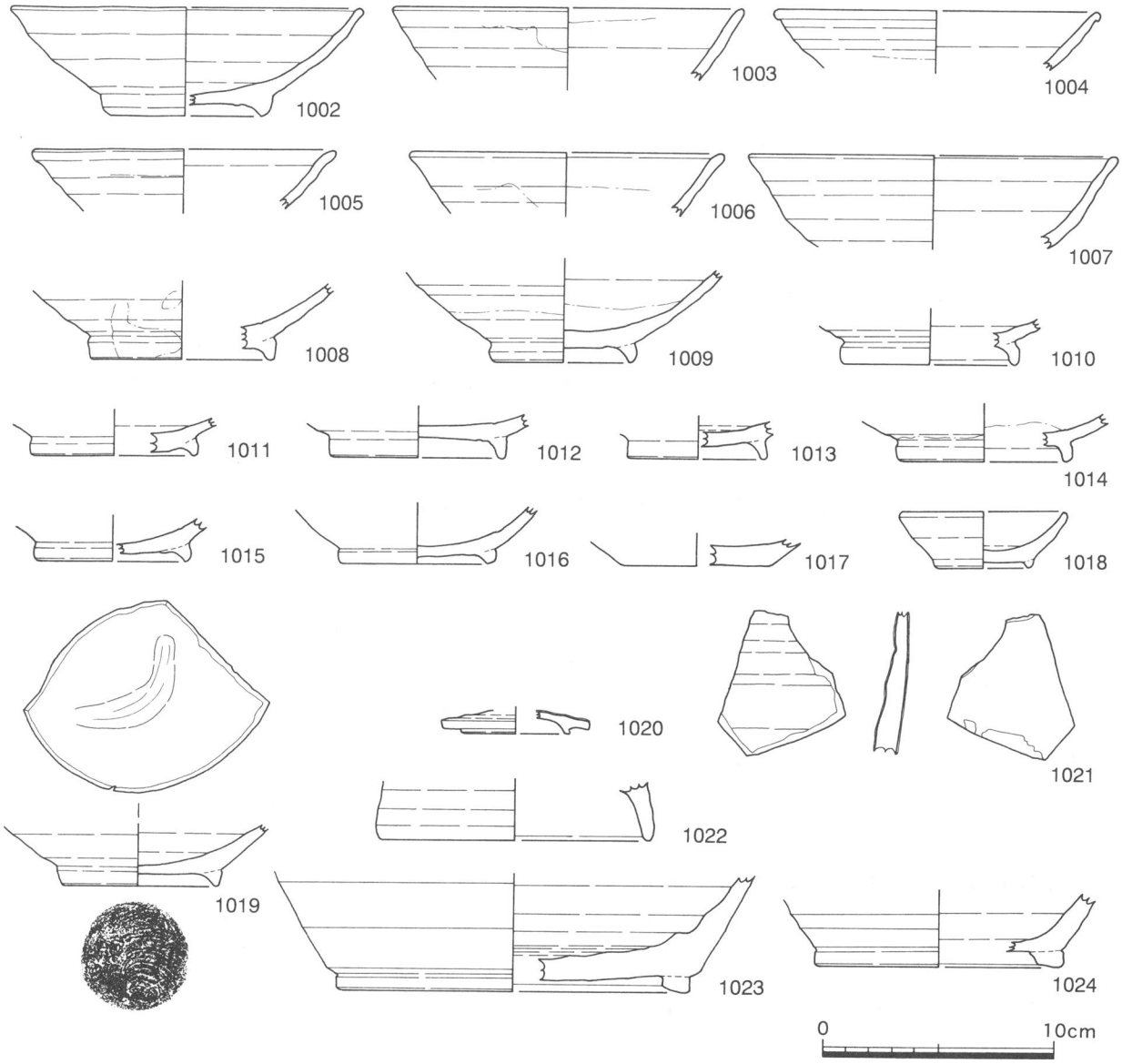


図183　48区表土の出土遺物

したのみである。焼成は良好で橙色を呈するが、表面は風化が著しい。

⑵　表土の出土遺物（図183－1002～1024）

1002～1024は48区の南東部を除いた範囲から出土した遺物である。1002～1016は灰釉陶器の椀である。1003～1007は体部から口縁部にかけて、1008～1016は底部のみの残存であった。口径12.7～15.8cm、高台径5.8～7.6cm、1002の器高は4.6cmである。いずれも焼成は良好で1002・1007・1008・1010・1012・1013・1015・1016は灰白色、1003・1005・1011は灰黄色、1004はにぶい橙色、1006・1009は灰色、1014は浅黄橙色を呈する。1008と1009・1012・1014～1016は重ね焼き痕があり、1003と1005・1006・1009は灰釉がツケガケで施釉される。1009は高台にスノコ痕がある。底部を見ると、1013はナデ、その他は糸切りである。

1017～1019は山茶椀である。1017は無高台の椀、1018は小椀、1019は椀である。いずれも焼成は良好で灰白色を呈する。1017は見込みに厚く自然釉が付着する。1019は高台にスノコ痕があり、見込みの中央部は１条のナデがある。

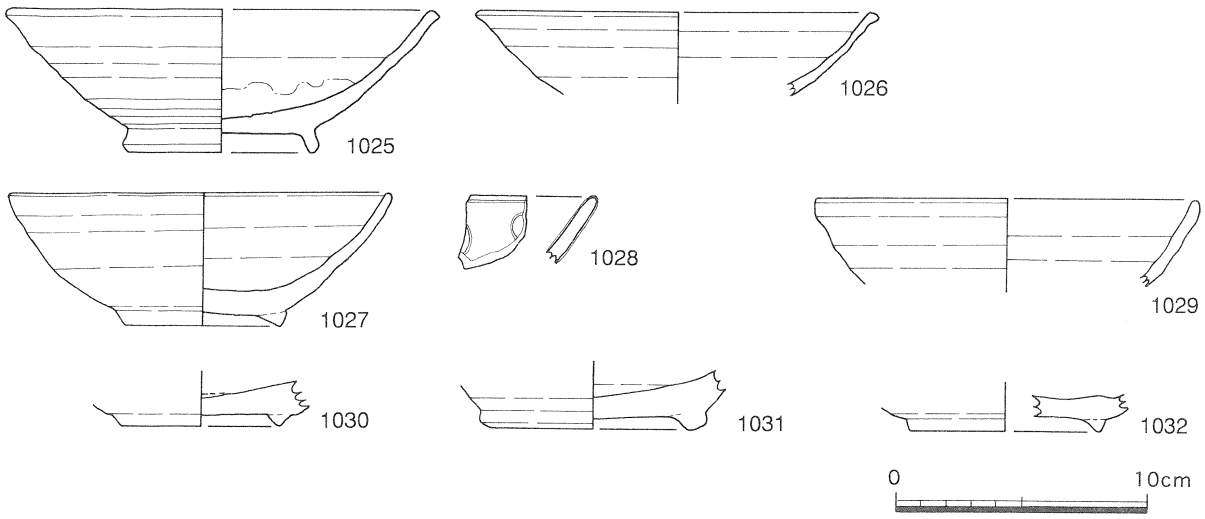


図184　SB-4・SD-33・SF-24・25、J地点の出土遺物

以上の灰釉陶器と山茶椀はいずれも東遠江で生産されたもので、灰釉陶器は折戸53号窯式～東山72号窯式に併行する時期、山茶椀のうち小椀はⅠ期、椀はⅢ期に位置づけられる。

1020は青白磁で、小壷の蓋と考えられる。残存したのは返りを持つ口縁部の一部である。1021は白磁の破片で、四耳壷の体部と考えられる。釉はやや灰色をおびた白色に発色する。

1022は深椀の高台部と考えられる。焼成は良好で灰白色を呈する。1023は甕あるいは、瓶類の底部である。焼成は良好で灰白色を呈する。1024は瓶類の底部で、焼成は良好で灰白色を呈する。

8．東端部の出土遺物（図184－1025・1026）

1025と1026はSB-4の土坑から出土した灰釉陶器の椀である。1025は全体の約1/4が残存し、口径16.5cm、器高5.7cm、高台径7.1cmである。1026は体部から口縁部の約1/6が残存し、口径15.5cmである。共に焼成は良好で灰白色を呈する。10世紀～11世紀に位置づけられる。

9．その他の調査区出土の遺物

(1)　SD-33出土遺物（図184－1027・1028）

ミョウガ原遺跡北東端のSD-33からは1027と1028が出土した。1027は山茶椀の椀で、全体の約1/2が残存し、口径15.5cm、器高5.2cm、高台径6.2cmである。焼成は良好で灰色を呈する。東遠江産で、Ⅲ期-1に位置づけられる。1028はA2類に分類される龍泉窯系の青磁椀で、残存したのは口縁部の一部のみである。

(2)　SF-24・25と周辺の出土遺物（図184－1029～1031）

SF-25からは1029と1031が出土した。1030はこの付近の表土から出土した。3点とも山茶椀の椀で、1029は口径15.2cmと推定される。いずれも焼成は良好で1029が青灰色、1030が灰色、1031が灰白色を呈する。1029と1030は東遠江産でⅢ期、1031は湖西・渥美産でⅢ期に位置づけられる。

(3)　J地点の出土遺物（図184－1032）

1032はJ地点の西寄りから出土した山茶椀の椀である。底部のみの残存で、高台径は7.6cmと推定される。焼成は良好で灰黄色を呈する。東遠江産でⅢ期に位置づけられる。

表10　貿易陶磁器地区別出土破片数

出土地大別	遺構群	遺構	調査区	分類																			
				青磁									白磁								青白磁	
				同安窯系					龍泉窯系													
				碗				皿	碗				碗				皿		小皿	四耳壺	合子	小壺
				A類	B類	細分不可	Ⅲ類		A1類	A2類	A3類	B類	Ⅰ類	Ⅳ類	Ⅴ類	Ⅷ類	Ⅴor Ⅷ類	Ⅲ類	Ⅴor Ⅷ類				
流路北側	北西部	SD-2	24区																			1	
			14・25区							1						1	1	1					
		SD-5	13'区		1										1								
		SD-9	14区													1							
		SD-11	14区							1													
		表土	24区														1						
			14区		1	2											1						
			13区		1																		
			25区西		1					1							1						
		小計		0	4	2	0	0	0	3	0	0	0	0	1	2	4	1	0	0	0	1	0
	中央	表土	25区東													1		1					
		小計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
	北東	SF-12	54区				1				1												
		表土	26区		2												2						
			4区																				
			54区		1					2													
			3'区		2												4						
			53区		2			4		1		1											
		小計		0	7	0	1	4	0	3	1	1	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0
	その他	SD-33	5区							1													
		表土	5区									1											
			31区															1					
		小計		0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	流路北側合計			0	11	2	1	4	0	7	1	2	0	0	1	3	10	3	0	0	0	1	0
自然流路	第３層		15区											1			1						
	第４層		15区														1						
	第６層		3区							1													
	第６層		3'区		2					1	1						1		1				
	第６層		47・53区							1						1	1			1			
	第７層		3'区												1								
	第７層		46区										1										
	表土		3区							2													
	流路合計			0	2	0	0	0	0	5	1	0	1	1	1	1	4	0	1	1	0	0	0
流路南側	南西部	SD-29	46区																		1		
		表土	46区																		1		
			34区															1					
		小計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0
	中央・南東	表土	48区							1									2		1	1	
			15区														1						
			35区																2				
		小計		0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	4	0	1	1	0
	流路南側合計			0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	4	0	3	1	0
ミョウガ原遺跡総計				0	13	2	1	4	0	13	2	2	1	1	2	4	15	4	5	1	3	1	1
R地点										1		1											

分類については、原1999、横田・森1978を参照した。地区割については図208参照。

註

1　層位については図166を参照。なお、46区における旧表土層は図166の第２層、黄灰色粘土層は第３層、黒色粘土層は第４層、黄灰色砂層は第７層に相当する。

2　山茶椀については松井1988・1993、河合2001を参照した。なお、本稿で東遠江産とした山茶椀は金谷（横岡）古窯跡群とその周辺で生産されたものが主体を占めることを河合氏から御教示頂いた。灰釉陶器については、山下1995を参照した。貿易陶磁については横田・森田1978、原1999を参照した。また、灰釉陶器・山茶椀については静岡県教育委員会文化課 河合修氏、溝口彰啓氏に御教示頂いた。貿易陶磁については国立歴史民俗博物館 小野正敏教授に御教示頂いた。

3　墨書土器については静岡大学人文学部 湯之上隆教授に御教示頂いた。

4　15区における暗褐色粘土層は第３層（46区における黄灰色粘土層）、黒色粘土層は第４層、黄灰色粘土層は第６層に相当する。

5　３区における黒色粘土層は第４層、黄灰色粘土層は第６層に相当する。

6　3'区における黒色粘土層は第４層、黄灰色粘土層は第６層、底面直上である黄灰色砂層は第７層に相当する。

7　176について、青木修氏、河合修氏、金谷町教育委員会 萩原佳保理氏から島田市旗指26号窯、同市上反方遺跡、金谷町きつね沢８号窯脇の土坑等で類例が出土していることを御教示頂いた。

8　瓦鉢については当研究所職員 勝又直人氏に御教示頂いた。

9　47区・53区における灰色粘土層は第６層、底面直上は第７層に相当する。

10　砥石の石材に関しては当研究所評議委員 伊藤通玄氏に御教示頂いた。

11　797～799の灰釉陶器の長頸瓶については当研究所調査指導員 澁谷昌彦氏に御教示頂いた。

第４節　縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は散在的といえる（図185）。縄文時代の遺構を検出した調査区は、西から見ると、29区、34区、５区、48区、50区である。次に遺構別に調査の成果を記す。

１．竪穴住居跡　SB-5（図186）

SB-5は平成12年度に調査を実施した34区の南東部で検出した竪穴住居跡である。この住居跡は不正形な円形の平面形をとり、最大径は4.6m、深さ0.26mの規模である。住居跡内では７基のピットを検出した。ピットは直径25～30cm、深さ0.1～0.3mの規模である。住居跡の東寄りには土坑が１基存在した（SF-1）。この土坑の規模は直径60cm、深さ40cmである。土坑の壁面は焼成を受けており、覆土には炭化物や粒子状の焼土が多く混ざっていた。

住居跡内からは石鏃や石匙等の石器の他に、これらの未製品や多数の剥片が出土した（図193）。剥片の大半は凝灰岩で、黒曜石も混ざっていた。また、縄文土器も僅かながら出土した（図192－1033～1042）。五領ヶ台式併行期の在地系土器と北屋敷式土器が中心であった。

石器を始め、多数の剥片や未製品が出土したことから、この住居跡において、石器を制作していたことがうかがえる。遺構の時期について出土土器から縄文時代中期に位置づけられる。なお、この周囲においては、この他に縄文時代の遺構を検出することはできなかった。

２．土　坑

(1)　SF-30（図188）

SF-30は平成９年度に調査を実施した５区の東端部で検出した遺構である。不正形な平面形を有し、規模は東西2.6m、南北2.9m、深さ0.25mである。土坑内の東側には最大幅５～40cm程度の礫が集中して存在した。礫は角礫も混ざるが、大半が円礫である。なお、石材に規則的な配列の様子はなかった。

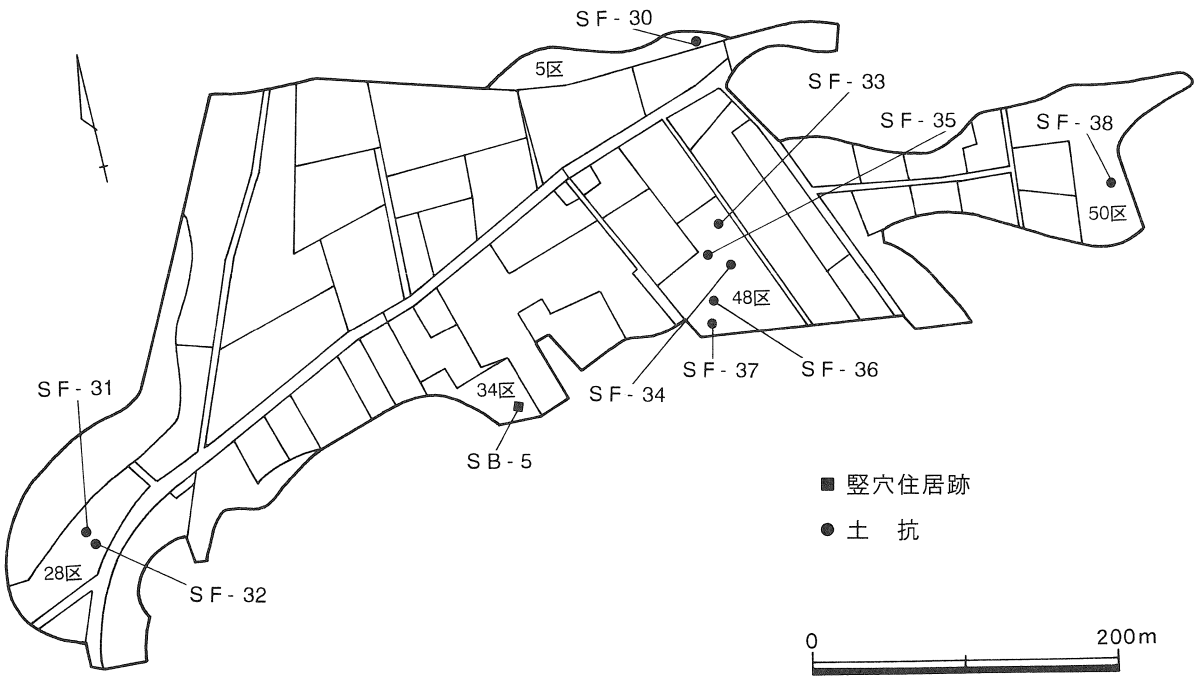
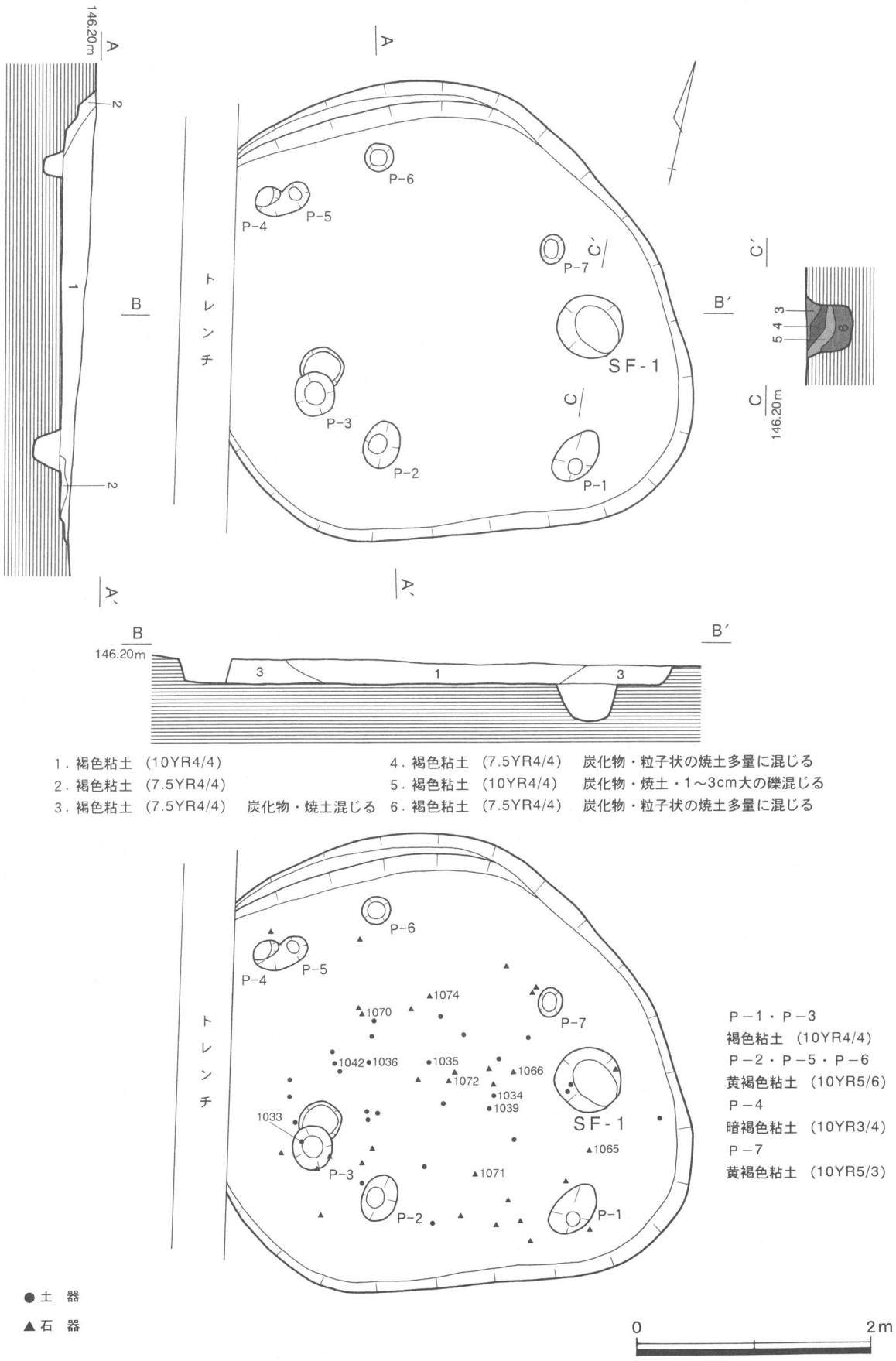


図185　縄文時代の遺構分布図



1．褐色粘土　(10YR4/4)
2．褐色粘土　(7.5YR4/4)
3．褐色粘土　(7.5YR4/4)　炭化物・焼土混じる
4．褐色粘土　(7.5YR4/4)　炭化物・粒子状の焼土多量に混じる
5．褐色粘土　(10YR4/4)　炭化物・焼土・1～3cm大の礫混じる
6．褐色粘土　(7.5YR4/4)　炭化物・粒子状の焼土多量に混じる

P－1・P－3
褐色粘土　(10YR4/4)
P－2・P－5・P－6
黄褐色粘土　(10YR5/6)
P－4
暗褐色粘土　(10YR3/4)
P－7
黄褐色粘土　(10YR5/3)

図186　SB-5 (1/50) 実測図

これらの礫に混ざって、縄文土器が出土した（図192－1043～1054）。出土した縄文土器は、木島Ⅱ式を始め、五領ヶ台式、北裏ＣⅡ式、勝坂式、北屋敷式に併行するものである。早期末葉、中期初頭、中期中葉と時間幅があるが、早期末葉、中期初頭は周囲からの混入と考えられる。SF-30直接関わるものとしては中期中葉の土器群があげられる。遺構の性格としては不明である。

SF-30周辺では、縄文時代の遺構はこの他には発見されなかった。ただし、周囲では表土掘削時に中期初頭の五領ヶ台式併行期や北裏ＣⅡ式併行期の土器を出土している。そのため、この周辺に中期初頭の遺構が本来的には存在した可能性も十分考えられる。

⑵ SF-31（図188左）

SF-31は平成12年度に調査した28区で検出した土坑である。平面は楕円形を呈し、規模は長軸が0.8m、短軸が0.4m、深さが検出面から測り0.4mである。この土坑の西壁面をみると、検出面から測って0.2mの深さの部位が土坑内に突出していた。突出部位の下部は壁面がオーバーハングしている。土坑の覆土は暗赤褐色の粘土であるが、この突出部位を境に上下の覆土は異なっていた。上層には炭化物や焼土が多く含まれるのに対し、下層には炭化物や焼土はほとんど含まれていない。また、壁面には焼成を受けた箇所もあった。この土坑からの出土遺物はなかった。

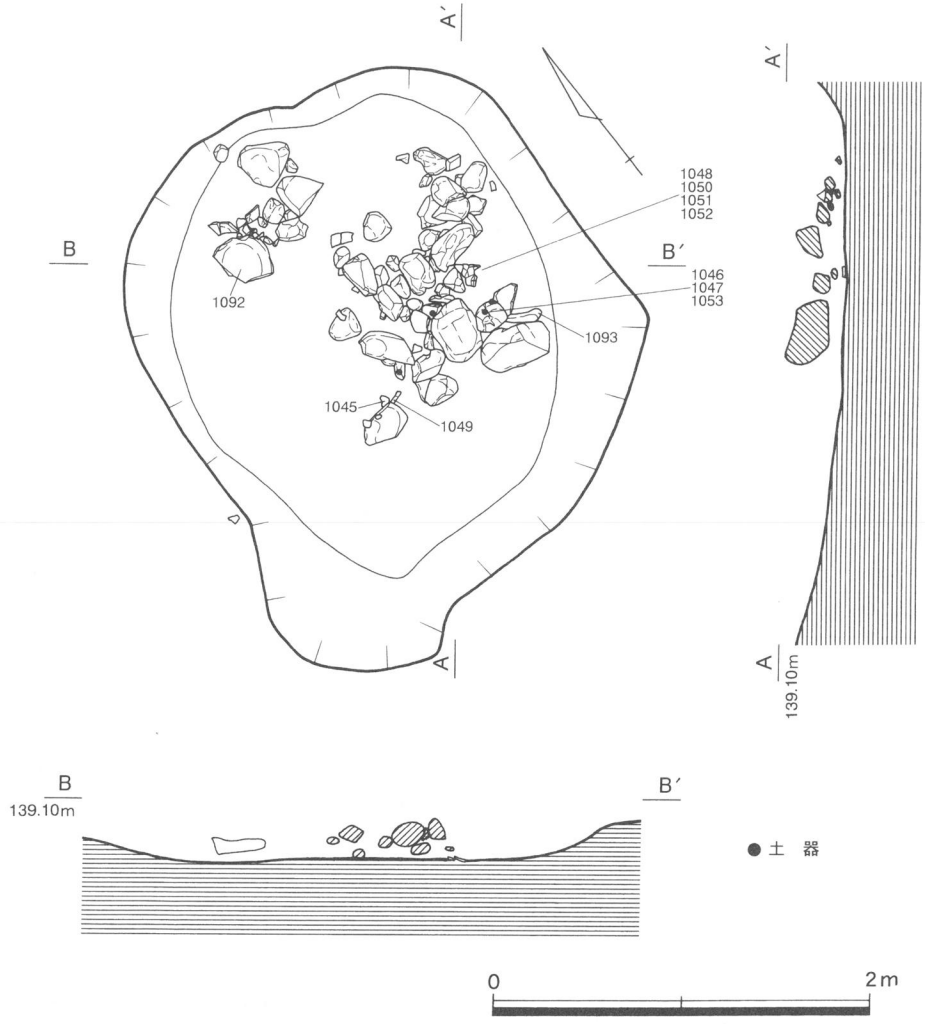
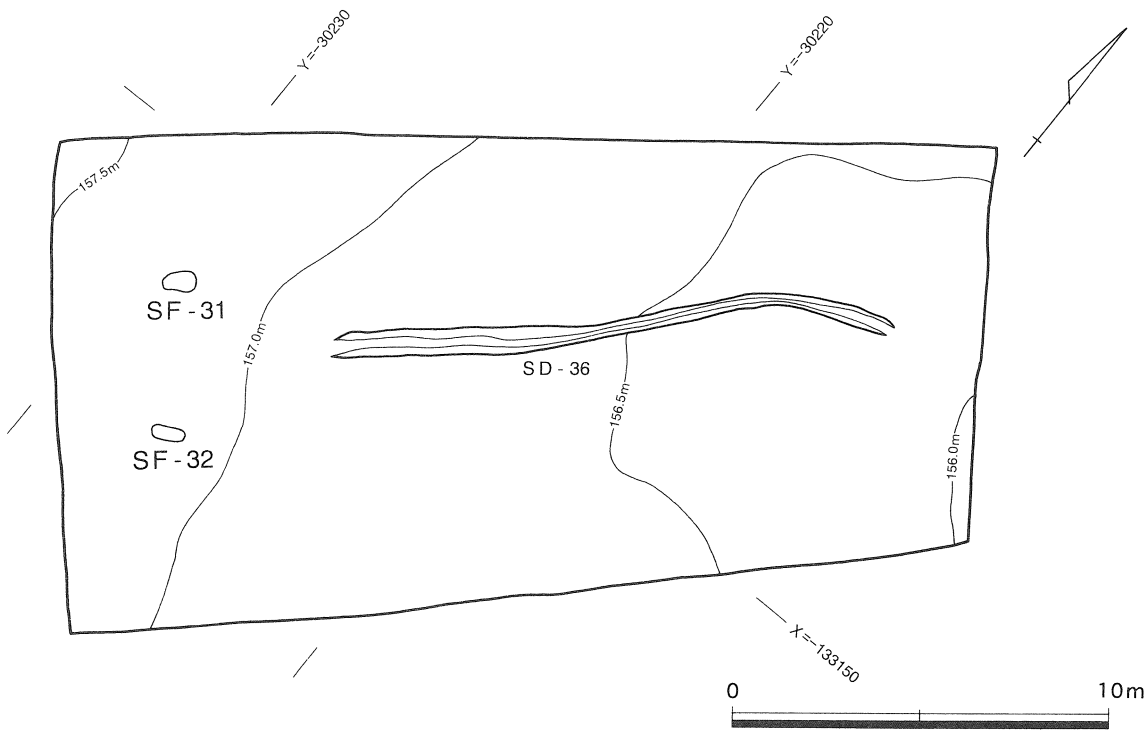


図187　SF-30実測図（1/40）

⑶ SF-32（図189右）

SF-32は平成12年度に調査を実施した28区で検出した遺構である。この土坑は長楕円形の平面形を呈し、規模は、長径0.9m、短径0.25m、深さ0.3mである。覆土は暗赤褐色粘土で、炭化物や焼土が多く混ざっていた。この遺構からは石匙等が出土した（図197－1095・1096・1099）。



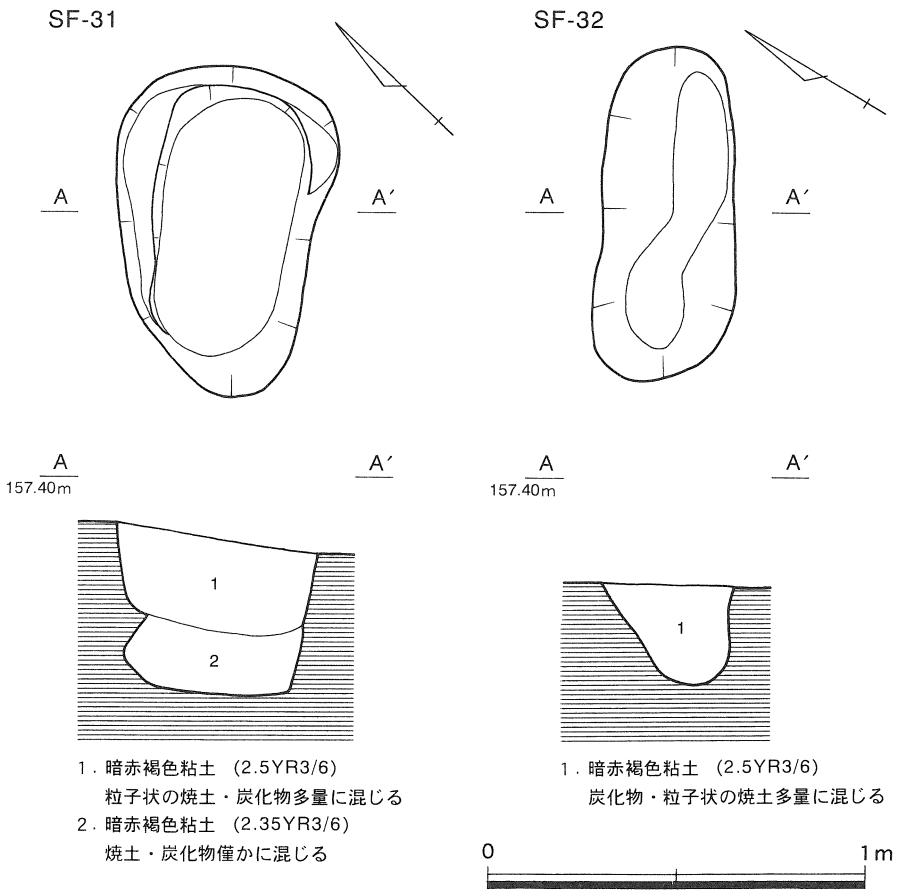


図188　28区全体図（1/200）**とSF-31・SF-32実測図**（1/20）

(4) SF-33（図189左上）

SF-33は平成13年度に調査を実施した48区で検出した陥穴と考えられる遺構である。東西にやや長い楕円形の平面形を呈し、規模は長径1.85m、短径1.45m、検出面からの深さは1.70mである。底面には直径0.3m、深さ0.15mのピットがあり、逆茂木の跡と考えられる。この土坑からの出土遺物はなかった。

なお、SF-33～SF-37はいずれも陥穴と考えられる遺構で、48区の北東から南西にかけて斜行するように検出された。いずれも平成13年度の調査で検出した遺構である。

(5) SF-34（図189右上）

SF-34は48区で検出した陥穴である。SF-33の26.5m南に所在し、この遺構の15.5m北西にはSF-35が所在する。SF-34はやや不正形な円形の平面形を呈し、最大径は2.0m、深さは1.15mである。底面の北寄りには直径0.3m、深さ0.25mのピットがあり、逆茂木の跡と考えられる。他の陥穴と同様に、この遺構からの出土遺物はなかった。

(6) SF-35（図189左下）

SF-35も前二者と同様に平成13年度の48区の調査で検出した陥穴である。この遺構の18m北東にはSF-33、15.5m南東にはSF-34が所在する。SF-35の平面形は円形で、規模は最大径1.65m、深さ1.0mである。底面の北寄りには直径0.45m、深さ0.6mの逆茂木の跡と考えられるピットがある。この遺構からの出土遺物はなかった。

(7) SF-36（図190左）

SF-36は平成13年度の48区の調査において検出した陥穴である。SF-34の20m南西に所在し、15m南南西にはSF-37が所在する。SF-36は円形の平面形を持ち、規模は最大径2.35m、深さ1.15mである。この陥穴では、SF-33～SF-35で見られたような、逆茂木の跡と考えられるピットは底面に存在しなかった。この土坑からも出土遺物はなかった。

(8) SF-37（図190右）

SF-37は平成13年度に調査を実施した48区で検出した陥穴である。この土坑の15m北北東にはSF-36が所在する。また、土坑の約５m南は調査区外となっているが、調査区外に至ると急傾斜となっている。SF-37は台地平坦面の南端に位置していると、言うこともできる。

SF-37はやや不正形な円形の平面形を呈し、規模は最大径が1.55m、深さは1.85mである。この土坑の底面にもSF-33～SF-35に見られたような、逆茂木の跡と考えられるピットは存在しなかった。なお、この土坑の概ね半分より下は、非常に堅くしまった礫層にまで達していた。出土遺物はなかった。

(9) SF-38（図191）

SF-38は平成13年度に調査を実施した50区で検出した集石土坑である。東西にやや長い楕円形の平面形を呈し、規模は長径が0.78m、短径が0.64m、深さが0.15mである。この土坑の中には焼成を受けた礫が充填されていた。礫は１～10cm程度の大きさの砂岩の角礫が主体であった。また、土坑の壁面は強く焼成をうけていた。底面については、焼成を受けていたものの、壁面ほど強いものではなかった。この土坑からの出土遺物はなかった。

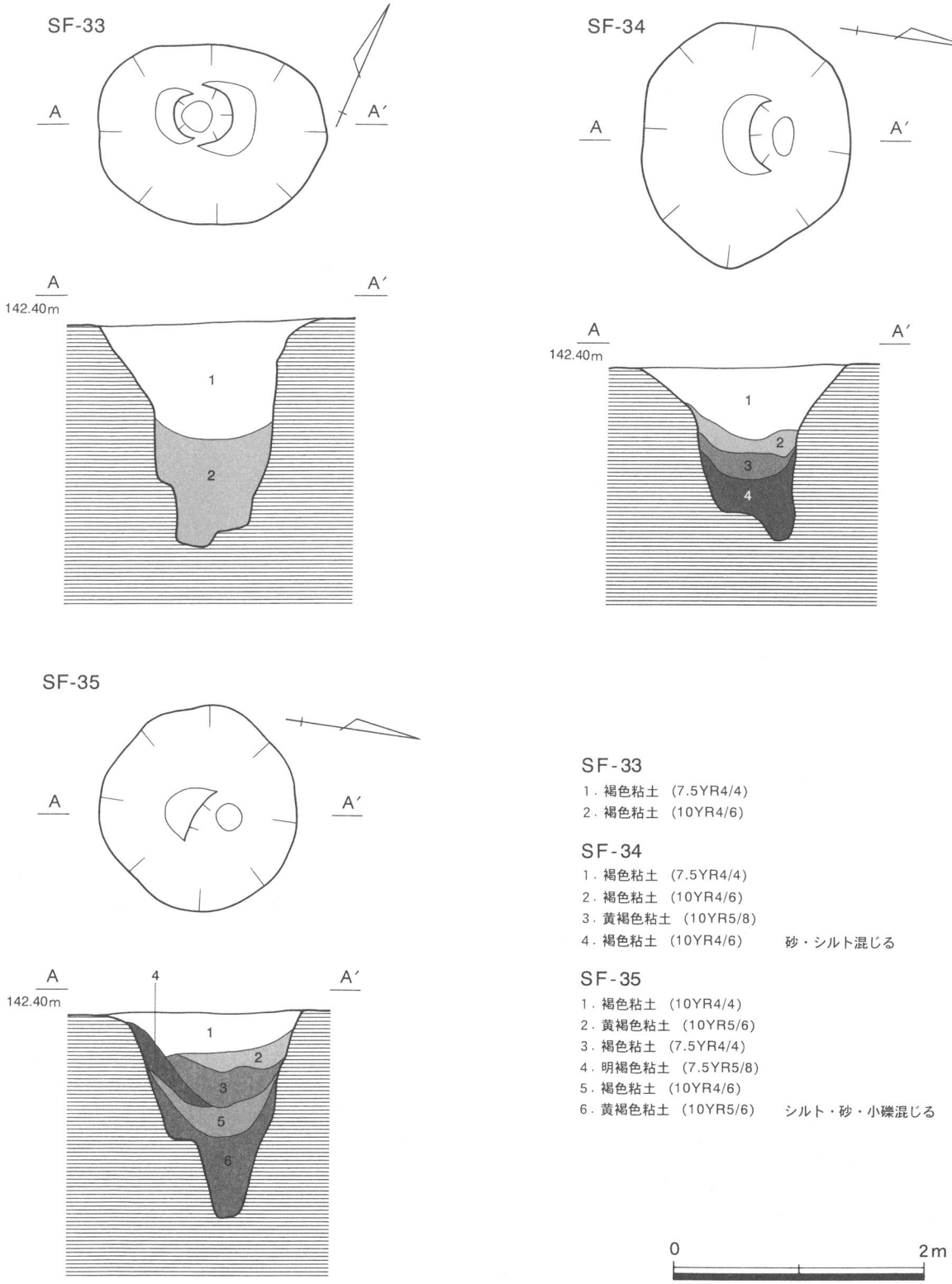


図189　SF-33～SF-35実測図（1/50）

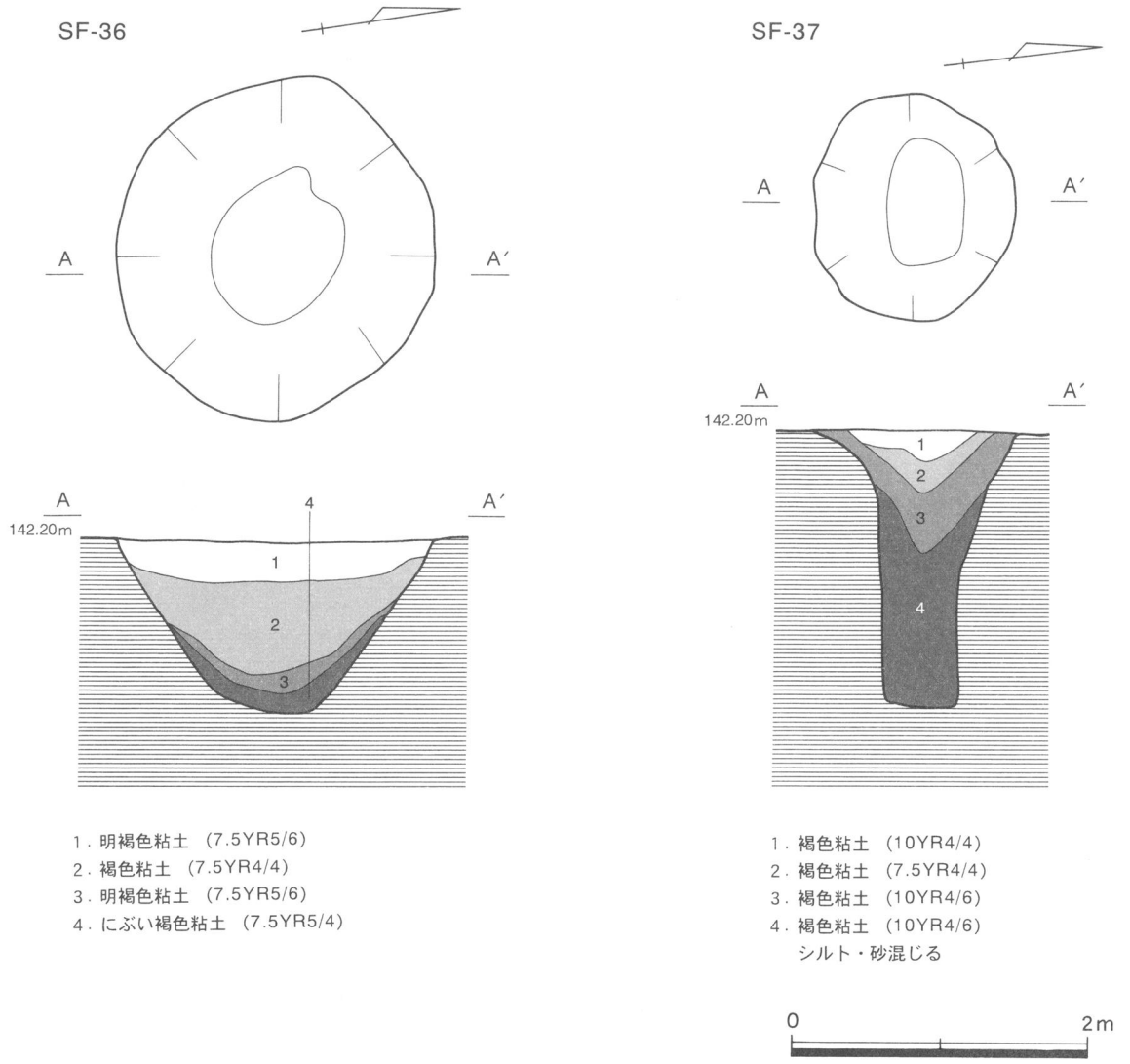


図190　SF-36・SF-37実測図 (1/50)

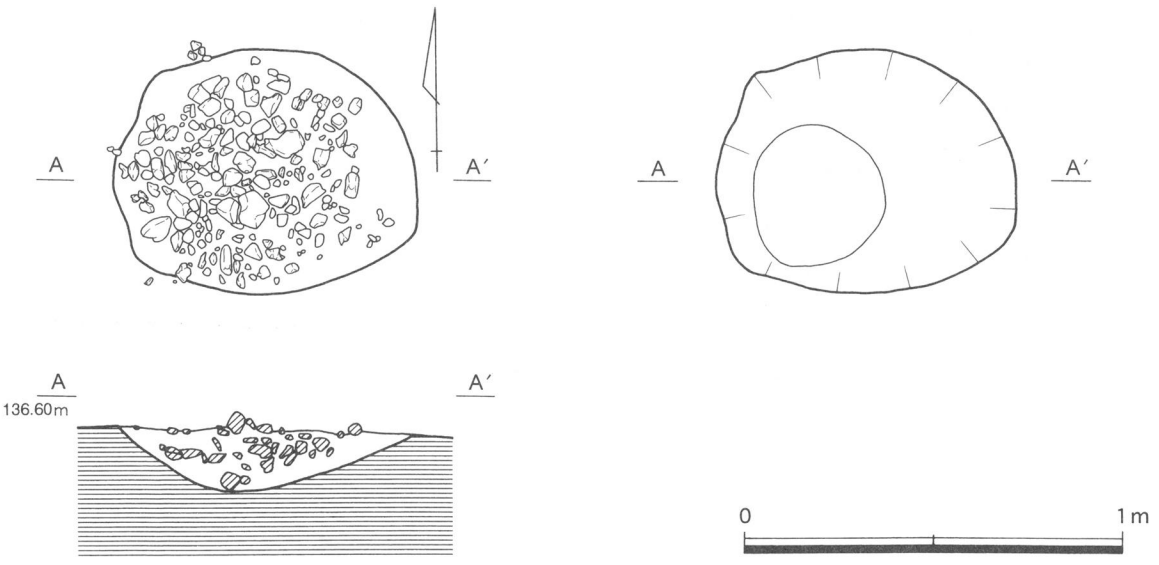


図191　SF-38実測図 (1/20)

第５節　縄文時代の遺物

１．SB-5の出土遺物

⑴土　器（図192－1033～1042）

1033～1042がSB-5から出土した土器である。いずれも表面の風化が著しいものであった。1033は諸磯ｂ式併行で、前期後葉に位置づけられる（註１）。1034と1035は条線のみであるが、これも諸磯ｂ式併行と考えられる。1036は文様のモチーフが北白川下層ⅡＣ式に類似し、これも前期後葉に位置づけられる。1037～1042は中期に位置づけられる土器である。1037は北屋敷式と捉えられるが、在地色の強いものである。1039も北屋敷式の可能性が考えられる土器である。この２点は中期中葉に位置づけられる。1038と1041は五領ヶ台併行の在地系土器である。1042は橋状把手を持ち、五領ヶ台併行のものと考えられる。1040は沈線が施される在地系の土器で、中期後葉の東鎌塚原式の可能性がある。

以上、SB-5から出土した土器をみると、前期後葉から中期後葉まで時間幅がある。このうち、1037や1039～1041は遺構底面から出土している。これらが、SB-5の時期を示すものと考えられ、SB-5は中期中葉～後葉の住居跡と考えられる。前期や中期初頭の土器は周囲からの流れ込みによるものであろう。

⑵石　器（図193－1063～1074、図196－1094）

1063～1074と1094はSB-5から出土した石器である。1063～1071は石鏃、1072は石鏃の未製品である。いずれも凹基無茎鏃であるが、抉りの深い1063～1067、浅い1068～1071に大別できる。石材は1066が砂岩、その他はシルト岩である。刃部を含め、ソフトハンマーの押圧剥離により加工・成形される（註２）。なお、完形は1063と1068・1070のみであり、その他は一部を欠損していた。SB-5は石器制作にかかわる住居跡と考えられるため、これらは制作時に破損したものである可能性が考えられる。

1073は頁岩製の石匙で、刃部は内湾する。ソフトハンマーの押圧剥離により成形される。1074はシルト岩の石核素材剥片である。ハードハンマーによる直接打撃が行われている。1094は石皿で、石材は砂岩である。

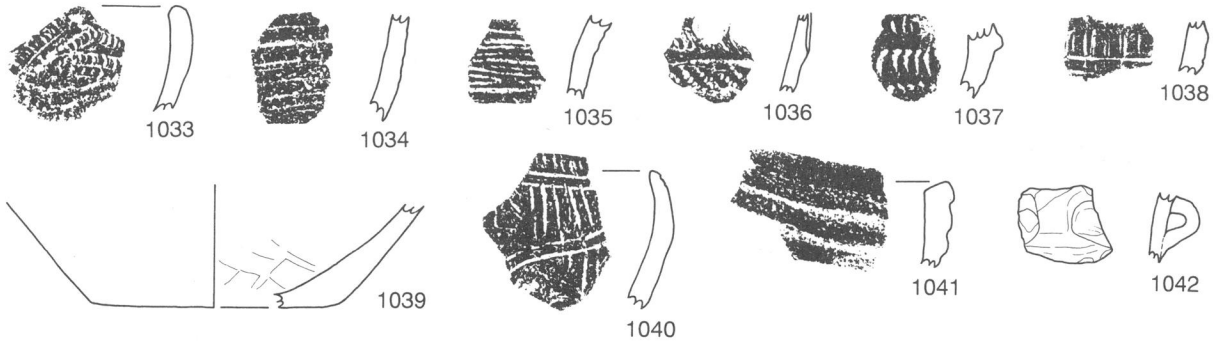
２．SB-5周辺の出土遺物（図194－1075～1088、図195－1089～1091）

SB-5周辺は表土除去時にも石器が出土した。1075～1091は34区と46区から出土した石器であるが、この範囲はミョウガ原遺跡の中でも、多くの石器が出土した範囲の一つである。

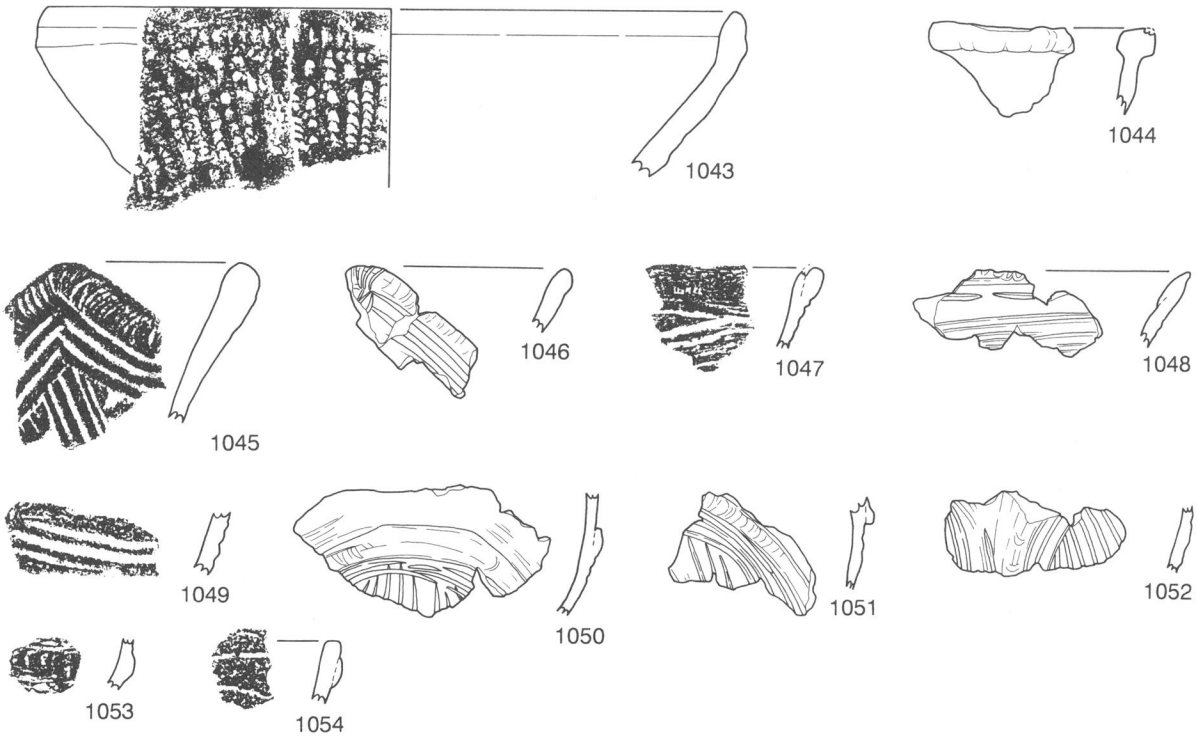
1075～1085は石鏃で、1075は五角形鏃、その他は凹基無形鏃である。このうち、1081・1083～1085は未製品である。石材は1076と1077は砂岩、1082は黒色頁岩、1084は頁岩、その他はシルト岩である。1075～1084は刃部を含め、ソフトハンマーの押圧剥離で加工されている（註３）。1085は縦長剥片からソフトハンマーの直接打撃で作りだされ、ソフトハンマーの押圧剥離により成形されている。

1086と1088は横型石匙である。1086はシルト岩製で、ソフトハンマーの押圧剥離により成形される。1088は横型石匙の未製品である。石材は頁岩で、横長剥片を素材としている。ソフトハンマーの直接打撃で対になる抉りが作り出されている。刃先の加工が行われる途中で放棄されたと考えられる。SB-5から出土した石匙と異なり、外湾刃部を持つ。

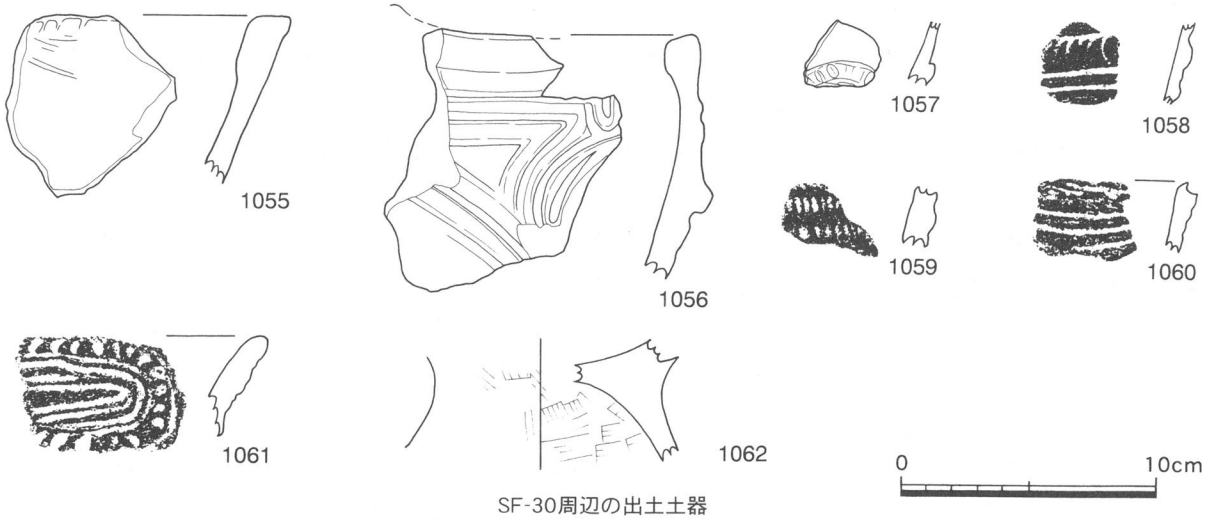
1087はシルト岩製の石錐である。横長剥片の側辺部を刃部に加工するもので、刃部はハードハンマーによる急角度の押圧剥離で作られる。1089は頁岩製の削器である。横長剥片を素材とし、刃部はソフトハンマーの押圧剥離による。1090はシルト岩製の縦型石匙である。ソフトハンマーの直接打撃で作られた縦長剥片を素材とし、ソフトハンマーの押圧剥離で成形される。1091は頁岩の剥片である。



SB-5の出土土器



SF-30の出土土器



SF-30周辺の出土土器

図192　縄文土器

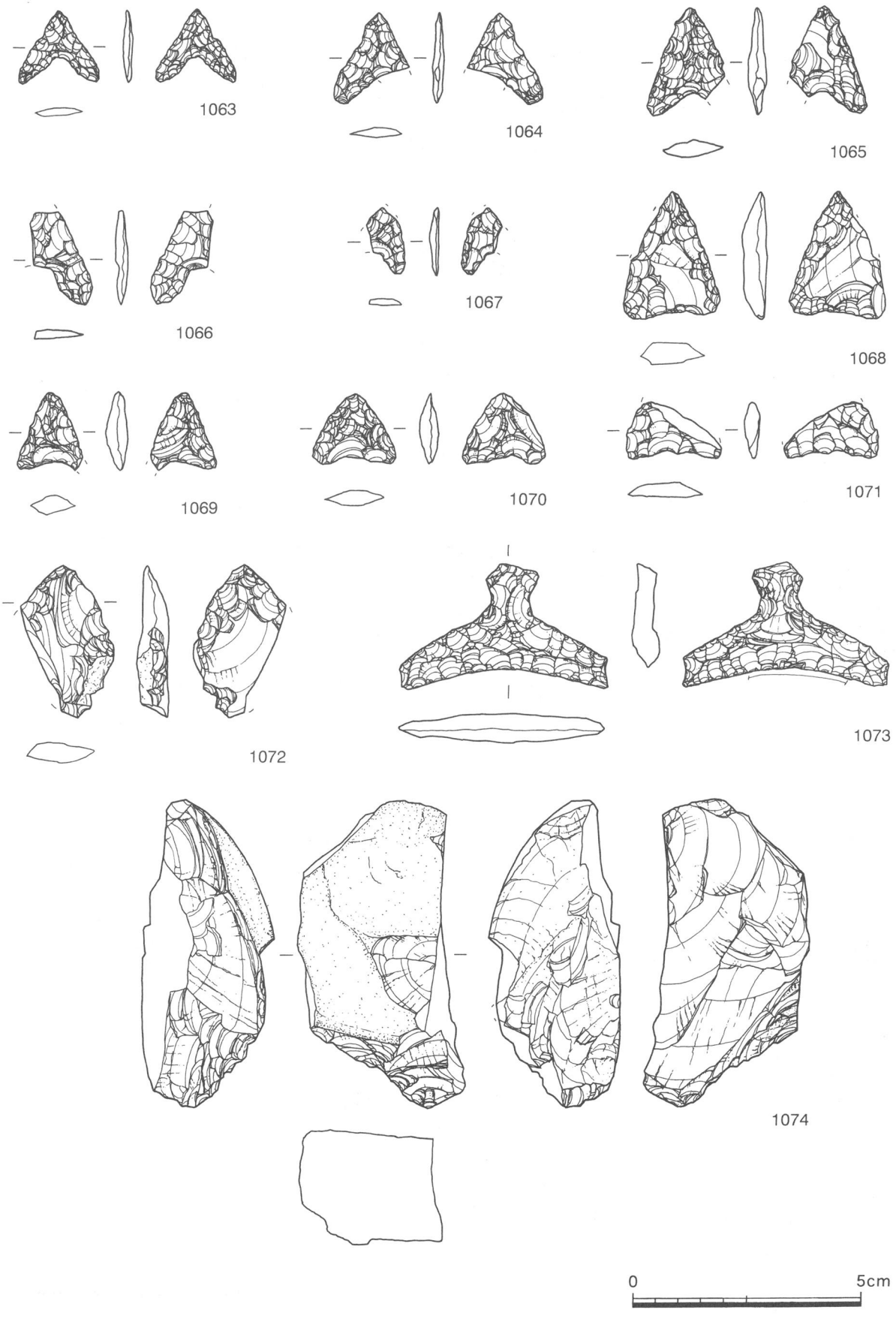


図193　SB-5出土の石器

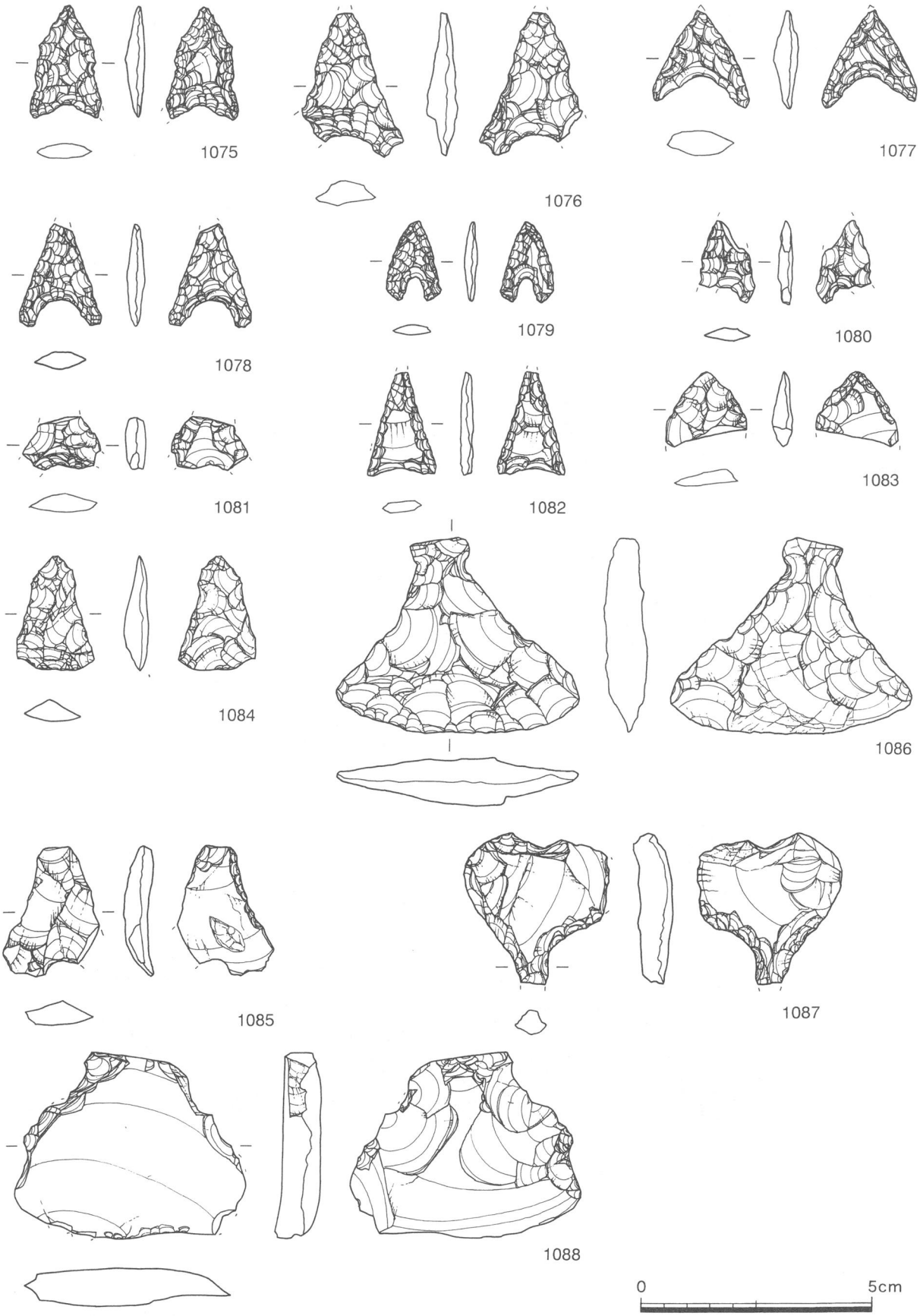


図194　SB-5周辺出土の石器1

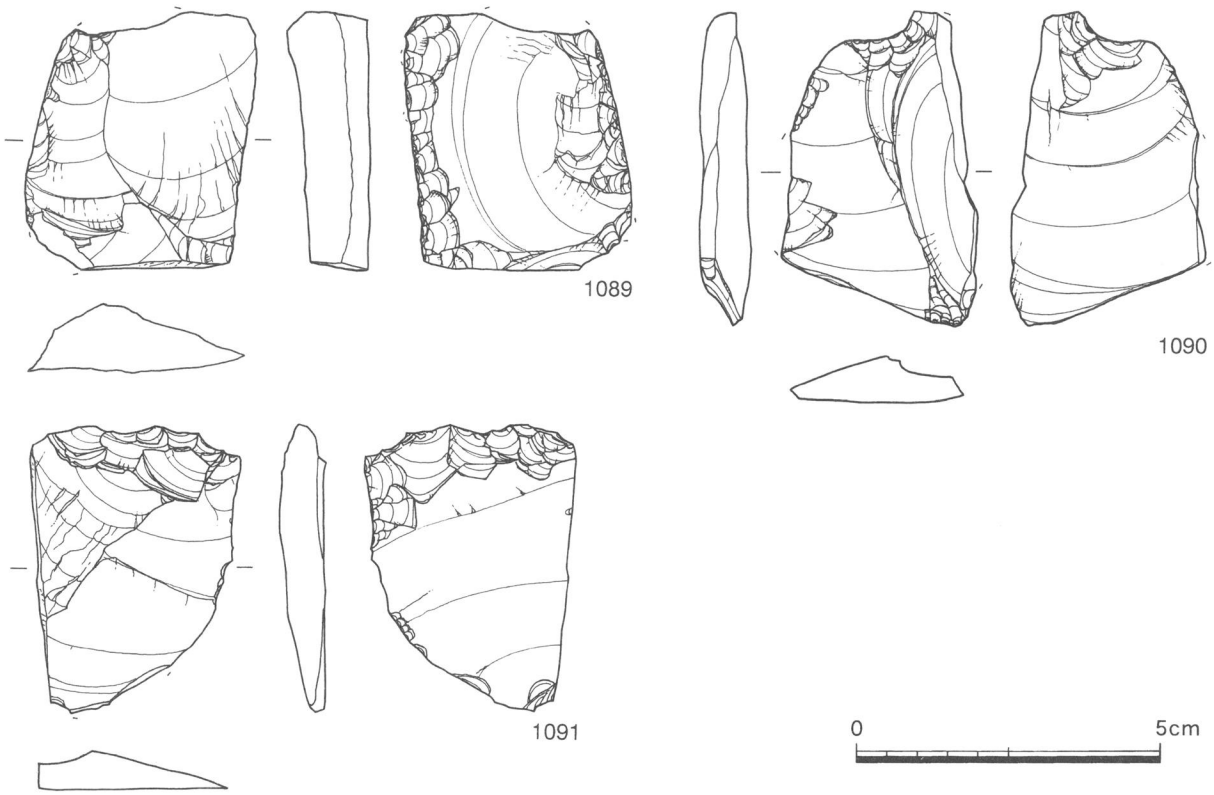


図195　SB-5周辺出土の石器２

３．SF-30の出土遺物（図192－1043～1054、図196－1092・1093）

1043～1054はSF-30から出土した土器である。いずれも、表面の風化が進んでいた。1043は浅鉢で、口唇部直下には半裁竹管による２条の押引きが施される。狢沢式、あるいは藤内～井戸尻式に併行する土器と考えられる。1044は北屋敷式で、中期中葉に位置づけられる。1045～1053は五領ヶ台、北裏ＣⅡ式に併行する時期の在知的な土器である。沈線の他に、1045や1046・1048・1050～1053では隆帯に爪形文が半裁竹管状の工具によって連続の押し引き状に施文されている。1054は木島Ⅱ式と考えられる土器である。表面の風化が著しいが、粘土紐が貼り付けられていることが観察できる。早期の最終末に位置づけられる。

以上の縄文土器のうち、早期の1045は流れ込みによるものと考えられる。その他の土器は中期初頭～中葉に位置づけられるものである。1043は遺構底面から出土し、遺構の時期を示すものと考えられる。そのため、SF-30は中期中葉の遺構と考えられる。

1092と1093は石皿である。共に石材は砂岩で、表面の風化が著しい

４．SF-30周辺の出土遺物（図193－1055～1062）

1055～1062はSF-30の周辺、５区の東半部から出土した縄文土器である。1055は表面の風化が著しく判然としないが、早期末の条痕文系土器と考えられる。1056は勝坂Ⅱ式併行の土器で、中期中葉に位置づけられる。1057と1058は五領ヶ台、北裏ＣⅡ式併行の土器で、中期初頭に位置づけられる。隆帯には刻目文が施される。1059は狢沢～藤内式併行の土器で、中期中葉に位置づけられる。1060は五領ヶ台式に位置づけられる中期中葉の土器である。1061は浅鉢の口縁部と考えられ、1062は台付深鉢の脚台と考えられる。共に時期を特定し難いが、中期の可能性がある。

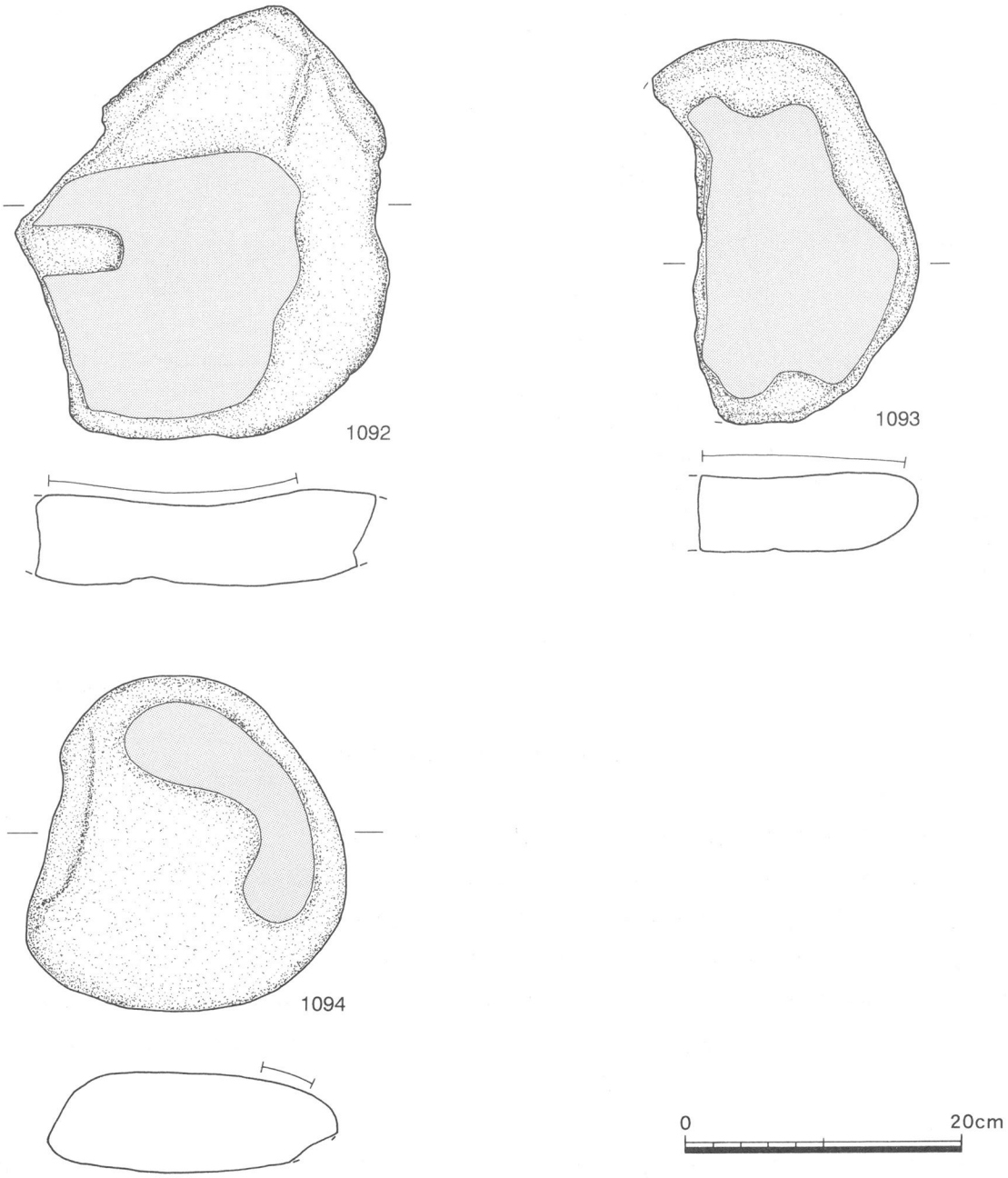


図196　SB-5・SF-30出土の石皿

5．SF-32とその周辺の出土遺物（図197－1095～1104）

1095・1096・1099はSF-32から、1097・1098・1100～1103・1104はSF-32周辺から出土した。

1095～1098は石鏃である。石材は1095が黒色頁岩、1096～1098がシルト岩である。いずれも、刃部をはじめとしてソフトハンマーの押圧剥離で整形される。

1099と1100は珪質シルト岩製の横型石匙で、1100は横長剥片を素材としている。1099は両面加工、1100は周縁加工で、共に刃部を含め成形はソフトハンマーの押圧剥離である。

1101は頁岩の剥片である。先端が尖るように加工されており、石鏃もしくは尖頭器、石錐等の未製品と考えられる。

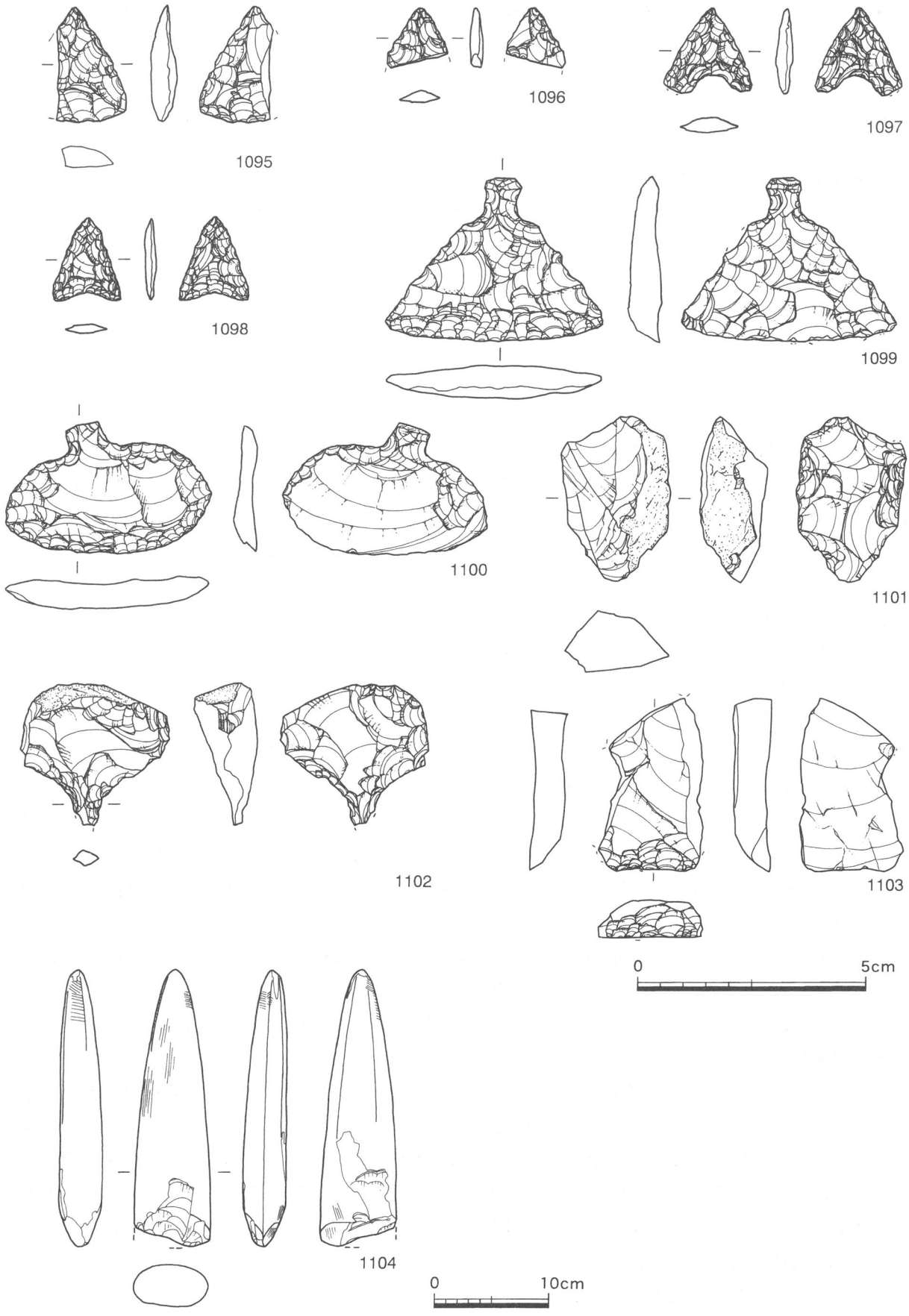


図197　SF-32とその周辺出土の石器

1102は珪質シルト岩製の石錐である。縦長剥片を素材とし、刃部はソフトハンマーの押圧剥離、その他はハードハンマーの直接打撃で加工されている。1103の石材は頁岩で、急角度の刃部がソフトハンマーの押圧剥離で形成されている。石匙の破損品であろうか。1104は乳棒状石斧である。片麻岩製で、全長24.6cm、最大幅6.6cm、厚さ3.75cmと大型である。

6．その他の出土遺物（図198～図201－1105～1146）

1105～1125は石鏃で、1105～1121は凹基無形鏃、1122は円基鏃、1124と1125は凹基有茎鏃である。1105～1107が3'区、1108～1110・1124が53区、1111が48区、1112～1114が54区、1115・1122・1123・1125が15区、1116～1118が26区、1119と1120が25区、1121が24区からの出土である。3'区、26区、53区、54区といった遺跡北東部からの出土が多いといえよう。石材は1106・1116・1121が黒曜石、1109と1120が細粒の砂岩、1124が黒色頁岩、1107が珪質シルト岩、1113・1114・1119が頁岩、その他はシルト岩である。いずれもソフトハンマーの凹圧剥離により加工されている。

1126～1133は尖頭器で、石材は1127が頁岩、1131が黒曜石、その他はシルト岩である。1127・1128・1131は53区、1126・1132は3'区、1130は46区、1133は24区からの出土である。遺跡中央部、自然流路周辺からの出土が多い。刃部の加工は1128がソフトハンマーによる押圧剥離、1131が押圧剥離（註4）、その他はソフトハンマーによる直接打撃である。刃部を除いた部位の加工は、1128がソフトハンマーによる押圧剥離、その他はソフトハンマーによる直接打撃である。1132は表面の風化が著しく整形は不明である（註5）。これらは縄文時代草創期のものと考えられる。

1134と1135は横型石匙である。1134は14区、1135は25区からの出土で、1134は珪質シルト岩、1135は頁岩製であるが、1135は残存状況が悪い。1134は横長剥片を素材とし、ソフトハンマーの押圧剥離で加工される。1136は24区から出土した黒曜石の二次加工剥片である。

1137は縦型石匙である。シルト岩製で15区から出土した。縦長剥片を素材とし、ソフトハンマーの直接打撃で形態形成を行い、素材辺を刃部にしている。この石匙の刃部は摘みに対して垂直につき、横型石匙の特徴を持つ。横型石匙を縦型石匙の形態でつくった折衷式の石匙である。

1138は15区から出土した黒曜石のエンドスクレイパーである。刃部はソフトハンマーの押圧剥離で加工されている。1139と1140は両極石器である。1139は頁岩製で15区からの出土、1140は黒曜石製で3'区からの出土である。1141は14区から出土したシルト岩製の使用痕のある石刃である。1142はシルト岩の縦長剥片で、15区から出土した。1143は使用痕のある剥片で3'区から出土した。シルト岩製である。

1144は24区から出土した砂岩製の直縁刃石器の可能性がある石器である。横長剥片を素材とし、ハードハンマーの直接打撃成形された後、刃部が研磨されている。

1145は敲石、1146は石錘である。ともに砂岩製で、15区からの出土である。1145は風化が著しく、残存状況は悪い。

以上の石器のうち、1126～1133の尖頭器は縄文時代草創期に位置づけられる。これらは遺跡の中央部、3'区・53区からの出土が多い。3'区や53区とその周辺から出土した他の石器の中にもこの時期のものが含まれていると考えられる。15区から出土した1124の有茎石鏃は中期後半以降の可能性がある。SB-5やSF-30の時期は中期に位置づけられるので、上述した石器のうち、15区周辺出土のものの中には中期のものも含まれていると考えられる。24区から出土した1144は直縁刃石器の可能性を考えたが、これが正しければ、弥生時代のものとして位置づけられる。この場合、24区から出土した他の石器の中にも同時期のものが含まれている可能性がある。

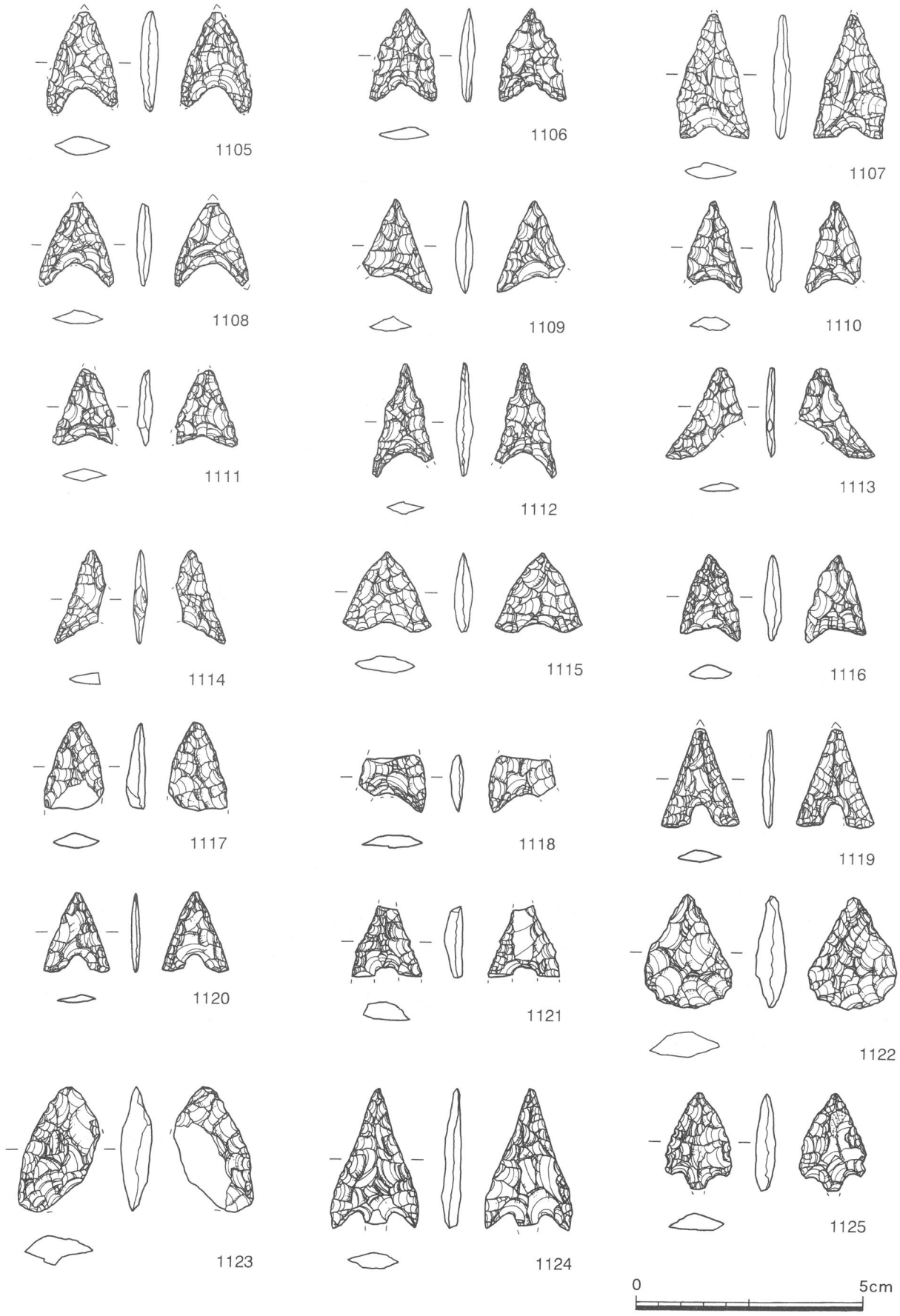


図198　その他の地区出土の石鏃

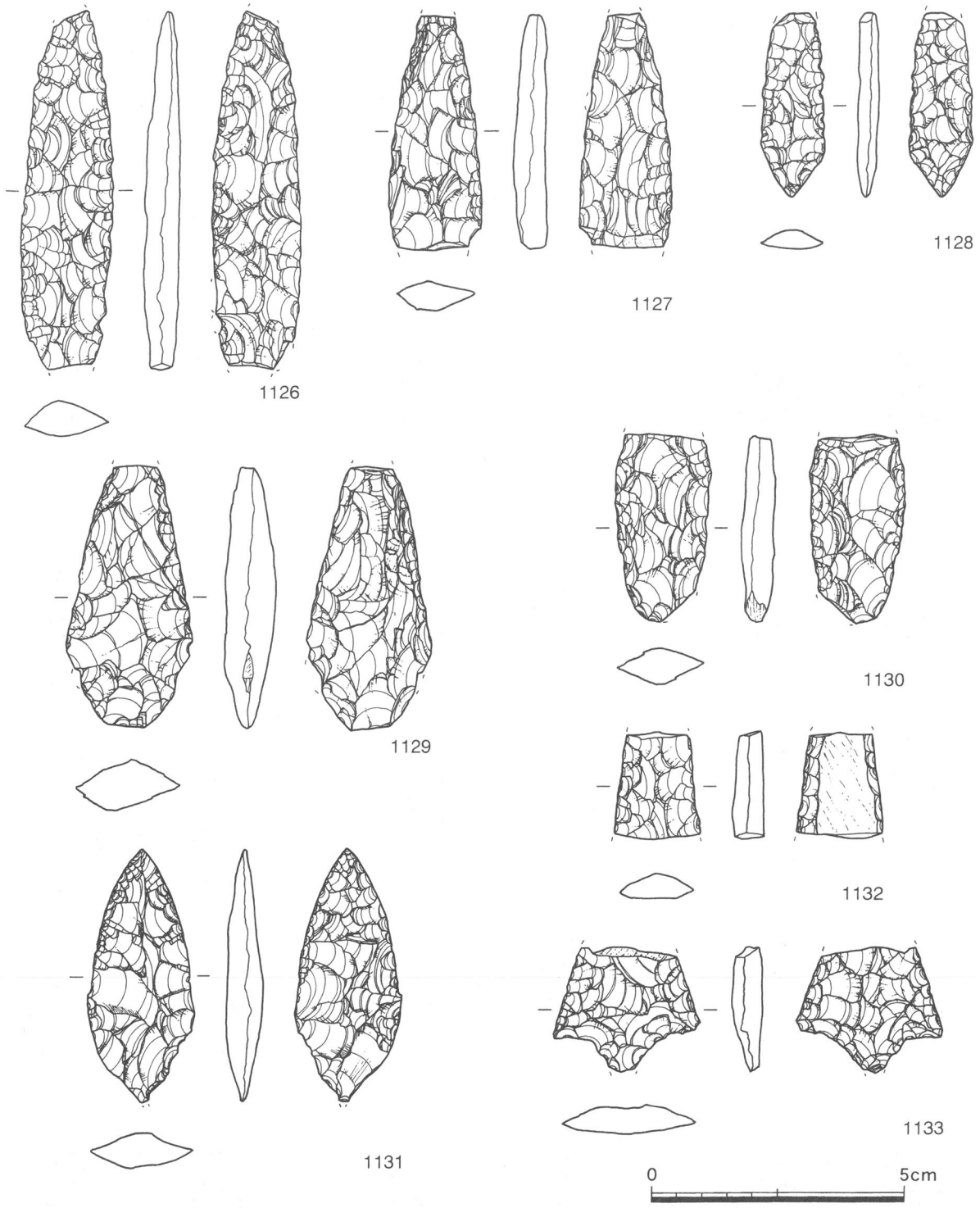


図199　その他の地区出土の尖頭器

註

1　縄文土器については、澁谷昌彦氏と小崎晋氏に御教示頂いた。
2　縄文時代の石器については角張淳一氏に御教示頂いた。
3　角張淳一氏の御教示によると、1079と1082は弾性変形するハンマーであるが、その変形度合いが通常のソフトハンマーよりも弱いハンマーで押圧剥離されている。1085・1097・1100・1116・1121・1126・1128・1133も同様である。
4　角張氏の御教示によると、押圧剥離ではあるが、工具を縁辺に押しつけて直接打撃によるバリをとる押圧剥離の加工である。
5　1133は有舌尖頭器と捉えたが、石鏃の可能性も指摘された。

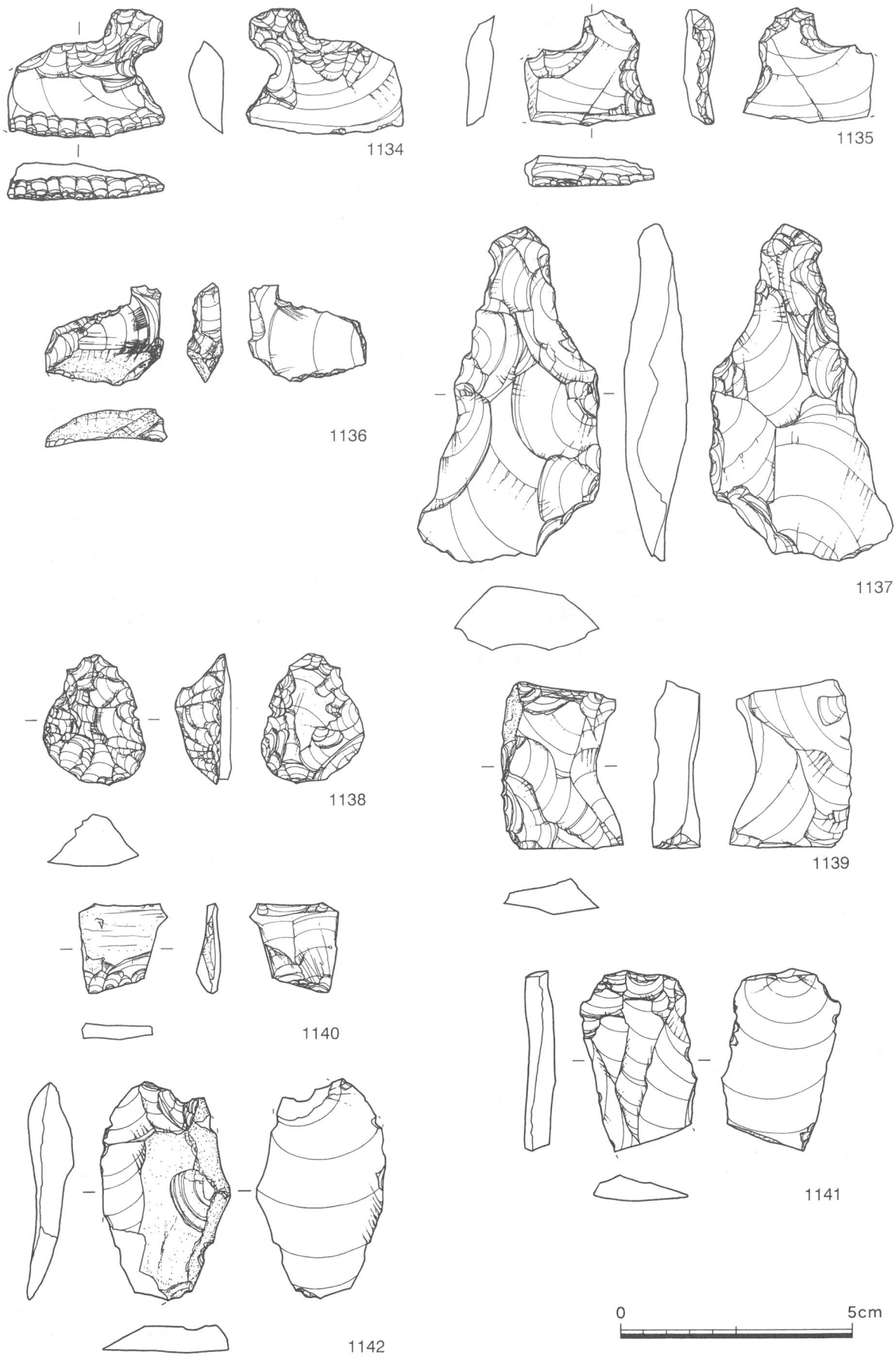


図200　その他の地区出土の石器１

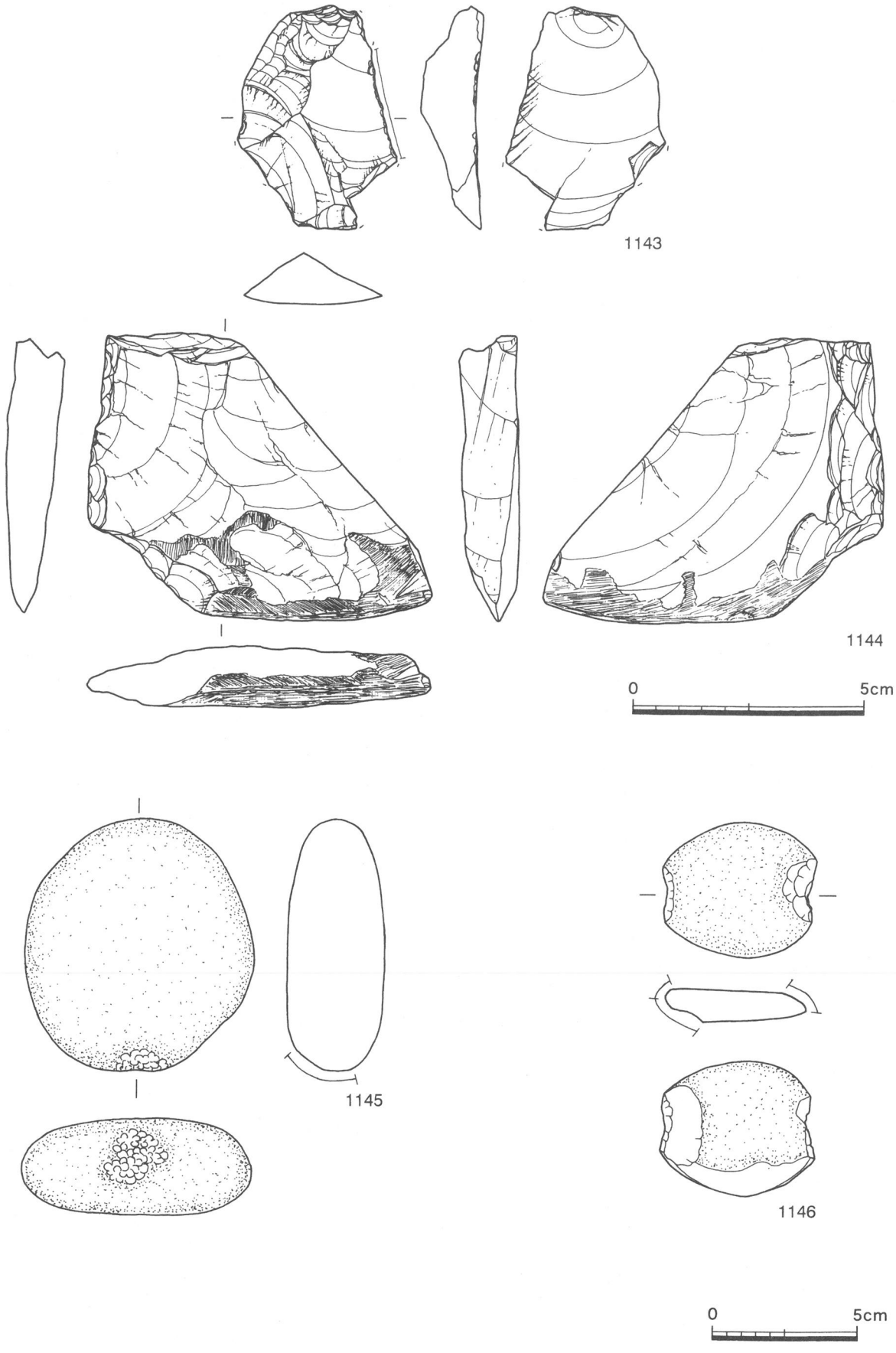


図201　その他の地区出土の石器２

第６節　旧石器時代の遺物

旧石器時代の遺物としてはナイフ形石器が２点出土している（図202）。ともに、後期旧石器時代の資料であり、ミョウガ原遺跡の所在する丘陵では初出の資料である。

1147は平成12年度に調査を実施した46区において、表土から出土した。横長の剥片を素材として用い、二側縁に調整を施した二側辺加工のナイフ形石器である。調整はやや鋸歯状を呈する。素材剥片の打面は単剥離打面である（註１）。石材は黒曜石で（註２）、形態的には愛鷹・箱根第３期、関東Ⅳ層に属すると考えられる。

1148は平成10年度に調査した14区の表土から出土した。単剥離打面の縦長剥片を素材とした二縁辺加工のナイフ形石器である。刃部渡と先端部は欠損している。時期については断定できないが、1147と同時期か後出するものと考えられる。石材は黒曜石である。

註

1　石器に関しては静岡県教育委員会文化課 笹原千賀子氏の御教示による。

2　黒曜石の原産地については、国立沼津工業専門学校 望月昭彦教授に分析していただいた。表12はその成果である。判別群等については㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所2003を参照して頂きたい。

表11　ナイフ形石器観察表

遺物番号	出土地点	石　材	縦長（cm）	横長（cm）	厚（cm）	重さ（g）	図版番号
1147	46区	黒曜石	3.78	1.8	0.76	4.1	86
1148	14区	黒曜石	4.81	1.76	0.77	5.7	86

表12　出土黒曜石製石器産地推定結果

遺物番号	分析番号	推定産地	判別図判別群	第１候補産地			第２候補産地		
				判別群	距　離	確　率	判別群	距　離	確　率
1147	MK03-576	諏訪星ヶ台	SWHD	SWHD	3.07	1	SBIY	87.31	0
1148	MK03-575	諏訪星ヶ台	SWHD	SWHD	1.91	1	SBIY	65.14	0

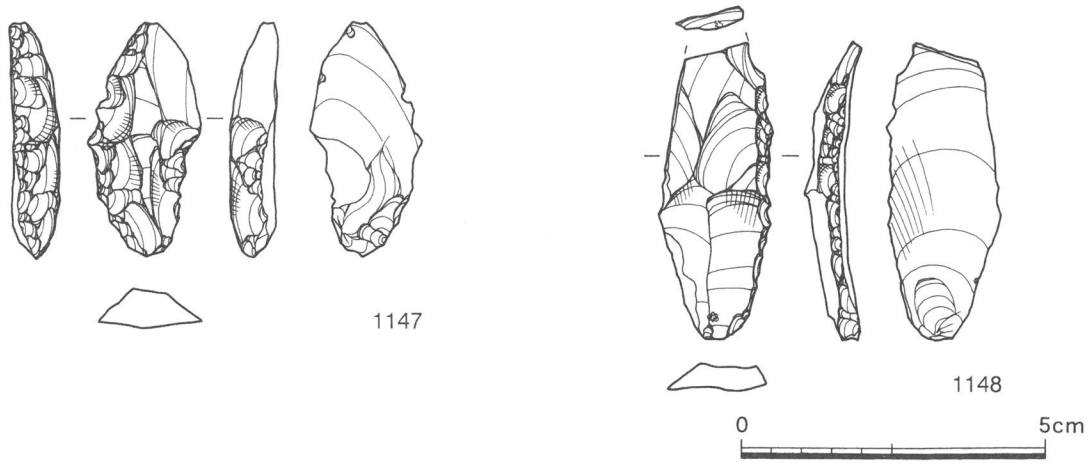


図202　旧石器時代の遺物

第５章　空港関連遺跡その他の地点

第１節　Ｋ地点

空港関連遺跡Ｋ地点はミョウガ原遺跡の西方約500ｍに所在する調査地点である。Ｋ地点の標高は160ｍ前後であり、標高140ｍ前後のミョウガ原遺跡より一段高い丘陵となっている。

Ｋ地点はミョウガ原遺跡に近接する地点であるため、ミョウガ原遺跡と同様の遺構・遺物が存在する可能性が指摘された地点である。

調査は10,965㎡を対象として、平成13年８月17日から９月６日まで確認調査を実施した。実掘削面積は623㎡である。10～100cm程度の耕作土を除去し、精査を行ったが、遺構・遺物は全く検出されなかった。本来的に遺構が存在し、耕作等により破壊され消滅した可能性は否定できないが、一辺の遺物も出土しなかった点を勘案すると、その可能性は低いと言える。

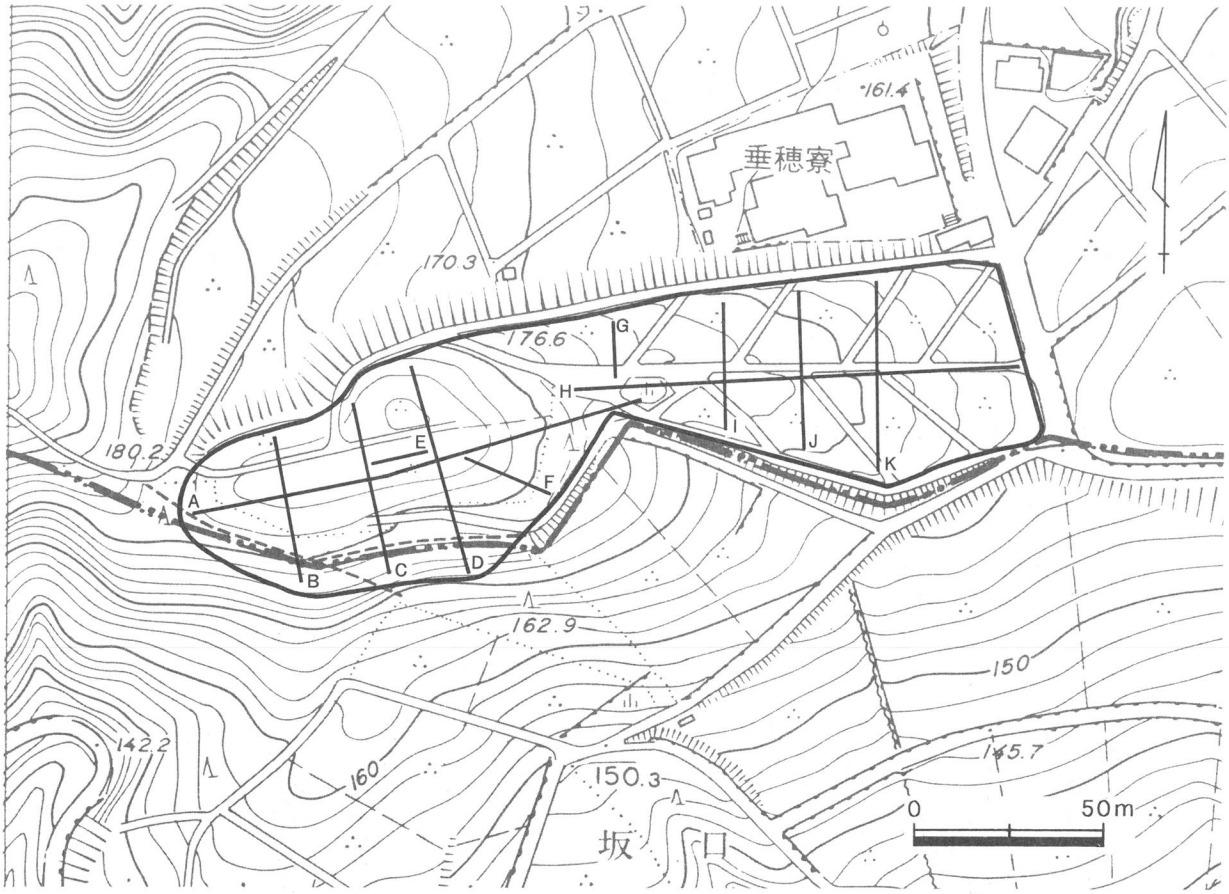


図203　Ｋ地点全体図（1/2,000）

第２節　Ｒ地点

空港関連遺跡Ｒ地点はミョウガ原遺跡の南東約1.9㎞に所在する。空港関連遺跡のほとんどが、丘陵上の遺跡であるのに対し、Ｒ地点は丘陵の麓に所在する地点である。

Ｒ地点の南方約50ｍは王屋敷寺院跡、東隣は星久保古墳群として周知されている埋蔵文化財包蔵地である。平成12年度に空港横断道路榛原地区として本調査を実施した星久保古墳群は、Ｒ地点の約250ｍ東南東に所在する。そのため、Ｒ地点はこれらに関連する遺構や遺物が存在する可能性が考えられていた地点である。

Ｒ地点は平成13年10月９日から11月16日まで、3,653㎡を対象として確認調査を実施した。掘削面積は220㎡である。調査の結果、10～30cm前後の表土の下は、100～150cm程度の近代以降の盛土層で、その下は100cm以上の河川堆積層であることが判明した。僅かにＣ２トレンチにおいて、表土の下260cmに地山と考えられる層を検出したのみである。遺構としては３基のピットを検出したが面的な広がりはなかった。

遺物は河川堆積層から山茶椀や青磁の小片と砥石が出土した（図206）。山茶椀は小破片であり、図示するに能わなかったが、東遠江産のものであった。青磁は龍泉窯系の青磁碗で、Ａ２類に分類される。砥石は残存長5.5cm、幅3.8cm、厚さ1.7cmで、凝灰岩製である。

調査範囲の西側には小河川が流れ、河川堆積層はこの河川により形成されたものである。河川堆積層には近現代のものは含まれず、近世以前に堆積したものと考えられる。上記の遺物は周囲からの流れ込みによるものであろう。遺構の時期や性格については不明であるが、少なくとも近世以前のものとはいえよう。

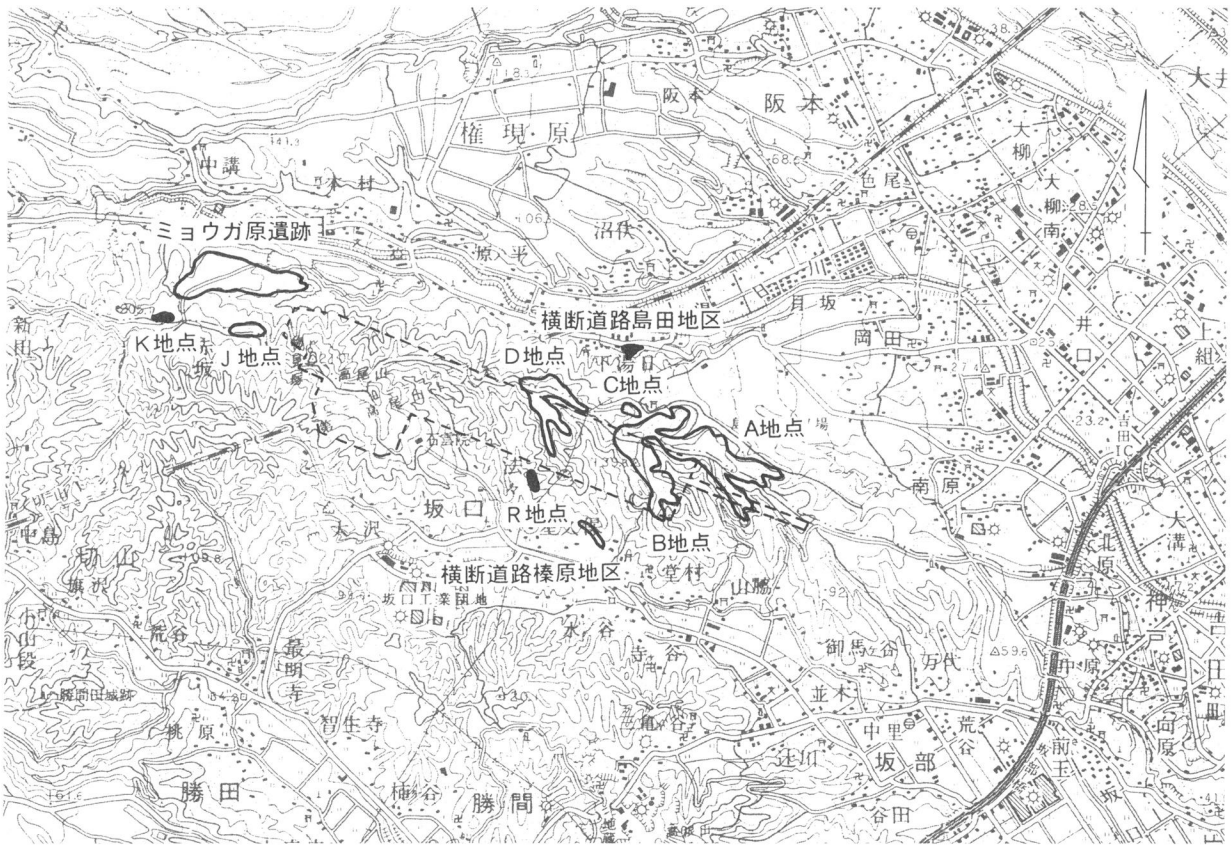


図204　Ｋ地点・Ｒ地点・横断道路島田地区位置図（1/50,000）

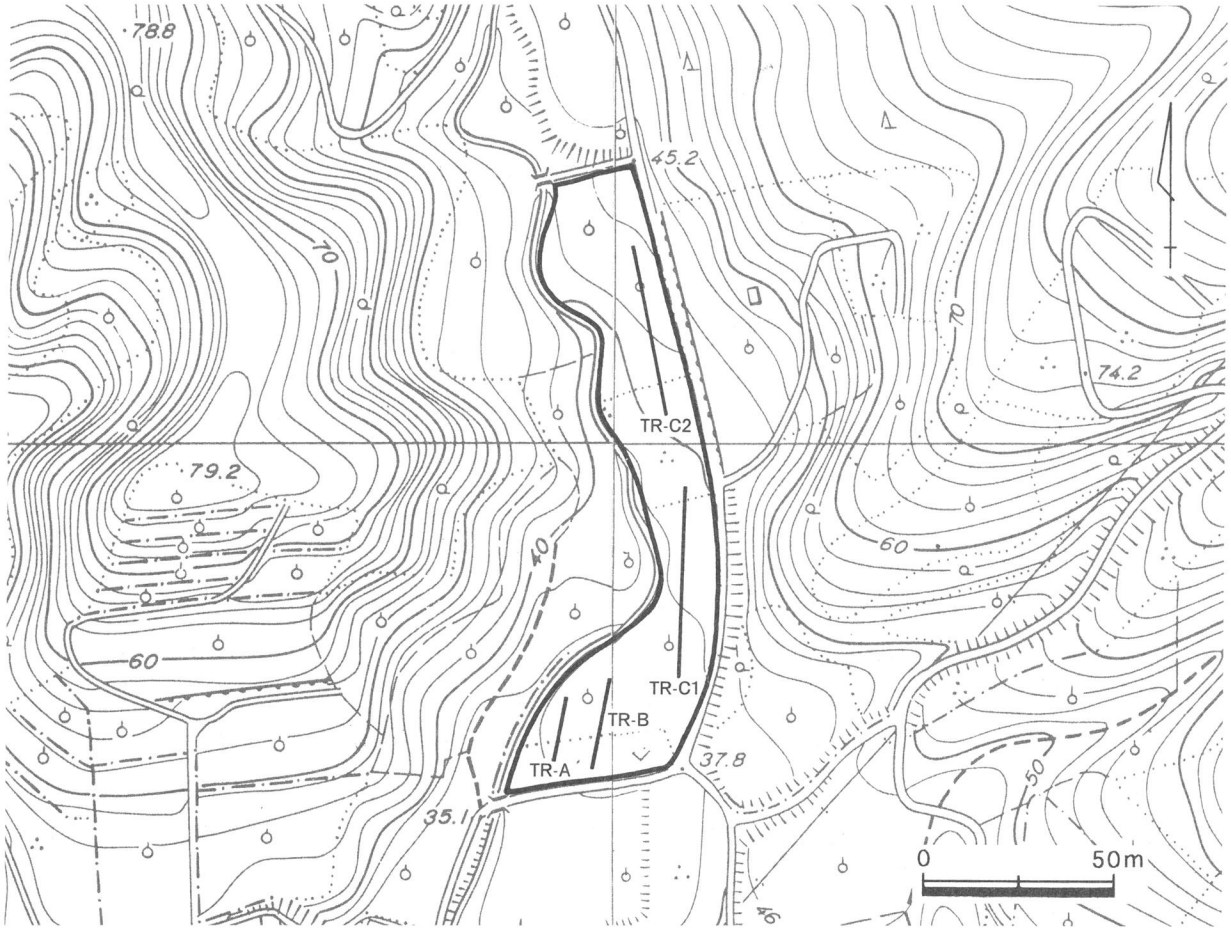


図205　R地点全体図（1/2,000）

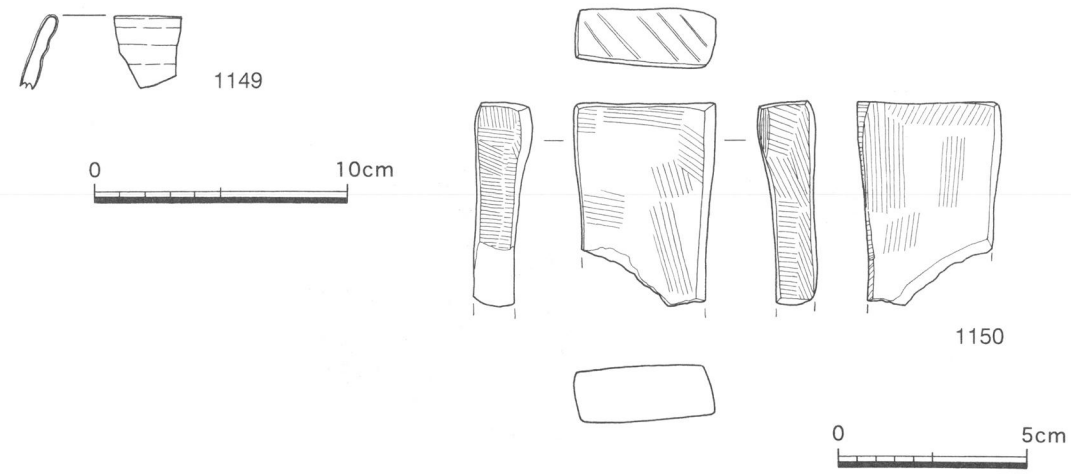


図206　R地点出土遺物

第３節　横断道路島田地区

横断道路島田地区は空港本体の北側にあり、前節に記したＲ地点と同様、丘陵の麓に所在する地点である。ミョウガ原遺跡からは東南東に２kmの距離で、0.3km南の丘陵上には平成９年度に調査した水掛渡古墳群Ｃ群（空港Ｃ地点）が存在する。

横断道路島田地区は杉木原遺跡の東に隣接する地点であるため、遺跡が広がっている可能性が指摘されていた。そのため、平成13年11月19日から、4,600㎡を対象として確認調査を実施した。

調査は11月28日まで行い、400㎡を掘削した。調査以前は宅地であったため、地表下10～60cmは盛土層となっていた。平坦部に位置するTP-1～6とTP-10では盛土の下は厚い粘土層となっていた。遺構については一切検出されなかった。遺物はTP-5から甕と考えられる体部の破片が１点出土したのみである。TP-7～9は、先述した７基のテストピットより一段高い段丘部に位置する。TP-7とTP-8においては、杉木原遺跡で遺構検出面となっている層が存在することが確認できた。遺構はTP-8で１条の溝を検出したが、時期は不明である。なお、テストピットを拡張して遺構の広がりについて調べたが、杉木原遺跡の方へのびていることが確認できたのみで、調査区内へ広がることはなかった。遺物は表土層から山茶椀と甕の細片が各１点出土したのみである。

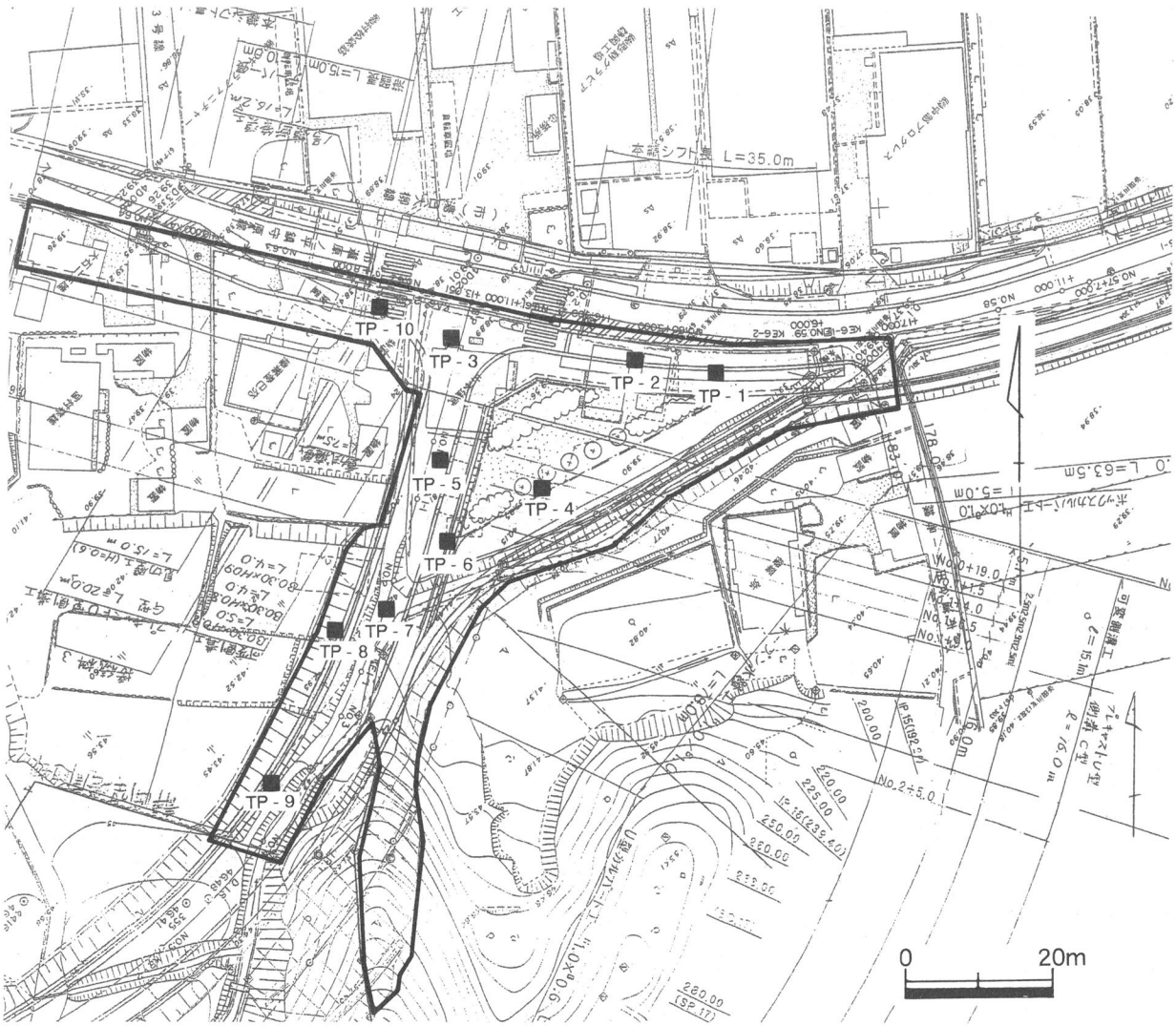


図207　横断道路島田地区全体図（1/1,000）

第6章　ま　と　め

第1節　ミョウガ原遺跡について

1．平安時代～鎌倉時代の集落

全体の状況　ミョウガ原遺跡は台地平坦面に広がる遺跡である。ミョウガ原遺跡において、調査の中心となったのは平安時代後半～鎌倉時代初頭の集落跡である。この時期に該当する遺物は遺跡のほぼ全域で出土し、遺構は主に遺跡の中央部で検出した。ただし、その残存状況は良好ではなかった。調査以前、この地には茶畑が広がっており、昭和以降、数回の改植が行われている。そのため、遺跡の大半は耕作に伴う撹乱が著しかった。集落跡の中心部にあたる遺跡中央部の51区や15区、16区、17区等は周囲の遺構の広がりから推察すると、本来的には集落が展開していたものと考えられる調査区であるが、撹乱が著しく遺構は検出できなかった。なお、当該期の遺構は５区や29区、50区など遺跡の辺縁部でも検出している。平安時代後半から鎌倉時代初頭にかけて、台地平坦面の中央部に集落の中心があるが、台地平坦面のほぼ全域が利用されていたのであろう。調査で検出した遺構は、かろうじて撹乱による破壊を免れたもので、本来的にはより多くの遺構が台地平坦部に広がっていたと推測される。

この時期の遺構としては54棟の掘立柱建物跡、35条の溝状遺構、15基の柵跡、４基の竪穴状遺構、27基の土坑、自然流路を検出している。集落跡は中央部を東流する自然流路（SR-1）により、南北に大きく二分することができる。この自然流路を境として、出土遺物の傾向に違いが見て取れる（表13、図208)。まず、自然流路における出土遺物の傾向としては、山茶椀が主体となっている、自然流路の北側も同様に山茶椀が主体となり、灰釉陶器は非常に少ない。いっぽう、自然流路南側では山茶椀と灰釉陶器が混在する状況にある。ただし、自然流路に近い46区、52区、15区では山茶椀の出土量が勝り、台地縁辺部の34区、35区、48区、15区の南西部では灰釉陶器の出土量が勝るという傾向がある。

以上の遺物出土状況から、ミョウガ原遺跡では、台地平坦部の南縁部で初めに集落が形成され、その後、自然流路周辺と流路北側に展開したと考えられる。ところで、ミョウガ原遺跡の調査においては、遺構が集中する箇所とそうでない箇所があり、そのまとまりから、本書では大きく７つの遺構群に分けて記した。このうち、北西部の遺構群、北側中央部の遺構群、北東部の遺構群、南西部の遺構群の北半は12世紀中葉～13世紀前半の集落跡と位置づけられる。南西部の遺構群の南半、南側中央部の遺構群、南東部の遺構群、東端部の遺構群は10世紀後半～11世紀の集落跡と区分ができる。次に、各遺構群と自然流路について考えてみたい。

北西部の遺構群　ここでは、６棟の掘立柱建物跡を始め、15条の溝状遺構、土坑や柵跡を検出している。まず、注目できるのは「コ」字状の溝状遺構であるSD-2と、「L」字状の柵跡SA-6である。北西部における遺構の大半が、南北と西をSD-2に、東をSA-6に囲まれた範囲に存在する。この二つの遺構は北東部の掘立柱建物群を区画する溝と柵であったと考えられる。SD-2からはⅠ期～Ⅲ期の山茶椀が出土し、廃絶年代としては13世紀前半が想定できる。北西部の遺構群における他の遺構も同時期の山茶椀が出土し、掘立柱建物群とSD-2は並存していたと考えられる（註１）。また、SD-2から北側に17m、西側に39m離れた位置には「L」字状の溝状遺構であるSD-1が、北西部の遺構群を更に区画するように検出できた。出土遺物からSD-1はSD-2と同時期の遺構と考えられる。この溝の西側や北側で検出した遺構は非常に少なく、SD-1は北西部の遺構群のみならず、ミョウガ原遺跡の集落跡全体を区画するものである可能性も考えられる。なお、ミョウガ原遺跡の所在する台地平坦面において、24区より西側は、茶畑が開墾される以前、現状より小高くなっていたようである。SD-1とSD-2は区画の役割に加え、雨水が流

図208 灰釉陶器・山茶椀の出土傾向

れ込むのを防ぐ機能を併せ持っていたことも想定できる。さて、北西部における６棟の掘立柱建物跡をみると、SH-5とSH-6は規模が大きく、この２棟が北西部の建物群における中心的な存在と考えられる。ただし、この２棟は重複し、時期を違える遺構である。SH-5はSH-3、SH-4とも重複するため、それぞれ時期を違えるものである。SH-5と並存の可能性があるのはSH-1とSH-2である。SH-6は、SH-1～４と並存した可能性がある。ただし、SH-3とSH-4は重複するため、SH-６と併存した建物は多くても３棟である（SH-1～3、あるいはSH-1・2・4）。以上から、北西部においては、最大で３棟～４棟の建物が併存していた可能性がある（註２）。SH-5を中心としたグループ、SH-6を中心としたグループのどちらが先出するものかは不明であるが、出土遺物からは、共に12世紀中葉～13世紀前半建物群と位置づけられる。

北側中央部の遺構群　ここでは11棟の掘立柱建物跡、４基の土坑等を検出したが、北西部のような区画溝や柵は検出されなかった。出土遺物から、いずれも12世紀中葉～13世紀前半の遺構と捉えられる。11棟の掘立柱建物跡は、重複する建物の存在から、11棟が並存したものではない。重複するのは、SH-8、SH-11、SH-12の３棟、SH-9とSH-12、SH-9とSH-10、SH-14とSH-15、SH-16とSH-17のそれぞれ２棟ずつである。調査の成果からは完全な同時代性を持つ建物を抽出することはできないが、同時期に存在した建物の数について考えてみたい。掘立柱建物跡は、その立地状況から、南側のグループ（SH-7～12）と北側のグループ（SH-13～17）に細分でき、まず、南側のグループから見ることにしたい。南側のグループでは、重複状況から、２～３棟の建物が並存していた可能性がある。SH-8とSH-9を中心として考えてみたい。SH-8はSH-7、SH-9、SH-10、SH-11と併存した可能性がある。ただし、SH-9とSH-10はそれぞれ重複し、SH-11はSH-8に近接しているため、SH-8と並存していたのは多くても２棟と言える。SH-9は、SH-7、SH-8、SH-11の３棟と並存した可能性がある。ただし、SH-8とSH-11が近接するため、この２棟が並存した可能性は低い。そのため、SH-9と並存していたのは最大でも２棟と考えられる。北

側のグループでは、SH-14とSH-16、SH-15とSH-17がそれぞれ同時期の可能性がある。これにSH-13を加えて考えると、北側のグループでも２～３棟の建物が並存していたと考えられる。

以上から、北側中央部の遺構群では４～６棟の建物が並存していたと考えられる。なお、先述した北西部の遺構群と異なるのは、均質的な規模の掘立柱建物のみで構成されている点である。

北東部の遺構群　12棟の掘立柱建物跡、６条の溝、４基の土坑等を検出している。注目できるのは導水遺構１・２である。共に、石組の溝部と方形の土坑部で構成され、石組の溝部により、自然流路から水を導き、土坑部に水を蓄えたものと考えられる。なお、本来的には石組みの溝部は地表下に埋没し暗渠となっていたのであろう。自然流路は調査時、渇水期においても少量の湧水があった。この流水をSA-15で堰き止めてかさを増し、導水遺構１・２に水を引き込んだと考えられる。この２基の遺構は流路北側における取水場としての機能を担ったと考えられる（註３）。出土遺物等からは両者が併存したものか、時期を違えるものかは不明である。導水遺構２の土坑部（SF-14）上にはSH-27が重複するように存在する。この掘立柱建物は土坑部の上屋と考えられる。導水遺構１の土坑部（SF-11）では重複するようにSH-25とSH-26が存在する。この２者も、導水遺構１の上屋であった可能性がある。

さて、北東部の遺構群では12棟の掘立柱建物跡を検出したが、この内、SH-19～22の４棟、SH-21～23の3棟、SH-24とSH-25、SH-25とSH-26のそれぞれ２棟は重複する遺構である。まず、SH-19～22を見ると、SH-19とSH-22は重複こそしないが、位置関係から並存したものとは考えがたい。これらの４基はそれぞれ、時期を違えるものと考えられる。次に、SH-21～23もそれぞれ時期を違えるものと考えられる。ただし、SH-23はSH-19あるいはSH-20と並存した可能性がある。更に、SH-24～26については、SH-24とSH-26は重複しないものの、非常に近接するため、並存したものとは考えがたい。この３棟は時期を違えるものと考えられる。なお、SH-24はSH-19やSH-20とも別時期のものであろう。以上から、SH-19～27の掘立柱建物は、２～３棟が併存したものと考えられる。これに、SH-18、SH-29、SH-28、SH-29を含めて考えると、北東部の遺構群では同時期に最大６棟の建物が存在した可能性がある。北東部における出土遺物は山茶椀が主体である。山茶椀はⅠ期の小椀、Ⅱ期～Ⅲ期の椀と小皿が出土し、時期については12世紀中葉～13世紀前半に位置づけられる。なお、この範囲は北西部と同様に貿易陶磁器が集中した範囲でもある。

自然流路　自然流路（SR-1）はミョウガ原遺跡のほぼ中央部を西から東へと、蛇行し流れている。先述したが、この自然流路は渇水期においても、わずかながら水流があり、ミョウガ原遺跡における水源の一つであったと考えられる。遺物は灰釉陶器を始め、山茶椀や青磁、白磁、砥石、縄文時代の石鏃や尖頭器等が出土している。主体となるのは山茶椀であった。山茶椀は覆土の各層から出土し、底面においても、Ⅰ期～Ⅲ期の山茶椀が出土している。いっぽう、灰釉陶器の出土量は極めて少ない。これには、自然流路周辺に展開する遺構が、いずれも12世紀中葉～13世紀前半に位置づけられるもので、灰釉陶器の時期の遺構は自然流路からやや離れ、遺跡の南部に展開することが一因と考えられる。自然流路を取水の場として活用するのは、12世紀中葉～13世紀前半と捉えられる。なお、この自然流路は北東部の遺構群で見られたように、護岸の施設など、一部には人為的改変の痕跡が見られる（註４）。なお、SX-1は自然流路がある程度埋没した時期に使われた取水の施設の可能性がある。

南西部の遺構群　ここでは、SH-30～43の掘立柱建物跡、SB-1～3の竪穴状遺構、SF-16～22の土坑、SD-22～30の溝等を検出している。ここでは、SD-28とSD-29で区画された範囲に注目できる。この区画内には、SH-30～37が存在し、この一群を南西部北半の遺構群と細分できる。調査区では15区西側中央部・46区・52区に相当する範囲である。また、これより南側は南西部南半の遺構群と捉えられる。調査区では34区に相当する。北半のSD-28とSD-29は底面からⅡ期～Ⅲ期の山茶椀が出土し、13世紀前半に廃絶年代を求められる。ただし、この２基の遺構で区画された範囲からは、山茶椀と灰釉陶器が出土し、こ

こに展開する８棟の掘立柱建物跡は２時期に大別できる可能性が想定される。SD-29で区画された範囲に所在するSH-34～38は、その位置関係からSD-29と同時期の所産といえよう。SH-30～SH-33については、SD-29との位置関係からみると、SH-32・33が上記の掘立柱建物跡と同時期の可能性がある。ここで、桁行方位をみると、SD-29に区画されたSH-34～38はN-4°-E～N-2°-Wであり、SH-33はこの範疇に収まる桁行方位である。SH-32はやや異なる方位であるが、同様の方位を持つ建物は自然流路北側の遺構群においても散見できる。以上から、SH-33～38はSD-2と同時期の12世紀中葉～13世紀前半の遺構、SH-32は同時期の可能性が高い遺構と考えたい。SH-32～38のうち、SH-35と36は重複し、時期を違える遺構である。また、SH-34はこの２棟と近接するため、これも時期を違える可能性がある。SH-32とSH-33も近接し、時期を違える可能性がある。これらの観点から、12世紀中葉～13世紀前半における南西部北半では、最大で３棟の掘立柱建物が併存したものと考えられる。

いっぽう、SH-30・SH-31を見ると、桁行方位はSH-30がN-60°-W、SH-31はN-13°-Eである。SH-30は自然流路北側の遺構群における掘立柱建物と比較しても、大きく異なる桁行方位であり、時期を違えるものと考えられる。SH-31については桁行方位からは判断はできないが、SD-28やSD-29との位置関係をみると関連性は低いと考えられる。この２棟を10世紀後半～11世紀代の遺構と捉えたい。なお、南西部北半では、遺構の大半を12世紀中葉～13世紀前半に位置づけたが、この範囲における山茶椀と灰釉陶器の出土量を比較しても、山茶椀が勝っている。

次に南西部南半について見ることにする。出土遺物からSB-1～3、地鎮祭祀跡と考えられるSF-16～20の土坑群、SF-21、以上合計９基の遺構は10世紀後半～11世紀代に位置づけられ、SF-22は13世紀前半に位置づけられる。掘立柱建物跡では、柱穴から灰釉陶器を出土しているSH-38、SH-39が10世紀後半～11世紀代の所産であろう。SH-40～SH-43についても周囲から出土している遺物の主体が灰釉陶器であることから、上記の掘立柱建物と同時期のものと考えたい。南西部南半では10世紀後半～11世紀代の遺構が主体を占めるといえる。ただし、SH-40とSH-41は重複し、更に地鎮祭祀土坑のSF-17とも重複している。SH-40は地鎮祭祀の土坑群に後出するものであるが、SH-41についてはこれらの遺構との前後関係は不明である。また、SH-41とSH-42は非常に近接するため、これとも時期を違えるものと考えられる。上述した６棟の掘立柱建物跡については最大で４棟～５棟が併存した可能性はあるが、確証を得るものではない。

南側中央部の遺構群　１条の溝と６棟の掘立柱建物跡、１列の柵跡を検出した。この調査範囲では山茶椀と灰釉陶器が出土しているが、灰釉陶器の出土量が勝っている。６棟の掘立柱建物跡はいずれも10世紀後半～11世紀代のものと考えられる。ただし、SH-48とSH-49は重複し、時期を違えるものである。この調査区では最大、５棟の掘立柱建物が併存した可能性がある。特に、SH-45～47はその位置関係から同時代性が強いと考えられる。さて、SD-31は山茶椀と灰釉陶器が出土しているが、底面からⅢ期の山茶椀が出土していることから、廃絶年代は13世紀前半に求められる。先述した掘立柱建物跡とは時期を違えるものである。あるいはこの溝は南西部北半の遺構群の東限を示す区画溝の可能性も考えられる。

南東部と東端部の遺構群　南東部では10世紀後半～11世紀代のものと考えられる４棟の掘立柱建物跡を検出した。この調査範囲からは山茶椀と灰釉陶器が出土しているが、主体となるのは灰釉陶器である。重複する建物は無く、全てが併存した可能性はある。なお、東端部では１棟の掘立柱建物跡、10世紀後半～11世紀に位置づけられる１基の竪穴状遺構を検出している。

10世紀後半～11世紀の集落の様相　この時期に位置づけられる遺構は自然流路南側でも特に台地の南縁部に展開する。散在的な展開ではあるが、掘立柱建物跡と竪穴状遺構が入り混ざる南西部南半の遺構群、６棟の掘立柱建物跡からなる南側中央部の遺構群、４棟の掘立柱建物跡を検出した南東部の遺構群というように、数棟の建物で群を成す傾向がある。遺物の出土状況や遺構の状況から見ると、南西部南半の遺構群が、この時期の集落における中心であったと想定される。なお、上述した全ての遺構が全く

の同時期とは断定はできないが、仮に同時期であるならば、最大で15棟前後の掘立柱建物が併存したと言える。

12世紀中葉～13世紀前半の集落の様相　この時期は自然流路周辺とその北側に集落が展開する。遺構の偏在状況から、北西部の遺構群、北側中央部の遺構群、南西部北半の遺構群の４つのグループに分かれる。北西部の遺構群はSD-2とSA-6により区画されるが、その範囲は東西、南北とも約50mである。北東部の遺構群も概ね東西50mにわたり展開する。自然流路南川では南西部南半のSD-29と南側中央部のSD-31に挟まれた範囲を１区画と捉えた場合、その東西の長さは約50mである。また、北西部の遺構群と北東部の遺構群、北西部の遺構群と南西部の遺構群も50m前後はなれている。集落の区画としては50m前後を基準としている可能性がある。なお、北側中央の遺構群はこれらより小さく、東西約20m、南北約30mの範囲に展開する。

北西部、北東部、南西部北半においては、それぞれの中で相対的に規模が大きい掘立柱建物がある。北西部ではSH-5とSH-6、北東部ではSH-21とSH-22、SH-28、南西部北半ではSH-34とSH-37である。これらが、各遺構群の中心的建物であったと考えられる。また、集落全体で見た場合では、建物の規模や区画状況から北西部の遺構群に優位性を見いだせ、北東部の遺構群がこれに次ぐものと考えられる。なお、貿易陶磁器類も北西部と北東部で多く出土している。

小結　ミョウガ原遺跡では54棟の掘立柱建物跡を検出したが、10世紀後半～11世紀代のものと、12世紀中葉～13世紀前半のものが混在する。概ね、遺跡南縁部のものが前者、自然流路周辺のものが、後者に相当する。掘立柱建物跡の多くは12世紀中葉～13世紀前半のものであり、集落が大きく展開するのはこの時期と考えられる。この時期、掘立柱建物は偏在的に展開し、４つのグループに区分できる。この内、北西部の遺構群が集落全体の中心的な存在であったと考えられる。

さて、ミョウガ原遺跡の集落はこの時期、質侶荘湯日郷の範囲に含まれる（註５）大治３年（1128）の「藤原永範寄進状案」や治承３年（1178）の「湯日郷四至注文案」の記載から、遺跡の南東にある物見塚から東西にのびる稜線が質侶荘南限と考えられている。また、南西限として記される勝田山はミョウガ原遺跡の南西にあり、先述した物見塚から西にのびる稜線に連なっている。このことから、遺跡南側の東西にのびる稜線が質侶郷の境界とされていたことがうかがえる。これらが記された年代とミョウガ原遺跡の集落跡の年代はほぼ重なり、ミョウガ原遺跡は質侶荘南限に近い集落であったと捉えることができる。なお、湯文献に残された湯日郷の地名のうち、当遺跡周辺で比定されているのは坂口中山である。ただし、坂口中山にミョウガ原遺跡が含まれるのかは不明である。

２．地鎮祭祀に関わる土坑群

34区で検出した５基の土坑は地鎮祭祀に関わると考えられる遺構である。その特徴を改めて記すと、①５基の土坑が東西南北の十字に配置されている。②それぞれの土坑底面には円礫が敷かれ、土坑により円礫の色に違いが見られる。③３基の土坑では中央部に灰釉陶器の長頸瓶が据えられていた。なお、この灰釉陶器は土師器で蓋がされていたようである。④祭祀行為では土師器の坏身も同時に用いられているようである。

これらの特徴から、ミョウガ原遺跡で検出した遺構は「覚禅鈔」に記載された地鎮、鎮壇法との関連を指摘された（註６）。「覚禅鈔」をみると、まず、「五色玉」、「五色石」という記載に注目できる（図209－１～４傍点部分）。これは②の特徴である円礫との関連が想起される。「五色玉」については、更に、その色調についても東が青玉、南が赤玉、西が白玉、北が黒玉、中が黄玉と記されている（図209－６傍点部分）。ミョウガ原遺跡の事例をみると、東、南、西はこれにほぼ則しているといえる。しかし、北と中央はこれとは異なり、ミョウガ原遺跡では北は赤玉のみ、中央は赤、白、青が混在していた。もっとも

1

覺禪鈔　地鎮　鎮壇

○地鎮〻壇法

○地鎮法

小野傳云。地鎮不築壇ヲ以前ニ修之ヲ。是地ヲ乞請ル諸神地主等ニ也。

○支度　法務寛云　民部卿顯頼九條堂支度也

○注進地鎮支度事

○合

○五色絲　各一丈五尺

○蘇　○蜜　○名香。安息

○五寶　○金　○銀　○眞珠　○頗梨　○商佉

○五香　○龍腦　○鬱金　○白檀　○丁子　○沈香

○五藥　○赤箭　○人參　○伏苓　○石菖蒲　○牛黃

○五穀　○稻穀　○大麥　○小麥　○菉豆　○油麻

○金銅瓶一口　可有益高五寸

○五色玉少〻

○壇一面　三尺二寸

○脇机二前

2

康治二年八月十三日

口傳云。金銅賢瓶一口。五寸入五寶等ヲ覆蓋ヲ。以五色絲ヲ結之。有本樣

然ノ後ニ地ニ埋之。埋時大日眞言。幷地天眞言。本地四方可埋五色玉五穀粥ヲ。二桶以甘露眞言ヲ加持之ヲ。一桶沃壇外ニ。一桶沃ノ墻外四至ニ。二桶若不足者可及三桶云〻

3

○小野說ハ。埋加五色玉ヲ。廣澤傳五色石。云〻

○鎮壇者。造堂望供養期ニ。結界之八方埋輪橛ヲ也。而近代人ハ。兩度依有煩。地鎮〻壇一度ニ修ル之ヲ也。

但公家地鎮更ニ別被用時有歟。

○鎮壇　寅時行之　增益法也

祖師記云　法務築壇ヲ建立堂舍之後。一度行鎮壇作法也。

○金銅瓶埋壇中心ニ。輪八枚。橛八本。壇八方ニ埋之。五色玉ヲ不用之。云〻慥說也。

4

實仁云。任歟　五色玉一色ツヽ八方埋也。八天眞言可誦也。

堂鎮用物　天門師支度最略取意

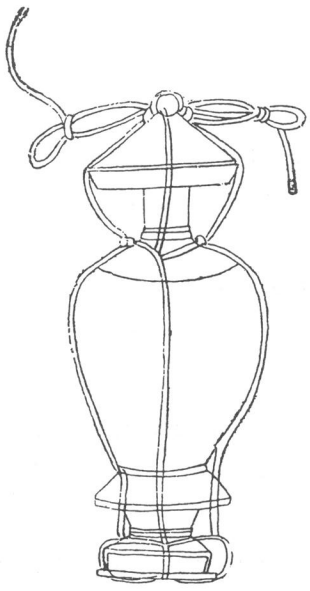
名香五兩　新香一升　幣絹五色絹　籍料布

五色玉　青八顆　赤七ー　白九ー　瓶五口　五帖納ー　黑六ー　黃五

錢一貫六百文　五色絲各三兩　淨衣三領

此外紙桶杓筵當色供神物米等多〻也。

5



法務御圖云長五寸

嚴覺同之

範俊云廣四寸私云小野傳瓶不同

範俊一說七寸長也宗意同之

㊄一髻尊　陀歟　尼歟　○羅刹經云。以一片絹ヲ餝リ寶穀ヲ。以五色線ヲ繫絹。面歟　出イ文

埋之。其五色線一頭出地ヨリ。長五指計。此寶物等永未得出スヿヲ。文

如意輪義注祕訣云　御作　堀壇中心ヲ。以五穀五寶五香五藥ヲ。入金銅器ニ。埋其中ニ也。若無金銀ノ器。瓷器又得。畢テ卽以五色絲ヲ十文字ニ結之。但其結端ヲ小計出テ而埋也。

五色絲作法有別ニ

6

㊄○天文　イ降茂　隆藏云

東　青玉廿四顆　瑠璃

南　赤玉廿一顆　琥珀

西　白玉廿七顆　白石英

北　黑玉十二顆　慈石英

中　黃玉廿顆　黃石英

図209　覚禅鈔

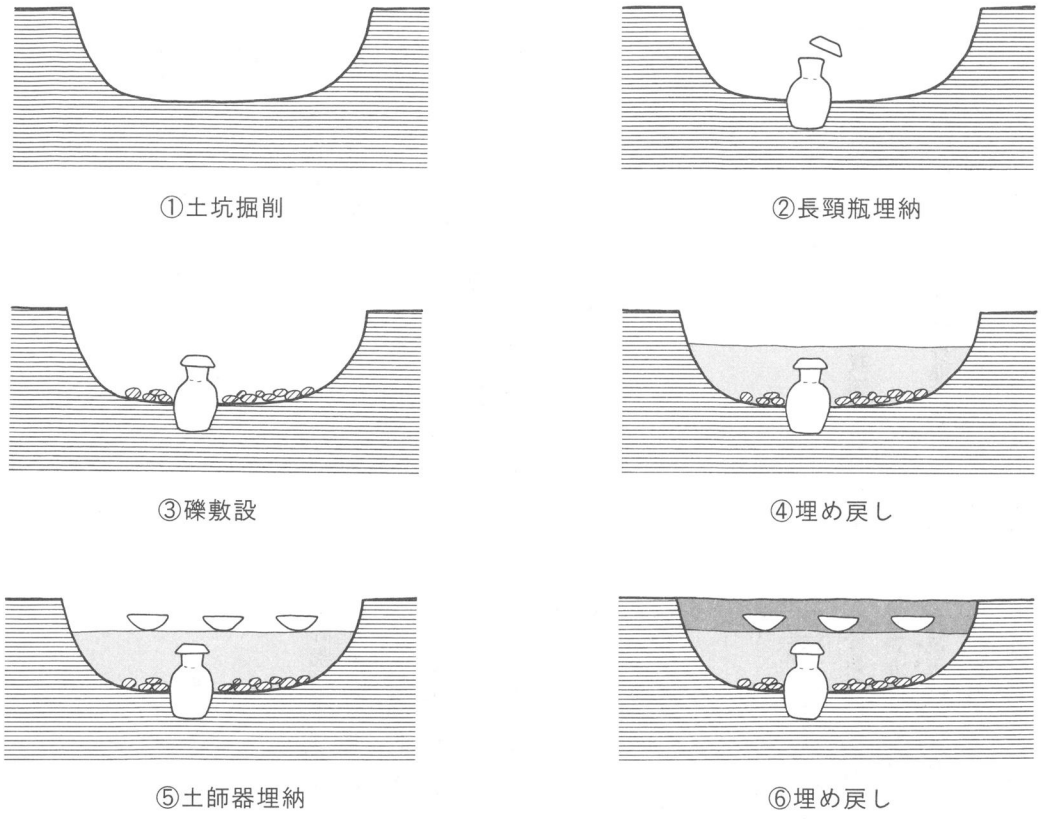


図210　地鎮土坑の復原

その要因については定かではない（註７）。

次に注目できるのは「以五穀五宝五香五薬。入金銅器。埋其中。若無金銀器。瓷器又得。」という記述である（図209－５傍点部分）。③の長頸瓶の埋納がこれとの関わりが考えられる。ミョウガ原遺跡では「金銅器」を得られなかったため、灰釉陶器で代用したのであろう。また、この記述から、長頸瓶の中には五穀、あるいは五宝、五香、五薬が入れられていた可能性をうかがえる。ただし、調査では長頸瓶の中からは何も出土しなかった（註８）。なお、「五穀粥二桶」という記載があるが（図209－２）、SF-17やSF-19、SF-20から出土した土師器坏身はこれに関わるものである可能性も考えられる（註９）。

以上のことから、ミョウガ原遺跡で行われた地鎮祭祀は、「覚禅鈔」に記された地鎮法に概ね則したものと考えられる。ただし、全てがその記載と合致するわけではない。その要因が、祭祀執行者の意図的なものであるのか、認識の程度によるものであるのかは不明である（註10）。

さて、地鎮祭祀の対象については、大別すると二通りの考え方が示せる。一つは集落全体を対象としたもの、もう一つは特定の建物を対象としたものである。ミョウガ原遺跡で検出した土坑群の直上には特定の建物は存在しない。そのため、建物建設に先立ち、その予定地で行った祭祀行為とは考え難い。ただし、特定の建物を対象とした地鎮祭祀が建物直下でなされるとは限らないことも考えられる。この場合、周囲を見ると、SH-40～42がある。このうち、SH-42が地鎮祭祀の土坑群と方位がほぼ同じで、３棟の建物の中では、最もその可能性が高い。集落全体を対象とした祭祀の可能性については、これを積極的に肯定する根拠、否定する根拠共に見あたらないため、調査の成果からは判断はできない。ここでは、SH-42に対する祭祀、集落全体に対する祭祀、両者の可能性を示しておきたい。

調査成果から推定されるSF-16における祭祀の手順としては（図210）、まず、土坑を掘削し、次に長頸

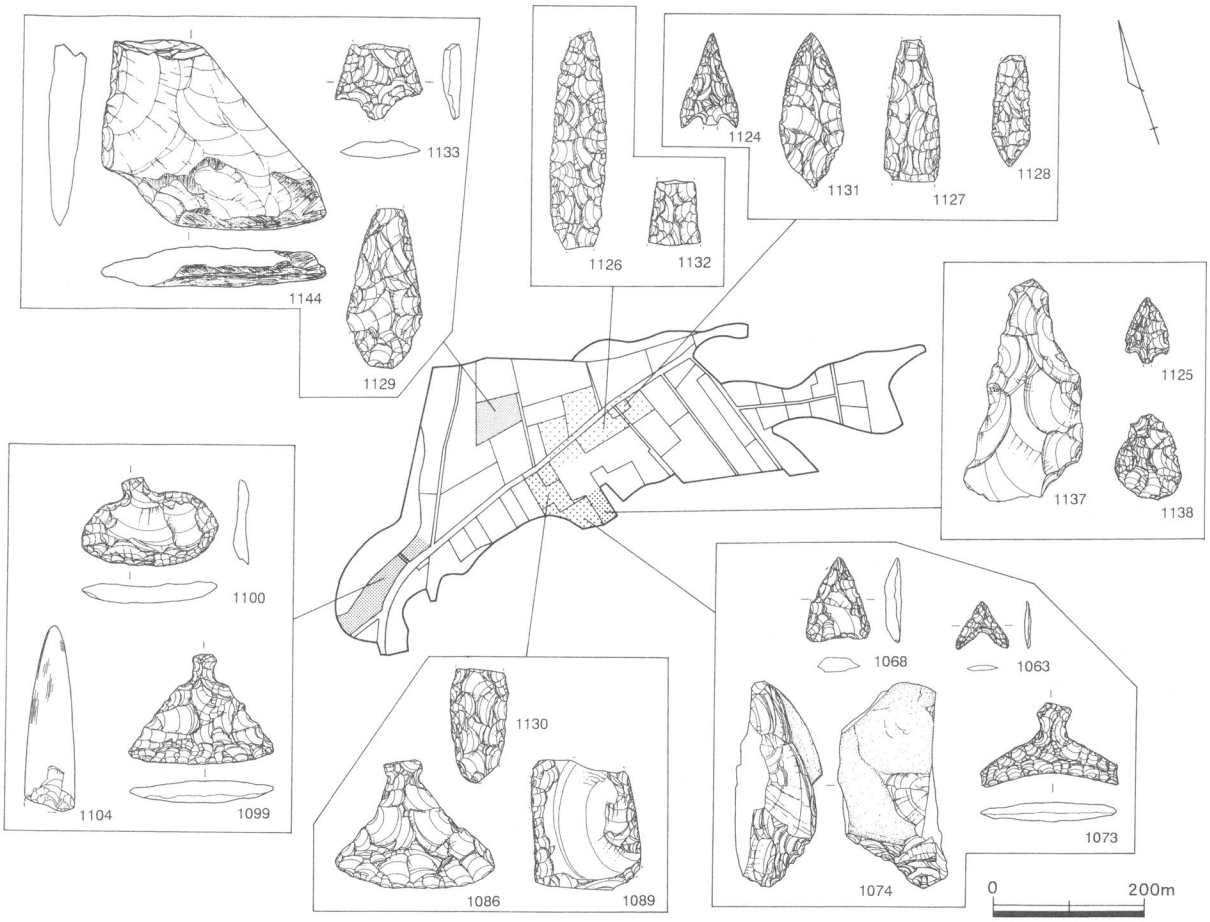


図211　石器分布図

瓶を中央に据えて土師器による蓋をする。同時に、底面に円礫を敷設する。次に、ある程度の埋め戻しが行われ、土師器坏身を用いた祭祀が行われ、更に埋め戻されたと考えられる。他の土坑についてもほぼ同様の手順であろう。なお、SF-17をみると、円礫敷設に先立ち土師器坏身を用いた祭祀が行われた可能性がある。

3．縄文時代

石器については、角張淳一氏から、御教示をいただいた。その内容について、以下に記す（註11）。

「まず、53区・3'区を中心とした台地中央部から出土した尖頭器であるが、これについては剥離技術とデザインから縄文時代草創期に位置づけられる。次に、尖頭器を除いた縄文時代の石器で特徴的な点は、石鏃が多い点である。しかも、石鏃の製作については、中部地方に見られる両極石器・両極剥片を素材とした石鏃製作ではなく、剥片素材の石核から素材剥片を剥離して石鏃を製作する点に特徴がある。石鏃は凹器無茎鏃が主体であるが、少量の有茎石鏃が出土している。関東では有茎石鏃が一般化するのは、加曽利B式以降である。ただし、中期後半後葉以降、少量の有茎石鏃を伴う傾向はある。石材をみると、黒曜石は各調査区に数点ないし1点程度あるが、石材構成から見ると黒曜石が石器群の主体ではない。主体となるのは、在地色の強い堆積岩である。この点からいうと、磐田原台地の縄文前期の石器群に多くの神津島産の黒曜石が伴う特徴とは異なると言える。以上の点から、尖頭器を除いたミョウガ原遺跡の石器文化は信州などの影響を受けていない在地色の強いもので、時期は縄文時代の中期後葉～後期前半と推定される。以上から、ミョウガ原遺跡では、台地中央の尾根部にナイフ形石器文化、尖頭

器文化の小規模な遺跡が営まれ、縄文時代中期後半後葉～後期前半にかけて台地の尾根南側に集落が営まれたといえる。」なお、24区から出土した直縁刃石器の可能性がある石器の存在や、その押圧剥離や直接打撃の様相から、同調査区出土の有舌尖頭器について弥生時代の大型石鏃の可能性についてもあわせて指摘を受けている。

土器はSB-5、SF-30とその周辺から出土している。早期末葉の木島Ⅱ式等も出土しているが、中心となるのは中期前葉～中葉のもので、五領ヶ台式と北浦ＣⅡ式の在地化したものや、北屋敷式等が出土している。石器の出土傾向と併せて考えると、調査区北端部の５区周辺や調査区南部の34区周辺では中期に小規模ながら集落が営まれた可能性がある。なお、ミョウガ原遺跡ではこの他に、草創期に遡る石器も出土していることから、草創期～早期にかけては、集落は形成されなかったが、キャンプサイト的な利用がなされていたと考えられる。

４．総　括

以上、ミョウガ原遺跡では旧石器時代、縄文時代、平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物を調査したが、調査の中心となったのは、平安時代～鎌倉時代の集落跡である。残存状況は悪いものの、集落のほぼ全域を調査することができた。縄文時代の遺構・遺物も調査区内の至る所で検出した。断片的であるが、草創期から中期に至るまでの資料を得ることができた。中期には集落が形成された可能性がある。また、２点のみであるが旧石器時代の遺物を出土したことも注目できよう。ミョウガ原遺跡の所在する丘陵では初出の資料である。ミョウガ原遺跡の調査は５年に渡る断続的なものであった。残存状況は良好とは言い難い遺跡であるが、得られた成果はこの地域の歴史像解明の一役を担うものとなろう。

註

1　Ⅰ期の小椀が出土し、12世紀前半代に既に集落が営まれていた可能性はある。ただし、Ⅰ期の椀はほとんど出土していない。中心となるのはⅡ期～Ⅲ期の椀と小皿である。そのため、時期としてはⅠ期の最終末からⅢ期にかけての年代と考えた。

2　もちろん、全て時期を違える可能性もある。これは、以下に記す各遺構群でも同様である。

3　遺構検出面は非常に緻密な粘土層であり、調査時、溜まった雨水が引かないことが度々あった。この土壌はある程度手を加えることで、保水能力を保てたと考えられる。

4　Ⅰ期とⅢ期の山茶椀が混在して底面から出土している。Ⅲ期に至るまで自然流路に堆積が無いことから、浚渫等が行われた可能性もある。

5　質侶荘は11世紀初頭に遠江守大江公資により開発され、私領化されることで成立したと言われ、治承２年（1178）以前は「質侶牧」と呼ばれていた。ここでは、便宜的に「質侶荘」と呼称する。

6　奈良大学水野正好教授、藤枝市教育委員会磯部武男氏に御教示頂いた。註７・８も水野氏の御教示による。

7　色の違いとしては、幾つかの可能性が考えられる。一つめは、祭祀を行った人物がこれらを黒や黄色と認識していた可能性。二つ目は祭祀を行った人物が、地鎮行為に対する認識はあったが、それが曖昧なものであった可能性。三つ目が禁忌によるもので、北側や中央部に対し、何か都合の悪いものがあり、あえて南側の赤を取り入れたという可能性がある。数の違いについてもこれらと同様の理由が考えられる。なお、出土した玉石の総数は記載数量を越えており、数が揃わなかったという可能性はない。

8　本来的にはこれらが入れられていたが、風化し消滅した可能性の他に、紙等に五穀・五宝等の個々の名称を記し、代用物とした可能性がある。

9　磯部氏の御教示による

10　長頸瓶を中央部に据えた５基の土坑を十字に配置する地鎮祭祀の類例としては、岩手県水沢市胆沢城跡がある。ただし、ミョウガ原遺跡例と異なり、玉石は用いていない。時期は９世紀とミョウガ原遺跡よりも古いものである。

11　文章にて、所見をいただいたが、紙幅の関係で全文を掲載することはできなかった。内容について編集者側で要約して記すことにした。そのため、文責は編集者が負う。

第２節　空港関連遺跡全体の成果

平成９年度から平成13年度まで断続的に実施した静岡空港関連遺跡の現地調査は、確認調査対象面積371,100㎡、確認調査実掘削面積25,901㎡、本調査対象面積53,090㎡に及ぶものであった。その結果、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、平安時代～鎌倉時代、江戸時代の遺構や遺物の存在があきらかとなった。ここでは、時代別にその成果の概略を記す。なお、地点名で記すが、遺跡名との対応関係は以下のとおりである。また、位置については図２を参照願いたい。

Ａ地点：吉峠遺跡、Ｂ地点：水掛渡Ｄ古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳、Ｃ地点：水掛波古墳群Ｃ群、
Ｄ地点：御陣場古墳・権現様御陣場遺跡、Ｊ地点・Ｏ地点：ミョウガ原遺跡、
横断道路榛原地区：星久保古墳群

１．時代別調査成果概要

旧石器時代　旧石器時代の遺構は検出されなかったが、Ｏ地点において、ナイフ形石器が２点出土した。大井川右岸にあたる牧ノ原台地北東部周辺では、これまで島田市吹木原遺跡等で遺物の出土が知られている程度であった。空港関連遺跡の所在する丘陵の北側の丘陵であり、当丘陵では初めてその存在を確認することができたことは大きな成果といえる。断片的な資料ではあるが、今後、静岡県中部、大井川周辺における調査が進むことで、ミョウガ原遺跡の位置づけがなされるであろう。

縄文時代　縄文時代についてはＡ・Ｂ・Ｄ・Ｏ地点、横断道路榛原地区で遺構や遺物を検出している。まず、草創期としてはＯ地点で、尖頭器を出土している。早期～前期についてはＢ地点で遺構と土器を検出している。少量ではあるが、Ｏ地点でも土器が出土している。中期になると、Ｏ地点で住居跡や土坑を検出している。なお、時期は特定できないがＡ地点とＯ地点で集石土坑、Ｂ地点とＤ地点、Ｏ地点で陥穴を検出している。Ｏ地点では中期に小規模ながら集落が形成された可能性を持つ。

古墳時代　古墳時代は空港関連遺跡の一連の調査の中で中心となった時代の一つである。古墳としては、Ｃ地点で３基、Ｂ地点で15基、Ｄ地点で１基、横断道路榛原地区で１基を調査している。いずれも横穴式石室を主体部に持つ古墳で、７世紀代に位置づけられる。遺物は須恵器や鉄鏃、玉類の他、Ｃ１号墳では金銅装の刀装具が出土している。Ｂ地点、Ｃ地点の古墳は水掛渡古墳群の中の一群であり、水掛渡古墳群全体としては合計36基の古墳が存在していたことが明らかとなった。

集落跡としては、横断道路榛原地区で６世紀末～７世紀前半の竪穴住居を４棟調査している。うち、３棟は竈を持ち、住居跡内から土師器が出土している。竪穴住居跡は丘陵麓の段丘状になった平坦面で検出したが、約180m離れた丘陵斜面には７世紀末～８世紀の古墳があり、関連が考えられる。また、この平坦面には集落が更に広がることが予想される。

平安時代～鎌倉時代　この時代も空港関連遺跡の一連の調査の中で中心となった時代である。本書で報告したＯ地点ではこの時期の集落跡を調査したが、空港関連遺跡の中では最も広い面積を調査した地点である。また期間も最も長いものであった。Ｏ地点では54棟の掘立柱建物跡を検出した。10世紀後半～11世紀代と12世紀中葉～13世紀前半に台地平坦面に集落が展開していたことが明らかとなった。また、ここで検出した地鎮祭祀の土坑も特筆に値するものである。横断道路榛原地区でもこの時期の掘立柱建物跡と竪穴住居跡を検出している。また、Ｂ地点とＪ地点でも遺物と遺構を検出している。横断道路島田地区とＲ地点では遺物を出土している。なお、横断道路榛原地区では近世の掘立柱建物跡と遺物を調査している。

２．総　括

空港関連遺跡は多くが標高140m以上の丘陵平坦面の遺跡である。この丘陵は遺跡の存在自体は知られていたが、調査以前は茶畑あるいは植林が行われ、大規模な開発行為は成されていなかった。そのため、この丘陵における発掘調査はほとんど行われていない状況であった。この度の一連の調査では旧石器時代から近世に至るまでの、断続的ではあるが遺構・遺物を発見した。広域を対象とした調査であり、Ｏ地点では集落をほぼ全域調査することができたことは成果の一つといえる。今回の一連の調査で得られた資料が当地の歴史研究に寄与すれば幸いである。

参考文献

河合　修　2001　「青灰色のうつわ」『研究紀要』第７号　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所

㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1998　『水掛渡古墳群Ｃ群（静岡空港関連遺跡Ｃ地点）』

㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　2002　『星久保古墳群（静岡空港横断道路榛原地区）』

㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　2003　『鉄平遺跡』

㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　2003　『吉峠遺跡・水掛渡Ｄ古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳・御陣場古墳・権現様御陣場遺跡（静岡空港関連遺跡Ａ地点・Ｂ地点・Ｄ地点）』

静岡県1994　『静岡県史』通史編１　原始・古代

島田市史編さん委員会　1996　『島田風土記　ふるさと初倉』

原　廣志　1999　「―横地氏関連遺跡群と周辺遺跡の特徴について―」『静岡県指定　横地城跡』―総合調査報告書―　静岡県菊川町教育委員会

佛書刊行会　1975　『大日本佛教全書』　覚禅鈔　第五

松井一明　1989　「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器陶器生産の一考察」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会

松井一明　1993　「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』№25　静岡県考古学会

森　郁夫　1979　「古代における地鎮・鎮壇具の埋納」『古代研究』18

森　郁夫　1998　「地を鎮めるまつり」『日本の信仰遺跡』　雄山閣出版

山下峯司　1995　「灰釉陶器・山茶碗」　『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社

横田賢次郎・森田　勉　1978　「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４

現地調査並びに資料整理においては下記の各氏から、御指導・御助言を頂いた。文末ではあるが、記して感謝の意を表したい。（五十音順・敬称略）

青木　修、磯部武男、伊藤通玄、小野正敏、角張淳一、河合　修、坂巻隆一、櫻井典啓、笹原千賀子、篠ヶ谷路人、嶋野雄康、柴垣勇夫、柴田　稔、澁谷昌彦、塚本和弘、萩原佳保理、平野吾郎、松下善和、溝口彰啓、湯之上隆

なお、島田市教育委員会・榛原町教育委員会からも調査にあたり、多大な御指導、御助言を頂いた。記して感謝の意を表す。

表13　地区別出土土器破片数

大別	調査区	出土地 小区画	出土地 遺構	破片数 灰釉陶器 椀・皿	山茶椀 東遠江産 椀 Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	細別不能	小皿・小椀	鉢	山茶椀 湖西・渥美産 椀 Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	細別不能	小皿・小椀	鉢	山茶椀 その他 椀	小皿・小椀	甕 渥美常滑	土師器	その他	瓶類	土師器坏身	須恵器坏他	その他
自然流路北側	24区		表土・表採	3	1	12	16	114	55					1					39			1			
			SD-2（北辺）	4	1	4	8	33	32	1				2	1				17						
			SD-1			8	3	28	5										9			1			
		24	区　計	7	2	24	27	175	92	1			0	3	1	0	0	0	65	0	0	2	0	0	
	13・13'区	北半	表土・表採	1		9	3	80	20	2									27		1	1			
			SF-1				1														1				
			SF-2				3	34	18				2												
			SD-5・6				3	6	1	2									2	3					
			小　計	1	0	9	10	120	39	4	0	0	2	0	0	0	0	0	29	3	2	1	0	0	
		表土（南半）	表土・表採	2		1		20											4			1			
			SD-2（西辺）		1	14	18	19	9				3						21		2	1			
			SD-2（南辺）			6	4	2	15	1			1						6			1			
			SD-4・8			2	2	52	6	1			1			1			4						
			SD-7						1																
			SD-9				1	2	2																
			柱穴	2		3		13	8	1									2			1			
			小　計	4	1	26	25	108	41	3	0	0	5	0	0	1	0	0	37	0	2	4	0	0	
		13・13'区計		5	1	35	35	228	80	7	0	0	7	3	0	1	0	0	66	3	4	5	0	0	
	14区		表土・表採	1		26	39	561	280	2			20		3				47			1			
			SD-2（南辺）			5	9	35	19	1			4		1				4						
			SD-9			9	24	266	105	1				3					8			1			
			SD-10～15			2	3	17	15				1		1						2				
			柱穴			2	5	88	41										22						
		14	区　計	1	0	44	80	967	460	4	0	0	25	3	5	0	0	0	81	0	2	2	0	0	
	25区	西半	表土	1		27	53	457	175	1			2	13	1				31			7			
			SD-2（南辺東端）			2	8	18	17										1						
			SD-10	1		6	6	42	20				1	2	1										
			小計	2	0	35	67	517	212	1	0	0	3	15	2	0	0	0	32	0	0	7	0	0	
		東半	表土	3		9	24	322	139					5					7			1			
			SF-3～6				2	35	21					1											
			柱穴																	2					
			小　計	3	0	9	26	357	160	0	0	0	0	6	0	0	0	0	7	2	0	1	0	0	
		表採		1			2	1											1			1			
		25	区　計	6	0	44	95	875	372	1	0	0	3	21	2	0	0	0	40	2	0	9	0	0	
	26区	南西	表土・表採	1		4	2		27	1			1						1		1	1			
		南東	表土・表採	4		20	41	561	182				2	17	4				25		3	1			
			SD-16					11	7																
			SD-17			1	2		9																
			SF-9			1	2	12	3																
			小　計	4	0	22	45	584	201	0	0	0	2	17	4	0	0	0	25	0	3	1	0	0	
		26	区　計	5	0	26	47	584	228	1	0	0	3	17	4	0	0	0	26	0	4	2	0	0	
	4区		表土	1	1	4	18	157	59				3	10					1		1				
			柱穴			1	7	51	17	2			1	6					2						
		4	区　計	0	0	1	7	51	17	2	0	0	1	6	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	
	54区	西端部	表土	8				1																	
			SD-22					9	1	1													2		
			小計	8	0	0	0	10	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	
		西側	表土	1				11	1												1				
		東側	表土			1			4	1											1				
		東端部	表土	1		9	6	180	40	1		2		18	4				2	1	4			1	
			柱穴				4	13	8					2	1										
			SF-10						1																
			SF-11			3	3	26	7					5	3				1						
			SF-12			5	10	38	13	1				3	1						2	1			
			SD-18			1		13	1																
			SD-20					13	1				1												
			SX-2			2	1	2	2																
			小　計	1	0	20	24	285	73	2	0	2	1	28	9	0	0	0	3	1	6	1	0	1	
		54	区　計	10	0	21	24	306	79	4	0	2	1	28	9	0	0	0	3	1	8	1	2	1	
	53区	北西部	表土・表採	8		34	20	302	63	1				1					2	1	9	6		1	
		南西部	表土・表採			5	4	65	27					1							3				
			SD-21				1	33	5										5			1			
			小　計	0	0	5	5	98	32	0	0	0	0	1	0	0	0	0	5	0	3	1	0	1	
		北東部	表土・表採	1		4	2	38	14												1	5			
			SX-1	1		1		5	3												3				
			小　計	2	0	5	2	43	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	5	0	0	
		南東部	表土・表採	1		3		15	7			1		1							1				
		表採		1		4	5	57	18											1		1			
		53	区　計	12	0	51	32	515	137	1	0	1	0	3	0	0	0	0	7	2	17	13	0	2	
	3'区		検出面（上）	1		7	4	53	30					2	1										
			検出面（下）	12		5	8	88	36			1	1	1	1						4				伊勢湾2
			表土・表採	1		2	2	149	48			1			1				1		4				
			SF-14			3	17	8	4																伊勢湾5
			SD-19				2	7	1																
			SR-1（4層）			9	2	185	56			1		3					1		2				
		3'	区　計	14	0	26	35	490	175	0	0	3	1	6	3	0	0	0	2	0	10	0	0	0	
流路北側合計				60	3	272	382	4191	1640	21	0	6	41	87	24	1	0	0	292	8	46	34	2	3	

大別	調査区	出土地 小区画	出土地 遺構	破片数 灰釉陶器	山茶椀 東遠江産						山茶椀 湖西・渥美産						山茶椀 その他		甕			瓶類	土師器坏身	須恵器坏他	その他
				椀・皿	椀 Ⅰ期	椀 Ⅱ期	椀 Ⅲ期	椀 細別不能	小皿小椀	鉢	椀 Ⅰ期	椀 Ⅱ期	椀 Ⅲ期	椀 細別不能	小皿小椀	鉢	椀	小皿小椀	渥美常滑	土師器	その他				
自然流路	46区		SR-1撹乱	1		2	16	57	3											1	2				
			SR-1(3層)			1	2																		
			SR-1(4層)	2		3	1	5													2				
			SR-1(7層)	2		4	13	5	9						1						1				
			SR-1底面	3				2	2																
		46区計		8	0	10	32	69	14	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	5	0	0	0	
	15区北西	北西部表採		3		2	1	9	4										1			1			
			SR-1(撹乱)	4		8	7	2	11					2							2				
			SR-1(第3層)	2		7	14	17	11				1		1						1	1			
			SR-1(第4層)	2		1		6	8				1								8				
			SR-1(第6層)	4		3	13	13	11			1		11	4						7			1	
		15区北西計		12	0	19	34	38	41	0	0	1	2	13	5	0	0	0	0	0	18	1	0	1	
	3区	表土		7		21	29	177	81	1		3								7	1	1	30	5	伊勢鍋1
		表採		4		4	5	102	34												3	2	1	1	
			SR-1(1・2層)			1	1	18	6				1						4		1				
			SR-1(4層)			9	4	42	14	1				1							4				
			SR-1(6層)	9		22	23	147	60										1		9	2	2		
		3区計		20	0	57	62	486	195	2	0	3	1	1	0	0	0	0	1	7	18	5	33	6	
	3'区		SR-1(4・6層)	15	1	56	19	397	165	2		1		14	11			1	3		25	4	3	1	子持Ⅲ1
			SR-1(底面)			25	10	5	20				1						1		6	1			
		3'区計		15	1	81	29	402	185	2	0	1	1	14	11	0	0	1	4	0	31	5	3	1	
	53区		SR-1	2	1	6	4	3	4	1		1	2	1							1	2			
	54区		SR-1	32		20	8	236	51			1	2	7	1				1	1	14	2			
自然流路合計				89	2	193	169	1234	490	5	0	7	8	36	18	0	0	1	6	9	87	15	36	8	
自然流路南側	46区	北西	表土	2		1	2	10	1												1				
			SD-23	1		1	3	12	9																
			SD-24				1	5	4																
			SD-28	16		2	6	28	11											1	7	1	3		瓦鉢3
			小計	19	0	4	12	55	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8	1	3	0	
		北東	表土					8	2										1						
			SD-22	5		2	3	43	6												1				
			SD-25~27	2				4																	
			SD-29	23		4	21	147	48													2			
			小計	30	0	6	24	202	56	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	0	0	
		南半	表土・柱穴	46			3		3												9		3		
		東拡張部・15区西中央	表土・柱穴	8		1	9	117	39				3	1					1		2	2			
			SB-1	22				11														3	3		瓦鉢1
			小計	30	0	1	9	128	39	0	0	0	3	1	0	0	0	0	1	0	2	5	3	0	
		表採		108		5	11	167	39										1	3	11	2	25		
		46区計		233	0	16	59	552	162	0	0	0	3	1	0	0	0	0	3	4	31	10	34	0	
	34区	北西	表土	37			1		1																
		中央	表土	1				1															5		
		北東	表土	99		1	3	7	5												1	12			
			SF-16~20																			3	11		
			小計	99	0	1	3	7	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	15	11	0	
		南東	表土	101				2	1												9	5	1		
			SB-2	23						1													15		
			SB-3	61					1												3	2	4		
			SF-21・22	113		1	2	1	3												6	3	5		托2
			小計	298	0	1	2	3	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18	10	25	0	
		表採		147		1		26	6												13	10	4		
		柱穴		11																			7		
		34区計		593	0	3	6	37	17	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32	35	52	0	
	15区	南西	表土	176		2	4	33	6											1	8	27	11		
		中央	表土	56		4	15	240	90												59	11	1		
		北東	表土	12			1	5	1												1				
		南東	表土	65			1	20	5												10	14			
		表採		2		1	6	6	4												4	2			
		15区計		311	0	7	27	304	106	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	82	54	12	0	
	35区	北西	表土	62			6	21	5												17		2		
			SD-31	56	1	12	34	5	23	1			1		1		1		3		20				托1
			小計	118	1	12	40	26	28	1	0	0	1	0	1	0	1	0	3	0	37	0	2	0	
		中央	表土	30			5	73	6												2	1			
		南西	表土	245			32	114	17	2											18	22	10		
		北東	表土	23			1	22	1												4				
		南東	表土	150				6	2		2										5	5	4		
		柱穴		12					3											2		3			緑釉腕1
		表採		318		1	10	52	9		1		1							3	22	24	6		
		35区計		896	1	13	88	293	66	3	3	0	2	0	1	0	1	0	3	5	88	55	22	0	
	48区	西	表土	30				13	1												1	1	2		
		北	表土	10		1	4	37	20												9	6	1		
		中央	表土	28			1	7	1												6	2	1		
		東	表土	28			3	14	2												6	3	4		托2
		南	表土	112			4	3	3												11	6	2		鉢1
		南東	表土	150		3	5	7	1											2	34	13	7		鉢2
		表採		82		3	7	40	2												16	12	2		
			柱穴	14		3			1														1		
		48区計		454	0	10	24	121	31	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	83	43	20	0	
自然流路南側合計				2487	1	49	204	1307	382	4	3	0	5	1	1	0	1	0	6	12	316	197	140	0	
破片数総計				2636	6	514	755	6732	2512	30	3	13	54	124	43	1	1	1	304	29	449	246	178	11	

表14　地区別出土土器個体数

大別	調査区	出土地 小区画	出土地 遺構	個体数 灰釉陶器 椀・皿	山茶椀 東遠江産 椀 I期	山茶椀 東遠江産 椀 II期	山茶椀 東遠江産 椀 III期	山茶椀 東遠江産 小椀	山茶椀 東遠江産 小皿	山茶椀 東遠江産 鉢	山茶椀 湖西・渥美産 椀 I期	山茶椀 湖西・渥美産 椀 II期	山茶椀 湖西・渥美産 椀 III期	山茶椀 湖西・渥美産 小皿・小椀	山茶椀 湖西・渥美産 鉢	山茶椀 その他 椀	山茶椀 その他 小皿・小椀	甕 渥美常滑	甕 土師器	甕 その他	瓶類	土師器坏身	須恵器坏他	その他
自然流路北側	24区	表土・表採		1.0	0.5	3.8	5.0	1.0	9.1									0.1						
			SD-2（北辺）	1.0	0.8	2.4	3.0	3.7	4.8	0.3								0.8						
			SD-1			5.5	1.6	1.2	1.4									0.5						
		24 区 計		2.0	1.3	11.7	9.5	5.8	15.3	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	13・13'区	北半	表土・表採			4.8	1.6		6.7															
			SF-1			1.0																		
			SF-2				1.2	0.8	0.1															
			SD-5・6			0.6		0.3	1.0	0.3														
			小　計	0.0	0.0	6.4	2.8	1.1	7.8	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
		表土（南半）	表土・表採	0.7		0.3																		
			SD-2（西辺）		0.5	10.3	15.9	0.1	1.6				0.5											
			SD-2（南辺）			3.3	2.5	2.0	6.3															
			SD-4・8			1.1	1.3	1.5		0.5			0.5											
			SD-7						1.0															
			SD-9				0.7	1.5																
			柱穴	0.3		1.4		1.0	0.1									0.5						
			小　計	0.9	0.5	16.3	20.3	6.1	9.0	0.5	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
		13・13'区計		0.9	0.5	22.7	23.1	7.2	16.8	0.8	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	14区	表土・表採		0.1		6.2	14.2	15.0	21.2					0.6										
			SD-2（南辺）			3.3	4.6	1.0	6.7			0.7		0.3										
			SD-9			4.9	9.2	10.4	13.6												0.3			
			SD-10～15			1.8	1.0	2.4	4.5				0.8	1.0						0.5				
			柱穴			1.1	3.0	2.8	2.6															
		14 区 計		0.1	0.0	17.1	32.0	31.5	48.7	0.0	0.0	0.7	0.8	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.3	0.0	0.0	
	25区	西半	表土			10.9	19.9	5.7	20.2				0.8								0.1			
			SD-2（南辺東端）			0.8	4.6	1.8	5.0															
			SD-10	0.2		2.3	3.4	0.4	2.5				0.3											
			小　計	0.2	0.0	14.1	27.9	7.8	27.7	0.0	0.0	0.0	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	
		東半	表土			4.1	9.4	4.3	14.5															
			SF-3～6				0.3	0.3	1.0															
			柱穴																					
			小　計	0.0	0.0	4.1	9.7	4.6	15.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
		表採					0.4																	
		25 区 計		0.2	0.0	18.1	37.9	12.4	43.1	0.0	0.0	0.0	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	
	26区	南西	表土・表採	0.3		0.9	0.4		0.3															
		南東	表土・表採	1.0		9.1	7.0	7.9	23.2				0.8	0.3										
			SD-16						1.6															
			SD-17				1.4		1.4															
			SF-9			0.5	0.5		0.5															
			小　計	1.0	0.0	9.6	8.9	7.9	26.7	0.0	0.0	0.0	0.8	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
		26 区 計		1.2	0.0	10.4	9.2	7.9	27.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	4区	表土			0.2	1.8	5.5	3.1	6.3				1.1											
			柱穴				1.1	0.5	1.6				1.0											
		4 区 計		0.0	0.0	0.0	1.1	0.5	1.6	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	54区	西端部	表土	0.2																				
			SD-22				0.3		1.0															
			小　計	0.2	0.0	0.0	0.3	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
		西側	表土																					
		東側	表土			0.1		1.0	0.3															
		東端部	表土	0.1		4.1	2.9	3.6	2.8	0.3			1.5	0.4										0.8
			柱穴				1.9	0.5	0.5					0.3										
			SF-10						0.3															
			SF-11			2.0	2.2	0.3	1.5															
			SF-12			3.3	6.0	1.2	1.0															
			SD-18																					
			SD-20			1.0	0.6																	
			SX-2			1.0	2.0	1.3																
			小　計	0.1	0.0	11.4	15.6	6.7	6.0	0.3	0.0	0.0	1.5	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	
		54 区 計		0.2	0.0	11.5	15.8	7.7	7.3	0.3	0.0	0.0	1.5	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	
	53区	北西部	表土・表採			17.8	11.4	1.9	11.9											0.5	1.5		0.3	
		南西部	表土・表採			1.9	0.9	1.1	1.0															
			SD-21				1.0	1.0	1.0												0.5			
			小　計	0.0	0.0	1.9	1.9	2.1	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	
		北東部	表土・表採	0.5		1.1	1.1	1.0																
			SX-1	0.5		1.0		1.0																
			小　計	1.0	0.0	2.1	1.1	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
		南東部	表土・表採			0.9			1.0			0.8												
		表採				0.5	1.2	2.3	4.0															
		53 区 計		1.0	0.0	23.0	15.5	8.2	18.9	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	2.0	0.0	0.3	
	3'区		検出面（上）	0.5		4.5	2.6	1.5	14.3					0.3										
			検出面（下）	1.0		3.0	6.0		5.1			0.5	0.5	0.5										
			表土・表採			0.8	0.2		4.2			0.3		0.1										
			SF-14			2.1	4.8		1.8															
			SD-19				1.8																	
			SR-1（4層）			4.5	1.5		11.6			0.3												
		3' 区 計		1.5	0.0	14.9	16.8	1.5	37.0	0.0	0.0	1.1	0.5	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
流路北側合計				7.1	1.8	129.6	161.0	82.7	215.6	1.4	0.0	2.5	6.6	3.6	0.0	0.0	0.0	1.9	0.0	1.0	2.4	0.0	1.0	

大別	調査区	出土地 小区画	出土地 遺構	個体数 反釉陶器 椀・皿	山茶椀 東遠江産 椀 I期	山茶椀 東遠江産 椀 II期	山茶椀 東遠江産 椀 III期	山茶椀 東遠江産 小椀	山茶椀 東遠江産 小皿	山茶椀 東遠江産 鉢	山茶椀 湖西・渥美産 椀 I期	山茶椀 湖西・渥美産 椀 II期	山茶椀 湖西・渥美産 椀 III期	山茶椀 湖西・渥美産 小皿小椀	山茶椀 湖西・渥美産 鉢	山茶椀 その他 椀	山茶椀 その他 小皿小椀	甕 渥美常滑	甕 土師器	甕 その他	瓶類	土師器坏身	須恵器坏他	その他
自然流路	46区		SR-1 撹乱	0.3		1.5	6.8	1.0	1.5															
			SR-1（3層）			1.0	1.3																	
			SR-1（4層）	1.0		1.6	2.4																	
			SR-1（7層）	0.5		1.0	3.8	1.5	5.0					0.3										
			SR-1 底面	1.0				2.0																
		46 区 計		2.8	0.0	5.1	14.3	4.5	6.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	15区北西	北西部表採				0.6	0.3							0.1										
			SR-1（撹乱）	1.0		4.6	2.0	3.0	2.6															
			SR-1（第3層）	1.0		3.1	9.9		2.2				1.0	0.3										
			SR-1（第4層）	1.1		0.5		3.0	2.9				0.5											
			SR-1（第6層）	1.4		2.5	5.7	2.0	10.8			1.0		1.6									1.0	
		15区北西計		4.5	0.0	10.7	17.6	8.0	18.5	0.0	0.0	1.0	1.5	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	
	3区	表土		1.3		9.3	9.6	5.9	10.5			0.5	0.3										0.8	
		表採		0.8		0.7	2.5	2.0	5.1															
			SR-1（1・2層）			1.0	0.3																	
			SR-1（4層）			3.8	2.2		1.5															
			SR-1（6層）	3.0		8.6	14.0	3.4	11.8											0.3				
		3 区 計		5.0	0.0	23.4	28.5	11.3	28.9	0.0	0.0	0.5	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.8	
	3'区		SR-1（4・6層）	4.2	0.1	42.2	12.8	9.4	51.8	0.3		0.5		2.0									0.8	子持皿1
			SR-1（底面）			13.5	7.3	10.8	22.0				0.3					0.5		0.5				
		3' 区 計		4.2	0.1	55.7	20.1	20.1	73.8	0.3	0.0	0.5	0.3	2.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.5	0.0	0.0	0.8	
	53区		SR-1	1.8	0.5	4.5	3.0		2.0	1.0		0.3	1.5								0.3			
	54区		SR-1	4.3		6.4	4.2	5.6	8.7			1.0	1.8	0.5										
自然流路合計				22.5	0.6	105.7	87.6	49.5	138.3	1.3	0.0	3.3	5.4	4.6	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.8	0.3	0.0	2.5	
自然流路南側	46区	北西	表土			0.5	0.4	0.1																
			SD-23	0.8		0.5	1.3	0.5	2.8															
			SD-24				0.5	0.1	0.5															
			SD-28	0.7		1.8	1.7		9.6															瓦鉢1
			小 計	1.4	0.0	2.8	3.8	0.7	12.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
		北東	表土																					
			SD-22	0.8		1.5	3.0		6.0															
			SD-25～27																					
			SD-29	1.3		2.0	3.8	1.8	5.6															
			小 計	2.1	0.0	3.5	6.8	1.8	11.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
		南半	表土・柱穴	0.7			0.9		0.3															
		東拡張部・15区西中央	表土・柱穴	1.6		0.8	2.3	1.5	3.7															
			SB-1	4.2																	0.6	1.0		
			小 計	5.8	0.0	0.8	2.3	1.5	3.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	1.0	0.0	
		表採		7.0		2.4	4.0	2.5	1.3													3.0		
		46 区 計		17.0	0.0	9.4	17.7	6.5	29.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	4.0	0.0	
	34区	北西	表土	0.8																				
		中央	表土	0.3			0.3																	
		北東	表土	1.7	0.3			0.8	0.8												0.8	0.3		
			SF-16～20																		3.0		8.0	
			小 計	1.7	0.3	0.0	0.0	0.8	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.8	0.3	8.0	
		南東	表土	2.8																		0.1		瓦鉢1
			SB-2	2.4																		1.0		
			SB-3	6.0						0.5														
			SF-21・22	4.1		1.0	2.0		3.0															托1
			小 計	15.2	0.0	1.0	2.0	0.0	3.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1	0.0	
		表採		9.3	1.3		0.2	1.5	1.0												0.5			
		柱穴		0.8																				
		34 区 計		27.9	1.5	1.0	2.5	2.3	4.8	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.3	1.4	8.0	
	15区	南西	表土	3.5		1.0	1.3		1.1												0.3			
		中央	表土	4.7		1.3	5.8	1.8	7.6												0.1			
		北東	表土				0.5																	
		南東	表土	3.2			0.3		2.6												0.1			
		表採		0.1		0.8	2.1	0.6	0.5															
		15 区 計		11.5	0.0	3.1	9.9	2.4	11.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	
	35区	北西	表土	6.0		0.6			3.5	0.3														
			SD-31	8.5	1.0	15.2	13.8	4.7	12.9		0.8			1.0		1.0		0.3		0.4				托0.75
			小計	14.4	1.0	15.8	13.8	4.7	16.4	0.3	0.8	0.0	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.3	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	
		中央	表土	2.6		0.7															0.1			
		南西	表土	6.2		3.0		0.5	0.5												0.1			
		北東	表土	0.3		0.1																		
		南東	表土	3.8				0.5																
		柱穴		4.1				0.5	1.0												0.3			
		表採		16.0		1.9	1.5		2.0		1.0		1.0								0.3			
		35 区 計		47.5	1.0	21.4	15.3	6.2	19.9	0.3	1.8	0.0	1.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.3	0.0	0.4	0.7	0.0	0.0	
	48区	西	表土	2.5																				
		北	表土	1.1		1.0	0.8	1.0	0.3															
		中央	表土	1.0			0.4																	
		東	表土	2.5			1.0																	托1
		南	表土	3.8			1.7	0.5													0.8			鉢0.05
		南東	表土	5.2		1.3	1.9														0.1			鉢0.8
		表採	表土	3.0		0.7	2.4	0.5	0.3															
			柱穴	5.0		2.0		1.0																
		48 区 計		24.1	0.0	5.0	8.2	3.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	0.0	0.0	
自然流路南側合計				128.1	2.5	39.8	53.5	20.4	66.8	0.8	1.8	0.0	1.0	1.0	0.0	1.0	0.0	0.3	0.0	0.4	6.9	5.4	8.0	
個体数総計				157.6	4.9	275.1	302.1	152.6	420.7	3.6	1.8	5.8	13.0	9.2	0.0	1.0	0.0	2.6	0.0	2.2	9.6	5.4	11.5	

※個体数は底部の残存率から算出した。残存1/2を0.5、1/3を0.33、1/4を0.25、1/10を0.1として計上している。

表15　出土土器観察表

挿図	遺物番号	区	遺構（層位）	種別	器種	口径（cm）	器高（cm）	高台径底径（cm）	色調	調整 底部	調整 見込み	高台圧痕	備考	写真図版
123	1	46	SR-1	山茶椀	椀	(15.1)	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
123	2	46	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.3)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
123	3	46	〃	山茶椀	椀	—	—	7.2	にぶい黄橙色	糸切り	横ナデ	籾殻		—
123	4	46	〃	山茶椀	椀	—	—	6.4	灰白色	ナデ	横ナデ	スノコ		—
123	5	46	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.6)	暗青灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
123	6	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.0)	灰白色	ナデ	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
123	7	46	〃	山茶椀	小椀	—	—	4.2	青灰色	ナデ	横ナデ	スノコ		—
123	8	46	SR-1（灰色粘土）	山茶椀	椀	15.8	5.5	7.2	青灰色	糸切り	横ナデ	籾殻	重ね焼き痕、自然釉付着	51
123	9	46	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.6)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
123	10	46	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.6)	灰黄褐色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
123	11	46	黒色粘土	灰釉陶器	椀	—	—	(6.0)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
123	12	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	5.4	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
124	13	46	灰色粘土	山茶椀	椀	16.0	5.2	7.0	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		51
124	14	46	〃	山茶椀	椀	(16.2)	5.4	7.1	灰色	ナデ	横ナデ	籾殻		51
124	15	46	〃	山茶椀	椀	(14.0)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
124	16	46	〃	山茶椀	椀	—	—	7.6	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、墨書	51
124	17	46	〃	山茶椀	椀	—	—	7.2	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、墨書	52
124	18	46	〃	山茶椀	椀	—	—	7.4	灰白色	糸切り	横ナデ	籾殻		—
124	19	46	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.4)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
124	20	46	〃	山茶椀	椀	—	—	5.9	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
124	21	46	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.8)	灰白色	ナデ	横ナデ	籾殻	重ね焼き痕	—
124	22	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.2)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、自然釉付着	—
124	23	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	5.8	灰黄色	糸切り	横ナデ	—		—
124	24	46	〃	山茶椀	小椀	—	—	4.4	灰色	糸切り	横ナデ	—	自然釉付着	—
124	25	46	〃	山茶椀	小皿	9.0	2.2	5.1	灰白色	糸切り	横ナデ	—	自然釉付着	52
124	26	46	〃	山茶椀	小皿	8.3	2.3	4.6	灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形、自然釉付着	52
124	27	46	〃	山茶椀	小皿	7.5	1.8～2.3	4.3	灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形、自然釉付着	52
124	28	46	〃	山茶椀	小皿	(7.0)	1.8	(3.6)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	自然釉付着	—
124	29	46	〃	白磁	碗	—	—	(5.5)	灰白色	—	—	—		—
125	30	46	SR-1（底面）	灰釉陶器	椀	14.3	4.5	6.8	灰白色	ナデ	横ナデ	—	完形、墨痕、墨書「王」「千・万？」	52
125	31	46	〃	山茶椀	小椀	8.4	2.4	4.0	青灰色	糸切り	横ナデ	—	完形、墨書「一楽」	53
125	32	46	〃	山茶椀	小椀	8.3	4.3	3.4	灰白色	ナデ	横ナデ	—	完形、墨書「捨？」	53
125	33	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.4)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	墨書	—
126	34	15	SR-1（撹乱）	灰釉陶器	椀	—	—	(7.3)	にぶい黄橙色	糸切り	横ナデ	—	自然釉付着	—
126	35	15	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(8.0)	灰白色	糸切り？	横ナデ	—		—
126	36	15	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.1)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
126	37	15	〃	山茶椀	椀	—	—	6.7	灰色	ナデ	横ナデ	スノコ		—
126	38	15	〃	山茶椀	椀	(17.1)	(5.9)	(7.3)	灰色	ナデ	横ナデ	—		—
126	39	15	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.0)	青灰色	糸切り	横ナデ	—		—
126	40	15	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.5)	灰色	糸切り？	横ナデ	—		—
126	41	15	〃	山茶椀	小皿	(7.6)	2.1	(3.9)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
126	42	15	〃	山茶椀	小皿	(7.2)	2.2	(3.2)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	自然釉付着	—
126	43	15	〃	山茶椀	小椀	—	—	3.9	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		—
126	44	15	〃	山茶椀	小椀	—	(1.1)	4.6	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		—
126	45	15	〃	山茶椀	小椀	—	—	(3.9)	灰色	糸切り	横ナデ	—	ヘラケズリ	—
126	46	15	〃	須恵器	甕	—	—	—	灰白色	—	—	—	自然釉付着	—
126	47	15	SR-1（暗褐色粘土）	山茶椀	椀	(15.8)	—	—	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
126	48	15	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.2)	灰褐色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、内面自然釉付着	—
126	49	15	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.5)	灰黄色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
126	50	15	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.2)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
126	51	15	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.4)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
126	52	15	〃	山茶椀	椀	—	—	6.2	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
126	53	15	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.5)	青灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
126	54	15	〃	山茶椀	椀	—	—	6.7	灰色	糸切り	横ナデ	籾殻	墨書	—
126	55	15	〃	山茶椀	椀	—	—	6.9	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
126	56	15	〃	山茶椀	椀	—	—	(8.1)	灰白色	ナデ	横ナデ	—		—
126	57	15	〃	山茶椀	小皿	(7.9)	2.1	3.9	灰黄色	糸切り	横ナデ	—		—
126	58	15	〃	山茶椀	小皿	(7.7)	2.1	(4.6)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
126	59	15	〃	山茶椀	小皿	(7.6)	2.0	(3.6)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
126	60	15	〃	山茶椀	小皿	—	—	(3.9)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
126	61	15	〃	白磁	皿	—	—	—	灰白色	—	—	—		—
126	62	15	〃	白磁	碗	—	—	—	灰白色	—	—	—		—
126	63	15	〃	山茶椀	短頸壺	(10.0)	—	—	灰色	—	横ナデ	—	内面自然釉付着、最大径(11.0cm)	—
127	64	15	SR-1（黒色土）	山茶椀	椀	(16.2)	4.7	(8.4)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	53
127	65	15	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.7)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
127	66	15	〃	山茶椀	小皿	(9.4)	2.3	(4.7)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		53
127	67	15	〃	山茶椀	小皿	8.2	2.4	3.6	灰色	糸切り	横ナデ	—		53
127	68	15	〃	山茶椀	小椀	—	—	4.0	灰色	ナデ	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
127	69	15	〃	山茶椀	小椀	(9.1)	(2.5)	(4.5)	オリーブ灰色	糸切り	横ナデ	—	墨書？	—

挿図	遺物番号	区	遺構（層位）	種別	器種	口径（cm）	器高（cm）	高台径底径（cm）	色調	調整 底部	調整 見込み	高台圧痕	備考	写真図版
127	70	15	SR-1（黄褐色粘土）	山茶椀	椀	(16.7)	4.8	(8.1)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		53
127	71	15	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.3)	灰色	糸切り	横ナデ	籾殻		—
127	72	15	〃	山茶椀	椀	—	(2.6)	7.3	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		—
127	73	15	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.1)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
127	74	15	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.0)	青灰色	糸切り	横ナデ	—		—
127	75	15	〃	山茶椀	椀	—	—	6.6	青灰色	糸切り	横ナデ	籾殻	重ね焼き痕	—
127	76	15	〃	山茶椀	椀	—	—	6.7	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
127	77	15	〃	山茶椀	椀	—	—	7.2	明褐灰色	糸切り	横ナデ	籾殻	湖西・渥美、焼き歪み	—
127	78	15	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.8)	灰色	—	横ナデ	—		—
127	79	15	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.1)	灰白色	糸切り？	横ナデ	—		—
127	80	15	〃	山茶椀	小椀	8.5	2.6	4.0	灰白色	ナデ	横ナデ	—	完形、墨書	—
127	81	15	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	2.4	4.0	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	—
127	82	15	〃	山茶椀	小皿	(8.3)	2.4	(3.6)	灰白色	ナデ	横ナデ	—		53
127	83	15	〃	山茶椀	小皿	(7.9)	2.2	3.6	灰白色	糸切り	横ナデ	—		53
127	84	15	〃	山茶椀	小皿	7.6	2.3	4.1	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	—
127	85	15	〃	山茶椀	小皿	(7.9)	1.9	(4.3)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	自然釉付着、湖西・渥美	—
127	86	15	〃	須恵器	高坏	—	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	脚部径(3.7cm)	—
127	87	15	〃	須恵器	甕	—	—	—	灰色	—	—	—	頸部径9.4cm、自然釉剥落の痕跡	—
127	88	15	〃	山茶椀	椀	—	—	—	灰色・灰白色	—	—	—	湖西・４個体遺美	—
128	89	3	SR-1	山茶椀	椀	—	—	(7.8)	暗オリーブ灰色	糸切り	横ナデ	—		—
128	90	3	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.6)	オリーブ灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
128	91	3	〃	山茶椀	椀	—	—	6.7	青灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
128	92	3	〃	山茶椀	小皿	(8.3)	—	—	明オリーブ灰色	—	横ナデ	—	沈線	—
128	93	3	SR-1（灰色粘土）	山茶椀	椀	16.1	5.1	6.9	灰色	ナデ	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	54
128	94	3	〃	山茶椀	椀	(16.8)	—	—	灰白色	—	—	—		—
128	95	3	〃	山茶椀	椀	(15.8)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
128	96	3	〃	山茶椀	椀	(17.1)	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
128	97	3	〃	灰釉陶器	椀	14.1	—	—	オリーブ灰色	—	横ナデ	—		—
128	98	3	〃	灰釉陶器	椀	—	—	7.6	灰白色	ヘラ切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、内面自然釉付着	—
128	99	3	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.7)	灰黄色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、ヘラケズリ	—
128	100	3	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.3)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
128	101	3	〃	山茶椀	椀	—	—	5.9	青灰色	ナデ	横ナデ	スノコ		—
128	102	3	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.2)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
128	103	3	〃	山茶椀	椀	—	—	6.1	青灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
128	104	3	〃	山茶椀	椀	—	—	6.4	明黄褐色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
128	105	3	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.7)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
128	106	3	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.4)	青灰色	糸切り	横ナデ	籾殻	重ね焼き痕	—
128	107	3	〃	山茶椀	椀	—	—	5.9	灰色	ナデ	横ナデ	スノコ		—
128	108	3	〃	山茶椀	椀	—	—	6.9	青灰色	ナデ	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
128	109	3	〃	山茶椀	椀	—	—	6.5	灰色	ナデ	横ナデ	—		—
128	110	3	〃	山茶椀	椀	—	—	6.5	青灰色	ナデ	横ナデ	—		—
128	111	3	〃	山茶椀	小椀	—	—	(4.6)	灰白色	ナデ	横ナデ	—	見込みに墨痕	—
128	112	3	〃	山茶椀	小椀	—	—	4.1	灰白色	—	横ナデ	スノコ	墨書「三」	—
128	113	3	〃	山茶椀	小皿	8.0	2.4	3.6	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	—
128	114	2	〃	山茶椀	小皿	(8.0)	2.5	(3.5)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
128	115	3	〃	山茶椀	小皿	(8.0)	2.4	(4.0)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		54
128	116	3	〃	山茶椀	小皿	7.7	2.4	3.8	灰色	糸切り	横ナデ	—	口縁内面自然釉付着	54
128	117	3	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	2.2	(4.2)	明青灰色	糸切り	横ナデ	—		—
128	118	3	〃	青磁	碗	—	—	—	灰白色	—	—	—		—
128	119	3	〃	須恵器	甕	—	—	(10.3)	灰白色	—	—	—		—
129	120	3′	SR-1（褐色粘土）	山茶椀	椀	—	—	(7.2)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、墨書「三」	54
129	121	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.9)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
129	122	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.5)	2.5	3.6	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
129	123	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.6)	2.2	(3.7)	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
129	124	3′	〃	山茶椀	小皿	(8.4)	2.2	3.9	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
129	125	3′	〃	山茶椀	小皿	(8.0)	2.1	(3.8)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
129	126	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	2.1	3.6	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
129	127	3′	〃	山茶椀	小皿	(8.2)	2.1	(2.0)	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
129	128	3′	〃	山茶椀	小皿	8.2	—	—	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
129	129	3′	〃	—	小皿	(7.8)	1.8	4.4	灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形、墨書「の」字状記号	55
129	130	3′	〃	—	小皿	(7.4)	2.3	3.7	灰白色	糸切り	横ナデ	—	墨書「丈」	55
129	131	3′	〃	—	小皿	(7.7)	2.2	(4.1)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、墨書「二？」	—
129	132	3′	〃	—	小皿	—	—	3.9	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、墨書「二」	55
129	133	3′	〃	山茶椀	小椀	—	—	4.1	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、墨書「○」字状記号	—
129	134	3′	〃	灰釉陶器	瓶	(5.5)	—	—	灰色	—	—	—		—
130	135	3′	SR-1（灰色粘土）	灰釉陶器	椀	(16.2)	5.0	(6.9)	灰色	糸切り	ナデ	スノコ	ヘラケズリ	—
130	136	3′	〃	山茶椀	椀	15.8	5.2～5.4	7.8	灰白色	糸切り	ナデ	籾殻	完形、自然釉付着	55
130	137	3′	〃	山茶椀	椀	(16.4)	5.3	6.8	灰色	糸切り	ナデ	—		55
130	138	3′	〃	山茶椀	椀	(15.4)	5.3	(6.4)	灰色	糸切り	横ナデ	—	墨書「積□？」	55
130	139	3′	〃	山茶椀	椀	(16.2)	5.4	6.2	灰色	糸切り	ナデ	—		55
130	140	3′	〃	山茶椀	椀	(16.0)	4.8	6.2	灰色	糸切り	ナデ	—		—
130	141	3′	〃	山茶椀	椀	(16.0)	—	—	灰色	糸切り	横ナデ	—		—

挿図	遺物番号	区	遺構(層位)	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	高台径底径(cm)	色調	調整 底部	調整 見込み	高台圧痕	備考	写真図版
130	142	3′	SR-1(灰色粘土)	山茶椀	椀	—	—	(7.1)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、墨痕	—
130	143	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	5.8	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、墨書「大玉」	55
130	144	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.5)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	墨書「二」	55
130	145	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	6.6	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	墨書？	—
130	146	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.7)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	墨書？	—
130	147	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	6.1	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
130	148	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	6.6	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
130	149	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	6.3	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
130	150	3′	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.2)	灰白色	ナデ	横ナデ	—	ヘラケズリ	—
130	151	3′	〃	灰釉陶器	椀	—	—	6.3	灰白色	糸切り	横ナデ	—	ヘラケズリ	—
130	152	3′	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.6)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	ヘラケズリ	—
130	153	3′	〃	山茶椀	小椀	(8.8)	2.6	(5.1)	灰白色	糸切り？	横ナデ	—	重ね焼き痕、墨書「二」	—
130	154	3′	〃	山茶椀	小椀	8.5	2.7	3.9	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、墨書「捨？」	55 56
130	155	3′	〃	山茶椀	小椀	(8.4)	2.6	(4.6)	灰色	糸切り	ナデ	—		—
130	156	3′	〃	山茶椀	小椀	(8.2)	2.2	3.6	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
131	157	3′	〃	山茶椀	小皿	(9.1)	2.2	(4.4)	灰白色	糸切り	ナデ	—	外面口縁付近・内面自然釉付着	—
131	158	3′	〃	山茶椀	小皿	(8.4)	2.4	(3.6)	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
131	159	3′	〃	山茶椀	小皿	(8.2)	2.6	4.0	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
131	160	3′	〃	山茶椀	小皿	8.2	2.7	4.3	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形、重ね焼き痕	—
131	161	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	2.4	(4.0)	にぶい橙色	ナデ	ナデ	—	生焼	—
131	162	3′	〃	山茶椀	小皿	7.6	2.7	3.6	灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形、重ね焼き痕	—
131	163	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.6)	2.4	4.0	灰色	糸切り	横ナデ	—		56
131	164	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.3)	2.3	3.7	褐灰色	糸切り	ナデ	—		56
131	165	3′	〃	山茶椀	小皿	(8.4)	2.1	4.0	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
131	166	3′	〃	山茶椀	小皿	(8.0)	2.0	4.8	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
131	167	3′	〃	山茶椀	小皿	7.9	2.0	3.4	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
131	168	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.6)	2.1	3.6	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
131	169	3′	〃	山茶椀	小皿	7.6	2.0	3.9	灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形	56
131	170	3′	〃	山茶椀	小皿	7.5～8.0	1.9～2.4	3.7～3.9	灰白色	糸切り	ナデ	—	完形、口縁付近自然釉付着、	—
131	171	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.5)	1.8	4.4	灰白色	糸切り	横ナデ	—	墨書「十」字状記号	56
131	172	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	1.8	3.8	灰白色	糸切り	横ナデ	—	焼き歪み	—
131	173	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.6)	1.8	(5.0)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	口縁付近自然釉付着	—
131	174	3′	〃	山茶椀	小皿	—	—	4.2	灰白色	糸切り	ナデ	—		56
131	175	3′	〃	灰釉陶器	小皿	—	—	(4.6)	灰色	糸切り？	横ナデ	—	墨書「六？」	—
131	176	3′	〃	灰釉陶器	子持ち小皿	上左:3.0 上右:3.3 下:6.9	上:1.3 下:2.2	3.6	灰白色	糸切り	—	—	完形	56
131	177	3′	〃	青磁	碗	(15.5)	—	—	灰白色	—	—	—		—
131	178	3′	〃	青磁	碗	—	—	—	灰白色	—	—	—		—
131	179	3′	〃	青磁	碗	—	—	—	灰白色	—	—	—		—
131	180	3′	〃	青磁	碗	—	—	—	灰白色	—	—	—		—
131	181	3′	〃	青磁	碗	—	—	—	灰色	—	—	—		—
131	182	3′	〃	山茶椀	鉢	—	—	(15.4)	(外)灰色 (内)灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
131	183	3′	〃		甕	(21.0)	—	—	にぶい黄褐色	ナデ	板ナデ	—	頸部径(15.6cm)、自然釉付着	56
131	184	3′	〃		甕	—	—	—	灰色	—	横ナデ	—	頸部径(15.6cm)	—
131	185	3′	〃		短頸壺	(12.9)	—	—	灰色	—	ナデ	—		—
131	186	3′	〃		長頸瓶	(19.7)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	内面自然釉付着	—
132	187	3′	SR-1(底面)	山茶椀	椀	(17.0)	5.9	(7.4)	灰色	糸切り	ナデ	—		57
132	188	3′	〃	山茶椀	椀	(16.0)	5.1	(7.0)	灰白色	糸切り	ナデ	—		57
132	189	3′	〃	山茶椀	椀	(16.4)	5.0	(7.0)	灰色	糸切り	横ナデ	—		57
132	190	3′	〃	山茶椀	椀	(16.1)	5.4	(7.8)	灰白色	糸切り	ナデ	—		57
132	191	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	5.8	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
132	192	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	6.4	青灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
132	193	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	6.2	灰白色	糸切り	ナデ	スノコ		—
132	194	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	6.5	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
132	195	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	7.0	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、底部中央ナデ	—
132	196	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.7)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	墨書	—
132	197	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	6.7	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
132	198	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	6.3	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
132	199	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.0)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
132	200	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	7.1	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、自然釉付着	—
132	201	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	7.7	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
132	202	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.3)	灰白色	ナデ	横ナデ	籾殻	重ね焼き痕	—
132	203	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.3)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
132	204	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.8)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	湖西・渥美	—
132	205	3′	〃	山茶椀	小椀	8.2	2.8	4.4	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形、墨書「四」	57
132	206	3′	〃	山茶椀	小椀	(8.0)	2.6	3.8	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	墨書「捨」	57
132	207	3′	〃	山茶椀	小椀	(8.4)	2.2	4.4	灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形、墨書「増」	57
132	208	3′	〃	山茶椀	小椀	7.7	1.9～2.2	3.8	灰白色	ナデ	ナデ	—	完形、口縁付近自然釉付着	—
132	209	3′	〃	山茶椀	小椀	(8.6)	2.3	(4.2)	灰白色	糸切り	ナデ	—	重ね焼き痕、自然釉付着	—
132	210	3′	〃	山茶椀	小椀	—	—	4.6	灰白色	糸切り	横ナデ	—	自然釉付着	—
132	211	3′	〃	山茶椀	小皿	8.1	2.8	4.2	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	—

挿図	遺物番号	区	遺構（層位）	種別	器種	口径（cm）	器高（cm）	高台径底径（cm）	色調	調整 底部	調整 見込み	高台圧痕	備考	写真図版
132	212	3′	SR-1（底面）	山茶椀	小皿	8.5	2.4	4.8	灰白色	糸切り	横ナデ	—	外面口縁付近自然釉付着	—
132	213	3′	〃	山茶椀	小皿	7.9	2.5	3.8	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	58
132	214	3′	〃	山茶椀	小皿	7.8	2.4	3.8	灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形	—
132	215	3′	〃	山茶椀	小皿	7.5	2.2	4.3	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、墨書「福？」	58
132	216	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	2.1	4.1	灰色	糸切り	ナデ	—	墨書「六」	—
132	217	3′	〃	山茶椀	小皿	8.0	2.1	3.8	灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形	—
132	218	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.6)	2.1	(4.0)	褐灰色	糸切り	横ナデ	—	外面口縁付近自然釉付着	—
132	219	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.6)	2.2	(3.7)	灰白色	糸切り	ナデ	—	内面自然釉付着	—
132	220	3′	〃	山茶椀	小皿	(8.0)	2.5	(4.0)	灰色	糸切り	ナデ	—		—
132	221	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.7)	2.0	3.6	灰白色	糸切り	横ナデ	—	墨書「六？」	—
132	222	3′	〃	山茶椀	小皿	8.3	2.0	4.0	灰色	糸切り	ナデ	—	外面自然釉付着	—
132	223	3′	〃	山茶椀	小皿	8.9	2.2～2.3	4.5	灰黄褐色	糸切り	横ナデ	—	完形	—
132	224	3′	〃	山茶椀	小皿	7.7	1.6～2.0	4.3	灰白色	糸切り	ナデ	—	完形	58
133	225	3′	〃	山茶椀	小皿	8.2	2.0	5.3	灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形、墨書「の」字状記号、湖西・渥美	58
133	226	3′	〃	山茶椀	小皿	—	—	(4.2)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	墨書	58
133	227	3′	〃	白磁	碗	—	—	(5.5)	灰白色	—	—	—	ヘラケズリ	—
133	228	3′53	〃	須恵器	瓦鉢	(19.9)	(9.0)	—	灰色	ナデ	横ナデ	—	体部最大径(22.3cm)、重ね焼き痕、ヘラケズリ	58
133	229	3′	〃		長頸瓶	—	—	—	にぶい褐色	—	ナデ	—	頸部径(10.6cm)、胴部最大径(18.8cm)	—
133	230	3′	〃		—	—	—	(13.4)	灰色	ナデ	横ナデ	籾殻		—
133	231	3′	〃		—	—	—	9.3	灰色	—	ナデ	籾殻		—
133	232	3′	〃		短頸壷	(14.5)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	湖西・渥美	—
133	233	3′	〃		甕	—	—	(15.0)	灰色	—	板ナデ	籾殻	湖西・渥美	—
134	234	53	SR-1	山茶椀	椀	(15.6)	5.5	(6.3)	青灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	墨書「○」字状記号	59
134	235	53	〃	山茶椀	椀	(16.0)	5.3	(7.0)	灰黄色	糸切り	ナデ	—		—
134	236	53	〃	山茶椀	椀	15.8	5.3～5.5	7.3	灰色	糸切り	ナデ	—		59
134	237	53	〃	山茶椀	椀	16.3	5.3	6.4	灰白色	糸切り	ナデ	—		---
134	238	53	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.5)	灰白色	—	横ナデ	—		—
134	239	53	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.1)	青灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、墨書「三」	—
134	240	53	〃	山茶椀	椀	—	—	5.8	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
134	241	53	〃	山茶椀	椀	—	—	6.9	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
134	242	53	〃	山茶椀	椀	—	—	6.8	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	湖西・渥美	—
134	243	53	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.0)	灰白色	横ナデ	横ナデ	籾殻	湖西・渥美、重ね焼き痕	—
134	244	53	〃	山茶椀	椀	—	—	6.2	灰白色	ナデ	横ナデ	—	湖西・渥美	—
134	245	53	〃	山茶椀	輪花椀	16.1	—	6.2～7.0	灰白色	—	—	—	湖西・渥美、ツケガケ	—
134	246	53	〃	灰釉陶器	椀	—	—	6.6	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
134	247	53	〃	灰釉陶器	椀	—	—	6.8	灰褐色	糸切り	横ナデ	—	自然釉付着	—
134	248	53	〃	山茶椀	小椀	8.4	2.6～2.7	4.2	灰白色	ナデ	横ナデ	—	完形	—
134	249	53	〃	山茶椀	小椀	(7.6)	2.0	(3.6)	灰色	糸切り	横ナデ	—	内面釉付着	—
134	250	53	〃	山茶椀	小椀	7.8	2.2	3.7	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ		59
134	251	53	〃	山茶椀	小椀	—	—	4.3	灰白色	糸切り	横ナデ	—	内面墨痕	—
134	252	53	〃	山茶椀	小皿	(8.2)	2.4	(4.2)	灰白色	糸切り	ナデ	—	内面斑点状に自然釉付着	—
134	253	53	〃	山茶椀	小皿	8.3	2.1～2.3	4.5	灰白色	糸切り	ナデ	—	完形	—
134	254	53	〃	山茶椀	小皿	—	—	—	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
134	255	53	〃	山茶椀	小皿	7.3	2.2～2.5	4.0	灰色	糸切り	ナデ	—		59
134	256	53	〃	山茶椀	小皿	7.3	1.6～1.8	3.8	灰色	糸切り	ナデ	—		—
134	257	53	〃	青磁	碗	—	—	—	灰白色	—	—	—		—
134	258	53	〃	白磁	碗	—	—	5.9	灰白色	—	—	—	重ね焼き痕、模様有	—
134	259	53	〃	山茶椀	片口鉢	23.4	11.3～11.8	9.6	黄灰色	ナデ	ナデ	—	輪積み痕	59
135	260	53	〃	須恵器	長頸瓶	—	—	—	(外)黄灰色 (内)灰色	—	—	—	最小頸部径(9.2cm)、最大径17.7cm	—
135	261	53	〃	須恵器	長頸瓶	—	—	(8.8)	灰色	—	—	籾殻		—
135	262	53	〃	瓦	—	—	—	—		—	—	—	布目、格子敲目	—
136	263	3	表土	須恵器	坏蓋	(16.6)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
136	264	3	〃	須恵器	坏蓋	(15.3)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
136	265	3	〃	須恵器	坏蓋	(15.8)	—	—	灰色	—	—	—	最大径(16.2cm)	—
136	266	3	〃	須恵器	坏蓋	—	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
136	267	2	〃	山茶椀	椀	(15.5)	5.6	8.4	灰白色	糸切り	横ナデ	—		59
136	268	3	〃	山茶椀	椀	(14.9)	—	—	オリーブ灰色	—	—	—		—
136	269	3	〃	山茶椀	椀	(14.0)	—	—	灰色	—	—	—		—
136	270	3	〃	山茶椀	椀	(16.7)	—	—	灰色	—	—	—		—
136	271	3	〃	山茶椀	椀	(15.8)	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
136	272	3	〃	山茶椀	椀	16.4	—	—	緑灰色	—	横ナデ	—		—
136	273	3	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.9)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
136	274	3	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.8)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
136	275	3	〃	山茶椀	椀	—	—	6.0	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
136	276	3	〃	山茶椀	椀	—	—	7.4	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		—
136	277	3	〃	山茶椀	椀	—	—	7.4	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
136	278	3	〃	山茶椀	椀	—	—	5.1	緑灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
136	279	3	〃	山茶椀	椀	—	—	7.0	青灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
136	280	3	〃	山茶椀	椀	—	—	6.1	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
136	281	3	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.2)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
136	282	3	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.6)	明オリーブ灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
136	283	3	〃	山茶椀	椀	—	—	6.6	灰色	糸切り	横ナデ	—		—

挿図	遺物番号	区	遺構(層位)	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	高台径底径(cm)	色調	調整 底部	調整 見込み	高台圧痕	備考	写真図版
136	284	3	表土	山茶椀	椀	—	—	7.0	黄灰色	ナデ	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、墨書「三」	59
136	285	3	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.9)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	湖西・渥美	—
136	286	3	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.2)	灰白色	糸切り	横ナデ	籾殻		—
136	287	3	〃	山茶椀	小椀	(8.7)	2.7	(4.0)	灰色	—	横ナデ	—		—
136	288	2	〃	山茶椀	小椀	(8.1)	2.8	4.6	灰色	糸切り	横ナデ	—		59
136	289	2	〃	山茶椀	小椀	(8.7)	2.6	(4.1)	灰色	横ナデ	横ナデ	—		59
136	290	2	〃	山茶椀	小椀	8.1	2.2	4.2	灰色	ナデ	横ナデ	—		60
136	291	2	〃	山茶椀	小椀	(7.9)	2.2	(3.8)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		60
136	292	2	〃	山茶椀	小皿	8.4	3.1	4.0	灰色	糸切り	横ナデ	—		60
136	293	2	〃	山茶椀	小皿	(8.3)	2.5	3.9	灰白色	糸切り	横ナデ	—		60
136	294	2	〃	山茶椀	小皿	8.0	2.1	3.9	灰色	糸切り	横ナデ	—		60
136	295	2	〃	山茶椀	小皿	(7.6)	2.2	(4.3)	灰色	糸切り	横ナデ	—		60
136	296	2	〃	山茶椀	小皿	(7.4)	2.1	(4.1)	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		60
136	297	3	〃	山茶椀	小皿	(7.4)	—	3.3	灰白色	糸切り	横ナデ	—	墨書「壱？」	60
136	298	2	〃	山茶椀	小皿	(8.0)	2.1	(4.8)	灰色	糸切り	横ナデ	—		60
136	299	3	〃	山茶椀	小皿	(8.9)	2.0	(3.8)	灰色	糸切り	横ナデ	—		60
136	300	3	〃	須恵器	高坏	—	—	—	灰色	—	—	—	接合部径(6.1cm)	—
137	301	3	〃	山茶椀	鉢	(27.5)	—	—	灰色	—	—	—		—
137	302	3	〃	青磁	碗	—	—	—	灰白色	—	—	—		—
137	303	3	〃	須恵器	箱坏	(12.6)	—	—	灰色	—	—	—		—
137	304	3	〃		鍋	—	—	—	(外)灰褐色 (内)黄灰色	—	—	—	伊勢鍋	—
137	305	3	〃	土師器	甕	—	—	—	にぶい黄橙色	—	—	—		—
137	306	3	〃	土師器	甕	—	—	—	にぶい黄橙色	—	—	—		—
137	307	3	〃	土師器	甕	—	—	—	にぶい黄橙色	—	—	—		—
139	311	24	SD-1	山茶椀	椀	(15.8)	5.9	6.8	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ		61
139	312	13′	〃	山茶椀	椀	(16.0)	5.2	(7.4)	(外)灰色 (内)にぶい黄色	糸切り	横ナデ	籾殻		61
139	313	13′	〃	山茶椀	椀	(15.8)	5.3	(7.6)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	61
139	314	13′	〃	山茶椀	椀	(15.9)	5.4	7.1	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	61
139	315	24	〃	山茶椀	椀	(15.5)	4.8	7.0	にぶい褐色	ナデ	横ナデ	—		61
139	316	13′	〃	山茶椀	椀	(15.4)	5.4	(6.9)	灰色	糸切り	横ナデ	—		61
139	317	24	〃	山茶椀	椀	(15.8)	5.3	(5.1)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	61
139	318	24	〃	山茶椀	小皿	(8.2)	2.2	(4.5)	灰色	糸切り	ナデ	—		—
139	319	24	〃	山茶椀	小椀	—	—	(4.4)	灰色	ナデ	ナデ	—		—
139	320	24	〃	山茶椀	小椀	—	—	(4.2)	灰色	ナデ	ナデ	—		—
139	321	24	〃		甕	—	—	12.7	褐灰色	—	—	—	湖西・渥美、敲目、最大径61.7cm	—
140	322	24	SD-2 (北辺)	山茶椀	椀	(15.6)	5.4	6.9	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	墨書？	61
140	323	24	〃	山茶椀	椀	—	—	6.6	黄灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
140	324	24	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.4)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
140	325	24	〃	山茶椀	椀	—	—	6.6	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		—
140	326	24	〃	山茶椀	椀	—	—	7.0	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
140	327	24	〃	山茶椀	椀	—	—	(8.3)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
140	328	24	〃	山茶椀	小碗	(8.0)	2.7	4.2	黄灰色	糸切り	横ナデ	—	墨書「三」	61
140	329	24	〃	山茶椀	小碗	(7.4)	2.8	(3.8)	黄灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
140	330	24	〃	山茶椀	小皿	(8.4)	2.3	(4.4)	(外)灰黄色 (内)黄灰色	糸切り	横ナデ	—		—
140	331	24	〃	山茶椀	小皿	(7.6)	2.1	4.3	灰色	糸切り	横ナデ	—		61
140	332	24	〃	青白磁	合子	(5.2)	2.0	(5.0)	灰白色	—	—	—		—
140	333	24	〃		鉢	—	—	(10.9)	灰白色	ナデ	横ナデ	—	ヘラケズリ	—
140	334	13′	〃		甕	—	—	—	灰色	—	—	—	湖西・渥美	—
141	335	13	SD-2 (西辺)	山茶椀	椀	(15.8)	5.0	6.8	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ		62
141	336	13	〃	山茶椀	椀	15.9	5.5	7.1	灰色	ナデ	横ナデ	—	重ね焼き痕	62
141	337	13	〃	山茶椀	椀	(17.2)	5.6	7.0	灰白色	糸切り	横ナデ	—		62
141	338	13	〃	山茶椀	椀	(15.9)	5.6	6.7	灰白色	糸切り	横ナデ	籾殻		62
141	339	13	〃	山茶椀	椀	(16.1)	5.5	(6.8)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		63
141	340	13	〃	山茶椀	椀	15.9	5.4	6.7	灰色	糸切り	横ナデ	籾殻	重ね焼き痕	63
141	341	13	〃	山茶椀	椀	(16.3)	6.0	7.0	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	63
141	342	13	〃	山茶椀	椀	(16.5)	5.2	6.4	灰白色	糸切り	横ナデ	—		63
141	343	13	〃	山茶椀	椀	15.3	4.9	6.6	灰色	ヘラケズリ	ナデ	籾殻		63
141	344	13	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.8)	灰色	ナデ	横ナデ	籾殻	重ね焼き痕	—
141	345	13	〃	山茶椀	椀	—	—	7.3	褐灰色	ナデ	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
141	346	13	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	2.2	(4.2)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
141	347	13	〃	山茶椀	小皿	(8.3)	2.3	(3.8)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
141	348	13	〃	山茶椀	小皿	7.6	2.6	4.2	黄灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	63
141	349	14	〃	山茶椀	小皿	8.3	2.6	3.8	灰色	糸切り	ナデ	—	完形	—
141	350	13	〃		甕	(26.4)	—	—	黒褐色	—	—	—	常滑産	—
142	351	25	SD-2 (南辺)	山茶椀	椀	(15.1)	5.0	(6.1)	青灰色	糸切り	横ナデ	—		—
142	352	25	〃	山茶椀	椀	15.6	5.5	6.5	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	63
142	353	25	〃	山茶椀	椀	(16.4)	5.0	(5.6)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	63
142	354	14	〃	山茶椀	椀	15.3	5.5	6.1	灰白色	ナデ	横ナデ	—		63
142	355	14	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.6)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
142	356	14	〃	山茶椀	椀	—	—	7.4	灰白色	ナデ	横ナデ	—	重ね焼き痕	—

挿図	遺物番号	区	遺構（層位）	種別	器種	口径（cm）	器高（cm）	高台径底径（cm）	色調	調整 底部	調整 見込み	高台圧痕	備考	写真図版
142	357	14	SD-2（南辺）	山茶椀	小椀	8.3	2.7	4.2	灰色	糸切り	ナデ	—	棒状工具で底面一周ナデ	—
142	358	25	〃	山茶椀	小椀	8.0	2.8	2.7	灰色	ナデ	横ナデ	—	完形	63
142	359	25	〃	山茶椀	小皿	7.8	2.2	4.2	灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形、見込み墨痕、転用硯	—
142	360	25	〃	山茶椀	小皿	(8.2)	2.7	3.8	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	64
142	361	25	〃	山茶椀	小皿	8.0	2.5	3.8	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	64
142	362	14	〃	山茶椀	小皿	(7.7)	2.3	4.1	灰色	糸切り	横ナデ	—		64
142	363	25	〃	山茶椀	小皿	8.3	2.3	4.4	灰色	糸切り	横ナデ	—	内面自然釉付着	—
142	364	13	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	1.9	3.9	青灰色	糸切り	横ナデ	—	内面自然釉付着	64
142	365	14	〃	山茶椀	小皿	(8.1)	2.0	(4.2)	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		—
142	366	14	〃	白磁	皿	(13.0)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
142	367	14	〃	青磁	碗	—	—	—	黄灰色	—	—	—		—
142	368	13	〃		甕	(36.4)	—	—	灰褐色	—	—	—	湖西・渥美、釉厚く付着、最大径39.8cm	—
142	369	14	〃		鉢	—	—	—	灰白色	—	—	—		—
142	370	13	〃		甕	—	—	(8.9)	青灰色	—	—	—		—
142	371	25	〃	白磁	碗	(18.3)	—	—		—	—	—		—
143	372	14	SD-9	山茶椀	椀	(17.8)	—	—	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
143	373	14	〃	山茶椀	椀	(16.7)	5.3	(6.5)	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		—
143	374	25	SD-10	山茶椀	椀	(15.8)	—	—	青灰色	糸切り	横ナデ	—		—
143	375	14	SD-9	山茶椀	椀	(15.7)	—	—	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
143	376	14	〃	山茶椀	椀	(16.2)	5.3	7.2	灰色	糸切り	横ナデ	—		65
143	377	14	〃	山茶椀	椀	(15.7)	—	—	灰色	糸切り	—	—	輪花	—
143	378	13	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.9)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、墨書	—
143	379	14	〃	山茶椀	椀	—	—	6.3	灰白色	ナデ	横ナデ	スノコ		—
143	380	14	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.9)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	墨書	—
143	381	13′	—	山茶椀	椀	—	1.8	6.2	黄灰色	ナデ	横ナデ	スノコ		—
143	382	14	SD-9	山茶椀	椀	—	—	6.3	灰色	ナデ	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
143	383	13′	SD-4	山茶椀	椀	—	—	6.2	灰色	ナデ	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
143	384	25	SD-10	山茶椀	椀	—	—	(5.7)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
143	385	25	〃	山茶椀	椀	—	—	6.1	青灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	墨書	65
143	386	25	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.0)	青灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
143	387	14	SD-9	山茶椀	椀	—	—	6.2	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	65
143	388	25	SD-10	山茶椀	椀	—	—	(6.5)	青灰色	糸切り	横ナデ	—		—
143	389	25	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.0)	黄灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
143	390	13′	SD-8	山茶椀	椀	—	—	5.8	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、湖西・渥美	—
143	391	14	SD-9	山茶椀	椀	—	—	6.1	灰色	糸切り	横ナデ	籾殻	湖西・渥美、墨書	—
143	392	14	—	山茶椀	小椀	—	—	—	黄灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
143	393	14	SD-9	山茶椀	小椀	(8.2)	2.4	(3.8)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
143	394	14	〃	山茶椀	小椀	(8.1)	(2.4)	3.5	黄灰色	ナデ	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
143	395	13′	—	山茶椀	小椀	(7.8)	2.6	(3.3)	黄灰色	糸切り	横ナデ	籾殻		—
143	396	14	SD-9	山茶椀	小椀	8.2	2.4	3.7	灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形	—
143	397	14	〃	山茶椀	小椀	8.5	2.5	4.6	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
143	398	14	〃	山茶椀	小椀	7.9	2.3	3.9	灰白色	糸切り	横ナデ	—		65
143	399	14	〃	山茶椀	小椀	(8.4)	2.3	(3.8)	灰白色	ナデ	横ナデ	スノコ		—
143	400	14	〃	山茶椀	小皿	(8.5)	2.4	3.5	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
143	401	13′	SD-7	山茶椀	小皿	8.2	3.1	3.2	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	—
143	402	25	SD-10	山茶椀	小皿	(8.1)	2.6	3.3	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
143	403	14	SD-9	山茶椀	小皿	(8.3)	2.4	4.3	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
143	404	14	〃	山茶椀	小皿	8.3	2.1	3.7	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
143	405	13′	SD-5	山茶椀	小皿	8.2	2.3	4.3	灰色	糸切り	横ナデ	—		65
143	406	14	SD-9	山茶椀	小皿	(7.2)	(2.1)	3.3	黄灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
143	407	13′	SD-7	山茶椀	小皿	7.8	2.5	3.8	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
143	408	14	SD-9	山茶椀	小皿	8.4	2.2	3.9	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形、重ね焼き痕	65
143	409	14	〃	山茶椀	小皿	7.2	1.9	4.3	にぶい黄橙色	糸切り	横ナデ	—	完形	65
143	410	14	〃	山茶椀	小皿	(7.6)	2.0	(4.3)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
143	411	13′	SD-5	山茶椀	小皿	(8.0)	2.1	(3.9)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
143	412	14	SD-9	山茶椀	小皿	(8.3)	1.8	(4.4)	黄灰色	糸切り	横ナデ	—	湖西・渥美	—
144	413	14	—	青磁	碗	—	—	—	黄灰色	—	—	—		—
144	414	13	SD-5	白磁	碗	—	—	(5.7)	灰白色	—	—	—		—
144	415	14	—	白磁	碗	—	—	(6.3)	灰白色	—	横ナデ	—		—
144	416	13′	SD-4	山茶椀	鉢	(31.4)	—	—	(外)灰白色・灰色 (内)灰白色	—	横ナデ	—	湖西・渥美	—
144	417	13′	〃	山茶椀	鉢	—	—	(9.3)	灰白色	—	墨書？	—	重ね焼き痕、墨書？	—
144	418	14	SD-9	山茶椀	甕	—	—	(6.6)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
144	419	25	SD-10		甕	(27.2)	—	—	褐色	—	横ナデ	—		—
145	420	14	SH-3	山茶椀	椀	(16.3)	5.4	(7.3)	オリーブ灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	65
145	421	14	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.5)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
145	422	14	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.3)	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		—
145	423	14	〃	山茶椀	小椀	(8.1)	2.3	(4.4)	オリーブ灰色	ナデ	横ナデ	—		—
145	424	14	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	(2.0)	(3.2)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
145	425	14	SH-5	山茶椀	椀	—	—	(6.7)	青灰色	—	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
145	426	14	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.3)	灰白色	—	横ナデ	—		—
145	427	14	〃	山茶椀	小椀	—	—	(4.8)	灰白色	—	横ナデ	籾殻	重ね焼き痕	—
145	428	14	〃	山茶椀	小椀	—	—	3.9	灰色	ナデ	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
145	429	14	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	1.8	(3.3)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
145	430	14	SH-6近辺	山茶椀	小皿	(7.8)	—	—	褐灰色	—	横ナデ	—		—

挿図	遺物番号	区	遺構(層位)	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	高台径底径(cm)	色調	調整 底部	調整 見込み	高台圧痕	備考	写真図版
146	431	13′	SF-1	山茶椀	椀	15.9	5.8	7.0	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	66
146	432	13	SF-1		甕	16.2	—	—	(外)灰オリーブ色 (内)灰色	—	—	—		—
146	433	14	北西部(柱穴)	山茶椀	椀	(15.7)	5.2	6.5	灰色	ナデ	横ナデ	スノコ		—
146	434	14	〃	山茶椀	椀	(15.7)	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
146	435	14	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.2)	灰白色	—	横ナデ	—		—
146	436	14	〃	山茶椀	小皿	(7.6)	1.9	(4.8)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
146	437	14	〃	山茶椀	小皿	7.5	2.2	4.1	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
146	438	14	〃	灰釉陶器	長頸瓶	(13.0)	—	—	灰白色	—	—	—		—
146	439	14	〃	山茶椀	小皿	(8.0)	2.2	4.5	灰白色	糸切り	横ナデ	—	墨書「の」字状記号	—
146	440	13′	〃	山茶椀	小椀	(8.6)	2.8	(3.4)	黄灰色	—	横ナデ	—		65
146	441	13′	〃	山茶椀	小皿	(7.9)	2.5	(4.1)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		65
146	442	14	〃	青磁	碗	(16.1)	—	—	灰白色	—	—	—		—
147	443	24	北西部(表土)	山茶椀	椀	—	—	(7.4)	褐灰色	糸切り	ナデ	—		—
147	444	24	〃	山茶椀	椀	—	—	7.2	灰黄色	ナデ	ナデ	—		—
147	445	24	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.2)	灰色	糸切り	ナデ	—		—
147	446	24	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.6)	灰色	糸切り	ナデ	—		—
147	447	24	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.4)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
147	448	24	〃	山茶椀	椀	—	—	6.6	灰色	糸切り	ナデ	—		—
147	449	24	〃	山茶椀	小椀	(8.2)	2.9	(3.2)	灰黄色	横ナデ	横ナデ	籾殻		—
147	450	24	〃	山茶椀	小皿	(6.8)	1.9	(3.2)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
147	451	24	〃	山茶椀	小皿	(8.5)	1.7	(4.8)	灰色	糸切り	横ナデ	—	自然釉付着	—
147	452	13′	〃	白磁	碗	—	—	—	灰白色	—	—	—		—
147	453	24	〃		甕	(30.7)	—	—	(外)灰褐色 (内)灰黄色	—	—	—		—
147	454	24	〃		甕	(18.2)	—	—	黄灰色	—	—	—	頸部径(14.9cm)	—
147	455	24	〃		甕	(29.2)	—	—	(外)灰褐色	—	—	—	頸部径(24.6cm)	—
147	456	24	〃		甕	(20.2)	—	—	(外)黄灰色	—	—	—	頸部径(16.8cm)	—
148	460	14	〃	山茶椀	椀	(17.3)	5.3	(7.1)	灰白色	—	—	—	重ね焼き痕	—
148	461	14	〃	山茶椀	椀	15.3	5.3	(6.2)	青灰色	糸切り	横ナデ	—		66
148	462	25	〃	山茶椀	椀	(15.7)	5.8	(6.0)	灰色	糸切り	横ナデ	籾殻		—
148	463	14	〃	山茶椀	椀	(16.7)	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
148	464	14	〃	山茶椀	椀	(16.1)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
148	465	14	〃	山茶椀	椀	(15.9)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
148	466	14	〃	山茶椀	椀	(18.1)	—	—	青灰色	—	横ナデ	—		—
148	467	14	〃	山茶椀	椀	(14.6)	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
148	468	14	〃	山茶椀	椀	(14.4)	—	—	黄灰色	—	横ナデ	—		—
148	469	14	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.3)	灰色	ナデ	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
148	470	14	〃	山茶椀	椀	—	—	6.7	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
148	471	14	〃	山茶椀	椀	—	—	7.4	灰黄色	糸切り	横ナデ	—		—
148	472	14	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.3)	オリーブ灰色	糸切り	横ナデ	—		—
148	473	14	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.3)	青灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
148	474	14	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.8)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
148	475	14	〃	山茶椀	椀	—	—	6.4	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
148	476	25	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.6)	灰白色	ナデ	横ナデ	籾殻	重ね焼き痕、湖西・渥美	—
148	477	14	〃	山茶椀	小椀	(9.0)	2.4	(5.3)	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		66
148	478	14	〃	山茶椀	小椀	(8.3)	2.5	4.1	黄灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	66
148	479	14	〃	山茶椀	小椀	(8.3)	2.4	(4.6)	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		—
148	480	14	〃	山茶椀	小椀	(8.2)	2.4	3.7	灰色	糸切り	横ナデ	—		66
148	481	14	〃	山茶椀	小椀	(8.2)	(2.2)	(4.1)	黄灰色	ナデ	横ナデ	—		66
148	482	14	〃	山茶椀	小椀	(8.2)	2.5	(4.1)	灰色	糸切り	横ナデ	—		66
148	483	14	〃	山茶椀	小椀	8.0	2.7	4.2	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形、墨書「の」字状記号	—
148	484	13′	〃	山茶椀	小椀	(8.4)	2.5	3.8	灰白色	ナデ	横ナデ	—		—
148	485	14	〃	山茶椀	小椀	(8.6)	2.4	(3.4)	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		—
148	486	14	〃	山茶椀	小椀	(8.5)	2.1	(3.9)	灰色	糸切り	横ナデ	—		66
148	487	25	〃	山茶椀	小皿	8.3	2.5	3.3	(外)灰色 (内)灰黄色	糸切り	横ナデ	—		—
148	488	14	北西部(表土)	山茶椀	小皿	(8.2)	2.2	(4.0)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
148	489	14	〃	山茶椀	小皿	8.0	2.1	4.1	オリーブ灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	66
148	490	14	〃	山茶椀	小皿	(7.0)	2.2	(3.5)	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		66
148	491	14	〃	山茶椀	小皿	(7.0)	2.0	3.7	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
148	492	14	〃	山茶椀	小皿	(8.5)	2.4	(4.0)	褐灰色	糸切り	横ナデ	—		—
148	493	25	〃	山茶椀	小皿	8.1	2.3	4.4	褐色	糸切り	横ナデ	—		—
148	494	14	〃	山茶椀	小皿	(8.2)	2.3	4.0	褐灰色	糸切り	横ナデ	—		—
148	495	14	〃	山茶椀	小皿	(8.4)	2.1	(4.2)	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		—
148	496	14	〃	山茶椀	小皿	8.0	2.4	3.9	灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形	—
148	497	25	〃	山茶椀	小皿	7.8	2.7	3.7	褐灰色	糸切り	横ナデ	—		—
148	498	14	〃	青磁	碗	—	—	—	灰白色	—	—	—	自然釉付着	—
149	499	25	SF-4	山茶椀	小皿	(7.9)	2.0	(4.0)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
149	500	25	SH-12	土師器	甕	(22.4)	—	—	にぶい黄橙色	—	—	—	煤付着	—
149	501	25	〃	土師器	甕	(21.5)	—	—	にぶい黄橙色	—	ナデ	—	頸部径(18.0cm)	—
150	504	25	表土	山茶椀	椀	(14.2)	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
150	505	25	〃	山茶椀	椀	(16.8)	—	—	灰色	—	横ナデ	—	自然釉付着	—

挿図	遺物番号	区	遺構(層位)	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	高台径底径(cm)	色調	調整 底部	調整 見込み	高台圧痕	備考	写真図版
150	506	25	表土	山茶椀	椀	(15.5)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	湖西・渥美	—
150	507	25	〃	山茶椀	椀	—	—	6.9	灰色	ナデ	横ナデ	—		—
150	508	25	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.1)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
150	509	25	〃	山茶椀	椀	—	—	6.9	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
150	510	25	〃	山茶椀	椀	—	—	6.4	灰色	糸切り	横ナデ	籾殻		—
150	511	25	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.5)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
150	512	25	〃	山茶椀	小椀	(8.4)	2.9	4.0	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
150	513	25	〃	山茶椀	小皿	(7.9)	2.4	4.1	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
150	514	25	〃	山茶椀	小皿	(7.9)	2.4	(4.0)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
150	515	25	〃	青磁	小皿	(9.4)	2.0	(2.0)	灰白色	—	—	—		—
150	516	25	〃	白磁	碗	(17.9)	—	—	灰白色	—	—	—		—
151	519	54	SX-2	山茶椀	椀	(16.0)	5.1	6.0	灰白色	糸切り	横ナデ	籾殻	墨書、転用硯、内面墨痕	67
151	520	54	SF-11	山茶椀	椀	—	—	7.1	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
151	521	54	〃	山茶椀	椀	—	—	6.6	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
151	522	54	SX-2	山茶椀	椀	—	—	6.2	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、自然釉付着	—
151	523	54	〃	山茶椀	小椀	8.0	2.4	3.4	(外)黄灰色 (内)灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形	67
151	524	54	SF-11	山茶椀	小皿	7.9	2.0	4.6	(外)褐灰色 (内)灰黄色	糸切り	ナデ	—		—
152	526	3′	SD-18	山茶椀	椀	(17.2)	5.9	7.4	灰白色	糸切り	ナデ	スノコ		67
152	527	3′	〃	山茶椀	椀	(14.8)	5.3	(7.0)	灰白色	糸切り	ナデ	籾殻		—
152	528	3′	SF-14	山茶椀	椀	16.2	5.5	7.2	灰白色	糸切り	横ナデ	籾殻	墨書「二」	67
152	529	3′	〃	山茶椀	椀	15.6	5.5	6.1	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	墨書「福」	67
152	530	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.3)	青灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、墨書記号？	67
152	531	3′	〃	山茶椀	椀	(15.7)	4.4	(7.4)	灰白色	ナデ	ナデ	—		67
152	532	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.8)	青灰色	糸切り	横ナデ	籾殻	内面自然釉付着	—
152	533	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	6.6	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
152	534	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	2.4	(4.0)	灰白色	糸切り	ナデ	—		67
152	535	3′	〃	山茶椀	小皿	7.1	1.7～3.0	4.0	灰色	糸切り	ナデ	—	完形、内面自然釉付着、焼き歪み	—
152	536	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	2.1	(3.8)	灰色	糸切り	ナデ	—		—
152	537	3′	〃	土師器	甕	—	—	—	にぶい黄橙色	—	—	—	伊勢鍋	—
153	538	54	SF-12	山茶椀	椀	(15.2)	5.9	6.8	褐灰色	糸切り	ナデ	—	口縁付近に自然釉付着	68
153	539	54	〃	山茶椀	椀	(16.4)	5.5	6.0	灰色	糸切り	ナデ	—	重ね焼き痕、内面斑点状に自然釉付着	—
153	540	54	〃	山茶椀	椀	(16.5)	5.6	6.8	黄灰色	糸切り	ナデ	—		68
153	541	54	〃	山茶椀	椀	—	—	6.3	灰白色	糸切り	横ナデ	籾殻	重ね焼き痕	—
153	542	54	〃	山茶椀	椀	—	—	6.5	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
153	543	54	〃	山茶椀	小椀	(8.0)	2.3	(4.8)	灰白色	ナデ	ナデ	—		—
153	544	54	〃	山茶椀	小皿	(7.4)	2.3	3.4	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
153	545	54	〃	山茶椀	小皿	7.9	2.3～2.6	4.0	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
153	546	54	〃	山茶椀？	小型瓶類	—	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	内面朱付着	—
153	547	54	〃	青磁	碗	—	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
154	550	53	SX-1	山茶椀	椀	—	—	7.1	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、墨書「三？」	68
154	551	53	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.8)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
154	552	53	〃	山茶椀	小皿	7.9	2.3～2.4	4.0	灰色	糸切り	ナデ	—	完形	68
154	553	53	〃	白磁	碗	—	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	ヘラ描き	—
155	554	26	柱穴	山茶椀	椀	—	—	(6.0)	灰白色	ナデ	横ナデ	—		—
155	555	26	SF-9	山茶椀	椀	—	—	(6.8)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
155	556	26	〃	山茶椀	小皿	(7.9)	2.0	(4.2)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		69
155	557	26	SD-17	山茶椀	小皿	(8.1)	2.1	3.8	灰色	糸切り	横ナデ	—		69
155	558	26	〃	山茶椀	小皿	(7.1)	2.3	(3.5)	灰白色	ナデ	横ナデ	—		69
156	559	4	SH-20	山茶椀	椀	(14.5)	—	—	灰色	—	横ナデ	—	自然釉付着	—
156	560	4	SH-20	山茶椀	椀	—	—	(7.1)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
156	561	4	柱穴	山茶椀	椀	(15.3)	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
156	562	4	〃	山茶椀	椀	(15.3)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	湖西・渥美	—
156	563	4	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.5)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
156	564	4	〃	山茶椀	椀	(16.2)	—	—	オリーブ灰色	—	横ナデ	—		—
156	565	4	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.8)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
156	566	4	SH-21	山茶椀	小皿	(8.2)	2.2	(4.4)	(外)灰色 (内)オリーブ灰色	糸切り	横ナデ	—	湖西・渥美	—
156	567	4	〃	山茶椀	小皿	(8.4)	2.1	(3.8)	灰色	—	横ナデ	—		—
157	568	26	表土	山茶椀	椀	(20.4)	7.0	(8.2)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	輪花	69
157	569	26	〃	山茶椀	椀	(15.6)	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
157	570	26	〃	山茶椀	椀	—	—	—	黄灰色	—	横ナデ	—		—
157	571	26	〃	山茶椀	椀	—	—	6.7	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
157	572	26	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.5)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
157	573	26	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.0)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
157	574	26	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.5)	灰白色	ナデ	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
157	575	26	〃	山茶椀	小椀	(8.0)	(2.7)	(3.9)	灰色	糸切り	横ナデ	—		69
157	576	26	〃	山茶椀	小椀	(8.3)	2.5	3.5	灰色	ナデ	横ナデ	—	重ね焼き痕、自然釉付着、底面沈線状のナデが一周する	—
157	577	26	〃	山茶椀	小椀	8.5	2.8	4.4	灰色	ナデ	横ナデ	—		69
157	578	26	〃	山茶椀	小椀	(6.7)	1.9	(3.6)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
157	579	26	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	2.3	(4.0)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
157	580	26	〃	山茶椀	小皿	7.2	2.1	3.6	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—

挿図	遺物番号	区	遺構(層位)	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	高台径底径(cm)	色調	調整 底部	調整 見込み	高台圧痕	備考	写真図版
157	581	26	表土	山茶椀	小皿	(7.9)	2.3	(3.2)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、自然釉付着	—
157	582	26	〃	山茶椀	小皿	(7.9)	(2.4)	(3.6)	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		—
157	583	26	〃	山茶椀	小皿	(7.4)	1.9	3.5	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
157	584	26	〃	山茶椀	小皿	8.2	2.1	4.4	灰色	糸切り	横ナデ	—		69
157	585	26	〃	山茶椀	小皿	(7.0)	1.7	(4.4)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	自然釉付着、湖西・渥美	—
157	586	26	〃	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	—	灰白色	—	—	—	頸部径(9.4cm)	—
157	587	26	〃	青磁	碗	—	—	—	灰白色	—	—	—		—
157	588	26	〃	青磁	碗	—	—	—	灰白色	—	—	—		—
158	591	4	〃	山茶椀	椀	(15.3)	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
158	592	4	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.4)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
158	593	4	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.6)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
158	594	4	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.6)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
158	595	4	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.8)	オリーブ灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
158	596	4	〃	山茶椀	椀	—	—	(8.0)	灰白色	糸切り	横ナデ	籾殻	湖西・渥美	—
158	597	4	〃	山茶椀	小椀	(8.1)	2.4	3.6	灰白色	ナデ	ナデ	—		—
158	598	4	〃	山茶椀	小椀	(8.2)	2.3	(4.3)	灰白色	ナデ	ナデ	—	ヘラ記号、ケズリ出高台？	—
158	599	4	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	2.3	(4.0)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
158	600	4	〃	山茶椀	小皿	(6.9)	2.3	(4.1)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
158	601	4	〃	山茶椀	小皿	(8.3)	2.1	(3.6)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
158	602	4	〃	青磁	碗	—	—	(4.5)	緑灰色	糸切り	横ナデ	—		—
159	603	54	〃	山茶椀	椀	15.3	5.7	6.6	灰色	糸切り	ナデ	—		—
159	604	54	〃	山茶椀	椀	(15.2)	—	—	青灰色	糸切り	横ナデ	—		—
159	605	54	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.5)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
159	606	54	〃	山茶椀	椀	—	—	6.9	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
159	607	54	〃	山茶椀	椀	—	—	6.9	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
159	608	54	〃	山茶椀	椀	—	—	5.8	灰色	ナデ	横ナデ	籾殻	重ね焼き痕	—
159	609	54	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.9)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
159	610	54	〃	山茶椀	椀	—	—	7.5	灰白色	糸切り	横ナデ	籾殻	湖西・渥美	—
159	611	54	SA-11	山茶椀	小碗	(8.6)	2.6	4.2	黄灰色	ナデ	横ナデ	—		—
159	612	54	表土	山茶椀	小碗	8.4	2.3～3.1	4.0	灰褐色	糸切り	ナデ	—	湖西・渥美	—
159	613	54	〃	山茶椀	小碗	(8.2)	2.4	(4.2)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
159	614	54	〃	山茶椀	小碗	(8.2)	2.4	(4.0)	灰色	糸切り	ナデ	—		—
159	615	54	〃	山茶椀	小碗	(7.9)	2.2	(3.8)	灰色	糸切り	ナデ	—		—
159	616	54	〃	山茶椀	小皿	(8.9)	2.2	(4.2)	灰色	糸切り	ナデ	—		—
159	617	54	〃	山茶椀	小皿	8.4	2.3	4.4	灰色	糸切り	ナデ	—		—
159	618	54	〃	山茶椀	小皿	(8.1)	2.2	4.2	灰色	糸切り	ナデ	—		—
159	619	54	〃	山茶椀	小皿	(8.0)	2.1	(3.6)	灰色	糸切り	ナデ	—		—
159	620	54	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	2.4	(3.6)	灰色	糸切り	ナデ	—		—
159	621	54	〃	山茶椀	小皿	(8.2)	1.8	(5.5)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	自然釉付着、湖西・渥美	—
159	622	54	〃	青磁	碗	—	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
159	623	54	〃	須恵器	高坏	—	—	—	灰白色	糸切り	横ナデ	—	脚部径5.9cm	—
159	624	54	〃	山茶椀	鉢	—	—	—	灰色	糸切り	横ナデ	—	台部径(13.4cm)、重ね焼き痕	—
160	625	3′	上面	山茶椀	椀	(16.6)	—	—	灰白色	—	—	—		—
160	626	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	6.6	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
160	627	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.4)	灰色	ナデ	横ナデ	—		—
160	628	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	6.8	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
160	629	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	7.5	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
160	630	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.3)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
160	631	3′	〃	山茶椀	小椀	(7.4)	2.3	(4.0)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
160	632	3′	〃	山茶椀	小皿	(8.2)	2.4	(4.0)	灰色	糸切り	横ナデ	—		69
160	633	3′	〃	山茶椀	小皿	7.6	2.4	3.8	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
160	634	3′	〃	山茶椀	小皿	7.6	2.3	3.2	青灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	—
160	635	3′	〃	山茶椀	小皿	7.7	1.9	4.0	黄灰色	糸切り	ナデ	—	完形、自然釉付着、湖西・渥美	69
160	636	3′	上面	山茶椀	小皿	(7.7)	1.7	4.0	黄灰色	糸切り	ナデ	—	内面自然釉付着、口縁付近重ね焼き痕	—
160	637	3′	〃	山茶椀	小皿	—	—	4.2	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
160	638	3′	〃	山茶椀	小皿	—	—	3.9	灰白色	糸切り	横ナデ	—	内面自然釉付着	—
160	639	3′	〃	山茶椀	小皿	—	—	4.0	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
160	640	3′	〃	白磁	皿	—	—	—	灰白色	—	—	—	花紋	—
161	641	3′	下面	山茶椀	椀	15.1	5.1～5.2	7.3	灰白色	糸切り	ナデ	籾殻	完形、自然釉付着	—
161	642	3′	〃	山茶椀	椀	(15.9)	5.0	6.8	灰色	糸切り	横ナデ	—	部分的に自然釉付着	—
161	643	3′	〃	山茶椀	椀	(17.1)	4.8	(7.0)	灰色	糸切り	横ナデ	—	焼き歪み	69
161	644	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	6.5	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
161	645	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.2)	灰黄色	糸切り	横ナデ	—		—
161	646	3′	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.9)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、湖西・渥美	—
161	647	3′	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.7)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、ツケガケ	—
161	648	3′	〃	山茶椀	小皿	8.5	2.3～2.7	4.4	褐灰色	糸切り	ナデ	—	完形、重ね焼き痕、口縁付近自然釉付着	—
161	649	3′	〃	山茶椀	小皿	7.6	2.2	3.7	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
161	650	3′	〃	山茶椀	小皿	(8.2)	2.0	4.0	にぶい黄橙色	糸切り	ナデ	—		—
161	651	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.3)	2.3	(3.6)	灰白色	糸切り	ナデ	—		70
161	652	3′	〃	山茶椀	小皿	(7.6)	2.3	(3.6)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
161	653	3′	〃	山茶椀	小皿	(6.7)	2.0	(3.9)	にぶい黄橙色	糸切り	ナデ	—		—
161	654	3′	〃	山茶椀	小皿	(8.6)	2.0	4.6	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
161	655	3′	〃	山茶椀	小皿	(8.0)	2.0	4.0	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
161	656	3′	〃	山茶椀	小皿	—	—	(4.4)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—

挿図	遺物番号	区	遺構(層位)	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	高台径底径(cm)	色調	調整 底部	調整 見込み	高台圧痕	備考	写真図版
161	657	3′	下面	山茶椀	鍋	—	—	—	浅黄橙色	—	—	—	伊勢鍋	—
162	658	53	表土	山茶椀	椀	(15.9)	—	6.9	灰白色	ナデ	横ナデ	籾殻		—
162	659	53	〃	山茶椀	椀	(16.3)	5.3	7.4	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
162	660	53	〃	山茶椀	椀	(16.4)	5.4	(6.6)	灰色	糸切り	横ナデ	—		70
162	661	53	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.4)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
162	662	53	〃	山茶椀	椀	—	—	6.3	灰色	ナデ	横ナデ	籾殻		—
162	663	53	〃	山茶椀	椀	—	—	6.4	灰色	ナデ	横ナデ	スノコ		—
162	664	53	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.6)	灰白色	ナデ	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
162	665	53 54	表土	山茶椀	椀	—	—	7.3	にぶい黄橙色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
162	666	53	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.8)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
162	667	53	〃	山茶椀	椀	—	—	6.6	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、底部中央にナデ	—
162	668	53	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.7)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	転用硯	—
162	669	53	〃	山茶椀	小碗	(8.0)	2.4	(4.4)	黄灰色	糸切り	ナデ	—		—
162	670	53	〃	山茶椀	小碗	7.9	2.2	4.0	灰色	糸切り	ナデ	—	完形	—
162	671	53	〃	山茶椀	小皿	(8.0)	2.5	4.3	灰色	糸切り	ナデ	—		70
162	672	53	〃	山茶椀	小皿	(7.7)	2.3	(4.0)	黄灰色	糸切り	ナデ	—		—
162	673	53	〃	山茶椀	小皿	(7.6)	2.3	3.6	灰色	糸切り	ナデ	—	口縁付近自然釉付着	—
162	674	53	〃	山茶椀	小皿	(8.0)	2.2	(4.6)	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		—
162	675	53	〃	山茶椀	小皿	7.4	2.1～2.2	3.7	灰色	糸切り	ナデ	—	完形、内面一部斑点状に自然釉付着	—
162	676	53	〃	山茶椀	小皿	(8.1)	2.1	(4.8)	灰色	糸切り	ナデ	—		—
162	677	53	〃	山茶椀	小皿	7.9	1.9～2.2	3.8	灰色	糸切り	ナデ	—		—
162	678	53	〃	山茶椀	小皿	(8.0)	1.9	4.2	灰白色	糸切り	ナデ	—	内面に斑点状の自然釉付着	—
162	679	53	〃	須恵器	坏身	—	—	(9.4)	灰白色	ナデ	横ナデ	—		—
162	680	53	〃	青磁	皿	—	—	(5.4)	灰白色	ヘラケズリ	—	—		—
162	681	53	〃	青磁	椀	—	—	(7.2)	灰白色	—	—	—		—
162	682	53	〃		瓶類	(16.5)	—	—	灰色	—	—	—		—
162	683	53	〃		瓶類	—	—	—	青灰色	—	—	—	頸部径(4.6cm)、沈線	—
162	684	53	〃		片口鉢	—	—	—	灰色	—	—	—		—
162	685	53	〃		甕	—	—	(12.6)	灰白色	—	—	籾殻		—
162	686	53	〃		瓶類	—	—	(10.3)	灰白色	—	—	—		—
162	687	53	〃		瓶類	—	—	(7.9)	灰色	ナデ	横ナデ	—		—
162	688	53	〃		瓶類	—	—	6.1	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
163	689	3	SD-32	山茶椀	椀	(16.1)	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
163	690	3	〃	山茶椀	椀	(15.8)	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
163	691	3	〃	山茶椀	小皿	7.7	1.9	3.7	灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形	—
164	692	15	SD-22	山茶椀	椀	(16.4)	5.4	(6.2)	灰色	ナデ	ナデ	スノコ	重ね焼き痕	70
164	693	15	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.5)	灰色	糸切り	—	スノコ	重ね焼き痕	—
164	694	15	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.2)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
164	695	15	〃	山茶椀	小皿	8.1	2.4	4.0	灰黄色	糸切り	横ナデ	—		70
164	696	15	〃	山茶椀	小皿	8.2	2.3	3.8	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	70
164	697	15	〃	山茶椀	小皿	—	—	4.0	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
164	698	46	SD-24	山茶椀	椀	(14.9)	—	—	灰色	—	横ナデ	—	沈線	—
164	699	46	〃	山茶椀	小皿	(7.4)	2.1	(4.2)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
164	700	46	SD-23	灰釉陶器	椀	—	—	(5.5)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
164	701	46	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.5)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
164	702	46	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.7)	青灰色	糸切り	横ナデ	—		—
164	703	46	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.9)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
164	704	46	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.8)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	自然釉付着	—
164	705	46	〃	山茶椀	小椀	(8.4)	2.6	(4.5)	灰色	糸切り	横ナデ	—	内面自然釉付着	70
164	706	46	SD-23	山茶椀	小椀	—	—	4.0	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
164	707	46	〃	山茶椀	小皿	(8.4)	2.1	(3.4)	灰色	糸切り	横ナデ	—	自然釉付着	70
164	708	46	〃	山茶椀	小皿	(9.1)	—	—	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
164	709	46	〃	山茶椀	小皿	(8.6)	—	—	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
164	710	46	〃	山茶椀	小皿	(8.4)	—	—	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
164	711	46	〃	山茶椀	小皿	—	—	3.6	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、自然釉付着	—
164	712	46	〃	山茶椀	小皿	—	—	4.1	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
164	713	46	SD-22	山茶椀	椀	—	—	6.2	青灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
164	714	46	SD-30	山茶椀	椀	(15.6)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
164	715	46	〃	山茶椀	椀	—	—	—	青灰色	—	横ナデ	—		—
164	716	46	〃	山茶椀	小椀	—	—	(4.7)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
165	717	46	SD-28	山茶椀	椀	15.3	6.2	8.0	灰黄色	糸切り	ナデ	スノコ		70
165	718	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	内面施釉	—
165	719	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	施釉	—
165	720	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
165	721	46	〃	山茶椀	椀	—	—	5.8	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、墨書「○」字状記号	72
165	722	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.2)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
165	723	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.1)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
165	724	46	〃	山茶椀	小皿	8.4	2.4～2.5	3.8	灰色	糸切り	ナデ	—	完形、自然釉付着	70
165	725	46	〃	山茶椀	小皿	8.2	2.1～2.4	4.2	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	71
165	726	46	〃	山茶椀	小皿	8.1	2.0～2.4	4.0	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	71
165	727	46	〃	山茶椀	小皿	8.1	2.3～2.5	3.8	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	71
165	728	46	〃	山茶椀	小皿	8.1	2.5～2.9	3.8	灰色	糸切り	横ナデ	—		71
165	729	46	〃	山茶椀	小皿	7.9	2.1～2.5	3.4	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	72
165	730	46	〃	山茶椀	小皿	7.8	2.4	4.0	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	72
165	731	46	〃	山茶椀	小皿	8.4	2.4～2.6	4.0	灰色	糸切り	横ナデ	—		72

挿図	遺物番号	区	遺構（層位）	種別	器種	口径（cm）	器高（cm）	高台径底径（cm）	色調	調整 底部	調整 見込み	高台圧痕	備考	写真図版
165	732	46	SD-28	山茶椀	小皿	8.6	2.4～2.5	3.6	灰色	糸切り	横ナデ	—		72
165	733	46	〃	山茶椀	小皿	(7.8)	—	—	青灰色	—	—	—		—
165	734	46	〃	灰釉陶器	瓦鉢	23.8	—	—	灰白色	—	ナデ	—		—
165	735	46	〃	灰釉陶器	瓦鉢	—	—	7.3	灰白色	ヘラケズリ	ナデ	—		—
166	736	46	SD-29	山茶椀	椀	15.2	5.2～5.3	6.8	灰色	糸切り	ナデ	スノコ		72
166	737	46	〃	山茶椀	椀	(16.1)	4.9	6.8	灰色	糸切り	ナデ	スノコ	重ね焼き痕	72
166	738	46	〃	山茶椀	椀	(17.0)	5.2	(5.7)	灰色	糸切り	ナデ	スノコ		72
166	739	46	〃	山茶椀	椀	(15.8)	4.9	7.2	にぶい黄橙色	糸切り	ナデ	籾殻		72
166	740	46	〃	山茶椀	椀	(15.7)	5.0	(6.4)	灰白色	糸切り	ナデ	スノコ		72
166	741	46	SD-29	山茶椀	椀	(13.1)	—	—	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
166	742	46	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.8)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
166	743	46	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.6)	灰白色	糸切り？	横ナデ	—		—
166	744	46	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.3)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
166	745	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.4)	灰黄色	ナデ	横ナデ	籾殻	重ね焼き痕	—
166	746	46	〃	山茶椀	小椀	(8.6)	2.7	(4.0)	灰白色	ナデ	横ナデ	—	内面自然釉付着	—
166	747	46	〃	山茶椀	小椀	(7.8)	2.5	(4.4)	灰白色	ナデ	ナデ	—	内面自然釉付着	73
166	748	46	〃	山茶椀	小椀	(7.5)	2.4	(3.0)	灰色	—	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
166	749	46	〃	山茶椀	小椀	(8.0)	2.5	(4.6)	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
166	750	46	〃	山茶椀	小皿	7.5	2.1～2.3	3.8	オリーブ灰色	糸切り	ナデ	—	完形	—
166	751	46	〃	山茶椀	小皿	7.1	1.9～2.0	3.6	灰色	糸切り	ナデ	—		73
166	752	46	〃	山茶椀	小皿	(7.5)	2.1	(5.7)	灰黄色	—	横ナデ	—	外面自然釉付着	—
166	753	46	〃	山茶椀	小皿	(8.0)	2.0	(3.8)	灰白色	糸切り	ナデ	—	内面自然釉付着	—
166	754	46	〃	山茶椀	小皿	(8.8)	2.1	(4.3)	灰黄色	—	横ナデ	—	内面口縁に釉	—
166	755	46	〃	山茶椀	小皿	(8.0)	1.9	(4.6)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
166	756	46	〃	山茶椀	小皿	(7.5)	2.0	3.2	灰白色	—	ナデ	—		—
166	757	46	〃	山茶椀	小皿	—	—	(3.0)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
166	758	46	〃	山茶椀	小皿	—	—	4.3	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
166	759	46	〃	灰釉陶器	長頸瓶	9.7	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	外面自然釉付着、760と同一個体？	—
166	760	46	〃	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	頸部径（4.6cm）、759と同一個体？	73
166	761	46	SD-29（集石部）	山茶椀	椀	(14.6)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
166	762	46	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.9)	青灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
166	763	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.3)	灰白色	ナデ	横ナデ	—		—
166	764	46	〃	山茶椀	小皿	7.2	2.3	3.8	灰色	糸切り	ナデ	—	完形、内面斑点状に自然釉付着	73
166	765	46	〃	山茶椀	小皿	(8.4)	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
167	767	46	SH-31	灰釉陶器	椀	—	—	(6.0)	灰色	—	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
167	768	46	SH-34	灰釉陶器	椀	—	—	7.1	灰色	—	—	—		—
167	769	46	〃	山茶椀	小皿	(8.8)	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
167	770	46	柱穴	山茶椀	椀	—	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
167	771	46	SH-35	山茶椀	椀	—	—	(6.1)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、墨書	—
168	772	34	SH-38	灰釉陶器	椀	—	—	7.0	灰白色	ナデ	横ナデ	—	重ね焼き痕、底部墨痕、転用硯	—
168	773	34	SH-39	灰釉陶器	椀	—	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
168	774	34	柱穴	土師器	坏身	(11.6)	—	—	浅黄橙色	—	横ナデ	—	外側黒変、輪積み痕？	—
169	775	46	SB-1	灰釉陶器	椀	(13.5)	4.2	(6.4)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		74
169	776	46	〃	灰釉陶器	椀	(12.6)	3.8	(5.5)	灰色	ナデ	横ナデ	—		74
169	777	46	SB-1	灰釉陶器	椀	(14.1)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
169	778	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.8)	灰白色	ナデ	横ナデ	—	重ね焼き痕、ツケガケ	—
169	779	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.9)	灰白色	—	横ナデ	—		—
169	780	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(8.4)	灰色	—	横ナデ	—		—
169	781	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.5)	灰白色	—	横ナデ	—		—
169	782	46	〃	灰釉陶器	瓦鉢	(14.4)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
169	783	46	〃	土師器	坏身	12.0	4.2	—	浅黄橙色	ヘラナデ	横ナデ	—	内面一部赤彩、口縁煤付着	74
169	784	46	〃	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	(6.9)	灰色	ヘラケズリ	横ナデ	—	釉付着	—
170	787	34	SB-2	灰釉陶器	椀	(12.7)	4.1	5.8	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、墨書「虫」	74
170	788	34	〃	灰釉陶器	椀	(14.0)	4.0	6.3	灰白色	ナデ	ナデ	—		—
170	789	34	〃	灰釉陶器	椀	(15.7)	—	—	灰色	糸切り	横ナデ	—	ハケ塗り？	—
170	790	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	—	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
170	791	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.7)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
170	792	34	〃	土師器	坏身	(12.0)	4.1	—	にぶい橙色	—	—	—		74
170	793	34	SB-3	灰釉陶器	皿	(15.0)	3.2	(7.2)	灰黄色	糸切り	横ナデ	—	見込み部分墨痕	74
170	794	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.0)	灰白色	ナデ	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
170	795	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(9.0)	にぶい黄橙色	糸切り	横ナデ	—		—
170	796	34	SB-3	灰釉陶器	椀	—	—	(10.7)	灰白色	糸切り	横ナデ	籾殻	重ね焼き痕	—
171	797	34	SF-17	灰釉陶器	長頸瓶	12.8	24.9	9.2	灰白色	ヘラケズリ	横ナデ	—	完形、頸部径6.0cm、胴部最大径16.4cm	75
171	798	34	SF-18	灰釉陶器	長頸瓶	(12.7)	(26.2)	10.5	灰白色	ヘラケズリ	横ナデ	—	自然釉付着、体部最大径17.5cm	75
172	799	34	SF-19	灰釉陶器	長頸瓶	11.6	18.2	7.0	灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形、頸部径6.2cm、胴部最大径12.7cm、自然釉付着？	75
172	800	34	〃	土師器	坏身	(12.6)	3.5	(5.0)	浅黄橙色	ヘラナデ	ヘラナデ	—	内外面口縁付近赤彩の痕跡が顕著	74
172	801	34	〃	土師器	坏身	13.5	3.9～4.6	—	浅黄橙色	ヘラナデ	ヘラナデ	—	内面赤彩の痕跡が顕著、外面は僅かに残る	74
172	802	34	〃	土師器	坏身	12.5	4.8	—	浅黄橙色	ヘラナデ	ヘラナデ	—	内面赤彩の痕跡が顕著	74

挿図	遺物番号	区	遺構(層位)	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	高台径底径(cm)	色調	調整		高台圧痕	備考	写真図版
										底部	見込み			
172	803	34	SF-20	土師器	坏身	12.3	4.9	—	浅黄橙色	ヘラナデ	ヘラナデ	—	内面赤彩の痕跡	75
172	804	34	SF-19	土師器	坏身	(12.6)	4.2	—	浅黄橙色	—	横ナデ	—	外面煤付着	—
172	805	34	〃	土師器	坏身	(12.0)	—	—	浅黄橙色	—	横ナデ	—	赤彩	75
172	806	34	〃	土師器	坏身	(13.4)	—	—	浅黄橙色	—	—	—	指頭圧痕、赤彩	78
172	807	34	〃	土師器	坏身	(12.9)	—	—	浅黄橙色	—	横ナデ	—	指頭圧痕	78
173	808	34	SF-21	灰釉陶器	椀	(14.8)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
173	809	34	〃	灰釉陶器	椀	(13.9)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	炭化物付着、煤付着、灯明皿	—
173	810	34	〃	灰釉陶器	椀	(13.4)	—	—	灰色	—	横ナデ	—	施釉	—
173	811	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.1)	灰白色	ナデ	横ナデ	—		—
173	812	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.9)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
173	813	34	〃	山茶椀	椀	—	—	6.4	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
173	814	34	〃	山茶椀	椀	—	—	6.0	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
173	815	34	〃	灰釉陶器	托	—	—	—	にぶい黄橙色	—	横ナデ	—	脚接地部径10.4cm、脚取付部径7.3cm	—
173	816	34	SF-22	山茶椀	椀	16.2	5.5	6.2	灰色	糸切り	横ナデ	籾殻	完形、墨書	78
173	817	34	〃	山茶椀	小皿	7.8	1.8～2.3	3.7	灰白色	糸切り	横ナデ	—	完形、ヘラ印有	78
173	818	34	〃	山茶椀	小皿	7.5	1.9～2.2	3.5	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形、墨書	78
173	819	34	SF-22	山茶椀	小皿	7.3	2.2～2.3	4.1	灰色	糸切り	横ナデ	—	完形	78
173	820	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	5.3	灰白色	糸切り	横ナデ	籾殻		—
173	821	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.2)	灰白色	ナデ	横ナデ	—		—
174	822	46	表土	灰釉陶器	椀	—	—	(6.3)	灰白色	ナデ	横ナデ	—		—
174	823	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.3)	灰白色	ナデ	ナデ	—	重ね焼き痕	—
174	824	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.1)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
174	825	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.9)	灰白色	ナデ	横ナデ	—		—
174	826	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.3)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	施釉	—
174	827	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	5.5	灰色	—	ナデ	—	重ね焼き痕	—
174	828	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	—	灰白色	糸切り	横ナデ	—	施釉	—
174	829	46	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(8.2)	灰白色	ヘラケズリ	横ナデ	—	重ね焼き痕、ヘラ切り	—
174	830	46	〃	山茶椀	椀	—	—	7.1	にぶい橙色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
174	831	46	〃	山茶椀	椀	—	—	6.2	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
174	832	46	〃	山茶椀	小椀	—	—	4.3	灰色	ナデ	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
174	833	46	〃	山茶椀	小椀	(8.0)	2.3	(5.0)	青灰色	糸切り	横ナデ	—		78
174	834	46	〃	山茶椀	小皿	(8.8)	2.0	(5.3)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	自然釉付着	—
174	835	46	〃	山茶椀	小皿	(7.4)	2.0	(3.4)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
174	836	46	〃	山茶椀	山皿	—	—	(4.1)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
174	837	46	〃	山茶椀	小皿	5.9	—	—	灰白色	—	—	—		—
174	838	46	〃	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
174	839	46	〃	灰釉陶器	長頸瓶	(11.6)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
174	840	46	〃	土師器	坏身	11.5	4.0	—	灰白色	ヘラナデ	ヘラナデ	—	煤付着、赤彩	78
174	841	46	〃	土師器	坏身	—	—	—	にぶい黄橙色	—	横ナデ	—		—
174	842	46	〃	土師器	坏身	13.0	4.2～4.5	—	にぶい黄橙色	ヘラナデ	ヘラナデ	—	煤付着、内面赤彩	78
174	843	46	〃	土師器	甕	—	—	—	浅黄橙色	—	—	—		—
174	844	46	〃	土師器	甕	—	—	6.2	にぶい黄橙色	—	板ナデ	—		—
175	845	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.7)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、ハケヌリ	—
175	846	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.2)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
175	847	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.0)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	施釉？	—
175	848	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.2)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
175	849	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	7.5	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
175	850	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.6)	灰色	ナデ	ナデ	—	重ね焼き痕	—
175	851	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.4)	灰白色	ナデ	ナデ	—	重ね焼き痕	—
175	852	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.4)	灰白色	ナデ	横ナデ	—		—
175	853	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.0)	灰白色	ヘラケズリ	横ナデ	—		—
175	854	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.8)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
175	855	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.3)	灰白色	—	横ナデ	—		—
175	856	34	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.2)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕	—
175	857	34	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.2)	灰白色	—	—	—		—
175	858	34	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.5)	にぶい橙色	—	—	—		—
175	859	34	〃	山茶椀	小皿	(6.4)	2.5	(4.4)	灰色	糸切り	横ナデ	—	内面自然釉付着	78
175	860	34	〃	山茶椀	小皿	—	—	4.2	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
175	861	34	〃	灰釉陶器	瓦鉢	(23.3)	12.4	—	灰白色	横ナデ	横ナデ	—	最大径(26.0cm)、施釉	79
175	862	34	〃	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	(9.4)	灰褐色	ナデ	横ナデ	—	自然釉付着？	—
175	863	34	〃	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	(16.3)	灰色	—	—	—	施釉	—
175	864	34	〃	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	17.1	にぶい橙色	—	—	—		—
175	865	34	〃	灰釉陶器	長頸瓶	(12.9)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
175	866	34	〃	土師器	甕	(11.5)	—	—	橙色	—	—	—		—
175	867	34	〃	白磁	碗	—	—	—	灰白色	—	—	—	模様？	—
176	868	15	〃	灰釉陶器	椀	(12.6)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
176	869	15	〃	灰釉陶器	椀	—	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
176	870	15	〃	灰釉陶器	椀	—	—	—	にぶい黄橙色	—	横ナデ	—		—
176	871	15	〃	灰釉陶器	椀	—	—	—	黄灰色	—	横ナデ	—		—
176	872	15	〃	灰釉陶器	椀	—	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	ツケガケ	—
176	873	15	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.8)	浅黄色	ナデ	横ナデ	—		—
176	874	15	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.4)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
176	875	15	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.3)	赤灰色	糸切り	横ナデ	—		—
176	876	15	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.7)	灰白色	—	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
176	877	15	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.9)	灰黄色	糸切り	横ナデ	—		—

挿図	遺物番号	区	遺構（層位）	種別	器種	口径（cm）	器高（cm）	高台径底径（cm）	色調	調整 底部	調整 見込み	高台圧痕	備考	写真図版
176	878	15	表土	山茶椀	椀	—	—	(7.0)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
176	879	15	〃	灰釉陶器	耳皿？	—	—	3.0	灰色	糸切り	横ナデ	—	体部径(6.1cm)	—
176	880	15	〃	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	(8.4)	灰白色	—	—	—	内面自然釉付着	—
176	881	15	〃	灰釉陶器	長頸瓶	(7.9)	—	—	灰色	—	—	—		—
176	882	15	〃	灰釉陶器	長頸瓶	(18.6)	—	—	灰色	—	横ナデ	—	内面自然釉付着	—
176	883	15	〃	灰釉陶器	長頸瓶	(11.7)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	内面２条の沈線	—
176	884	15	〃		甕	—	—	—	黄灰色	—	横ナデ	—		—
177	885	35	SD-31	山茶椀	椀	(16.2)	6.0	(7.6)	にぶい黄橙色	糸切り	ナデ	—		80
177	886	35	〃	山茶椀	椀	(16.6)	5.8	(7.6)	にぶい黄橙色	糸切り	ナデ	—	知多産	80
177	887	35	〃	山茶椀	椀	(16.4)	5.2	7.0	灰色	糸切り	ナデ	—		80
177	888	35	〃	山茶椀	椀	(15.9)	5.4	(7.2)	灰色	糸切り	ナデ	—	重ね焼き痕	80
177	889	35	〃	山茶椀	椀	(16.0)	—	—	灰白色	—	ナデ	—	内外面口縁付近に自然釉付着	—
177	890	35	〃	山茶椀	椀	—	—	6.8	灰色	糸切り	ナデ	—		—
177	891	35	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.0)	灰黄色	—	ナデ	—		—
177	892	35	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.6)	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
177	893	35	〃	山茶椀	椀	—	—	6.8	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
177	894	35	〃	山茶椀	椀	—	—	6.2	灰色	糸切り	ナデ	—		—
177	895	35	〃	山茶椀	椀	—	—	(7.2)	灰黄色	糸切り	ナデ	—		—
177	896	35	〃	山茶椀	椀	—	—	7.0	灰色	糸切り	ナデ	—		—
177	897	35	〃	山茶椀	椀	—	—	7.2	にぶい黄橙色	糸切り	ナデ	籾殻	湖西・渥美	—
177	898	35	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.2)	灰黄褐色	糸切り	ナデ	—		—
177	899	35	〃	山茶椀	椀	—	—	7.0	灰色	糸切り	ナデ	—		—
177	900	35	〃	山茶椀	椀	—	—	6.4	黄灰色	ナデ	—	—	重ね焼き痕	—
177	901	35	〃	山茶椀	椀	—	—	6.6	にぶい黄橙色	糸切り	ナデ	—		—
177	902	35	〃	山茶椀	椀	—	—	7.0	灰色	糸切り	ナデ	—		—
177	903	35	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.4)	灰色	糸切り	ナデ	—		—
177	904	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	6.6	褐灰色	糸切り	ナデ	—		—
177	905	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.8)	灰白色	ナデ	ナデ	—		—
177	906	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.4)	灰色	ナデ	ナデ	—		—
177	907	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(8.0)	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
177	908	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	7.0	灰褐色	糸切り	ナデ	—	内面に少量の自然釉付着	—
177	909	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.2)	浅黄色	ナデ	ナデ	—		—
177	910	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.4)	灰白色	ナデ	—	—		—
177	911	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.4)	灰白色	ナデ	ナデ	—		—
177	912	35	〃	山茶椀	小皿	8.2	2.3～2.4	4.2	灰白色	糸切り	ナデ	—		80
177	913	35	〃	山茶椀	小皿	8.3	2.4～2.6	3.8	黄灰色	糸切り	ナデ	—	重ね焼き痕、口縁付近自然釉付着	80
177	914	35	〃	山茶椀	小皿	(8.5)	2.2	4.4	浅黄橙色	糸切り	ナデ	—		80
177	915	35	〃	山茶椀	小皿	(8.2)	1.8	(4.8)	灰白色	糸切り	ナデ	—		80
177	916	35	〃	山茶椀	小皿	(8.2)	2.0	4.4	灰白色	糸切り	ナデ	—		80
177	917	35	〃	山茶椀	小皿	—	—	4.3	にぶい黄橙色	糸切り	ナデ	—	自然釉付着、湖西・渥美	—
177	918	35	〃	山茶椀	小皿	—	—	(4.8)	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
177	919	35	〃	山茶椀	小椀	—	—	4.6	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
177	920	35	SD-31	山茶椀	小椀	—	—	(4.2)	灰色	糸切り	ナデ	—		—
177	921	35	〃	山茶椀	耳皿	(8.9)	2.4	4.2	灰白色	糸切り	横ナデ	—		79
177	922	35	〃		鉢	—	—	(10.3)	青灰色	—	横ナデ	—		—
177	923	35	〃		托	—	—	—	灰白色	ナデ	ナデ	—	接合部径(7.0cm)	—
177	924	35	〃		甕	—	—	—	灰色	—	—	—	頸部径(26.9cm)、常滑産	—
178	925	35	〃		甕	—	—	(21.2)	灰色	—	—	—	湖西・渥美	—
178	926	35	〃		甕	—	—	(10.6)	灰色	—	横ナデ	—	東遠	—
178	927	35	〃	須恵器	甕	—	—	(23.8)	灰白色	—	—	—	外面併行文の叩き目	—
178	928	35	〃		甕	—	—	—	灰色	—	—	—	湖西・渥美	—
179	929	35	表土	灰釉陶器	椀	—	—	(5.8)	灰白色	—	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
179	930	35	SH-46	緑釉陶器	椀	—	—	6.4	にぶい黄橙色	—	—	—		—
179	931	35	表土	山茶椀	小皿	(7.7)	2.2	(4.4)	灰色	糸切り	ナデ	—		80
179	932	35	〃	山茶椀	小皿	(7.4)	—	—	灰色	—	横ナデ	—		—
179	933	35	〃	山茶椀	小椀	—	—	(3.6)	灰白色	—	横ナデ	—		—
179	934	35	SH-45	灰釉陶器	椀	(12.8)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
179	935	35	表土	灰釉陶器	長頸瓶	(12.6)	—	—	灰白色	—	ナデ	—	内面自然釉付着	—
179	936	35	〃	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	—	灰白色	—	横ナデ	—	自然釉付着	—
180	937	35	SA-14	灰釉陶器	椀	(14.0)	3.6	(5.9)	灰白色	糸切り	ナデ	—		81
180	938	35	表土	灰釉陶器	皿	(15.7)	—	—	灰色	—	ナデ	—		—
180	939	35	柱穴	灰釉陶器	椀	—	—	(7.2)	灰色	ヘラ切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、自然釉付着	—
180	940	35	表土	灰釉陶器	椀	—	—	(6.8)	灰白色	ナデ	ナデ	—	内面斑点状に釉付着	—
180	941	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.7)	灰白色	ナデ	ナデ	—		—
180	942	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.7)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
180	943	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.2)	浅黄色	—	ナデ	—	重ね焼き痕	—
180	944	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.7)	灰黄色	ナデ	ナデ	—		—
180	945	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.4)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
180	946	35	〃	灰釉陶器	小椀	—	—	(4.2)	灰白色	糸切り	ナデ	—	釉付着	—
180	947	35	〃	灰釉陶器	瓶類	—	—	(11.0)	灰黄色	—	ナデ	—		—
180	948	35	〃	土師器	甕	(20.0)	—	—	浅黄橙色	—	ナデ	—		—
180	949	35	〃	土師器	甕	(19.8)	—	—	浅黄橙色	—	ナデ	—		—
181	950	35	北西部（表土）	山茶椀	小皿	(8.4)	2.2	4.6	灰色	糸切り	横ナデ	—		81
181	951	35	〃	山茶椀	小皿	(8.6)	2.2	(4.4)	灰白色	糸切り	ナデ	—		81

挿図	遺物番号	区	遺構(層位)	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	高台径底径(cm)	色調	調整 底部	調整 見込み	高台圧痕	備考	写真図版
181	952	35	北西部(表土)	灰釉陶器	椀	—	—	(6.3)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
181	953	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	7.2	灰白色	ナデ	ナデ	—	自然釉付着	—
181	954	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.4)	灰色	ナデ	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
181	955	35	表土	山茶椀	椀	(13.4)	4.0	(6.2)	灰色	—	横ナデ	—		81
181	956	35	〃	灰釉陶器	椀	(13.2)	—	—	灰白色	—	ナデ	—		—
181	957	35	〃	灰釉陶器	椀	(12.2)	—	—	灰白色	—	ナデ	—		—
181	958	35	〃	灰釉陶器	椀	(14.6)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
181	959	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.0)？	灰白色	ナデ	ナデ	—		—
181	960	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.2)	灰黄色	ナデ	ナデ	—		—
181	961	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.4)	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
181	962	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.0)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
181	963	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.2)	灰白色	ナデ	横ナデ	—		—
181	964	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.2)	灰白色	糸切り	ナデ	—		—
181	965	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.0)	灰黄色	糸切り	横ナデ	—		—
181	966	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.2)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
181	967	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.1)	灰色	糸切り？	横ナデ	籾殻		—
181	968	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.2)	灰黄色	ナデ	ナデ	—		—
181	969	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.8)	灰白色	ナデ	—	—	内面斑点状に自然釉付着	—
181	970	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.4)	灰白色	ナデ	ナデ	—	内面自然釉付着	—
181	971	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.4)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
181	972	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.0)	灰白色	糸切り	横ナデ	籾殻	重ね焼き痕	—
181	973	35	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.4)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
181	974	35	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.5)	灰色	糸切り	横ナデ	籾殻		—
181	975	35	〃	山茶椀	椀	—	—	(5.5)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
181	976	35	〃	山茶椀	小皿	(7.9)	1.7	3.7	灰色	糸切り	ナデ	—		—
181	977	35	〃	山茶椀	椀	—	—	7.1	灰白色	糸切り	横ナデ	—	湖西・渥美	—
181	978	35	〃	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
181	979	35	〃		甕	—	—	—	灰白色	—	—	—	内外面施釉？	—
181	980	35	〃	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	(7.1)	灰白色	糸切り	横ナデ	籾殻	ヘラ切り？	—
181	981	35	〃	土師器	甕	—	—	—	橙色	—	—	—		—
181	982	35	〃	土師器	甕	—	—	—	浅黄橙色	—	—	—		—
181	983	35	〃	土師器	甕	—	—	—	浅黄橙色	—	横ナデ	—		—
182	984	48	柱穴	灰釉陶器	椀	(16.7)	—	—	灰白色	—	—	—	輪花	—
182	985	48	〃	灰釉陶器	椀	(15.4)	—	—	灰白色	—	—	—		—
182	986	48	SH-51	灰釉陶器	椀	—	—	—	黄灰色	—	横ナデ	—	施釉	—
182	987	48	表土	灰釉陶器	椀	—	—	5.3	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、ヘラ描き？	—
182	988	48	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.8)	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
182	989	48	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.4)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		—
182	990	48	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.8)	灰黄色	ナデ	横ナデ	—	重ね焼き痕、焼きぶくれ	—
182	991	48	南東部(表土)	灰釉陶器	転用硯？	—	—	(7.5)	灰白色	ナデ	横ナデ	—	底部裏墨痕、施釉	—
182	992	48	〃	灰釉陶器	—	—	—	(5.7)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、施釉	—
182	993	48	南東部(表土)	灰釉陶器	—	—	—	(6.4)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
182	994	48	〃	山茶椀	椀	—	—	7.4	灰黄色	糸切り	横ナデ	籾殻	重ね焼き痕	—
182	995	48	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.3)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、自然釉付着	—
182	996	48	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.7)	灰色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
182	997	48	〃	山茶椀	小椀	(8.4)	(2.1)	(4.7)	黄灰色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
182	998	48	〃	灰釉陶器	托	—	—	—	灰白色	糸切り	横ナデ	—	接合部径8.0cm	—
182	999	48	〃		台鉢	—	—	(8.0)	灰白色	—	横ナデ	—	重ね焼き痕、内面自然釉付着	—
182	1000	48	〃		甕	(21.0)	—	—	にぶい黄橙色	—	—	—	清郷甕、指頭痕	—
182	1001	48	〃	土師器	甕	(14.4)	—	—	橙色	—	—	—		—
183	1002	48	表土	灰釉陶器	椀	(14.9)	4.6	(6.5)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		81
183	1003	48	〃	灰釉陶器	椀	(15.0)	—	—	灰黄色	—	横ナデ	—	施釉	—
183	1004	48	〃	灰釉陶器	椀	(13.9)	—	—	にぶい橙色	—	横ナデ	—		—
183	1005	48	〃	灰釉陶器	椀	(12.7)	—	—	灰黄色	—	横ナデ	—	施釉	—
183	1006	48	〃	灰釉陶器	椀	(13.4)	—	—	灰色	—	横ナデ	—	施釉	—
183	1007	48	〃	灰釉陶器	椀	(15.8)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
183	1008	48	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.6)	灰白色	—	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
183	1009	48	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.8)	灰色	糸切り	横ナデ	スノコ	重ね焼き痕、ツケガケ	—
183	1010	48	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.4)	灰白色	—	—	—		—
183	1011	48	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.8)	黄灰色	糸切り	横ナデ	—		—
183	1012	48	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(7.2)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
183	1013	48	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(5.8)	灰白色	ナデ	横ナデ	—		—
183	1014	48	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.9)	浅黄橙色	—	—	籾殻	重ね焼き痕	—
183	1015	48	〃	灰釉陶器	椀	—	—	(6.4)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕	—
183	1016	48	〃	灰釉陶器	椀	—	—	6.1	灰白色	糸切り	横ナデ	—	重ね焼き痕、施釉	—
183	1017	48	〃	山茶椀	椀	—	—	(6.2)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	自然釉付着	—
183	1018	48	〃	山茶椀	小椀	(7.0)	2.4	(3.9)	灰白色	糸切り	横ナデ	—		81
183	1019	48	〃	山茶椀	椀	—	—	6.5	灰白色	糸切り	横ナデ	スノコ		—
183	1020	48	〃	青白磁	小壷蓋	(4.6)	—	—	灰白色	—	—	—	最大径(6.4cm)	—
183	1021	48	〃	白磁	四耳壷	—	—	—	灰白色	—	—	—		—
183	1022	48	〃	灰釉陶器	深椀	—	—	(11.6)	灰白色	—	横ナデ	—		—
183	1023	48	〃		甕？	—	—	(14.8)	灰白色	ナデ	横ナデ	—		—
183	1024	48	〃		瓶類	—	—	(10.5)	灰白色	—	横ナデ	—		—

挿図	遺物番号	区	遺構(層位)	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	高台径底径(cm)	色調	調整 底部	調整 見込み	高台圧痕	備考	写真図版
184	1025	50	SB-4	灰釉陶器	椀	(16.5)	5.7	(7.1)	灰白色	ヘラケズリ	横ナデ	—	施釉	—
184	1026	50	〃	灰釉陶器	椀	(15.5)	—	—	灰白色	—	横ナデ	—		—
184	1027	29	SD-33	山茶椀	椀	(15.5)	5.2	6.2	灰色	糸切り	ナデ	—		—
184	1028	29	〃	青磁	碗	(16.5)	—	—	緑灰色	—	—	—		—
184	1029	29	〃	山茶椀	椀	(15.2)	—	—	青灰色	—	横ナデ	—		—
184	1030	29	表土	山茶椀	椀	—	—	(6.3)	灰色	糸切り	横ナデ	—		—
184	1031	29	SF-25	山茶椀	椀	—	—	(7.6)	灰白色	糸切り	横ナデ	—	湖西・渥美	—
184	1032	J地点	表土	山茶椀	椀	—	—	(7.6)	灰黄色	糸切り	横ナデ	—		—

表16　出土石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	出土地区(遺構名)	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
193	1063	石鏃	34区(SB-5)	シルト岩	16.0	17.8	2.3	0.28
193	1064	石鏃	34区(SB-5)	シルト岩	20.2	16.7	2.7	0.61
193	1065	石鏃	34区(SB-5)	シルト岩	23.8	17.2	4.1	0.91
193	1066	石鏃	34区(SB-5)	砂岩	20.6	13.8	2.7	0.56
193	1067	石鏃	34区(SB-5)	シルト岩	14.8	8.9	2.1	0.18
193	1068	石鏃	34区(SB-5)	シルト岩	28.1	21.3	5.5	2.40
193	1069	石鏃	34区(SB-5)	シルト岩	17.3	14.4	4.9	0.64
193	1070	石鏃	34区(SB-5)	シルト岩	15.8	18.3	4.5	0.89
193	1071	石鏃	34区(SB-5)	シルト岩	12.6	21.1	3.6	0.46
193	1072	石鏃未製品	34区(SB-5)	シルト岩	33.5	20.6	7.1	4.13
193	1073	両面加工横形石匙	34区(SB-5)	頁岩	27.6	45.7	6.6	4.85
193	1074	石核素材	34区(SB-5)	シルト岩	68.1	36.7	29.4	7.59
194	1075	石鏃	34区	シルト岩	24.4	15.5	4.4	1.19
194	1076	石鏃	34区	砂岩	31.5	22.1	6.7	2.83
194	1077	石鏃	34区(東南)	砂岩	21.3	21.1	5.4	1.05
194	1078	石鏃	34区(北東)	シルト岩	22.7	18.2	4.3	0.93
194	1079	石鏃	46区(SD-24)	シルト岩	17.5	12.0	3.0	0.43
194	1080	石鏃	34区	シルト岩	18.3	12.0	3.4	0.52
194	1081	石鏃未製品	34区(SB-3)	シルト岩	11.6	16.8	4.5	0.67
194	1082	石鏃	34区	黒色頁岩	22.6	15.0	3.2	0.96
194	1083	石鏃未製品	34区(SB-3)	シルト岩	16.6	18.3	4.5	0.87
194	1084	石鏃未製品	34区	頁岩	25.0	16.9	5.6	1.40
194	1085	二次加工剥片	46区(SB-1)	シルト岩	28.5	21.1	6.7	2.03
194	1086	両面加工横形石匙	34区	シルト岩	42.7	53.0	10.8	14.63
194	1087	石錐	34区(北東)	シルト岩	33.1	31.8	8.9	5.74
194	1088	横型石匙未製品	34区	頁岩	40.9	50.1	10.0	19.54
195	1089	削器	46区(SR-1)	頁岩	42.5	37.7	14.4	24.53
195	1090	縦形石匙	34区	シルト岩	52.1	32.5	8.8	11.85
195	1091	未製品	34区	頁岩	47.4	34.7	7.7	12.68
196	1092	石皿	5区(SF-30)	砂岩	274.0	245.0	57.0	7344.00
196	1093	石皿	5区(SF-30)	砂岩	278.0	159.0	54.0	4442.40
196	1094	石皿	34区(SB-4)	砂岩	243.5	228.0	73.0	5531.30
197	1095	石鏃	28区(SF-31)	黒色頁岩	25.9	15.9	6.3	2.23
197	1096	石鏃	28区(SF-31)	シルト岩	13.3	13.4	3.0	0.34
197	1097	石鏃	28区	シルト岩	19.0	19.5	3.9	0.74
197	1098	石鏃	29区	シルト岩	18.4	15.4	2.9	0.51
197	1099	横形石匙	28区(SF-31)	珪質シルト岩	36.7	47.7	7.7	9.67
197	1100	横形石匙	28区(Aトレンチ)	珪質シルト岩	29.4	45.3	7.3	6.21
197	1101	未製品	29区	頁岩	36.8	24.5	14.9	11.90
197	1102	石錐	29区(SD03)	珪質シルト岩	31.9	32.8	14.5	12.69
197	1103	石匙の破損品？	29区	頁岩	38.6	23.0	8.6	8.84
197	1104	乳棒状石斧	29区	片麻岩	246.0	66.0	37.5	912.50
198	1105	石鏃	3'区	シルト岩	22.4	15.9	4.1	1.10
198	1106	石鏃	3'区	黒曜石	20.5	14.7	3.3	0.66
198	1107	石鏃	3'区	珪質シルト岩	28.0	16.5	4.1	1.41
198	1108	石鏃	53区(SR-1)	シルト岩	18.7	16.3	3.4	0.72
198	1109	石鏃	53区	砂岩	20.7	15.4	4.2	0.79

挿図番号	遺物番号	器種	出土地区（遺構名）	石材	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）
198	1110	石鏃	53区（北西隅）	シルト岩	20.6	12.4	3.8	0.59
198	1111	石鏃	48区	シルト岩	19.4	14.5	3.8	0.91
198	1112	石鏃	54区（東端部）	シルト岩	25.7	13.7	3.7	0.64
198	1113	石鏃	54区（東端部）	頁岩	20.4	17.3	2.4	0.46
198	1114	石鏃	54区	頁岩	20.9	11.1	3.1	0.39
198	1115	石鏃	15区	シルト岩	17.8	19.4	4.2	1.01
198	1116	石鏃	26区（南東）	黒曜石	19.2	13.5	4.1	0.68
198	1117	石鏃断片	26区	シルト岩	19.6	13.2	4.3	0.67
198	1118	石鏃断片	26区	シルト岩	12.9	14.7	2.9	0.40
198	1119	石鏃	25区	頁岩	22.1	17.2	2.8	0.68
198	1120	石鏃	25区	砂岩	17.8	14.6	2.0	0.33
198	1121	石鏃	24区（SD-1西辺）	黒曜石	16.1	15.7	4.1	0.81
198	1122	石鏃	15区（南西部）	シルト岩	25.3	19.6	6.8	2.39
198	1123	石鏃	15区（南西部）	シルト岩	27.9	17.8	6.8	2.09
198	1124	有茎鏃	53区（北西隅）	黒色頁岩	31.6	19.6	4.6	1.92
198	1125	有茎鏃	15区	シルト岩	21.9	14.7	4.2	1.16
199	1126	尖頭器	3’区	シルト岩	71.1	18.1	7.0	9.49
199	1127	尖頭器	53区（SR-1）	頁岩	46.6	18.5	6.7	6.94
199	1128	有舌尖頭器	53区	シルト岩	36.5	12.9	4.2	1.92
199	1129	尖頭器	24区（北側中央）	シルト岩	52.4	24.9	10.5	10.64
199	1130	尖頭器	46区	シルト岩	37.7	19.3	7.0	5.19
199	1131	尖頭器	53区（SR-1）	黒曜石	50.7	21.4	7.4	6.23
199	1132	尖頭器	3’区（SR-1）	シルト岩	21.6	16.9	6.7	1.80
199	1133	有舌尖頭器	24区	シルト岩	25.2	28.9	6.6	3.65
200	1134	横形石匙	14区（拡張区SX01より西）	珪質シルト岩	27.7	34.1	8.6	5.86
200	1135	横型石匙	25区	頁岩	25.1	28.3	6.9	4.19
200	1136	二次加工剥片	24区（西側）	黒曜石	21.6	25.3	7.8	3.20
200	1137	縦形石匙	15区	シルト岩	0.0	39.9	13.8	30.28
200	1138	エンドスクレイパー	15区	黒曜石	28.4	22.5	12.3	5.97
200	1139	両極石器	15区	頁岩	36.6	26.4	10.4	9.58
200	1140	両極石器	3’区	黒曜石	19.7	19.3	5.3	1.80
200	1141	使用痕石刃	14区	シルト岩	39.7	25.8	6.9	5.16
200	1142	縦長剥片	15区（Lトレンチ）	シルト岩	47.8	28.3	10.2	10.41
201	1143	使用痕剥片	3’区	シルト岩	48.7	34.3	13.6	16.03
201	1144	直縁刃石器	24区（西側）	砂岩	62.3	74.4	13.6	58.36
201	1145	敲石	15区	砂岩	8.8	7.9	3.3	304.80
201	1146	石錘	15区	砂岩	5.3	4.7	1.1	32.75

表17　縄文時代の遺構計測表

名称	規模			種別	区	挿図番号	挿図頁	備考
	長径（m）	短径（m）	深さ					
SB-5	4.60		0.26	竪穴式住居跡	34区	187	193	柱穴７基、土坑１基
SF-30	2.90	2.60	0.25	土坑	５区	188	194	
SF-31	0.80	0.40	0.40	土坑	29区	189	185	壁面に焼成
SF-32	0.90	0.25	0.30	土坑	29区	189	185	
SF-33	1.85	1.45	1.70	陥穴	48区	190	186	
SF-34	2.00		1.15	陥穴	48区	190	186	
SF-35	1.65		1.00	陥穴	48区	190	186	
SF-36	2.35		1.15	陥穴	48区	191	187	
SF-37	1.55		1.85	陥穴	48区	191	187	
SF-38	0.78	0.64	0.15	集石土坑	50区	192	188	